兵庫県文化財調査報告　第186冊

兵庫県三木市所在

久留美・跡部窯跡群

－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸ－

平成11年3月
（1999）

兵庫県教育委員会

兵庫県三木市所在

久留美・跡部窯跡群

－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸ－

平成11年3月
（1999）

兵庫県教育委員会

例　言

1．本報告書は山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託を受けて平成４年度と５年度に兵庫県教育委員会が発掘調査主体となって実施した久留美窯跡群および跡部窯跡群の発掘調査報告書である。

2．遺跡は三木市久留美字柳谷他および跡部に所在地する。

3．遺物番号の表示は本文・図版・図面を通して統一した。

4．遺物のスケールは小皿については1/3、その他については1/4に統一した。また、須恵器は断面を黒塗りとし、土師質土器については断面を白抜きにして区別した。

5．窯体長については、水平長ではなく実長を用いた。

6．1／2,500の地図については三木市都市計画図を使用した。

7．本報告書については、調査を担当した高瀬一嘉・多賀茂治・仁尾一人・池田征弘・森内秀造が分担して執筆し、仁尾一人・池田征弘と森内秀造が非常勤嘱託員杉本淳子の協力を得て編集した。

8．遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、遺物写真については、（株）衣川に撮影委託した。また、航空写真は株式会社パスコに撮影委託したものである。

9．整理後の遺物については、兵庫県教育委員会魚住分館に保管している。

10．調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。

今里幾次・上原真人（京都大学）・亀田修一（岡山理科大学）・眞野修（兵庫考古研究会）

三辻利一（奈良教育大学）・川西幹雄（加古川焼　陶芸作家）

京都市埋蔵文化財研究所　鈴木久男・上村和直・前田義男・吉村正親

三木市教育委員会　　毛利哲夫・松村正和・小網豊

小野市教育委員会　　西田猛・中西信

（順不同・敬称略）

目　次

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過……（高瀬一嘉）… 1

第２節　発掘調査の経過……（高瀬）… 1

第２章　三木窯跡群の分布 ……（池田征弘）… 5

第３章　奈良時代の窯跡の調査

第１節　西ノ谷窯……（高瀬・森内秀造）… 9

第２節　跡部４号窯……（多賀茂治・森内）…11

第３節　柳谷11号窯～13号窯……（仁尾一人・森内）…13

Ⅰ．窯の立地と概要

Ⅱ．柳谷11号窯

Ⅲ．柳谷12号窯

Ⅳ．柳谷13号窯

第４節　柳谷14号窯……（仁尾・森内）…23

第４章　平安時代後期の窯跡の調査

第１節　柳谷５号窯……（高瀬・森内）…27

第２節　宮の池窯……（仁尾・森内）…29

第３節　柳谷２号窯……（高瀬・森内）…32

第４節　柳谷６号窯……（高瀬・森内）…34

第５節　柳谷10号窯……（仁尾・森内）…36

第６節　柳谷15号窯……（仁尾・森内）…39

第７節　柳谷８号窯……（高瀬・森内）…42

第８節　柳谷７号窯……（高瀬・森内）…42

第９節　柳谷１号窯……（高瀬・森内）…43

第５章　まとめ

第１節　久留美窯跡群の窯構造の特徴……（仁尾）…45

第２節　出土土器の検討……（森内）…48

第３節　出土瓦の検討……（池田）…61

第４節　三木の窯業生産と播磨守の造寺運動……（森内）…79

遺物一覧表

瓦……84

挿図目次

挿図１　遺跡の位置
挿図２　山陽自動車道路線内遺跡位置図
挿図３　久留美・跡部窯跡群分布図
挿図４　三木窯跡群分布図（明治20年　仮製地図）
挿図５　西ノ谷窯　調査位置図
挿図６　西ノ谷窯　地形測量図
挿図７　西ノ谷窯　窯体図
挿図８　跡部４号窯　調査位置図
挿図９　跡部４号窯　地形測量図
挿図10　跡部４号窯　窯体図
挿図11　柳谷11号窯～14号窯　調査位置図
挿図12　柳谷11号窯～13号窯　地形測量図・土層横断面図
挿図13　柳谷11号窯　窯体図
挿図14　柳谷12号窯　窯体図
挿図15　柳谷13号窯　窯体図
挿図16　柳谷14号窯　地形測量図
挿図17　柳谷14号窯　窯体図
挿図18　柳谷１・２・５～８・10・15号窯　調査位置図
挿図19　柳谷５号窯　地形測量図・灰原土層断面図
挿図20　宮の池窯　地形測量図・土層断面図
挿図21　宮の池窯　調査位置図
挿図22　宮の池窯周辺の旧地形（明治20年　仮製地図）
挿図23　柳谷２号窯　地形測量図
挿図24　柳谷２号窯　灰原土層断面図
挿図25　柳谷６号窯　地形測量図・灰原土層断面図
挿図26　柳谷10号窯　地形測量図
挿図27　柳谷10号窯　窯体図
挿図28　柳谷10号窯　窯体支柱痕検出位置図
挿図29　柳谷15号窯　地形測量図
挿図30　柳谷15号窯　窯体図（遺物出土状況）
挿図31　柳谷15号窯　窯体図（瓦列有段状況）
挿図32　柳谷７号窯　地形測量図
挿図33　柳谷１号窯　地形測量図
挿図34　柳谷１号窯　窯体図
挿図35　白沢３号窯・西ノ谷窯・跡部４号窯　杯Ａ・Ｂ法量分布図
挿図36　柳谷11号窯～14号窯　杯Ａ・Ｂ法量分布図
挿図37　椀・杯類分類図
挿図38　皿類分類図
挿図39　鉢分類図(1)
挿図40　鉢分類図(2)
挿図41　甕分類図
挿図42　軒丸瓦型式一覧
挿図43　軒丸平型式一覧(1)
挿図44　軒丸平型式一覧(2)
挿図45　出土軒瓦同笵関係

表目次

第１表　山陽自動車道建設に伴う久留美・跡部窯跡群調査一覧
第２表　久留美窯跡群および跡部窯跡群の調査窯一覧表
第３表　平安時代の土器分類表
第４表　瓦の出土量
第５表　出土軒瓦同笵関係一覧
第６表　藤原末茂流および道隆流系図
第７表　院政期の造寺・造宮関係一覧

図面目次

第　１　図　西ノ谷窯　出土土器
第　２　図　跡部４号窯　出土土器
第３～５図　柳谷11号窯　窯体出土土器１～３
第６・７図　柳谷11号窯　灰原出土土器１・２
第８・９図　柳谷12号窯　窯体出土土器１・２
第10～12図　柳谷12号窯　灰原出土土器１～３
第　13　図　柳谷13号窯　窯体出土土器
第14～16図　柳谷13号窯　灰原出土土器１～３
第17・18図　柳谷11～13号窯　灰原表土層出土土器
第19・20図　柳谷14号窯　窯体出土土器１・２
第　21　図　柳谷14号窯　窯体外出土土器
第22～24図　柳谷５号窯　出土土器１～３
第　25　図　柳谷５号窯　出土瓦
第26～33図　宮の池窯　出土土器１～８
第34～44図　宮の池窯　出土瓦１～11
第 45～47 図　柳谷２号窯　出土土器１～３
第 48～82 図　柳谷２号窯　出土瓦１～35
第 83～86 図　柳谷６号窯　出土土器１～４
第 87～90 図　柳谷６号窯　出土瓦１～４
第 91～92 図　柳谷10号窯　出土土器１・２
第 93～113 図　柳谷10号窯　出土瓦１～21
第　114　図　柳谷８号窯　出土土器
第115・116図　柳谷８号窯　出土瓦１・２
第　117　図　柳谷15号窯　出土土器
第118～149図　柳谷15号窯　出土瓦１～32
第　150　図　柳谷７号窯　出土土器
第151～153図　柳谷７号窯　出土瓦１～３
第154・155図　柳谷１号窯　出土土器１・２
第156～160図　柳谷１号窯　出土瓦１～５

遺構図版目次

遺構図版１　航空写真
　ａ．美嚢川・久留美方面遠景（南より）
　ｂ．三木市平井からの久留美全景斜め
遺構図版２　西ノ谷窯
　ａ．遠景（東より）
　ｂ．窯体完掘状況
　ｃ．窯体完掘状況
遺構図版３　跡部４号窯
　ａ．窯体完掘状況
　ｂ．遠景（西より）
　ｃ．窯体断ち割り（縦断面）
　ｄ．窯体断ち割り（横断面）
　ｅ．窯体断ち割り（全景）
遺構図版４　柳谷11号窯～13号窯
　ａ．発掘前全景（東南より）
　ｂ．検出状況（南より）
　ｃ．完掘後全景（西南より）
遺構図版５　柳谷11号窯
　ａ．窯体完掘状況
　ｂ．窯体焚口
　ｃ．灰原セクション
遺構図版６　柳谷12号窯
　ａ．灰原縦横断セクション
　ｂ．窯体完掘状況
　ｃ．窯体完掘状況
遺構図版７　柳谷12号窯
　ａ．窯体内埋土堆積状況
　ｂ．窯体焚口埋土堆積状況
　ｃ．窯体焚口遺物出土状況
　ｄ．舟底状ピット断ち割り断面
　ｅ．窯体焚口断ち割り断面（左）
　ｆ．窯体焚口断ち割り断面（右）
　ｇ．窯体焚口側壁内木芯検出状況
　ｈ．窯体焚口前ピット検出状況
遺構図版８　柳谷13号窯
　ａ．窯体完掘状況
　ｂ．窯体完掘状況
　ｃ．窯体断ち割り横断面（壁面）状況
遺構図版９　柳谷14号窯
　ａ．窯体検出状況
　ｂ．窯体完掘状況
　ｃ．窯体遺物遺物取り上げ後
遺構図版10　宮の池窯
　ａ．遠景（南より）
　ｂ．発掘後全景（北より）
　ｃ．宮の池（左）・大池（右前方）
遺構図版11　柳谷２号窯
　ａ．灰原全景
　ｂ．灰原土層断面
遺構図版12　柳谷６号窯
　ａ．灰原発見状況（西より）
　ｂ．灰原検出状況（南より）
　ｃ．灰原発掘状況
遺構図版13　柳谷10号窯
　ａ．発掘前全景（南より）
　ｂ．窯体周囲土層断面
　ｃ．窯体内埋土堆積状況
遺構図版14　柳谷10号窯
　ａ．土層断面（窯体先端）
　ｂ．土層断面（窯体西側）
　ｃ．土層断面（窯体東側）
遺構図版15　柳谷10号窯
　ａ．窯体完掘状況
　ｂ．窯体完掘状況
　ｃ．窯体完掘状況（西南より）
遺構図版16　柳谷10号窯
　ａ．窯体盛土状況
　ｂ．窯体断ち割り全景
　ｃ．窯体断ち割りＢ断面（左）
　ｄ．窯体断ち割りＢ断面（右）
　ｅ．窯体断ち割りＣ断面（左）
　ｆ．窯体断ち割りＣ断面（右）
　ｇ．側壁支柱跡（床面剥ぎ取り後）
　ｈ．側壁支柱跡（床面剥ぎ取り後）
遺構図版17　柳谷15号窯
　ａ．発掘前全景（北より）
　ｂ．窯体検出状況（東より）
　ｃ．完掘後全景（北より）
遺構図版18　柳谷15号窯
　ａ．窯体内瓦出土状況
　ｂ．窯体内瓦出土状況
遺構図版19　柳谷15号窯
　ａ．窯体内瓦列検出状況
　ｂ．窯体内瓦列検出状況（西より）
遺構図版20　柳谷15号窯
　ａ．最終床面（遺物取り上げ後）
　ｂ．第１次床面完掘後
　ｃ．左側壁構築材検出状況（側壁剥取り後）
　ｄ．窯体先端部周溝内瓦出土状況
遺構図版21　柳谷７号窯
　ａ.7号窯検出状況
　ｂ.7号窯全景（北より）
　柳谷８号窯
　ａ.8号窯　灰原遺物採集状況
遺構図版22　柳谷１号窯
　ａ．発掘前全景（南より）
　ｂ．窯体検出状況（南より）
　ｃ．窯体

遺物図版目次

遺物図版　1	柳谷11号窯～13号窯出土須恵器
	柳谷14号窯出土須恵器
遺物図版　2	柳谷５号窯出土土器
	柳谷６号窯出土土器
遺物図版　3	宮の池窯出土土器
	宮の池窯出土瓦
遺物図版　4	柳谷２号窯出土土器
	柳谷２号窯出土瓦
遺物図版　5	柳谷10号窯出土土器・瓦
	柳谷15号窯出土土器・瓦
遺物図版　6	柳谷８号窯出土土器・瓦
	柳谷７号窯出土土器・瓦
遺物図版　7	西ノ谷窯出土須恵器
遺物図版　8	跡部４号窯出土須恵器
遺物図版９～11	柳谷11号窯出土須恵器１～３
遺物図版12～14	柳谷12号窯出土須恵器１～３
遺物図版15～17	柳谷13号窯出土須恵器１～３
遺物図版　18	柳谷11号窯～13号窯出土須恵器
遺物図版19・20	柳谷14号窯出土須恵器１・２
遺物図版　21	柳谷５号窯出土土器
遺物図版　22	柳谷５号窯出土土器・瓦
遺物図版23～31	宮の池窯出土土器１～９
遺物図版32～38	宮の池窯出土瓦１～７
遺物図版39～42	柳谷２号窯出土土器１～４
遺物図版43～51	柳谷２号窯出土瓦１～９
遺物図版52～54	柳谷６号窯出土土器１～３
遺物図版55・56	柳谷６号窯出土瓦１・２
遺物図版　57	柳谷10号窯出土土器
遺物図版58～63	柳谷10号窯出土瓦１～６
遺物図版　64	柳谷８号窯出土土器
遺物図版　65	柳谷８号窯出土瓦
遺物図版　66	柳谷15号窯出土土器
遺物図版67～71	柳谷15号窯出土瓦１～５
遺物図版　72	柳谷７号窯出土土器
遺物図版73・74	柳谷７号窯出土瓦１
遺物図版　75	柳谷１号窯出土土器
遺物図版　76	柳谷１号窯出土瓦

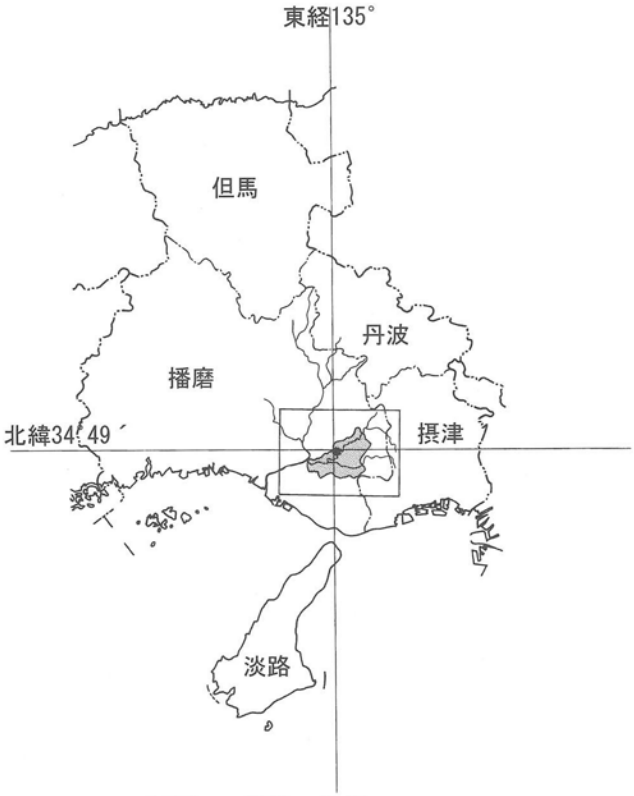
第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

山陽道、正式には「高速自動車国道　山陽自動車道　吹田山口線」は、吹田市を起点にして瀬戸内沿岸の都市を結んで山口市に至る総延長約434kmの高速道路である。

このうち、神戸～三木間（神戸市北区有野町二郎から三木市鳥町－28.6km）は第９次施工命令区間として、昭和57年に整備計画が決定した。その後、昭和59年11月30日に施工命令が出され、昭和60年３月25日に路線発表が行われた。

事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議を重ね、昭和61年４月と昭和62年３月の２回にわたって分布調査を実施した。その結果、52箇所について確認調査の必要が認められた。この結果を受けて、兵庫県教育委員会では平成元年度より確認調査を実施し、平成２年８月から西ケ原遺跡を皮切りに全面調査を開始した。



挿図１　遺跡の位置

なお、兵庫県内の埋蔵文化財の現地での発掘調査は昭和52年に赤穂市に所在する堂山遺跡に始まり、三木市に所在する和田神社遺跡（平成８年10月29日現地発掘調査終了）を最後に20年間にわたる調査を終えた。

第２節　発掘調査の経過

西ノ谷窯

三木市久留美字西ノ谷1261に所在する。昭和62年に実施された分布調査で発見され、No.35・36地点と仮称された地点である。両者は山斜面地と水田部分にあたり隣接する。その後、平成元年度に実施した確認調査で、No.35地点では窯体を確認したが、水田部分にあたるNo.36地点は圃場整備の影響で削平を受けており、遺構は消滅していた。この結果を受けて、No.35地点の全面調査を実施することとなり、No.35地点は西ノ谷窯と正式に命名された。全面調査は三木市内に所在する、田井野遺跡、久留美１・２号窯と併せて実施し、平成３年５月15日に着手し、平成３年11月13日に終了した。

跡部４号窯

三木市加佐字湯谷に所在する。この遺跡は、２度にわたる分布調査では認識していなかった遺跡である。平成４年３月に道路本体工事中に不時発見された。溜池の岸に位置しており、すでに灰原及び窯体

の一部は失われていた。兵庫県教育委員会と日本道路公団は協議の結果、周辺の工事を一時中断して現状を保存し、平成４年度に調査を行うこととなった。遺跡は、周知の遺跡である跡部窯跡群と同じ谷に所在することから、跡部４号窯と正式に命名された。全面調査は平成４年７月27日に着手し、平成４年７月31日に終了した。

久留美窯跡群

三木市久留美字柳谷に所在する。本線部分と両側に接している溜池内に分布している遺跡である。平成２年度に工事用道路及び溜池改修に伴う分布調査を実施した。その結果、１号窯、２号窯の所在する場所でのみ遺物の散布を確認した。その他の地域については溜池の水位が高く、あるいは繁殖する樹木に遮られて遺跡の有無を確認できなかったため、冬場の渇水期や伐木終了後に適時、分布調査を実施することとした。

柳谷１号窯・２号窯

平成２年度に実施した分布調査で遺物の分布を認めたものである。その後、平成３年７月に確認調査を実施し、窯体の痕跡と灰原を確認したため、全面調査を実施することとなった。全面調査は田井野遺跡、西ノ谷窯と併せて実施し、平成３年５月15日に着手し、平成３年11月13日に終了した。

柳谷５号窯

平成３年12月３日に発見された。溜池改修に伴う分布調査は平成３年11月21・22日に実施したが、この遺跡は下池の堤帯中に存在していたため、上記の分布調査では確認されておらず、下池改修工事による堤帯除去作業中に発見された。溜池改修工事の完成が平成４年度春からのの水田耕作に不可欠であり、急を要することから、兵庫県教育委員会と日本道路公団との協議の結果、平成４年３月２日から平成４年３月６日の期間で調査を実施した。

柳谷６号窯・７号窯・８号窯

中の池内に所在する遺跡である。７号窯・８号窯は平成３年11月22日に実施した分布調査で、６号窯は中の池の堤帯下に存在していたため、上記の分布調査では確認されておらず、下池改修工事による堤帯除去作業中に発見された。溜池改修工事の完成が平成４年度春からのの水田耕作に不可欠であり、急を要することから、兵庫県教育委員会と日本道路公団との協議の結果、平成３年12月２日から平成３年12月13日の期間で調査を実施した。

柳谷10号窯・11号窯・12号窯・13号窯・14号窯・15号窯

柳谷の主谷の西側に接続する支谷に所在する窯群である。このうち、10号窯は平成３年12月３日、11号窯・12号窯・13号窯は平成３年11月22日、14号窯は平成３年12月５日、15号窯は平成４年１月15日に発見された。上記の全面調査は平成４年５月１日に着手し平成４年８月４日に終了した。

宮の池窯

三木市久留美字石原に所在する。平成２年度に実施した溜池の改修工事に先立つ分布調査で遺物の分布が認められれため、平成４年１月に確認調査を実施した。調査の結果、大量の瓦・須恵器・土師器が出土したため、全面調査を実施することとなった。全面調査は平成４年８月４日に着手し平成11年20月４日に終了した。

遺跡名（旧遺跡名）	所在地（三木市）	遺跡調査番号	調査担当者	調査期間	調査面積
西ノ谷窯跡	加佐	910033	主　査　井守徳男 技術職員　高瀬一嘉 同　三原慎吾	平成３年５月15日 ～ 平成３年11月13日	113㎡
柳谷１号窯（下池１号窯）	久留美字宮ノ西1843－10	910108	主　査　井守徳男 同　村上泰樹 技術職員　高瀬一嘉 三原慎吾 臨時職員　西原雄大	平成３年５月15日 ～ 平成３年11月13日	639㎡
柳谷２号窯（下池２号窯）	久留美字宮ノ西1843－８	910109			
ＫＹ３地点（散布地）	久留美字宮ノ西1814	910110			分布調査
ＫＹ４地点（散布地）	久留美字宮ノ西1814	910111			
柳谷５号窯	久留美字宮ノ西1814	910112	技術職員　高瀬一嘉 三原慎吾	平成４年３月２日 ～３月６日	340㎡
柳谷６号窯（中池第１地点）	久留美字宮ノ西1817	910113	主　査　井守徳男 技術職員　高瀬一嘉	平成３年12月２日 ～ 平成３年12月13日	185㎡
柳谷７号窯（中池第２地点）	久留美字柳谷1851－103	910114			
柳谷８号窯（中池第３地点）	久留美字宮ノ西1817	910115			
ＫＹ９地点（散布地）	久留美字宮ノ西1815	910116			分布調査
柳谷10号窯	久留美字柳谷1851－103	920167	調査専門員　西口和彦 主　査　森内秀造 臨時職員　仁尾一人	平成４年５月１日 ～ 平成４年８月４日	2,057㎡
柳谷11号窯	久留美字柳谷1851－151	920168			
柳谷12号窯		920169			
柳谷13号窯		920170			
柳谷14号窯	久留美字柳谷1851－103	920171			
柳谷15号窯	久留美字柳谷1851－173	920172			
宮の池窯	久留美字石原1852－54他	920255	主　査　森内秀造 臨時職員　仁尾一人	平成４年８月４日 ～11月20日	739㎡
跡部４号窯	加佐字湯谷	920222	技術職員　多賀茂治	平成４年７月27日 ～７月31日	80㎡

第１表　山陽自動車道建設に伴う久留美・跡部窯跡群調査一覧

発掘調査事業参加者

現場補助員　　八田（現、嶋谷）久仁子・池田征弘

室内作業員　　高島知恵子・五百蔵道代・舟坂好子・森昌代

整理事業参加者

平成８年度

接合　　早川亜紀子・竹内泰子・島村順子・武田恵美子・宮沢昭世・茅原加寿代

平成９年度

実測　　杉本淳子・松本嘉子・小野潤子・高瀬敬子・村上京子

復元　　吉田優子・前田千栄子・喜多山好子・早川亜紀子・武田恵美子・鈴木まき子・真子ふさ恵
西野淳子

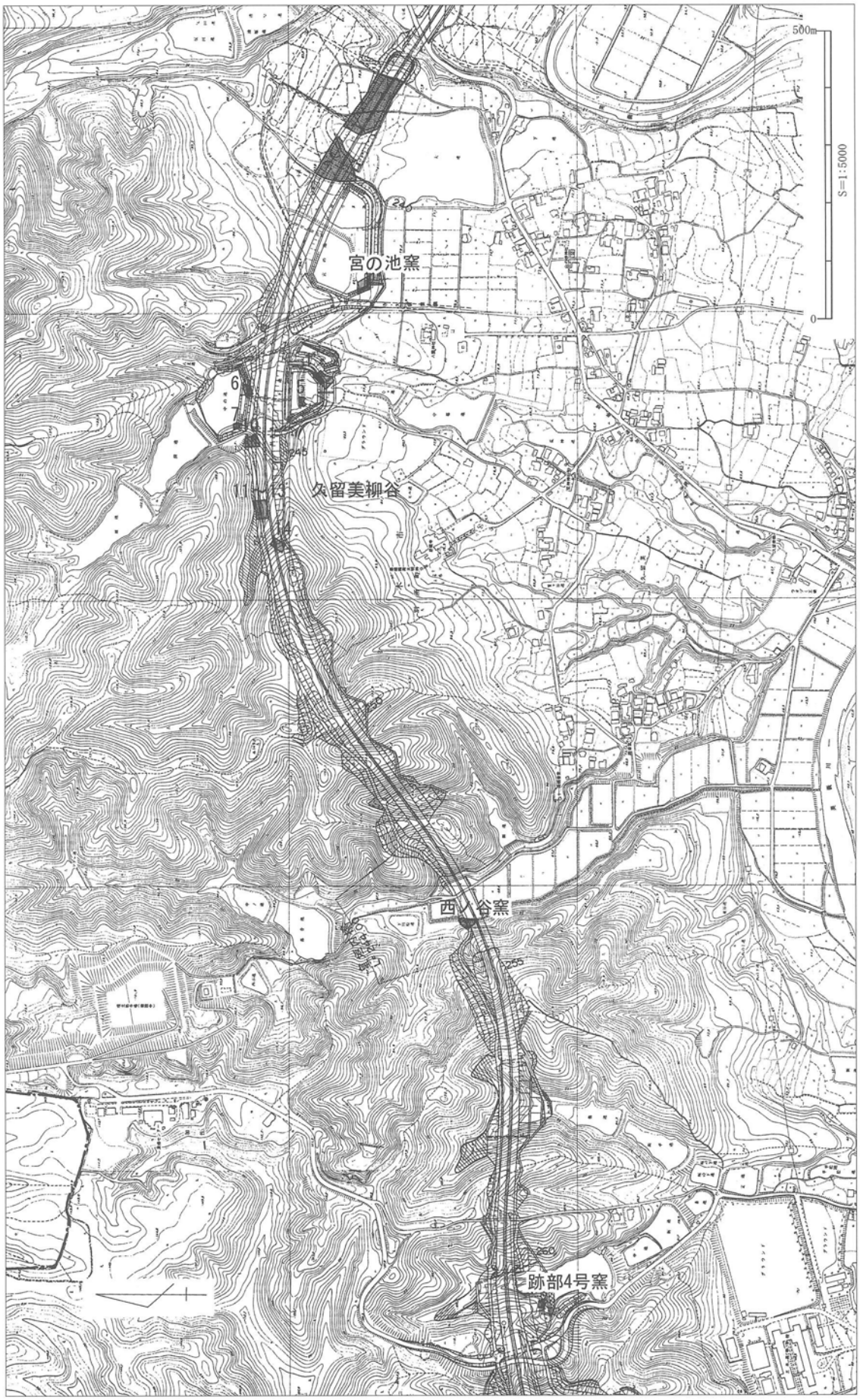
平成10年度

接合・復元　　香川フジ子・吉田優子・前田千栄子・喜多山好子・早川亜紀子・島村順子
中西睦子・藤井光代・八木富美子

実測・トレース　杉本淳子・奥野政子・松本嘉子・小野潤子・高瀬敬子

遺物レイアウト　杉本淳子・秋枝泉・西岡敬子・松末妙子

遺構トレース　　岡崎輝子



挿図２　　山陽自動車道路線内遺跡位置図

第２章　三木窯跡群の分布

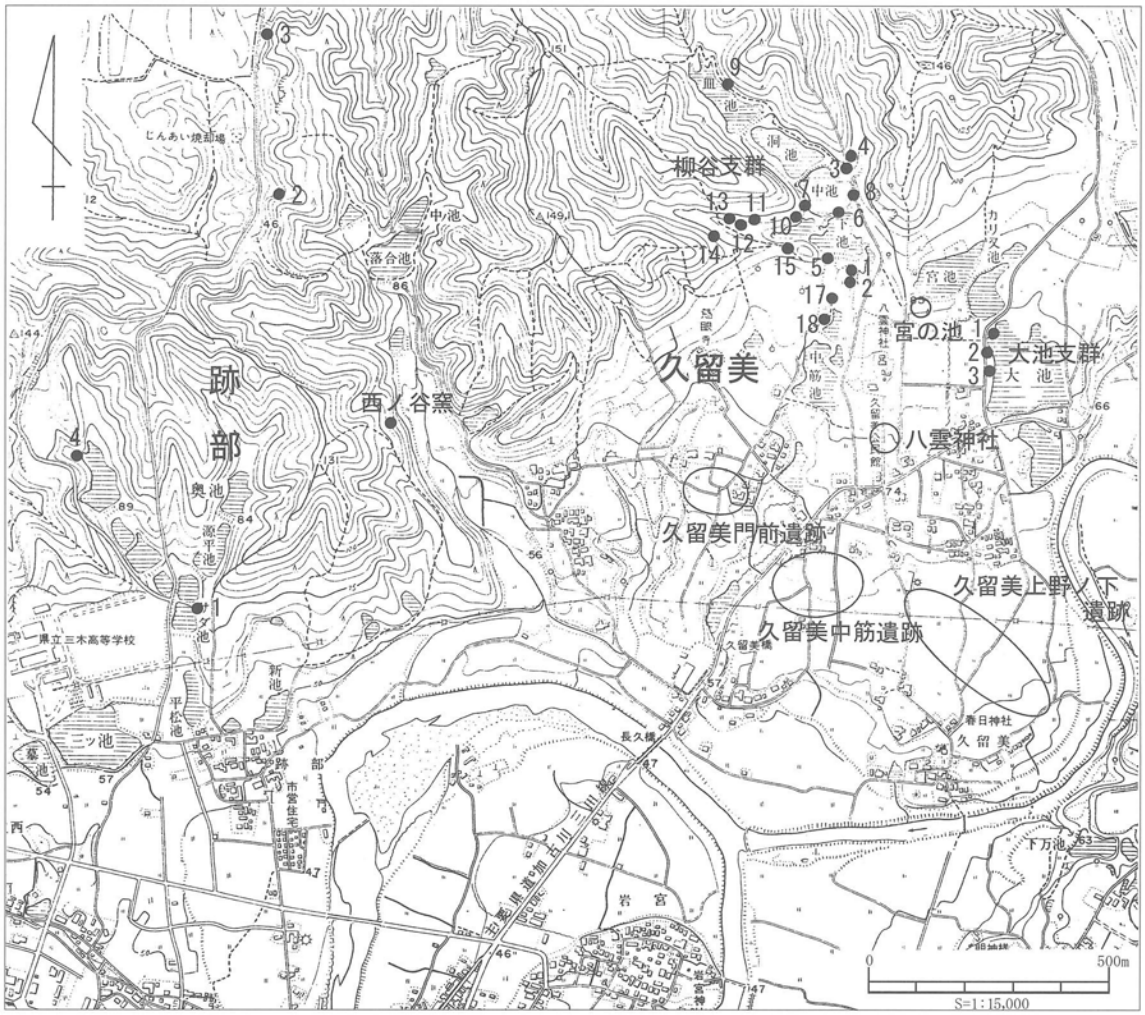
加古川水系に属する美嚢川・志染川の合流点を中心とする三木盆地周辺の丘陵には、奈良～鎌倉初期の須恵器窯や瓦陶兼業窯が数多く分布している（これを総称して三木窯跡群と呼称する）。窯跡は大きく分けると美嚢川以北の久留美・跡部、美嚢川と志染川に挟まれる平井・与呂木、志染川以南の宿原・福井とかなり広範囲に散在し、現在約60基程度の窯跡が確認されている。

１．久留美窯跡群

美嚢川以北の久留美窯跡群は、さらに丘陵から南方に開く谷筋にしたがって西側から柳谷、大池、毛谷の３支群に分かれる。

①柳谷支群

柳谷支群は、久留美の集落の西側に開く谷（柳谷）とその支谷に沿って所在し、17基の窯跡（柳谷１～15、17、18号窯）の存在が確認されている。主谷に沿って奥の口の方から９、７、８、６、５、１、２、17、18号窯、中池に向かって開く支谷に沿って３、４号窯、下池に向かって開く支谷に沿って10～15号窯が位置している。11～14号窯が奈良時代の須恵器窯、その他が平安後期～鎌倉初期の瓦陶兼業窯



挿図３　久留美・跡部窯跡群分布図

である。そのうち、平成３・４年に兵庫県教育委員会が柳谷１・２・５～８・10～15号窯について発掘調査をおこなった（詳細は本書を参照）。

②大池支群

大池支群は、久留美の集落の東側に開く谷とその支谷に沿って所在している。発掘調査は行われていないが、大池の西岸では窯体などが確認されており、３基程度の窯跡が存在しているものと考えられている。遺物は平安時代後期の須恵器や瓦が採集されている。

宮の池窯も大池支群に属し、大池より谷筋の奥に存在したと思われるが、宮の池築造時に破壊されたものと推定される。平成４年に兵庫県教育委員会が発掘調査を行い、遺構は検出されなかったが、平安時代後期の須恵器・土師器・瓦などが出土している（詳細は本書を参照）。

③毛谷支群

毛谷支群は、西の集落に向かって開く谷（毛谷）とその支谷のかなり奥まった高い位置に散漫と分布している。窯跡は９基確認されており、昭和63年に久留美古窯跡群埋蔵文化財調査会によって窯体、灰原などの調査がおこなわれている。そのうち３基が平安前期の須恵器窯（毛谷６、23、33－Ⅲ号窯）、５基が平安後期～鎌倉初期の瓦陶兼業窯（毛谷１、１－Ⅱ、33－Ⅰ、33－Ⅱ、33－Ⅳ号窯）である。

また柳谷支群の南方に位置する久留美門前遺跡、久留美中筋遺跡、久留美上野ノ下遺跡では、三木市教育委員会によって発掘調査がおこなわれ、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての掘立柱建物跡、粘土採掘土坑などが検出され、瓦も多数出土している。久留美窯跡群の工房あるいは管理施設の性格が考えられる。そのほか、八雲神社境内でも瓦が出土しているが、地形的には窯跡の存在する可能性は低いもの思われる。

２．跡部窯跡群

美嚢川以北に位置する跡部窯跡群は、さらに丘陵から南方に開く谷筋にしたがって西側から湯谷、西ノ谷の２支群に分かれる。

①湯谷支群

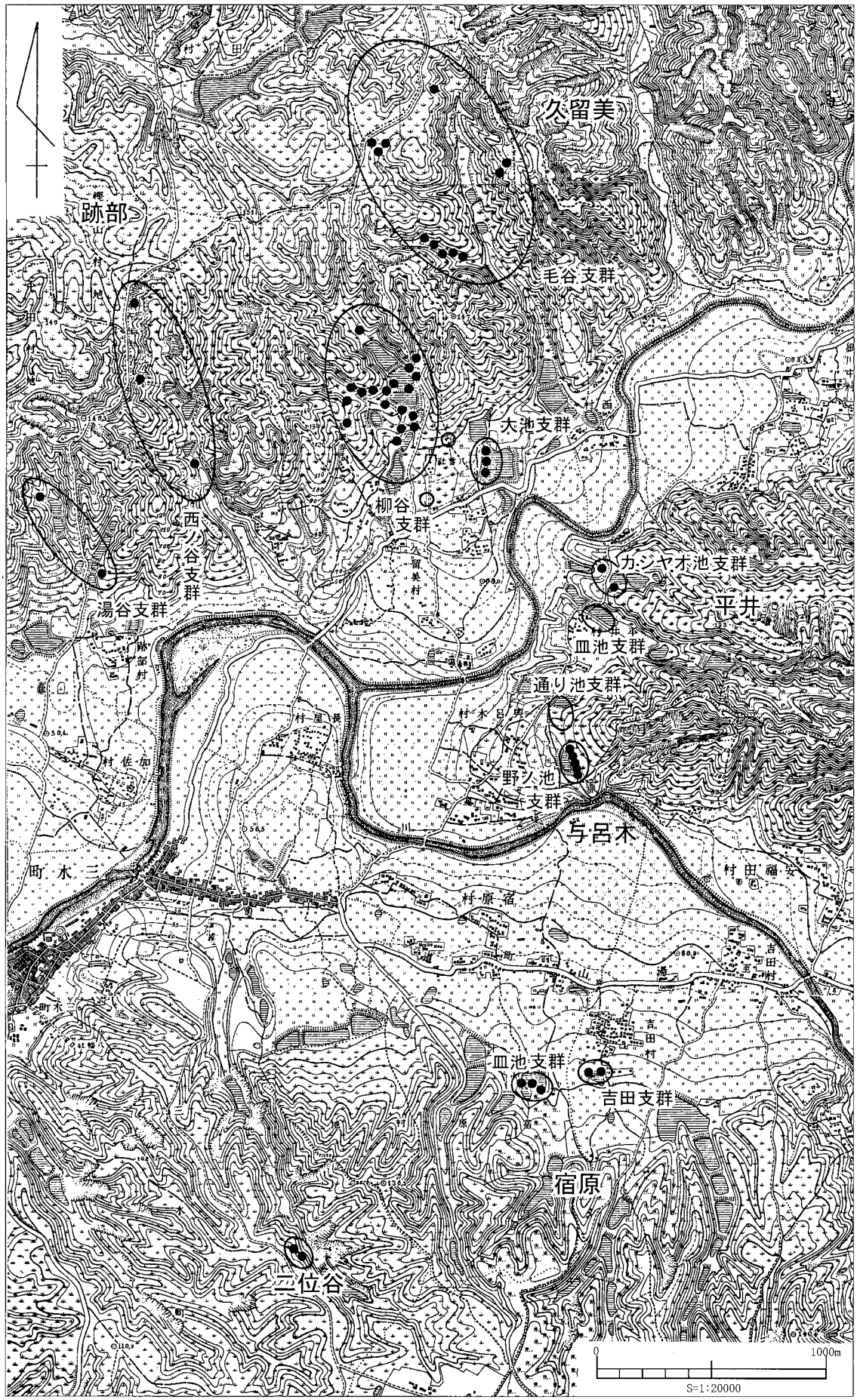
湯谷支群は、跡部の集落に向かって開く谷筋に沿って位置し、２基の窯跡（跡部１、４号窯）が確認されている。平成４年に兵庫県教育委員会が、跡部４号窯について発掘調査をおこない、奈良時代の須恵器窯の窯体を確認している（詳細は本書を参照）。１号窯については、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器が採集されているのみである。

②西ノ谷支群

西ノ谷支群は、久留美と跡部の間に大きく切れ込む谷筋に位置する。３基の窯跡が確認されており、そのうち、２基（跡部２、３号窯）はかなり奥まった高い位置に所在し、１基（西ノ谷窯）は主谷の口に近い低い場所に位置している。そのうち、跡部３号窯については昭和59年度に三木市教育委員会が発掘調査をおこない、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器窯を、西ノ谷窯については平成４年に兵庫県教育委員会が、発掘調査をおこない、奈良時代の須恵器窯の窯体を確認している（詳細は本書を参照）。跡部２号窯については、発掘調査はされていないが、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器窯の窯体の存在が確認されている。

３．平井窯跡群

平井窯跡群は、美嚢川と志染川に挟まれる丘陵から西側に開く谷筋に所在する。さらに、谷筋にしたがって北側からカジヤオ池、Ⅲ池の２支群に分かれる。



挿図４　三木窯跡群分布図（明治20年　仮製地図）

①カジヤオ池支群

谷筋の奥からカジヤオ池の南斜面に１基、乙池の北斜面に１基存在することが確認されている。平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器・瓦が出土している。

②皿池支群

皿池の南斜面に位置する。昭和56年に三木市教育委員会が発掘調査を行い、灰原が確認され、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器・瓦が出土している。灰原の範囲や遺物の時期差などから考えて５基程度の窯跡が存在すると推測されている。

４．与呂木窯跡群

与呂木窯跡群は、美嚢川と志染川に挟まれる丘陵の西端に所在する。通り池の所在する谷筋に面する通り池支群と野々池に面する野々池支群に分かれる。

①通り池支群

通り池の所在する谷筋とその支谷に沿って所在する。灰原が３基程度確認されており、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器・瓦が出土している。

②野々池支群

野々池に面して突き出た丘陵斜面に位置する。窯跡が７基存在していたが、宅地開発時に破壊された。平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器・瓦が出土している。

５．宿原窯跡群

宿原窯跡群は、志染川の南側に所在する。皿池の所在する谷に面する皿池支群とその東方約300mに位置する埋没谷に面する吉田支群に分かれる。

①皿池支群

皿池の南岸で窯体が３基（宿原１～３号窯）確認されており、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器・瓦などが採集されている。

②吉田支群

北側の丘陵から南へ開く埋没谷に沿って位置する。窯跡は２基（宿原４、５号窯）程度存在するものと思われている。そのうち、５号窯については昭和54年に三木市教育委員会が発掘調査を行い、灰原が確認され、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器・瓦が出土している。

６．二位谷窯跡群

二位谷窯跡群は、志染川の南側に所在する。南の丘陵から三木市街地に向かって開く谷筋（二位谷）の西斜面に位置する。平成９年に兵庫考古学研究会が調査をおこない、２基の窯体が確認されている。平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての須恵器が出土している。

以下の文献のほか、松村正和氏（三木市教育委員会）、小網豊氏（三木市教育委員会）、真野修氏（兵庫考古学研究会）に多大なご教示を得た。

大村敬通「与呂木古窯址群」『兵庫県大百科事典』1983年

三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財調査概報－昭和50年度～昭和59年度－』1986年

毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会『久留美毛谷』1990年

第３章　奈良時代の窯跡の調査

第１節　西ノ谷窯

１．窯跡の立地と構造

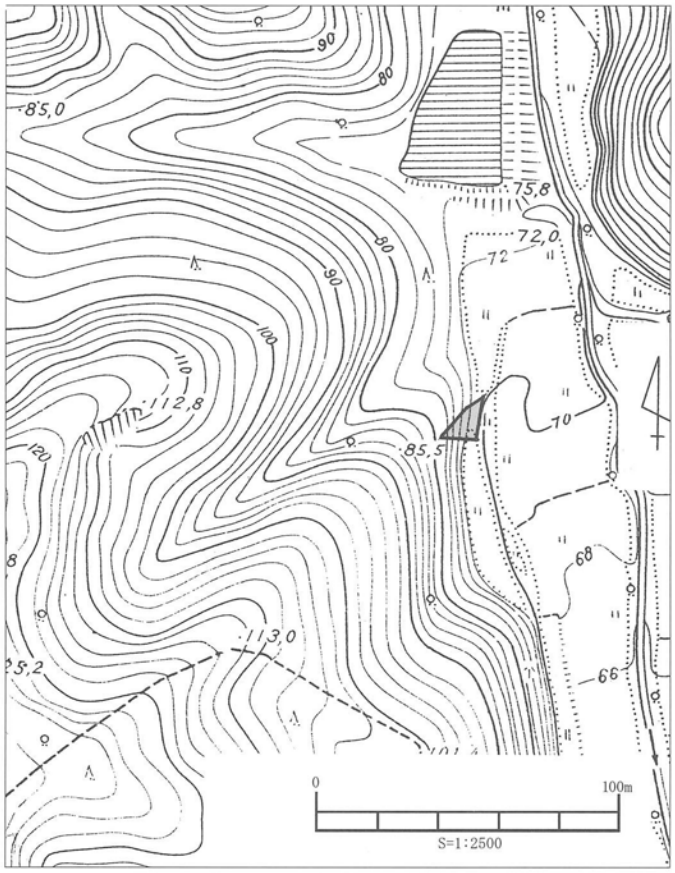
加古川の支流である美囊川の右岸に展開する標高140m～150mの比較的なだらかな丘陵の南北に開析する「西ノ谷」の西向き斜面基部に構築されている。遺構は、調査区の北端に位置しており、下部は削平を受けて消滅、上部については調査範囲外に存在している。当窯の西側の谷筋には跡部窯跡群が、東側の谷筋には久留美窯跡群が分布している。

窯体は下半部を拳大の礫を含む淡黄褐色土を掘り込んで造られた半地下式構造の須恵器窯である。主軸の方向はN38.5°Wである。検出した窯体の長さは北辺で0.7m、南辺で1.75mと非常に限られた範囲である。窯体はさらに数mの長さで斜面上方の調査区外に延びていることは確実である。標高は71.9～72.9mを測る。

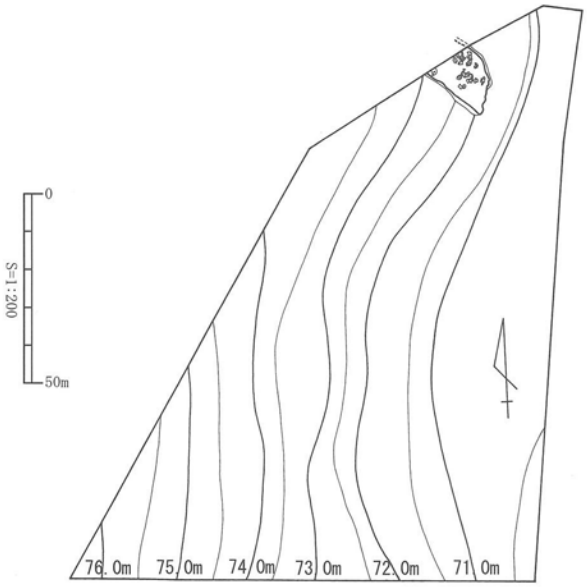
窯体の幅は斜面下方で1.25m、斜面上方で1.20mと、ほぼ同じ幅と考えられる。窯体床面は弧状を呈し、中位付近に傾斜変換点がみられる。下方では約10°と緩やかな傾斜は、変換点より上方では約20°の傾斜角度を測る。このことから、検出した窯体の部位は燃焼室から焼成部にかけての部分と推定される。

床面の断面形は緩やかな舟底状を呈する。床面と壁面の境界は明瞭に屈曲し、壁面は内方にほぼ直線的に立ち上がり、最も遺存度の良い部分の残存高は約40cmである。

窯体埋土中には、崩落したとみられる壁体、天井の窯壁片が混じった赤褐色の焼土と黄色ないし黄褐色土が採石している。床



挿図５　西ノ谷窯　調査位置図



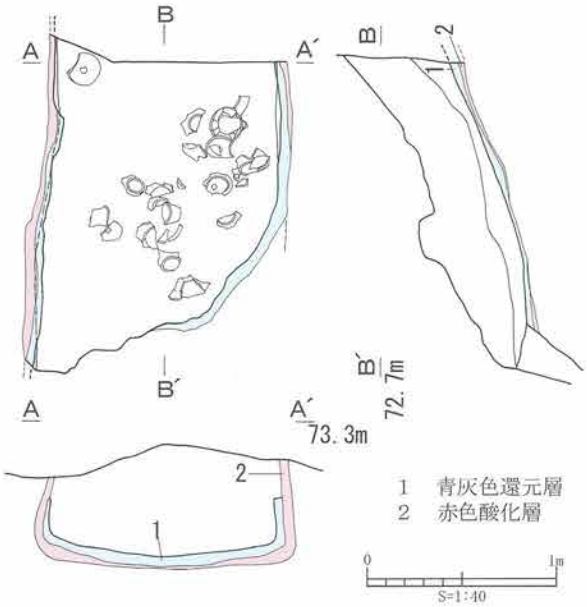
挿図６　西ノ谷窯　地形測量図

面・壁面ともに１面で、修築ないし補修された痕跡は見いだすことができなかった。床面・壁面の焼成度は概して悪く、還元ないし酸化状態の層厚が薄いことから操業期間は比較的短期間であったことが考えられる。

２．遺物（第１図）

窯体の一部のみの出土であり、出土須恵器の器種および出土点数は限られている。

各器種とも胎土に５㎜～10㎜代の大粒の石を含んでおり、陶土を精選した形跡はない。



挿図７　西ノ谷窯　窯体図

杯Ｂ蓋（*1*～*6*）

口径14.5cm～17.5cm。笠形を呈するが、頂部が丸みをもつもの（*1*～*3*）と頂部が扁平なもの（*4*～*6*）がある。天井部はいずれもヘラ削りを施す。つまみはいずれも扁平で頂部が陥没する。

杯Ｂ身（*7*～*17*）

口径14.4cm～17.5cmのものが出土しているが、15cm～16cm代の口径のものが最も多い。また、杯Ｂ蓋の*1*の口径（14.5cm）から判断して13cm代の小型の杯Ｂが存在しているはずであるが、今回の限られた調査区内では含まれていない。*7*は口径に対して器高が高いが、他は器高の低い系統の杯である。*7*・*8*・*15*～*17*は口縁部を強く外反させる。底部外面はヘラ切り後、ヘラナデ調整を行う。

杯Ａ（*19*～*21*）

口径13.0cm～14.0cm、器高3.3cm～4.4cm。口径に対して器高が高く、体部と底部の境が丸く不明瞭で、杯Ａの形態としては古い様相をもつ。底部はヘラ切り後、ナデ調整を行なう。

長頸壺（*22*～*26*）

いずれも口頸部を欠く。体部は算盤形を呈し、肩と体部の境に凹線を巡らす。*24*の高台の側面には、ヘラ状工具によって10㎜×２㎜前後の左上がりの方形孔が四方に穿たれている。

皿（*18*）

口縁端部を外反させる。底部はヘラ切り後、ナデまたはヘラによってていねいに調整している。一応、皿としておくが、小片であり、別の器形になる可能性もある。

盤（*27*）

口径29.6cm、高さ8.6cm。体部下半は粗いロクロ削り、底部はヘラ切り後、粗いナデ仕上げを行う。

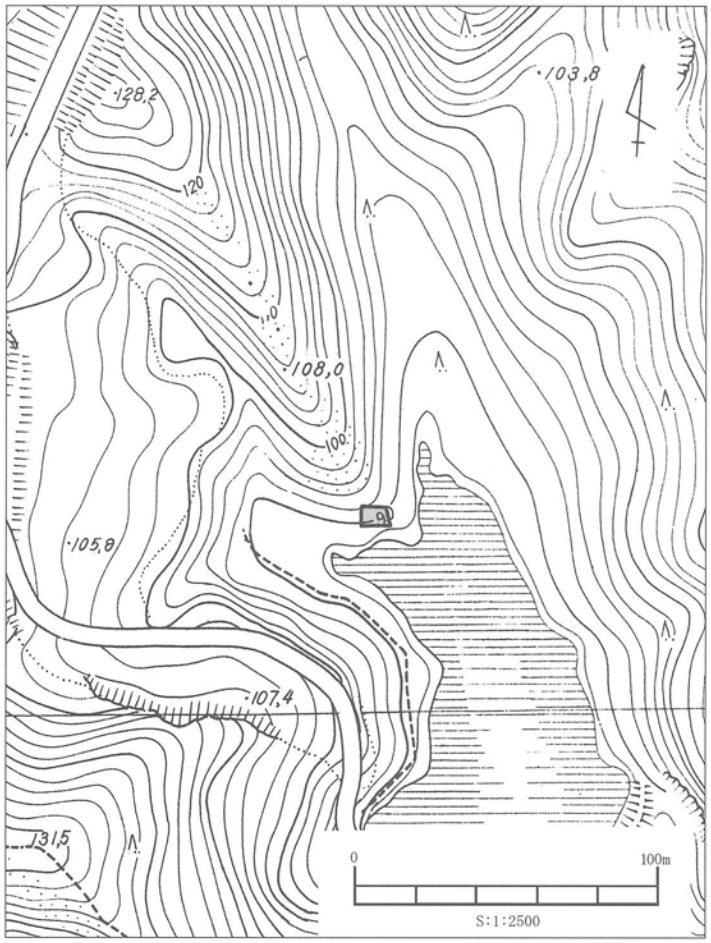
第２節　跡部４号窯

１．窯跡の立地と構造

窯は美囊川右岸の南北に長い開析谷（湯谷）からさらに西側に入る枝谷の入り口の南向き斜面に構築されている。この谷には谷をせき止めてため池が造られているが、窯は最も奥の池（奥池）の北岸に位置する。窯の所在する場所は標高94m前後であり、池の水面とは約５ｍの比高差がある。

窯体は大阪層群からなる黄褐色の地山を掘り込んだ半地下式構造の窖窯であり、発見時には道路工事のため、既に灰原・焚口・燃焼部・焼成部の下端は失われ、残存長は約４ｍである。窯体の主軸は北から20°ほど東に傾いており、幅は下端部で1.6ｍである。焼成部は上端から３ｍほどの所からはじまり、残存部分の傾斜は約30°であるが、ここから下はもう少し緩やかになっていたようである。排煙部は傾斜が約38°であり、上端約１ｍほどは床面が失われ赤化した焼土面のみが広がっている。

天井は完全に崩落しており、窯壁片が大量に窯体内に落ち込んでいた。床面は舟底形を呈し、厚いところで５cmほど粘土を貼って成形しており、補修等は行なわれていない。焼成部の西壁が最も残存状態が良好であったが、ここでの深さが0.5ｍである。焼成部床面直上から杯等の須恵器が出土しているが、いずれも破片であり、焼台として置かれたものと推定する。また窯体の西側には作為的に造成された東西５ｍ以上、南北２ｍ以上の平坦地がある。ここからも須恵器が出土しており、作業場のようなスペースである可能性が考えられる。

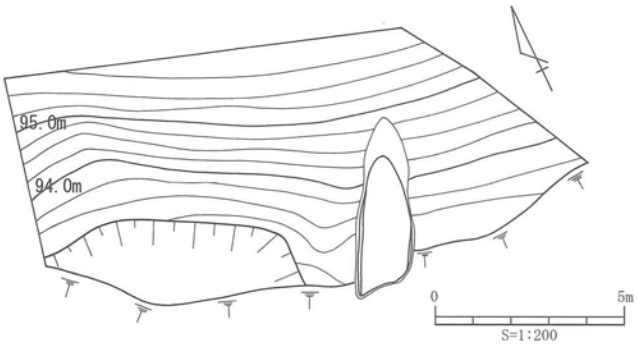


挿図８　跡部４号窯　調査位置図

２．遺物（第２図）

杯Ｂ蓋（*1*～*7*）

口径15.8cm～18.3cm。*3*や*7*のように笠形を呈するものもあるが、全体に扁平である。天井部はヘラ削りが行われている。



挿図９　跡部４号窯　地形測量図

杯B（*8～12*）

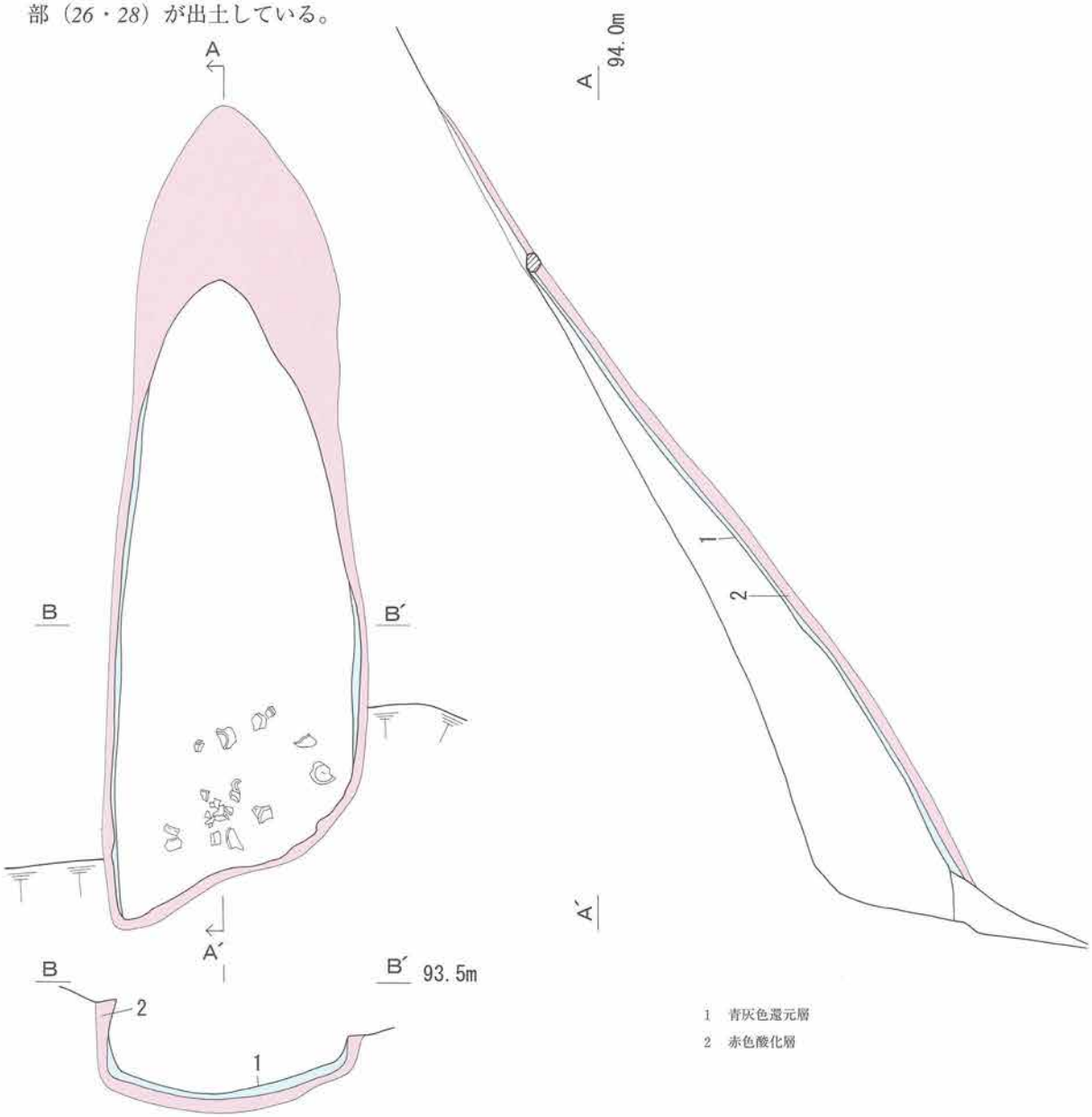
口径13.0cm～13.9cmの一群（*8～10*）と14.9cm～16.8cmの一群（*11・12*）がある。器高はいずれも5以下である。前者は口径に比して器高が高く、径高指数が高い。*11・12*は口縁部が外反する。底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行う。

杯A（*13～23*）

口径10.6cm～11.8cmの一群（*13・21～23*）と13.1cm～14.3cmの一群（*14～20*）がある。前者の一群には体部が直立するもの（*21～23*）がある。底部はヘラ切り後、ナデ調整を施す。

その他（*24～30*）

*24*は頸部の傾きが大きすぎるかもしれないが、一応、横瓶の口縁としておく。*25*は降灰の状況から壺形態の口縁としているが、天地が逆になり脚形態になるかもしれない。*27*は小片であり、体部の傾きの復元にやや不安があるが、底部が平底の小型の鉢になろう。このほか、把手付きの鉢（*29・30*）、壺底部（*26・28*）が出土している。



挿図10　跡部4号窯　窯体図

第３節　柳谷11・12・13号窯

Ⅰ．窯の立地と概要

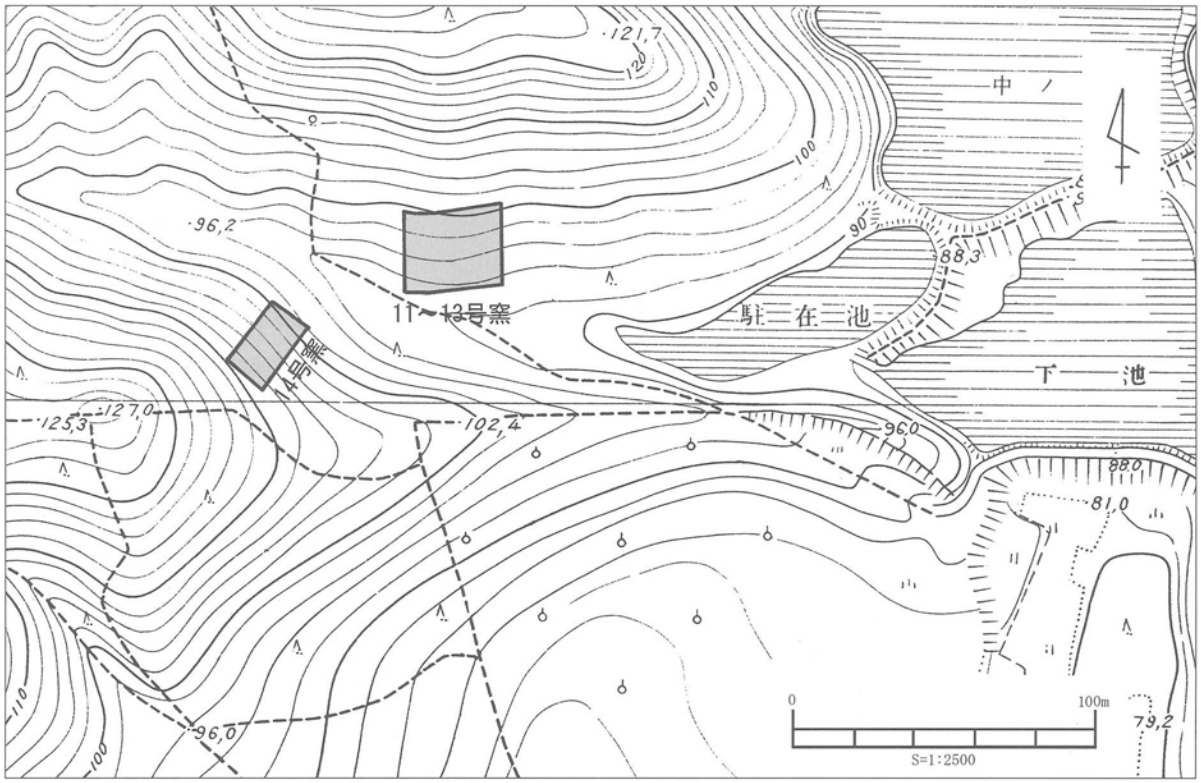
柳谷に分布する窯跡群のうち、平安後期の窯跡群は主谷の柳谷の両側斜面に構築されているが、奈良時代の柳谷11号窯～13号窯および14号窯は主谷の柳谷から西に外れた谷の斜面に築かれている。

このうち、11号窯～13号窯は谷の南向き斜面に立地し、主軸方向を同じくする３基の窯体は３～４ｍの間隔を置いて構築されているが、いずれも窯体の一部若しくは大半が道路建設予定地外に存在しており、窯体全体の発掘調査を行うことはできなかった。また、等高線に沿って東西方向に設けられた工事用道路によって、調査区が上下に分断され、12号窯の焚口部と各窯の灰原の一部が失われていた。各窯の詳細については後に譲るが、灰原については、12号窯を中心にした３基の灰原の重なりが認められるので、ここで一括して述べておく。

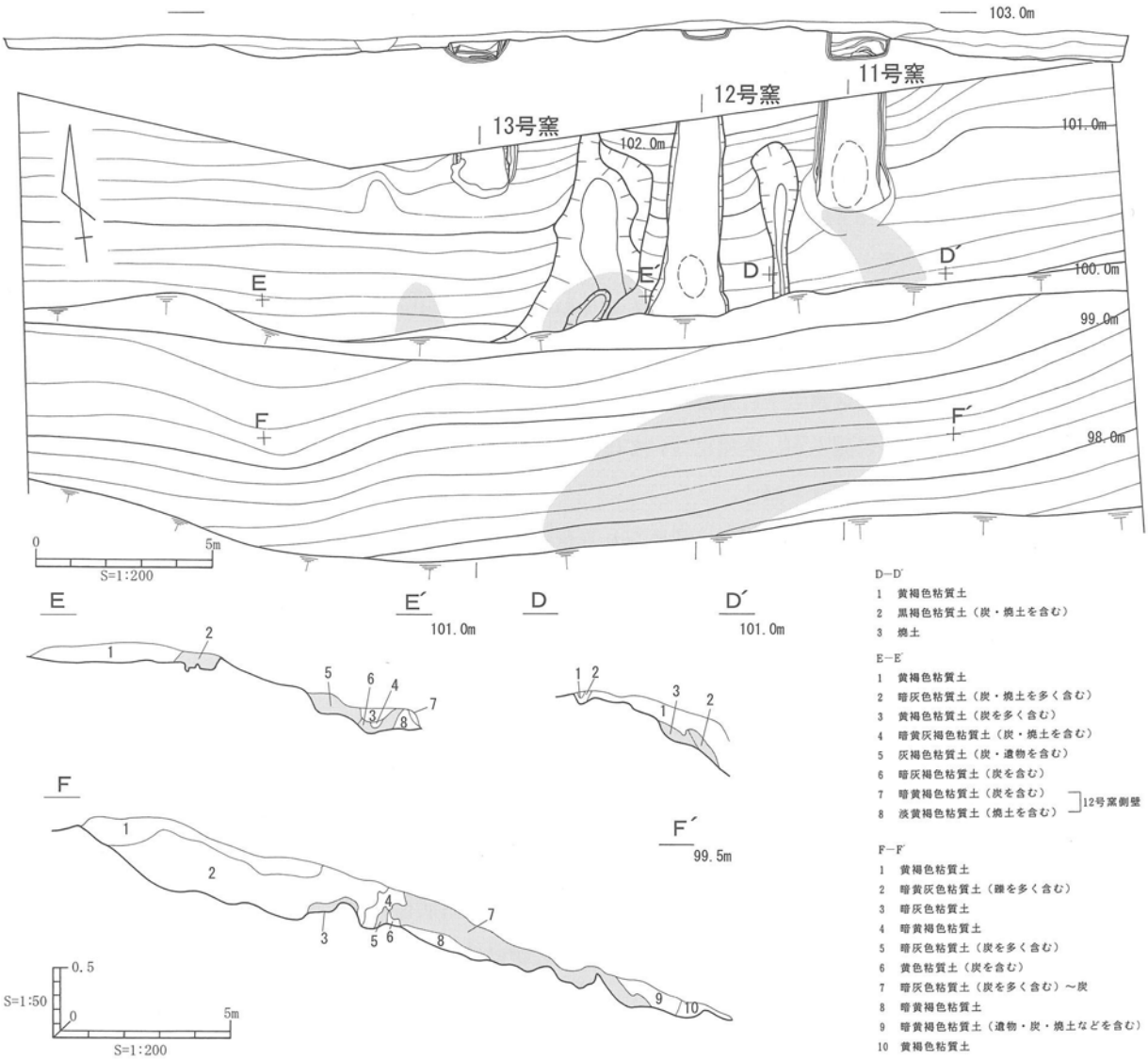
11号窯の灰原は焚口周辺にわずかに認められる程度で、広がりはあまりない。11号窯の灰原の下方には12号窯の灰原が広がるが、両窯の灰層の重なり合う箇所が工事用道路によって削平されている。このため、灰原の土層関係からは11号窯と12号窯の構築の前後関係を知ることができない。

12号窯の灰原は工事用道路によって上方部が削平されているが、３基の窯の中でもっとも明瞭な灰原を形成しており、灰層の広がりは東西10mに及ぶ。

13号窯の灰原については、焚口から約2.5m離れた箇所に灰層のわずかな広がりがある以外に明瞭な灰の堆積層はないが、灰層の下方の斜面に13号窯の遺物を多量に含んだ暗黄灰色粘質土の堆積層が広がる。暗黄灰色粘質土には多量の礫を含んでおり、窯体の西側上方から雨水等によって押し出され、灰原の灰層を巻き込んで下方に堆積したものと思われる。この暗黄灰色粘質土層は12号窯の灰層の上に堆積しており、13号窯が12号窯よりも後に構築されたことがほぼ確実である。



挿図11　柳谷11号窯～14号窯　調査位置図



挿図12　柳谷11号窯～13号窯　　地形測量図・灰原土層断面図

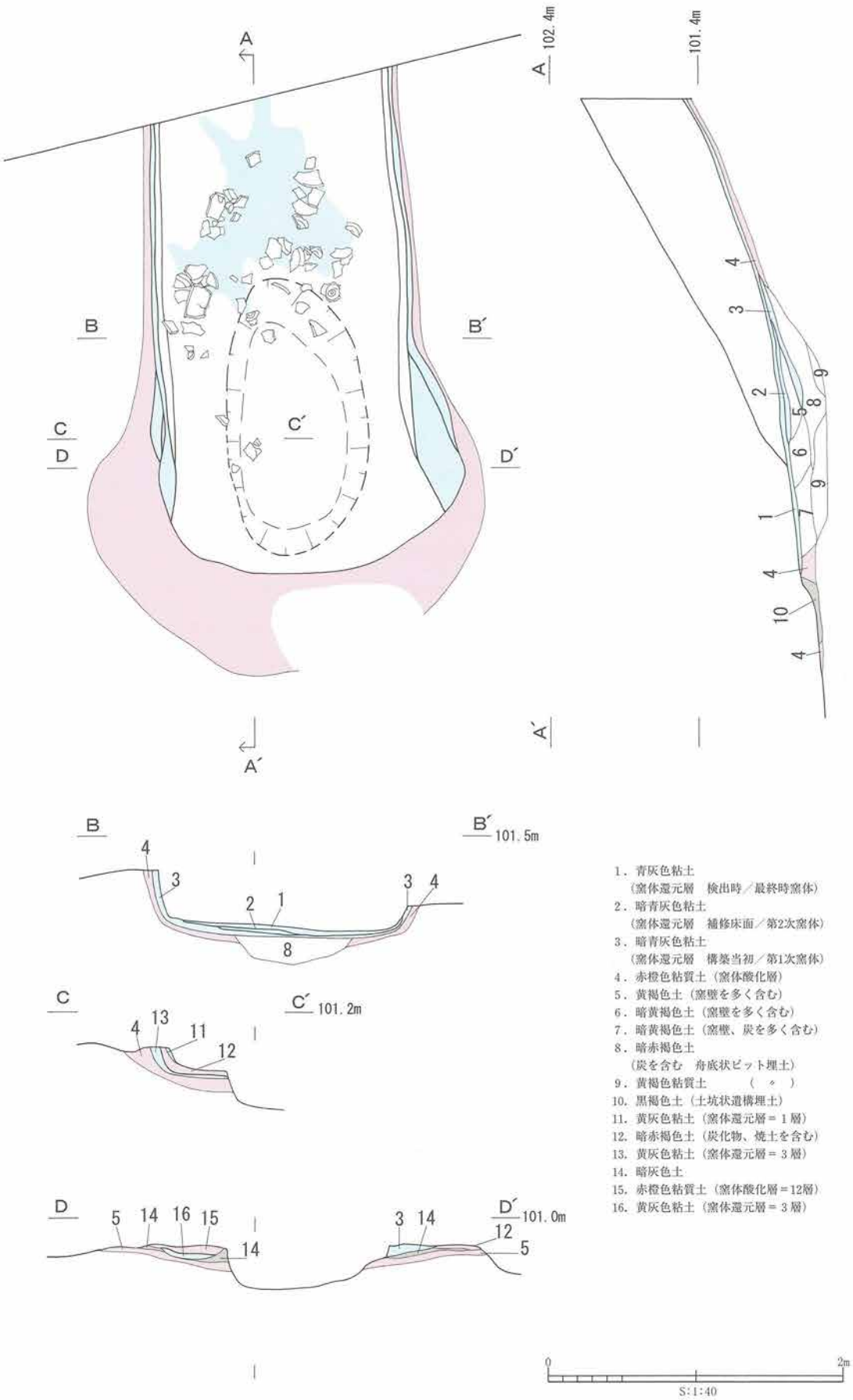
Ⅱ．柳谷11号窯

1．窯の構造

11号窯は３基並んだうちの東端に位置している。窯体は半地下式の窖窯である。窯体のうち焼成部中央より上方は道路工事用地外となるため、発掘調査を実施したのは、燃焼部と焼成部の一部である。窯体の主軸方向はN10°Eで、標高は焚口部で100.8mを測る。

窯体は焚口および燃焼部付近を中心に少なくとも３回改修が加えられている。操業当初は長さ1.87m、幅0.96m、深さ28cmを測る舟底ピットを設けているが、その後、舟底ピット内の埋土（第８・９層）ベースにして第２次床面（第３層還元層）を形成している。第７層には炭が多く含まれているが、この第２次床面での操業に伴い排出されたものと考えてよい。さらに、この第７層および第５・６層をベースにして第３次床面（第２層還元層）が形成され、その上を第１層青灰色粘土層が覆い最終面の第４次床面を形成している。操業当初の床面および側壁は素掘りのままで粘土での被覆は行なっていない。

窯体規模は、最終操業時の規模で、調査区内長3.30m、焚口部の床幅は1.68m、側壁の残存高は最高で0.32m、傾斜角度は18°を測る。



挿図13　柳谷11号窯　窯体図

2．遺物

窯体からは、燃焼部のみの限られた調査ではあったが、多種の遺物が出土した。遺物は赤褐色を呈するものが多く、最終操業時における窯焚きの仕上げ段階での還元化が不十分であったことを窺わせる。また、灰原は灰原と認識できるほど明確な灰の堆積と広がりが形成がされておらず、出土遺物量はきわめて限られている。ここでは、窯体出土遺物と灰原出土遺物について一括して述べる。

杯Ｂ蓋（第３図　*1～9*）

扁平な笠形を呈し、つまみは扁平な宝珠形である。天井部はヘラ削りを施すが、成形時の段を残しているものが多く、あまりていねいな作りではない。*7*は天井部に火襷の跡を残す。

口径は10cm前後のもの（*6*）と14cm代のもの（*7*）、15cm代のもの（*1*～*3*・*8*・*9*）があるが、身の方では口径15cm～16cm代のものが出土しているので、セットになる蓋の口径が身より１cm～２cm大きいとすると16cm～17cmの蓋が焼成されているはずである。

杯Ｂ身（第３図　*10～19*／第６図　*76～83*・*118*・*127*）

杯身は口径11cm前後のもの（*10*）、口径13cm前後のもの（*11*・*12*・*16*・*77～78*）と14cm～16cm前後のもの（*13～15*・*79～83*）がある。大半が器高の低い系統であるが、*12*・*78*・*79*のように器高の高いものもある。底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行うが、仕上げは雑である。*17*・*18*・*83*は内外面ともていねいなロクロ削り調整が行われ、高台が断面三角形状に仕上げられており、火襷の跡を残すのが特徴である。*127*は口径20.0cm、器高7.6cmの大型の杯Ｂで、外面上位から内面全体にヘラ磨きを施し、口縁内面に凹線を巡らせるなど金属器的な要素をもつ。また、*16*は右半分が欠けているが、底部外面に「大」の字と推定されるヘラ描き文字がある。*76*は高台の特徴から13号窯で焼成された遺物の混入の可能性もある。*118*は底部を欠くが、器高の高い杯Ｂと考えておく。

杯Ａ（第３図　*20～28*／第６図　*84～93*）

口径13cm～15cm前後のもの（*20～23*・*84～88*）と口径16cm～17cm前後のもの（*24～28*・*89～93*）の大小２種がある。前者をＡａ、後者をＡｂとすると、杯Ａａはヘラ切り後、ヘラナデ若しくは不調整であるのに対して、杯Ａｂはていねいなヘラ削りを行っている。

皿Ａ・皿Ｃ（第３図　*29～32*／第６図　*94～101*）

高台を付さない皿である。口縁端部を丸く仕上げる皿Ａ（*29*・*31*・*94～100*）と口縁端面を平坦にする皿Ｃ（*32*・*101*）がある。底部外面はヘラ削りを施す。底部内面はヘラなどでていねいな調整を行うが、*98*のように内面の叩きのあて具の痕跡をわずかに残すものもある。

環状鈕付蓋（第３図　*33～40*／第６図　*110～112*）

*38*や*40*のように天井部が大きくふくらむものと*37*や*110*のように扁平なものがある。環状鈕は幅が広く断面が方形のもの（*33*・*40*）と上端の幅がせまく断面が三角形もしくは台形状のもの（*35*・*37*・*39*・*110*・*111*）がある。天井部はヘラ削りもしくはヘラ磨きを行うが、あまりていねいな仕上がりではない。このうち、*38*は天井部外面に、*39*は内面にそれぞれ火襷の跡を明瞭に残す。

稜椀（第３図　*41～43*／第６図　*113*）

*41*は内外面ともナデ仕上げで作りも全体に雑であるが、*42*と*43*は体部中央の稜線より下位はヘラ削りを行う。*43*は口縁端部内面に火襷の跡を残す。*41*・*43*・*113*は口縁部を大きく外反させる。

皿Ｂ蓋（第４図　*45～49*／第６図　*108*）

天井部外面をヘラ削り、内面をナデ仕上げしている。出土資料の蓋の口径は21cm～27cmであるが、皿

Bの大半は口径が30cmを越えており、本来、口径30cm以上の口径の大きな蓋が生産されているはずである。つまみは扁平な宝珠形と逆台形のもの（*47*）がある。*48*は外面に火襷の跡を残し、*47*は内面に皿Bの底部の重ね積みの痕跡を残す。

皿B（第4図　*50*～*55*／第6図　*106*・*107*・*109*）

体部内外面をヘラ磨き、底部外面をヘラ削りによって仕上げている。*50*のように口径23cmの小振りのものもあるが、ほとんどは口径30cm前後である。このほか、図化できなかったが、窯体内から多数の皿Bが出土している。

皿D（第4図　*58*・*59*／第6図　*102*～*105*）

体部内外面ナデ仕上げ、底部外面はヘラナデ調整を施す。

盤（第4図　*56*・*57*）

口径35.5cmの大型品である。体部の器壁は厚く、体部は短く立ち上がる。同様の器形は12号窯の灰原からも出土している。

鉢A（第4図　*60*～*62*／第7図　*114*～*115*）

口縁は内傾し、口縁端面は平坦である。体部下半は急速にすぼまる形状を示する。体部上位から底部にかけてヘラ削りを行っている。

鉢（第7図　*117*・*119*・*120*）

*120*は口径21.2cmで、体部が斜め上方に立ち上がり口縁部に小さな片口が設けられている。*117*・*119*についても、口縁部は外反し、端部が薄く引き上げられており、片口をもつ*120*と同形態であるので、一応鉢の類に含めた。

高杯（第4図　*67*～*70*／第7図　*116*）

皿部は*116*のように口径17cmの小振りのものがあるが、大半が口径28cm前後の大型のものである。

壺・壺蓋（第4図　*63*～*66*／第7図　*121*～*123*）

口縁から底部まで接合できたのは1点もない。*66*は肩部に稜をもち、稜線の部分には沈線を巡らす。同様の器形は12号窯から出土しているが、長頸壺（平城宮分類壺K）か広口の口縁をもつ広口壺（平城宮分類壺Q）ののいずれかは判断できない。*123*は体部が丸みをもつ平城宮分類の壺L、*64*・*122*が肩部が稜角をなす広口壺（平城宮分類壺Q）であろう。

甕（第5図　*71*～*75*／第7図　*124*～*126*）

口径20cm代の中型甕（*74*・*124*・*125*）から30cmを越える大型甕（*73*・*75*・*126*）がある。口縁部を外反させ、端部を上方につまみあげるのが特徴である。平城宮分類の甕Aに該当する。このほか、*71*・*72*は外面をハケで仕上げ、胎土には砂粒を多く含む。*71*は須恵質、*72*は土師質である。

Ⅲ．柳谷12号窯

1．窯の構造

窯体は11号窯跡と同様の明黄褐色土の地山を掘り込んで作られた半地下式の窖窯である。窯体先端部は調査区外に存在し、また、前庭部が仮設道建設により破壊されている。調査区内での検出長は5.88mを測るが、窯尻の側壁高と床面の立ちあがりの収束状況から判断して、窯体長は恐らく７m前後と推定される。窯体の主軸方向はN10°Eで、11号窯跡と主軸を同じくする。床面の傾斜角度は、焚口部から焼成部付近まではおよそ25°で、先端部で41°を測る。側壁の残存高は最も残りのよい焼成部付近で0.52mある。

床幅は先端部近くで1.4m、焼成部付近で1.7m、焚口部では最大2.18mを測り、燃焼部から焚口部に向かって幅が広がっていく形状を呈するが、側壁と床面の還元域は焚口の約0.5m手前で終結しており、この付近で閉塞が行なわれたことが推測される。

燃焼部には長径1.2m、短径0.8m、深さ0.1mの舟底状ピットが設けられている。表面が粘土で被覆された状態で検出されたが、内部の埋土からは炭・焼土に混じって須恵器片が多数出土した。焚口は最低１回の補修が行われており、操業当初の焚口幅はおよそ2.5m程度あったと考えられる。焚口の左側溝内には灰の堆積層があり、窯体の焚口から掻き出されたものである。また、焚口部の床面下から長さ1.18m、幅0.78m、深さ0.1mの舟底状のピットが検出され、埋土中から若干の須恵器の破片が出土した。なお、調査後、焚口の床面を掘り下げたところ、焚口中央に直径約10cmのピットを１個検出した。構築時の天井部を支えた梁の支柱の可能性もある。

窯体の左右には側溝が設けられている。このうち、左側溝は幅2.15m～2.50m、深さ0.30m～0.58mを測り、窯体に沿って掘り込まれている。右側溝も左側溝と同じ位置から窯体に沿って掘り込まれており、幅0.4m～1.2m、深さ26m～45cm、長さ4.4mを測る。両側溝からは若干量の遺物が出土した。

2．遺物

杯Ｂ蓋（第８図　*1*～*7*／第10図　*52*～*67*）

口径は12cm～14cm未満、14cm～16cm、20cm以上のものがあるが、14cm～16cmのものが圧倒的に多い。天井部が丸みをもつもの（*1*・*59*）と平坦なものがあるが、後者のほうが圧倒的に多い。つまみは扁平な宝珠形と扁平なボタン状の２種ある。*67*のように高さのある本来の宝珠つまみもあるが、杯Ｂ以外の蓋の可能性もある。天井部はヘラ削りを施すが、粗い仕上げである。*205*は外面に火襷の跡が残る。

杯Ｂ（第８図　*8*～*14*／第10図　*68*～*78*）

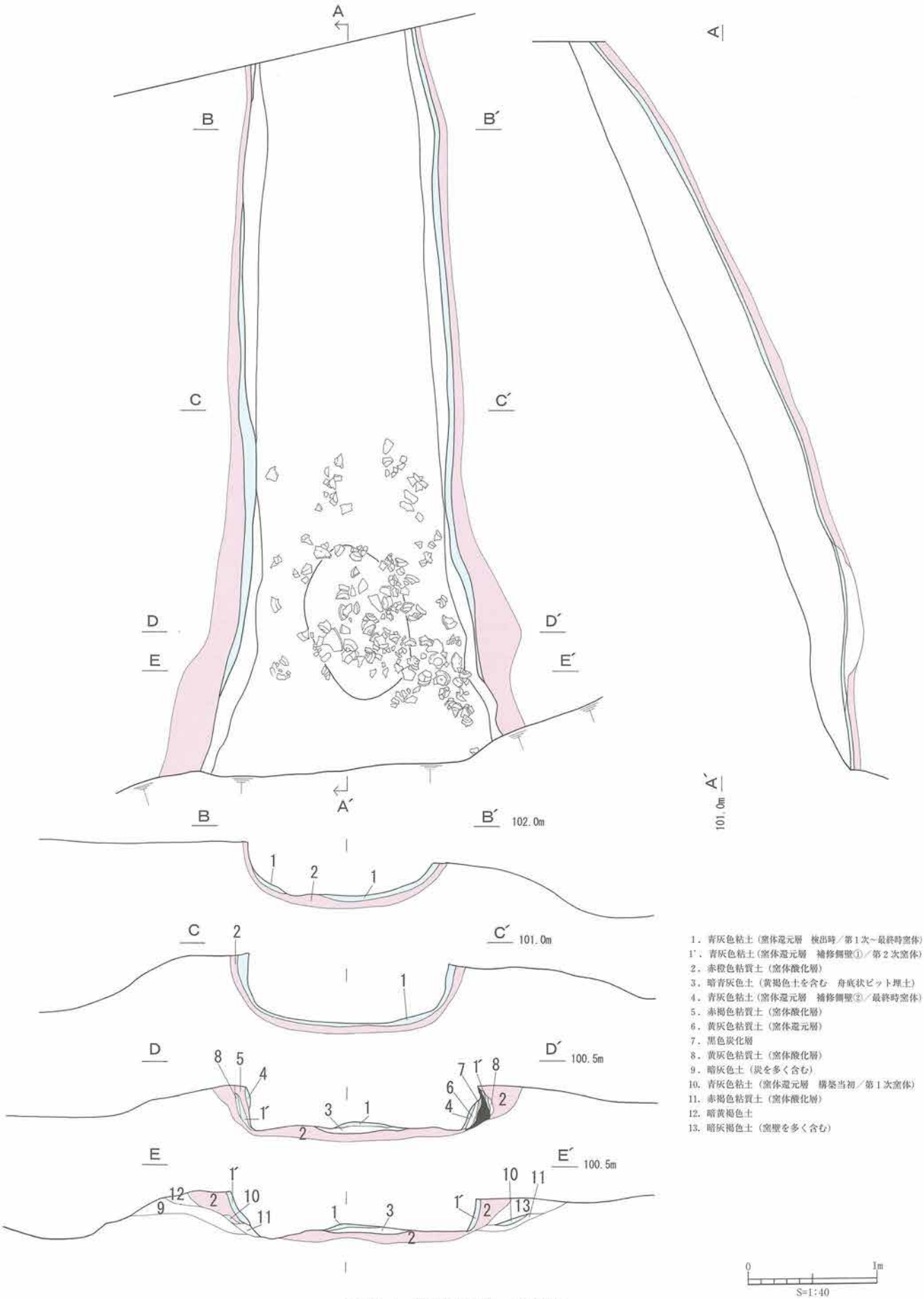
杯身は*8*や*68*のように口径が12cm前後のやや小型のものや*77*のように17.5cmの大型のものもあるが、口径13cm～15cm前後のものが最も多い。また、器高の高い一群（*76*～*78*）も存在する。底部外面は大半が不調整かヘラナデ調整のみであるが、*10*・*14*のようにヘラ削りを施すものもある。*14*の底部外面に「下」の文字が刻まれている。

杯Ａ（第８図　*15*～*25*／第10図　*79*～*103*）

口径13cm～14cm前後のもの（*15*～*24*・*79*～*95*）と口径15cm～19cm前後のもの（*25*・*96*～*102*）の大小２種がある。前者は底部の調整がヘラなでのみであるのに対して、後者はていねいなヘラ削りを行っている。器高は４cm以下であるが、*102*のみ器高が5.0cmある。*103*は体部に直径１cmの穿孔があるが、小片のため孔の数は不明である。器種についても不明であるが、一応杯の類に含めておく。

皿Ａ・皿Ｃ（第８図　*26*～*31*／第11図　*104*～*108*）

口縁端部を丸くまたは外反させる皿Ａ（*26*・*27*・*104*～*107*）と口縁端面を平坦にする皿Ｃ（*28*～*31*・



挿図14　柳谷12号窯　窯体図

108）がある。底部外面はヘラ削りを施す。底部内面はヘラ状工具でていねいな整形を行う。*26*と*105*は内外面に明瞭な火襷の跡が残る。

皿Ｂ蓋（第８図　*32*～*36*／第11図　*109*）

*32*の天井部外面はていねいなヘラ削りが行なわれ、火襷の跡が明瞭に残る。*34*・*35*・*109*は天井部にていねいなヘラ削りを行い、縁部外面および内面にヘラ磨きを施す。*36*は天井部内外面ともにヘラ磨きを施し、火襷を残す。*33*の調整はやや雑である。

皿Ｂ（第８図　*37*／第11図　*110*～*113*）

37・*112*は体部内外面にヘラ磨きを施し、底部外面はヘラ状工具でていねいに整形している。*110*の底部内面はヘラ磨き状に仕上げるが、叩きのあて具痕を残す。*113*は内外面ともにていねいに整形しているが、磨滅のためかヘラ磨きの跡は認められない。*111*の調整は皿Ｂの一群の中では雑である。

盤（第11図　*114*）

口径35.5cmの大型品である。同様の器形は11号窯の窯体からも出土している。

環状鈕付蓋（第９図　*38*／第11図　*115*～*118*）

*38*は天井部は縁部のみに自然釉がかかり、内面にも杯Ｌ（稜椀）との重ね積みの痕跡が残る。セットになる杯Ｌの口径は蓋のそれよりも３cm小さい。また、*115*の内面にも杯Ｌとの重ね積みの痕跡が残り、セットになる杯Ｌ椀の口径は蓋の口径より約２cm小さい。*38*は内外面に火襷の跡が残る。

杯Ｌ（稜椀）（第９図　*39*／第11図　*119*～*122*）

口縁端部が外反するもの（*119*～*122*）と外反せずまっすぐに立ち上がるもの（*39*）がある。*39*は体部外面は、稜より上位をヘラ磨き、下位および底部外面をヘラ削りする。体部内面はナデ仕上げである。

鉢Ａ（第９図　*40*／第11図　*123*・*124*）

外面はロクロ削り調整。内面はロクロナデ調整をしている。

高杯（第９図　*41*／第11図　*125*・*126*）

いずれも脚部を欠く。杯部外面はロクロ削り調整を行っている。*125*は皿Ａの可能性もある。

壺・壺蓋（第９図　*42*～*48*／第11図　*127*～*135*・*139*）

42・*128*～*130*は広口系統の平城宮分類の壺Ｑ形態と考えられるが、*127*は頸部下位に貼り付けの突帯状のものが巡らされているので、必ずしも壺Ｑと器形になるとは断言できない。肩部に稜を有するものが*43*・*45*・*48*の３個体出土している。このうち、*48*は沈線を有しており、同様の器形は11号窯にも認められる。長頸壺の口縁もわずか１点ではあるが、表土層から出土している（第18図　*66*）ので、この３点については長頸の壺Ｋになるのか壺Ｑになるのかは判断できない。*131*は有蓋の短頸壺である。*133*についても有蓋の短頸壺と考えられる。

甕（第９図　*49*～*51*／第11図　*138*・*140*～*144*）

49・*50*・*142*・*143*は口縁部を外反させ、端部を上方につまみあげるタイプで、平城宮分類の甕Ａに該当しよう。このうち、*50*は窯体出土のもので、頸部に波状文をもつ。図化できなかったが、頸部に波状文をもつ甕は窯体からもう１点出土している。*140*～*142*は口縁部をあまり大きく外反させず、端部を内側につみま上げる。*51*・*144*は口径が広く、口縁端面が平坦で端部を内側に突出させるのが特徴で、平城宮分類の甕Ｃに該当するタイプと考えておく。このほか土師質の甕（*138*）も出土している。

その他

横瓶（*136*・*139*）・盤Ａ（*137*）などが出土している。

Ⅳ．柳谷13号窯

1．窯の構造

窯体は大部分が調査区外にあり、発掘調査を行ったのは全体のうち燃焼部長約１ｍのみで、全体の規模は不明である。主軸はＮ13°Ｅで、11号窯と12号窯に比べてわずかに西に振っている。焚口部の標高101.4ｍで、半地下式構造の窯である。焚口は両側壁において１回の補修が認められ、操業当初で1.7ｍ、最終時で1.38ｍを測る。焚口は12号窯のように八の字形の広がりはない。また、舟底状ピットの存在は確認できなかった。

2．遺物

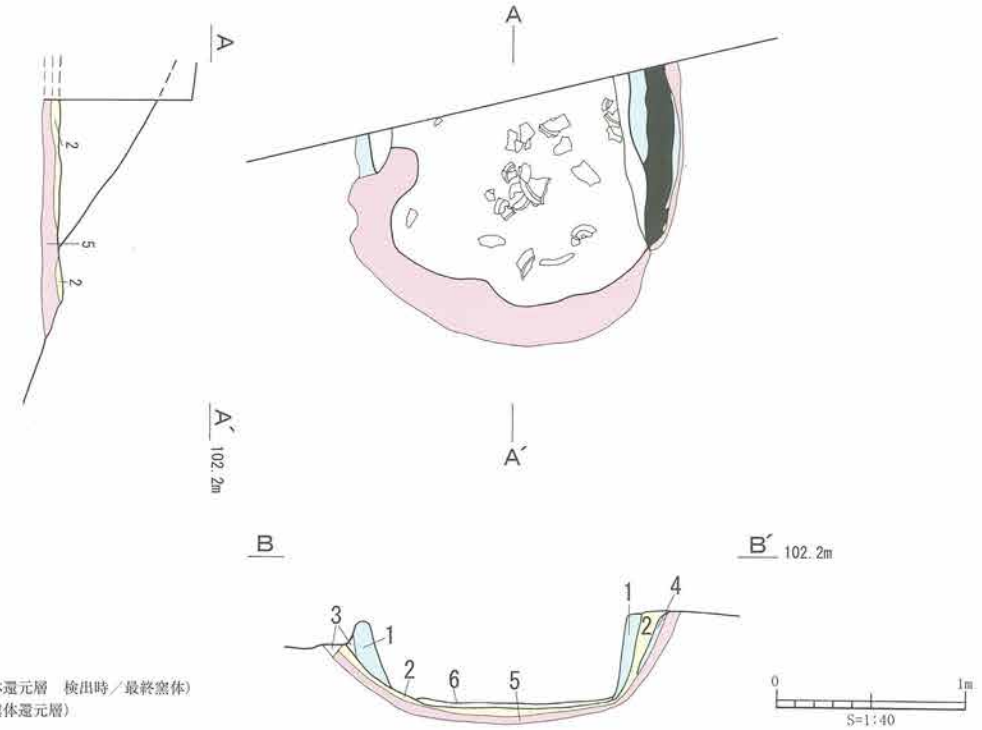
杯Ｂ蓋（第13図 *1*・*2*／第14図　22～30）

天井部が丸みをもつ笠形のもの（*1*・*29*）と天井部が平坦な平蓋がある。つまみの形は宝珠形であるが頂部がくぼんだ扁平なもの（*26*）もある。天井部をていねいにヘラ削りを施す。口径11cm～12cm代のもの（*22*）、13cm～15cmのもの（*1*・*2*・*23*～*24*）と20cm代のもの（*26*・*27*）がある。

杯Ｂ（第13図 *3*～*9*／第14図　*31*～*59*）

器高が５cm以下の低い一群と５cm以上の高い一群がある。前者は、口径の違いによって、10cm～12cmのもの（*3*・*4*・*31*・*32*）と13cm～14cm（*5*・*6*・*33*～*44*）の２つのグループに分かれる。口径13cm～14cm前後のものは体部外面から底部外面にかけてロクロ削り調整を行うのが特徴である。*31*・*32*は×印のヘラ記号がある。

器高の高い一群の口径は16cm～21cmで、器壁が厚く高台の畳付きが内側にやや突出するもの（*45*～*47*



1．青灰色粘土（窯体還元層　検出時／最終窯体）
2．黄灰色粘質土（窯体還元層）
3．暗黄褐色土
4．青黄灰色粘土（窯体還元層　構築当初／第１次窯体）
5．赤褐色粘質土（窯体酸化層）
6．暗灰色粘土（遺物を多く含む）

挿図15　柳谷13号窯　窯体図

・*51*・*52*・*59*）と高台の畳付きの幅も狭く、体部外面から底部外面にかけてロクロ削り調整を行ない、器壁の厚みを薄く仕上げるもの（*7*・*8*・*48*～*50*）の２種がある。

杯Ａ（第13図　*11*／第14図　*54*～*59*・*69*）

口径13.5cm～14.5cm、器高４cm以下の一群（*11*・*54*～*59*）と口径18.2cm、器高5.0cmの大型の*69*がある。前者のうち、*11*・*53*・*56*・*58*の底部外面がヘラ切り不調整もしくはナデ調整のみであるのに対して、*54*～*55*・*57*の底部外面は手持ちのヘラ削りを行なう。後者の*69*はヘラ切りの後、粗いナデ調整を行なう。体部はナデ調整のみである。

皿Ａ（第13図　*10*・*12*／第14図　*60*／第15図　*61*～*68*）

底部外面を手持ちヘラ削りを行う。口縁端部をわずかに外反させる。火襷のあとを残す。*12*の底部外面には「大」のヘラ描き文字がある。*68*の内外面の調整は雑である。

皿Ｂ（第13図　*16*／第15図　*72*～*74*）

皿Ｂの蓋は天井外面をヘラ削りを施す。身については内外面ともにナデ仕上げである。

皿Ｄ（第13図　*14*～*15*）

底部内外面ともにロクロ削りをていねいに行っている。

環状鈕付蓋（第15図　*75*～*78*）

蓋は縁部が屈曲して段をもつもの（*77*・*78*）とゆるやかに屈曲するもの(*76*)がある。いずれも天井部外面をヘラ削りする。このうち*77*の内面はロクロ削り、*75*の内面は手持ちのヘラ削りを行っている。

杯Ｌ（稜椀）（第13図　*17*・*18*／第15図　*79*～*86*）

*17*は外面は稜線より上位をヘラ磨き、下位をロクロ削りする。内面は上位をヘラ磨きを施すが、中位から底部にかけてはナデ仕上げのみである。底部外面はていねいなロクロ削りを施す。口縁を外反させるものとして*79*～*83*・*85*があるが、*17*に認められたヘラ磨きは確認できなかった。

*18*は口縁端部の内面に段をもつ。体部外面は稜線より下位をロクロ削り、上位をナデ仕上げしている。内面もナデ仕上げしている。口縁端部の内面に段をもつものには*84*・*86*がある。

台付皿（第15図　*87*～*90*）

*89*は外面全体をヘラ削りし、内面はナデ仕上げをしている。*90*の口縁端部内面の火襷と外面全体の降灰の状況から判断して蓋の可能性もある。

鉢Ａ（第15図　*91*）

体部外面は上半をヘラ磨き、下半部をヘラ削りしている。内面はナデ仕上げのみである。体部中央から急速に窄まっており、底部は尖底と考えてよい。

その他

小型の器形としては椀形の*70*や鉢形の*71*があり、*71*には把手が付くかもしれない。このほか、高杯（*96*・*97*）や横瓶（*98*）などが出土している。壺類には*92*・*94*・*95*がある。

Ｖ．11号窯～13号窯出土遺物（第18図・第19図）

灰原の表土や発掘調査前の工事用車両による掘削によって窯が特定できない資料を一括した。特徴的な遺物をあげておくと、環状鈕付蓋・杯Ｌ（*35*～*48*）・「下」や「大」の刻書須恵器（*50*・*51*）・円面硯（*58*）・尖底の鉢Ａ（*52*～*57*）などがある。

第４節　柳谷14号窯

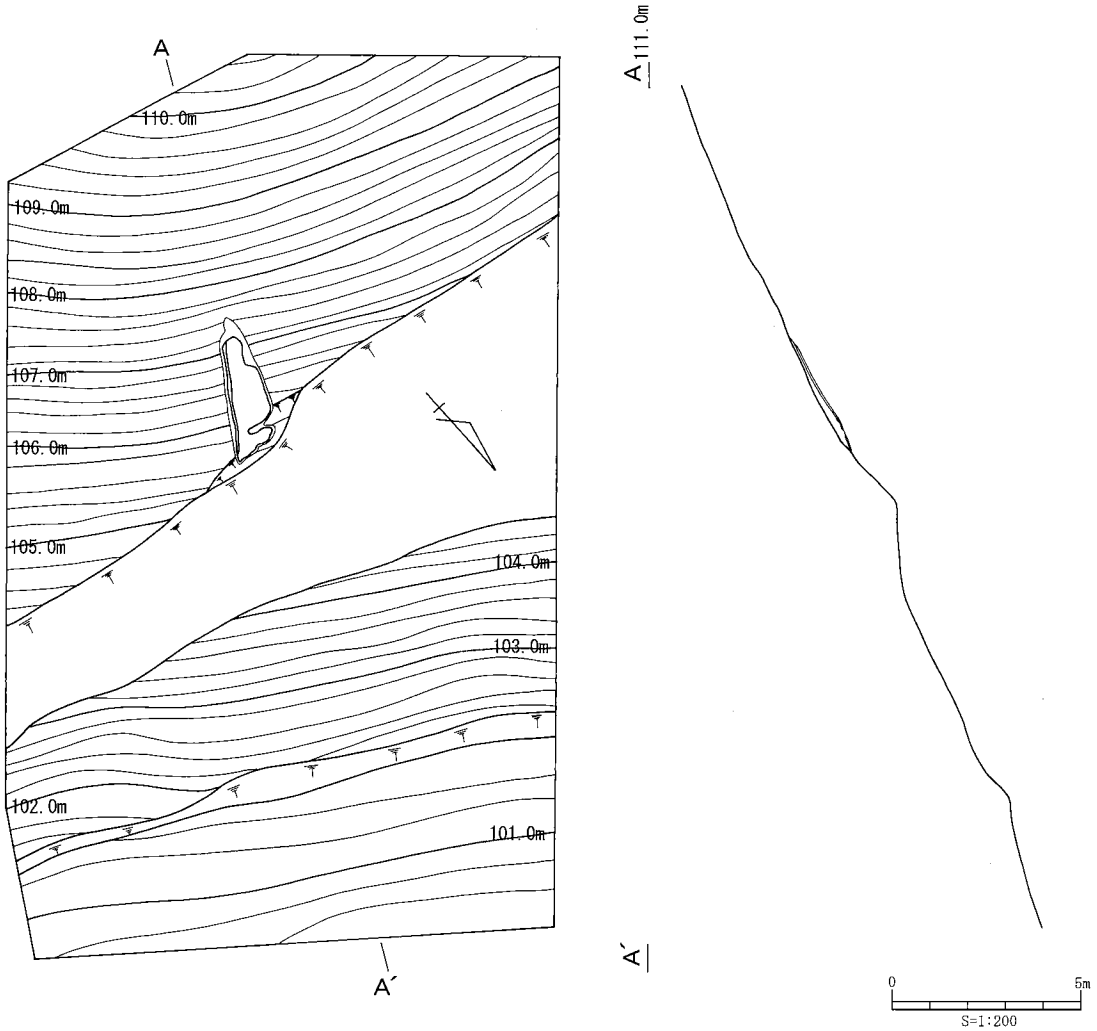
１．窯の構造

本窯跡は谷の北側斜面に構築されている11号窯から13号窯に対面する谷の南側斜面の中腹に構築されている。標高は焚口で105.8mあり、窯体の主軸方向はN28°Eである。

工事用道路によって窯体の焚口以下は削平され残存しない。窯体は残存長3.50m、床幅は焼成部中央で1.0m、焼成部先端で0.6mを測る。床面の傾斜角度は28°である。左側壁については最も残りのよい箇所で床面から0.25m程度の残存高があったが、右側壁については全く残存していなかった。窯体は工事用重機による表土掘削の際に右側壁を中心に損壊を受けてはいるが、重機の掘削深度と周囲の地形状況から判断して、本窯はもともと地山の掘り込みの浅い窯体であったと推定される。

窯体は燃焼部を失っているが、傾斜角度は焼成部下位で30°、上位で15°である。操業当初の側壁および床面は素掘りのままで粘土による被覆を行なっていないが、焼成部下位では床面の枚数が２枚あり、操業当初の床面に伏せた状態の杯類を置いたまま粘土で被覆し、第２次床面を形成している。側壁も床面の嵩上げに対応して貼り壁をしている。

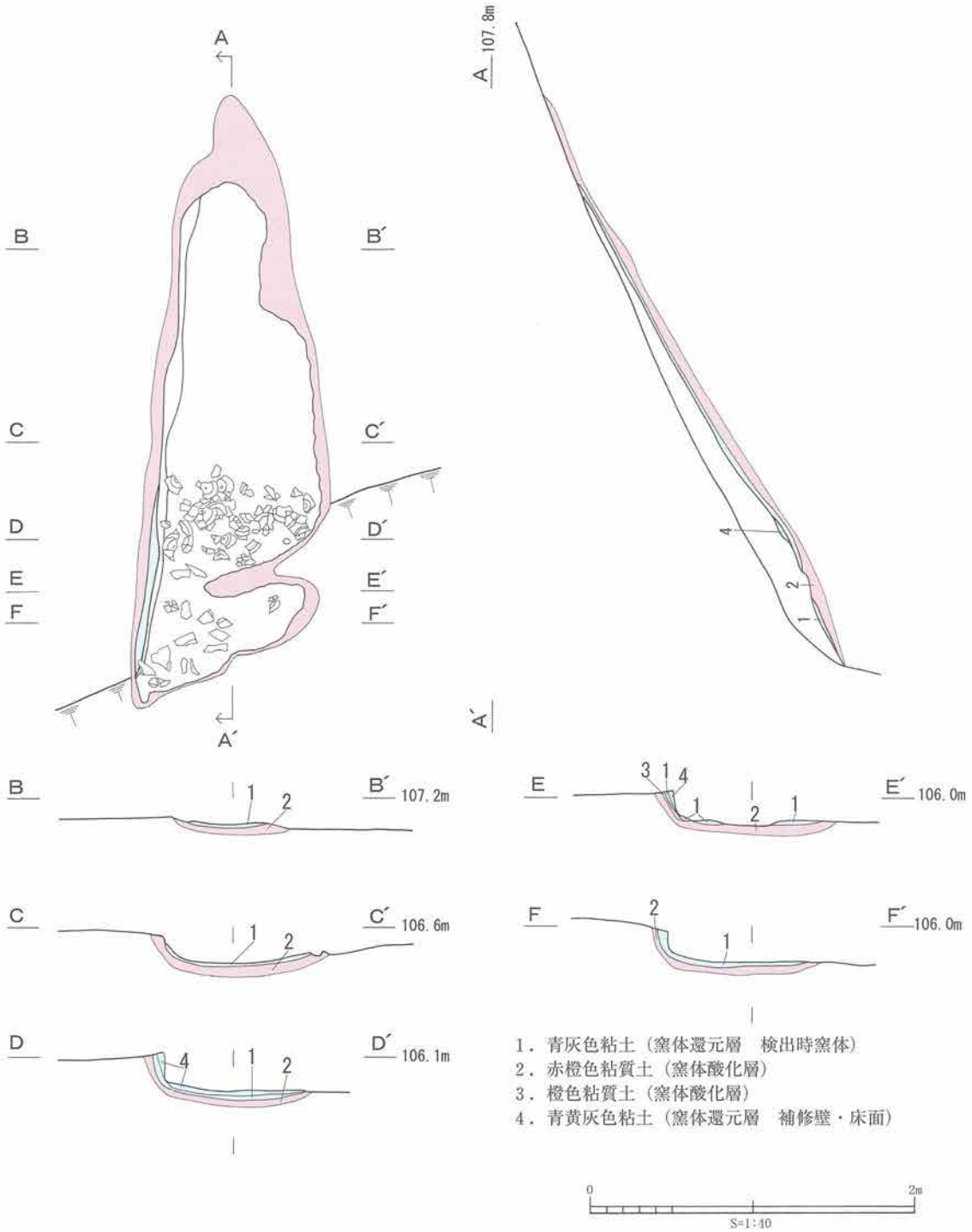
遺物は焼成部下位に集中していたが、後述の通り大半が土師質または瓦質に近い状態のもので、還元化した硬質の遺物は割れ口の状況から判断して焼台転用のものと考えられることことから、最終操業で



挿図16　柳谷14号窯　地形測量図

は何らかの理由で昇温に失敗して放棄したことが窺える。

灰原は重機による掘削のため失われていた。しかし、例え、灰原が失われていたとしても、通常の灰原であれば、灰原より下方の谷の斜面にも相当量の遺物が散布するはずであるが、本窯の場合は散布がきわめて希薄であった。このことから、本窯は窯体の床や壁の焼結の程度もあまり強くことを考え合わせると、操業期間も短く、灰原といえるほどの明瞭な灰層の堆積や広がりは形成されなかったと思われる。



挿図17　柳谷14号窯　窯体図

2．遺物

灰原が工事によって失われていることもあり、出土遺物は窯体出土のものが中心である。遺物は還元焔焼成のものと酸化焔焼成のものがあるが、後者の方が圧倒的に多い。酸化焔焼成のもの土師質または瓦質に近く、最終操業の際に昇温に失敗した状況を示している。還元化された遺物は焼台に転用と思われる。遺物は杯Ａの出土点数が他の器種を圧倒している。

杯Ｂ蓋（第19図　*1*～*3*／第21図　*57*～*67*）

口縁端部の屈曲が小さいのが特徴である。天井部はヘラ削りを行う。つまみの形は扁平なボタン形である。口径は14cm～16cmのもの（*1*・*2*・*57*～*66*）と20cm以上のもの（*3*・*67*）がある。

杯Ｂ身（第19図　*4*～*7*／第21図　*68*～*74*）

復元できるものが少ないので、およその傾向でしか把握できないが、口径は14cm～15cm（*4*・*68*・*69*）のものと18cm代のもの（*70*）がある。前者はさらに器高が３cm前後のもの（*4*・*68*）と５cm前後のもの（*69*）の２つに分かれる。後者の器高は６cm代で、口径・器高ともに大きい。底部外面はロクロ削りを行う。

杯Ａ（第19図　*8*～*44*／第21図　*75*・*76*・*78*）

口径14cm～16cmのもの（*8*～*42*・*75*・*76*）と18cm～20cmのもの（*43*・*44*・*78*）がある。底部外面はロクロなで調整を行う。

皿Ａ（第19図　*46*／第19図　*80*）

内面はロクロ削りを施すが、ヘラ磨き風にみえる。底部外面はロクロ削りを施す。

皿Ｂ・皿Ｂ蓋（第19図　*45*・*47*・*48*／第19図　*82*～*84*）

体部内外面ともに粗いヘラ磨きを施す。底部外面はロクロ削りを施す。*81*は皿Ｂの蓋で口径32.8cm。天井部外面はナデ仕上げのみである。

高杯（第19図　*49*）

皿部の底部外面はロクロ削りを行う。底部内面は叩きのあて具らしき痕跡を残す。

鉢Ａ（第19図　*50*・*52*／第19図　*85*）

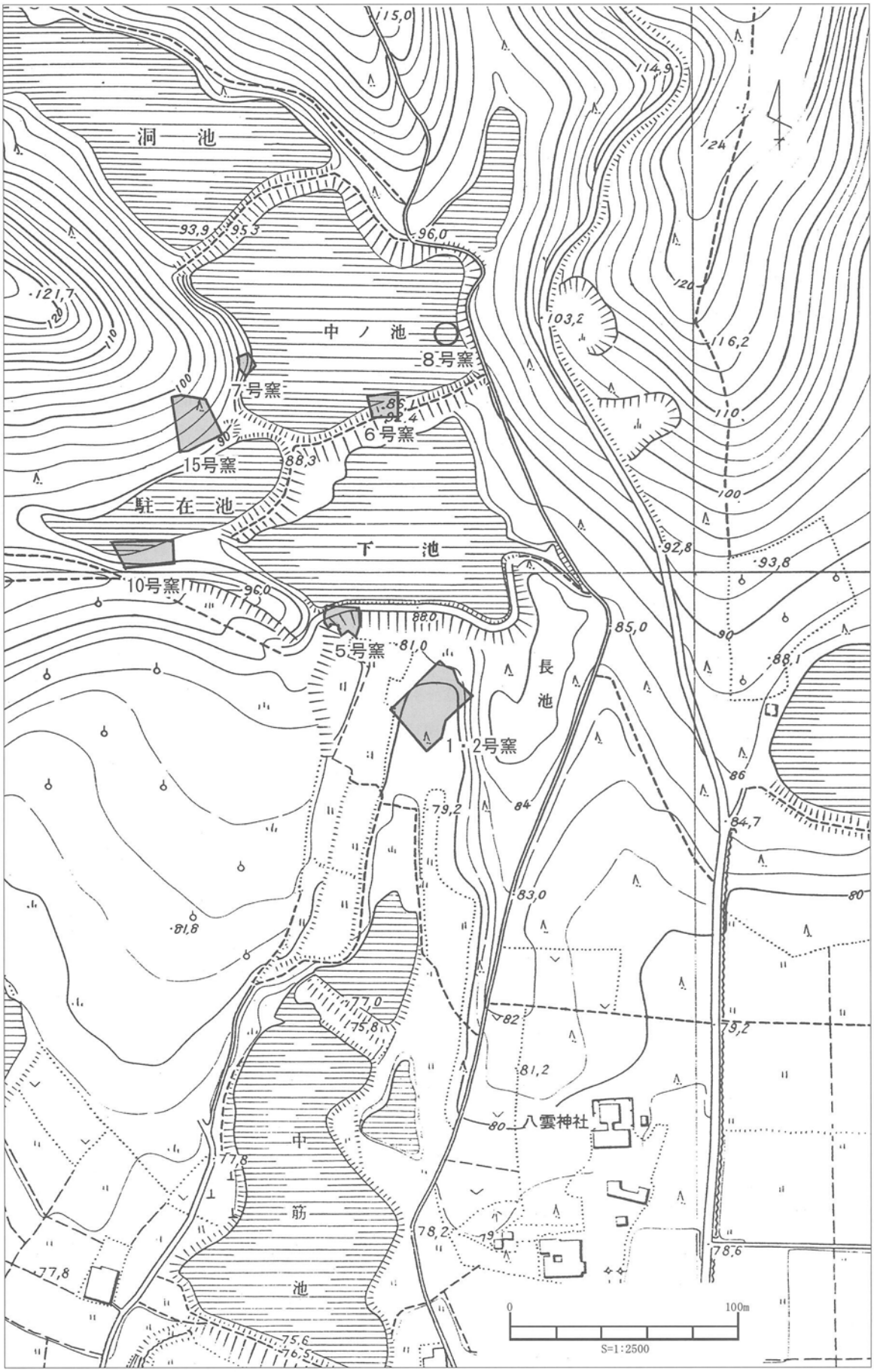
体部上位はナデ仕上げ、下位はヘラ削りを行う。内面はコテ状工具で整形している。*52*・*85*の出土資料により底部の形状が尖底であることがわかる。

硯（第20図　*54*）

脚台部は全体の６分の１程度の破片しかない。透かしには十字形と縦長の矩形がある。十字形と縦長の矩形を交互に配列すると脚台の径と透かしの間隔が合わないので、図上では十字の透かしを対面に置き、その間に縦長の矩形の透かしを左右２つずつ配列している。陸および外縁の高さはあまりなく、内堤もほんのわずかに盛り上がる程度である。

その他

壺（*51*・*53*・*55*）や横瓶（*86*）・甕（*56*・*87*～*89*）などが出土している。



挿図18柳谷１・２・５～８・10～15号窯　調査位置図

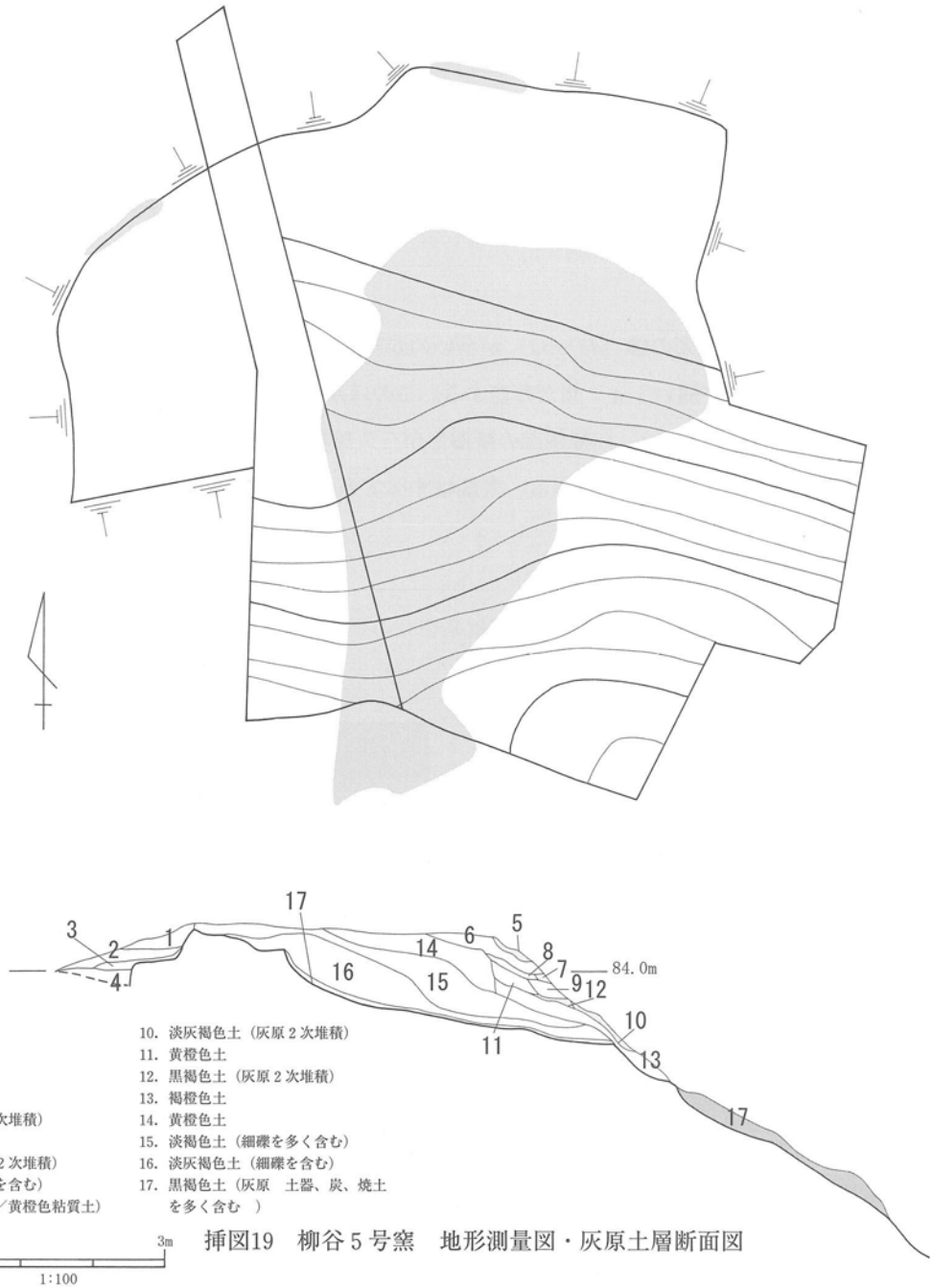
第４章　平安時代後期の窯跡の調査

第１節　柳谷５号窯

１．窯の立地と遺構の概要

下池の堤帯は柳谷の西側の尾根を東に延長するように伸ばして造成されており、５号窯はその堤帯下から検出された。下池の改修工事の際に発見され、調査を行った。周辺は、下池堤帯を造成する際に改変されて原型を留めておらず旧地形の復元は容易ではないが、南～南東向きの斜面に所在していたものと考えられる。

窯体は失われており、灰原のごく一部の検出にとどまった。灰原の平面形は不整形で、規模は長軸方



挿図19　柳谷５号窯　地形測量図・灰原土層断面図

向に8.5m、それと直交方向に4.9mである。下池造成時に窯体と灰原の大半は削平されたものと思われる。灰原は10cm～30cmの厚さで堆積していた。灰原は、標高81.1m～83.6mで検出した。

2．遺物

出土遺物量は遺物10箱である。遺物はいずれも須恵質土器で、土師質土器は出土品の中では皆無である。器種には、小皿・椀・鉢・壺・甕がある。個体識別ができたものは、小皿13点、椀100点、鉢23点、甕7点、壺4点である。

〔須恵質土器〕

小皿（第22図　*1～13*）

*1～3・5～11*は器高の高いⅠa形態の皿で、体部が直線的に立ち上がるものが大半であるが、体部がやや彎曲し口縁端部を外反させるもの（*6～8*）がある。*9*は器高が低く小皿Ⅰb_1形態、*4*は歪みが大きく、実測図は性格を欠くかもしれないが、器高が低く口縁部を大きく外反させるⅠb_2形態の小皿である。

椀C（第22図　*14～42*）

口径は15cm～17cmで、底部径は5cm～7cm。口縁端部は薄く引き出され、外反するのが基本的な形態であるが、*18～20*のようにやや肥厚するものも若干数ある。椀Ⅰa類に分類されるが、平高台を残すのもの（*14・15・35～42*）と残さないもの（*16・29～34*）がある。高台を残すのものには底部内面に段をもつものが多い。

鉢（第23図　*43～64*）

口縁部を外反させるⅠ類の鉢（*43～52*）が多いのが特徴である。このⅠ類の鉢には、*49～51*のように口縁部の外反の程度が弱いⅠa'類が存在する。このほか、口縁部の外反はなく、口縁端部の断面形が方形のⅠb類の鉢（*52～54*）、口縁端部の断面形が三角形状のⅡa形態の鉢（*55～57*）や口縁端部を丸く納める小形のⅢ類（*58～60*）がある。底部はすべて糸切りであるが、高台をもつもの（*61～63*）ともたないもの（*64*）がある。

壺（第24図　*65～68*）

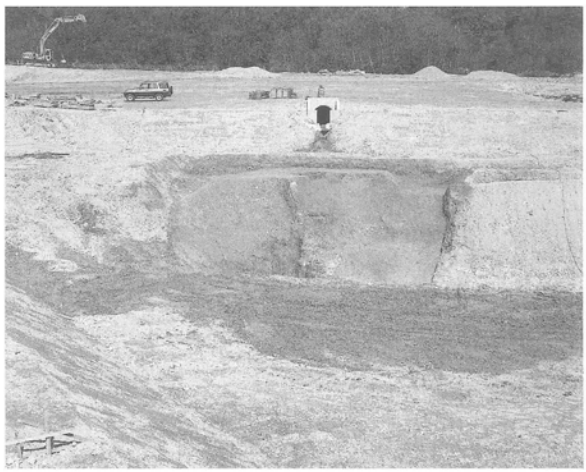
口縁部がラッパ状に開く長胴の壺で、底部は糸切りの平底である。口縁端部を直上につまみ上げるもの（*67*）とそうでないもの（*65・66*）がある。

甕（第24図　*69～71*）

口縁部のみで、全体を復元できるものはない。口縁部の形には、端部を丸く納める小型のA形態のもの（*69～71*）と口縁端面が平坦で断面が方形のB形態のもの（*72*）と口縁部内面を強くなでて口縁断面が三角形のC形態のもの（*73～75*）の3種がある。*71・72・75*は頸部に叩きの痕跡を残す。

〔瓦〕（第25図）

灰原上層などから軒丸瓦2個体、丸瓦0.5個体、平瓦2.75個体と少量の瓦が出土している。



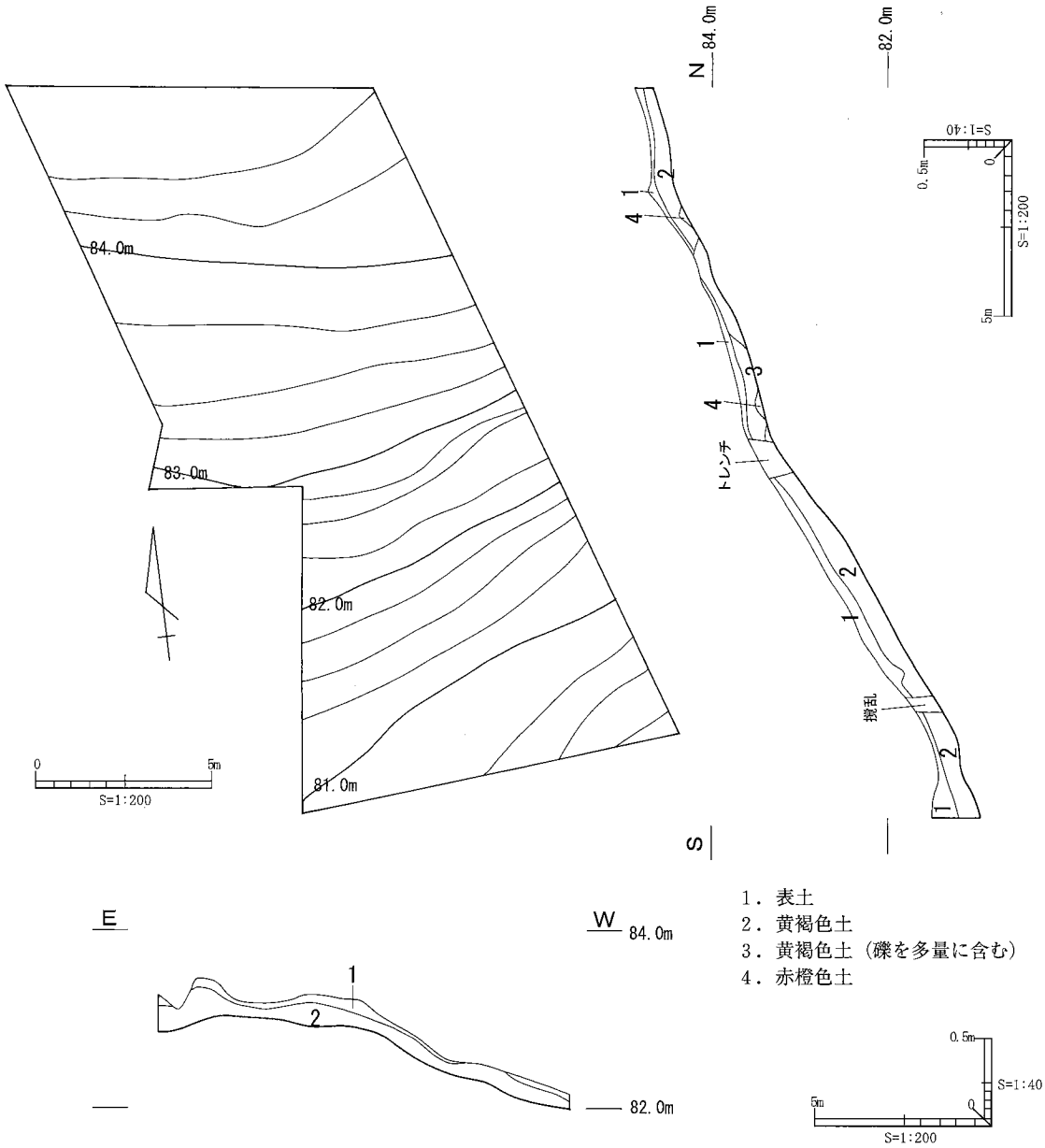
柳谷5号窯　全景写真

第２節　宮の池窯

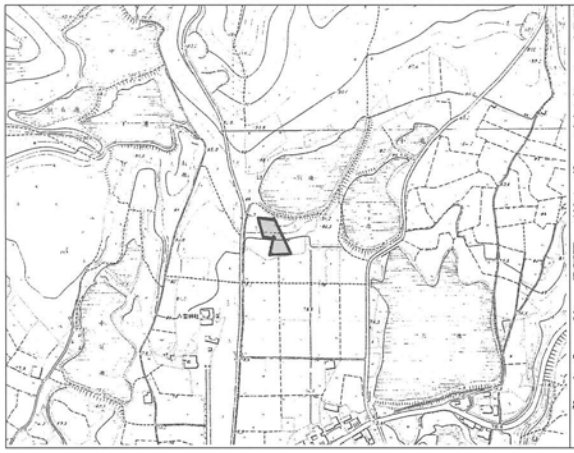
１．窯の立地と遺構の概要

調査地は宮の池の南堰堤下の標高81m～85mの緩斜面地である。表土層およびその直下の黄色土層から須恵質土器・土師質土器・瓦類が多量に出土したが、調査区内からは窯体および灰原は発見されなかった。また、ピットや土坑など集落址に関係する遺構も検出されていない。

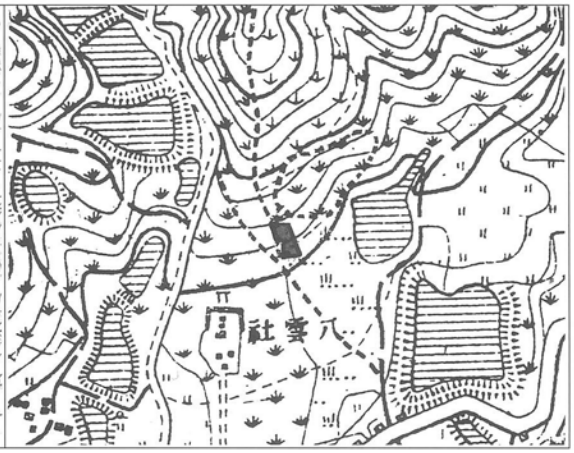
遺物を包含した黄色土層には灰・窯壁片などは含まれていなかったが、遺物の出土状況から窯跡以外に考えられない。明治20年の仮製２万分の１の地図では遺跡地周辺は南に張り出す丘陵尾根の末端部となっており、現在の宮の池は存在していない。従って、宮の池はこの丘陵斜面をカットして東南側に堰堤を設けて築造された新池で、窯本体は池築造の際に破壊されたと思われる。構築場所は、今回の調査区内には灰の堆積層が認められないことから、調査区よりもやや上方の斜面にあったと推定される。



挿図20　宮の池窯　地形測量図・土層断面図



挿図21　宮の池窯　調査位置図
（S＝1：10,000）



挿図22　宮の池窯周辺の旧地形（明治20年仮製地図）
（S＝1：10,000）

2．遺物

出土遺物量はコンテナ96箱を数える。瓦を除く土器類は、鉢・壺・甕を中心とした須恵質土器、小皿を中心とした土師質土器65箱で、後者のほうが圧倒的に多い。器種には、小皿・椀・鉢・甕があるが、小皿の量が圧倒的に多いのが特徴である。

〔土師質土器〕

小皿（第26図　*1～86・135*／第27図　*87～119*）

内面ナデ仕上げのとＩｂ類（*1～52・77～86・135*）と内面コテ状工具使用のⅡａ類（*53～76*）がある。個体数（残存率2/5以上）はＩｂ類が319点、Ⅱａが158点である。

Ｉｂ類の小皿には、*1～52*のような一般的なナデ仕上げのb_1形態のものが294点、体部外面を強くなでて口縁部を外反させるb_2形態のもの（*85・86・135*）が５点、底部が厚く体部の引出しが短いb_3形態のもの（*77～84*）が21点ある。また、*41～52*は内面中心部に直径２cm前後のリング形の窪み（遺物図版24参照）をもつものでｂ$_1$類小皿のうち32点に認められた。

椀（第27図　*120～131・133・134*）

本来は杯の形態であるが、分類の都合上、椀Ⅱｂに分類している。口縁部径は14cm～15cm、底部径は７cm前後、器高は４cm前後で、体部が直線的に立ち上がる。*131・133*のように径が大きく、口縁端部が巻き込むものもある。*134*は口縁端面が平坦である。底部の切離しは糸切りである。

托状皿〔第27図　*132・136～143*）

個体数が少なく、底部から口縁部まで全体を復元できるものはなかった。底部には糸切り痕を残す。*136～139*は２号窯の72のような椀形態になる可能性もある。

壺（第28図　*188～190*）

短く立ち上がる口頸部を有し、器高に対して底径が広く体部は俵形の扁平な形状を呈する。底部の切り離し手法は糸切りである。*191*は大型の底部片であるが、上部の形態は不明である。

〔須恵質土器〕

小皿（第27図）

須恵質の小皿は土師器の小皿に比べて圧倒的に量が少ない。Ｉａ類（*87～98*）とＩｂ$_1$類（*99～118*）、Ｉｂ$_2$類（*119*）がある。

椀（第28図　*144～181*）

椀Ⅰａ類に分類される。口径では口径11cm前後、器高４cm前後の小椀（*144～146*）と口径15cm～16cm、器高５cm～６cmの椀（*147～158*）の大小２種あるが、前者の出土点数は５点のみである。*156～158*は口縁端部を外反させる。底部は平高台を残すもの（*159～169*）と平高台を残さないもの（*170～179*）および輪高台を付すもの（*180・181*）がある。すべて糸切りである。

壺（第28図　*182～187*）

器高に対して底径が広く俵形の扁平な形状を呈し、底部の切り離し手法は糸切りである。口頸部の形態は短く立ち上がり外反するもの（*185*）と口径が小さく真っ直ぐに立ち上がるもの（*182*）がある。

硯（第28図　*191*）

いわゆる風字硯で、左硯尻のみの破片である。側縁は立ち上がりを有しない。脚は方形であるが、欠けて残存しない。脚の方向から前頭部がやや逆ハの字状の平面形態を想定している。

鉢（第29図　*192～211*）

口縁部を外反させるⅠａ類の鉢（*192～196*）、口縁端部の断面形が方形のⅠｂ類（*197・200*）、口縁内側端面を上方に小さく引出した口縁部の断面形が三角形状のⅡａ類（*203*）、口縁端部を上方に大きく引出し口縁部の断面形がくの字状のⅡｂ類の鉢（*198・199・201・202*）がある。底部はすべて糸切りで、*199・203*には高台が付く。

Ⅰａ類の鉢には、*192～194*のように口縁部を強く外反させ、口縁端部を下方に捻り出しているⅠａ形態のものと*195・196*のように外反の程度がゆるやかで口縁端部が平坦なものⅠａ’形態のもの（*195・196*）がある。また、Ⅰｂ類の*200*は口縁部が板状に肥厚するもので、２号窯出土の*95*と同じ形態の鉢である。

甕（第30図～第33図　*212～229*）

調査窯８基の中ではもっとも多数の個体が出土し、このうち、口縁部から底部まで接合できたのが３個体ある。口縁部の形態によって、口縁端部を丸く納める小型の甕Ａ（*212～216*）・口縁端面が平坦で断面が方形の甕Ｂ（*217～221*）・口縁部内面を強くなでて口縁断面が三角形の甕Ｃ（*222～228*）・甕Ｄ（*229*）の各種がある。

外面の叩きは体部下半が右下がりに、上半が右上がりに叩きを施す。頸部に叩きの痕跡を残すものもある。叩きは底面まで及んでいる。*220*は底面を丸く仕上げているが、*216*と*222*は底面を平らに仕上げている。内面は同心円のあて具痕をヘラ削りして消している。

〔**瓦**〕（第34図～第44図）

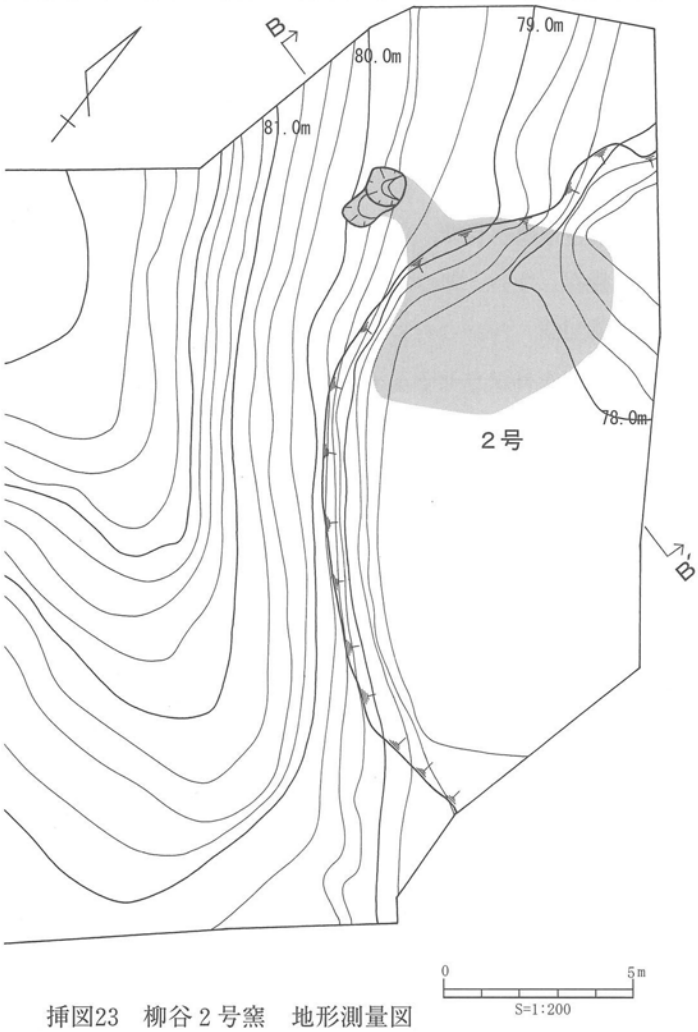
表土・包含層中から軒丸瓦16個体、軒平瓦32個体、丸瓦24.5個体、平瓦32.75個体、磚１個体、道具瓦３個体と多量の瓦が出土している。

第３節　柳谷２号窯

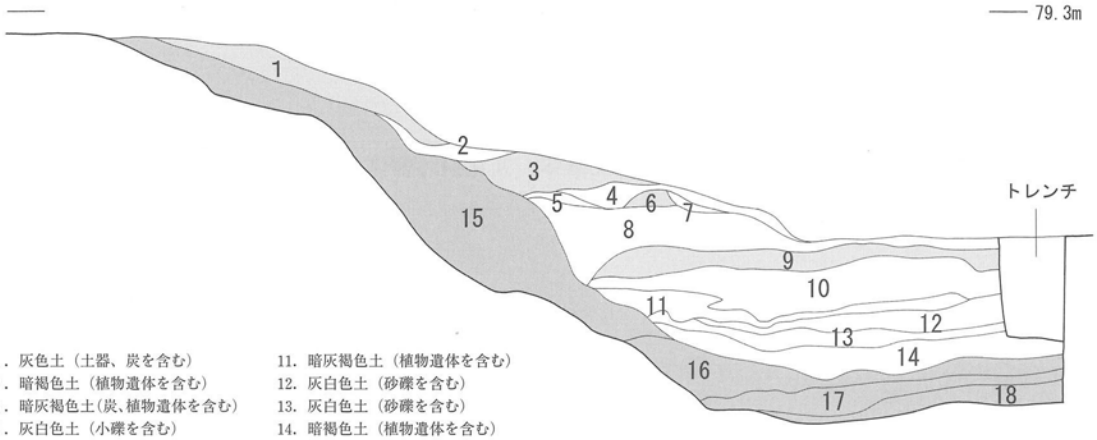
１．窯の立地と遺構の概要

大きくは柳谷と呼ばれる谷部に存在する。この谷は主に南に開析する谷で、現在は大部分が溜池として利用されており、主谷の上から順に皿池、洞池、中の池、下池、と続き、それに取りつく支谷には西に駐在池、東に八文池が存在する。２号窯はこのうちの下池の南東部にある長持池との間に位置している。柳谷はその内部ではさらに細かい隆起があるようで、下池と長持池との間には自然の高まりが存在しており、その傾斜面を利用して１号窯・２号窯が構築されている。２号窯はこの高まりの西向きの斜面を利用している。

窯体は失われており、灰原のみの検出にとどまった。灰原の平面形は扇状を呈しており、主軸方向である東西方向に7.3m、直交する南北幅は最大で7.5mを測る。灰原の厚さは下方にしたがって層厚を増し、最大で60cm程度の堆積がみられる。また、灰原上方の基部にあたる斜面裾部で土坑状の落ち込みが検出された。土坑の平面形は不整形ながら長円形を呈し、長さ２m、幅１mで底部は舟底状を呈する。内部には遺物と炭化物を含む灰層が堆積している。



挿図23　柳谷２号窯　地形測量図



1．灰色土（土器、炭を含む）
2．暗褐色土（植物遺体を含む）
3．暗灰褐色土(炭、植物遺体を含む)
4．灰白色土（小礫を含む）
5．灰白色土（砂礫を含む）
6．黒灰色土（炭を含む）
7．灰白色土
11．暗灰褐色土（植物遺体を含む）
12．灰白色土（砂礫を含む）
13．灰白色土（砂礫を含む）
14．暗褐色土（植物遺体を含む）
15．黒灰色土（土器、瓦、炭を含む）
16．暗灰色土（土器、瓦を含む）

挿図24　柳谷２号窯　灰原土層断面図　0　2m　S=1:40

2．遺物

〔土師質土器〕

小皿（第45図　*1*～*42*）

1～*16*・*18*～*28*はロクロナデ仕上げのⅠb$_1$形態の小皿である。*37*～*42*は口縁部が外反するⅠb$_2$形態の小皿である。

17・*29*～*36*はⅡb形態の小皿で、底部内面には体部と底部の境付近に削り風の螺旋状の段があり、ヘラもしくはコテ状工具による内面整形の際に轆轤回転によってできたものである。器壁は内面が直線的であるのに対して外面が膨らみをもつのが特徴である。（遺物図版39参照）

椀（第45図　*43*～*56*）

椀のⅡbに分類される。底部内面には、*43*・*44*・*46*・*51*がヘラ状もしくはコテ状工具、*45*は指押さえ、*48*はしぼり目のそれぞれの成形および調整痕を残す。*52*は底部内面に段をもつ。（遺物図版41参照）

托状皿（第46図　*57*～*75*）

朝顔形に開く体部をもつ。成形の際に両手で底部周囲を絞ったために、底部と体部の間は屈曲し、底部は高台状の形態を呈する。また、内面に段ができ、段の周囲には轆轤の回転方向と逆の絞り目状の皺を生じている（遺物図版40参照）。*70*・*71*は底部周囲の絞りが弱いために椀Ⅱbの杯形の形状を呈している。*72*・*73*の底部は平高台状の厚みがあり、体部の開きがあまりなく椀形の形状を呈している。

壺（第46図　*88*）

口径9.0cm、大きく外反する口頸部を有するが、体部を欠く。

〔須恵質土器〕

椀（第46図　*76*～*87*）

口径に対して底径の小さいⅠa類（*76*～*78*・*82*～*86*）と器高が低く底径の大きいⅡb類（*80*・*81*・*87*）がある。いずれも高台を消失している。Ⅰa類の体部は湾曲しながら的に外上方に開き、底部内面には成形時の小さな段を残す。

壺（第46図　*89*）

口径9.6cm。短い頸部から大きく外反する口縁を有するが、体部を欠く。

鉢（第47図　*91*～*99*）

Ⅰb形態の鉢（95）、Ⅱa形態の鉢（*91*・*93*・*97*）とⅡb形態の鉢（*92*）がある。底部の切離しは糸切りであるが、*94*のように糸切り後に、輪高台を付すものがある。

甕（第47図　*100*～*104*）

口縁端部を丸く納めるA形態のもの（*100*～*102*）とB形態のもの（*103*）、E形態のもの（*104*）がある。

〔白磁〕（第46図　*90*）

玉縁の碗である。横田・森田分類の白磁椀Ⅳ類にあたる。

〔瓦〕（第48図～第82図）

灰原などから軒丸瓦18個体、軒平瓦15個体、丸瓦49.2個体、平瓦51個体と多量の瓦が出土している。

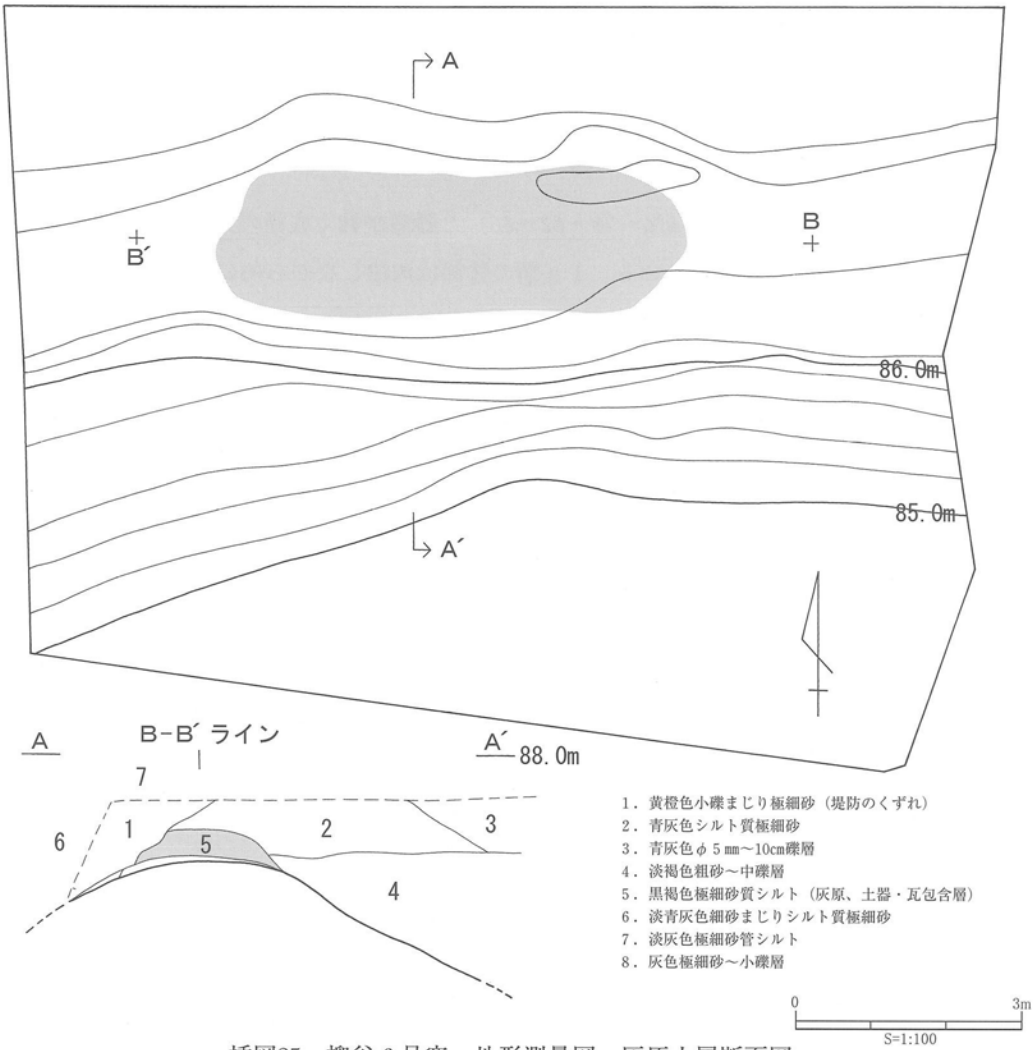
第４節　柳谷６号窯

１．窯の立地と遺構の概要

中の池の堤帯下で検出されたものである。位置は主谷である柳谷のほぼ中央部で、堤帯の最下部（天端から区3.5m下）にあたる。柳谷の支谷である、駐在池、八文池との取り付き部にあたり、最も窯の立地条件には適さない場所であると思われた。中の池改修の際に水抜きのために堤帯を断ち割った際に、最下部で検出されたことが調査の契機となった。

窯体と、灰原の大部分は溜池の開削によって消滅し灰原の一部みが残存しているにとどまり、範囲は堤帯下のみの非常に狭いものであった。傾斜は縦断方向でもほとんど高低差がないが、わずかに西に向かって傾斜している。

灰原は堤帯造成の際に南北両端を失っている。範囲は長軸方向である東西方向に基底部で6.8m、南北方向に2.6mである。黒褐色の極細砂混じりシルトは最も厚いところで45cmあり、多量の土器を包含している。現状では弧状に掘り残され、灰原直上層は堤帯の盛土となっている。土層は純粋な灰原の様相を呈しており、２次的な堆積とは考えられない。谷の中心部で検出されたたため、立地に理解しがたい点が多いが、堤帯が尾根を利用して造られることが多いことと、わずかに西に傾斜していることを考慮すれば東側の山塊からの尾根が６号窯付近まで西に伸びていたものと思われる。



挿図25　柳谷６号窯　地形測量図・灰原土層断面図

2．遺物

土師質土器の出土点数はわずかに3点で、他はすべて須恵質土器である。須恵質土器は発掘調査を実施した窯跡の中では最も高温で焼成されており、自然釉が発色しているものも多い。

〔土師質土器〕

小皿（第83図　*1*・*2*）

*1*は口径に対して底径が小さく体部下半を強くなでているために口縁部が肥厚している。本窯では土師質の小皿は*1*と*2*の2点だけである。

托状皿（第83図　*13*）

口径14.0cm、器高2.8cm、底径6.0cm。朝顔形に開く皿である。6号窯ではこの種の皿は本例1点のみである。

〔須恵質土器〕

小皿（第83図　3～12）

3・*7*・*11*・*12*は宮の池窯出土のⅡａタイプの土師質の小皿と同様のコテ状工具が内面にあたる。上記以外は土師器小皿のⅠb_1形態の小皿と同じく、体部は丸く内面はナデ仕上げである。

椀（第83図　*14*～*39*）

体部は直線的に立ち上がるⅠｂ類が多いが、*22*・*31*・*36*・*37*のような口径に対して底径の大きなⅡａ的要素をもつものもある。口縁は端部が肥厚するもの（*15*）や外反するもの（*17*・*19*）がある。底部の平高台は消失している。*39*は糸切り底に輪高台が付く。

鉢（第84図　*40*～*58*）

40～*42*・*47*～*49*は口縁端面が平坦なⅠｂ形態の鉢で、*48*・*49*は口縁外端部がわずかに突出する。*46*・*50*・*51*は口縁内側端面を上方に小さく引出したⅡａ形態の鉢であるが、口縁部外面を丸く仕上げる。*44*は口縁端部を丸く納めるⅢ類の鉢である。底部はすべて糸切りで*52*～*54*は平高台を有し、*58*は輪高台を付す。

甕（第85図　*59*～*70*）

Ａ形態の甕（*59*・*60*）とＢ形態の甕（*61*～*63*・*67*～*69*）とＣ形態の甕（*64*～*66*）がある。Ｃ形態の甕は口径40cm代の大型甕である。

壺（第85図　*72*～*75*）

口縁部が大きく開き、卵形の体部を有する。体部下半を欠くが、やや長胴で底部は5号窯出土の*68*のような糸切りの平底になろう。

〔瓦〕（第87図～第90図）

灰原などから軒丸瓦1個体、軒平瓦4個体、丸瓦2個体、平瓦2個体、鬼瓦1個体、道具瓦1個体と少量の瓦が出土している。

第５節　柳谷10号窯

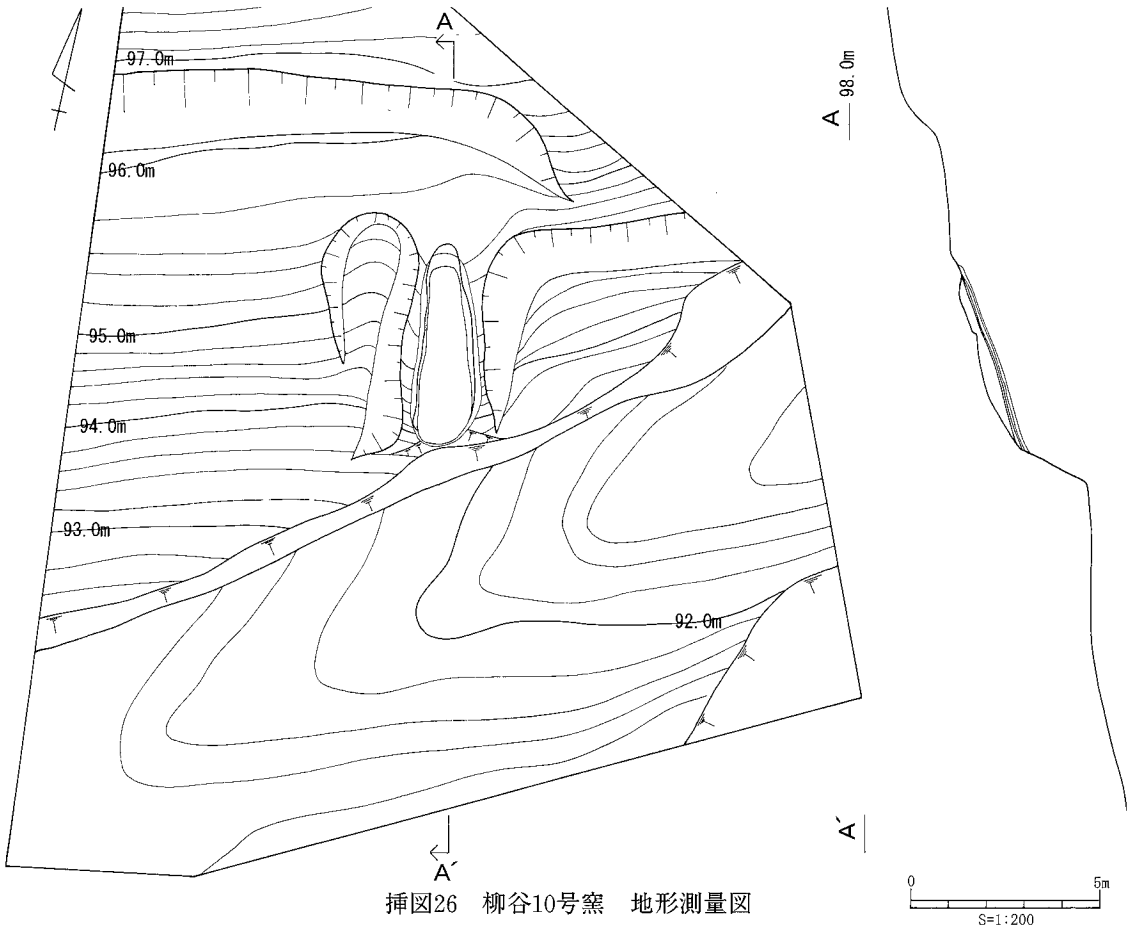
１．窯の構造と立地

柳谷10号窯は駐在池の北側の斜面に立地するが、窯体の燃焼部以下および灰原は削平されて残存していなかった。窯体は残存長5.54m、床幅は煙道部で0.82m、焼成部では1.42mを測り、窯壁の残存高は0.20m～0.38mであった。窯体の主軸方向はN13°Wであり、標高は94.2m（焼成部付近）、窯体の傾斜角度は焼成部中央で17°、焼成部先端で21°を測る。窯体内には瓦や須恵器の椀、土師質の杯などの破片が多数残存していた。焼成部の上方の床には瓦を横に並べて有階にした痕跡が残されていた。

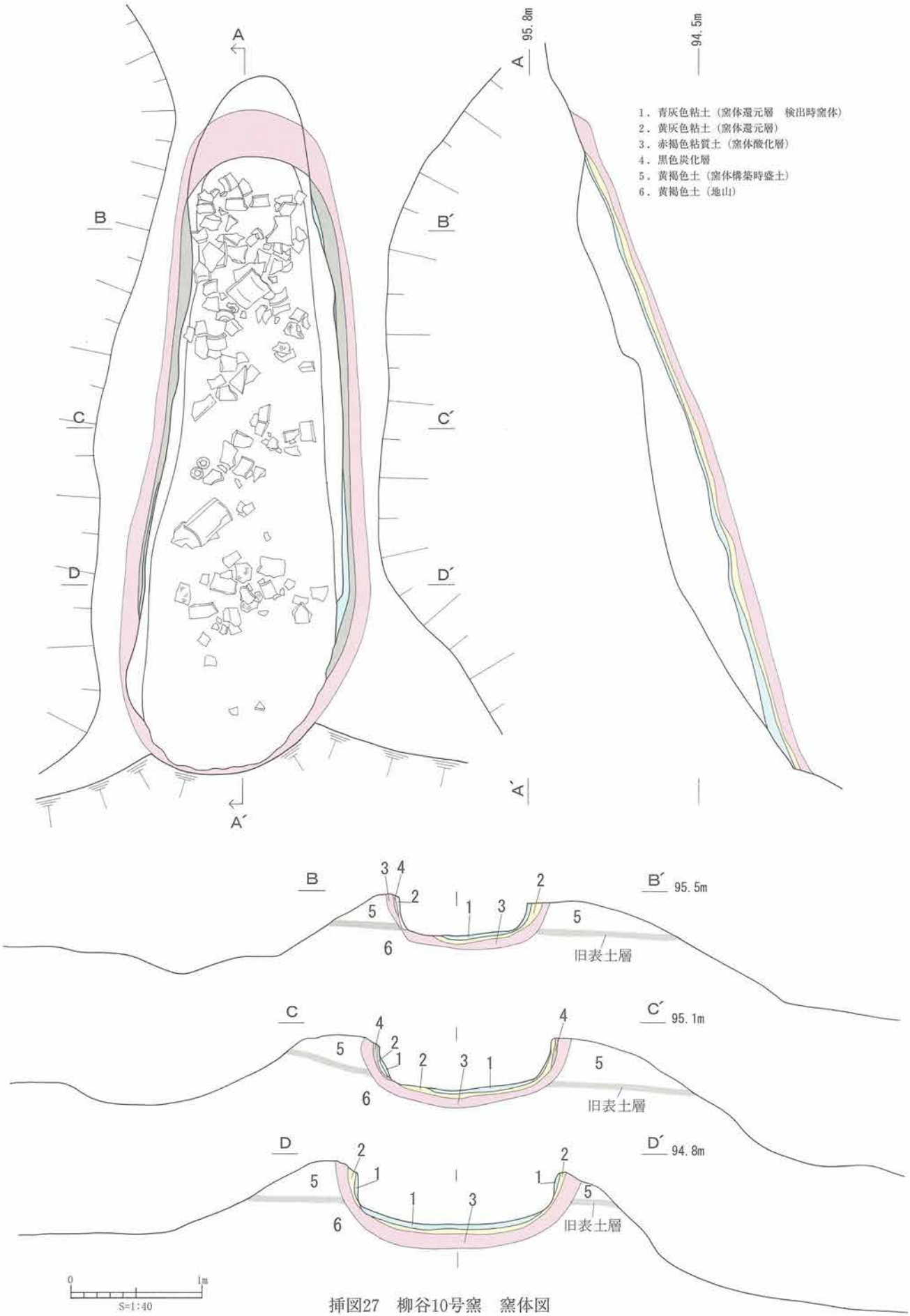
窯体周囲は、大きく掘削されている。まず、窯体先端部の斜面を東西方向にカットして、３m幅の平坦地を設けている。窯体左側（西）は窯体に沿って周溝状に掘り下げられいる。窯体右側（東）も大きく鍵の字形にカットされており、操業当時は掘り下げた土を前面の斜面に盛土をして平坦部を設けていたと思われる。窯体の左右からは多数の瓦を中心とした遺物が出土した。

本窯は窯体架構部を地上に大きくとる地上式の窯である。窯体は断ち割りの結果、側壁周囲の土は地山層ではなく、旧表土層の上に積まれた盛土層であることが判明した。地山層は10cm～20cm掘り込まれており、窯体周囲の盛土はこの掘削土の一部と窯体周囲の掘削土を利用したものと判断される。

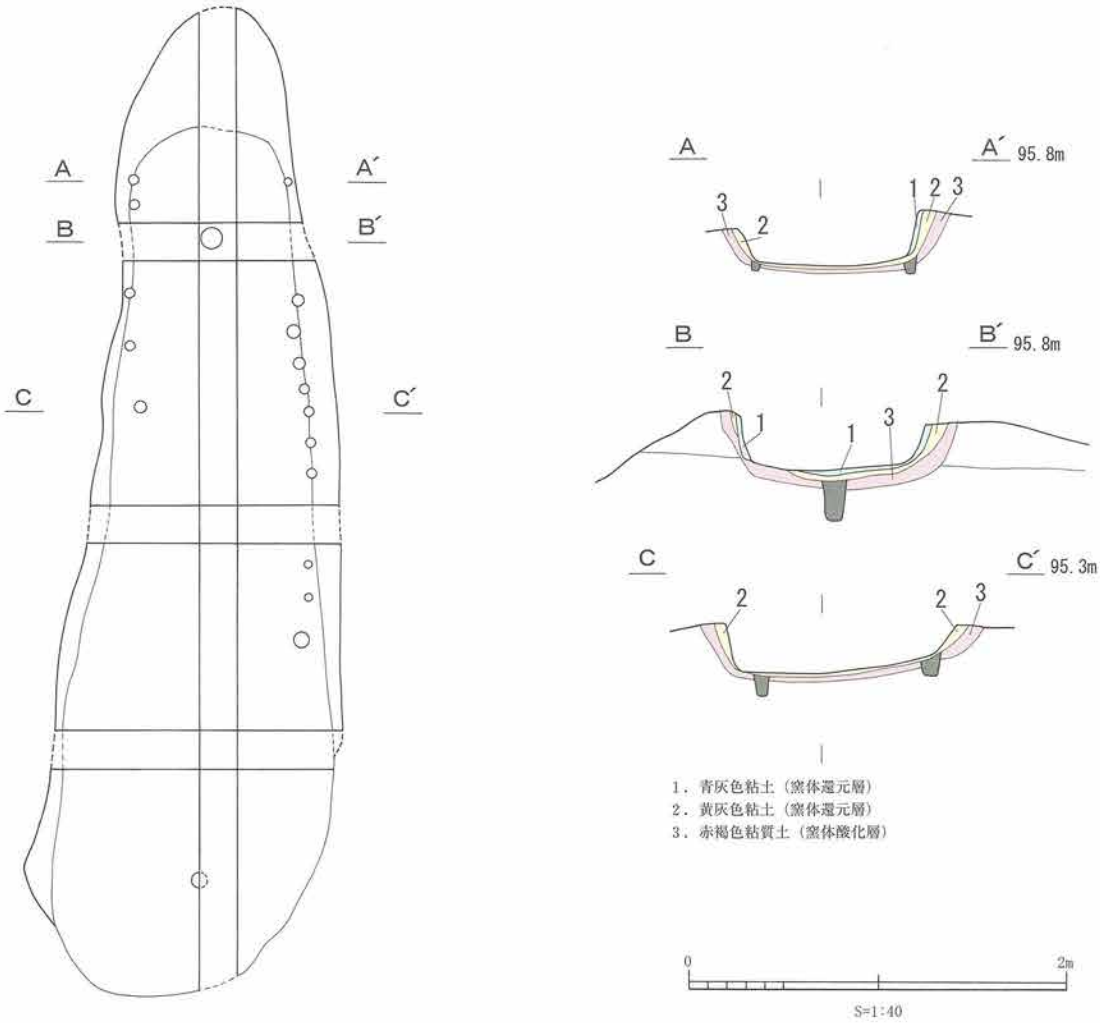
さらに、窯体床面および側壁をすべて剥ぎとったところ、挿図28で示したように、炭化材の詰まった径４cm～11cm、深さ４cm～16cmの小穴を左側壁に５個、右側壁に11個、焼成部の上位と下位にそれぞれ１個ずつ検出した。両側壁の穴は壁の支柱、焼成部の穴は天井部を支えた仮支柱であると推定されるが、断面図に示した通り、穴は床面の下から検出されており、構築法については検討を要する。



挿図26　柳谷10号窯　地形測量図



挿図27　柳谷10号窯　窯体図



挿図28　柳谷10号窯　窯体支柱痕検出位置図

2．遺物

〔土師質土器〕（第91図）

小皿のうち *1*・*2* は完形品で、内面ナデ仕上げのⅠb$_1$形態の小皿である。*3*・*4* は赤褐色を呈し、焼きが悪い。椀類は多数の破片が出土している。*5*・*9*・*11*・*14*のように底径が小さく器高が高い椀形のⅡa類のものと *6* のように底径が大きく器高が低い杯形のⅡb類のものがあるが、破片では区別がつきにくいものが多い。

〔須恵質土器〕（第91・92図）

椀（*17*～*34*）は大半がⅠa類であるが、*17*・*21*・*34*のようにⅡb類のものも存在する。底部はいずれも平高台を消失している。鉢（*35*・*36*）は口縁端部を上方に引き出すⅡb類の鉢である。体部内面と体部外面の底部周辺をヘラ削りする。*36*は底部糸切りである。甕はA形態の甕（*37*）、B形態の甕（*38*・*40*・*41*）、C形態（*39*）の甕がある。

〔瓦〕（第93図～第113図）

窯体の床面や埋土などから軒丸瓦7個体、軒平瓦12個体、丸瓦13個体、平瓦50.5個体と多量の瓦が出土している。

第６節　柳谷15号窯

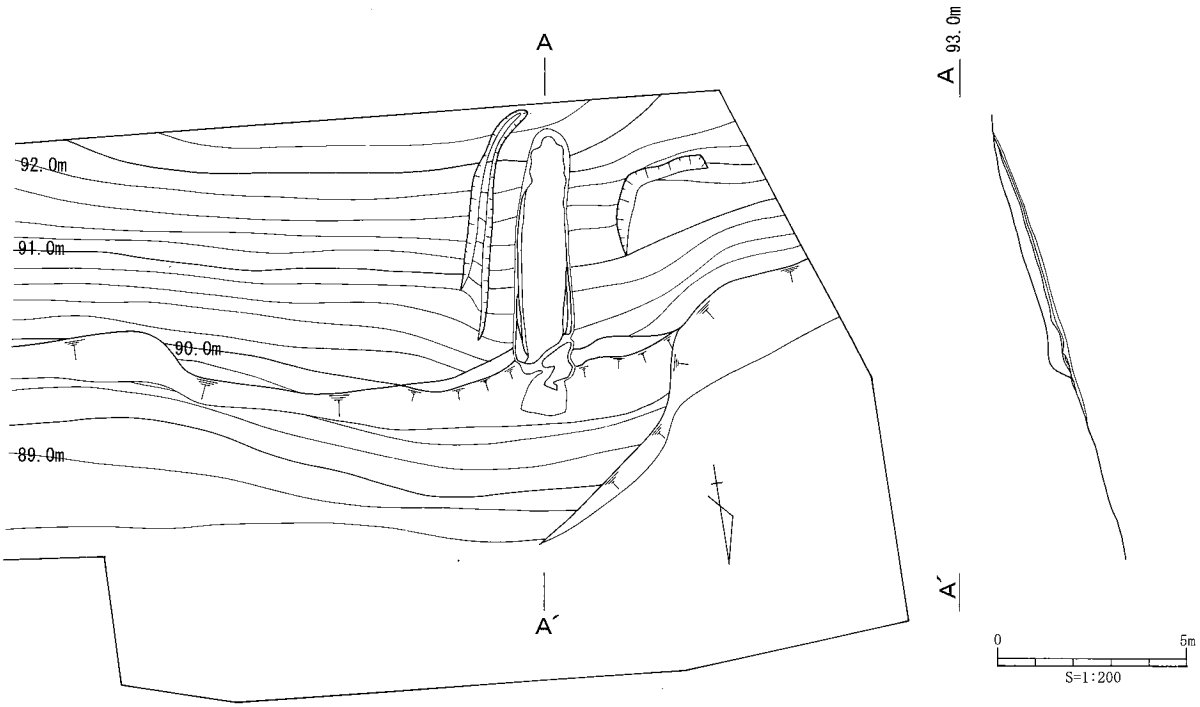
１．窯の構造と立地

池の築造工事や道路建設などによって窯体の焚口部の一部および灰原が消失していた。窯体は大きな修復が行われており、操業当初の窯体を第１次窯体、改修後の窯体を第２次窯体と呼ぶことにする。

第２次窯体は全長5.7m、床幅は窯体先端部で0.88m、焼成部で1.12m、燃焼部で1.0mを測る。焚口は幅が狭められており、右側壁が失われているので正確な数字ではないが、焚口幅は推定で0.7m～0.8mである。側壁の残存高は最も残りの良い燃焼部付近で0.35mである。傾斜角度は焼成部付近で16°、煙り出し付近で21°を測る。窯体内に遺存していた遺物は瓦が大半を占め、須恵器の椀・小皿・甕・鉢も少量含まれていた。瓦は破損品と思われるものを取り除くと、丸瓦および平瓦を横に並べた13段分の階が検出できた。燃焼部には、長さ0.8m、幅0.5mの方形の掘り込みが認められ、焼成部と燃焼部の間に段差を設けている。

第１次窯体の燃焼部は工事等によって削平を受けていたが、床面の一部と床面下の被熱層がかろうじて残存しており、その広がりから判断して、焚口は第２次窯体のそれよりも約1.5m手前に設けられている。すなわち、第２次窯体は、第１次窯体の焚口を約1.5m奥に移動している。第２次窯体の焚口は幅が狭められており、焚口の移動によって生じる第２次窯体と第１次窯体のすき間に黄色土を充填している。また、第１次窯体の改修は燃焼部のように明瞭な痕跡が残されているわけではないが、第２次窯体の焼成部は窯体のＢ－Ｂ’ライン（挿図30）を境にして、床幅と主軸が変化しており、Ｂ－Ｂ’ラインより先は第２次窯体構築時の延長部分となる可能性がある。この場合、第１次窯体と第２次窯体の全長はともに６m前後になる。

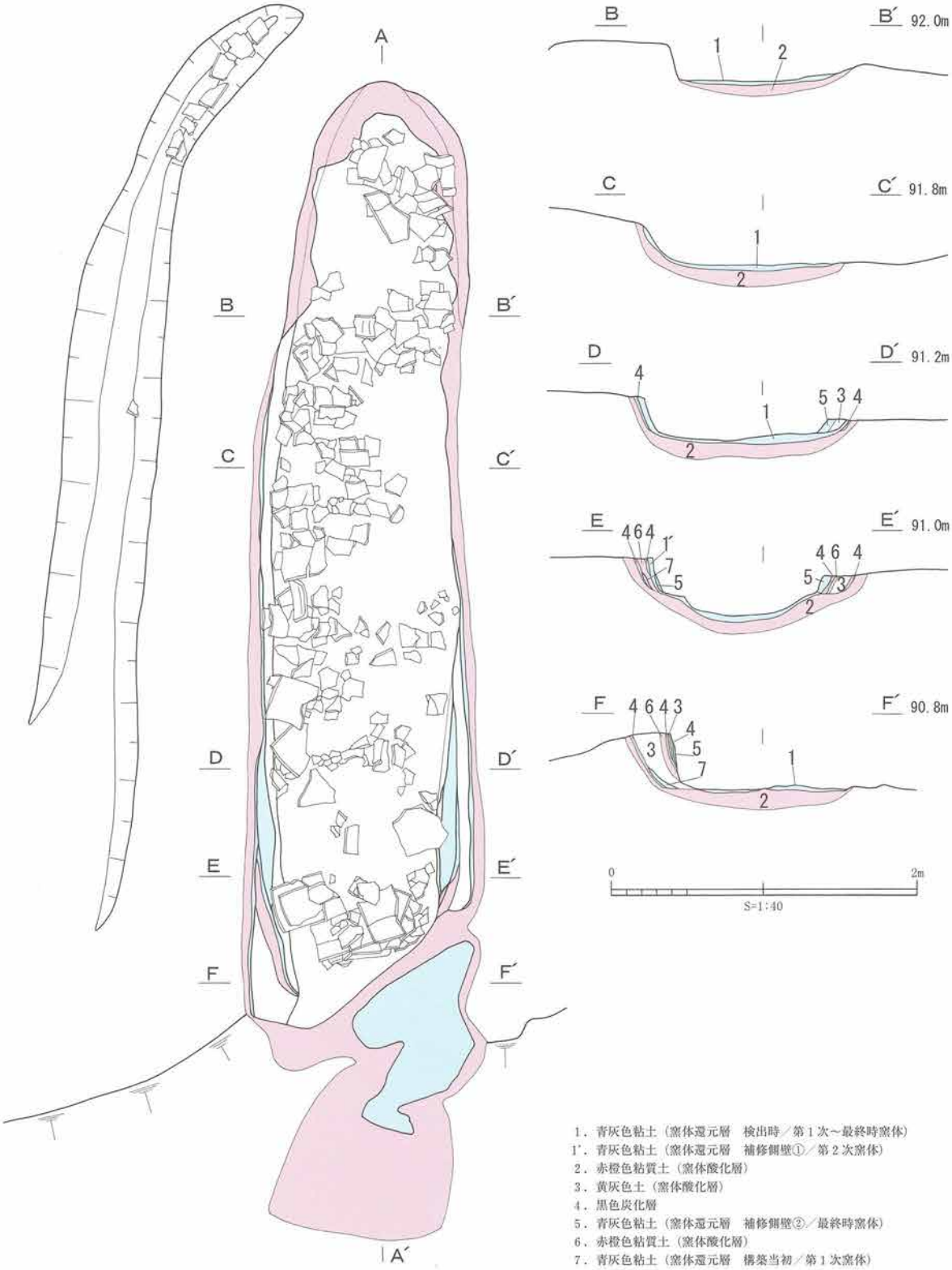
窯体周囲には、窯体の東側では幅0.32m～0.62mの溝が掘削され、先端部付近には平瓦が７枚並べられていた。窯体西側には東西およそ３m、南北およそ1.5mの平坦地が広がっている。



挿図29　柳谷15号窯　地形測量図

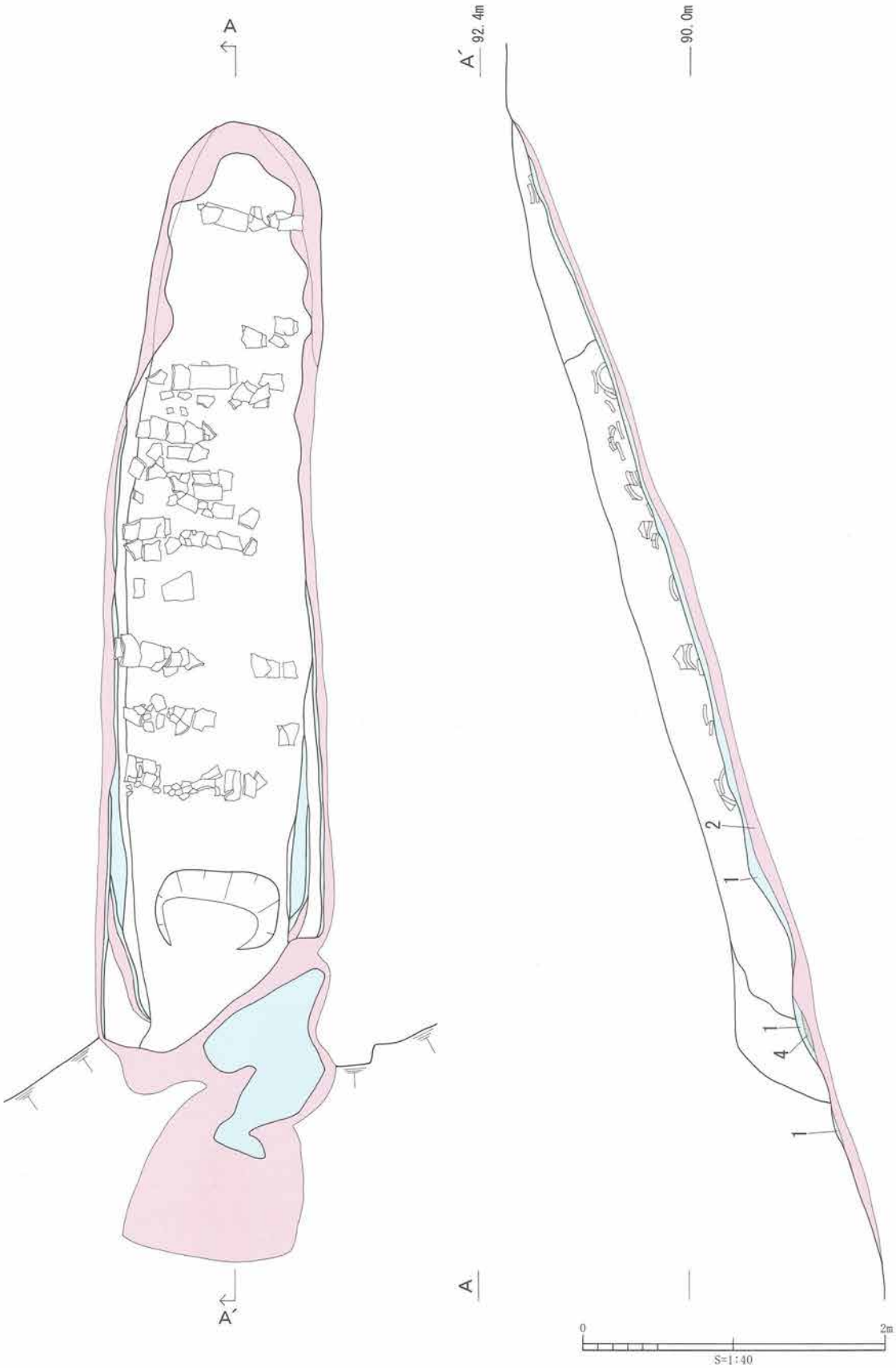
2．遺物（第117図～149図）

出土土器はすべて須恵質である。椀は口縁部近くで内湾気味に立ち上がるＩａ類のもの（*1・2・6*）と体部が直線的に立ち上がるＩｂ類のもの（*4・5・7～9*）があり、底部は高台を消失している。



挿図30　柳谷15号窯　窯体図（遺物出土状況）

鉢（*19*）は口縁端部が断面方形のＩｂ類の鉢で、底部に布目痕を残す。甕（*20*）は口縁端部が丸いＡ形態の甕である。瓦は軒丸瓦12個体、軒平瓦３個体、丸瓦15個体、平瓦15.5個体出土している。



挿図31　柳谷15号窯　窯体図（瓦列有段状況）

第７節　柳谷８号窯

１．窯の立地と遺構の概要

中の池の東岸付近に所在する。分布調査の際に瓦・土器片が集中して散布していたため、調査を実施した。重機と人力による調査を実施したが、窯体や明確な灰原を検出することは出来なかったが、ブロック状に散在する黒褐色シルト塊を確認した。これらは、灰原の残骸であると考えられ、ごく近い場所でかつて窯が存在したことが想定出来るが、正確な位置・構造は不明である。

２．遺物

〔**土器**〕（第114図）

小皿には土師質のものと須恵質土器のものがあるが、いずれもＩｂ$_1$類である。椀（*4*～*23*）は*4*がⅡａ類のほかは大半が体部が直線的に立ち上がるＩｂ類である。いずれも高台を消失している。鉢（*24*～*26*）は断面が方形に近いＩｂ類である。甕（*27*・*28*）は体部片のみで口縁部片の出土はない。

〔**瓦**〕（第115図・116図）

灰原などから軒丸瓦１個体、軒平瓦４個体、丸瓦2.75個体、平瓦１個体と少量の瓦が出土している。

第８節　柳谷７号窯

１．窯の立地と遺構の概要

中の池の西部で検出された。分布調査の際に瓦・土器片を採集したため、調査を実施した。池の上方斜面は大きく開墾され平坦地が出現しており、下方も池の開削によって抉り取られていたが、わずかに池岸と開墾との間に３ｍ程度の自然地形が残されていた。この部分の表土を除去したところ、窯体の一部が確認された。窯体そのものは失われていたが、床面下部の酸化して赤化した部分が検出された。赤化面の規模は窯体の主軸方向と考えらる東西方向で2.15ｍ、直交方向に0.95ｍを測る。検出された傾斜角度は、28°とやや急傾斜で、主軸方向はＥ30°Ｎである。標高91.2～92.3ｍで測る。

２．遺物

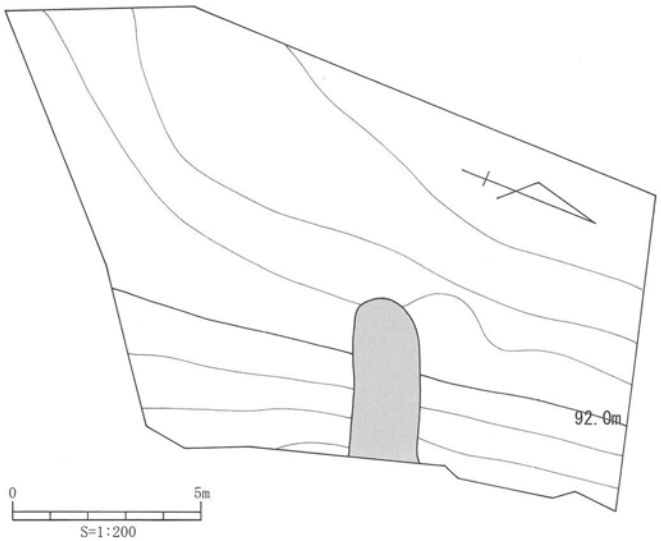
〔**土器**〕（第150図）

すべて須恵質土器である。小皿*1*は内面にコテ状工具のあたりがあるⅡａ類である。

椀（*3*～*23*）は底径が広く器高が低いⅡｂが大半を占める。鉢（*24*・*25*）はⅡａ類で口縁外面面を丸く仕上げている。甕（*26*）は外面の叩きの溝が深いのが特徴である。

〔**瓦**〕（第151図～153図）

池の中の流土などから軒丸瓦１個体、軒平瓦４個体、丸瓦１個体、平瓦２個体と少量の瓦が出土している。



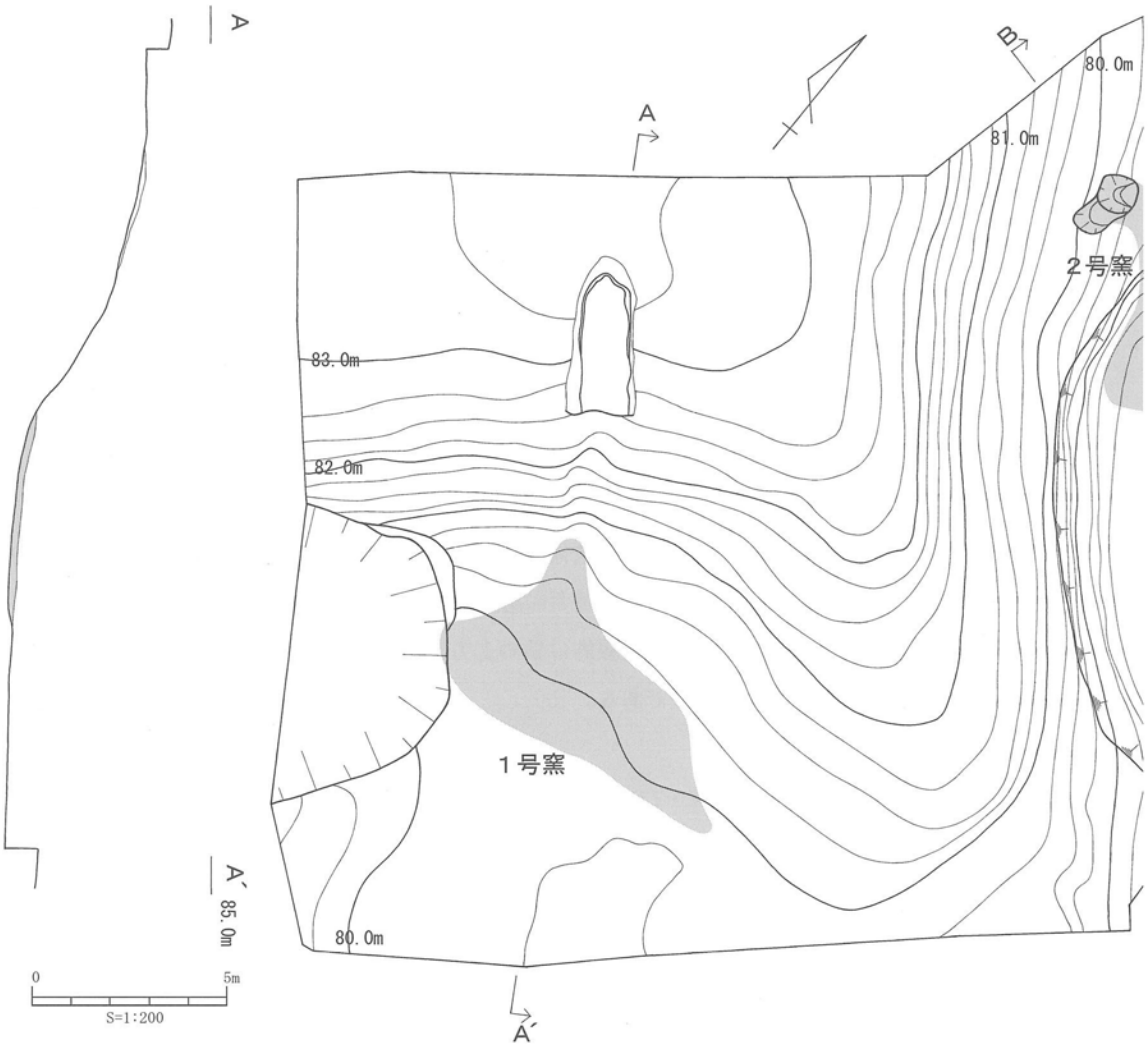
挿図32　柳谷７号窯　地形測量図

第９節　柳谷１号窯

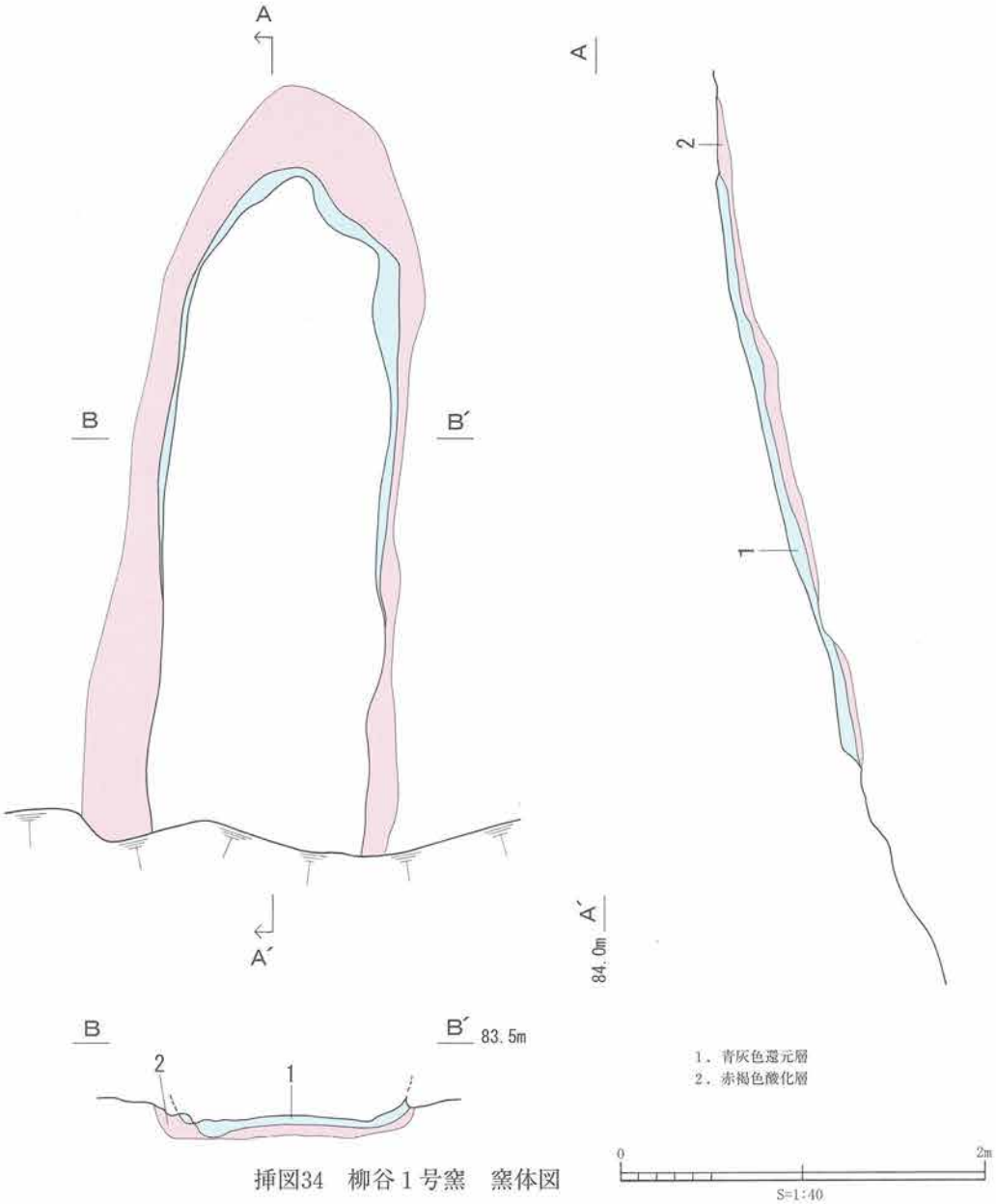
１．窯の構造と立地

２号窯と同じ高まりの南向きの斜面を利用している。窯体と灰原を検出したが、後世の地形改変を受けており遺存状態は不良である。窯体は燃焼部の床面にあたると考えられる、長さ3.3m程度を検出したのみで、上下両方ともに削平を受け残存していない。主軸の方向はＳ41°Ｅである。標高は82.6m～83.3mを測る。側壁は検出できなかったが、酸化して赤化した土層で、床面から、わずかに上方に屈曲する部分が検出されたことから、窯体の床面の幅は1.4m～1.5m程度であったと推測される。床面の傾斜角度は12°～13°である。床面の焼成度は概して悪く、還元ないし酸化状態にある層厚が薄いことから、操業期間は短期間であったと考えられる。

灰原は窯体の北西方向の標高80m～81m付近で検出した。平面形はいびつな扇状を呈し、窯体主軸方向に5.5m、横断方向に６mを測る。層厚は非常に薄く、最大で20cm程度であり大部分の灰原は流出しているものと考えられる。



挿図33　柳谷１号窯　地形測量図



挿図34　柳谷１号窯　窯体図

２．遺物

椀（第154図　*1～10*）

すべて須恵質土器である。底部から口縁部まで全体を復元できるものがほとんどないが、器高が高い椀Ⅰ類の一群と器高が低い椀Ⅱ類の一群がある。前者の形態を有するものには*4*があるが、底径の大きさから判断して*5*も該当しよう。体部はほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる。後者の一群には*4*～*6*がある。器高は低く、器壁は厚手で作りも雑である。

鉢（第154図　*11～21*）

すべて須恵質土器である。Ⅱａ類の*14*・*15*、Ⅱｂ類の*11～13*、Ⅲ類の*16*がある。底部はすべて糸切りで、*20*のようにわずかに高台を残すものもある。*21*は糸切り底に輪高台を付す。

壺・甕（第155図　*23～32*）

壺（*23～32*）は大きく外反する口縁部を有し、体部は長胴形である。底部は糸切りである。甕（*25～32*）は全てＡ類の小型甕で、頸部に叩きの痕跡を残す。

〔**瓦**〕（第156図～160図）

灰原などから軒平瓦１個体、丸瓦３個体、平瓦４個体と少量の瓦が出土している。

第5章　考　　察

第1節　久留美窯跡群の窯構造の特徴

このたび調査を実施した久留美窯跡群および、跡部窯跡群の報告により、加古川流域の美嚢川周辺に分布する奈良時代の窯跡の調査は6基、平安時代後期の窯跡の調査は、昭和63年に久留美古窯跡群埋蔵文化財調査会が行った毛谷支群の5基[1]を加え14基を数えることとなった。以下毛谷支群および、加古川流域で調査が行われた窯跡の調査成果もあわせて久留美窯跡群の窯構造の特徴について若干の記述をすすめていきたい。

奈良時代の窯跡

久留美および、跡部窯跡群の奈良時代の窯跡の調査については6基が行われたが、窯体の損壊あるいは、調査範囲の制約のため、窯体全体の調査が行われたものはなく、ほぼ全体の調査成果がえられた久留美12号窯でも、排煙部は調査範囲外であり、焚口部は工事用道路によって削平された状態であった。その他については、久留美14号窯および、跡部4号窯では燃焼部以下が削平されており、西ノ谷窯では燃焼部から焼成部にかけての範囲を、久留美11・13号窯ではわずかに焚口部を調査したに過ぎない状況であった。このため限られた調査成果では、窯の床面の平面プランは円筒形を呈すること、床面の傾斜角度は比較的緩やかな燃焼・焼成部から煙道部へは傾斜が急になる傾斜変換点をもつことなどの特徴が挙げられる。さらに、久留美14号窯をのぞく5基については、地山を掘り込んでつくられた半地下式の構造をもつ窖窯であったことがいえる。これはこの時代の窯構造として特徴的にみられるものであり、加古川流域では白沢3号窯（加古川市[2]）、吉馬32号窯、同15－Ⅰ・Ⅱ号窯（加東郡社町[3]）で調査が行われている。ただひとつ久留美14号窯は、出土した遺物から対面する斜面に立地する久留美11～13号窯と操業時期が近いと考えられるが、地山の掘り込みが浅く地上式ともいえる窯構造をもつ特異な例として挙げられる。地上式の構造をもつものはこれまで加古川流域では、平安時代前期頃の窯跡から出現するものと考えられていたが、今回の久留美14号窯の調査成果によって奈良時代まで遡る可能性を考慮する資料がえられたということになる。しかし、久留美14号窯は掘り込みの浅い半地下式の窯構造である可能性は高く、半地下式から地上式へと移り変わる過渡的な半地上式とでも呼ぶべき窯構造であったと考えられる。また、久留美11号・12号窯では燃焼部に長軸約1.2～1.8m、短軸約0.8～1.0m程の楕円形を呈する、いわゆる舟底状ピットが確認されている。この舟底状ピットについては、加古川流域では白沢および、志方窯跡群（加古川市）の奈良時代後期から平安時代前期の窯跡から類例がみられ[4]、その用途については床面を掘り込み、燃焼部に位置していることから、焼成部に並べる製品の搬入出時における作業スペースおよび、薪材などをより多く入れるための燃料スペースと考えられる。ただ久留美11号窯の土層断面をみるかぎり、底部に被熱の痕跡は認められず、操業当初は使用していた掘り込みが窯体の改修の度に埋められ、最終時には完全に機能していない状況である。このため、舟底状ピットについては、明確にその用途については判断を下しえない状況であり、今後より多くの類例を踏まえ更に検討する必要があるものと考えられる。

平安時代後期の窯跡

久留美窯跡群の平安時代後期の窯跡の調査については既述の通り、今回の調査で９基、毛谷支群の５基を加えるとあわせて14基の調査が行われたこととなった。しかし、そのうち窯体の調査が実施されたものをみるとわずかに７基（うち毛谷支群３基）であり、奈良時代の窯跡と同様、いずれの窯も一部が損壊しており、全体の構造がわかるものはない状況である。このため、それらの窯の類似する箇所あるいは、特徴的なものを取り上げ、同時代の加古川流域で調査が行われている他の窯跡と比較し、これらの窯構造の特徴をみていきたい。

久留美10・15・７・１号窯はすべて地上に窯が露出していたと思われる地上式の構造をもつものであるが、毛谷支群の３基については半地下式の窖窯であると報告されており、久留美窯跡群では、奈良時

奈良時代の窯跡

窯跡の名称	長さ	床幅			側壁の残存高	傾斜角度	焚口部の標高	窯の形態	備考
		焚口部	焼成部	煙道部					
西ノ谷窯跡	調査区内長 0.70北辺 1.75南辺	—	1.25	—	0.34～ 0.46	焼成部 13°	(71.4)	半地下式	主軸　N38°W 焼成部以上は調査範囲外┼燃焼室下・灰原は削平により消失
跡部 ４号窯跡	残存長 4.56	—	1.6	0.9	0.18～ 0.76	焼成部 30° 煙道部 38°	(91.2)	半地下式	主軸　N20°E 焼成部下半部以下および、灰原は削平により消失
柳谷 11号窯跡	調査区内長 第１次 3.10 最終時 3.30	第１次 (2.1) 最終時 1.68	—	—	0.16～ 0.32	燃焼部 18°	100.8	半地下式	主軸　N10°E 窯体の大部分が調査範囲外 舟底状ピット 径　1.87×0.96 深さ　0.28
柳谷 12号窯跡	調査区内長 第１次 5.88 最終時 5.88	第１次 2.5 最終時 2.18	1.7	1.4	0.20～ 0.52	燃焼部 25° 煙道部 41°	100.1	半地下式	主軸　N10°E 煙道部は調査範囲外 舟底状ピット 径　1.18×0.78 深さ　0.10
柳谷 13号窯跡	調査区内長 1.08	第１次 (1.7) 最終時 1.38	—	—	0.34～ 0.42	—	101.4	半地下式	主軸　N13°E 窯体の大部分が調査範囲外
柳谷 14号窯跡	残存長 3.50	—	1.0	0.6	0.02～ 0.24	28°	105.6	地上式か	主軸　N28°E 焚口下半部・灰原は削平により消失

平安時代後期の窯跡

柳谷 10号窯跡	残存長 5.54	—	1.42	0.82	0.20～ 0.38	焼成部 17° 煙道部 21°	(93.6)	地上式	主軸　N13°W 瓦陶兼業窯 床面に瓦を階段状に並べる 焚口部・灰原は削平により消失
柳谷 15号窯跡	調査区内長 第１次 (6.40) 第２次 6.50	第１次 (1.5) 第２次 (0.8)	第１次 (1.20) 第２次 1.12	第１次 (0.90) 第２次 0.88	0.20～ 0.34	焼成部 16° 煙道部 21°	90.0	地上式	主軸　N８°E 瓦陶兼業窯 床面に瓦を階段状に並べる 焚口下半部・灰原は削平により消失
柳谷 ７号窯跡	残存長 2.15	—	0.95	—	—	焼成部 28°	(91.0)	地上式か	主軸　E30°N 数値は酸化層のものを計測
柳谷 １号窯跡	残存長 4.10	—	(1.5)	—	0.02～ 0.10	燃焼部 13°	(82.2)	地上式	主軸　S41°E

第２表　久留美窯跡群および、跡部窯跡群の調査窯一覧表

代の窯構造の特徴をもつ一群とがこの時期には混在して操業していたようである。地上式の窯構造は、この時代の加古川流域および、広く播磨地域の窯に一般的にみられる形態であり、発掘調査が行われた志方窯跡群[5]あるいは、西播磨の相生窯跡群[6]でも確認されている。また、毛谷33－Ⅳ号窯をのぞき、窯体の調査が行われていない久留美５・２・６・８号窯、宮の池窯、現状保存されている毛谷Ⅰ・Ⅱ号窯では灰原より瓦が多数出土していることから、久留美10・15号窯、毛谷33－Ⅰ－Ⅱ号窯と同様に瓦陶兼業窯であった可能性が高く、久留美窯跡群のこの時期に構築された窯は瓦陶兼業窯が主流であったと考えられる。加古川流域のこの時代の窯跡では、瓦を焼成していた窯は確認されておらず[7]、久留美窯跡群は同じ三木市内に所在する平井・与呂木・宿原窯跡群を含め当時、都に瓦を大量に供給する官営的な窯跡群であったと考えられる。その中で、一時期古い段階の久留美５・６号窯より出土した瓦は本来の瓦作りの技法がみられるが、久留美２号窯以降、10・15号窯より出土した瓦はその製作技法から瓦製作工人が作ったものとは考えられず、瓦を横方向に段状に並べた瓦窯の特徴を有する10・15号窯では、須恵器および、土師器工人による土器製作集団によって瓦が製作されている。このため、久留美10・15号窯については、窯の構築時にも土器製作集団による手法が少なからず取り入れられていると考えられる。

最後に、改めて比較的残存状況が良好であった久留美10・15号窯における特徴的な構造を述べておきたい。久留美10号窯では、窯体側壁周囲を比較的浅く掘り込み、両側壁に掘り込んだ土を盛って窯を地上に構築している。さらに断ち割り調査において、床面の粘土をすべて剥ぎとったところ、直径４～11cmの小柱穴が18個確認されており、窯の側壁および、天井部構築における支柱痕であると考えられ、窯の構築過程を理解する資料がえられたといえる。柱穴は還元層の下から確認されており、支柱として火入れを行い、側壁や天井部を強固にしたのち、支柱穴部分に改めて粘土を貼り付けた状況が推定されるが、今後の資料の増加を待ってより具体的な構築状況が判明するものと考えられる。また、久留美15号窯では、窯の改修時に燃焼部を大幅に縮小すると同時に操業当初の窯をおよそ1.5m上方に大幅につくり替えた痕跡が残されていた。操業当初の窯を上方につくり替える改築状況は、毛谷33－Ⅰ号窯においても3.5m上方につくり替えられていたと報告されており、窯の改築状況での極めて類似する点である。また、窯体の補修では、操業当初の側壁の内側および、床面に新たに粘土を貼り付け、若干幅を縮小、床面を高くしながら、数度の補修を重ねている状況がみられる。

註

（1）『久留美毛谷』――古窯跡群等の発掘調査報告書――　毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会　1990年

（2）『白沢窯跡群』　兵庫県教育委員会　1998年

（3）『社・吉馬』――古窯跡群等の発掘調査報告書――　吉馬古窯跡群埋蔵文化財調査会　1990年

（4）前掲『白沢窯跡群』および、志方窯跡群において、燃焼部に舟底状ピットを有する窯跡の調査が行われている。志方窯跡群は白沢窯跡群同様、山陽自動車道建設に伴い兵庫県教育委員会が平成６～８年度に中谷支群４基、投松支群６基の発掘調査を実施している。それらのうち、白沢３号窯および、中谷３・４号窯、投松２・６・７号窯で舟底状ピットが確認されている。

（5）志方窯跡群では、中谷２・３号窯、投松３・５・６・７号窯が地上式あるいは、半地上式の窯構造をもつものであり、いずれも平安時代前期～中期に属している。

（6）相生市で調査が行われた平安時代に属する窯跡については、わずかながらも地山を掘り込んでいるものとほとんど掘り込みのないものがあるが、久留美窯跡群の地上式構造をもつ窯は、緑ケ丘落矢ケ谷２・４号窯、西後明41号窯と同様、前者に類似するものである。
『相生市・緑ケ丘窯址群』　兵庫県教育委員会　1986年

（7）札馬窯跡群（志方窯跡群の中谷支群の北西、新池に向けて開口する谷筋に分布する窯跡群）の平安時代前期～中期に操業していたとされる札馬47号窯で瓦が出土しているが、近接地域の寺院に供給したものと考えられ、それ以降には瓦の生産は行われていない。
『札馬古窯跡群発掘調査報告書』　加古川市教育委員会　1982年

第２節　出土土器の検討

１．奈良時代の遺物について

今回、発掘調査を実施した窯跡15基のうち、西ノ谷窯、跡部４号窯および柳谷11号窯～14号窯の計６基が８世紀代の窯跡[1]である。これらの窯跡について、杯類の法量分布の特徴および器種構成について述べ、あわせて年代の検討を行なっておくことにしたい。なお、法量分布図については、各窯とも加古川市白沢３号窯の法量分布をベースとした新座標軸を設定している。

西ノ谷窯

西ノ谷窯の遺物は窯体の燃焼部出土のものに限られているが、長頸壺が多数しているのも特徴の１つである。

杯Ｂの口径の分布領域は14.5cm～17.5cmであるが、調査窯６基のうちでもっとも口径が大きい。口径14.5cmの蓋が出土しているので、14cm以下の小型品が存在するのはほぼ確実である。器高は５cm以下で、器高の低い系統の杯Ｂが主体である。杯Ａは資料点数が２点しかないが、器高4.5cm以下、口径12.6cm～13.6cmで、底部が丸みをもつ。

杯Ａ・Ｂの法量分布は飛鳥Ｖ・平城宮Ｉ段階の加古川市白沢３・５号窯と同じ傾向を示している。遺物が窯体の一部からの出土に限られているため、必ずしも断定はできないが、本窯は杯Ａ・Ｂの法量分布や杯Ａの形態的特徴から判断して、飛鳥Ｖ・平城宮Ｉ段階前後の操業年代の窯と考えておきたい。

跡部４号窯

杯Ｂの口径の分布領域は13cm～17cmで西ノ谷窯と似た傾向を示すが、口径14cm以下の小型の一群の器高が５cm前後あり、径高指数が高い。杯Ａの口径の分布領域は10cm～14cm代であるが、12cm以下の小型品が一定量存在するのが特徴である。器高はすべて4.5cm以下である。

窯体のみの出土であり、資料点数が限られているので、年代的な位置づけについては難しいが、口縁に沈線を有し底部が平底の鉢27は、８世紀前後の窯に認められる古い形態を有しており、また、杯Ａ・Ｂの法量分布においては西ノ谷窯と11号窯・14号窯の中間に位置する様相を示しているので、西ノ谷窯に続く時期のものと考えておきたい。

11号窯～14号窯

11号窯～14号窯の杯類の法量分布の特徴を以下に述べる。

11号窯と12号窯では、杯Ｂの口径の分布領域は12cm～16.5cmで、西ノ谷窯の杯Ｂと比較すると口径の縮小化が認められる。口径14cm以下と14.1cm以上の大小の２群に分けると、14cm以下の小型の一群に器高4.5cm以上の径高指数の高いものが一定量認められ、口径14.1cm以上の口径の大きな一群は器高５cm以下の低い系統のものが主体であるが、12号窯に器高５cm以上のものが１点だけ存在する。杯Ａの口径は13cm～19cmで、分布領域が広いが、16cm～17cmの一群は底部ヘラ削りのＡｂ形態で、底部ヘラ切り不調整のＡａ類に限ると、口径は13cm～15cmの領域に収まる。器高は4.5cm以下の低い系統が主体である。

14号窯の杯Ｂについては、全体の法量を知りうるものはわずか５点しかない。挿図35に示したデーターでは、すべて口径が14cm以上であるが、口径14.1cmや14.4cmの蓋が存在していることから14cm以下の小型の杯Ｂも存在しているのは確実である。器高は５cm以下の低い系統の杯Ｂが主体であるが、器高５cm以上の高い杯Ｂも２点存在している。14号窯の杯Ａの口径の分布領域は14cm～16cmで、11号窯・12号窯よりも口径が拡大化している。器高は５cm以下の低い系統が主体である。

13号窯の杯Ｂは器高が５cm以上、口径15cm以上の第Ⅰ象限に分布する大型の一群と器高4.5cm以下、口径14cm以下の第Ⅲ象限に分布する小型の一群の大小２つの群に分離している。また、杯Ａの口径の分布領域は13.5cm～14.5cm、器高４cm以下である。

以上の通り、各窯の杯類の法量分布の比較を行うと、杯Ｂにおいては、11号窯と12号窯とは同じ傾向を示すが、13号窯とは異なる法量分布を示す。14号窯は資料点数が少ないので比較は難しいが、11号窯・12号窯と13号窯の中間的な様相を示す。杯Ａにおいても、11号窯と12号窯は同じ傾向を示すのに対して、13号窯はやや異なる傾向を示す。また、杯Ｂでは資料点数が少なく明確ではなかった14号窯の杯Ａは11号窯・12号窯とははっきり異なる分布傾向を示している。以上の点から11号窯～14号窯については、11号窯・12号窯と14号窯・13号窯の大きく２つのグループに分かれる。このうち、11号窯と12号窯については土層の堆積状況からは前後関係については明らかにできなかったが、12号窯と13号窯については、灰原の土層の堆積状況から、12号窯が13号窯に先行することが明らかであり、法量分布の違いは年代差を示しているものと判断できる。

続いて、11号窯～14号窯の年代について、器種の特徴および消長から検討を行う。

① 稜椀（杯Ｌ）が数多く生産され、そののほとんどはヘラ磨きが施されている。稜椀（杯Ｌ）は平城京では平城宮Ⅰ段階にはすでに出現していることが報告されている[3]が、播磨地方では、これまでのところ、平城宮Ⅱ段階の志方窯跡群中の西ノ池１号窯出土[4]例が初現資料である。西ノ池１号窯に続く上述の中谷４号窯の稜椀は多種の形態があり、生産量も多く、ヘラ磨きが行なわれている。現在整理中の平城宮Ⅴ～Ⅵ段階に想定している投松６号窯・同２号窯においては、稜椀の生産は行なわれてはいるが、外面のヘラ磨きは施されていない[5]。

② 鉢Ａはすべて尖底である。平城京では、鉢Ａの尖底化は平城宮Ⅲ段階に始まり、以降この形態が一般化することが指摘されている[6]。播磨においては、飛鳥Ⅴ・平城宮Ⅰ段階の白沢３・５号窯の鉢はすべて平底であるが、平城宮Ⅲ古段階の中谷４号窯は全て尖底である。平城宮Ⅴ～Ⅵ段階の投松６号窯では尖底ではなく丸底に近い形態となっている。

③ ⅢＡ・Ｂが存在し、そのほとんどにヘラ磨きが施されている。また、ⅢＣ・Ｄが存在する。ⅢＡ・Ｂは白沢３・５号窯では存在しないが、西ノ池１号窯では存在し、中谷４号窯では多数生産されており、そのほとんどにヘラ磨きが施されている。中谷４号窯ではⅢＣ・Ｄが多数生産されている。ⅢＢは投松６号窯でも生産されているが、ヘラ磨きは施されていない。

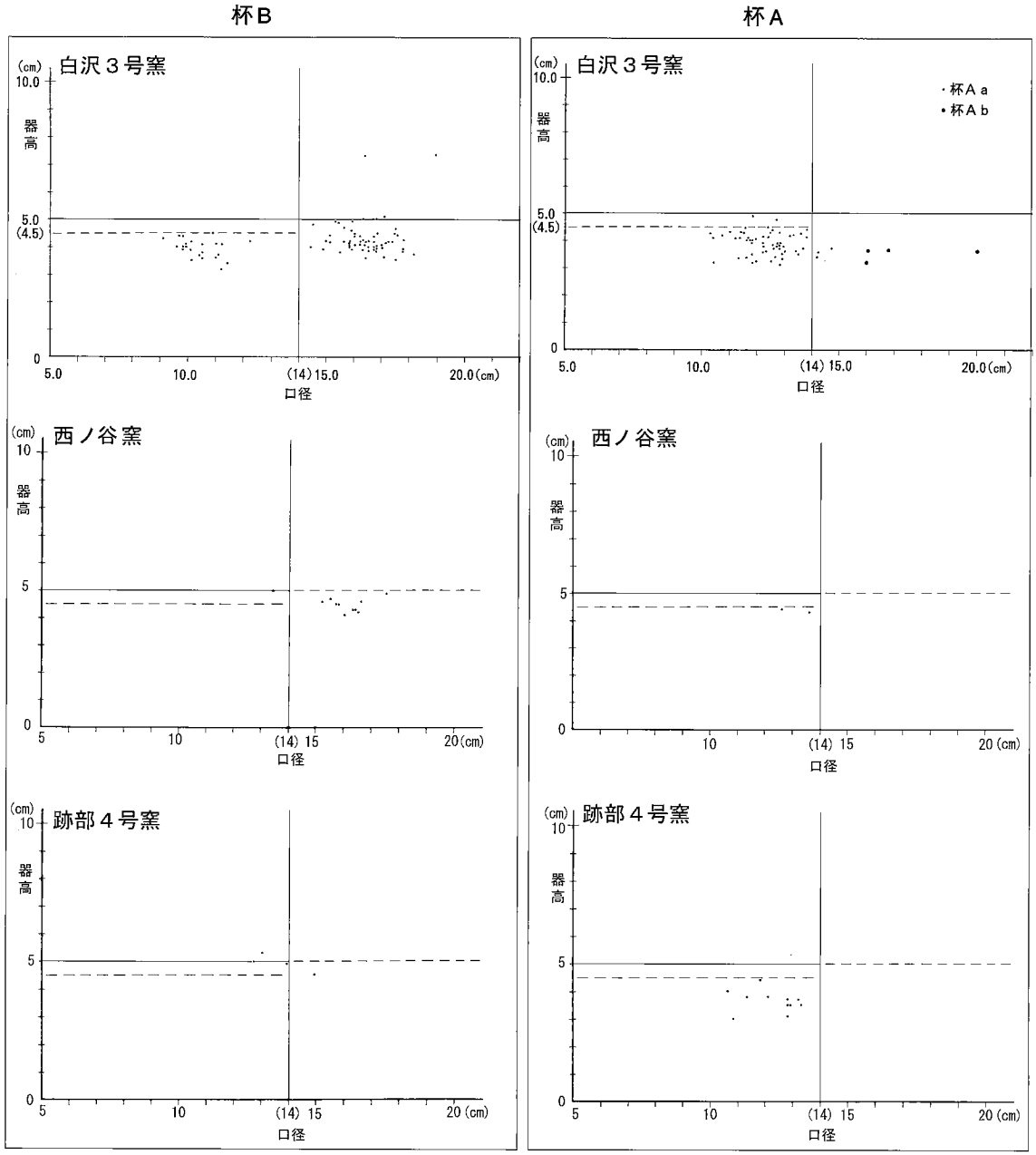
④ 長頸壺（壺Ｋ）が存在しない。長頸壺は平城京では平城宮Ⅳ段階まで存続するようであるが、播磨および摂津三田地方では、比較的早い段階で姿を消している。管見では平城宮Ⅲ段階の窯跡での出土は確認しているが、それ以降の窯跡での出土は確認していない。当該窯では、長頸壺と思しき器形には12号窯の*43*・*45*および11号窯～13号窯採集資料の*66*がある。

⑤ 杯Ｂの蓋は全て天井部が丸いｂ形態で、縁部が屈曲するａ形態のものはない。杯Ｂの蓋には縁部が屈曲するａ形態のものと天井部が丸いｂ形態があるが、平城宮Ⅲ古段階のＳＤ5100・5300・5310ではｂ形態のものがほとんどを占め、ａ形態が若干量みられるが、平城宮Ⅲ中段階の紫香楽宮跡の滋賀県宮町遺跡ではａ形態が増加することが指摘されている[7]。白沢・志方窯跡群では平城宮Ⅲ古段階の中谷４号窯まではすべてｂ形態である。中谷４号窯より後出の札馬２号窯では両形態が見られ、さらに札馬２号窯以降の窯ではすべてａ形態の蓋となるので、播磨では平城宮Ⅲ中段階から平城宮Ⅴ段階の間にｂ形態からａ形態に転換するものと思われる。

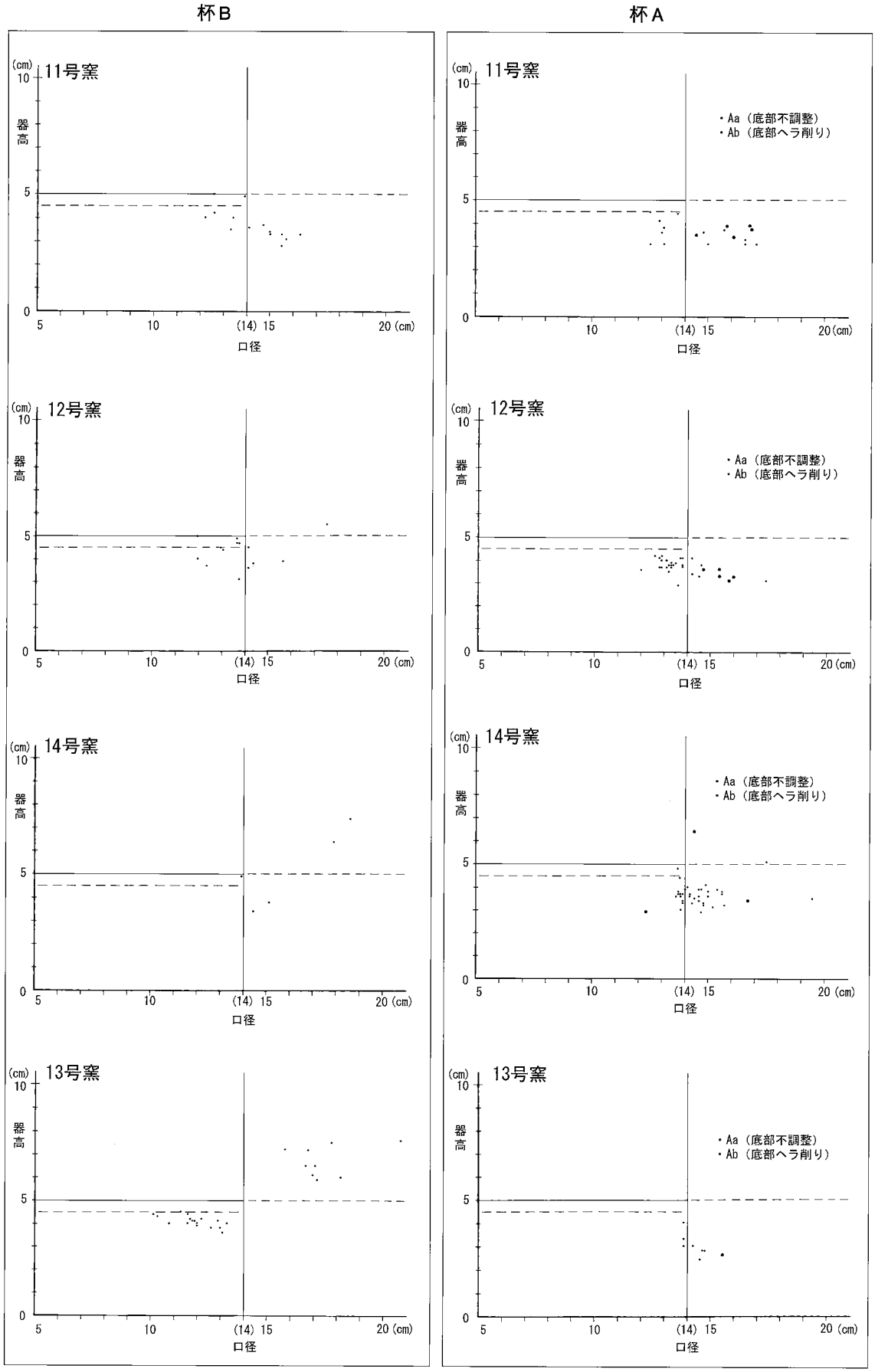
⑥　波状文をもつ甕が12号窯から出土している。波状文をもつ甕は平城宮Ⅱ段階の西ノ池１号窯、摂津三田市川端窯にある。平城宮Ⅲ段階古の中谷４号窯では波状文は消滅している。

⑦　古墳時代以来の有蓋の短頸壺は存在するが、底部に脚のつく壺Ａはない。

以上の通り、各窯ともに出土遺物量が限られていることや、11号窯～13号窯については３窯が並列しており、遺物の混在の可能性があることなどの問題点もあるが、杯Ａ・Ｂの法量分布からは11号窯と12号窯が先行し、13号窯と14号窯が続くものと思われる。また、年代については、口縁に波状文を残す甕の存在など古い要素を残すものもあるが、他の器種の消長や技法的特徴などから概ね平城宮Ⅲ段階からⅣ段階の年代の時間幅の中に収まるものと思われる。



挿図35　白沢３号窯・西ノ谷窯・跡部４号窯　杯Ａ・Ｂ法量分布図



挿図36　柳谷11号窯～14号窯　杯A・B法量分布図

3．7世紀～9世紀における須恵器生産の展開

久留美周辺における須恵器生産の開始は三木市鳥町において始まる。三木市鳥町の年ノ神1号墳の石室内から焼成に失敗した7世紀中頃の杯G類が多数出土[9]しており、未発見ではあるが、周辺に須恵器窯跡の存在を窺わせる。恐らく久留美周辺での須恵器生産はこの鳥町周辺に始まるものと思われ、西ノ谷窯は鳥町で誕生した窯が東に移動してきたものと思われる。鳥町窯（仮称）と西ノ谷窯にはやや年代差があるので、三木市大村・平田周辺にこの間を埋める窯跡が存在している可能性がある。生産窯は西ノ谷窯が存在する加佐地区からさらに久留美柳谷地区に構築場所が移り、9世紀前半代には久留美毛谷[10]地区に移る。久留美周辺では、11世紀末～12世紀はじめに瓦陶兼業窯として、生産が復活するが、今のところ、9世紀前半代～11世紀末の窯跡は発見されておらず、9世紀前半代に久留美周辺での生産は一旦終焉するものと考えている。

なお、柳谷11号窯～14号窯の製品の特徴は、杯類のほかに稜椀（杯L）・鉄鉢（鉢A）・皿A～皿D・円面硯などの特殊品の存在とこれらの器種の多くにヘラ磨きが施されていることや、精製の杯・皿に「大」や「下」などのヘラ描文字を有するものが数点以上出土していることである。同じ特徴をもつ製品を生産している窯跡として中谷4号窯（加古川市志方窯跡群）がある。中谷4号窯産の精製品は平城宮へ供給されていることが判明しているが、柳谷11号窯～14号窯の製品の供給先については不明である。

Ⅱ．平安時代の土器について

(1) 器種の特徴と分類

今回実施した発掘窯跡15基のうち、9基が平安時代後期の窯跡であり、平安後期の窯跡はすべて瓦陶兼業窯である。

当該窯跡群における平安時代後期の窯の操業形態の特徴は、同一の窯で還元焔焼成の須恵質土器とともに酸化焔焼成の土師質土器が生産されていることである。これは、瓦の生産に在地の須恵器工人と土師器工人が動員された結果と理解してよい。土師質土器の器種は椀・皿・杯類などの供膳具に限られるが、同じ供膳具形態の器種であっても、土師質土器と須恵質土器とでは形態が異なり、作り手の差が明瞭に表れている。

出土遺物には上記の通り、須恵器工人が製作した土器は還元焔焼成、土師器工人が製作した土器は酸化焔焼成されているのが基本的な形態ではあるが、互いの影響を受け、製品によっては、製作工人の区分が難しいものがある。特に時代が下る窯ほどその区分が難しくなっている。ここでは、調査窯の中で時代的に遡り、須恵質土器と土師質土器の形態的差が明瞭な5号窯・宮の池窯・2号窯の3窯の出土遺物を中心に仮分類を試み、第3表に示した。

このうち、須恵質土器については、窯の年代に関連して述べるので、ここでは土師質土器の概要について簡単に述べておきたい。土師質土器のうちでもっとも特徴的な器種は托状皿である。この托状皿は底部内面に段をもつもので、ロクロ成形の際、両手で底部周囲を絞ったために、底部と体部の間が屈曲し、外見上、底部が平高台状の形態を呈するものである。出土遺跡は、対中遺跡（三田市）・神出窯跡群（神戸市）など摂津西部から播磨地域を中心に出土しているが、和歌山市秋月遺跡からも出土している。また、相生市緑ヶ丘落矢ヶ谷1号窯・3号窯からも須恵質のものが出土している。

小皿は各窯から出土している。ナデによる整形（Ⅰ類）とコテ状工具による整形（Ⅱ類）がある。宮の池出土のⅠ類の小皿の内面中央部に径2cm前後のリング状の窪みをもつものがある。一見するとスタ

ンプのようにも見える。現代陶芸では底切れを防止するために意識的に同様のスタンプを押すことが行われているようである。当時このような意識があったかどうかはわからないので、その可能性も含めて再度検討したい。

供膳具分類表

器種	分類		技法・形態の特徴	
小皿	Ⅰ類	a	体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、体部と底部の境が明瞭である。深さがあり、須恵器の杯Aを小型化した形態。口縁端部が外反するものもある。	内外面ナデ仕上げ
		b_1	体部は斜め上方に低く立ち上がる。宮の池窯には、底部内面の中心部にリング状の窪みをもつものがある。	
		b_2	口縁部が外反する。	
		b_3	底部が厚く、体部の立ち上がりが短い	
	Ⅱ類	a	内面にヘラ若しくはコテ状の工具をあてて整形する。このため底部内面に螺旋状の削り風の痕跡と口縁端部内面に小さな段ができる。体部は彎曲し、器壁は薄い。	内面コテ状工具使用
		b	体部内面にヘラ状工具をあてて整形する。体部と底部の境にヘラ状工具跡が螺旋状	
椀	Ⅰ類	a	体部が湾曲して立ち上がる。平高台を残すものと消失しているものがある。	口径に対して底径が小さく、器高が高い。
		b	体部が直線的に立ち上がる。高台は消失している。	
	Ⅱ類	a	器高が高い。	口径に対して底径が大きい。
		b	器高が低く、須恵器の杯A的形態。但し底部は糸切り。	
托状皿			朝顔形に大きく開く体部をもち、底部と体部の間は屈曲し、底部は高台状の形状を呈する。	

貯蔵具分類表

器種	分類		技法・形態の特徴	
鉢	Ⅰ類	a	口縁部外反	口縁端部は外側に突出する。口縁端部は外側に突出せず、平坦に仕上げるもの（a'）もある。
		b	口縁端部は平坦に仕上げ、断面は方形である。	
	Ⅱ類	a	B形態の口縁の内側端面を上方に小さく引き出す。口縁端部の断面は三角形状。 口縁端部外面を丸くするもの（a'）もある。	
		b	口縁端部を上方に大きく引き出す。内傾するものもある。口縁端部の断面は三角形	
	Ⅲ類		口縁端部を丸く納める。	
甕	A		口縁端部を丸く納める小型の甕。肩の張るものとはらないものがある。	
	B		口縁端面が平坦で断面が方形。	
	C		口縁部内面を強くナデて口縁部断面が三角形。大型の甕。	
	D		その他	

第2表　平安時代の土器器種分類表

(2) 器種の変化と年代的位置付け

器形変化の過程がある程度認められるのが須恵器の椀と鉢であり、ここではこの2器種の形態的変化に着目して検討を加えておきたい。

当該期の調査9基のうちもっとも古く位置づけられるのが5号窯と宮の池窯である。両窯の椀と鉢に見られる先行的な要素としては、鉢に関しては外反する口縁と口径に対して器高の高いⅠa類の存在、椀Cに関しては平高台を残すⅠa類の一定量の存在が挙げられる。5号窯・宮の池窯に続く一群には、2号窯・15号窯・10号窯の一群があり、鉢のⅠa類が消滅し、椀CのⅠa類は糸による切り放しの位置の高さによっては底部が高台状に残るものもあるが、底部の平高台はほぼ消失する。

上記3窯に続く一群に6号窯・8号窯がある。椀Cの体部の湾曲がなくなり、体部が直線的になる椀Ⅰb形態に変化する。但し、6号窯の鉢については、口縁端部の形態が断面方形のⅠb類が主体であり、やや古い様相を呈している。また、7号窯と1号窯については、椀Cは器高が低く、底径の広いⅡ類、鉢はⅡbがそれぞれ主体である。調査窯の中では最も新しく位置づけられる。

以上、土器の形態的特徴から判断した構築順序は、5号窯・宮の池窯→2号窯・15号窯・10号窯→6号窯・8号窯→7号窯となる。一方、後節で池田征弘が示した瓦の分類では、柳谷2号窯・宮の池窯・8号窯・15号窯と柳谷6号窯・7号窯・10号窯の2つグループに分かれ、前者の方を古く位置づけている。基本的な順序は一致するが、宮の池窯と10号窯の位置づけに若干の齟齬がある。まず、宮の池窯と2号窯については、土器群においては宮の池窯が先行しているが、瓦笵の移動の点においては順序が逆転している。宮の池窯の土器群には前述の通り、5号窯の様相に近い一群と2号窯の様相に近い一群が混在している。宮の池窯は窯体・灰原とも存在せず、丘陵裾部の限られた範囲の黄色土中に多量の土器・瓦が包含されていた。従って、時期の相前後する2基の窯跡が存在している可能性も否定できないが、5号窯の土器群においても古い様相と新しい様相が認められるので、古い形態から新しい形態への過渡的な段階に位置する窯として考えれば、複数の窯の存在を考える必要がないのかもしれない。従って、今のところ、宮の池窯が2号窯よりわずかに先行して操業を開始したか、ほぼ同時に操業を開始し、同時操業期間内に瓦笵の移動が行なわれたと考えておきたい。

次に10号窯の問題に移る。瓦の検討結果では、10号窯については、同窯のみで出土している宝相華唐草文軒平瓦のＮＨ19類の同文品が法住寺殿（1156年造営）から多数出土していることから、12世紀第3四半期頃の操業年代が想定されているが、同じく同窯のみで出土している複弁八葉蓮華文軒丸瓦のＮＭ８類と単弁十六葉蓮華文軒丸瓦のＮＭ10類と同笵の瓦が保延２（1136）年造営の鳥羽離宮勝光明院、法金剛院で出土していることから1136年頃の年代まで遡る可能性も考えられている。前者の年代と後者の年代では20年前後の開きがあるが、10号窯の操業期間が20年に及んだということは窯体の状態から判断して、まずありえない。一方、須恵器に関しては、10号窯の椀Cの主体は体部が湾曲したⅠa類であり、椀の形態の点においては、Ⅰa類主体の15号窯との差は小さく、Ⅱ類主体の7号窯との差が大きい。須恵器椀Cの形態的な点においては、後者の1136年頃の操業年代を想定したい。但し、久留美窯跡群の須恵器の変遷についても今回初めて提示したところであり、厳密な検証を経ているわけではない。また、今回発掘した瓦陶兼業窯は、窯体と灰原がセットで完存しているものはなく、いずれか一方が削平を受けている。従って、限られた資料での判断であり、今後の検証結果では12世紀第3四半期頃の操業年代が妥当という結論に導かれる可能性もあり得る。なお、7号窯については、瓦の年代観とは矛盾しないので、瓦の年代を参考にして12世紀第3四半期頃と考えたい。

このほか、５号窯については瓦の出土点数が少ないことと瓦の出土が表土層や灰層の上位に限られいることから瓦の資料的評価は難しいとしている。従って、ここでは土器の形態を優先して、今回調査窯群の中最も古く位置づけておきたい。また、６号窯・８号窯・１号窯については瓦の出土点数が少なく、瓦の年代土器との比較検討は難しいが、６号窯・８号窯については15号窯と７号窯の間、１号窯については７号窯の前後の時期と考えて大過なかろう。

註

(1) 森内秀造・深江英憲「白沢３・５号窯」平成11年度報告書刊行予定

(2) 山陽自動車道に伴う発掘調査　現在整理事業実施中。平成12年度報告書刊行予定

(3) 『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』1991年　奈良国立文化財研究所

(4) 藤井祐介・高島信之・丹治康明他　『西ノ池古窯址群調査報告書』1979年

(5) 山陽自動車道に伴う発掘調査　現在整理事業実施中。

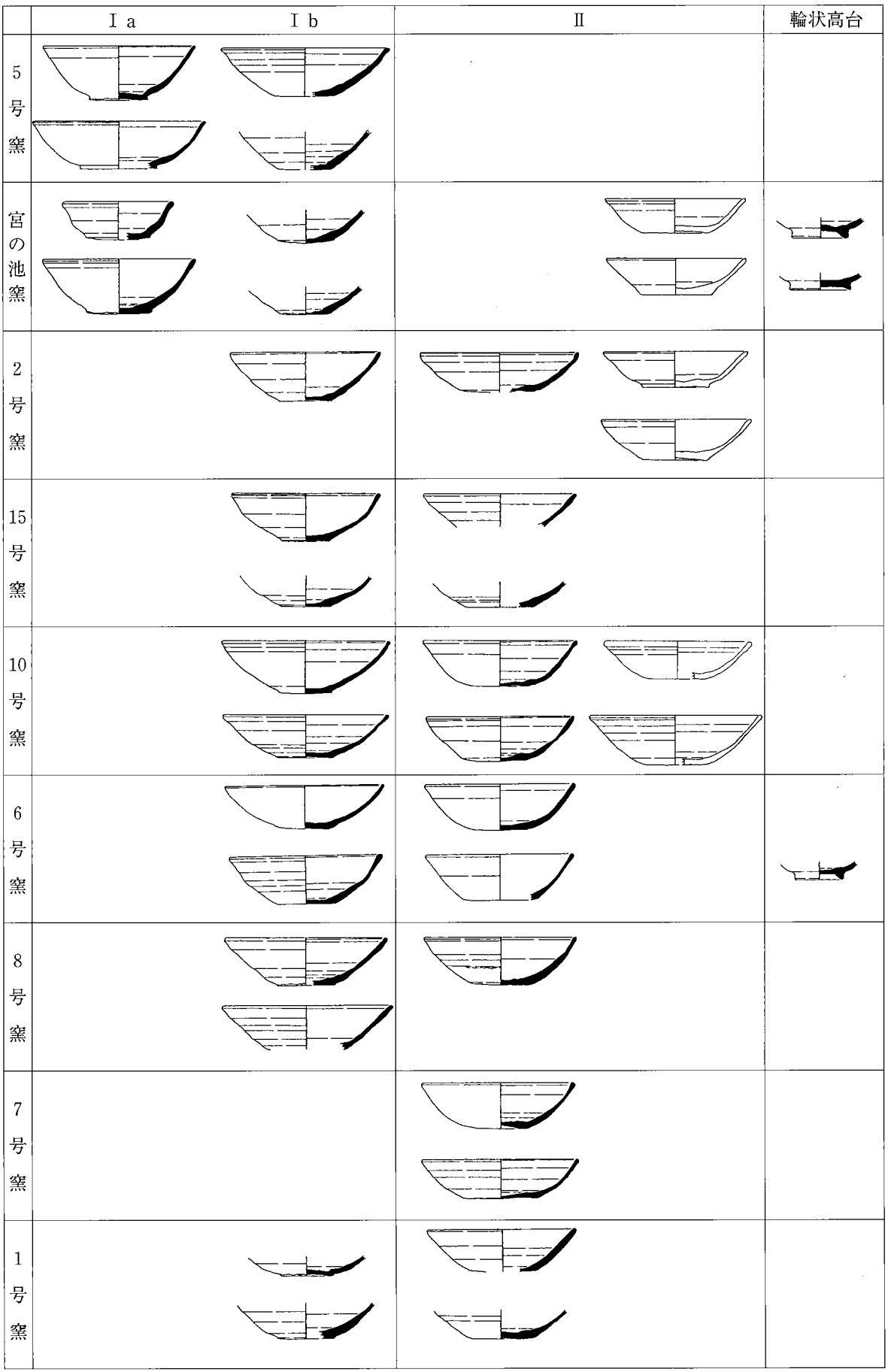
(6) 西弘海「平城宮の土器」『土器様式の成立とその背景』1986年

(7) 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995年　奈良国立文化財研究所

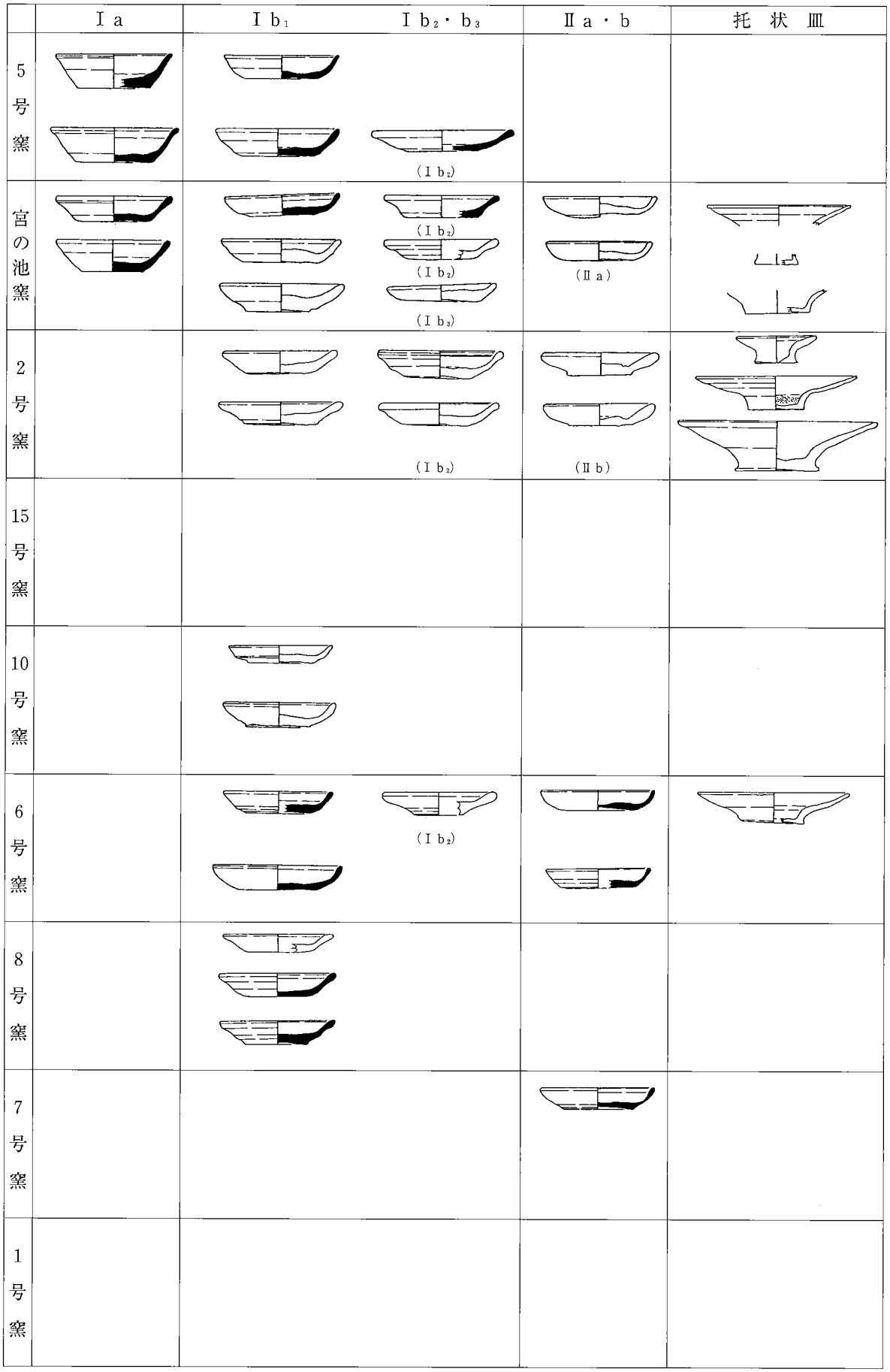
(8) 森内秀造「川端窯」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』1987年　兵庫県教育委員会

(9) 山陽自動車道に伴う発掘調査。未報告

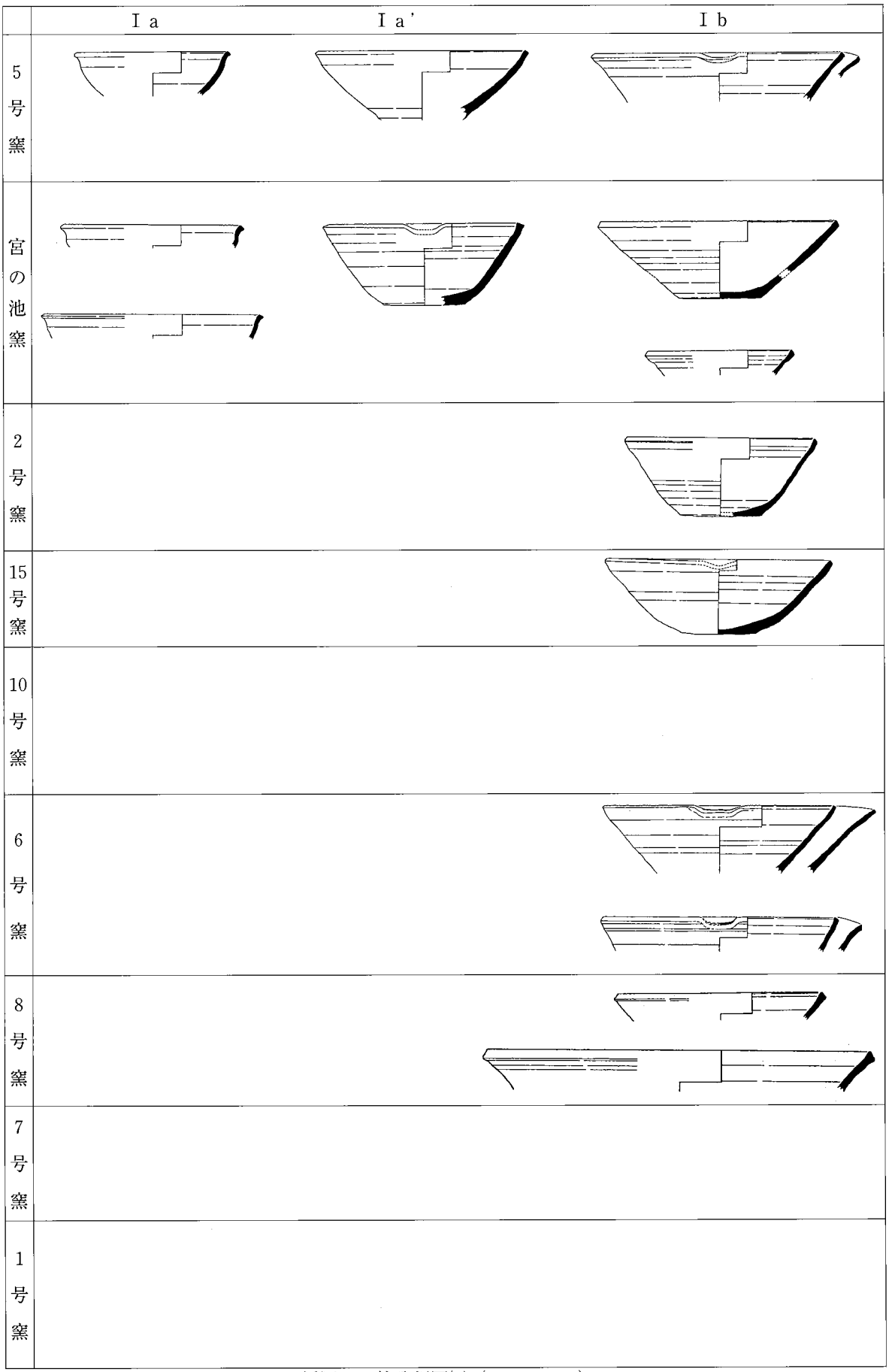
(10) 中村浩他『久留美毛谷』1990年



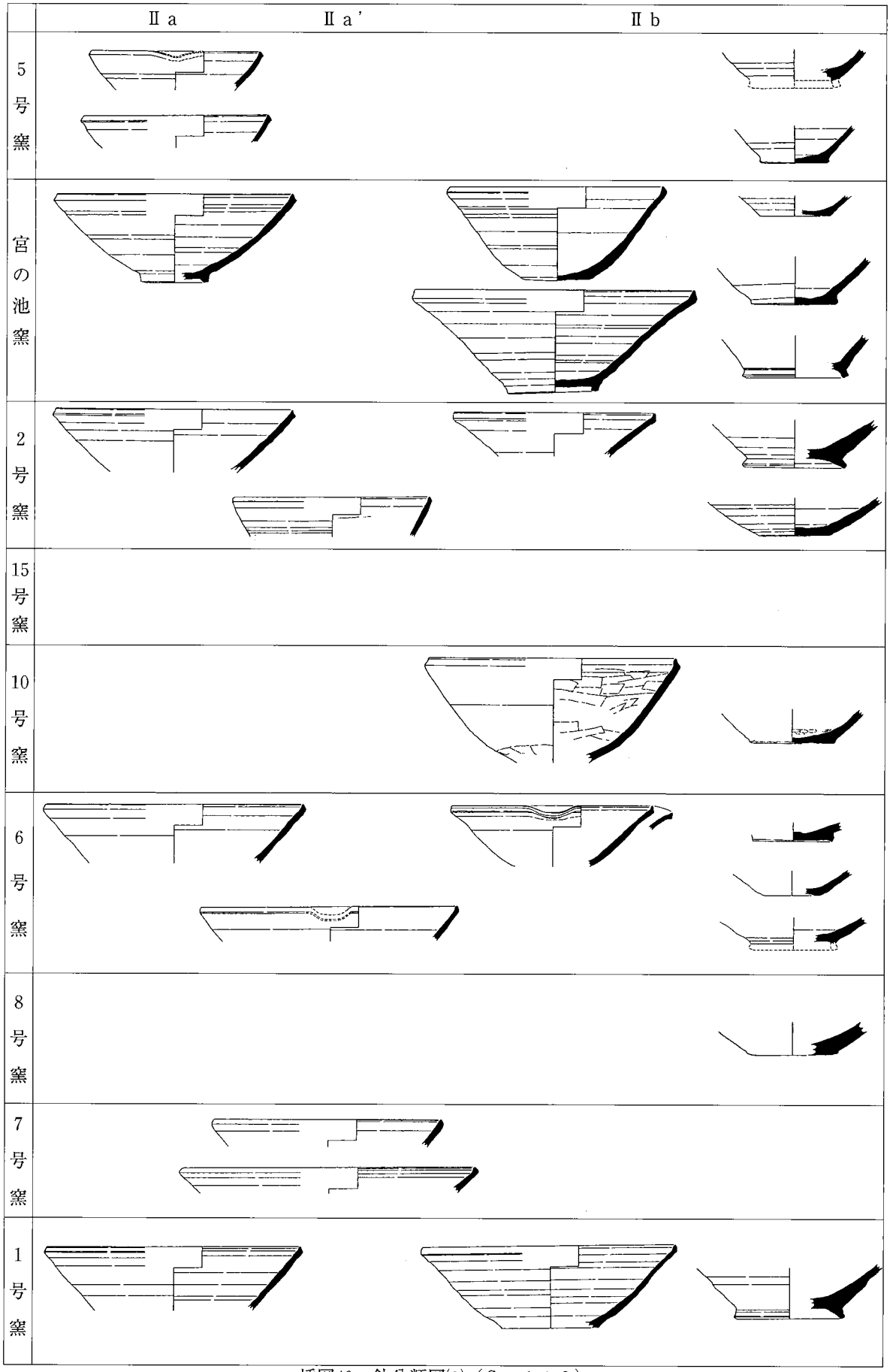
挿図37　椀・杯類分類図（S＝1：6）



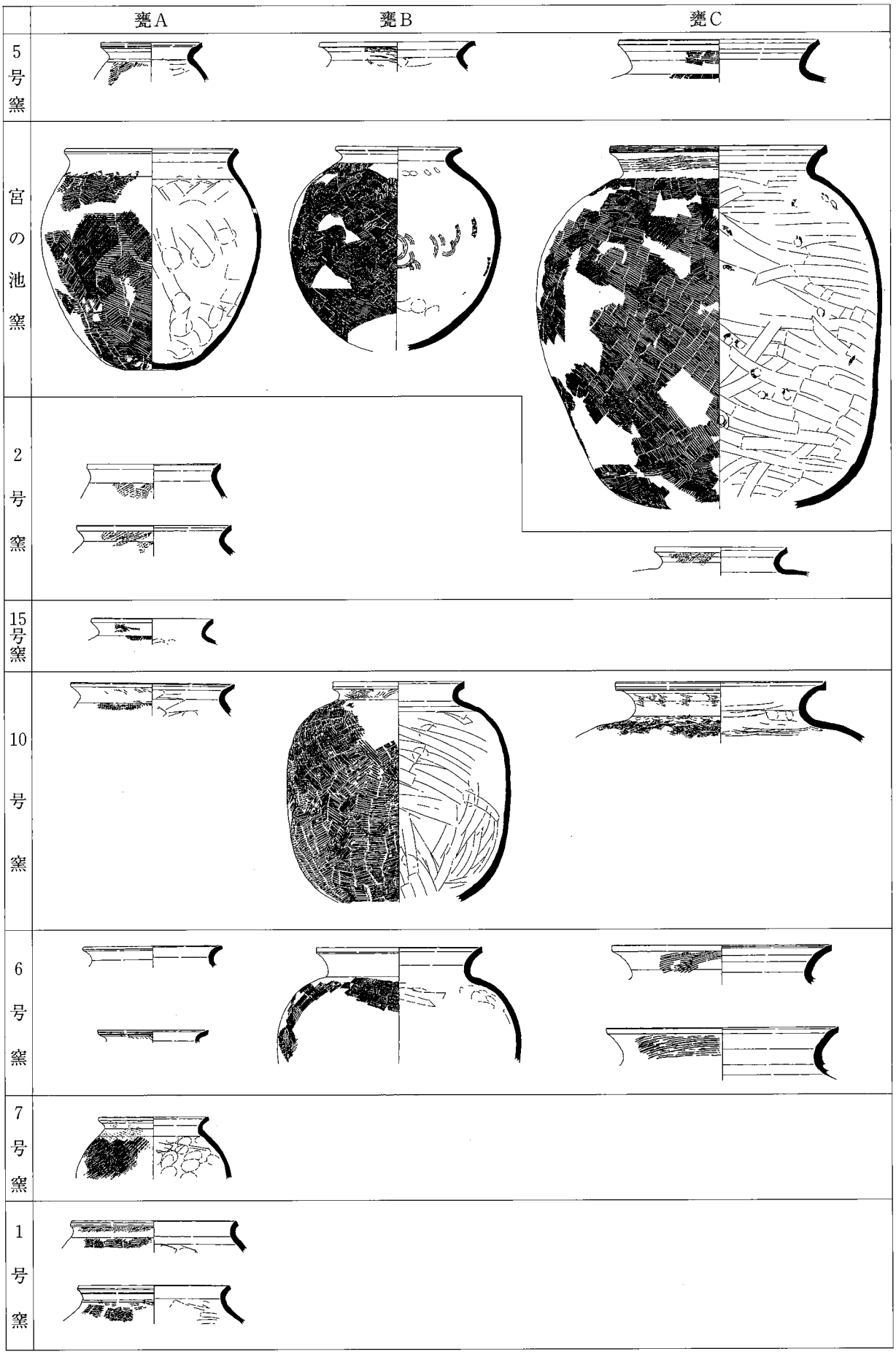
挿図38　皿類分類図（S＝1：4）



挿図39　鉢分類図(1)（S＝1：8）



挿図40　鉢分類図(2)（S＝1：8）



挿図41　甕分類図（S＝1：10）

第３節　出土瓦の検討

出土した瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、道具瓦などがある。これらの瓦の共通する特徴には、以下のものがある。須恵器と同様に窖窯で焼成されてはいるが、須恵器と同様に色調が青灰色で焼成が硬質のもの以外に、色調が灰白色で軟質のものかなり多く認められる。調整はナデを多用したものが多い。

(1)　軒丸瓦

軒丸瓦はＮＭと略称し、瓦当文様によって分類する。ＮＭ１～11類が蓮華文、ＮＭ12類がが巴文である。丸瓦部については後述する丸瓦の分類によって記述する。

ＮＭ１類（２-*1006*～*1009*、５-*1001*、７-*1001*、15-*1004*、Ｍ-*1001*～*1005*）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。柳谷２号窯、柳谷５号窯、柳谷７号窯、柳谷15号窯、宮の池窯で出土している。圏線に囲まれた中房に１＋８の蓮子をもち、連弁は肉厚に表現されている。連弁の周りには26個の珠文で構成される珠文帯がめぐり、その外側に圏線がめぐっている。ＮＭ１類は笵の状態によってＮＭ１ａ類（２-*1006*のみ）とＮＭ１ｂ類（２-*1006*以外のすべて）の２種類に分かれる。ＮＭ１ａ類では外側の圏線が２重であるが、ＮＭ１ｂ類では外側の１本が切り取られ１重にされている。瓦当径はＮＭ１ａ類で17cm程度、ＮＭ１ｂ類で16.5cm程度である。瓦当部の調整は、基本的に調整はナデであり、丸瓦部はⅡ類である。これらは、いずれも同笵であるが、窯ごとに製作技法に差が認められる。２号窯出土品は、瓦当裏面は平坦に仕上げられている。７号窯出土品は、瓦当面に離砂がほどこされ、瓦当裏面は中央部が盛り上っている。15号窯出土品と宮の池窯出土品は、瓦当面の周縁部と周縁外縁にケズリがほどこされている。瓦当裏面の中央部が凹み、周縁側が盛り上がっている。ＮＭ１ａ類の同笵品は久留美窯跡群大池支群、鳥羽離宮、烏丸線Ｘ－５地点などで、ＮＭ１ｂ類の同笵品は久留美門前遺跡、尊勝寺などで出土している。

ＮＭ２類（８-*1001*）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。柳谷８号窯でのみ出土している。ＮＭ１類に類似する文様で、凹んだ中房に１＋５の蓮子をもっている。ＮＭ１類とは異なり連弁の外側には珠文帯をもたず、１重の圏線をもっている。瓦当径は13.3cmと小型である。瓦当部の調整は、基本的にナデであるが、瓦当面の周縁部にケズリがほどこされている。また、瓦当裏面は中央部がやや盛り上がり、周縁側はケズリをほどこした後、ナデがほどこされている。

ＮＭ３類（５-*1002*）

複弁蓮華文軒丸瓦である。柳谷５号窯でのみ出土している。ＮＭ１ｂ類に類似する文様と思われるが、珠文の配置から、ＮＭ１ｂ類とは異笵であると考えられる。瓦当部の調整はナデである。

ＮＭ４類（Ｍ-*1006*）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。宮の池窯でのみ出土している。凹んだ中房に１＋８の蓮子をもつもの

と思われ、花弁・子葉は端を凹ませることにより表現している。瓦当部の調整は、基本的にナデであるが、瓦当面の周縁部と瓦当側面にケズリがほどこされている。また、瓦当裏面の周縁よりの盛り上がった部分にケズリを施している。

ＮＭ５類（２-*1001*～*1005*）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。柳谷２号窯でのみ出土している。２重に突出した中房に１＋８の蓮子をもっている。花弁は肉厚に表現され、子葉をさらに突出させている。周縁には珠文帯（珠文39個）が配されている。瓦当部の調整は、基本的にナデであるが、瓦当側面（２-*1001*）や瓦当裏面の周縁よりが盛り上がった部分（２-*1001*・*1003*）にケズリを施したものがある。２-1005は瓦当面に離砂がほどこされ、その他のものも、明瞭な離砂は残っていないが、砂の剥がれた痕跡と思われる凹みが認められる。丸瓦部はⅡ類である。この瓦は、鳥羽離宮東殿白河天皇陵三重塔（天仁２年〔1109〕）のために鳥羽離宮内の瓦窯で焼成されたものと同笵である。ただし、ＮＭ５類は笵の傷み具合がかなり激しいことから、笵が鳥羽離宮から三木へもたらされたものと考えられる。その他、同笵品は尊勝寺で出土している。また、この笵は彫り直しがおこなわれ、ＮＭ10類となったと考えられる（ＮＭ10類の項参照）。

ＮＭ６類（Ｍ-*1007*～*1010*）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。宮の池窯でのみ出土している。凹んだ中房部に１＋８の蓮子をもち、中房の周りには蘂をもっている。蓮弁は相互に分割されておらず、肉厚に表現されている。蓮弁の外側には圏線をもっている。瓦当部の調整はナデである。同笵品は久留美窯跡群大池支群、尊勝寺、鳥羽離宮、三条西殿などで出土している。

ＮＭ７類（Ｍ-*1011*～*1014*）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。宮の池窯でのみ出土している。ＮＭ６類とほぼ同様の文様構成であるが、蘂と蓮弁の間に１重の圏線と蓮弁の外側に２重の圏線をもっている。調整は比較的ケズリが多用され、瓦当面の周縁部と瓦当側面にケズリがほどこされている。また、瓦当裏面の周縁よりの盛り上がった部分にケズリを施している。同笵品は久留美窯跡群大池支群、尊勝寺などで出土している。

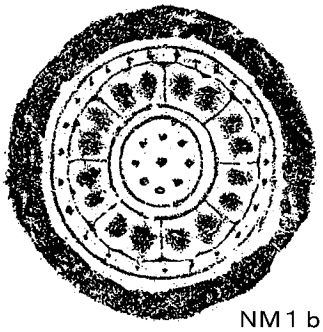
ＮＭ８類（10-*1003*）

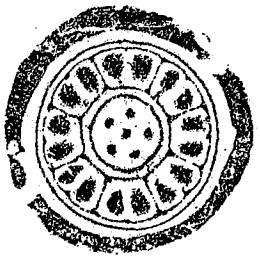
複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。柳谷10号窯でのみ出土している。突出した中房に１＋５の蓮子をもっているものと思われる。中房の周囲には蘂をもち、蘂と蓮弁は突線で表現されている。瓦当部の調整はナデである。同笵品は久留美中筋遺跡、尊勝寺、鳥羽離宮、河合西廃寺（小野市）で出土している。

ＮＭ９類（10-*1001*、*1002*）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。柳谷10号窯でのみ出土している。やや突出した中房に１＋５の蓮子をもっているものと思われる。中房の周囲には蘂を、蓮弁には線状の子葉をもち、蘂、蓮弁、子葉は突線で表現されている。瓦当面には離砂がほどこされている。瓦当部の調整は、基本的にナデであるが、瓦当面の周縁部にケズリがほどこされている。同笵品は平井窯跡群皿池支群、与呂木窯跡群通り池支群、尊勝寺、最勝光院で出土している。

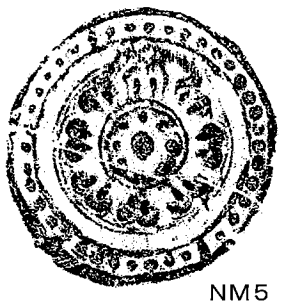
NM1a

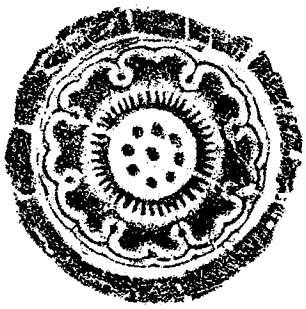

NM1b

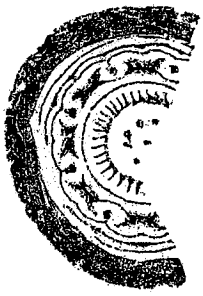

NM2

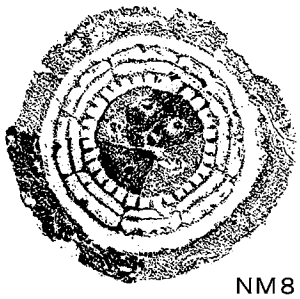
NM3

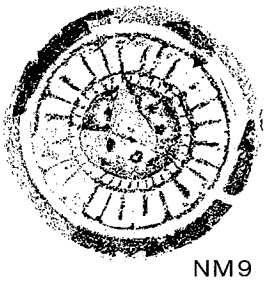
NM4


NM5

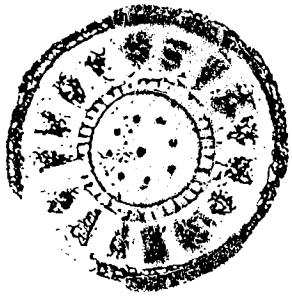

NM6


NM7


NM8


NM9

NM10


NM11

NM12

挿図42　軒丸瓦型式一覧

ＮＭ10類（10-*1004*～*1007*）

単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。柳谷10号窯でのみ出土している。ＮＭ５類の瓦笵を彫り直したものである。ＮＭ５類の蓮弁の子葉の部分を蓮弁とし、蓮弁の外側に深く圏線を掘り込んでいる。周縁部の珠文帯はなくされている。ただし、笵のキズはなくしきれていない。笵キズの状態から、鳥羽離宮白河天皇陵三重塔→ＮＭ５類→尊勝寺21型式→尊勝寺42型式→ＮＭ10類の順番をたどることができ、尊勝寺21型式と尊勝寺42型式の間で笵の彫り直しがおこなわれたと考えられる。瓦当面には離砂が付着している。瓦当部の調整は、基本的にナデであるが、瓦当面の周縁部や瓦当部側面にケズリがほどこされたものがある。丸瓦部はⅡ類である。同笵品は平井窯跡群皿池支群、尊勝寺、法金剛院で出土している。

ＮＭ11類（M-*1015*）

単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。宮の池窯でのみ出土している。やや突出した中房に１＋８の蓮子をもつ。中房のまわりに蘂もつ。蓮弁は肉厚に表現されている。瓦当面の周縁部や瓦当部側面にケズリがほどこされている。同笵品は平井窯跡群皿池支群、宿原窯跡群皿池支群、尊勝寺、鳥羽離宮で出土している。

ＮＭ12類（２-*1010*）

三巴文軒丸瓦である。柳谷２号窯でのみ出土している。右巻きの巴で、巴文と珠文帯の間に圏線がめぐる。瓦当部の調整は、基本的にナデであるが、瓦当部側面にケズリがほどこされている。丸瓦部はⅡ類である。

(2) 軒平瓦

軒平瓦はＮＨと略称し、瓦当文様によって分類する。ＮＨ１～５類が均整唐草文、ＮＨ６～11類が偏行唐草文、ＮＨ12～18類が唐草文、ＮＨ19類が宝相華唐草文、ＮＭ20が幾何学文である。軒平瓦の瓦当部の製作技法は、いずれも包み込み技法である。平瓦部については後述する平瓦の分類によって記述する。ただし、６-*1003*、７-*1005*、M-*1034*～*1037*については文様の残存部分が少ないので分類の対象外とした。

ＮＨ１類（２-*1017*、M-*1018*、*1019*）

均整唐草文軒平瓦である。柳谷２号窯と宮の池窯で出土している。文様はＣ字背向の中心飾りに、３転する唐草をもつものである。唐草文の周囲は界線で囲まれている。ＮＨ１類はもとの笵のもの（ＮＨ１ａ類：２-*1017*）と両端３転目の唐草を切断したもの（ＮＨ１ｂ類：M-*1018*、*1019*）に分かれる。M-1018の瓦当面には離砂が付着している。瓦当部の調整は、基本的にはナデであるが、２－1017の周縁部、顎部にはケズリがほどこされている。平瓦部はⅡ類である。同笵品は、ＮＨ１ａ類が尊勝寺、ＮＨ１ｂ類が平井窯跡群皿池支群、尊勝寺、三条西殿で出土している。

ＮＨ２類（２-*1011*～*1016*）

均整唐草文軒平瓦で、柳谷２号窯でのみ出土している。文様はやや斜めになったＣ字背向の中心飾りに、３転する唐草をもつものである。唐草文の周囲は界線で囲まれている。瓦当面には離砂が付着して

いる。瓦当部の調整は、基本的にはナデである。平瓦部はⅡ類である。同笵品は林崎三本松窯跡群（明石市）、法勝寺、尊勝寺、白河街区で出土している。

ＮＨ３類（M-*1021*）

均整唐草文軒平瓦である。宮の池窯でのみ出土している。文様は明瞭な中心飾りをもたず、左右対称に５転する唐草をもつものと考えられる。唐草文の周囲は界線で囲まれている。瓦当部の調整はナデである。同笵品は平井窯跡群皿池支群、尊勝寺で出土している。

ＮＨ４類（７-*1002*、*1003*）

均整唐草文軒平瓦である。柳谷７号窯でのみ出土している。文様は１対のオタマジャクシ状の中心飾りに、波状の唐草をもつものと考えられる。文様の左端が切断されている。瓦当部の調整は、基本的にはナデである。平瓦部はⅠ類である。凹面は部分的に縦方向のナデをほどこしている。同笵品は平井窯跡群皿池支群、尊勝寺、法住寺殿で出土している。法住寺殿Ⅰ類軒平瓦９と比べると笵の左右が少し切断されているようである。

ＮＨ５類（M-*1020*）

均整唐草文軒平瓦である。宮の池窯でのみ出土している。文様はＣ字背向の中心飾りに、２転する唐草をもつものであるが、笵の端が切断されているものと考えられる。瓦当部の調整は、基本的にはナデである。

ＮＨ６類（15-*1001*～*1003*）

偏行唐草文軒平瓦である。柳谷15号窯でのみ出土している。文様は右向きに７転する唐草をもつものである。唐草文の周囲は界線で囲まれ、その外側には珠文帯がめぐっている。瓦当部の調整はナデである。平瓦部はⅡ類である。同笵品は久留美門前遺跡、尊勝寺で出土している。

ＮＨ７類（２-*1019*）

偏行唐草文軒平瓦である。柳谷２号窯でのみ出土している。文様は左向きに７転する唐草をもつものである。唐草文の周囲は界線で囲まれ、内外を界線に囲まれた珠文帯がめぐっている。瓦当部の調整は基本的にナデであるが、周縁部にのみケズリがほどこされている。平瓦部はⅡ類である。

ＮＨ８類（２-*1018*）

偏行唐草文軒平瓦である。柳谷２号窯でのみ出土している。文様は右向きに18転する唐草をもつものである。唐草文の周囲は界線で囲まれている。瓦当部の調整は基本的にナデであるが、周縁部にのみケズリがほどこされている。平瓦部はⅡ類である。同笵品は久留美門前遺跡、林崎三本松窯跡群、尊勝寺、鳥羽離宮で出土している。

NH1a

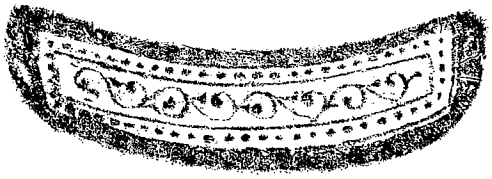
NH1b

NH2

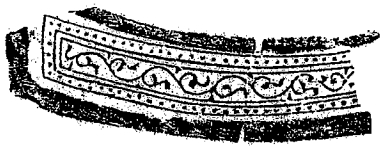
NH3

NH4

NH5



NH6

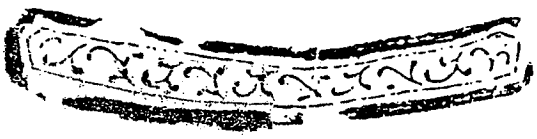


NH7

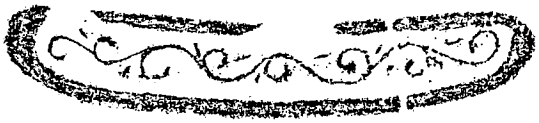
NH8

NH9

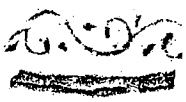
NH10



NH11



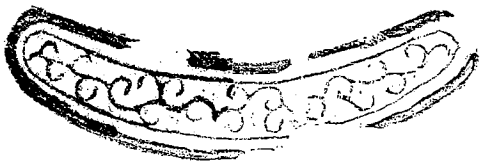
NH12



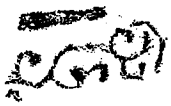
NH13

挿図43　軒平瓦型式一覧（1）

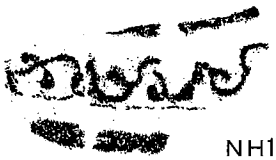
NH14



NH15



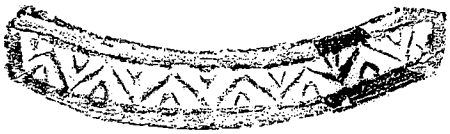
NH16



NH17

NH18

NH19



NH20

挿図44　軒平瓦型式一覧（2）

ＮＨ９類（7-*1004*、10-*1009～1012*）

偏行唐草文軒平瓦である。柳谷７号窯、柳谷10号窯で出土している。文様は左向きに９転する唐草をもつもので、さらにその上に右下がりの斜線が入れられている。左端は文様が途切れており、笵が切断されているようである。瓦当部の調整はナデである。平瓦部は７号窯出土品がⅠ類、10号窯出土品はⅡ類である。同笵品は尊勝寺、白河街区で出土している。

ＮＨ10類（10-*1008*）

偏行唐草文軒平瓦である。柳谷10号窯でのみ出土している。文様は左向きにのびる波状の唐草をもつものである。瓦当面には離砂が付着している。瓦当部の調整はナデである。

ＮＨ11類（M-*1022*、*1023*）

偏行唐草文軒平瓦である。宮の池窯でのみ出土している。文様は左向きに５転以上する唐草をもつものである。唐草文の周囲は界線で囲まれている。瓦当部の調整はナデである。同笵品は尊勝寺で出土している。

ＮＨ12類（2-*1020*、*1021*、10-*1013～1017*）

唐草文軒平瓦である。柳谷２号窯、柳谷10号窯で出土している。文様は、唐草が中央やや左側から右に３転、左に５転するものである。瓦当部の調整はナデである。平瓦部はⅡ類である。同笵品は久留美窯跡群大池支群、尊勝寺で出土している。

ＮＨ13類（10-*1018*）

唐草文軒平瓦である。柳谷10号窯でのみ出土している。文様はＮＨ12類に類似するものと思われる。瓦当部の調整はナデである。平瓦部はⅡ類である。

ＮＨ14類（M-*1031～1033*）

唐草文軒平瓦である。宮の池窯でのみ出土している。文様は、複雑な唐草が中央付近から非対称形に開くものである。瓦当面には離砂がほどこされている。瓦当部の調整は基本的にナデがほどこされているが、瓦当面の周縁部や側面をヘラケズリしたもの（M-*1031*）がある。平瓦部はⅡ類である。同笵品は法勝寺、尊勝寺、鳥羽離宮で出土している。

ＮＨ15類（M-*1024～1026*）

唐草文軒平瓦である。宮の池窯でのみ出土している。文様は、唐草が中央やや右側から右に９転、左に８転するものである。唐草文の周囲は界線で囲まれている。瓦当面には離砂がほどこされている。瓦当部の調整は基本的にナデがほどこされているが、瓦当面の周縁部や側面をヘラケズリしたもの（M-*1026*）がある。平瓦部はⅡ類である。同笵品は久留美中筋遺跡、尊勝寺、鳥羽離宮で出土している。

ＮＨ16類（M-*1027～1029*）

唐草文軒平瓦である。宮の池窯でのみ出土している。文様は右端のみしか残っておらず、よくわからない。唐草文の周囲は界線で囲まれている。瓦当部の調整はナデである。

ＮＨ17類（M-*1030*）

唐草文軒平瓦である。宮の池窯でのみ出土している。文様は、かなり磨耗しているため不鮮明であるが、唐草が両端から中央に向かってのびるものと思われる。瓦当部の調整はナデである。

ＮＨ18類（２-*1022*）

唐草文軒平瓦である。柳谷２号窯でのみ出土している。文様は右端のみしか残っておらず、よくわからない。瓦当部の調整はナデである。

ＮＨ19類（10-*1019*）

宝相華唐草文軒平瓦である。柳谷10号窯でのみ出土している。半截宝相華を中心飾りとし、左右両方に１転する唐草をもつものである。瓦当面には離砂がほどこされている。瓦当部の調整は基本的にナデがほどこされているが、瓦当面の周縁部や裏面にはヘラケズリがほどこされている。平瓦部はⅡ類である。

ＮＨ20類（６-*1004*）

幾何学文軒平瓦である。柳谷６号窯でのみ出土している。周縁の間に山形を連ね、山形の間にさらに小さい山形を配している。ナデ、顎面にはケズリがほどこされている。瓦当部の調整はナデである。同笵品は平井窯跡群皿池支群、尊勝寺で出土している。

(3) 丸瓦

製作技法によって大きく２つに分類する。

Ⅰ類（6-*1007*～*1009*、7-*1006*～*1009*、10-*1020*～*1024*）

筒部凹面に布目を残すものである。柳谷6号窯、7号窯、10号窯　宮の池窯で出土している。筒部凹面には、布目とともに糸切り痕を残すものも多く認められ、部分的にナデをほどこしているもの（6-*1007*、10-*1020*、10-*1022*）もある。筒部凸面は基本的に縦方向ナデをほどこし、部分的に回転ナデがほどこされているものがある。筒部凸面にタタキの痕跡を残すものは少なく、6-*1008*、10-*1022*にのみ平行タタキの痕跡が認められる。玉縁部凹面は布目をそのまま残すものとナデあるいはケズリによって布目を消すもの（6-*1007*、7-*1008*、10-*1020*、*1021*）がある。玉縁部凸面はケズリによって成形をおこなった後に、回転ナデをほどこしている。端面、側面にはケズリをほどこしている。側縁に面取りをおこなうものも多くみられる。大きさが分かるものは柳谷10号窯出土の10-*1020*～*1022*のみで、全長37.5～39.3cm、幅14.7～16.8cmである（Ⅰa類）。さらに、全体の大きさが分からないが、幅が14cm以下（10-*1024*、軒丸瓦6-*1001*の丸瓦部など）のやや小型のもの（Ⅰb類）があると思われる。

Ⅱ類（1-*1001*、*1002*、2-*1024*～*1045*、5-*1003*、6-*1010*～*1012*、7-*1010*、*1011*、8-*1002*～*1008*、10-*1025*～*1030*、15-*1005*～*1012*、M-*1038*～*1042*）

筒部凹面に布目が見られず、須恵器などと同様に粘土紐を巻き上げて成形したと考えられるものである。全ての窯跡で出土している。筒部凸面は縦方向ナデをほどこしている。2-*1030*、*1033*の筒部凹面にはこの時に置かれた調整台の木目の痕跡が残っている。筒部凸面の玉縁に近い側に無文のタタキ（2-*1030*など）を残すものがある。筒部凹面は回転ナデをほどこし、その後に、丁寧に縦方向のナデをほどこすもの（2-*1026*など）と、縦方向のナデをほどこさないか、部分的にしかほどこさず、粘土紐の接合痕を残すもの（2-*1024*など）がある。玉縁部は両面とも回転ナデがほどこされ、端部は面をもっているもの（2-*1040*など）はほとんどない。側面と筒部端面にはケズリがほどこされ、側面にはその後ナデをほどこしたものが多い。側縁には面取りをほどこしたものもある。

柳谷15号窯出土品は大きさによって比較的明瞭にⅡa～c類の3種類に分けることができる。大型のⅡa類は全長40.9～41.6cm、中型のⅡb類は全長33.7～35.8cm、小型のⅡc類は全長29.7cmである。宮の池窯出土品は柳谷15号窯のⅡb類にほぼ相当するものと思われる。これに対して柳谷2号窯ではそれほど明瞭には分かれないが、大型のⅡa類が柳谷15号窯よりやや小さい全長39～40cm前後のもの、中型のⅡb類は全長35～38cm前後のものに分かれると思われる。

(4)　平瓦

製作技法によって大きく2つに分類する。

Ⅰ類（1-*1004*、*1005*、5-*1004*、6-*1013*～*1015*、7-*1012*～*1014*、10-*1031*～*1035*）

凹面に布目を残すものである。柳谷1号窯、柳谷5号窯、柳谷6号窯、柳谷7号窯、柳谷10号窯で出土している。凹面に布目とともに糸切痕を残すものや、布目を粗い縦方向のナデで消すものがある。凸面はタタキか、タタキののち縦方向の粗いナデをほどこしている。ただし、凸面のタタキは無文のものと思われ、ナデとの判別を明瞭にすることはできなかった。端面、側面にはケズリをほどこしている。大きさが分かるものは柳谷6号窯出土の6-*1013*と柳谷10号窯出土の10-*1031*、*1032*のみである。6-*1013*は全長38.2cm、10-*1031*は全長36.3cm、10-*1032*は全長33.6cmである。6-*1013*、10-*1031*が大型のもの

（Ⅰａ類）と考えられ、10-*1032*は小型のタイプに含まれる（Ⅰｂ類）と考えられる。幅はほとんどが25cm以下の狭いものである。

Ⅱ類（1-*1006*～*1011*、2-*1046*～*1061*、5-*1005*～*1008*、6-*1016*、7-*1015*、*1016*、8-*1009*～*1012*、10-*1036*～*1052*、15-*1013*～*1040*、M-*1043*、*1044*）

凹面に布目が見られず、須恵器などと同様に粘土紐を巻き上げて成形したと考えられるものである。全ての窯跡で出土している。凸面はタタキの後、縦方向ナデをほどこしていると考えられる。タタキは1-*1007*が平行タタキである以外は無文と考えられ、成形時の下側に近い部分にその痕跡を残すものが比較的多く認められる。凹面は回転ナデをほどこし、その後に、丁寧に縦方向のナデをほどこしたものが多いが、粘土紐の接合痕を残しているものも若干認められる。端部の片側（成形時の上側）は回転ナデがほどこされ、まるく仕上げられているものが多く、端面を持つものは少ない。端部のもう片側（成形時の下側）は端面にケズリがほどこされている。側面にはケズリがほどこされ、側面にはその後ナデをほどこしたものが多い。側縁には面取りをほどこしたものも少数存在する。

柳谷15号窯出土品は、丸瓦と同じく大きさによって比較的明瞭にⅡａ～ｃ類の3種類に分けることができる。大型のⅡａ類は全長41.0～38.3cm、中型のⅡｂ類は全長36.5～35.7cm、小型のⅡｃ類は全長29.5～29.4cmである。宮の池窯出土品は柳谷15号窯のⅡｂ類にほぼ相当するものと思われる。これに対して柳谷2号窯ではそれほど明瞭には分かれないが、大型のⅡａ類が柳谷15号窯よりやや小さい全長38～35cm前後のもの、中型のⅡｂ類が全長34～35cm前後のもの、小型のⅡｃ類が全長31.0cm前後のものに分かれると思われる。柳谷10号窯は大きさによって比較的明瞭にⅡａ、ｂ類の2種類に分けることができる。大型のⅡａ類は全長38.7～36.7cm、小型のⅡｂ類は全長32.0cmである。

(5) 鬼瓦（6-*1005*）

柳谷6号窯でのみ出土している。鬼の目玉の部分である。

(6) 塼（M-*1045*）

宮の池窯でのみ出土している。平面形は隅円の方形あるいは長方形を呈していると思われる。全面にケズリがほどこされている。

(7) 道具瓦（6-*1006*、M-*1046*～*1048*）

用途不明の道具瓦である。柳谷6号窯と宮の池窯で出土している。M-*1046*が最も残存状況が良いが、部分的な破片であるため全形を知ることができない。板状の部分が複雑に組み合わされて構成されている。文様帯のある面を正面とし、文様帯に続く部分（横板）、横板から奥で上方に立ち上がる部分（背板）、横板の右で上方に立ち上がる部分（側板）から成り立っている。背板は上面に弧状に削り取られ、右側の破面では接合のための刺突が見られる。文様帯の文様は三巴文と半截宝相華文を交互に配置したものである。調整は基本的にナデで、横板と側板の接合部にのみケズリがほどこされている。

(7) 瓦の出土状況

瓦については計数作業を行った。軒瓦については個体数、平・丸瓦については隅数、その他は個体数

で表してある。

全ての調査区から出土した瓦の総量は、軒丸瓦が個体数にして48点、、軒平瓦が個体数にして69点、丸瓦が隅数にして449（固体数112.25点）、平瓦が隅数にして791（固体数197.75点）、その他が固体数にして６点である。丸瓦と平瓦の比率は、丸瓦が36%、平瓦が64%、丸瓦が１とすると平瓦が1.76である。丸瓦、平瓦の製作技法別の比率は、Ⅰ類が12%、Ⅱ類が88%である。

各窯ごとに丸瓦、平瓦の出土個体数を見てみると、50個体を超えるのは柳谷２号窯、柳谷10号窯、柳谷15号窯、宮の池窯で、明らかにその窯で瓦を生産していたことが分かる。数個体しか出土していないのは柳谷１号窯、柳谷５号窯、柳谷６号窯、柳谷７号窯、柳谷８号窯で、その評価は難しい。このうち、柳谷１号窯については隣接する柳谷２号窯からの混入の可能性があり、柳谷５号窯については灰原の上層や表採のものが多いことから混入の可能性が高いものと考えられる。

各窯ごとに丸瓦、平瓦の製作技法別を見てみると、Ⅰ類の占める割合の低い柳谷１号窯、柳谷２号窯、柳谷５号窯、柳谷８号窯、柳谷15号窯、宮の池窯とⅠ類の占める割合の高い柳谷６号窯、柳谷７号窯、柳谷10号窯に分かれる。

窯跡名	軒丸瓦	軒平瓦	丸　瓦		平　瓦		その他
			Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅱ類	
柳谷１号窯	0	1	0	12	2	10	0
柳谷２号窯	18	15	0	198	6	198	0
柳谷５号窯	2	0	0	2	2	9	0
柳谷６号窯	2	2	3	5	6	1	2
柳谷７号窯	1	4	3	1	5	3	0
柳谷８号窯	1	0	0	11	0	4	0
柳谷10号窯	7	12	16	36	90	112	0
柳谷15号窯	1	3	0	60	0	206	0
宮の池窯	16	32	1	97	3	128	4
柳谷３号窯	0	0	0	1	2	2	0
柳谷４号窯	0	0	0	0	1	0	0
柳谷９号窯	0	0	1	0	0	0	0
柳谷16号窯	0	0	2	0	0	1	0
合　計	48	69	26	423	117	674	6

※軒丸瓦・軒平瓦・その他は個体数、丸瓦・平瓦は隅数

第４表　瓦の出土数量

(8)　まとめ

１．軒瓦の同笵関係

今回の調査によって、窯間における軒瓦の同笵関係を数多くの確認することができた。まず、久留美窯跡群のなかで（時期の異なる毛谷支群を除く）みると、ＮＭ１類、ＮＭ５類・ＮＭ10類、ＮＭ６類、ＮＭ７類、ＮＨ１類、ＮＨ９類、ＮＨ12類の７つの笵が窯間で同笵関係にある。このなかで、ＮＭ１類とＮＨ１類が笵の切り縮めを行っていることから、明瞭に前後関係が判明し、少なくともこれらの瓦に関する限り〔柳谷２号窯、大池窯〕→〔柳谷７号窯、柳谷15号窯、宮の池窯〕と考えられる。また、ＮＭ５類は、ＮＭ10類に笵の彫りなおしが行われていることから、柳谷２号窯→柳谷10号窯の関係がわかる。

また、三木窯跡群内の平井窯跡群、与呂木窯跡群、宿原窯跡群など、ほぼ時期を同じくする他の窯跡群とも同笵関係を数多く確認できる。特に、平井窯跡群とは７つもの笵を同じくしている。

このように、窯跡群内や窯跡群間に同笵関係を数多く認められることから、軒瓦の製作工具である「笵」の移動が明らかとなり、その背後には工人の移動も推測することも可能である。三木市周辺に所在する窯跡群は、かなり緊密に結びついていたと考えることができる。

さらに、三木以外の他の地域の窯跡群との関係を見てみると、林崎三本松窯跡群（明石市）とは同笵関係を認めることはできるが、それ以外の神出窯跡群（神戸市西区）、魚住窯跡群（明石市）、魚橋窯跡群（高砂市）とは明瞭な同笵関係は認められない。林崎三本松窯跡群は、他の窯跡とは異なり瓦専業であり、三木窯跡群だけではなく神出窯跡群とも同笵関係にある。このことは、林崎三本松窯跡群が瓦生産については中心的な位置をしめていることを示している。これに対して、瓦陶兼業窯間では同笵関係は認められず、特に、三木窯跡群と距離的に近接する神出窯跡群と同笵関係は認められないことは、各窯跡間の独立性を考える上で重要であろう。

2．瓦の製作技法

久留美窯跡群で出土した瓦の製作技法については、特に以下の２つの特徴があると考えられる。

①粘土紐巻き上げによる成形

丸・平瓦については大きく凹面に布目が見られるⅠ類と布目の見られないⅡ類に分かれる。Ⅱ類は通有の製作技法によるものであり、Ⅱ類は土器と同様に粘土紐を巻き上げて成形したものである。Ⅱ類の瓦は、この時期においては播磨に特徴的に現れるもので、久留美窯跡群以外では、平井窯跡群、神出窯跡群、繁田窯跡群、林崎三本松窯跡群で出土しているが、魚住窯跡群、魚橋窯跡群では見られない。Ⅱ類の占める比率は久留美窯跡群が88%であるのに対して、神出窯跡群の垣内小支群では37%である。久留美窯跡群内で窯毎に分類別の比率をみると、ほとんどがⅡ類で占められる柳谷１、２、５、８、15号窯、宮の池窯とⅠ類が40%以上を占める柳谷６、７、10号窯に分かれる。また、久留美窯跡群で作られたⅡ類の瓦のなかには、粘土紐の接合痕をきれいにナデ消したものが比較的多いが、他の窯跡ではこのようなものは見られない。このような製作技法は土器の製作技法によったものと考えられ、久留美窯跡群での瓦生産については土器工人の関与の大きさをうかがうことができる。

②軒瓦製作における離砂の利用

柳谷２、７、10号窯、宮の池窯出土の軒瓦の瓦当面には砂の付着が認められるものがある。この砂は笵と粘土を離れやすくするための「離砂」と考えられる。瓦当面に離砂が付着する例は、他に林崎三本松窯跡群で出土しており、神出窯跡群、魚住窯跡群、魚橋窯跡群などでは出土していない。平瓦、丸瓦でも調整台と接着しないように凹面や凸面にも離砂を用いたと考えられるものもあるが、調整時にナデがほどこされているため、どの程度用いられたかはよくわからない。

3．瓦の消費地

瓦については、軒瓦の同笵関係からその供給地を知ることができる。ただし、林崎三本松窯跡群との同笵関係が存在し、窯間で笵型が移動する可能性のあることが明らかとなったため、消費地遺跡との同笵関係が則その供給関係を示すこととはならなくなった。現在、三木窯跡群と林崎三本松窯跡群の遺物を分別することはできないので、消費地出土同笵例を三木産の可能性の高いものとして取り上げることとする。

軒瓦の笵の総数34型式のうち22型式について消費地との同笵を確認することができた。これよりする

と、その供給地のほとんどは京都で、院御所（白河上皇以降の御所である鳥羽離宮、白河上皇の御所である三条西殿、六条中院〔烏丸線Ｘ－５地点〕、後白河上皇の御所である法住寺殿）、天皇やそれに準ずる女院の御願寺（法勝寺、尊勝寺、法金剛院）、播磨守の邸宅（藤原基隆邸である三条西殿、藤原顕季邸である六条中院〔烏丸線Ｘ－５地点〕）などで出土している。特に尊勝寺では21型式も出土しており、その結びつきの強さが伺える。

京都以外での出土例はきわめて少なく、ＮＭ８類が河合西廃寺（小野市）で１点のみ出土している。京都以外への供給は極めて少ないものと考えられる。

４．瓦の前後関係と年代

ＮＭ１類とＮＨ１類は笵の切り縮めを行っていることから、明瞭に前後関係が判明し、少なくともこれらの瓦に関する限り〔柳谷２号窯、大池窯〕→〔柳谷７号窯、柳谷15号窯、宮の池窯〕と考えられる。また、ＮＭ５類は、ＮＭ10類に笵の彫りなおしが行われていることから、柳谷２号窯→柳谷10号窯の関係がわかる。前者については須恵器からみると宮の池窯→柳谷２号窯、柳谷15号窯→柳谷７号窯となり、柳谷２号窯と宮の池窯の関係が逆転している。ただし、宮の池窯と柳谷２号窯ではオーバーラップする部分もあるので、ほぼ同時期内での笵の切り縮め・移動と考えれば、一応は辻褄を合わせることができる。さらに、後述するようにＮＭ１ａ類などの「笵」製作の時期はやや古く遡る可能性が考えられるので、現段階では特定することはできないが、宮の池窯出土瓦のなかに柳谷２号窯以前の時期のものがある可能性がある。後者については須恵器の前後関係に一致している。

丸・平瓦の製作技法からみると、ほとんどがⅡ類で占められる柳谷２、８、15号窯、宮の池窯とⅠ類が40％以上を占める柳谷６、７、10号窯の大きく２つに分かれると考えられる。それぞれに共伴した須恵器をみるとおおむね前者が古く、後者が新しいことがわかる。ただし、柳谷10号窯の須恵器については柳谷２号窯・15号窯と同じ段階で、瓦の群別とは必ずしも完全には一致していない。

以上のことから出土した瓦は時期的に柳谷２号窯・柳谷15号窯・宮の池窯と柳谷10号窯・柳谷７号窯の大きく２つに分かれ、さらにＮＭ１類とＮＨ１類の笵の切り縮めを行っていないものなどについてはやや時期的に遡る可能性がある。

柳谷２号窯・柳谷15号窯・宮の池窯の時期は、ＮＭ５類の笵は天仁２年（1109）に造営された鳥羽離宮白河天皇陵三重塔用に鳥羽離宮内で造られた瓦に使用された笵が三木へもたらされたものであることから、それ以降のものであることは確かである。しかしながらそれ以降の年代の基準となる良好な資料は認められないので、おおまかに1109年以降の12世紀前半代ととらえておきたい。ただし、ＮＭ１ａ類は寛治２年（1088）造営の鳥羽離宮北殿、ＮＨ14類は寛治元年（1087）造営の鳥羽離宮南殿、あるいは康和３年（1101）造営の南殿御堂の証金剛院のものと考えることができるので、11世紀末から12世紀初頭の時期まで遡る可能性がある。

柳谷７号窯、10号窯は、ＮＭ９類、ＮＨ４類の同笵品やＮＨ19類の同文品が法住寺殿（保元元年〔1156〕造営）あるいはその御堂である蓮華王院（長寛２年〔1164〕造営）、最勝光院（承安３年〔1173〕造営）で出土していることから、単純に考えると12世紀第３四半期頃のものとすることができる。ただし、須恵器からみると柳谷10号窯は柳谷２号窯・柳谷15号窯と同じ段階で、柳谷７号窯との様相差は大きく、齟齬が生じている。柳谷10号窯についてはＮＨ19類の同文品が法住寺殿から多数出土しており、現時点では京都での出土例を考えると12世紀第３四半期を代表するものである。これに対して、ＮＭ８類、Ｎ

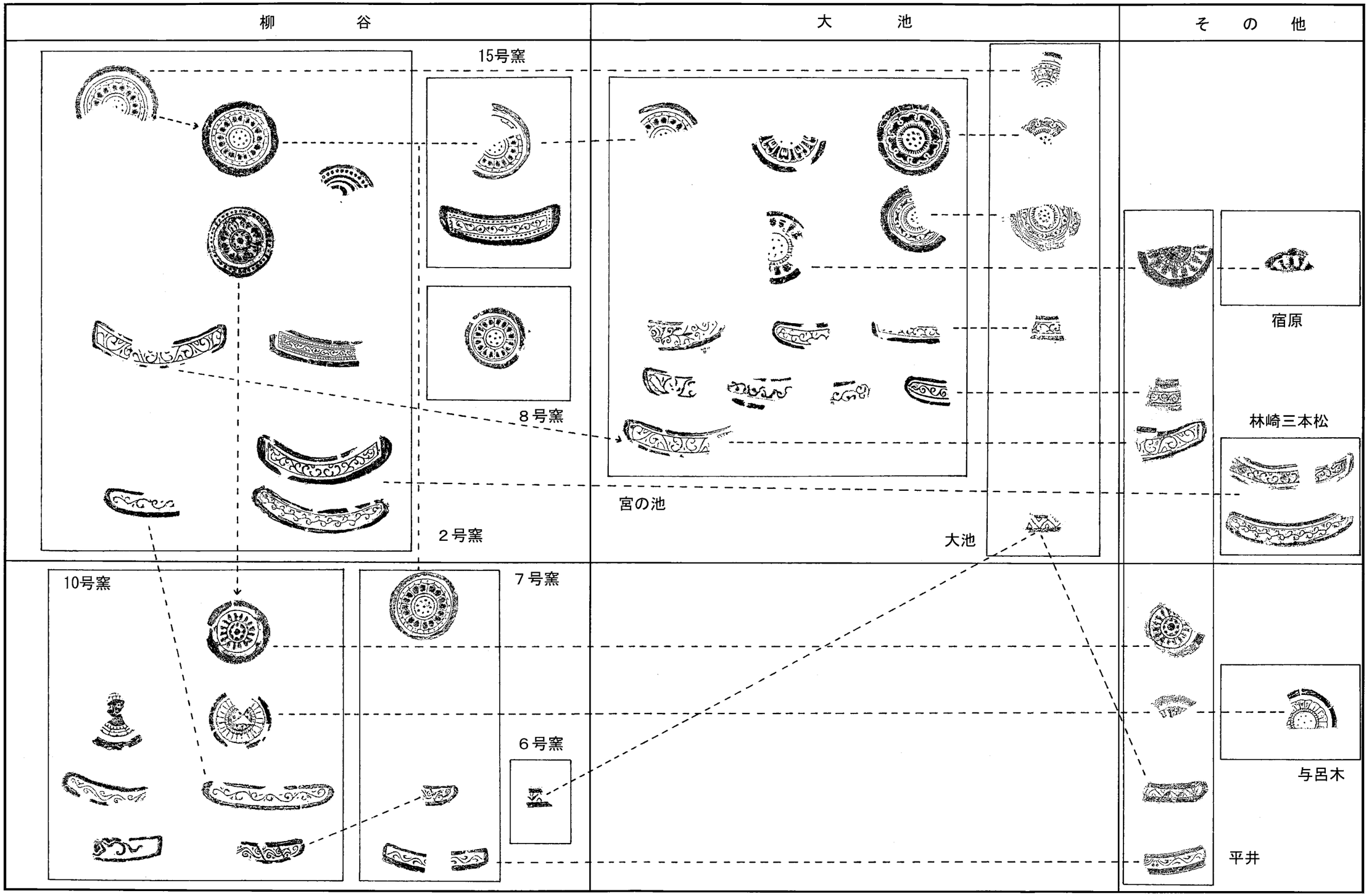
M10類など保延２（1136）年造営の鳥羽離宮勝光明院、法金剛院と同笵の瓦が出土している。これらの瓦にはⅡ類の丸瓦が付いており、やや古い様相をもっているといえる。また、柳谷10号窯出土のＮＨ19類にもⅡ類の平瓦が付いている。これらのことから、柳谷10号窯の時期については保延２（1136）年頃までの間に遡る可能性も考えられる。

型式名	生産地	消費地
ＮＭ１ａ	柳谷２、大池	鳥羽離宮115次１、鳥羽離宮６次Ｆ２、烏丸線Ｘ５-89
ＮＭ１ｂ	柳谷２、柳谷７、柳谷15、宮の池、久留美門前遺跡	尊勝寺１次36、尊勝寺11次ＳＷＡ13、尊勝寺45次21
ＮＭ５	柳谷２	尊勝寺１次21)、鳥羽離宮122次
ＮＭ６	宮の池、大池	尊勝寺１次53、尊勝寺11次ＳＷＡ11-ｂ、鳥羽離宮122次３-２、三条西殿16
ＮＭ７	宮の池、大池	尊勝寺45次25
ＮＭ８	柳谷10、久留美中筋遺跡	尊勝寺１次57、尊勝寺11次ＳＷＡ06、尊勝寺45次27、鳥羽離宮65次11、河合西廃寺
ＮＭ９	柳谷10、平井皿池ＭＧ、与呂木通り池	尊勝寺１次28、尊勝寺11次ＳＷＡ07、尊勝寺45次28、最勝光院35
ＮＭ10	柳谷10、平井皿池ＭＣ	尊勝寺１次42、尊勝寺45次34、法金剛院Ｓ43・44ＡＲＮ３、法金剛院Ｈ７年度５
ＮＭ11	宮の池、平井皿池ＭＢ、宿原皿池	尊勝寺１次94、尊勝寺45次32、鳥羽離宮６次Ｂ８
ＮＨ１ａ	柳谷２	尊勝寺40次27
ＮＨ１ｂ	宮の池、平井皿池Ａ４	尊勝寺１次226、尊勝寺11次ＳＷＮ47、三条西殿97
ＮＨ２	柳谷２、林崎三本松	法勝寺43次44、尊勝寺１次240、尊勝寺45次13、白河街区13次23
ＮＨ３	宮の池、平井皿池ＶＤ	尊勝寺40次29
ＮＨ４	柳谷７、平井皿池ＸＸⅡＪ	尊勝寺１次166、法住寺殿８
ＮＨ６	柳谷15、久留美門前遺跡	尊勝寺45次15
ＮＨ８	柳谷２、久留美門前遺跡、林崎三本松	尊勝寺１次218、尊勝寺11次ＳＷＮ43・44、尊勝寺45次23、尊勝寺40次31、鳥羽離宮６次Ｚ４
ＮＨ９	柳谷７、柳谷10	尊勝寺１次、尊勝寺45次14、白河街区13次19
ＮＨ11	宮の池、大池	尊勝寺11次ＳＷＮ46
ＮＨ12	柳谷２、柳谷10	尊勝寺１次157、尊勝寺11次ＳＷＮ51、尊勝寺45次19
ＮＨ14	宮の池	法勝寺塔跡16、尊勝寺１次259Ａ、尊勝寺11次ＳＷＮ39、尊勝寺45次11　尊勝寺40次30、鳥羽離宮６次Ｈ５
ＮＨ15	宮の池、久留美中筋遺跡	尊勝寺１次262、尊勝寺45次24、鳥羽離宮96次12
ＮＨ20	柳谷６、平井皿池ⅣＨ	尊勝寺１次281、尊勝寺11次ＳＷＮ28

第５表　出土軒瓦同笵関係一覧

第５表　文献

柳谷、宮ノ池……本書
大池……是川長「三木市の古墳と経塚」『三木市史』　1970年
荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第３号　1985年
平井皿池……中村浩ほか『久留美毛谷』　1990年
与呂木通り池……西阪義雄「三木市出土の瓦(二)」『三木史談』20号　1988年
宿原皿池……三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財調査概報－昭和50年度～昭和59年度－』　1986年
久留美中筋遺跡…三木市教育委員会松村正和氏、小網豊氏の御教示による
久留美門前遺跡…三木市教育委員会松村正和氏、小網豊氏の御教示による
林崎三本松……明石市教育委員会井上智代氏の御教示による
法勝寺塔跡……石田修一「法勝寺瓦に就いて」『日本史研究』４　1947年
法勝寺43次……京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所『法勝寺跡発掘調査概報』昭和61年度　1987年
尊勝寺１次……杉山信三・岡田茂弘「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡発掘調査報告Ⅰ』　1961年
尊勝寺11次……梶川敏夫『六勝寺跡－六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』　1977年
尊勝寺40次……梶川敏夫「尊勝寺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987年
尊勝寺45次……竹原一彦・水谷寿克・森下衛「尊勝寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第23冊　1987年
白河街区13次……梶川敏夫・渡辺和子「尊勝寺跡推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1976』　1977年
鳥羽離宮６次……細谷義治「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968）』　1968年
吉村正親「平安京域出土瓦とその生産」『中近世土器の基礎的研究Ⅲ』　1987年
鳥羽離宮65次……京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和55年度　1981年
鳥羽離宮96次……京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和59年度　1985年
鳥羽離宮115次 …京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和60年度　1986年
鳥羽離宮122次 …京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和62年度　1988年
法住寺殿……片岡聖・寺島孝一・植山茂『法住寺殿跡』　1984年
最勝光院……大谷高等学校遺跡調査会『大谷高等学校・中等学校構内発掘調査報告書』　1984年
法金剛院Ｓ43・44年度…中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」『埋蔵文化財発掘調査概報（1970）』　1970年
法金剛院Ｈ７年度…小松武彦・吉村正親「法金剛院境内」『平成７年度京都市埋蔵文化財調査概要』　1997年
三条西殿……下條信行・植山茂・定森秀夫『三条西殿跡』　1983年
烏丸線Ｘ５……京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』　1979年
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』　1981年
河合西廃寺……小野市教育委員会西田猛氏、中西信氏の御教示による。


柳　谷
大　池
そ　の　他
15号窯
8号窯
2号窯
宮の池
大池
宿原
林崎三本松
10号窯
7号窯
6号窯
与呂木
平井

第4節　三木の窯業生産と播磨守の造寺運動

院政期の瓦生産体制については今里幾次[1]氏並びに上原真人[2]氏の先駆的な研究成果があるが、両氏の発表よりすでに20年以上が経過しており、この間、平安京内の遺跡の発掘調査の進展や神出・魚住窯跡群を初めとする生産地での発掘調査が相次いで行なわれ、これらの調査成果をもとに鈴木久男氏や上村和直氏らによって多くの研究成果が発表されている。また、近年行なわれた神出垣内支群[3]・三木久留美窯跡群と明石市林崎三本松窯跡群の発掘調査では、鳥羽離宮からの瓦笵の移動、生産地内での瓦笵の移動、生産地間の笵の移動の事実が明らかとなり、池田征弘が『神出窯跡群』および本報告書において、その概要を示している。播磨の院政期の瓦生産については、こうした成果をもとに、今後、詳細な検討が行なわれると思われるので、ここでは播磨の瓦生産と深い関わりをもつ播磨守の造寺運動について簡単にまとめておきたい。

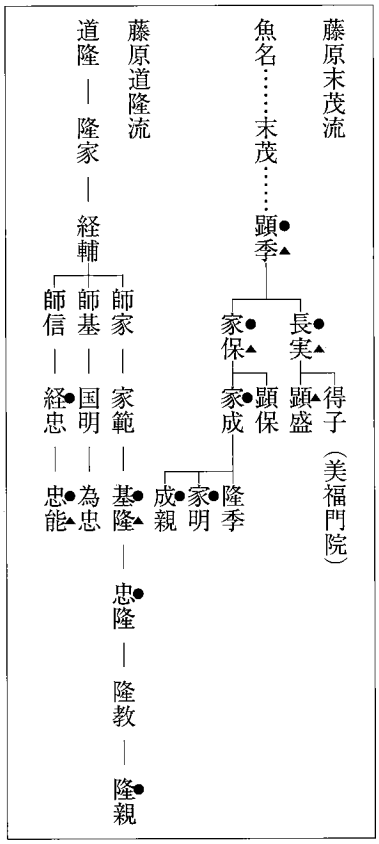
律令体制下では官立の大寺の建立にあたっては造寺司を置き、官物の調・庸などを用いてこれに当たらせたが、平安中期以降になると殿舎・伽藍を国ごとに割当て、造営の責任を造国司に負わせる方式が採用されるに至った。播磨国は、天延元年（973）の薬師寺の復興・永承元年（1046）の興福寺諸堂僧坊の復興にあたって他の諸国とともに造営を命じられ、また、延久元年（1070）には後三条天皇の御願の円宗寺の造進を命じられている。やがて、白河上皇による院政が開始されると、受領による成功活動が盛んに行なわれ、特に財力を背景にした播磨守による造寺造営は、承暦元年（1077）の高階為家の法勝寺の造営以降盛んに行なわれたことは周知のことである。

元木泰雄氏によれば、播磨守は伊予守とならんで、諸国の受領中で最も高い格式を有する地位であり、藤原顕季が嘉保元年（1094）に播磨守に任じられて以降、永治元年（1141）まで9代7人の播磨国司の歴任者が非参議従三位の地位を得ている[4]。播磨守は院政初期には高階為家が任じられているが、その後は藤原顕季の末茂流と藤原基隆の道隆流の両家系が任官を独占している。殊に、天仁元年（1108）に播磨守藤原基隆と伊予守藤原長実が任国を相轉して以後、両家系の間で、播磨と伊予の国守の相轉が繰り返されている。この間の康和年間から保延年間にかけての造寺・造営に関してはその大半が両家系に連なる人物の手になるものである。

播磨における院政期の瓦の生産窯としては、神出・三木・林崎三本松・魚橋があり、古代からの伝統的生産地である加古川市志方・相生窯跡群においても瓦生産が行われている。このうちで、先駆的な造瓦の役割を果たしたのが神出窯跡群と考えられ、丹治康明氏は法勝寺から神出堂ノ前支群と同笵の瓦の出土をもって、神出窯跡群の開始時期を11世紀後半に求めている[5]。三木窯跡群については、前述の通り7世紀に始まる須恵器生産は平安前期で一旦終了しており、平安後期の瓦生産には継続しない。三木地方における平安後期の窯業の再開については、大池支群や柳谷2号窯・宮ノ池窯に古い様相をもつ瓦が含まれているので、少なくとも12世紀初めの尊勝寺の創建の頃までにはさかのぼるのはほぼ確実であるが、11世紀後半までさかのぼるかどうかは現時点では不明である。これまでの分布調査では発見されている平安後期の窯跡はすべて瓦陶兼業窯で、先行する須恵器専用窯は発見されていない。今後も先行する須恵器窯の発見がないとすると、三木での平安時代後期の窯業生産は瓦の生産を契機として再開されたことになる。

かかる平安後期の播磨の瓦生産については、播磨守およびこれに連なる国衙機構の関与が指摘されてきた。例えば、鈴木久男氏は成菩提院三重塔使用の瓦笵および工人の移動に関して藤原基隆の関与を指

摘している[6]。但し、基隆は鳥羽御塔の完成時の前年には長実との間で播磨守と伊予守を相博し、以後、家保・家成との間で伊予守と播磨守を相博しており、その初期はともかく、恒常的に基隆自身が生産に関与していたとは考え難く、実際には国衙の管理下にあったと考えざるを得ない。但し、その管理形態には林崎三本松窯のように造瓦センター的な生産形態をもつものと三木窯跡群のように瓦陶兼業を主体とした在地的な生産形態を有するものがあり、平安後期の瓦の生産形態および調達方法のあり方に注目してよい。



第6表　藤原末茂流と道隆流系図
（●非参議従三位昇進者
▲修理大夫歴任者
播磨守歴任者）

平安京内の平安後期の建物の所用瓦については、中央の瓦を除いた地方産の瓦は播磨産が圧倒的に多く、播磨国造進以外の建物跡からも播磨産の瓦が多数出土する。上村和直氏は造寺国の大半が国内に瓦の生産地を有しておらず、また、国内に瓦の生産地を有する造寺国においても、造営建物所用瓦と国内の生産瓦が必ずしも対応していないことを指摘し、こうした状況については、各生産地から運搬された瓦が、各御所・寺院造営地近くの集積地にいったんプールされ、各建物の造営の際に、必要に応じて配分されたと想定している[7]。長秋記には鳥羽離宮勝光明院建立に関する記述があり、この中で、遣水に使用する3丈舟3艘分の瓦について、鳥羽殿から調達しようとしたが、鳥羽殿に保管されている瓦は汚損が激しく使用に耐えないので、別の場所から瓦の調達を計ったという記事が見える。この記事から、まず、鳥羽殿に瓦が保管されていること（但し、新古の瓦かどうかは不明）と鳥羽殿以外に瓦の保管場所があることことが窺え、各御所・寺院造営地近くの集積地にいったんプールされた可能性があることを示唆しているといえる。勝光明院の造進者は播磨守家成（経蔵）と伊予守忠隆であるが、実際の工事の奉行は皇后宮権大夫源師時であり、院庁の官人たる院司の手によって工事が進められている。

上記の勝光明院建立に関しては、その姿は直接みることができないが、当時、造営を司った官司に木工寮と修理職があり、両官司はともに都城・官衙の営造・修理などの国家的な営繕事業に指導的な役割を果たしている。とはいえ、浅香氏が指摘しているように、官営工房は高い技術的指導力を保持している一方で、9世紀に下部労働力の多くを喪失しており、10世紀以降生産能力を著しく低下させていたようである[8]。院政期には、院の近臣である高階為章は木工頭兼丹波守、藤原顕季は播磨守在任中に修理大夫に任じられており、この処遇は官営工房の生産能力の低下に対応して、富裕な受領をして長官に任命し、造寺・造営に当たらしめたと考えたい。事実、木工頭兼丹波守であった高階為章は丹波大山庄の下司に命じて、加古川河口の高砂に集積していた造営用の木材の運搬のために人夫30人の供出を命じている。また、修理職の大夫には藤原顕季が播磨守在任中の寛治8年（1094）に兼修理大夫に任じられて以降、播磨守の歴任者が任じられている。公卿補任には藤原顕季が保安3年に修理大夫を子長実に譲ると記載されており、以後、顕季の家系が世襲的に任じられている。木工寮の長官の官位が四位であるのに対して、修理職の長官は顕季以降、従三位の公卿が任じられており、当時、修理職が重要な官司であったことを窺わせる。修理職には木工のほか瓦工が所属しているが、所属の瓦工は中央の官営工房での瓦

生産に限られ、播磨の瓦生産に直接関与したものでなかろう。また、修理職が造寺・造営に関係した建物には法勝寺・尊勝寺・延勝寺などがあるが、いずれも瓦に関する記述は見えない。しかし、修理大夫は、内蔵頭・大蔵卿とともに院政期の経済関係の重要な官職[9]であり、播磨守と修理職を掌握したことは経済的基盤と営繕事業の両方を掌握したことになるわけで、播磨の瓦生産を促進せしめたものと考えたい。

註

(1)今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』1980年

(2)上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14　1978年

(3)久保弘幸・池田征弘・岡本一秀『神出窯跡群－神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財文化財報告書』1998年
兵庫県教育委員会

(4)元木泰雄「院政期における播磨守」『兵庫県の歴史』第22号　1986年

(5)丹治康明「東播磨における瓦生産－神出・魚住窯を中心に－」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』1987年

(6)鈴木久男「鳥羽離宮跡出土播磨国産瓦の一面」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』1999年

(7)上村和直「後期の瓦」『平安京提要』角川書店　1994年

(8)浅香年木『古代手工業史の研究』1971年

(9)橋本義彦「院政政権の一考察」『書陵部紀要』宮内庁書陵部　1954年

参考文献

鈴木久男「鳥羽離宮の瓦」『古瓦図考』1989年

鈴木久男・長宗繁一「鳥羽殿」『平安京提要』角川書店　1994年

鈴木久男「鳥羽離宮勝光明院の経蔵」

上村和直「平安京の瓦の概要」『平安京提要』角川書店　1994年

松原弘宣「修理職についての一研究」『ヒストリア』第78号　大阪歴史学会　1978年

竹内理三『寺領荘園の研究』

神崎勝・山仲進・徳原多喜雄　『神出　1986　神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』　妙見山麓遺跡調査会

角田文次「鳥羽勝光明院について」（上）・（中）・（下）『建築史』第６巻　1944年

上皇	修理大夫	播磨守 藤原末茂流	播磨守 藤原道隆流	播磨守 藤原良門流	播磨守 高階氏・他	年号・西暦		造寺・造宮関係記事
白河上皇					高階為家	承暦元	1077	法勝寺阿弥陀堂（丹波守藤原顕綱）法勝寺金堂・講堂・回廊・南大門・鐘楼・経蔵（**播磨守高階為家**）
						2	78	
						3	79	法成寺東西塔・講堂他再建
							80	
							81	
							82	
						永保 3	83	法勝寺九重塔・薬師堂・八角堂（伊予守**高階為家**）
							84	
						応徳 2	85	
						応徳 3	86	東寺五重塔　（丹波守源顕仲）
						・		鳥羽離宮後院
			1086.11			寛治 5	91	
			師			6	92	
			信			7	93	
			1094.01			嘉保元	94	
1097.7		1094.02				2	95	白河上皇閑院御所（**播磨守顕季**）
		顕				3	96	
		季				4	97	法成寺中門・回廊（安芸守藤原有俊）
	顕季					5	98	法勝寺九重塔修造（阿波守高階為遠）、鳥羽北殿（**高階為章**）
						康和元	99	
		1101.07				2	1100	
			1101.07			康和 3	01	南殿証金剛院（越前守**藤原家保**）
						4	02	尊勝寺東西塔・南大門（**播磨守基隆**）、金堂・講堂・鐘楼・経蔵・中門・回廊（但馬守高階仲章）、薬師堂・観音堂・五大堂（伊予守藤原国明）、灌頂堂（越後守藤原敦兼）
			基			5	03	
						長治元	04	大炊御門殿（伊予守藤原国明）、尊勝寺阿弥陀堂（越前守**高階為家**）
			隆			2	05	准胝堂・法華堂（近江守平時範）
						嘉承元	06	前斎院令子内親王堀川院御所（播磨守**藤原基隆**）
			1108.07			2	07	
						天仁元	08	
		1108.07				2	09	法勝寺曼陀羅堂、鳥羽御塔（伊予守**藤原基隆**）
		長				天永元	10	
		実				2	11	鳥羽新御塔（**播磨守藤原長実**）
						3	12	院御所大炊殿（丹波守**藤原忠隆**）
						永久元	13	
		1115.03				2	14	蓮華蔵院（備前守平正盛）
						3	15	大炊殿（**播磨守藤原基隆**）
			1115.03			4	16	賀茂上社多宝塔（但馬守**藤原家保**）
						5	17	土御門内裏（讃岐守藤原顕能）、蓮華蔵院三重塔（土佐守**藤原顕保**）
			基			元永元	18	最勝寺（但馬守**藤原忠隆**）
			隆			2	19	
			1121.06			保安元	20	
						2	21	二条堀河殿（安芸守藤原為忠）
1122.12		1121.06				3	22	
						4	23	二条東洞院殿（備中守藤原長親）
	長	家				天治元	24	
	実	保				2	25	

鳥羽上皇	1127.1 顕盛	1129.12		大治元	26	三条烏丸御所（**播磨守藤原家保**）・大炊御門万里小路殿（伊予守**藤原基隆・忠隆**）
				2	27	円勝寺白河新御堂五重塔（但馬守藤原淳兼息男）、白河三重塔（伊予守**藤原基隆**）
				3	28	鴨御祖社東塔（**播磨守藤原家保**）、円勝寺金堂・五間堂・九間堂、八条大宮御所（美作守藤原顕頼）
		基 1129.12		4	29	白河新御堂阿弥陀堂・三重塔（**播磨守藤原家保**）、尊勝寺御堂（甲斐守藤原範隆）
	1130.4 基隆	隆 1130.10		5	30	法金剛院（**播磨守藤原基隆**）、白河阿弥陀堂（伊予守**藤原家保**）、三条西殿（越後守**藤原清隆**）
		1130.10		天承元	31	
	1131.12 家保			長承元	32	実荘厳院（**播磨守藤原家成**）、法成寺両塔再建、得長寿院三十三間御堂
		家		2	33	
		成		3	34	白河北殿東御所（権中納言藤原顕頼）、三条烏丸殿（丹後守藤原為忠）
				保延元	35	仁和寺南院釈迦堂
	1136.1	1136.07		2	36	鳥羽勝光明院経蔵（**播磨守藤原家成**）・御堂（伊予守**藤原忠隆**）、仁和寺法金剛院三重塔・経蔵
			1137.01 清隆	3	37	
		1139.12		4	38	鳥羽離宮安楽寿院
				5	39	
		忠隆		6	40	鳥羽離宮鳥羽東殿三重塔
			藤原（名欠）	永治元	41	
		1141.12		康治元	42	
		顕 1143.03		2	43	仁和寺南院迎接堂
		保 1145.04		3 天養元	44	
	忠能		平忠盛	久安元	45	白河新御願堂（伊予守**藤原忠隆**）
				2	46	仏頂堂（権中納言**藤原家成**）
				3	47	鳥羽離宮安楽寿院南九体阿弥陀堂（民部卿藤原顕頼）
				4	48	
				5	49	
				6	50	延勝寺金堂・塔・一字金輪堂南大門他（**播磨守平忠盛**）
				仁平元	51	
				2	52	鳥羽離宮南北東西所々修補　上皇鳥羽殿田中新造御所御幸
			源顕親	3	53	
				久寿元	54	鳥羽離宮金剛心院釈迦堂・阿弥陀堂（讃岐守藤原成親）
				2	55	鳥羽離宮安楽寿院不動明王堂
			平清盛	保元元	56	
				2	57	
				3	58	
				平治元	59	
			藤原成範	永暦元	60	
		家明		応保元	61	
				2	62	
			邦綱	長寛元	63	延勝寺阿弥陀堂
				2	64	法住寺殿蓮華王院
				永万元	65	
		隆親		仁安元	66	
				2	67	
				3	68	
				嘉応元	69	
				2	70	
				承安元	71	
				2	72	
				3	73	
				4	74	
				安元元	75	
				2	76	
				治承元	77	法勝寺内薬師堂修造
				2	78	

太字　播磨守歴任者

第７表　院政期の造寺・造宮関係一覧

出土瓦一覧表（長・幅・厚の単位はcm、布目は１cm単位の本数）

報告番号	器形	分類	出土位置	長	幅	厚	布目	色調	備考
1-1001	丸瓦	Ⅱ	１号窯確認トレンチ	35.9	13.9	1.4	—	N8/0 灰白	
1-1002	丸瓦	Ⅱ	１号窯灰原付近	—	15.9	1.2	—	10YR7/3 にぶい黄橙	
1-1003	軒平瓦		１号窯尾根すじ	—	—	1.3	—	10YR8/3 浅黄橙	外面は磨滅
1-1004	平瓦	Ⅰ	１号窯灰原	—	—	1.3	6×7	2.5YR8/2灰白	
1-1005	平瓦	Ⅰ	１号窯灰原付近	—	—	1.6	5×6	5Y6/1 灰	
1-1006	平瓦	Ⅱ	１号窯灰原	—	—	1.7	—	7.5Y8/1 灰白	
1-1007	平瓦	Ⅱ	１号窯灰原	—	—	1.6	—	2.5Y4/1 黄灰	凸面に平行タタキ
1-1008	平瓦	Ⅱ	１号窯灰原	35.8	28.4	1.5	—	N8/0 灰白	凸面に無文タタキ
1-1009	平瓦	Ⅱ	１号窯灰原付近	37.7	27.2	1.7	—	2.5Y7/2 灰黄	
1-1010	平瓦	Ⅱ	１号窯確認トレンチ	—	24.9	1.5	—	2.5Y8/2 灰白	
1-1011	平瓦	Ⅱ	１号窯	—	28.7	1.8	—	N4/0 灰	
2-1001	軒丸瓦	5	２号窯灰原	37.4	15.2	1.7	—	5Y8/1 灰白	瓦当径15.2cm 丸瓦部はⅡ類
2-1002	軒丸瓦	5	２号窯灰原	—	—	1.9	—	N8/0 灰白	瓦当径14.9cm
2-1003	軒丸瓦	5	２号窯灰原	—	—	—	—	N3/0 暗灰	瓦当径15.7cm
2-1004	軒丸瓦	5	２号窯灰原	35.3	14.6	1.7	—	2.5YR8/1灰白	瓦当径14.4cm 丸瓦部はⅡ類
2-1005	軒丸瓦	5	２号窯灰原	—	—	1.9	—	N8/0 灰白	瓦当径14.6cm 瓦当面に離砂 丸瓦部はⅡ類
2-1006	軒丸瓦	1a	２号窯灰原最下層	—	14.8	1.2	—	2.5YR8/3淡黄	丸瓦部はⅡ類
2-1007	軒丸瓦	1b	２号窯灰原	—	—	2.2	—	5Y8/1 灰白	瓦当径16.4cm 丸瓦部はⅡ類
2-1008	軒丸瓦	1b	２号窯灰原	—	—	1.4	—	2.5YR7/2灰黄	丸瓦部はⅡ類
2-1009	軒丸瓦	1b	２号窯灰原	—	—	—	—	N2/0 灰	
2-1010	軒丸瓦	12	２号窯灰原	—	—	1.2	—	N5/0 灰	丸瓦部はⅡ類
2-1011	軒平瓦	2	２号窯灰原	39.6	27.3	2.0	—	2.5Y8/1 灰白	瓦当厚5.3cm 瓦当面に離砂 平瓦部はⅡ類
2-1012	軒平瓦	2	２号窯灰原	34.6	23.7	1.6	—	2.5Y8/1 灰白	瓦当厚5.3cm 瓦当面に離砂 平瓦部はⅡ類
2-1013	軒平瓦	2	２号窯灰原	35.3	23.8	1.7	—	2.5Y8/2 灰白	瓦当厚5.4cm 瓦当面に離砂 平瓦部はⅡ類
2-1014	軒平瓦	2	２号窯灰原	—	—	—	—	10YR8/1 灰	瓦当厚5.7cm 瓦当面に離砂
2-1015	軒平瓦	2	２号窯灰原	—	22.5	1.6	—	2.5Y8/2 灰白	瓦当面に離砂 平瓦部はⅡ類
2-1016	軒平瓦	2	２号窯灰原	—	—	—	—	2.5Y8/2 灰白	瓦当厚5.7cm 瓦当面に離砂
2-1017	軒平瓦	1a	２号窯灰原	—	22.8	1.4	—	5Y8/3 淡黄	平瓦部はⅡ類
2-1018	軒平瓦	8	２号窯灰原	37.2	27.3	1.8	—	2.5Y7/2 灰黄	瓦当厚4.6cm 平瓦部はⅡ類
2-1019	軒平瓦	7	２号窯灰原	—	—	1.9	—	2.5Y7/1 灰白	瓦当厚5.9cm 平瓦部はⅡ類
2-1020	軒平瓦	12	２号窯灰原	—	—	—	—	2.5Y8/3 淡黄	瓦当厚5.0cm
2-1021	軒平瓦	12	２号窯灰原	—	—	1.7	—	2.5Y8/2 灰白	瓦当厚5.3cm
2-1022	軒平瓦	12	２号窯灰原	—	—	1.5	—	2.5Y8/2 灰白	瓦当厚5.1cm
2-1023	軒平瓦	13	２号窯灰原	—	—	—	—	2.5Y8/1 灰白	瓦当面に離砂
2-1024	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	41.2	15.0	1.6	—	2.5Y8/2 灰白	
2-1025	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	39.8	13.9	1.4	—	N7/1 灰白	
2-1026	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	39.8	15.5	1.2	—	10YR8/2 灰白	
2-1027	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	39.7	17.9	1.9	—	2.5Y8/2 灰白	
2-1028	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	39.7	18.6	1.8	—	2.5YR8/1灰白	
2-1029	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	39.4	15.5	1.5	—	N6/0 灰	
2-1030	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	39.4	15.6	1.7	—	5Y7/1 灰白	
2-1031	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	39.3	13.5	1.6	—	N6/0 灰	
2-1032	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	38.9	18.1	1.9	—	5Y6/1 灰	
2-1033	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	38.6	17.0	1.7	—	5Y7/1 灰白	
2-1034	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	38.0	14.1	1.6	—	N5/0 灰	凸面に無文タタキ
2-1035	丸瓦	Ⅱ	２号窯灰原	37.7	16.9	1.6	—	7.5YR7/2明褐灰	

報告番号	器形	分類	出土位置	長	幅	厚	布目	色調	備考
2-1036	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	37.6	17.2	1.6	—	5P7/1 明紫灰	
2-1037	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	37.2	17.6	1.6	—	2.5Y6/1 黄灰	
2-1038	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.1	15.0	1.5	—	10YR8/1 灰白	
2-1039	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.5	14.8	1.4	—	N6/0 灰	
2-1040	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	35.8	16.9	1.4	—	2.5Y8/2 灰白	
2-1041	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	35.6	14.6	1.6	—	2.5Y8/2 灰白	
2-1042	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	35.5	16.7	1.3	—	10YR5/1 褐灰	
2-1043	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	34.7	19.1	1.0	—	N6/0 灰	
2-1044	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	33.8	14.7	1.4	—	2.5Y8/1 灰白	
2-1045	丸瓦	Ⅱ	2号窯灰原	—	15.5	1.5	—	N7/0 灰白	凸面に「×」ヘラ書き
2-1046	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	38.5	28.7	1.7	—	10YR8/1 灰白	
2-1047	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	37.6	28.2	1.6	—	2.5Y8/1 灰白	凹面に「×」ヘラ書き
2-1048	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	37.5	28.6	1.6	—	10YR8/1 灰白	
2-1049	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.8	29.6	1.6	—	N3/1 暗灰	
2-1050	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.8	27.6	1.5	—	N5/0 灰	
2-1051	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.8	29.1	1.5	—	10YR8/2 灰白	
2-1052	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.7	29.5	1.5	—	10YR8/2 灰白	
2-1053	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.5	25.0	1.5	—	10YR8/1 灰白	
2-1054	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.4	28.6	1.4	—	N6/0 灰	
2-1055	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	36.3	23.8	1.5	—	10YR7/2 にぶい黄橙	
2-1056	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	35.6	23.8	1.2	—	10YR8/2 灰白	
2-1057	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	34.6	26.3	1.3	—	5Y5/1 灰白	
2-1058	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	34.3	27.4	1.5	—	N7/0 灰	
2-1059	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	34.0	28.1	1.5	—	N7/0 灰	
2-1060	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	34.2	23.5	1.7	—	N6/0 灰	
2-1061	平瓦	Ⅱ	2号窯灰原	31.0	23.5	1.3	—	10YR7/1 灰白	
5-1001	軒丸瓦	1b	5号窯表採	—	—	—	—	2.5Y6/2 灰黄	
5-1002	軒丸瓦	3	5号窯	—	—	2.2	—	2.5Y8/1 灰白	
5-1003	丸瓦	Ⅱ	5号窯表採	—	—	1.0	—	2.5Y8/1 灰白	
5-1004	平瓦	Ⅰ	5号窯灰原上層	—	—	1.5	6×7	5Y8/2 灰白	
5-1005	平瓦	Ⅱ	5号窯灰原上層	—	—	1.4	—	7.5Y7/1 灰白	
5-1006	平瓦	Ⅱ	5号窯表採	—	—	1.3	—	N6/0 灰	
5-1007	平瓦	Ⅱ	5号窯灰原上層	—	—	1.1	—	5B6/1 青灰	
5-1008	平瓦	Ⅱ	5号窯表採	—	—	1.5	—	N6/0 灰白	凹面に離砂
6-1001	軒丸瓦		6号窯灰原	—	13.5	1.4	10×8	N4/0 灰	丸瓦部はⅡ類
6-1002	軒丸瓦		6号窯灰原	—	—	—	—	N5/0 灰	
6-1003	軒平瓦		6号窯灰原	—	—	—	—	5Y4/1 灰	瓦当厚4.9cm
6-1004	軒平瓦	20	6号窯灰原	—	—	—	—	N6/0 灰	瓦当厚4.2cm
6-1005	鬼瓦		6号窯灰原	—	—	—	—	N5/0 灰	
6-1006	道具瓦		6号窯東区第2層	—	—	—	—	5Y7/1 灰白	
6-1007	丸瓦	Ⅰ	6号窯灰原	—	16.5	—	10×11	5PB3/1 暗青灰	
6-1008	丸瓦	Ⅰ	6号窯灰原	—	—	—	8×9	5Y6/1 灰	
6-1009	丸瓦	Ⅰ	6号窯灰原	—	—	1.3	10×10	N6/0 灰	
6-1010	丸瓦	Ⅱ	6号窯灰原	—	13.9	1.1	—	N5/0 灰	凸面に離砂
6-1011	丸瓦	Ⅱ	6号窯灰原	—	—	1.4	—	10Y5/1 灰	
6-1012	丸瓦	Ⅱ	6号窯灰原	—	—		—	N6/0 灰	
6-1013	平瓦	Ⅰ	6号窯灰原	38.2	21.6	1.2	9×11	2.5Y6/1 灰	
6-1014	平瓦	Ⅰ	6号窯灰原	—	24.3	1.3	8×5	7.5Y5/1 灰	
6-1015	平瓦	Ⅰ	6号窯灰原	—	—	1.8	7×6	N5/0 灰	凹面に離砂
6-1016	平瓦	Ⅱ	6号窯灰原	—	—	1.2	—	N5/0 灰	

報告番号	器形	分類	出土位置	長	幅	厚	布目	色調	備考
7-1001	軒丸瓦	1b	7号窯流土	—	—	1.5	—	2.5GY7/1明オリーブ灰	瓦当径14.6cm 瓦当面に離砂
7-1002	軒平瓦	4	7号窯流土	—	—	1.4	10×10	N7/0 灰白	瓦当厚4.2cm 平瓦部はⅡ類
7-1003	軒平瓦	4	7号窯流土	—	—	1.2	9×7	10Y6/1 灰	瓦当厚4.0cm 平瓦部はⅡ類
7-1004	軒平瓦	9	7号窯流土	—	—	1.6	6×7	7.5YR4/1褐灰	瓦当厚4.5cm 平瓦部はⅡ類
7-1005	軒平瓦		7号窯流土	—	19.1	1.5	5×4	5Y5/1 灰	平瓦部はⅡ類
7-1006	丸瓦	Ⅰ	7号窯流土	—	—	1.2	6×8	5Y7/2 灰白	
7-1007	丸瓦	Ⅰ	7号窯流土	—	—	1.4	9×9	2.5Y8/2 灰白	
7-1008	丸瓦	Ⅱ	7号窯流土	—	—	1.5	—	5Y8/2 灰白	
7-1009	丸瓦	Ⅰ	7号窯流土	—	—	1.4	16×10	N4/0 灰白	
7-1010	丸瓦	Ⅱ	7号窯表土	—	—	1.6	—	N7/0 灰白	
7-1011	丸瓦	Ⅱ	7号窯流土	—	—	1.5	—	5Y7/1 灰白	
7-1012	平瓦	Ⅰ	7号窯流土	—	—	1.1	14×11	2.5Y8/2 灰白	
7-1013	平瓦	Ⅰ	7号窯表土	—	—	2.1	9×9	N6/0 灰	
7-1014	平瓦	Ⅰ	7号窯流土	—	—	1.8	5×6	2.5Y8/2 灰白	
7-1015	平瓦	Ⅱ	7号窯表土	—	—	1.2	—	7.5Y5/1 灰	
7-1016	平瓦	Ⅱ	7号窯流土	—	25.9	1.2	—	2.5Y8/2 灰白	
8-1001	軒丸瓦	2	8号窯	—	—	—	—	N5/0 灰	瓦当径13.3cm
8-1002	丸瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	14.9	1.2	—	7.5YR6/2灰褐	
8-1003	丸瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	1.2	—	N6/0 灰	
8-1004	丸瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	1.4	—	N4/0 灰	
8-1005	丸瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	1.3	—	7.5Y7/1 灰白	
8-1006	丸瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	0.9	—	N4/0 灰	
8-1007	丸瓦	Ⅱ	8号窯	—	—	1.8	—	N6/0 灰	
8-1008	丸瓦	Ⅱ	8号窯	—	—	1.9	—	5Y6/2 灰オリーブ	
8-1009	平瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	1.5	—	N6/0 灰	
8-1010	平瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	1.2	—	N5/0 灰	
8-1011	平瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	1.5	—	5Y6/1 灰	
8-1012	平瓦	Ⅱ	8号窯灰原	—	—	1.3	—	N6/0 灰	
10-1001	軒丸瓦	9	10号窯表土	—	—	—	—	2.5Y5/1 黄灰	瓦当面に離砂
10-1002	軒丸瓦	9	10号窯窯体表土	—	—	—	—	5Y6/1 灰	瓦当面に離砂
10-1003	軒丸瓦	8	10号窯灰原表土	—	—	—	—	2.5Y7/2 灰黄	
10-1004	軒丸瓦	10	10号窯表土	—	—	1.3	—	2.5Y8/2 灰白	
10-1005	軒丸瓦	10	10号窯窯体表土	—	—	1.5	—	5Y6/1 灰	
10-1006	軒丸瓦	10	10号窯表土	—	—	1.9	—	2.5Y7/3 浅黄	
10-1007	軒丸瓦	10	10号窯表土	—	—	—	—	2.5Y7/2 灰黄	平瓦部はⅡ類
10-1008	軒平瓦	10	10号窯表土	—	—	1.6	—	2.5Y8/2 灰白	平瓦部はⅡ類 瓦当面に離砂
10-1009	軒平瓦	9	10号窯表土	—	—	1.6	—	2.5Y7/1 灰白	瓦当厚4.1cm 平瓦部はⅡ類
10-1010	軒平瓦	9	10号窯窯体	—	—	1.3	—	2.5Y8/1 灰白	瓦当厚5.0cm 平瓦部はⅡ類
10-1011	軒平瓦	9	10号窯表土	—	—	1.3	—	5Y6/1 灰	瓦当厚4.5cm 平瓦部はⅡ類
10-1012	軒平瓦	9	10号窯表土	—	22.3	1.4	—	7.5YR7/2明褐灰	平瓦部はⅡ類
10-1013	軒平瓦	12	10号窯表土	—		1.5	—	7.5YR8/1灰白	瓦当厚4.6cm 平瓦部はⅡ類
10-1014	軒平瓦	12	10号窯窯体	—	—	1.5	—	10YR8/4 浅黄橙	瓦当厚4.8cm 平瓦部はⅡ類
10-1015	軒平瓦	12	10号窯表土	—	—	—	—	2.5Y7/3 浅黄	瓦当厚4.9cm
10-1016	軒平瓦	12	10号窯窯体	—	—	1.3	—	2.5Y8/3 浅黄	瓦当厚5.4cm 平瓦部はⅡ類
10-1017	軒平瓦	12	10号窯窯体	36.0	28.1	1.6	—	2.5Y8/2 灰白	平瓦部はⅡ類
10-1018	軒平瓦	13	10号窯表土	—	—	1.4	—	2.5Y7/2 灰黄	平瓦部はⅡ類
10-1019	軒平瓦	19	10号窯窯体	—	—	1.7	—	2.5Y7/2 灰黄	瓦当厚4.9cm 瓦当面に離砂 平瓦部はⅡ類
10-1020	丸瓦	Ⅰ	10号窯窯体埋土	39.3	16.8	1.3	7×6	2.5Y8/3 淡黄	
10-1021	丸瓦	Ⅰ	10号窯窯体埋土	38.1	14.7	1.7	8×8	10YR7/3 にぶい黄橙	

報告番号	器形	分類	出土位置	長	幅	厚	布目	色調	備考
10-1022	丸瓦	Ⅰ	10号窯窯体埋土	37.5	15.7	1.4	5×6	5Y6/1 黄灰	
10-1023	丸瓦	Ⅰ	10号窯窯体埋土	——	15.4	2.0	9×8	10YR8/1 灰白	
10-1024	丸瓦	Ⅰ	10号窯窯体埋土	——	13.5	1.1	6×5	7.5YR8/2灰白	
10-1025	丸瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	14.2	1.0	——	7.5Y5/1 灰	
10-1026	丸瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	17.1	1.0	——	5Y4/1 灰	
10-1027	丸瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	15.6	1.7	——	10YR8/3 浅黄橙	
10-1028	丸瓦	Ⅱ	10号窯窯体表土	——	19.7	1.2	——	10YR5/1 褐灰	
10-1029	丸瓦	Ⅱ	10号窯窯体表土	——	17.6	1.1	——	2.5Y7/1 灰白	
10-1030	丸瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	16.8	1.4	——	N5/0 灰	
10-1031	平瓦	Ⅰ	10号窯窯体埋土	36.3	20.3	1.6	7×6	7.5YR7/6橙	
10-1032	平瓦	Ⅰ	10号窯窯体内	33.6	22.0	2.0	8×9	5YR7/8 橙	
10-1033	平瓦	Ⅰ	10号窯窯体内	——	25.9	2.1	11×11	2.5Y5/1 黄灰	
10-1034	平瓦	Ⅰ	10号窯窯体内	——	23.5	1.5	6×6	2.5Y7/1 灰白	
10-1035	平瓦	Ⅰ	10号窯窯体	——	22.0	1.6	9×7	2.5Y8/1 灰白	
10-1036	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	38.7	33.0	1.3	——	10YR6/1 褐灰	
10-1037	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	38.2	30.0	1.3	——	10YR6/4 にぶい黄橙	
10-1038	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	38.1	29.7	1.4	——	2.5Y8/2 灰白	
10-1039	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体内	37.9	29.0	1.1	——	2.5Y7/4 浅黄	
10-1040	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	36.9	28.8	1.3	——	10YR7/2 にぶい黄橙	
10-1041	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	36.7	28.8	1.3	——	10YR7/6 明黄橙	
10-1042	平瓦	Ⅱ	10号窯表土	32.3	？？.？	1.3	——	2.5YR8/3浅黄	
10-1043	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	32.0	23.7	1.0	——	N6/0 灰	
10-1044	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	38.7	——	1.3	——	2.5Y8/1 灰白	
10-1045	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	28.6	——	1.3	——	7.5Y6/1 灰	
10-1046	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	29.7	1.1	——	2.5Y8/2 灰白	
10-1047	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	28.8	1.3	——	10YR7/2 にぶい黄橙	
10-1048	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	26.8	1.6	——	2.5Y6/2 灰黄	
10-1049	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	25.2	1.4	——	2.5Y8/3 淡黄	
10-1050	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	25.0	1.4	——	7.5YR8/3浅黄橙	凹面に離砂
10-1051	平瓦	Ⅱ	10号窯窯体	——	23.1	1.4	——	2.5Y6/1 黄灰	
10-1052	平瓦	Ⅱ	10号窯表土	——	18.2	1.1	——	7.5YR7/3にぶい橙	
15-1001	軒平瓦	6	15号窯窯体表土	38.4	28.1	1.6	——	10YR8/3 浅黄橙	瓦当厚6.4cm 平瓦部はⅡ類
15-1002	軒平瓦	6	15号窯窯体	39.2	28.4	1.5	——	2.5Y5/1 黄灰	瓦当厚6.5cm 平瓦部はⅡ類
15-1003	軒平瓦	6	15号窯窯体	39.8	28.7	1.6	——	N6/0 灰白	瓦当厚6.3cm 平瓦部はⅡ類
15-1004	軒丸瓦	1b	15号窯窯体	——	——	1.6	——	2.5Y7/1 灰白	瓦当径15.0cm
15-1005	丸瓦	Ⅱ	15号窯	29.7	14.4	1.3	——	2.5Y5/2 暗灰黄	
15-1006	丸瓦	Ⅱ	15号窯	33.7	14.8	1.3	——	2.5Y7/4 浅黄	
15-1007	丸瓦	Ⅱ	15号窯窯体	35.8	14.8	1.1	——	10YR7/2 にぶい黄橙	
15-1008	丸瓦	Ⅱ	15号窯窯体表土	40.9	16.8	1.4	——	N6/0 灰	
15-1009	丸瓦	Ⅱ	15号窯	41.0	16.4	1.5	——	7.5YR7/4にぶい橙	
15-1010	丸瓦	Ⅱ	15号窯窯体	41.1	18.9	1.6	——	5YR5/2 灰褐	
15-1011	丸瓦	Ⅱ	15号窯	41.6	15.0	2.0	——	10YR7/1 灰白	
15-1012	丸瓦	Ⅱ	15号窯表土	——	15.9	1.5	——	5Y6/1 灰	
15-1013	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	41.0	29.1	2.0	——	N5/0 灰	
15-1014	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体表土	40.0	29.3	1.7	——	2.5Y8/1 灰白	
15-1015	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	39.9	28.1	1.8	——	N5/0 灰	
15-1016	平瓦	Ⅱ	15号窯表土	39.7	29.3	1.7	——	5Y5/1 灰	
15-1017	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	39.7	28.7	1.6	——	5Y5/1 灰	
15-1018	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	39.7	27.9	1.6	——	2.5Y7/1 灰白	
15-1019	平瓦	Ⅱ	15号窯	39.5	29.5	1.7	——	N5/0 灰	

報告番号	器形	分類	出土位置	長	幅	厚	布目	色調	備考
15-1020	平瓦	Ⅱ	15号窯表土	39.3	29.5	1.6	—	N5/0 灰	
15-1021	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	39.3	29.2	1.6	—	2.5Y7/2 灰黄	
15-1022	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体表土	39.3	28.5	1.7	—	5Y7/1 灰白	
15-1023	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	39.3	28.3	1.7	—	N5/0 灰	
15-1024	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	39.3	29.2	1.7	—	7.5YR7/4にぶい橙	
15-1025	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	39.0	28.6	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙	
15-1026	平瓦	Ⅱ	15号窯表土	38.9	27.7	1.4	—	10YR7/3 にぶい黄橙	
15-1027	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体表土	38.9	28.9	1.7	—	10YR8/4 浅黄橙	
15-1028	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体表土	38.6	28.0	1.3	—	10YR8/2 灰白	
15-1029	平瓦	Ⅱ	15号窯	38.5	29.2	1.8	—	10YR8/3 浅黄橙	
15-1030	平瓦	Ⅱ	15号窯	38.4	28.8	1.4	—	N6/0 灰	
15-1031	平瓦	Ⅱ	15号窯表土	38.4	28.3	1.6	—	10YR8/2 灰白	
15-1032	平瓦	Ⅱ	15号窯表土	38.3	28.0	1.2	—	2.5Y8/2 灰白	
15-1033	平瓦	Ⅱ	15号窯表土	36.5	26.6	1.5	—	7.5Y8/1 灰白	
15-1034	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	36.1	25.3	1.6	—	5Y8/2 灰白	
15-1035	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	36.4	23.0	1.5	—	2.5Y7/4 浅黄	
15-1036	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	36.2	23.3	1.6	—	10YR7/4 にぶい黄橙	
15-1037	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体表土	36.0	23.2	1.6	—	10YR6/3 にぶい黄橙	
15-1038	平瓦	Ⅱ	15号窯	35.7	23.3	1.4	—	10YR7/1 灰白	
15-1039	平瓦	Ⅱ	15号窯窯体	29.5	21.3	1.0	—	10YR7/3 にぶい橙	
15-1040	平瓦	Ⅱ	15号窯	29.4	21.2	1.0	—	10YR7/2 にぶい橙	
M-1001	軒丸瓦	1b	宮の池表土	—	—	1.4	—	2.5Y7/3 浅黄	瓦当面に離砂　丸瓦部はⅡ類
M-1002	軒丸瓦	1b	宮の池表土	—	—	—	—	N7/0 灰白	瓦当面に離砂
M-1003	軒丸瓦	1b	宮の池表土	—	—	1.4	—	N7/0 灰白	瓦当面に離砂
M-1004	軒丸瓦	1b	宮の池表土	—	—	1.6	—	5Y7/1 灰白	
M-1005	軒丸瓦	1b	宮の池表土	—	—	1.5	—	N7/0 灰白	瓦当面に離砂
M-1006	軒丸瓦	4	宮の池表土	—	—	—	—	7.5Y7/1 灰白	
M-1007	軒丸瓦	6	宮の池表土	—	—	—	—	5Y6/1 灰	瓦当径15.7cm
M-1008	軒丸瓦	6	宮の池表土	—	—	1.5	—	N6/0 灰	瓦当径16.1cm
M-1009	軒丸瓦	6	宮の池表土	—	—	1.9	—	10YR8/1 灰白	瓦当径15.5cm
M-1010	軒丸瓦	6	宮の池表土	—	—	—	—	10YR7/6 明黄褐	瓦当径15.7cm
M-1011	軒丸瓦	7	宮の池表土	—	—	2.2	—	2.5Y7/3 浅黄	瓦当径14.5cm
M-1012	軒丸瓦	7	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y8/2 灰白	
M-1013	軒丸瓦	7	宮の池表土	—	—	2.0	—	2.5Y7/3 浅黄	瓦当径15.8cm
M-1014	軒丸瓦	7	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y7/3 浅黄	瓦当径15.0cm
M-1015	軒丸瓦	11	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y7/1 灰白	瓦当径15.3cm
M-1016	軒平瓦	1b	宮の池表土	35.3	23.8	1.3	—	5GY2/1 オリーブ黒	瓦当厚5.2cm　平瓦部はⅡ類
M-1017	軒平瓦	1b	宮の池表土	—	—	1.4	—	5Y5/1 灰	瓦当厚5.4cm　平瓦部はⅡ類
M-1018	軒平瓦	1b	宮の池表土	—	—	1.5	—	2.5Y7/1 灰白	瓦当厚5.5cm　瓦当面に離砂
M-1019	軒平瓦	1b	宮の池表土	—	—	—	—	5Y8/1 灰	瓦当厚5.6cm　平瓦部はⅡ類
M-1020	軒平瓦	5	宮の池表土	—	—	1.2	—	2.5Y8/1 灰白	
M-1021	軒平瓦	3	宮の池表土	—	—	1.4	—	2.5Y8/2 灰白	瓦当厚5.6cm　平瓦部はⅡ類
M-1022	軒平瓦	12	宮の池表土	—	—	—	—	N5/0 灰	瓦当厚4.4cm　平瓦部はⅡ類
M-1023	軒平瓦	12	宮の池表土	—	—	1.8	—	10GY4/1 暗緑灰	
M-1024	軒平瓦	15	宮の池表土	—	—	1.8	—	5Y6/1 灰	瓦当厚5.4cm　平瓦部はⅡ類 瓦当面に離砂
M-1025	軒平瓦	15	宮の池表土	—	—	—	—	7.5Y6/1 灰	瓦当面に離砂
M-1026	軒平瓦	15	宮の池表土	—	—	—	—	N5/0 灰	瓦当厚5.1cm　瓦当面に離砂
M-1027	軒平瓦	16	宮の池表土	—	—	—	—	10Y6/1 灰	
M-1028	軒平瓦	16	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y8/2 灰白	

報告番号	器形	分類	出土位置	長	幅	厚	布目	色調	備考
M-1029	軒平瓦	16	宮の池表土	—	—	1.4	—	N6/0 灰	
M-1030	軒平瓦	17	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y8/2 灰白	瓦当厚5.9cm
M-1031	軒平瓦	14	宮の池表土	—	—	1.5	—	5Y6/1 灰	瓦当厚5.8cm 瓦当面に離砂 平瓦部はⅡ類
M-1032	軒平瓦	14	宮の池表土	—	—	—	—	N4/0 灰	瓦当厚5.8cm 瓦当面に離砂
M-1033	軒平瓦	14	宮の池表土	—	—	—	—	N5/0 灰	瓦当厚5.2cm 瓦当面に離砂
M-1034	軒平瓦		宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y8/2 灰白	
M-1035	軒平瓦		宮の池表土	—	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	
M-1036	軒平瓦		宮の池表土	—	—	—	—	10YR8/3 浅黄橙	
M-1037	軒平瓦		宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y6/1 黄灰	
M-1038	丸瓦	Ⅱ	宮の池表土	—	15.1	1.3	—	5Y6/2 灰オリーブ	
M-1039	丸瓦	Ⅱ	宮の池表土	35.8	14.4	1.4	—	2.5Y7/2 灰黄	ヘラ記号あり
M-1040	丸瓦	Ⅱ	宮の池表土	35.5	13.7	1.5	—	2.5Y6/3 にぶい黄	
M-1041	丸瓦	Ⅱ	宮の池表土	34.7	13.0	1.5	—	2.5Y8/1 灰白	
M-1042	丸瓦	Ⅱ	宮の池表土	34.3	14.9	1.1	—	5Y6/1 灰	
M-1043	平瓦	Ⅱ	宮の池表土	35.0	25.0	1.3	—	N5/0 灰	
M-1044	平瓦	Ⅱ	宮の池表土	37.7	25.7	1.5	—	2.5Y6/1 黄灰	
M-1045	道具瓦	Ⅱ	宮の池表土	41.8	—	2.3	—	2.5Y8/2 灰白	塼
M-1046	道具瓦	Ⅱ	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y8/2 灰白	用途不明品
M-1047	道具瓦	Ⅱ	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y8/1 灰白	用途不明品
M-1048	道具瓦	Ⅱ	宮の池表土	—	—	—	—	2.5Y8/2 灰白	用途不明品

報告書抄録

ふりがな	くるみ・あとべ　かまあとぐん
書　　名	久留美・跡部窯跡群
副 書 名	山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告
巻　　次	ＸＸＸ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第186冊
編著者名	森内秀造・高瀬一嘉・多賀茂治・仁尾一人・池田征弘
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所 在 地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　　TEL　078-531-7011
発行年月日	西暦1999（平成11）年３月31日

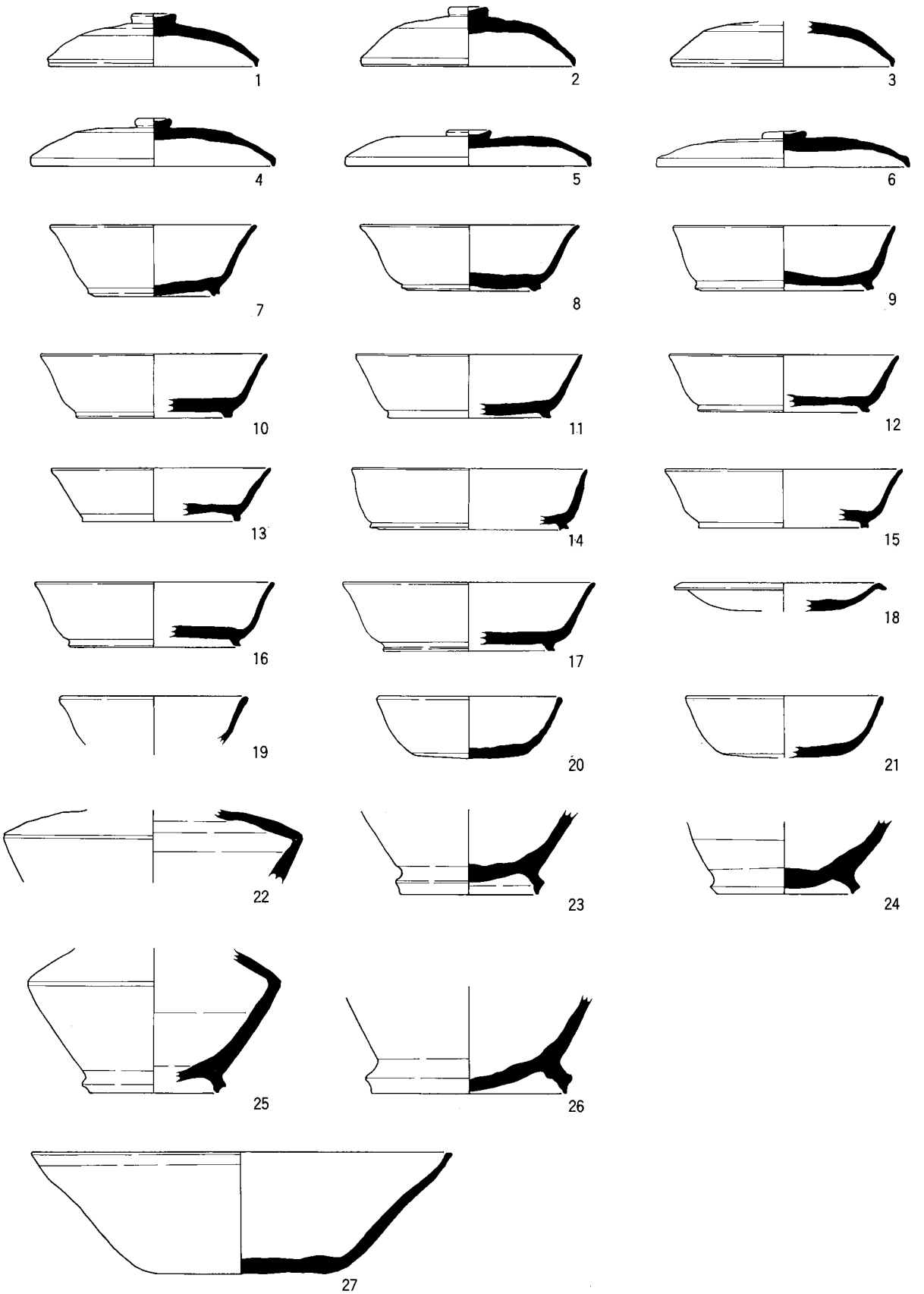
所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査
		市町村	調査番号					
下記　参照	兵庫県三木市（ひゅごけんみきし） 久留美字柳谷（くるみあざやなぎだに） 1851-151他	28215	本文 第１表 参照	34度 49分 00秒	135度 10分 00秒	本文　第１表　参照		山陽自動車道建設に伴う発掘調査

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
西ノ谷窯跡			窯　体		
跡部４号窯	須恵器		窯　体		
久留美柳谷	窯　跡	奈良時代		須恵器	「中」・「下」の刻書須恵器
11号窯			窯体・灰原		
12号窯			窯体・灰原		出土
13号窯			窯体・灰原		
14号窯			灰　原		
久留美柳谷					
１号窯			灰　原		
２号窯			灰　原	須恵器	尊勝寺・法住寺殿所用の瓦生産
５号窯	瓦陶	平安時代	灰　原		
６号窯	兼業窯	後期	灰　原	土師器	須恵器・土師器・瓦の併焼
７号窯			灰　原		
８号窯			灰　原	瓦	
10号窯			窯　体		
15号窯			窯　体		

図　　面

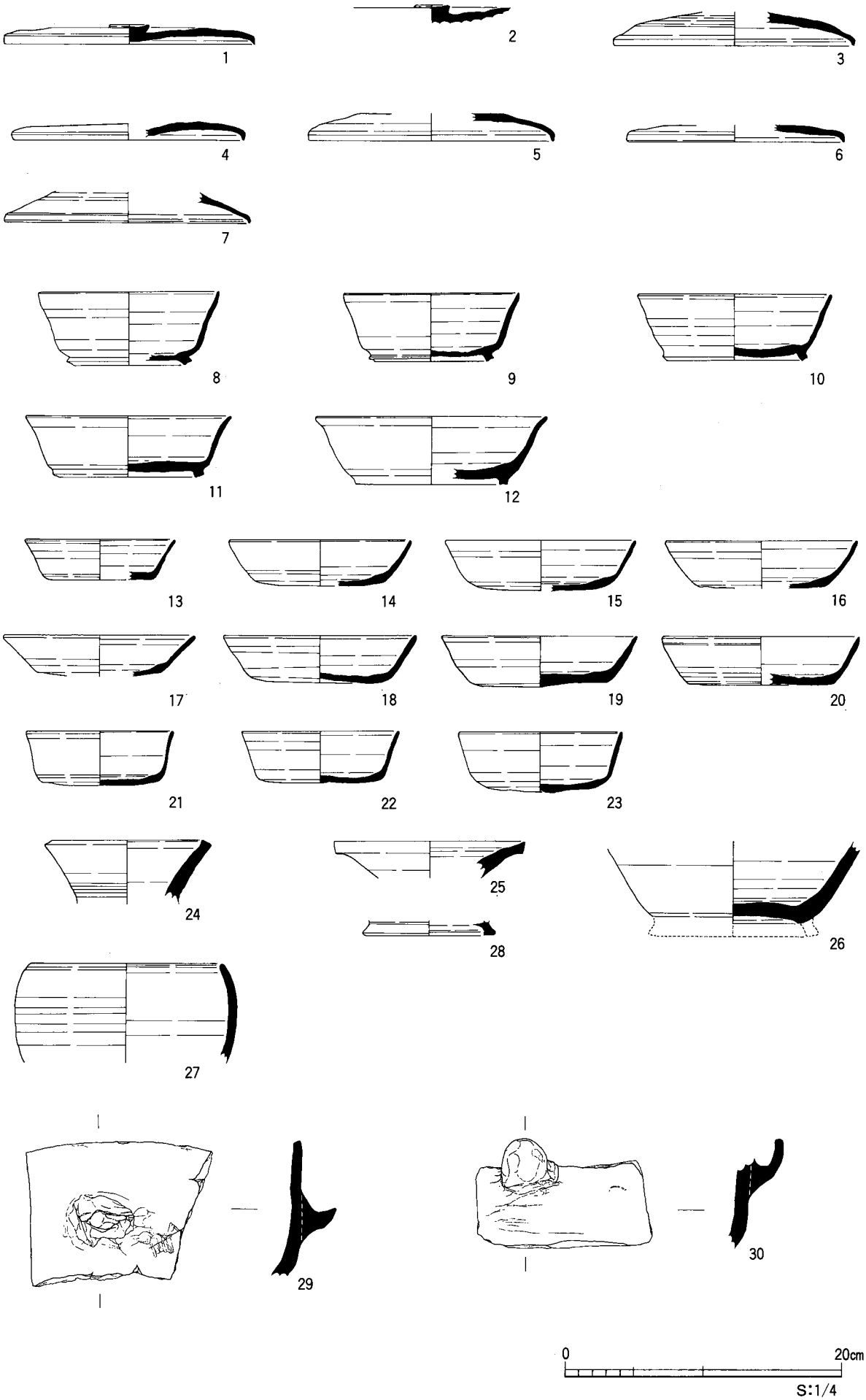
第１図

西ノ谷窯跡　出土土器



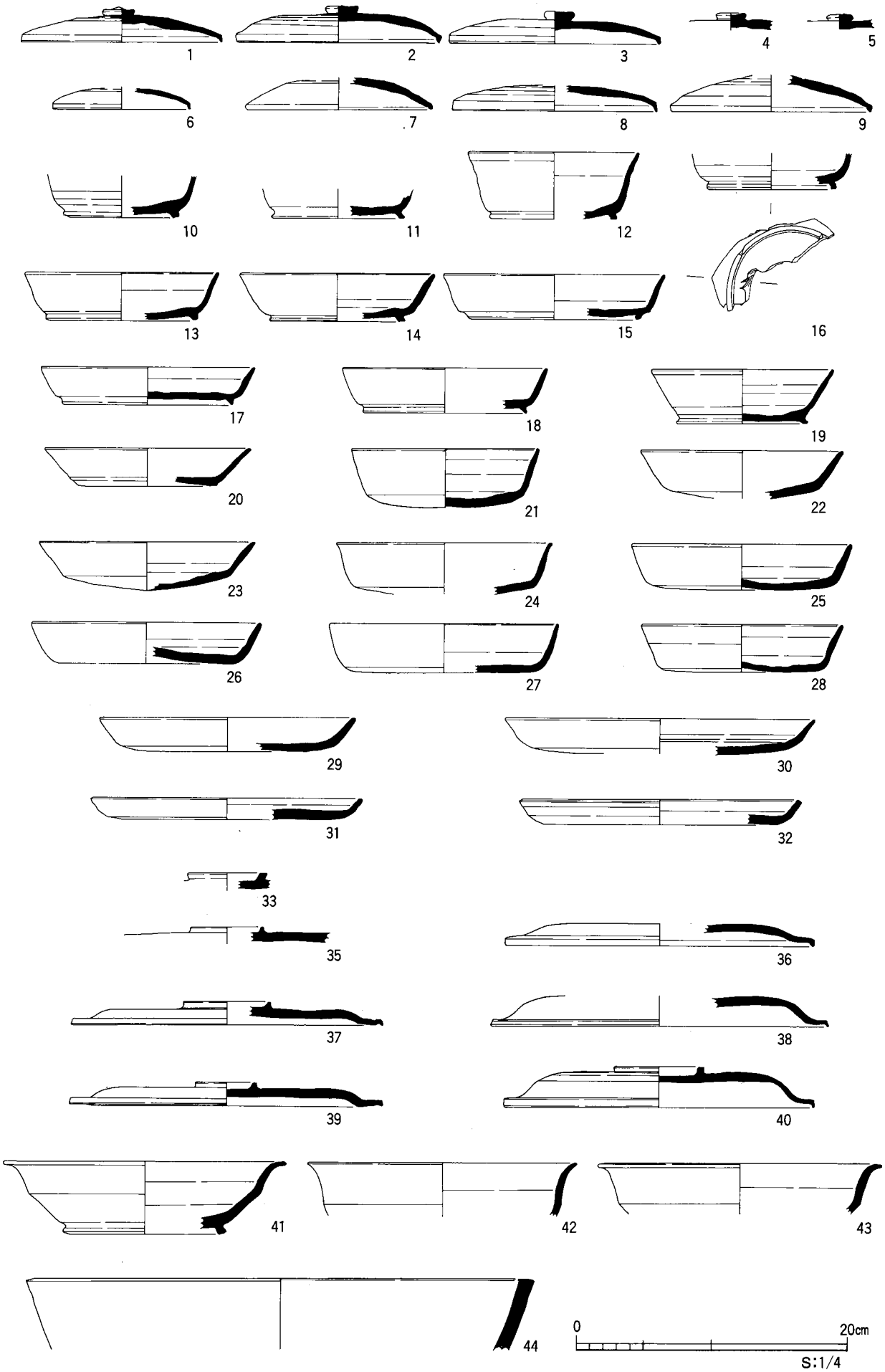
第2図

跡部4号窯　出土土器



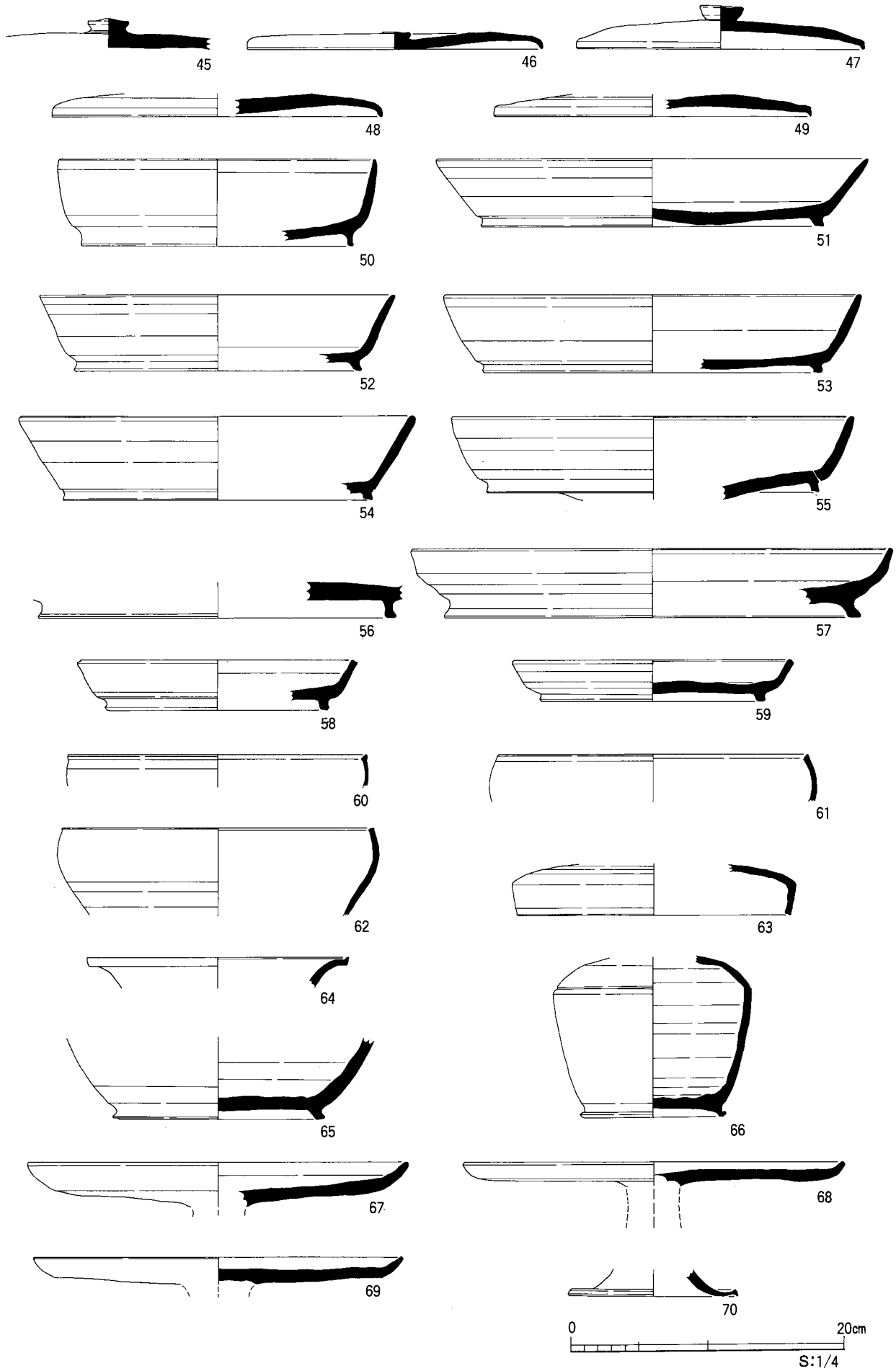
第３図

柳谷11号窯　窯体出土土器１



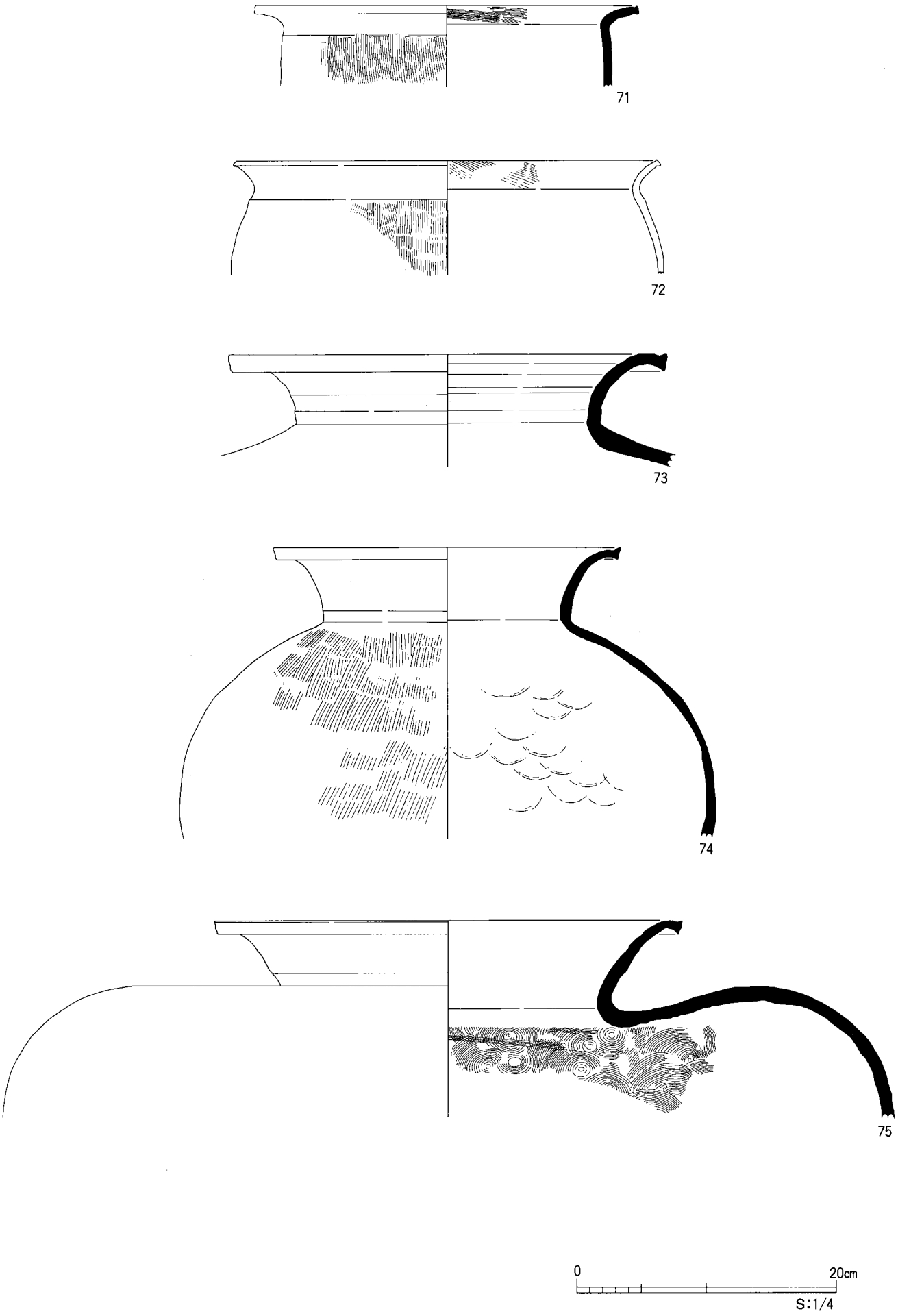
第４図

柳谷11号窯　窯体出土土器２



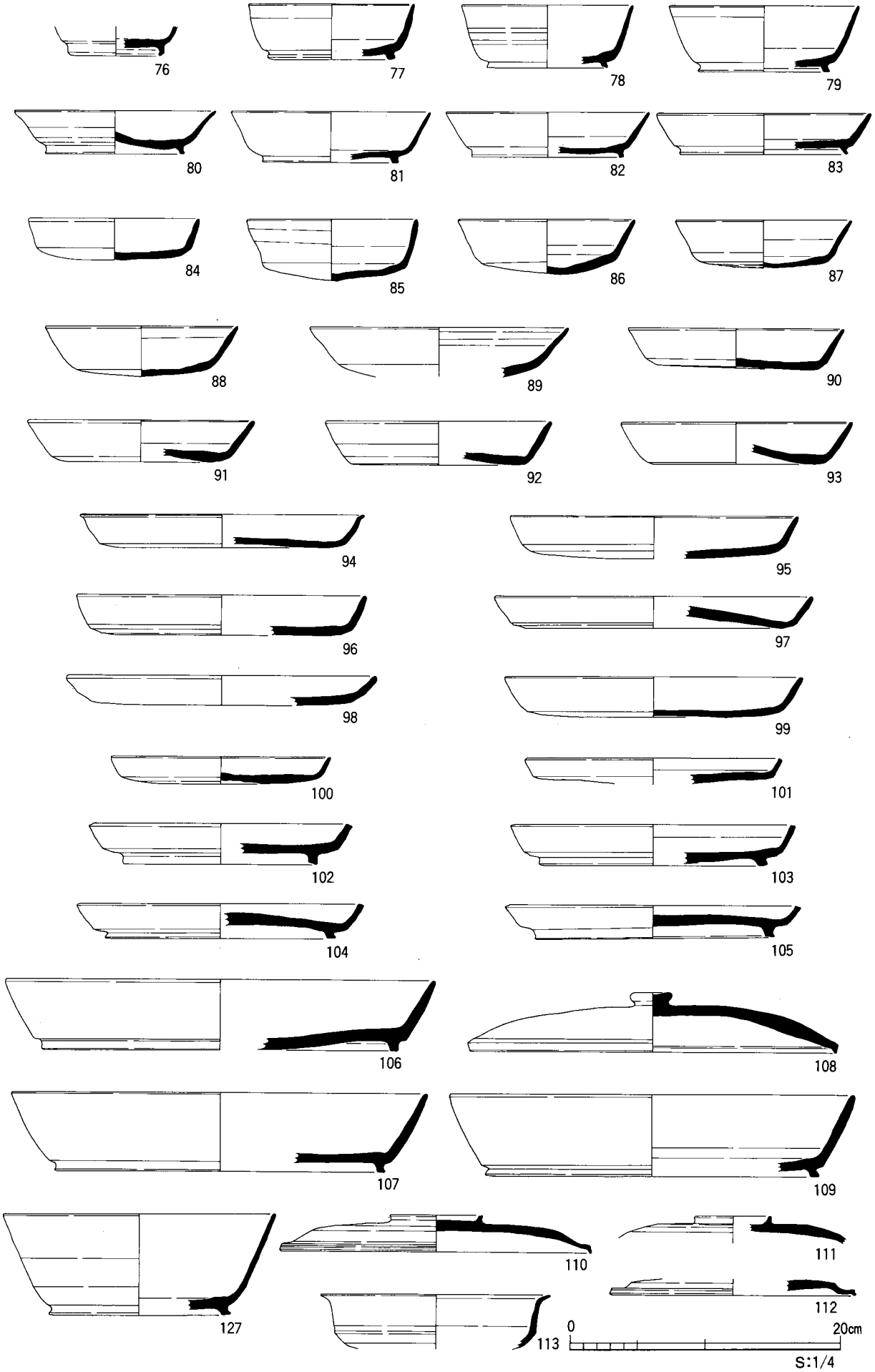
第5図

柳谷11号窯　窯体出土土器3



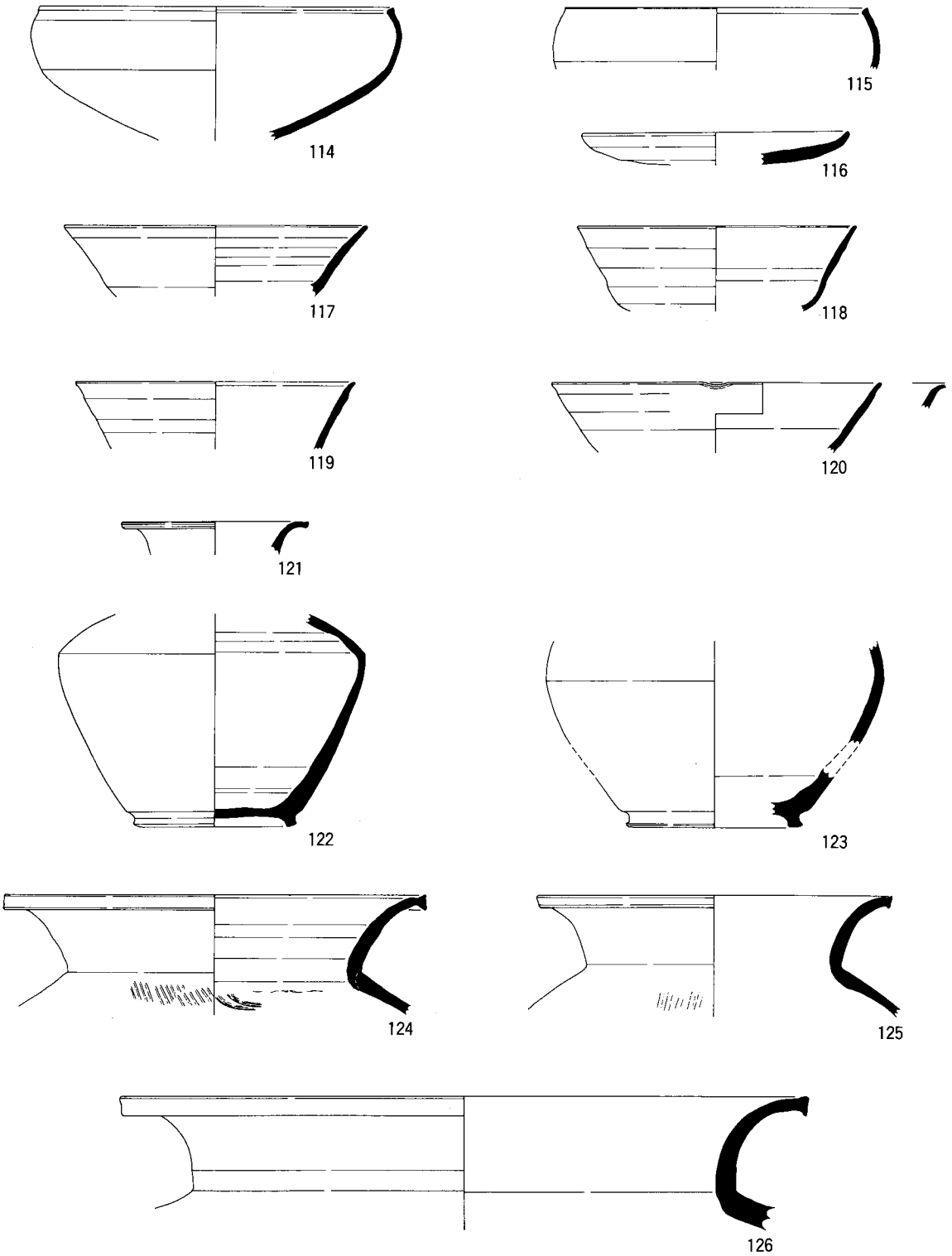
第６図

柳谷11号窯　灰原出土土器１



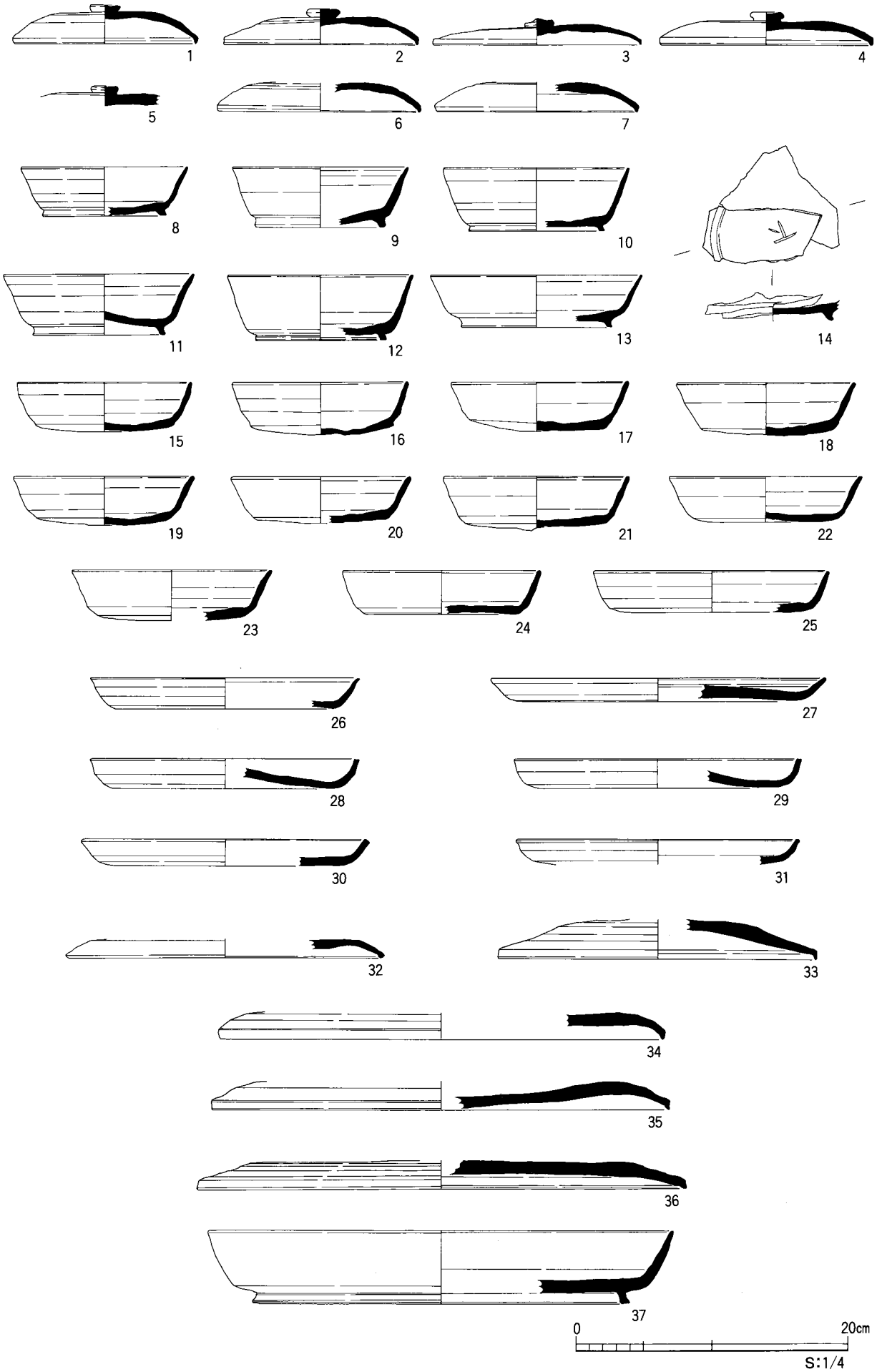
第７図

柳谷11号窯　灰原出土土器２



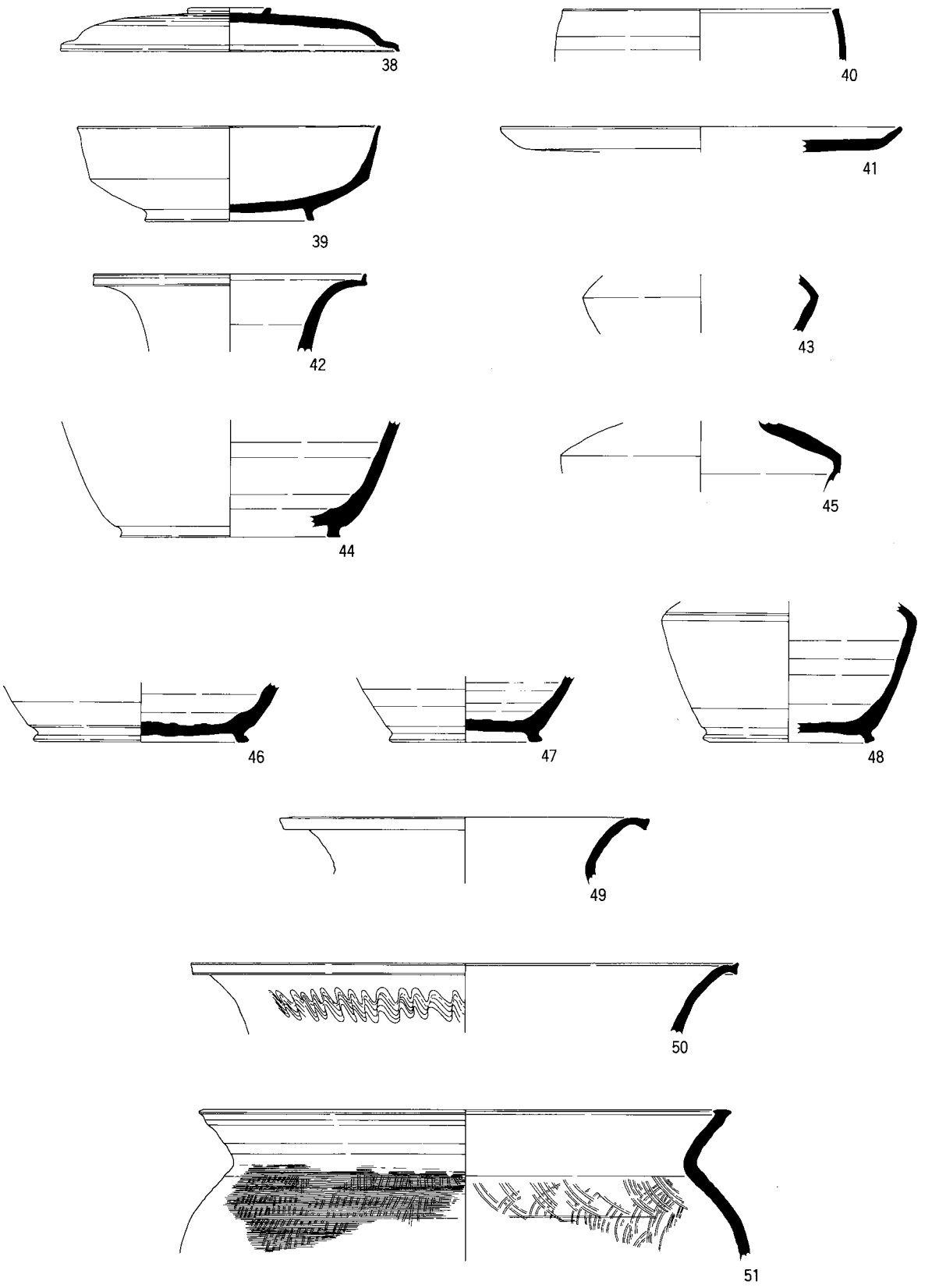
第８図

柳谷12号窯　窯体出土土器１



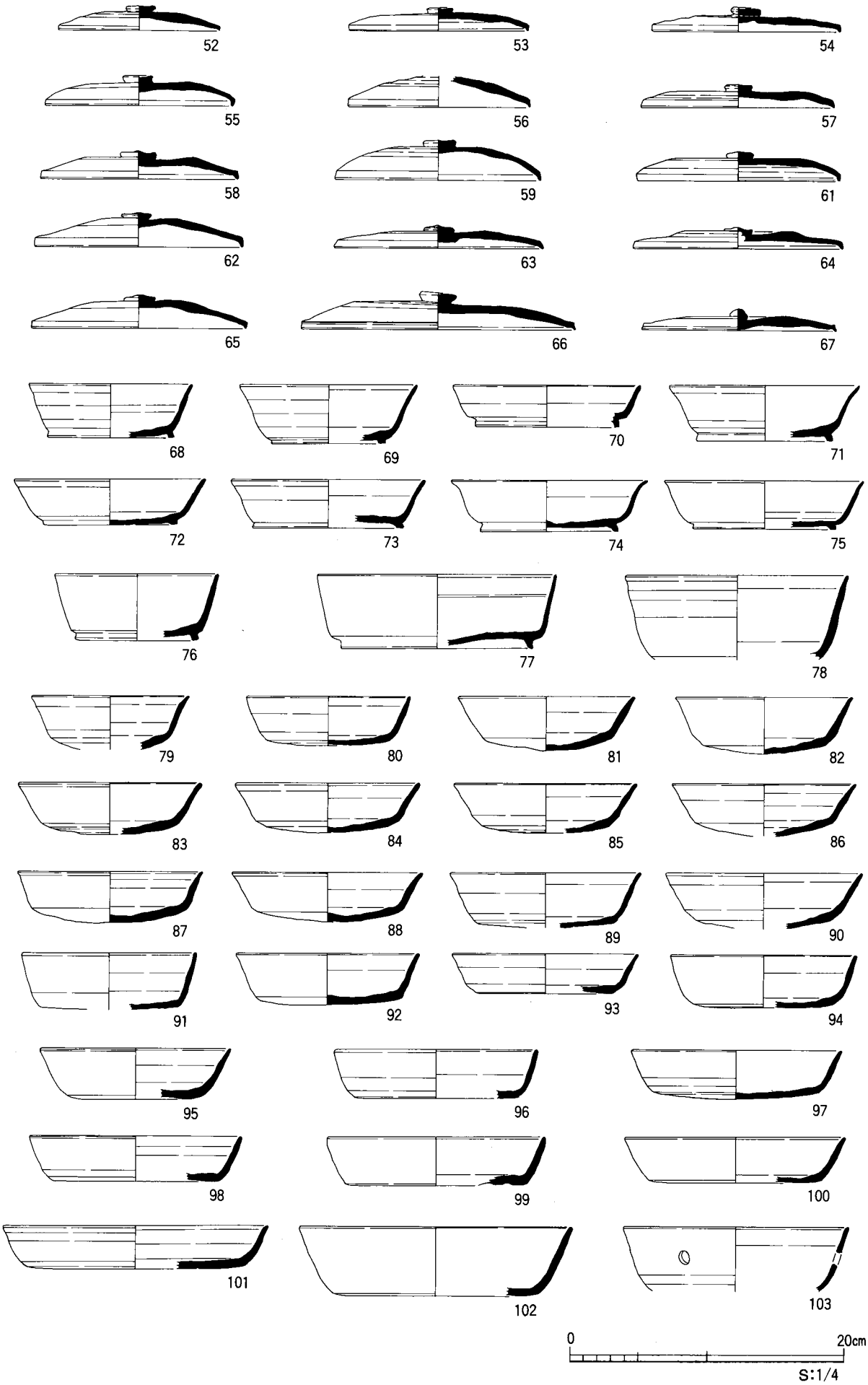
第９図

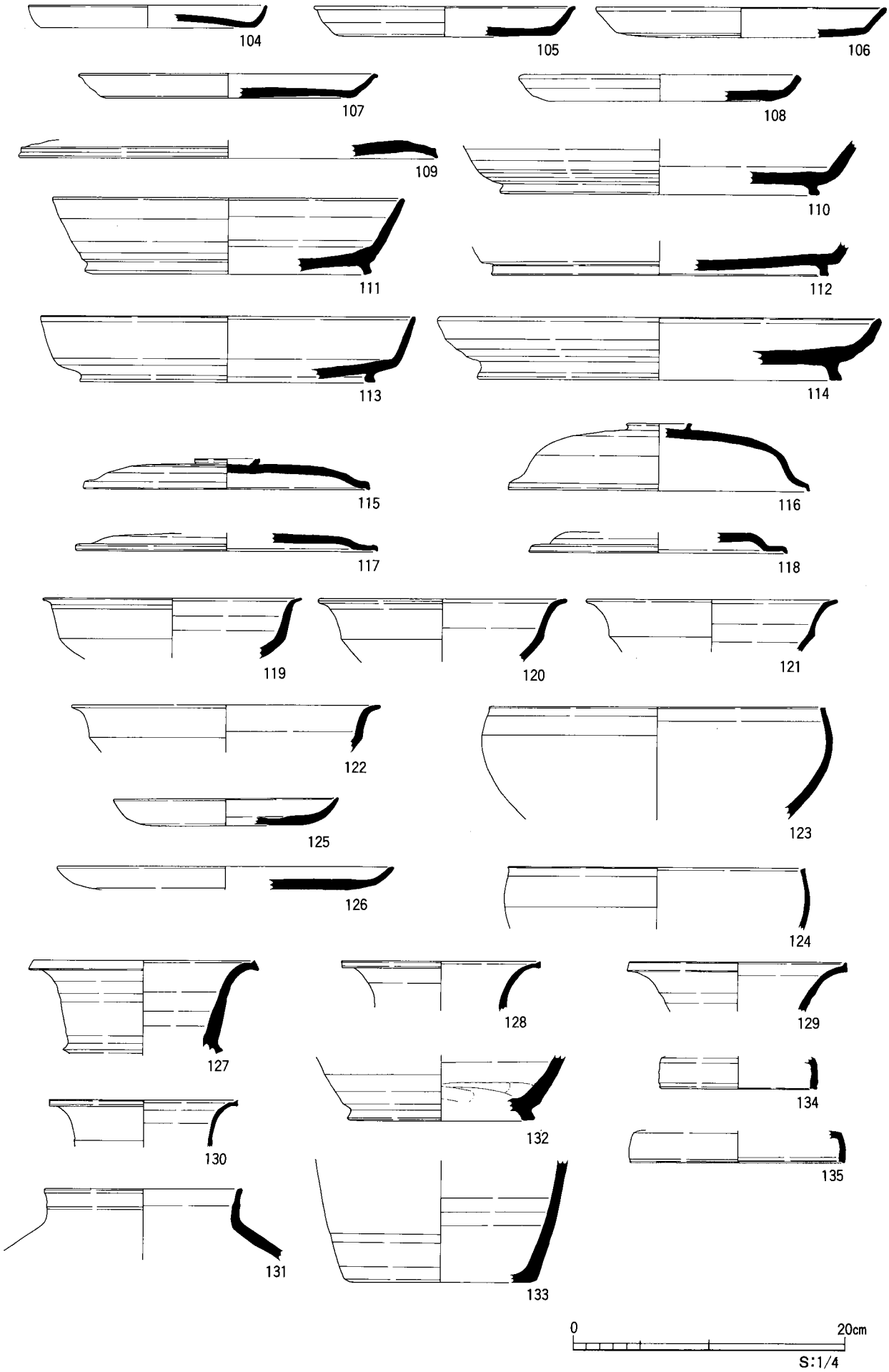
柳谷12号窯　窯体出土土器２



第10図

柳谷12号窯　灰原出土土器３

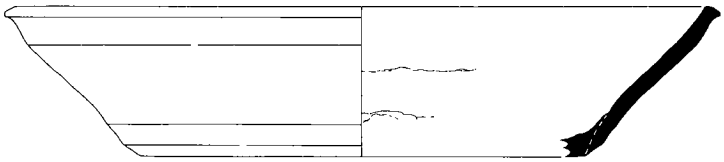


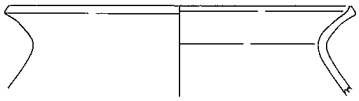

104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
125
126
124
127
128
129
130
132
134
135
131
133
0
20cm
S:1/4

第12図

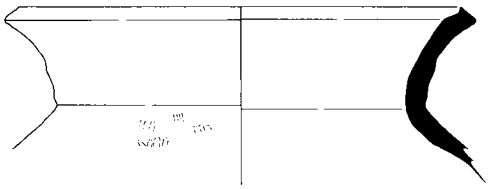
柳谷12号窯　灰原出土土器５

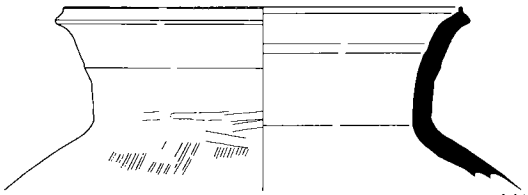
136

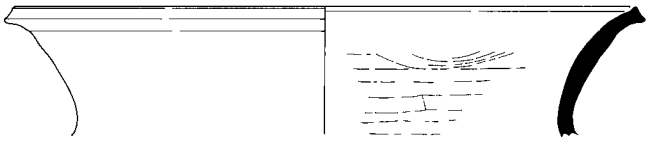

137

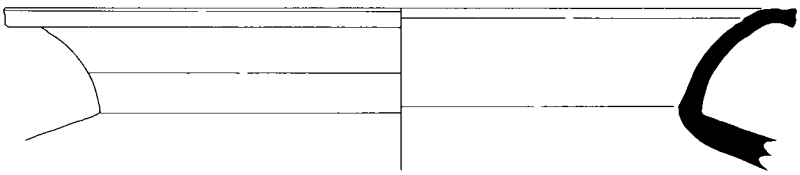

138

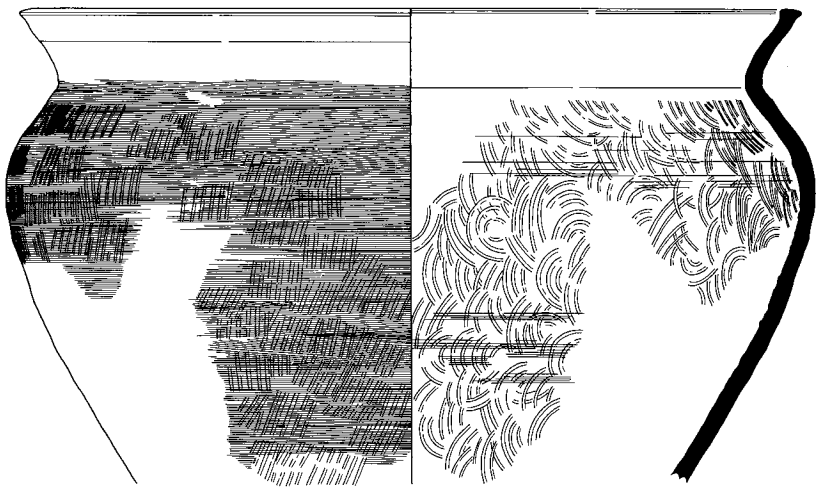
139


140


141


142


143

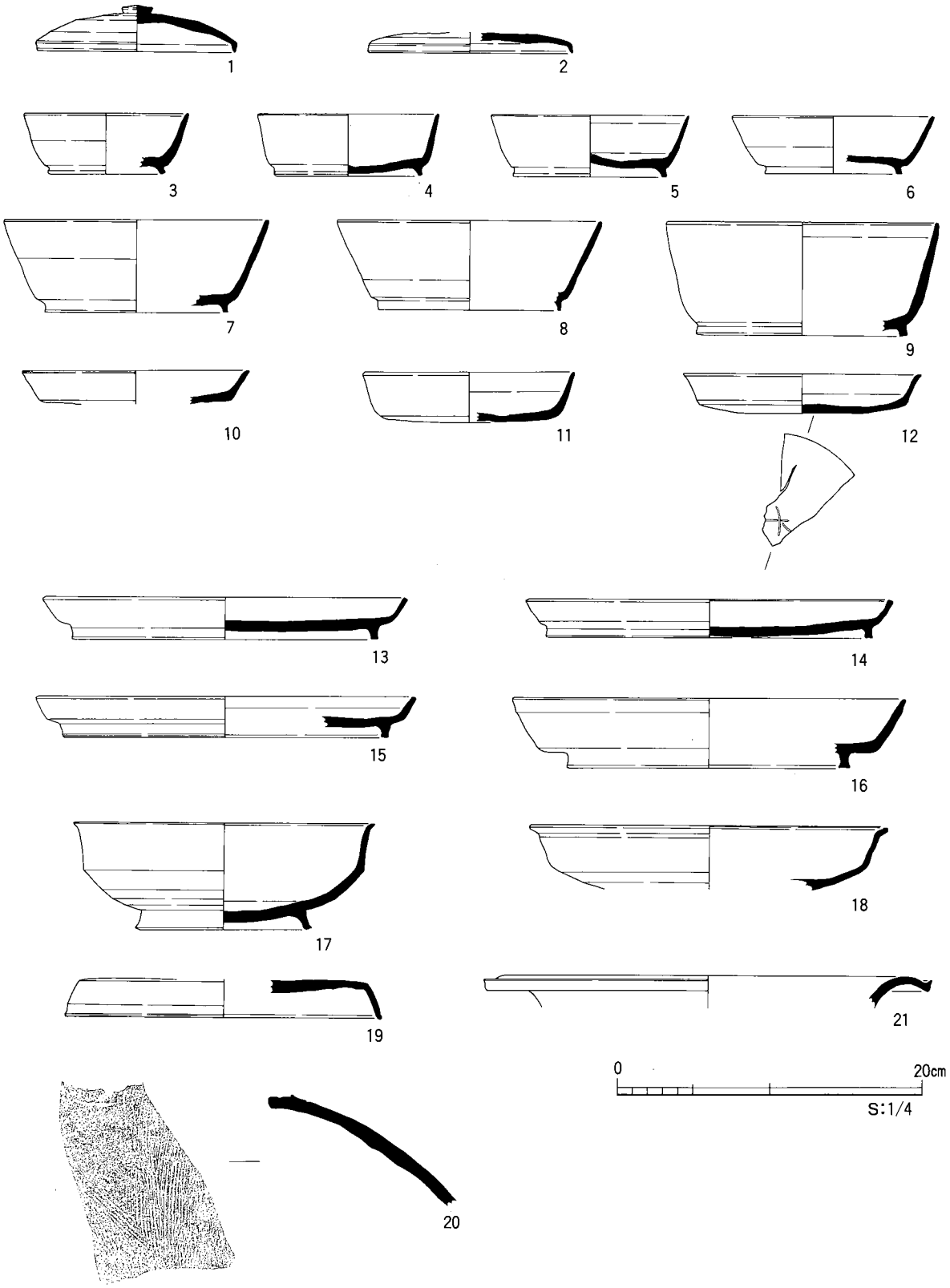

144

0　20cm

S:1/4

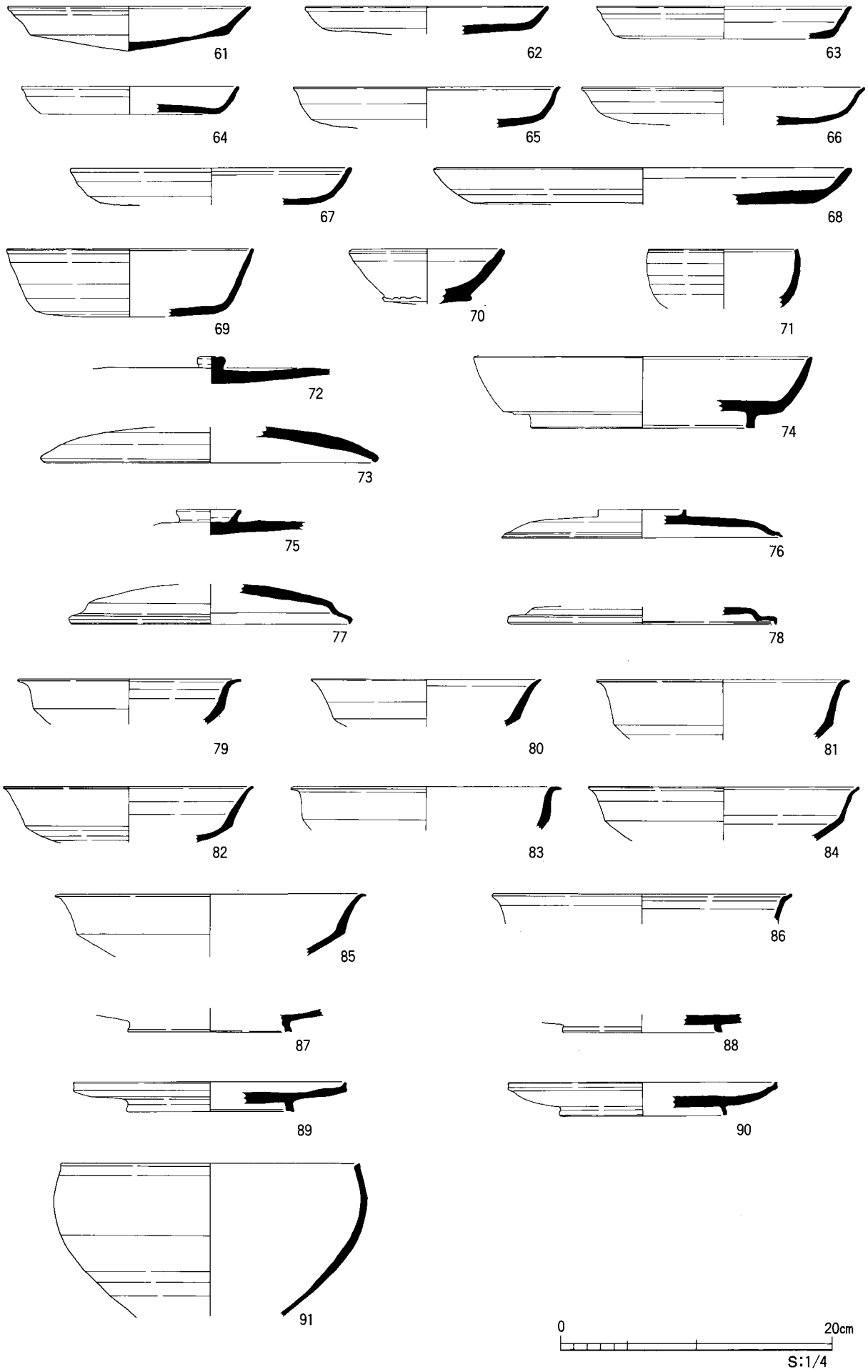
第13図

柳谷13号窯　窯体出土土器



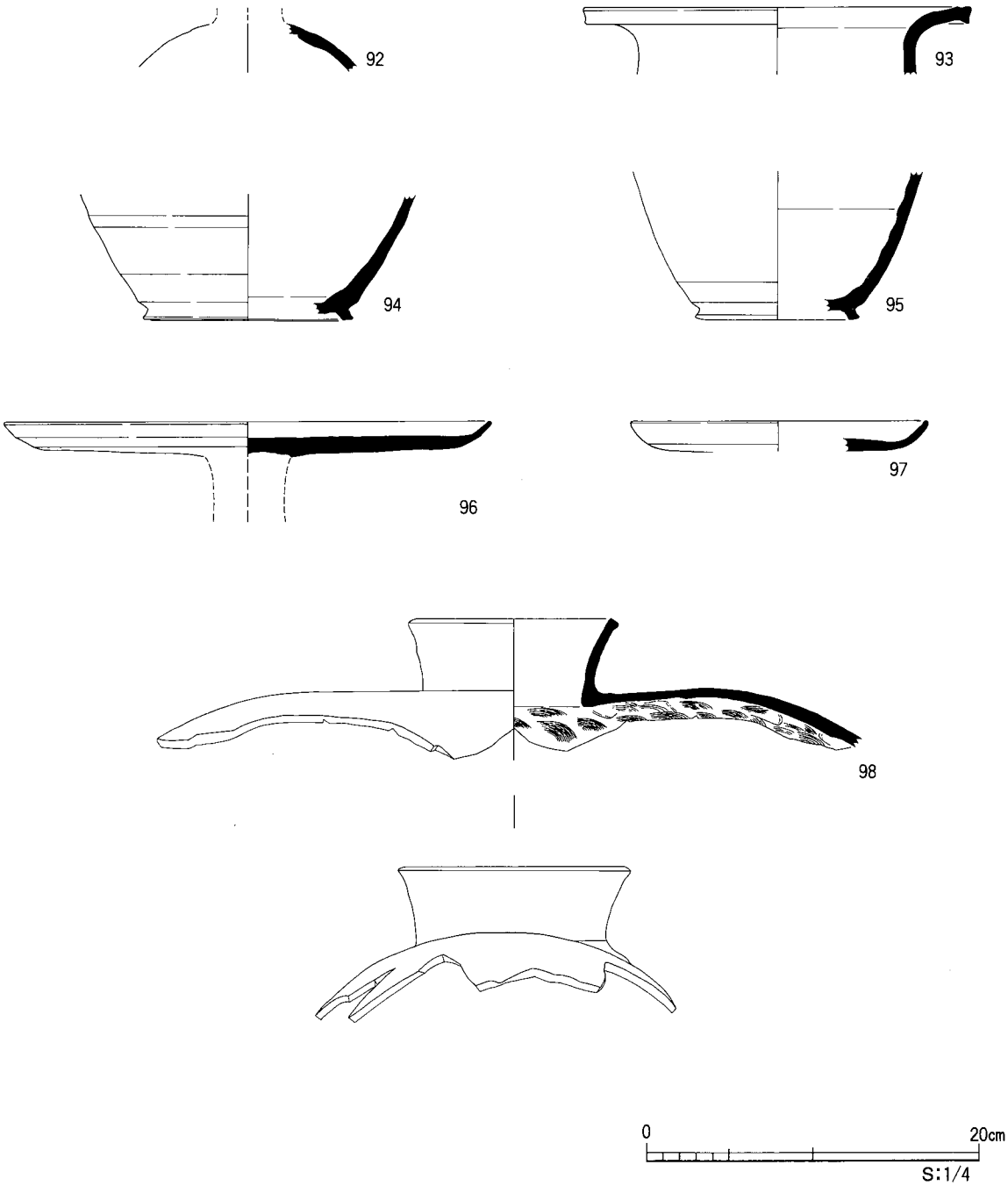
第14図

柳谷13号窯　灰原出土土器１

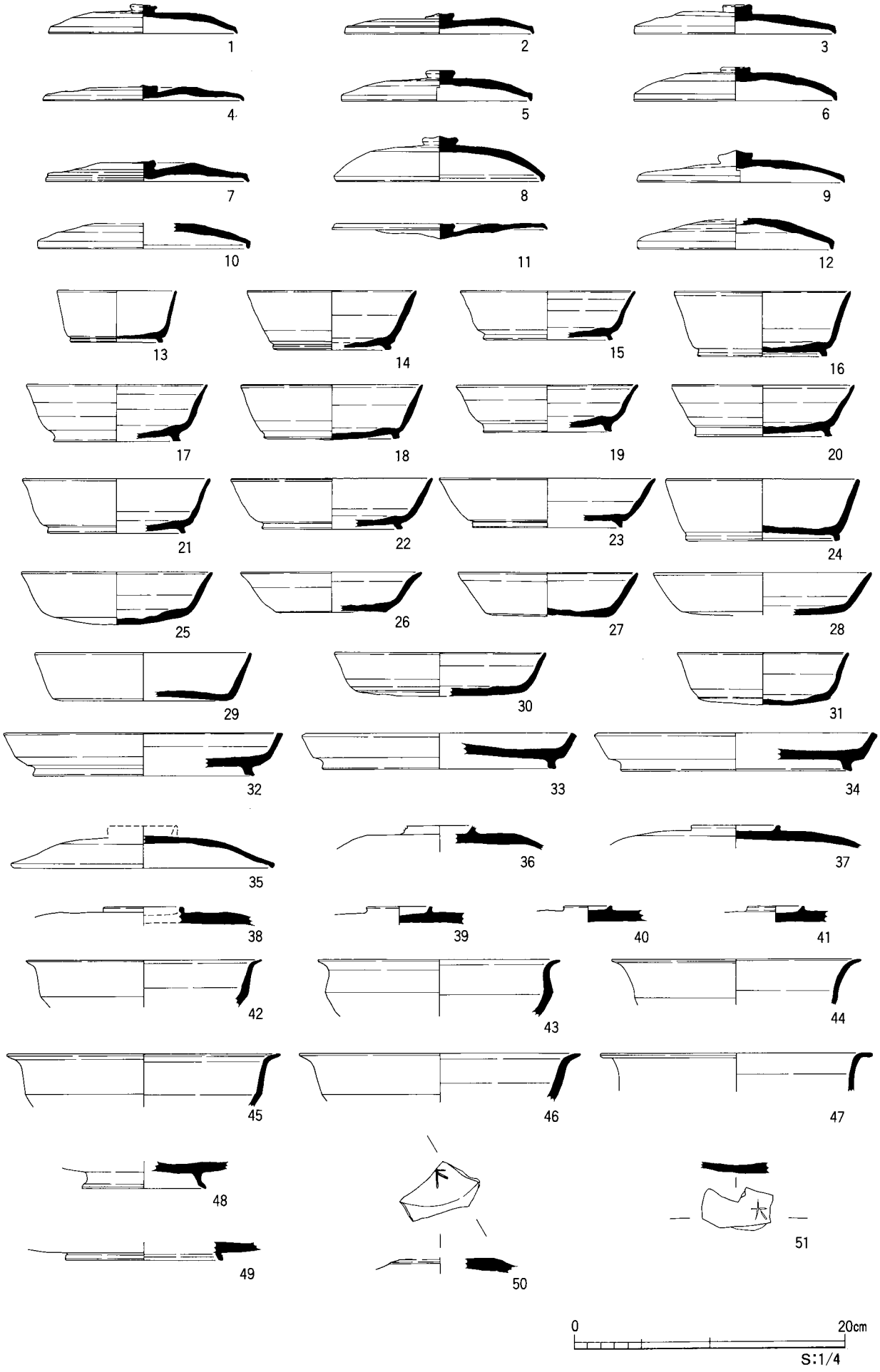

61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
0
20cm
S:1/4

第16図

柳谷13号窯　灰原出土土器 3

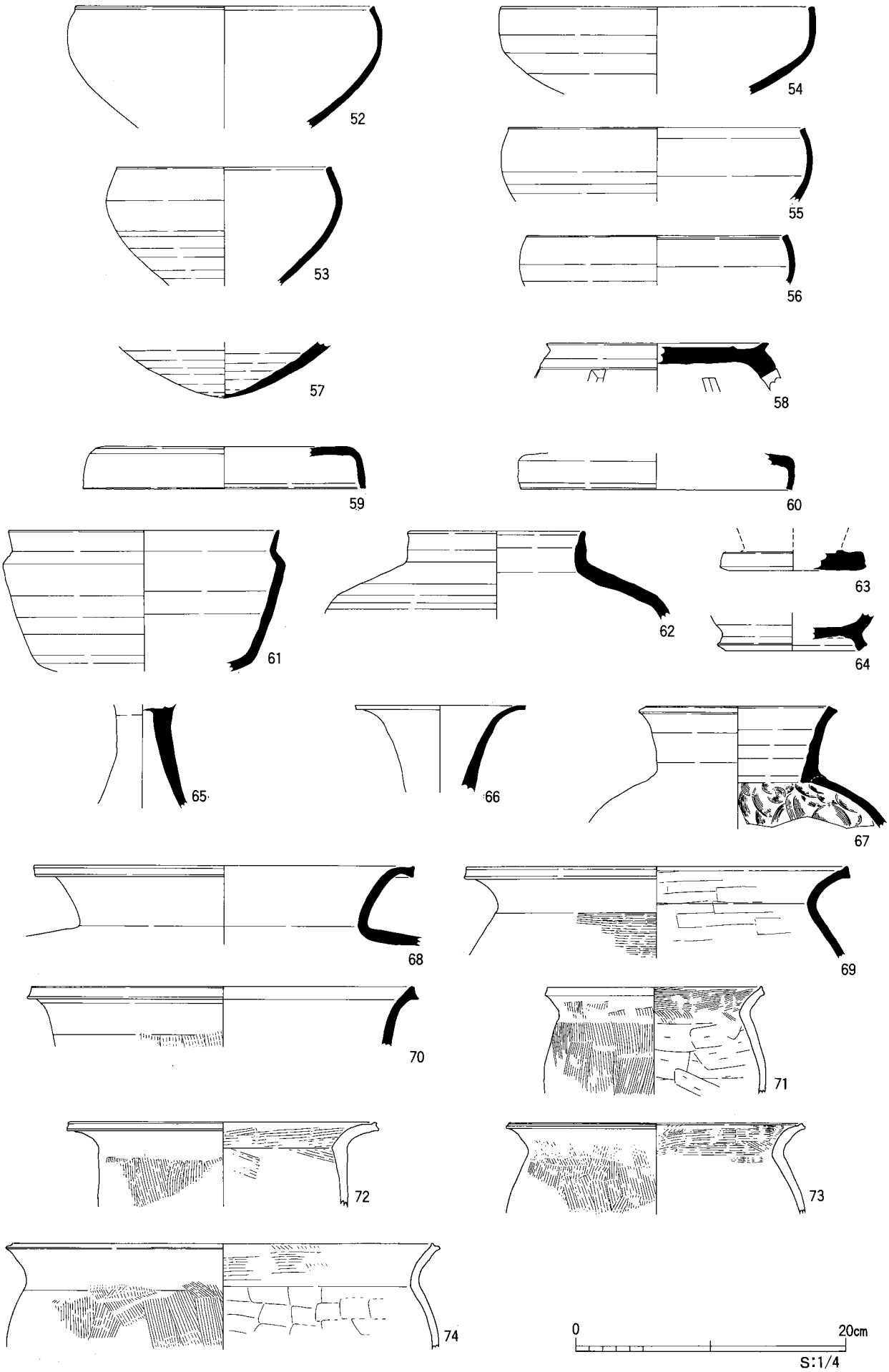


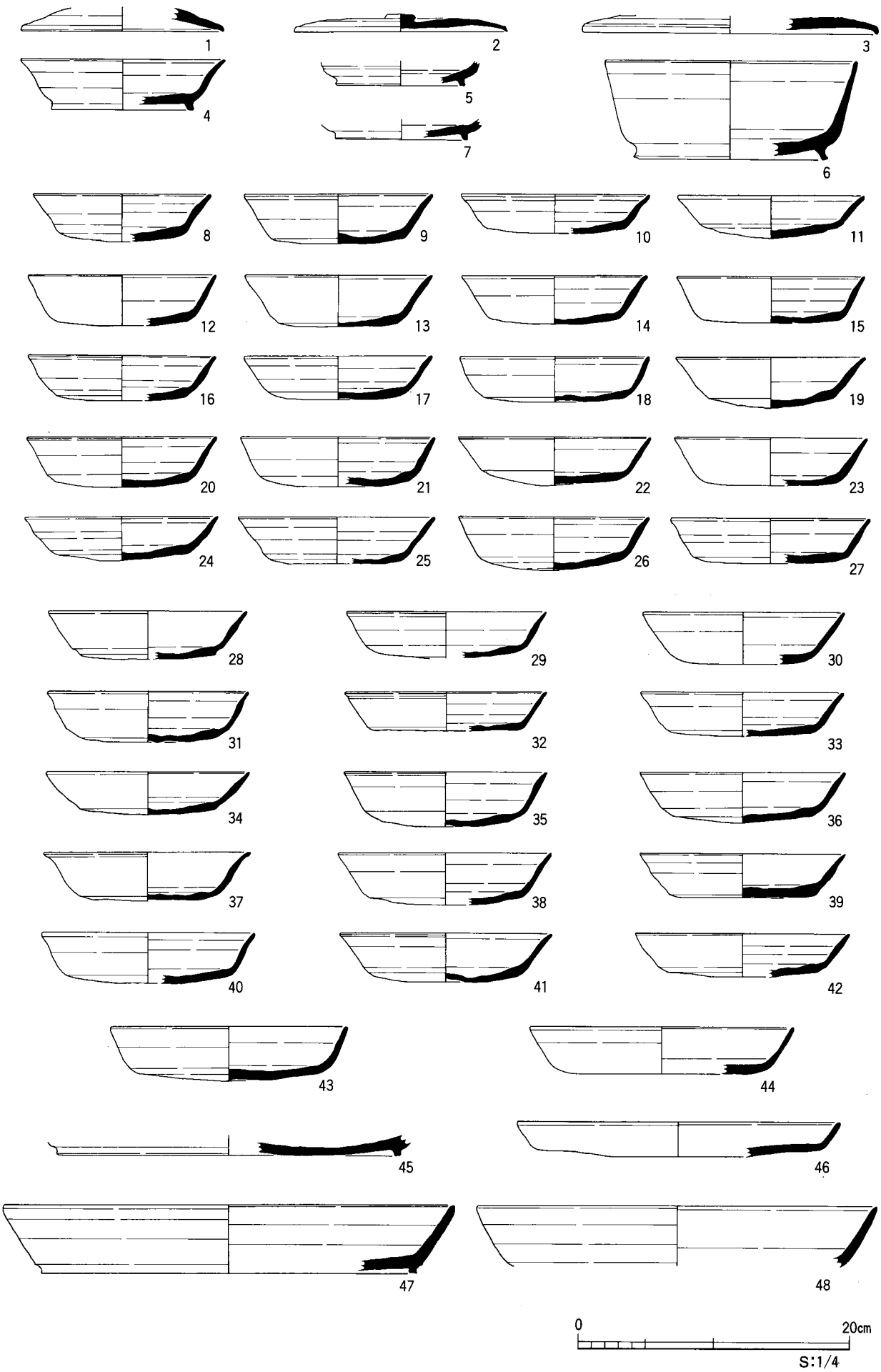
柳谷11～13号窯　灰原表土層出土土器１



第18図

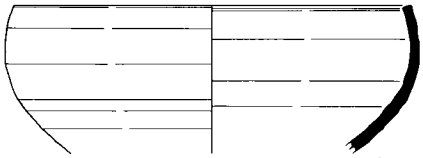
柳谷11～13号窯　灰原表土層出土土器２

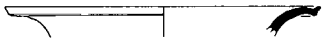


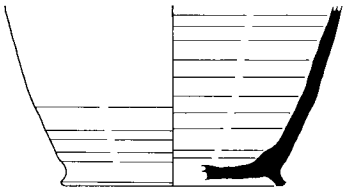

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
20cm
S:1/4

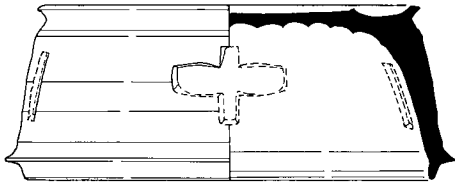
第20図

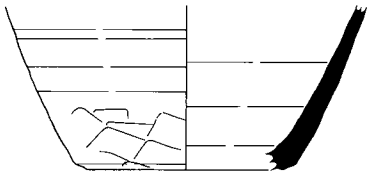
柳谷14号窯　窯体出土土器２

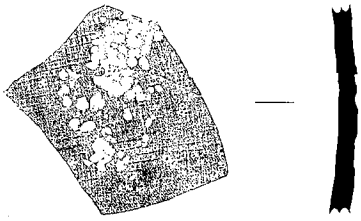






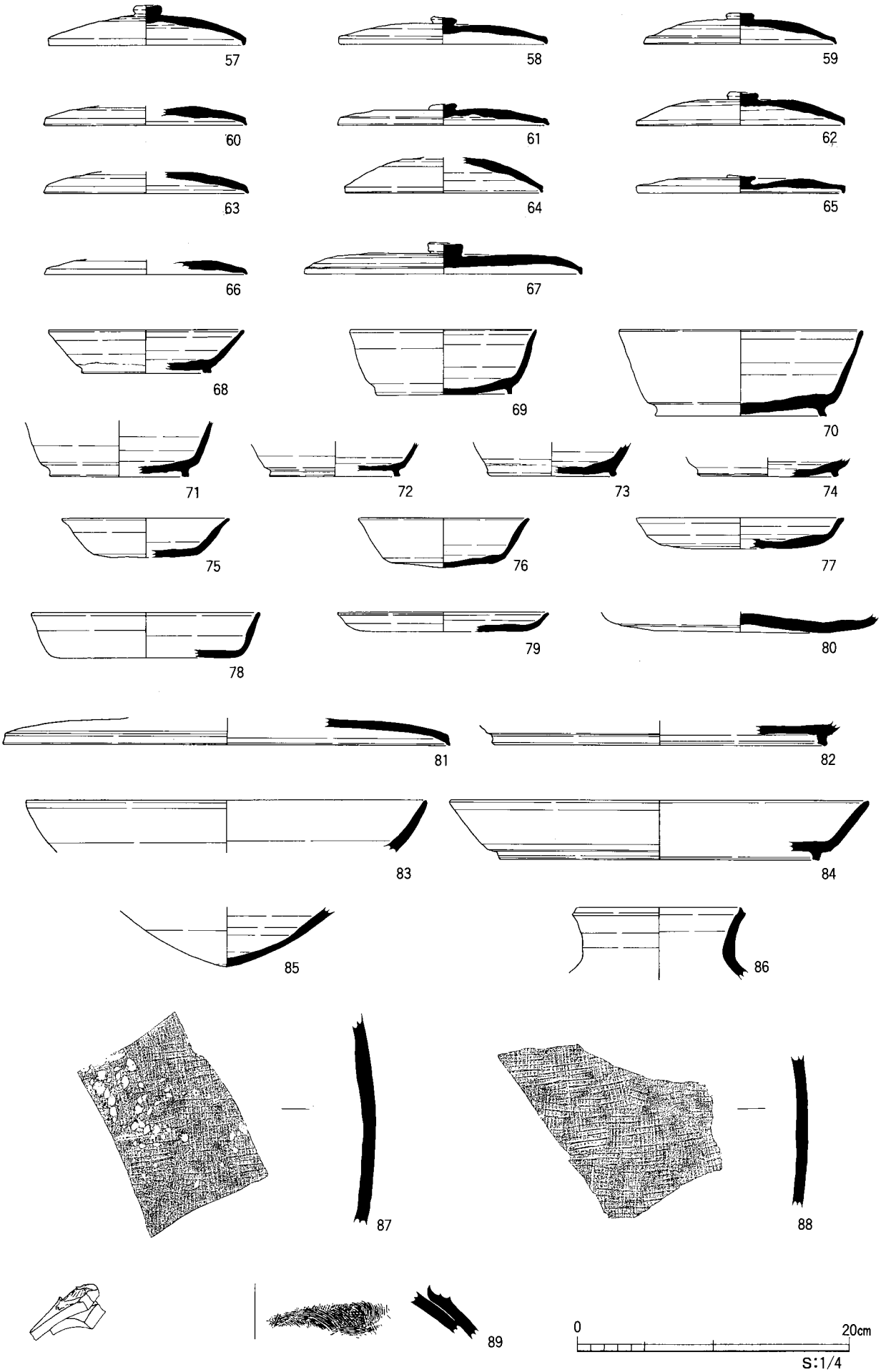






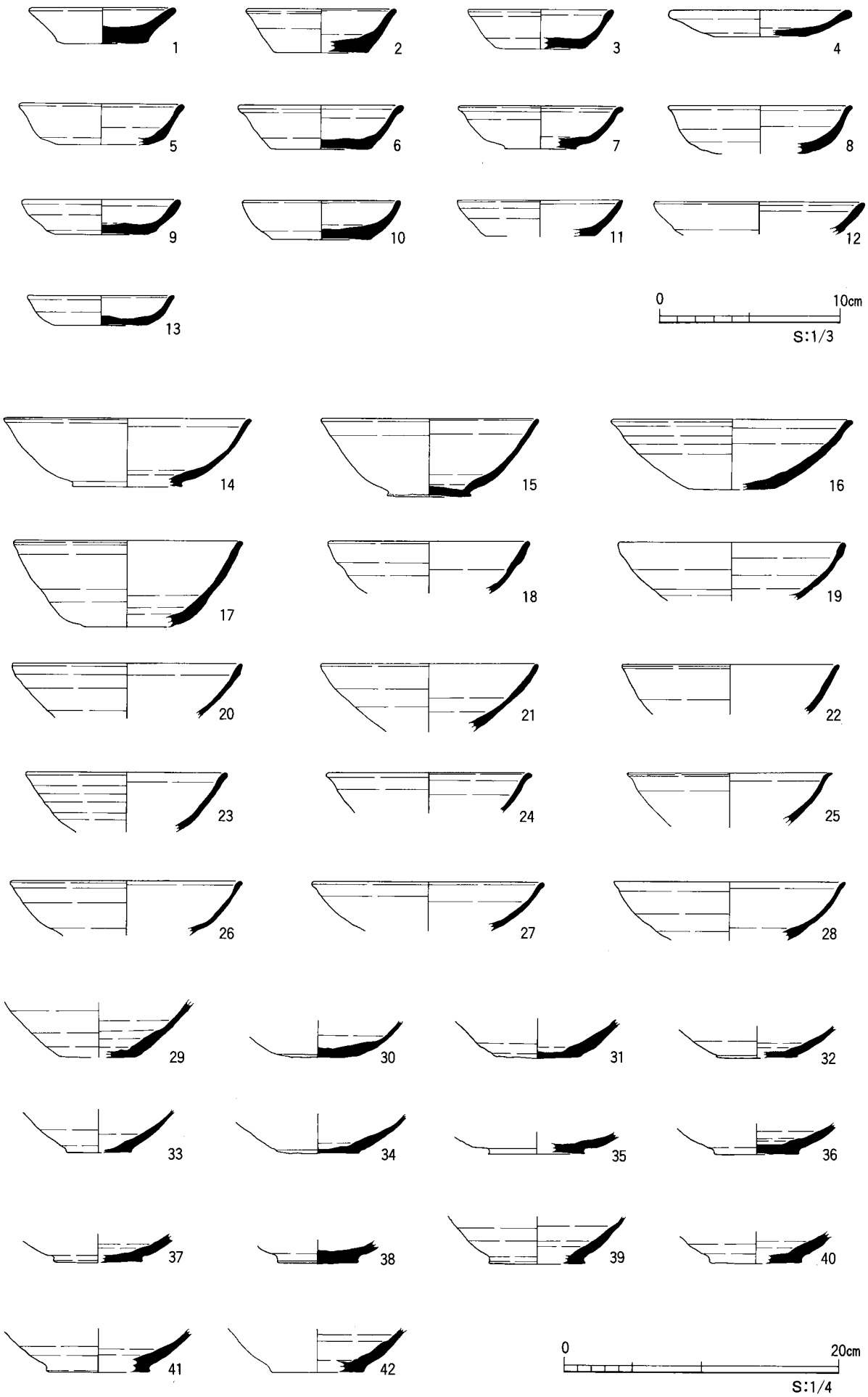
第21図

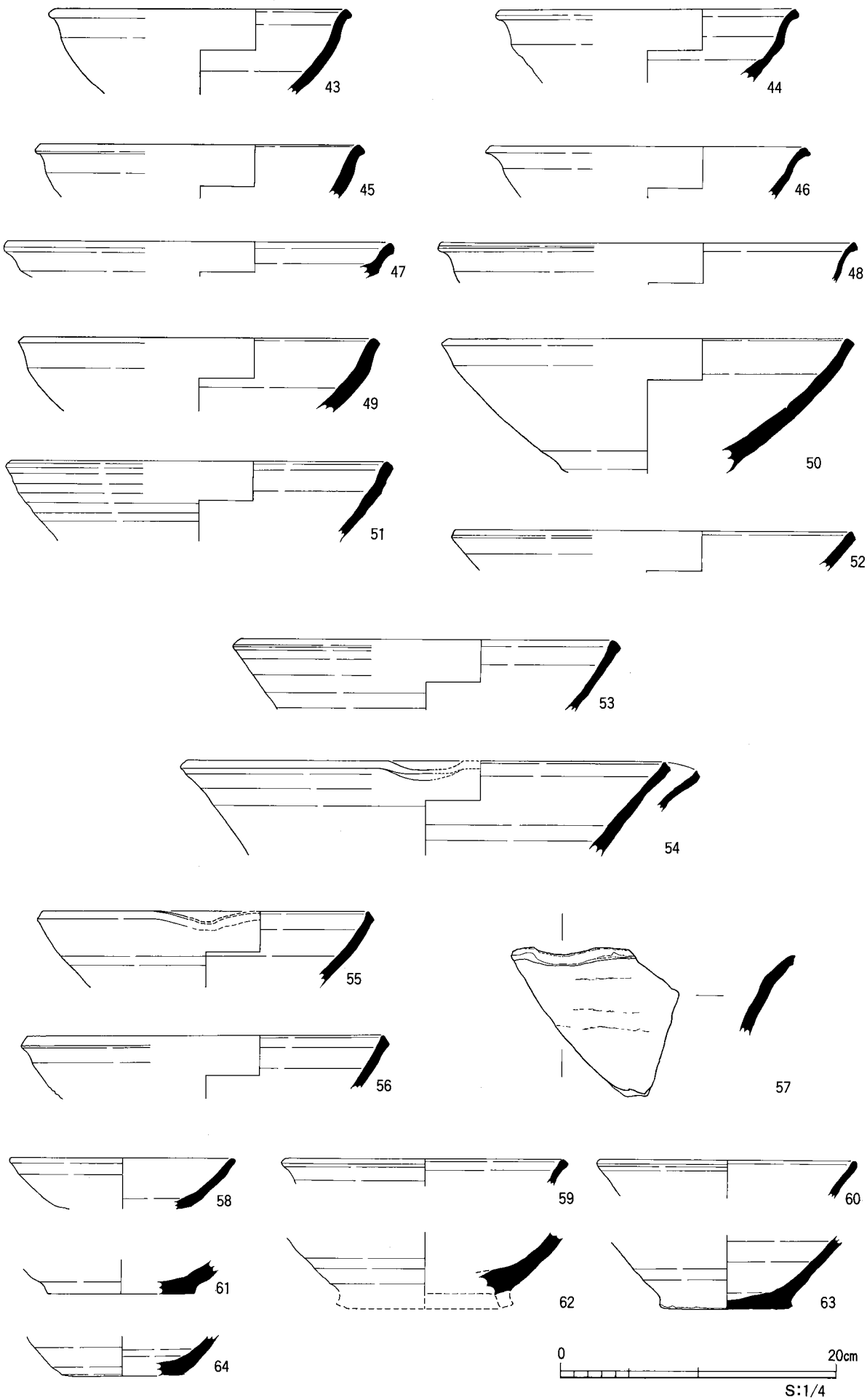
柳谷14号窯　窯体外出土土器



第22図

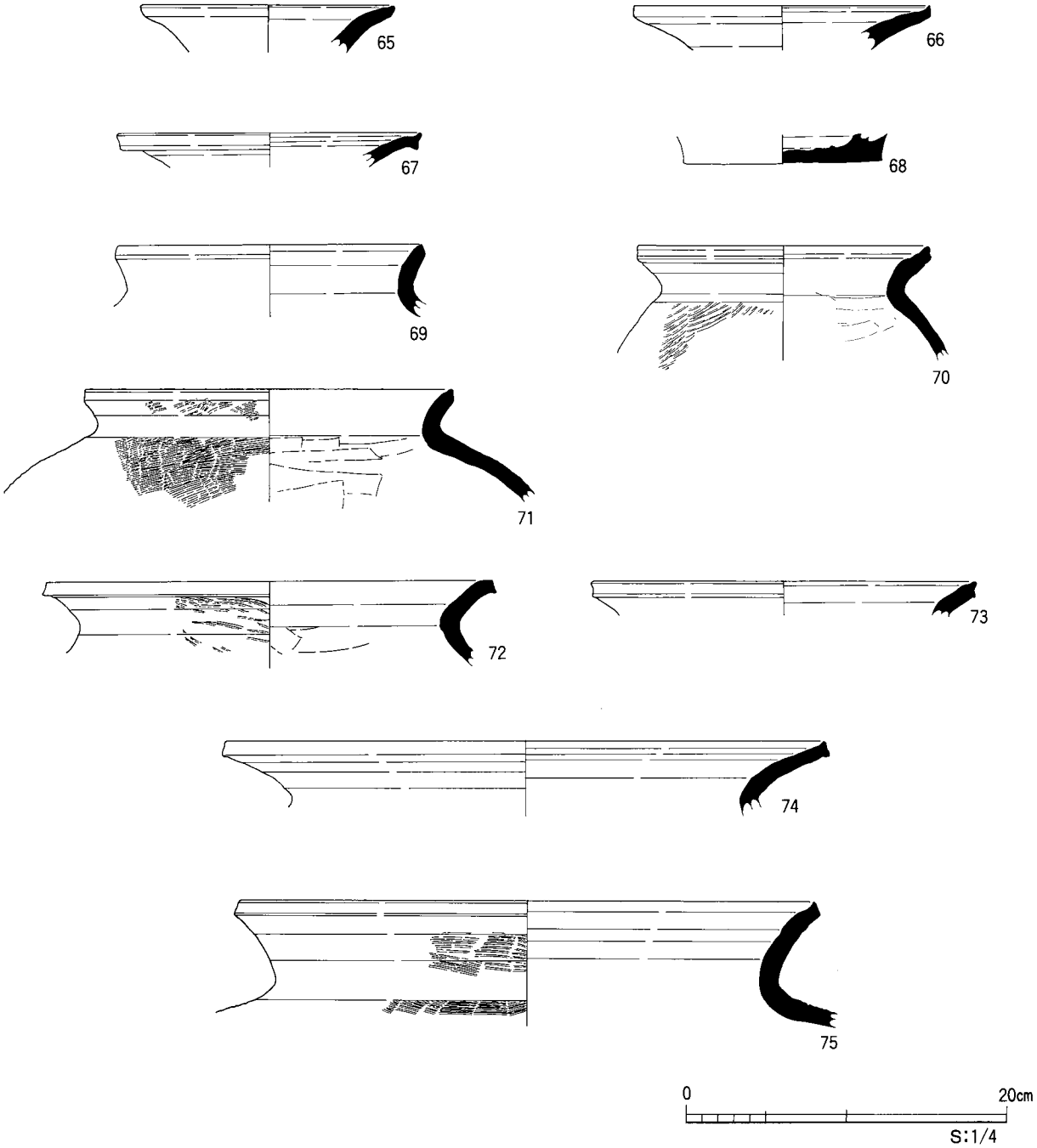
柳谷５号窯　出土土器１

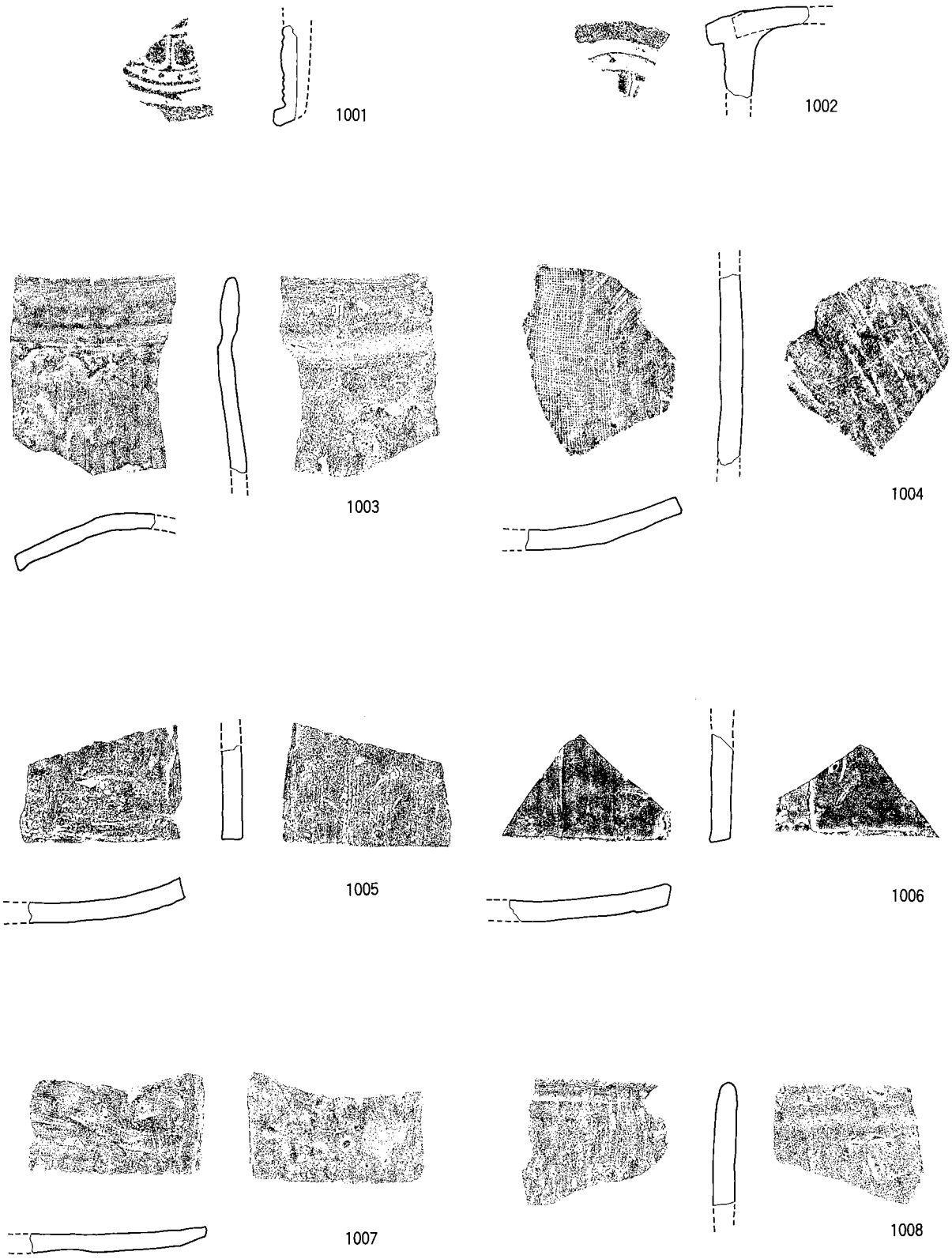



43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
0
20cm
S:1/4

第24図

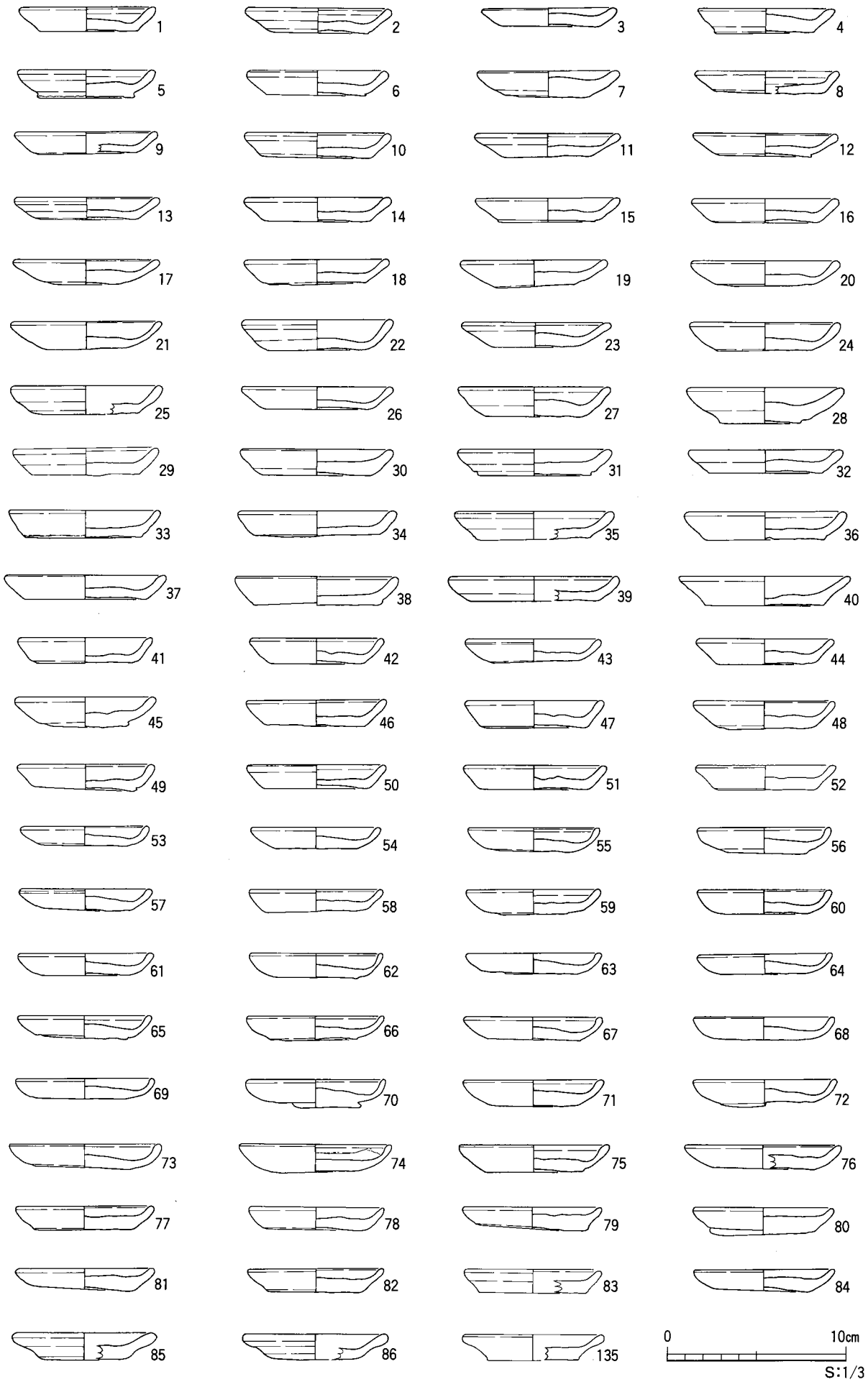
柳谷５号窯　出土土器３



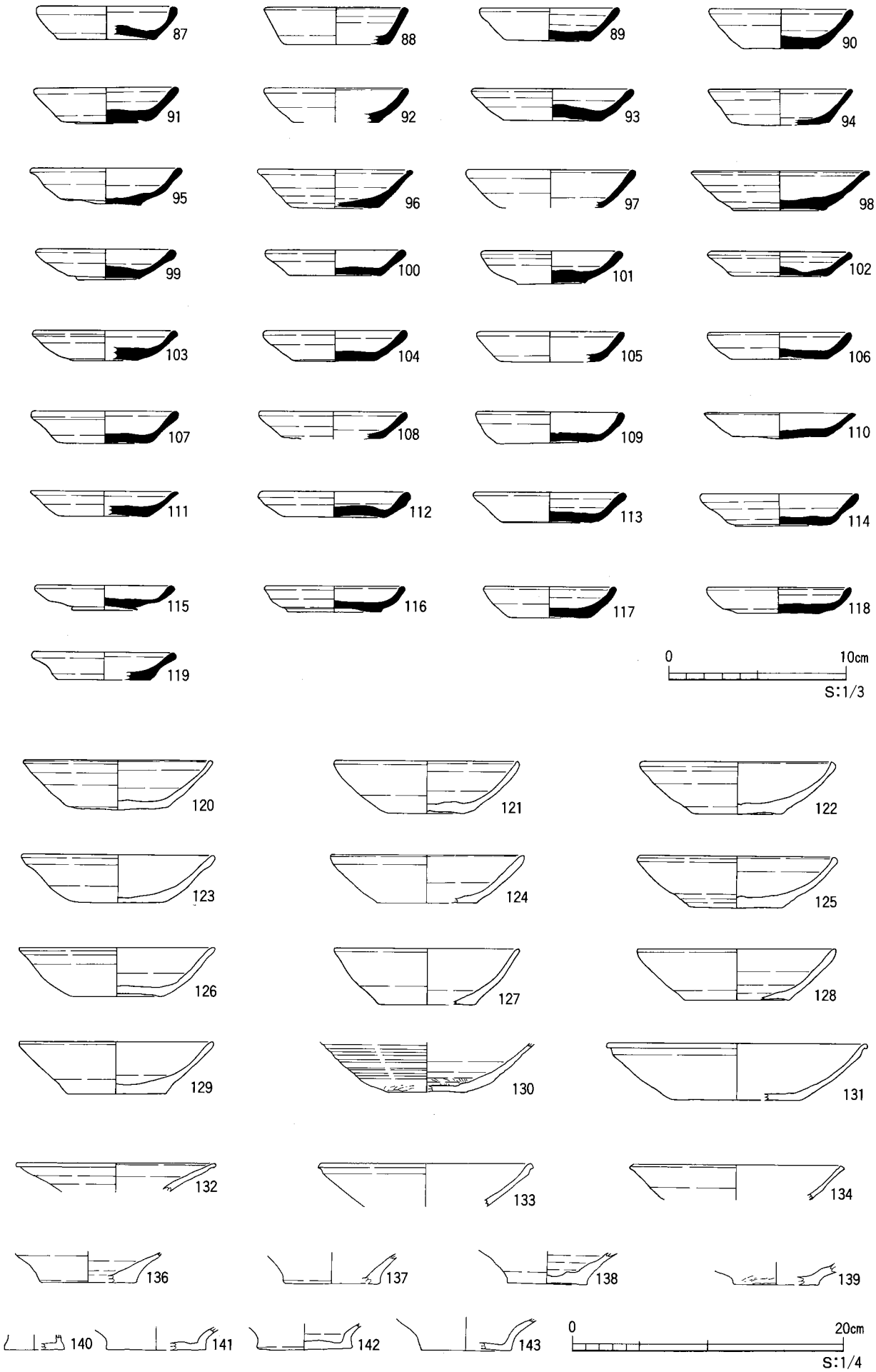

1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
0
20cm
S:1/4

第26図

宮の池窯　出土土器１

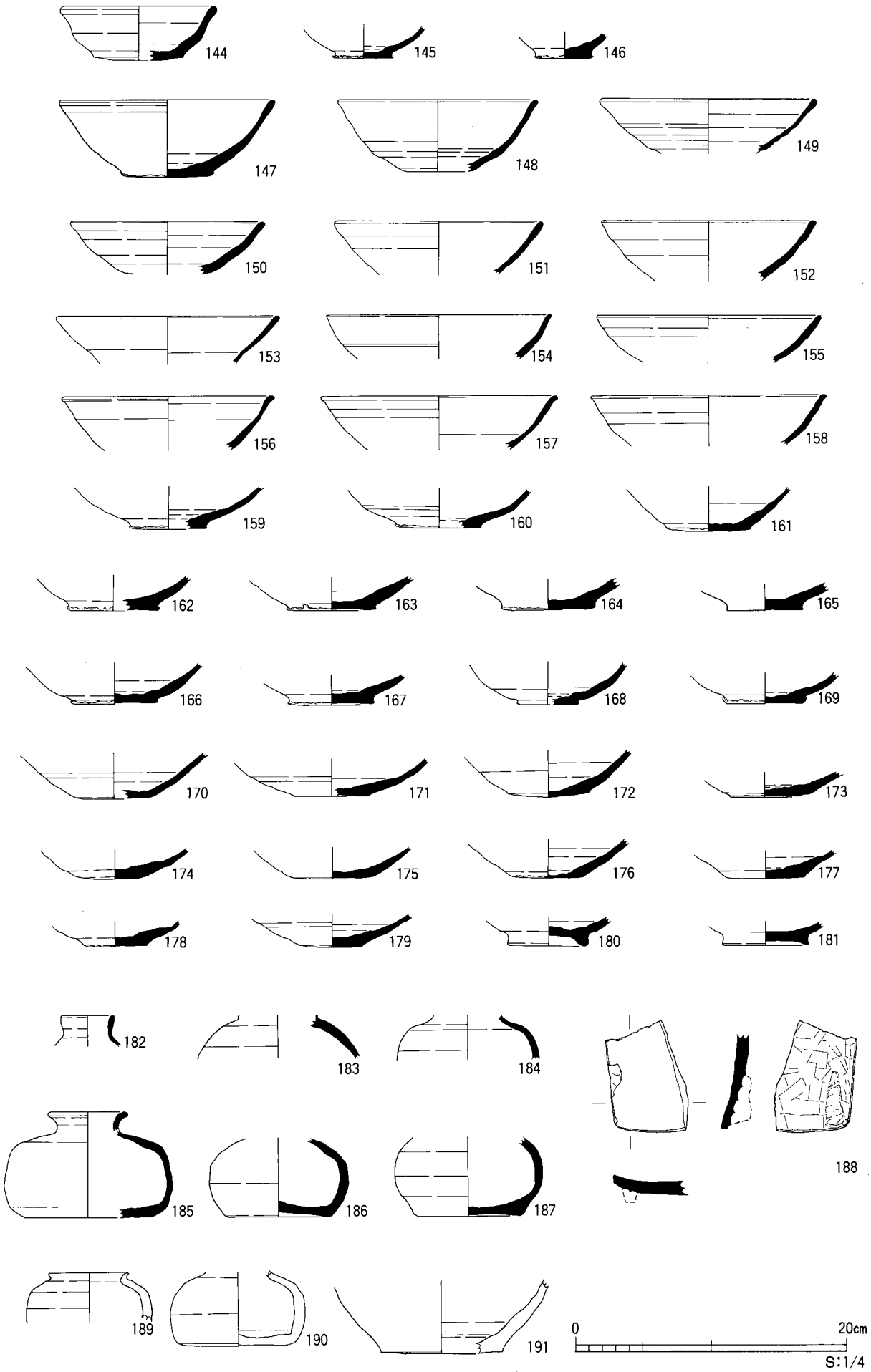


宮

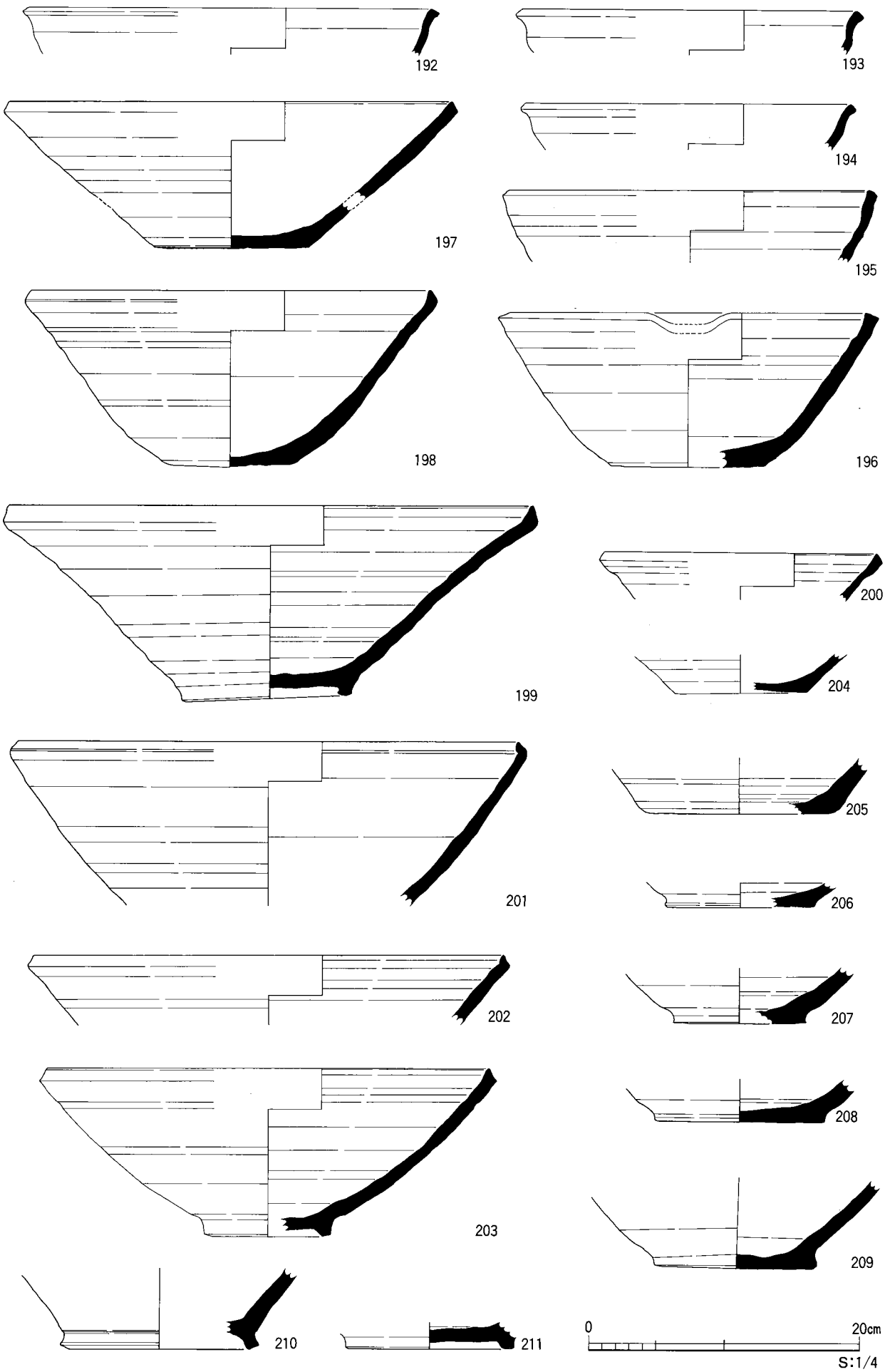

87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
0
10cm
S:1/3
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
136
137
138
139
140
141
142
143
0
20cm
S:1/4

第28図

宮の池窯　出土土器 3

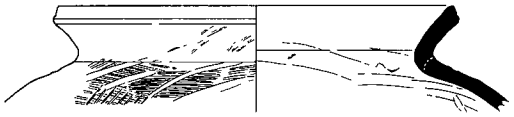


宮

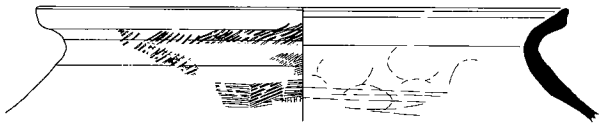

192
193
194
197
195
198
196
199
200
204
201
205
206
202
207
203
208
209
210
211
0
20cm
S:1/4

第30図

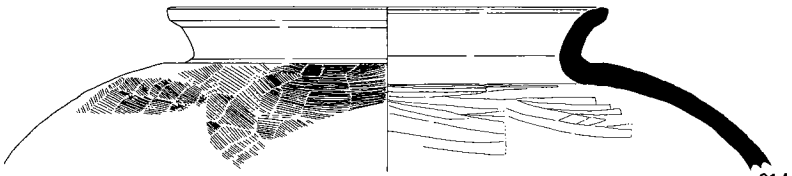
宮の池窯　出土土器５



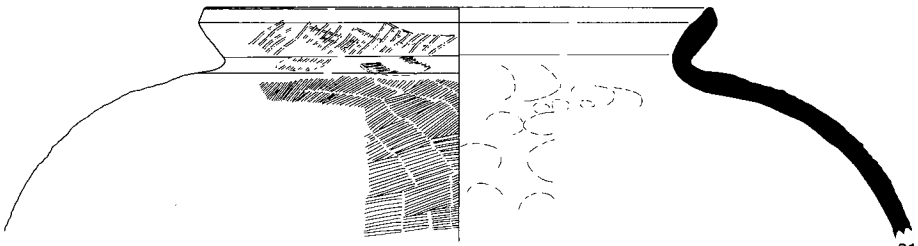
212



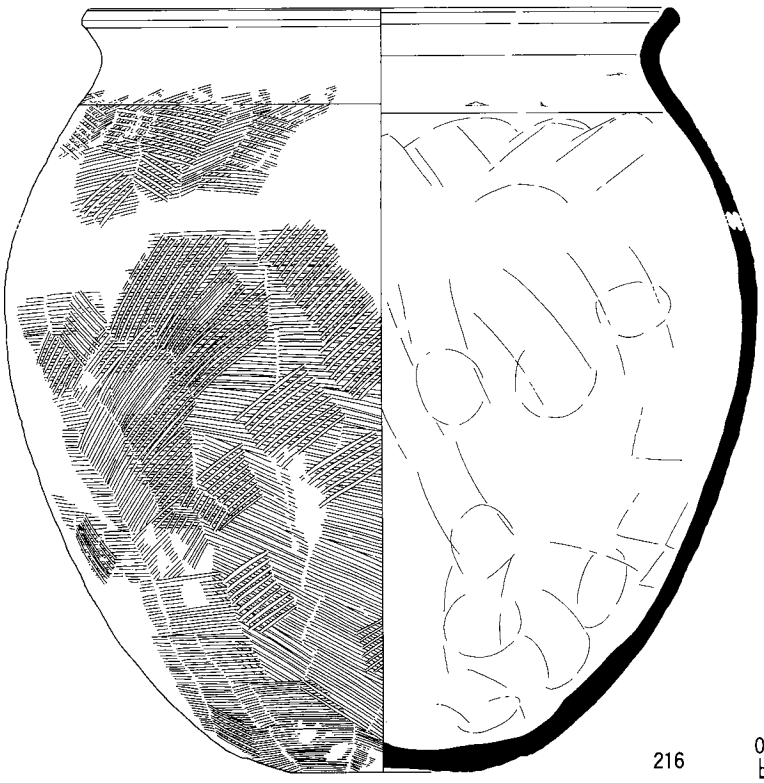
213



214



215

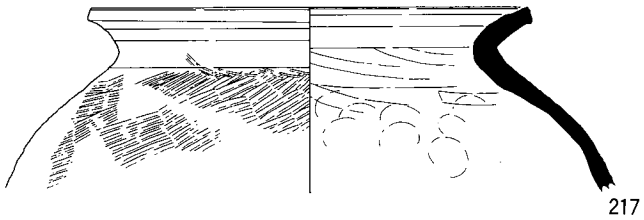


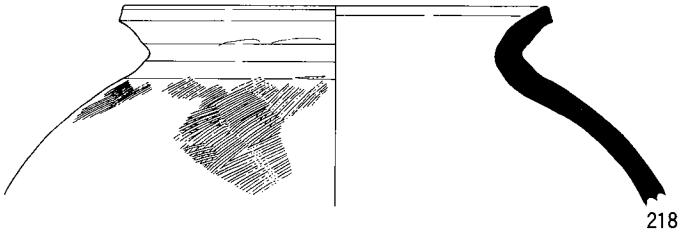
216

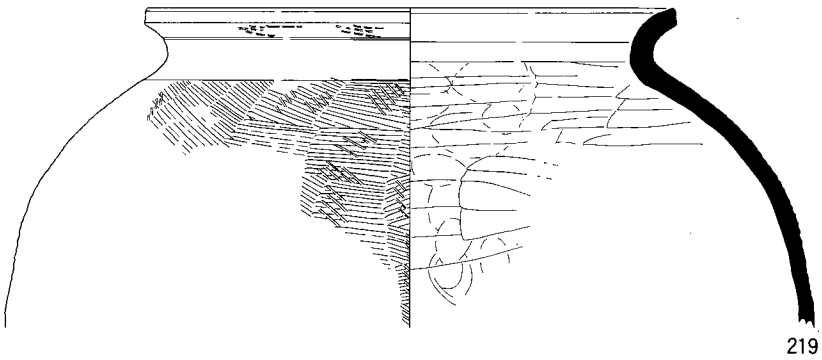
0　10cm

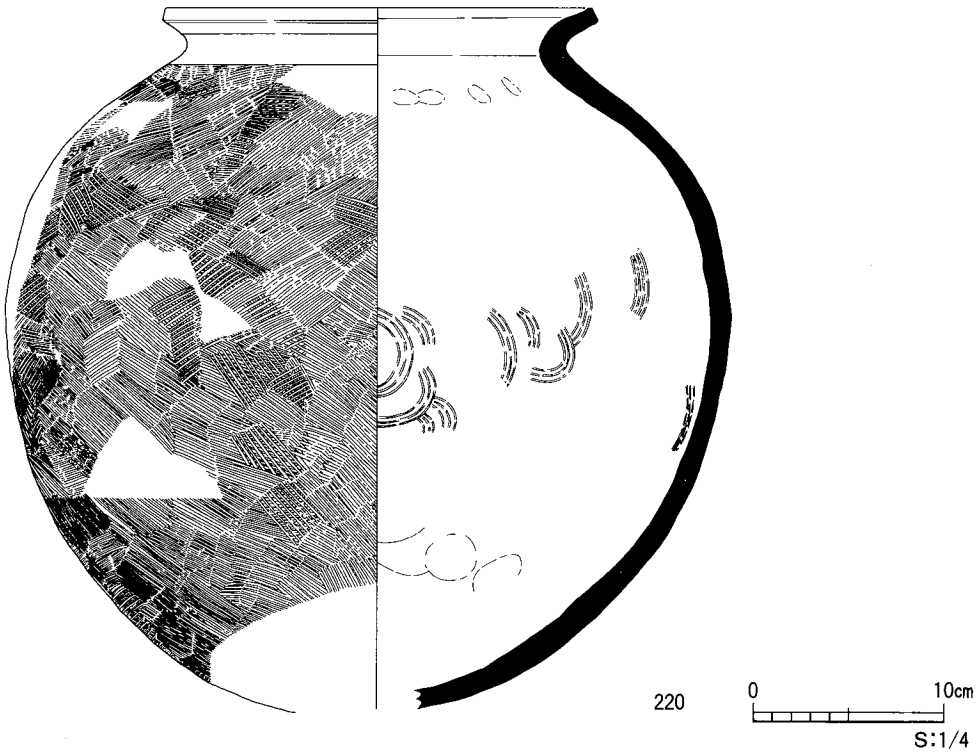
S:1/4

宮


217


218


219


220
0
10cm
S:1/4

第32図

宮の池窯　出土土器７

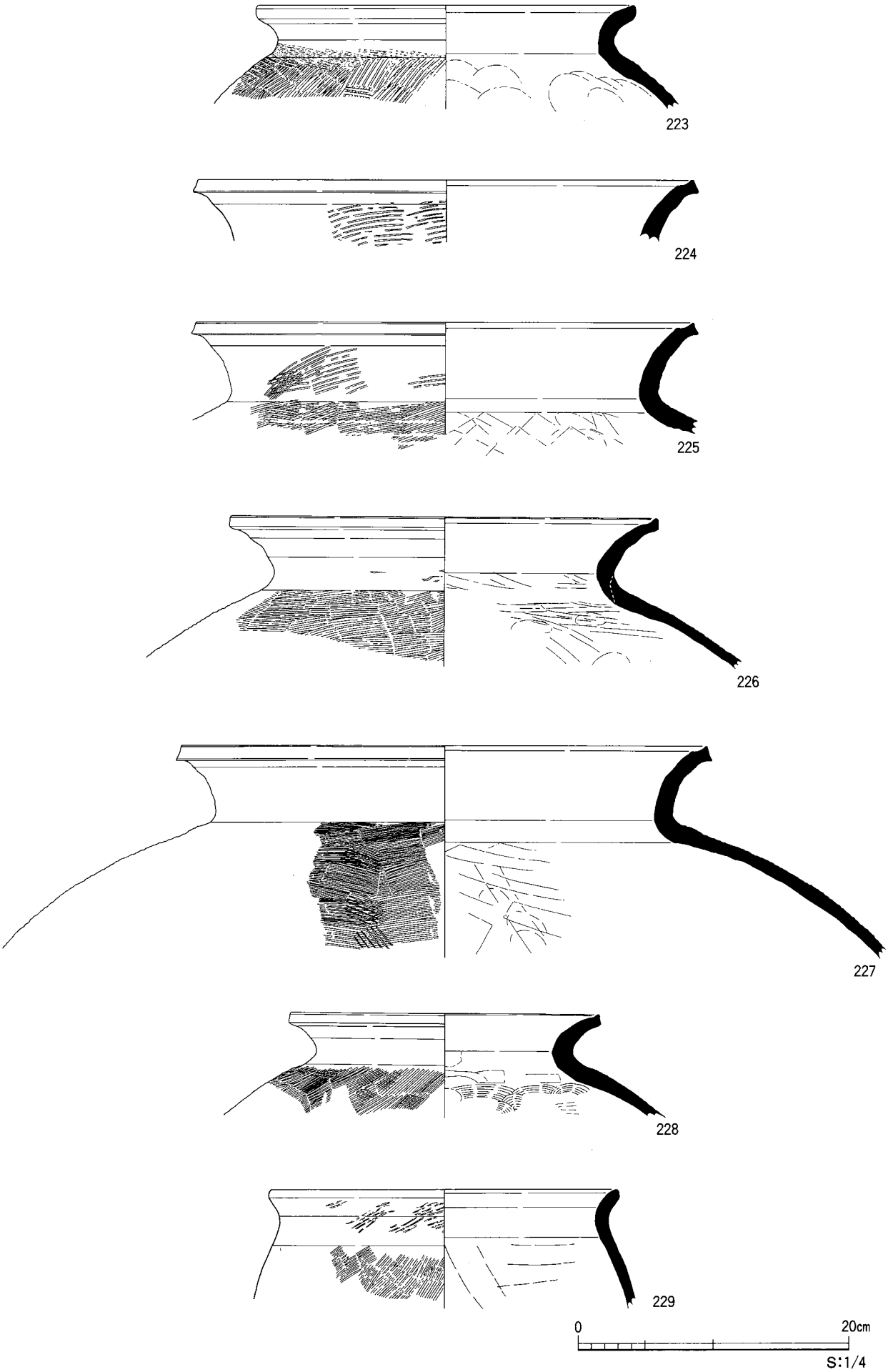
221

222

0　20cm

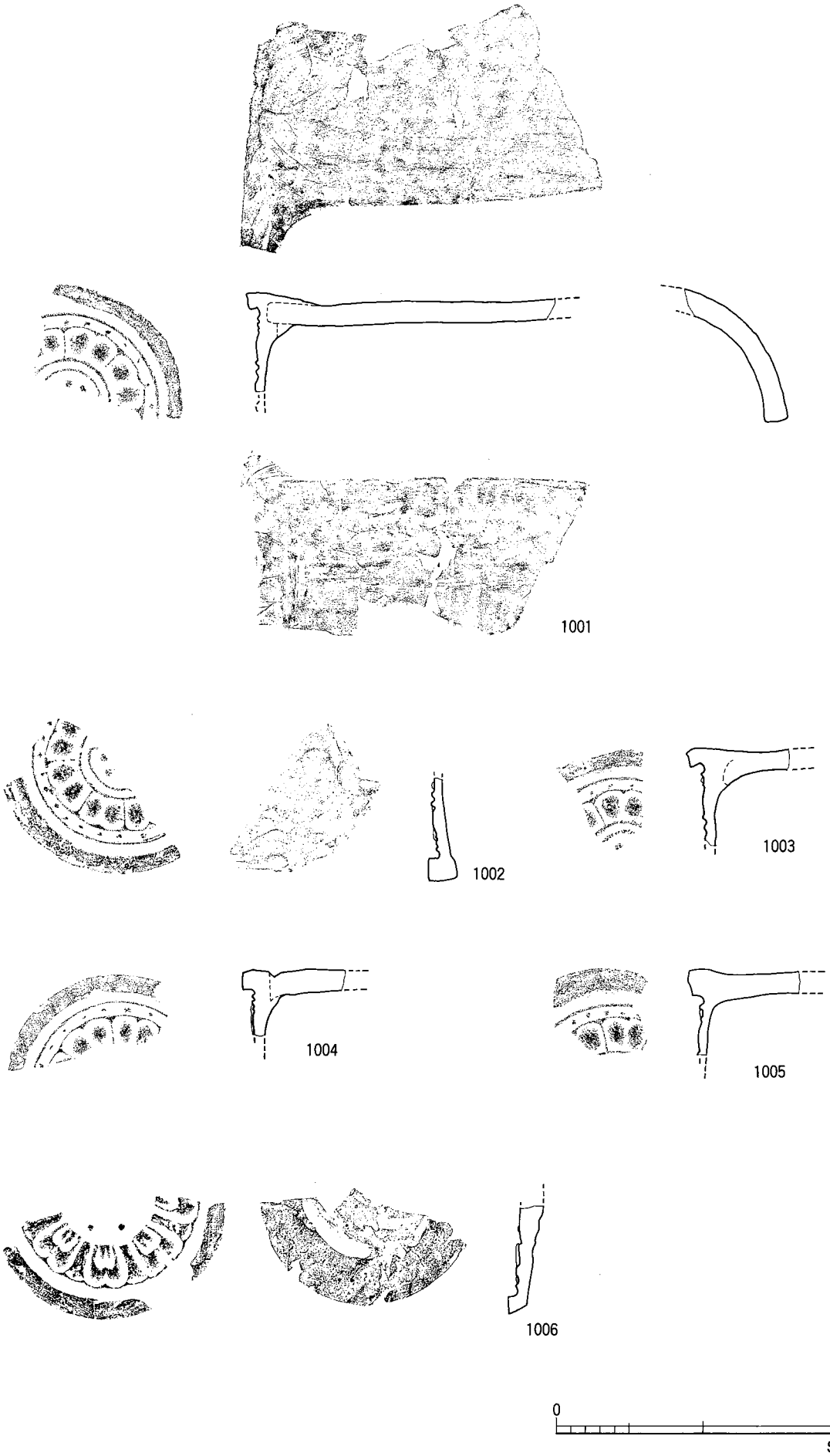
S:1/4

宮

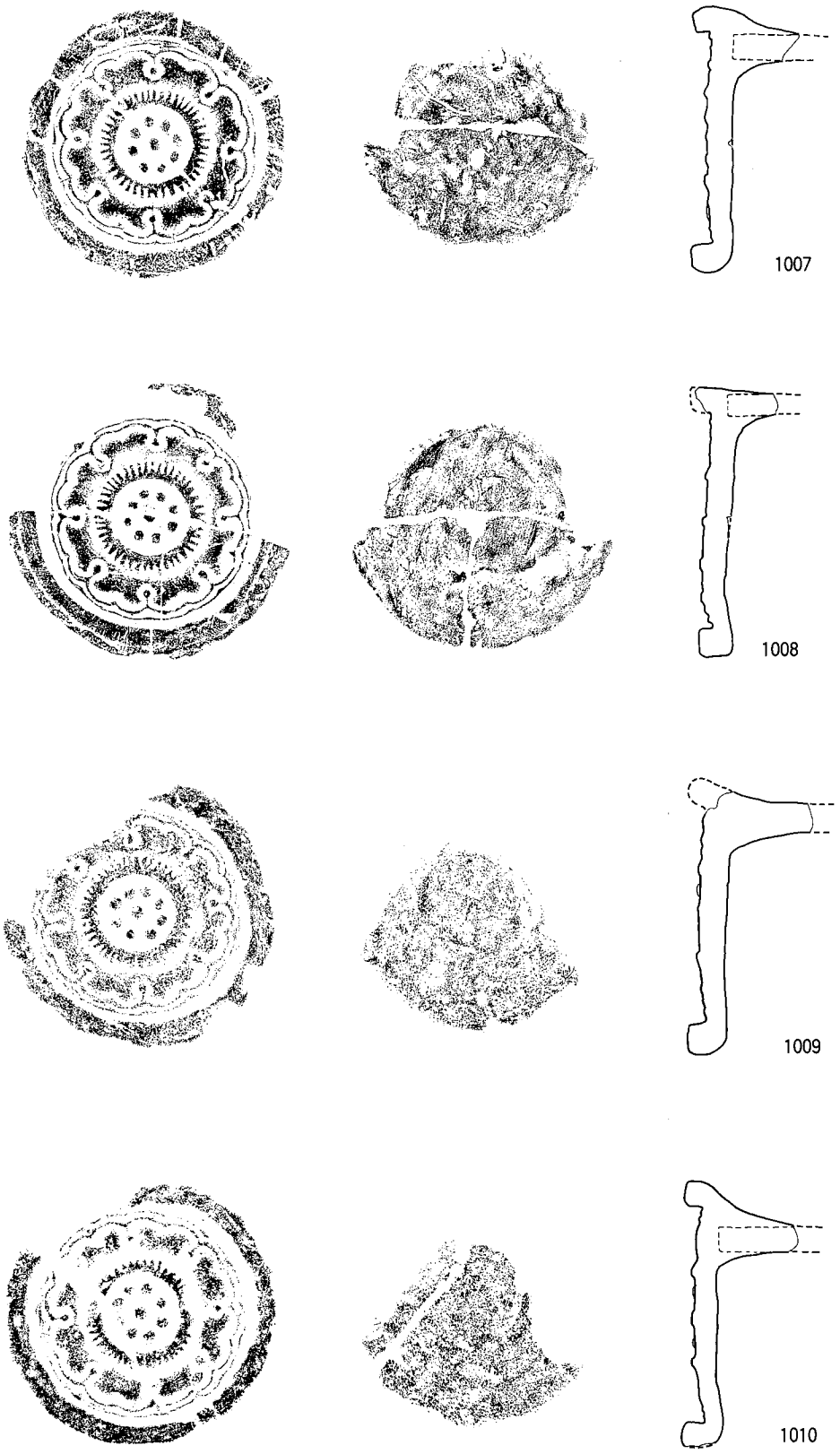

223
224
225
226
227
228
229
0
20cm
S:1/4

第34図

宮の池窯　出土瓦１

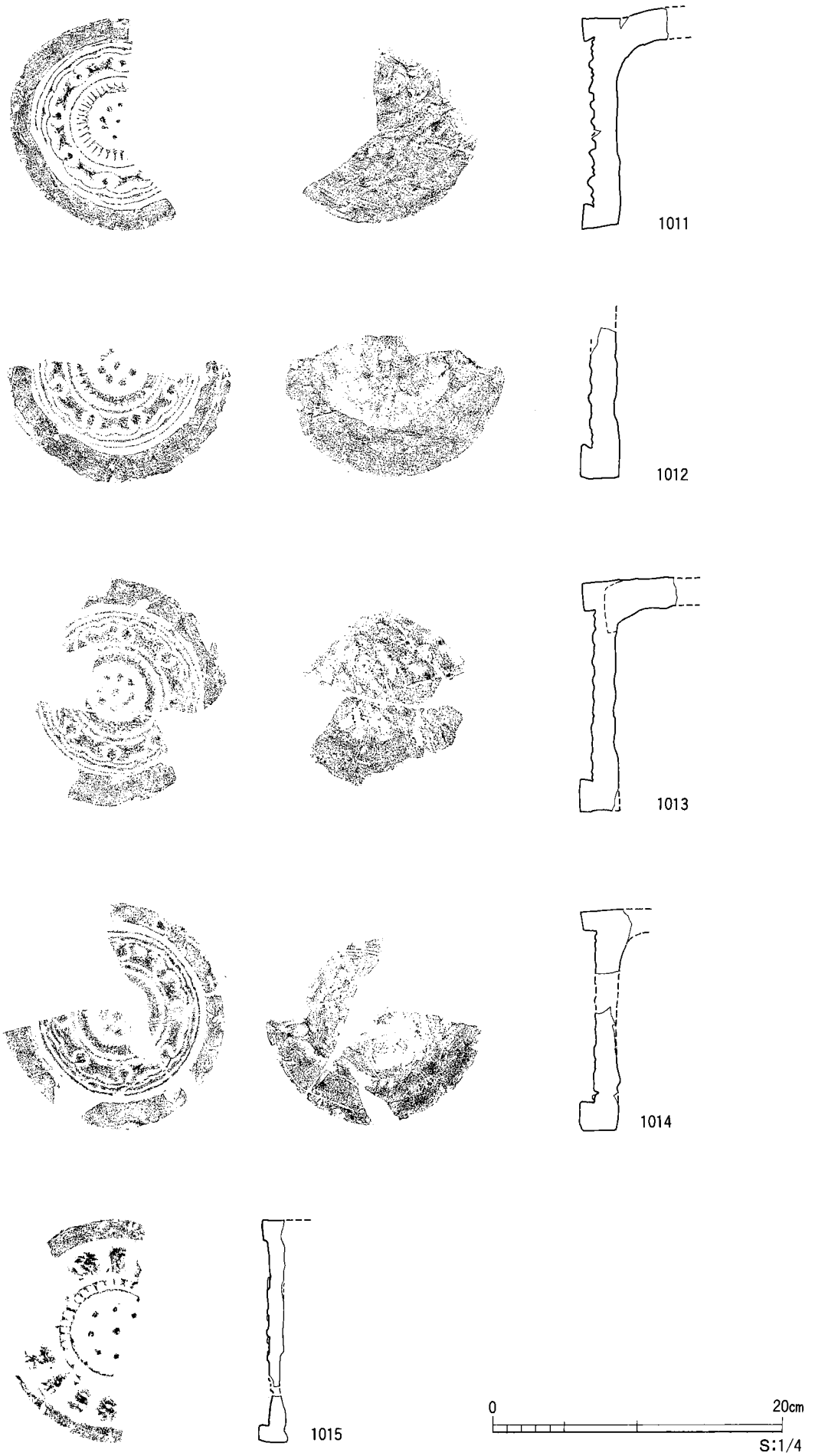


宮

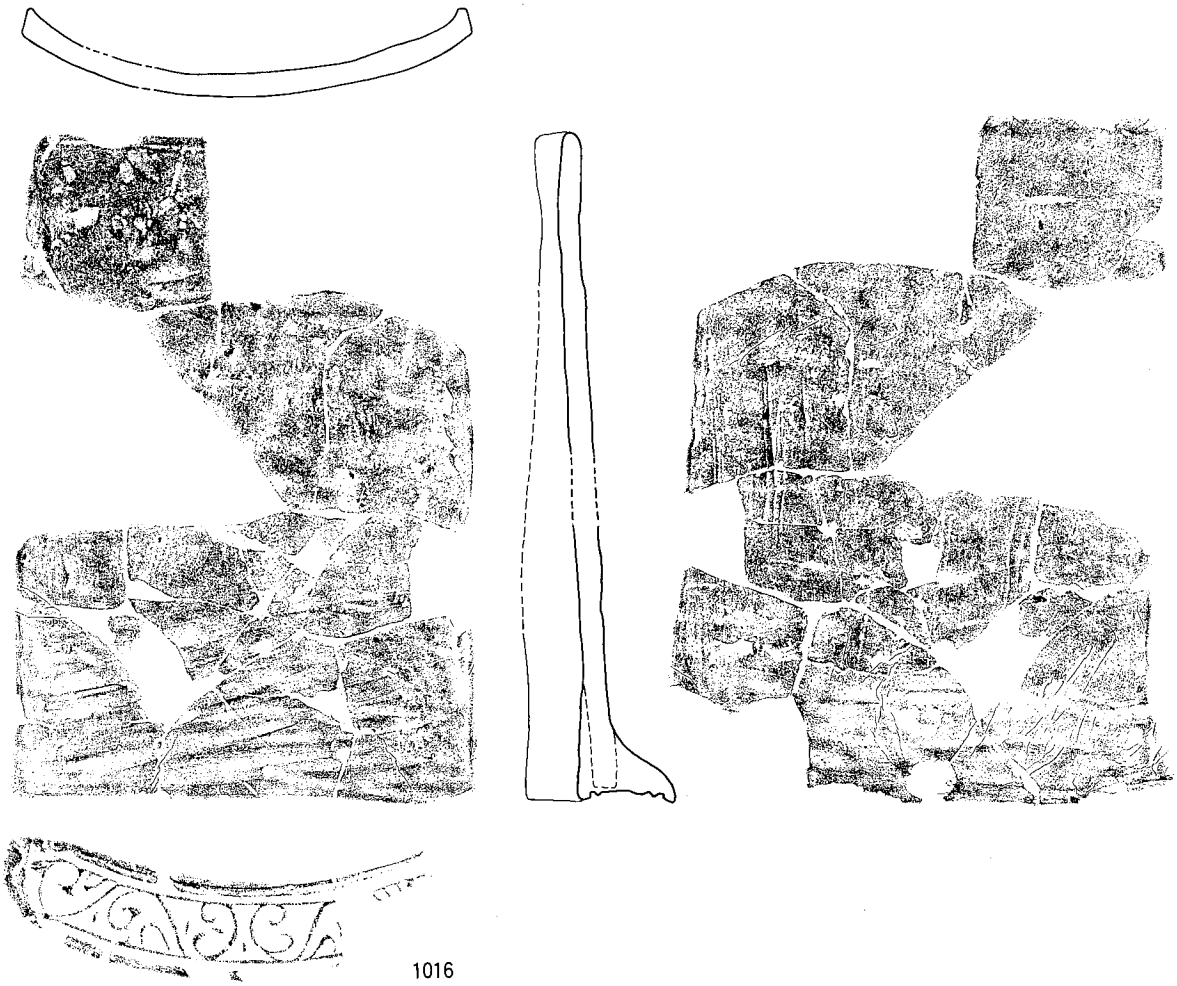

1007
1008
1009
1010
0
20cm
S:1/4

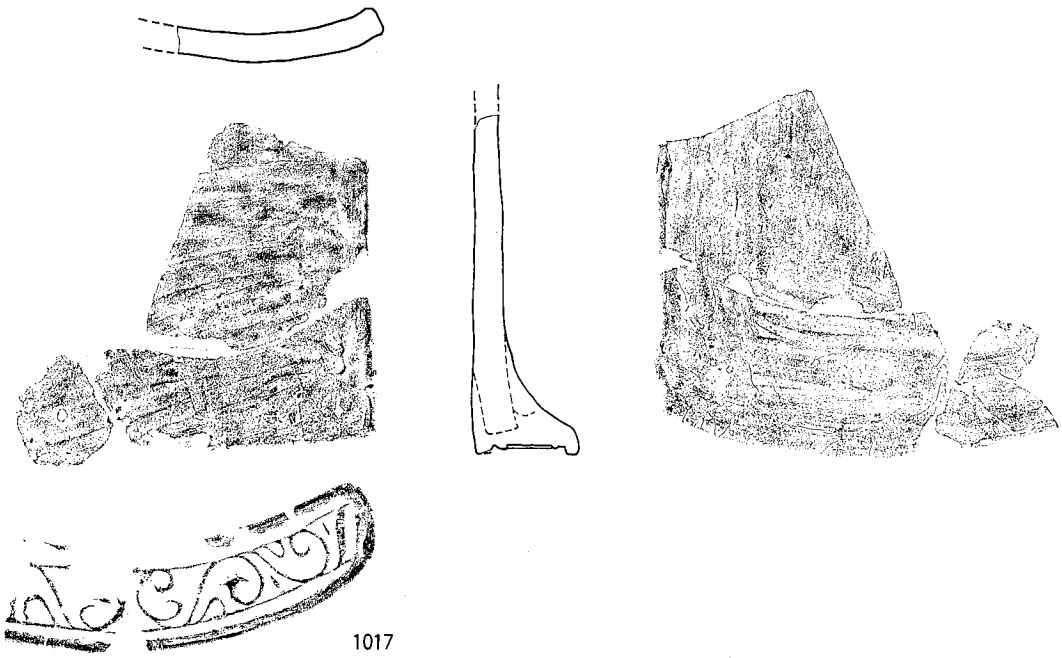
第36図

宮の池窯　出土瓦３



宮

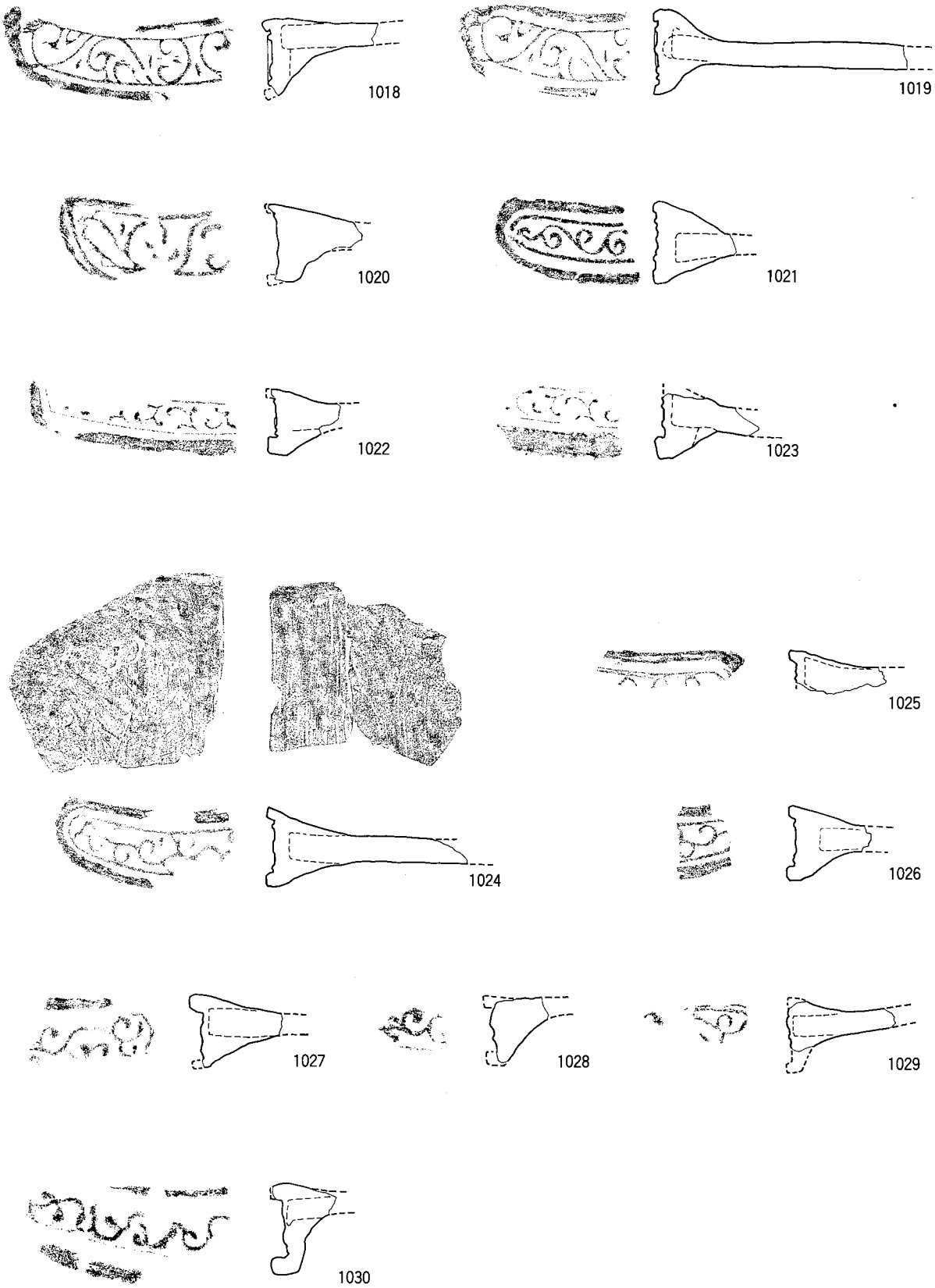




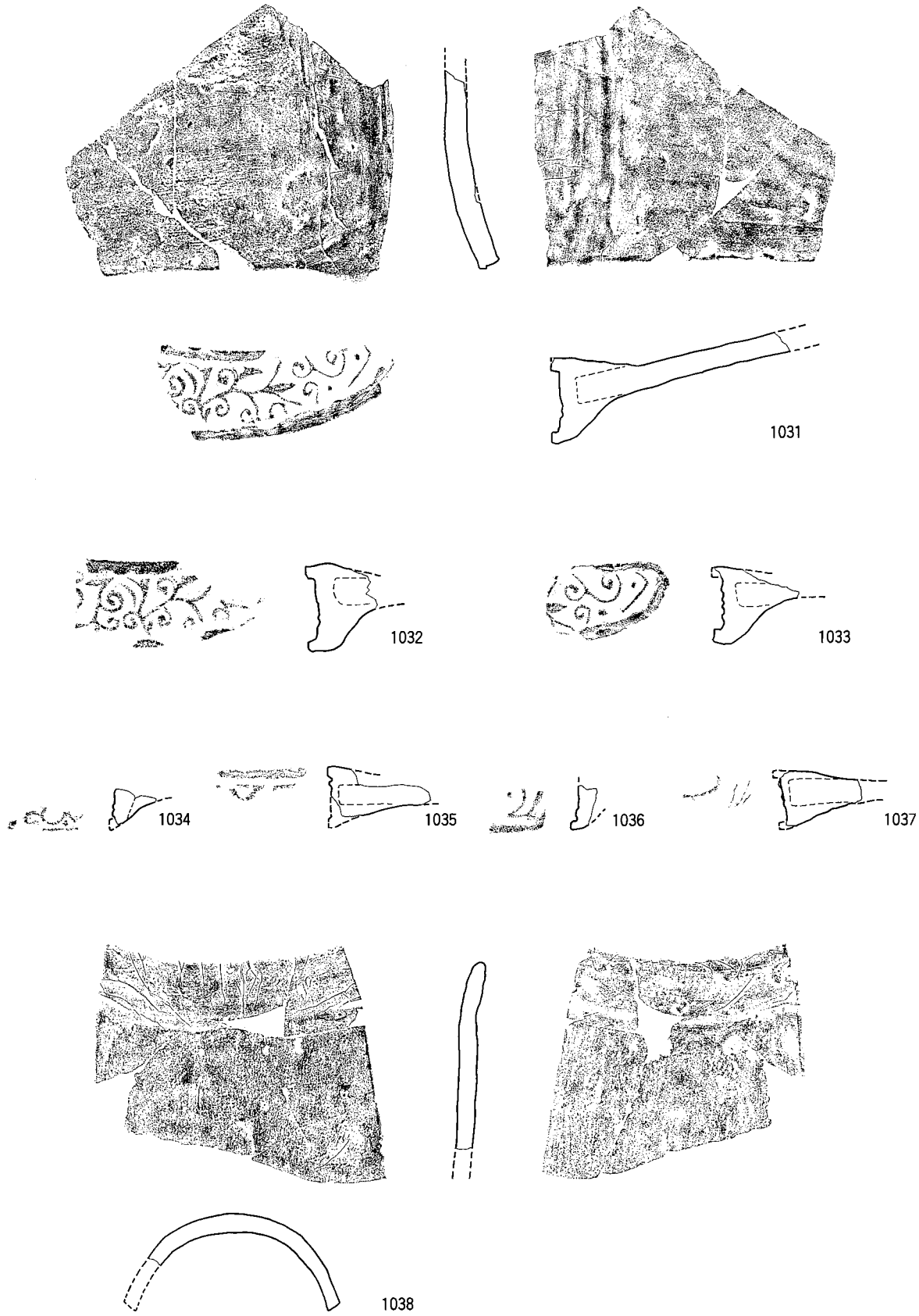
0　20cm
S:1/4

第38図

宮の池窯　出土瓦５

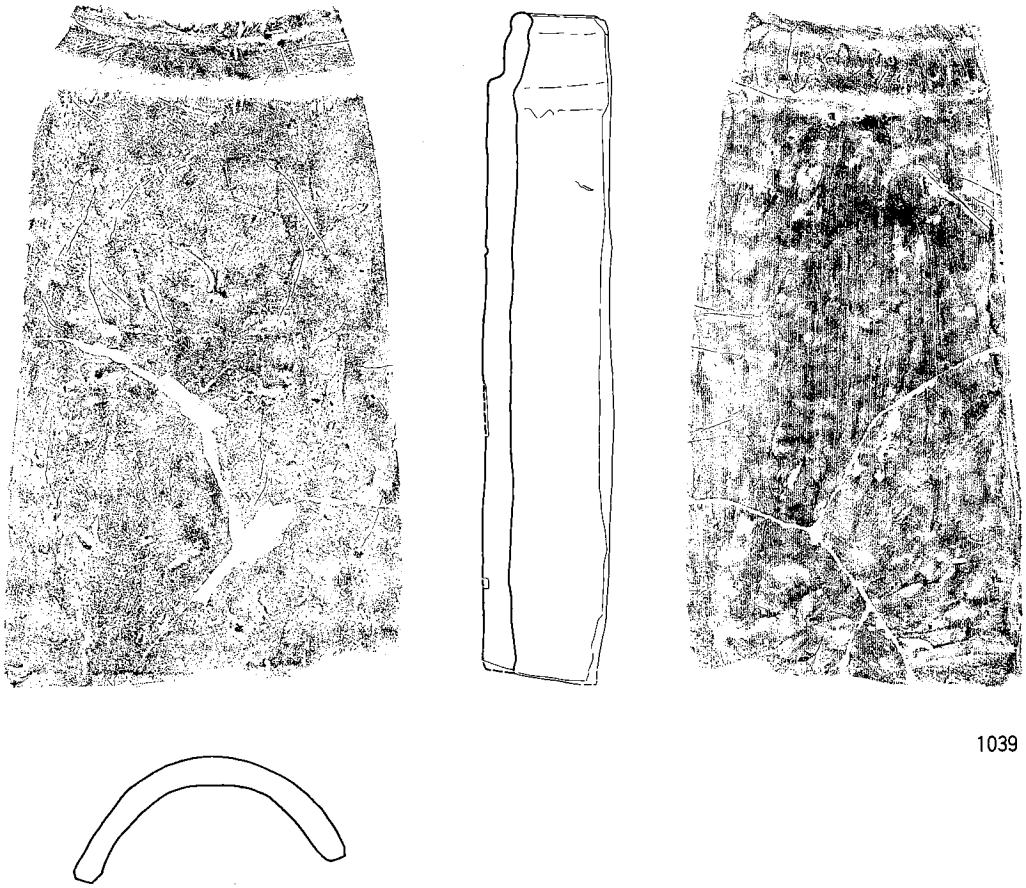


宮

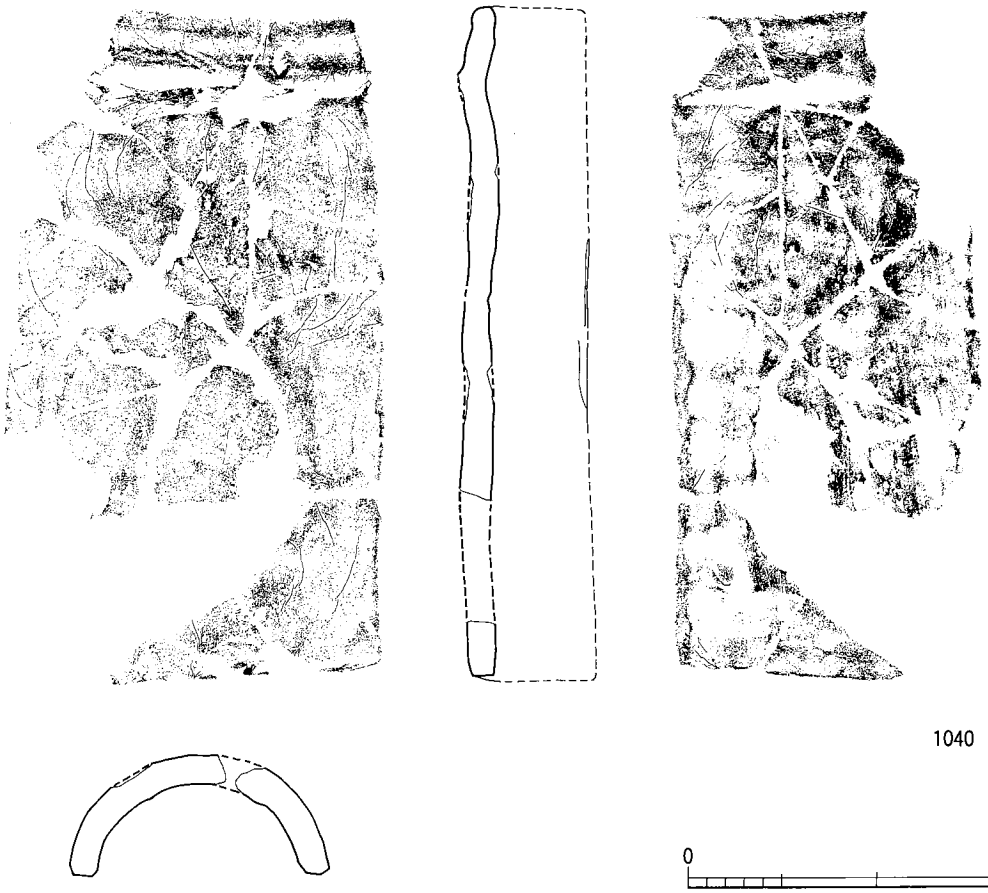

1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
0
20cm
S:1/4

第40図

宮の池窯　出土瓦７



1039

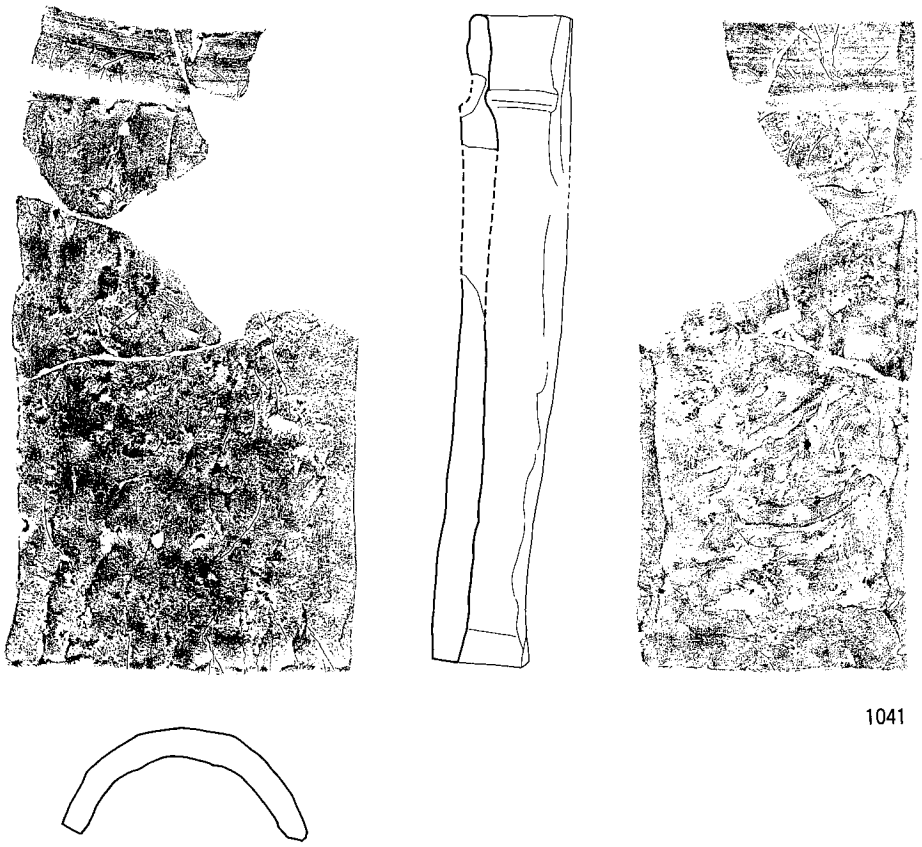


1040

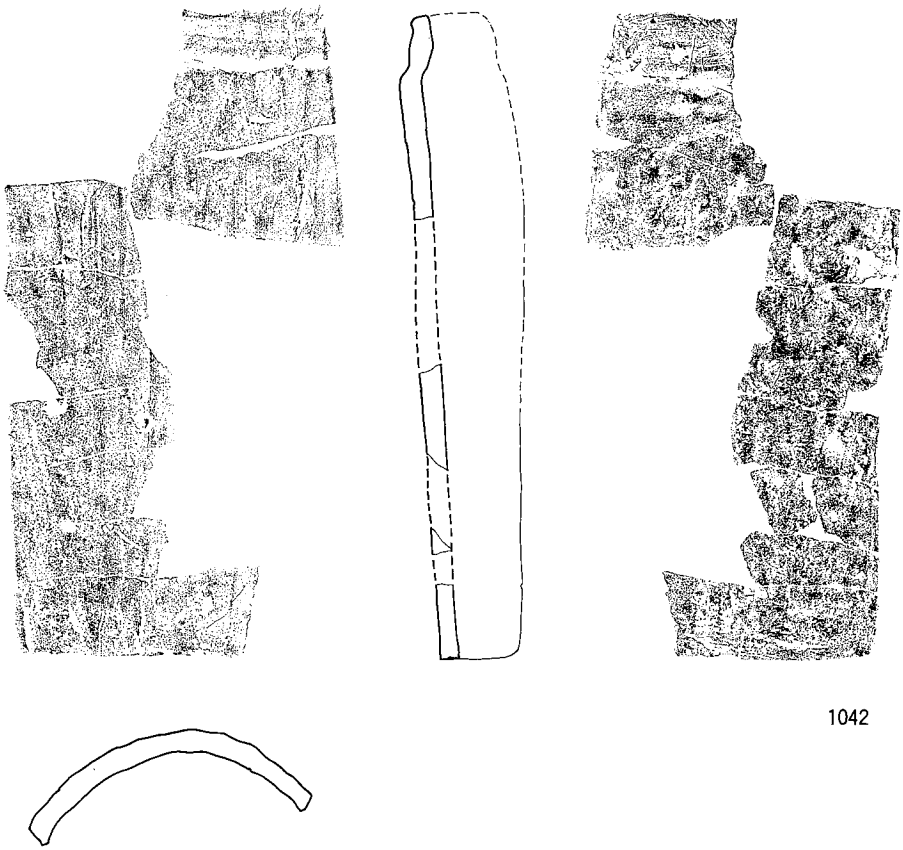
0　20cm

S:1/4

宮



1041



1042

0　20cm
S:1/4

第42図

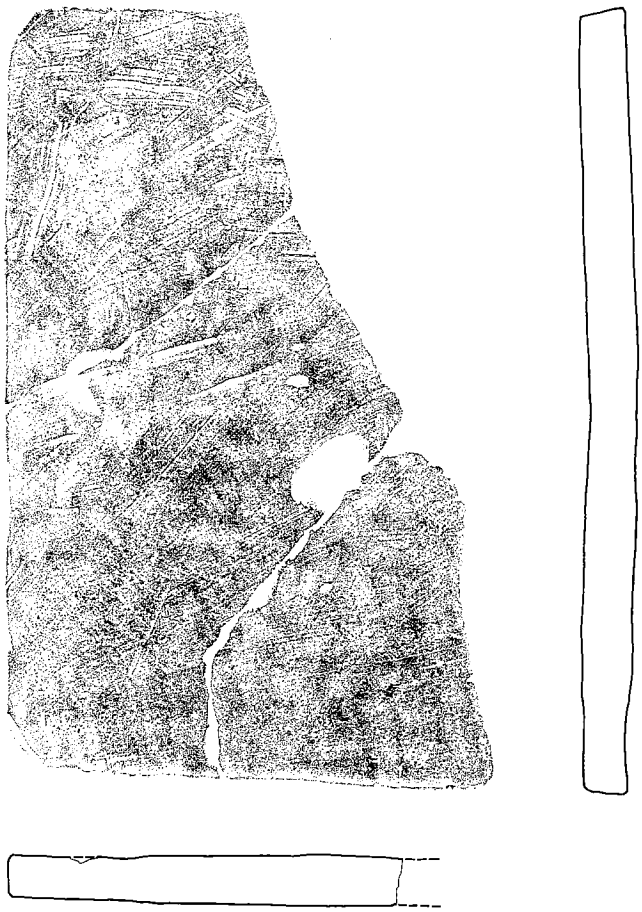
宮の池窯　出土瓦 9

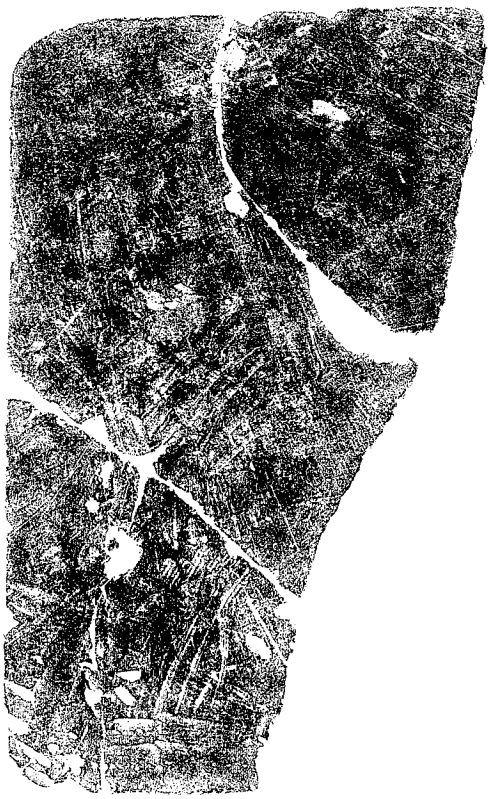
1043

1044

0　20cm

S:1/4



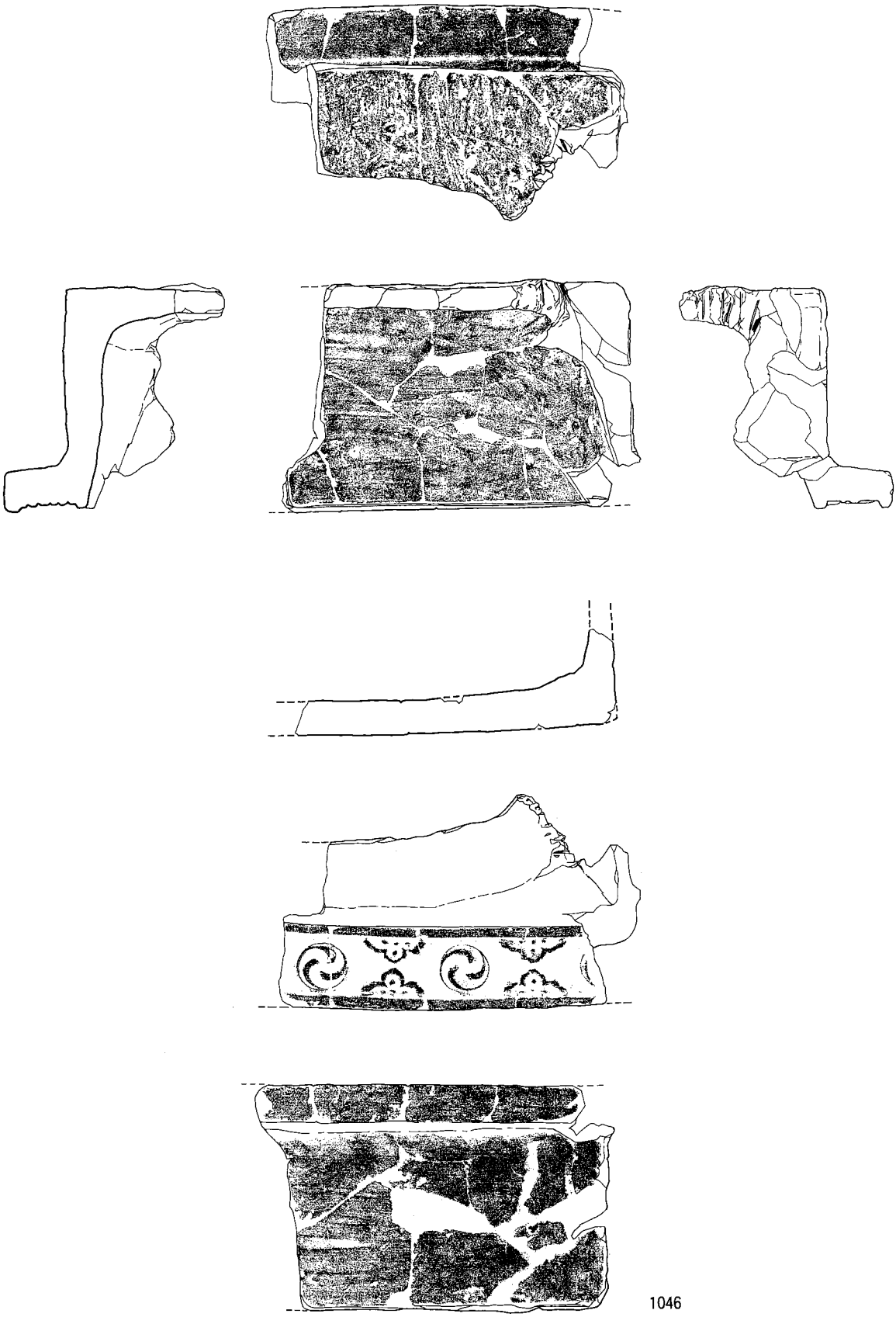


1045

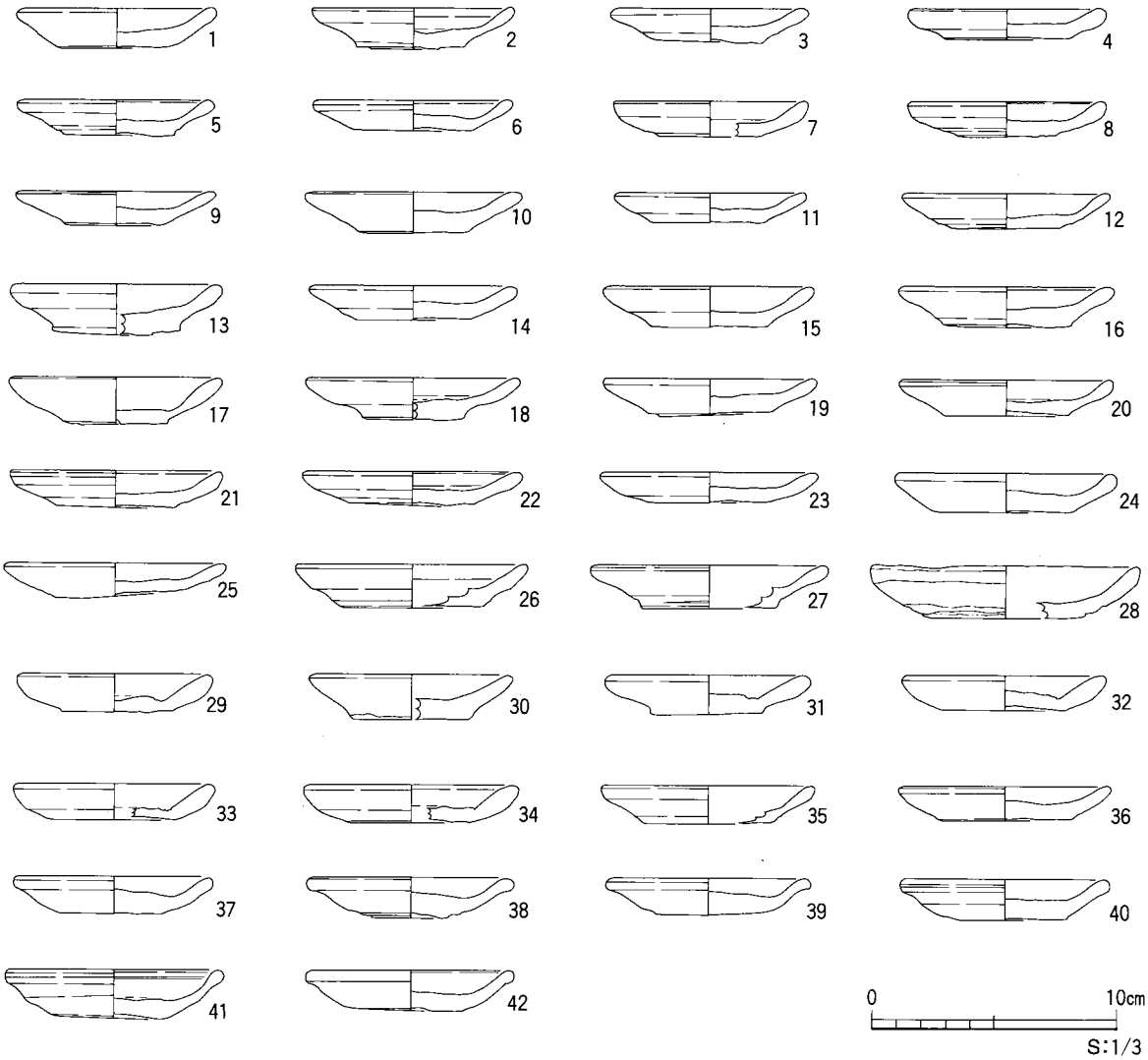
0　20cm
S:1/4

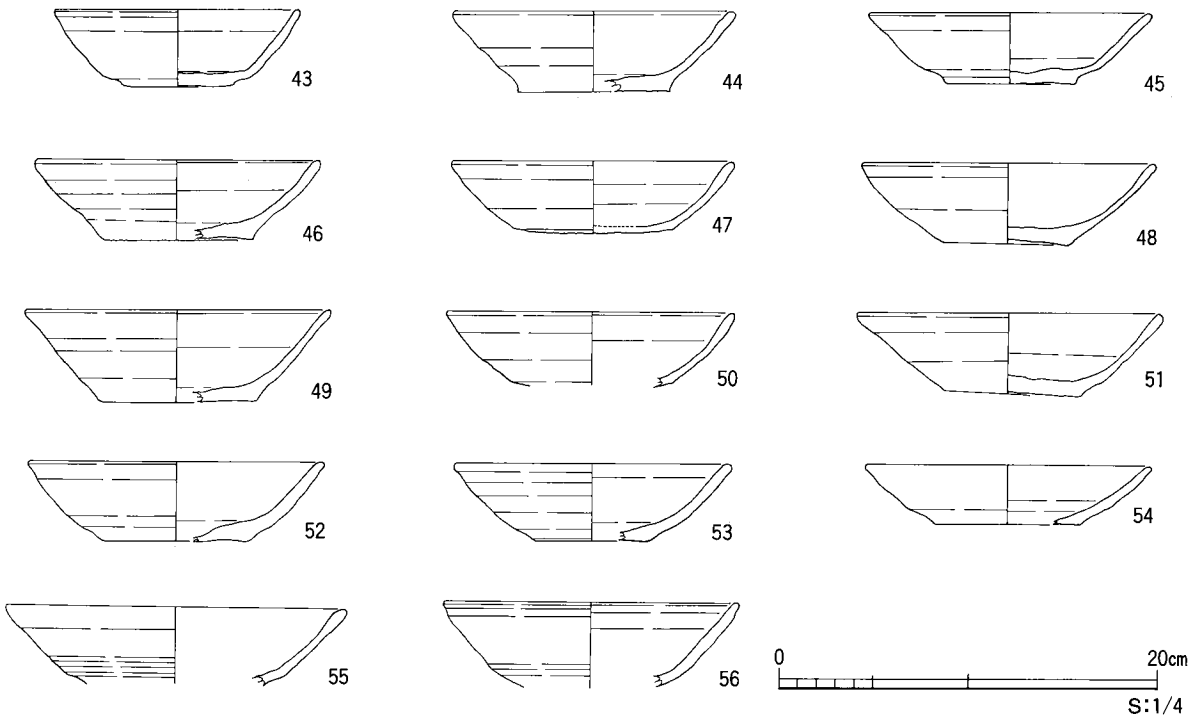
第44図

宮の池窯　出土瓦11



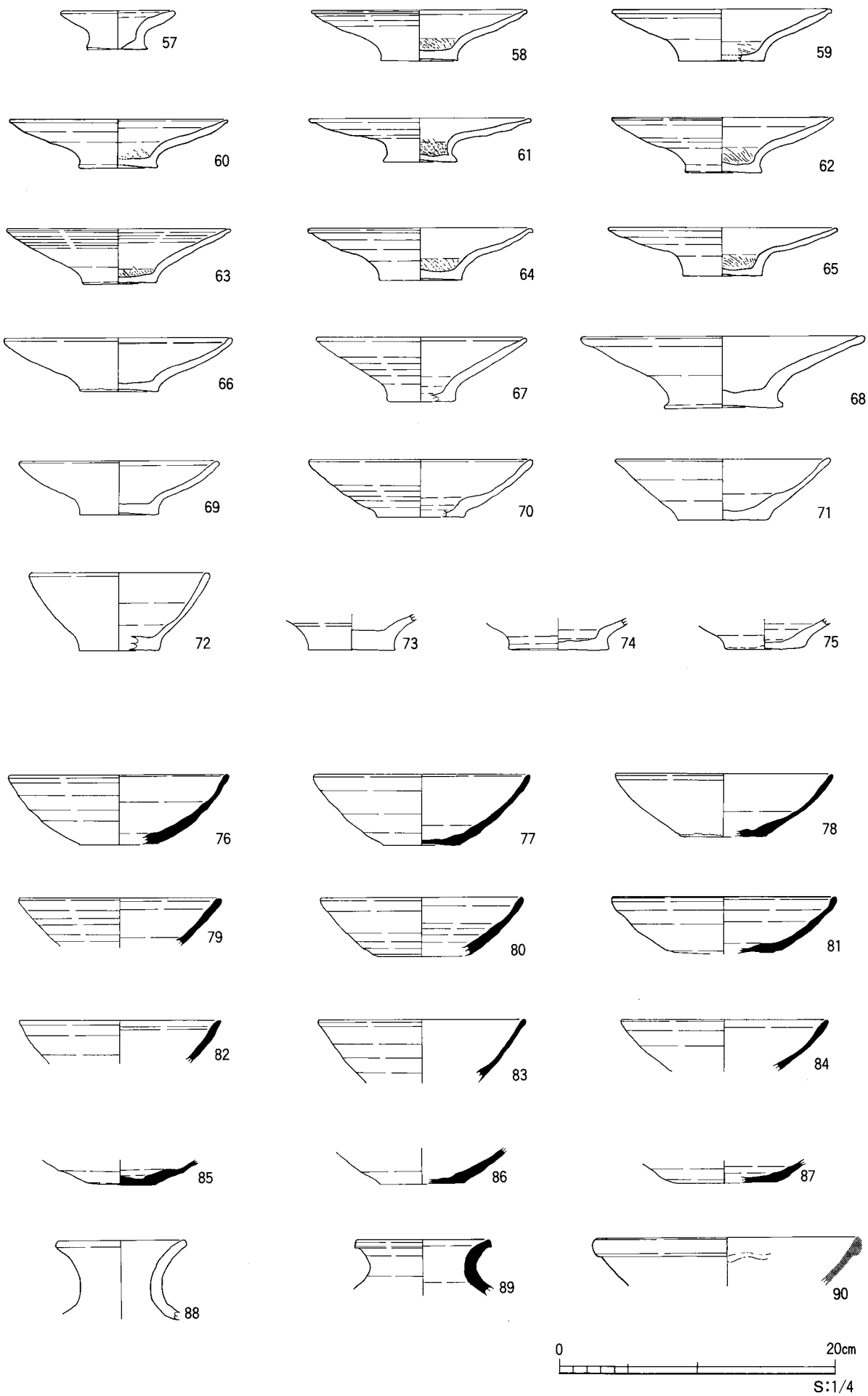
柳谷２号窯　出土土器１


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
10cm
S:1/3

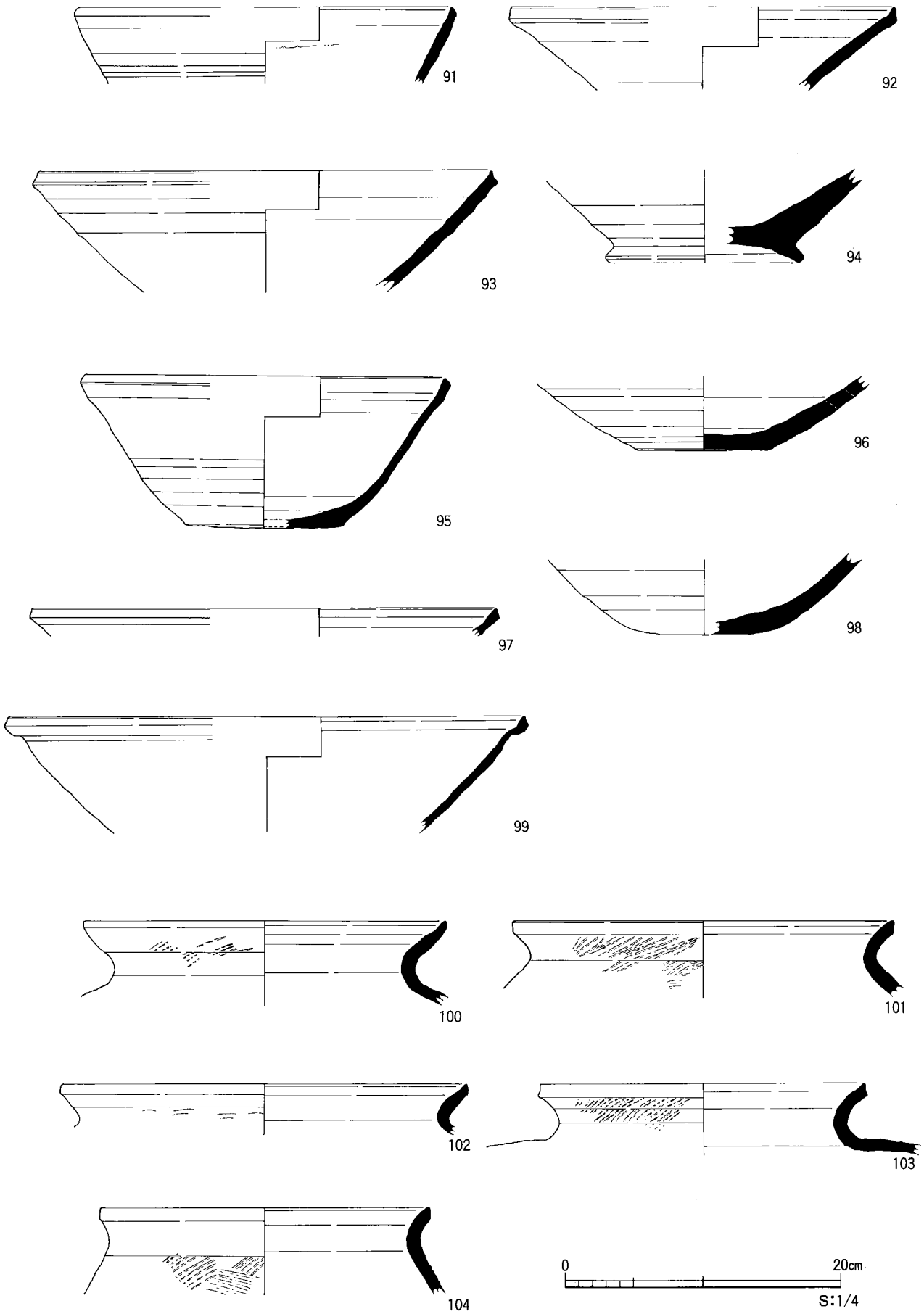

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
20cm
S:1/4

第46図

柳谷２号窯　出土土器２

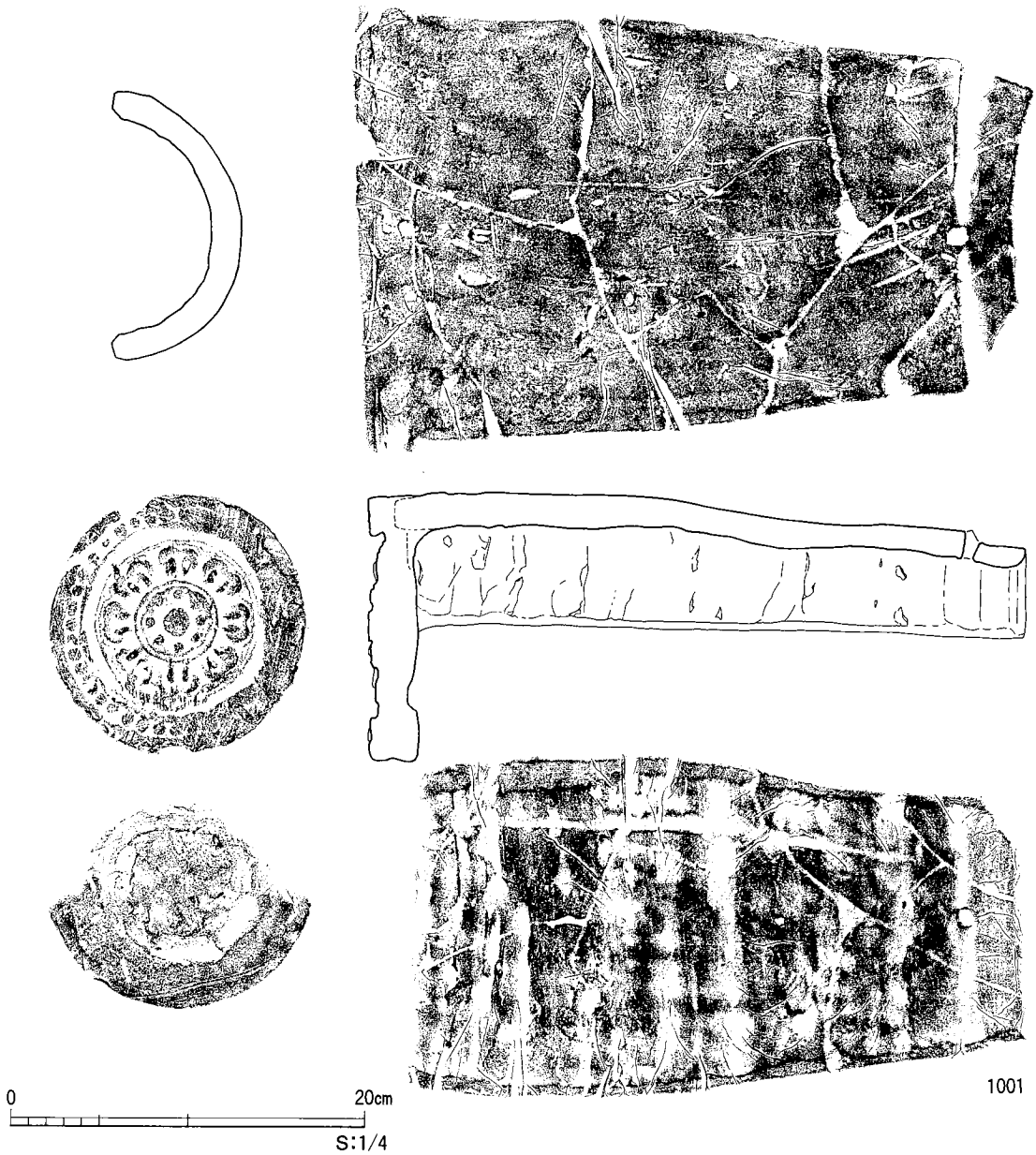


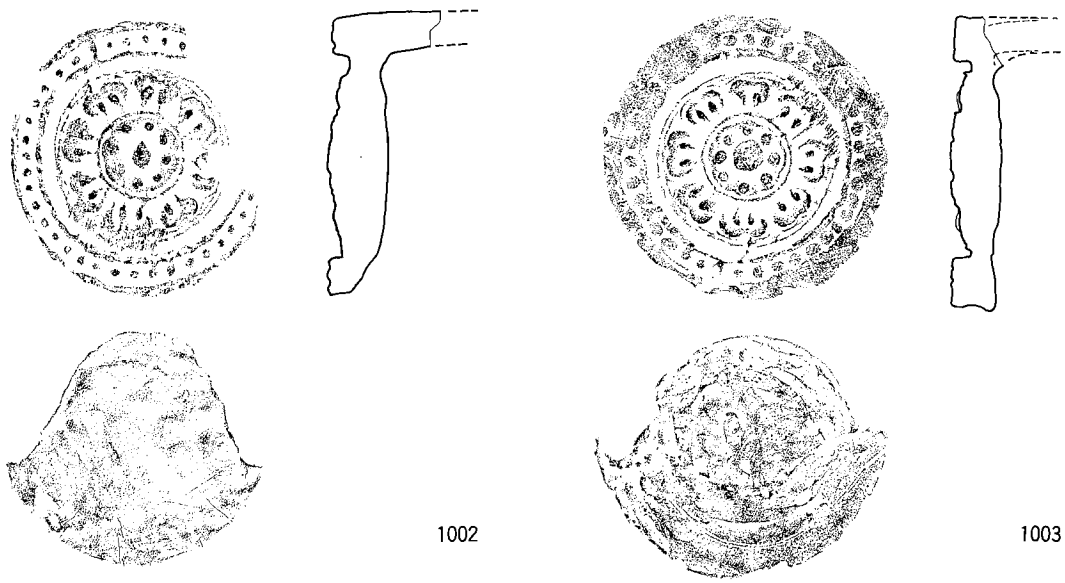
柳谷２号窯　出土土器３

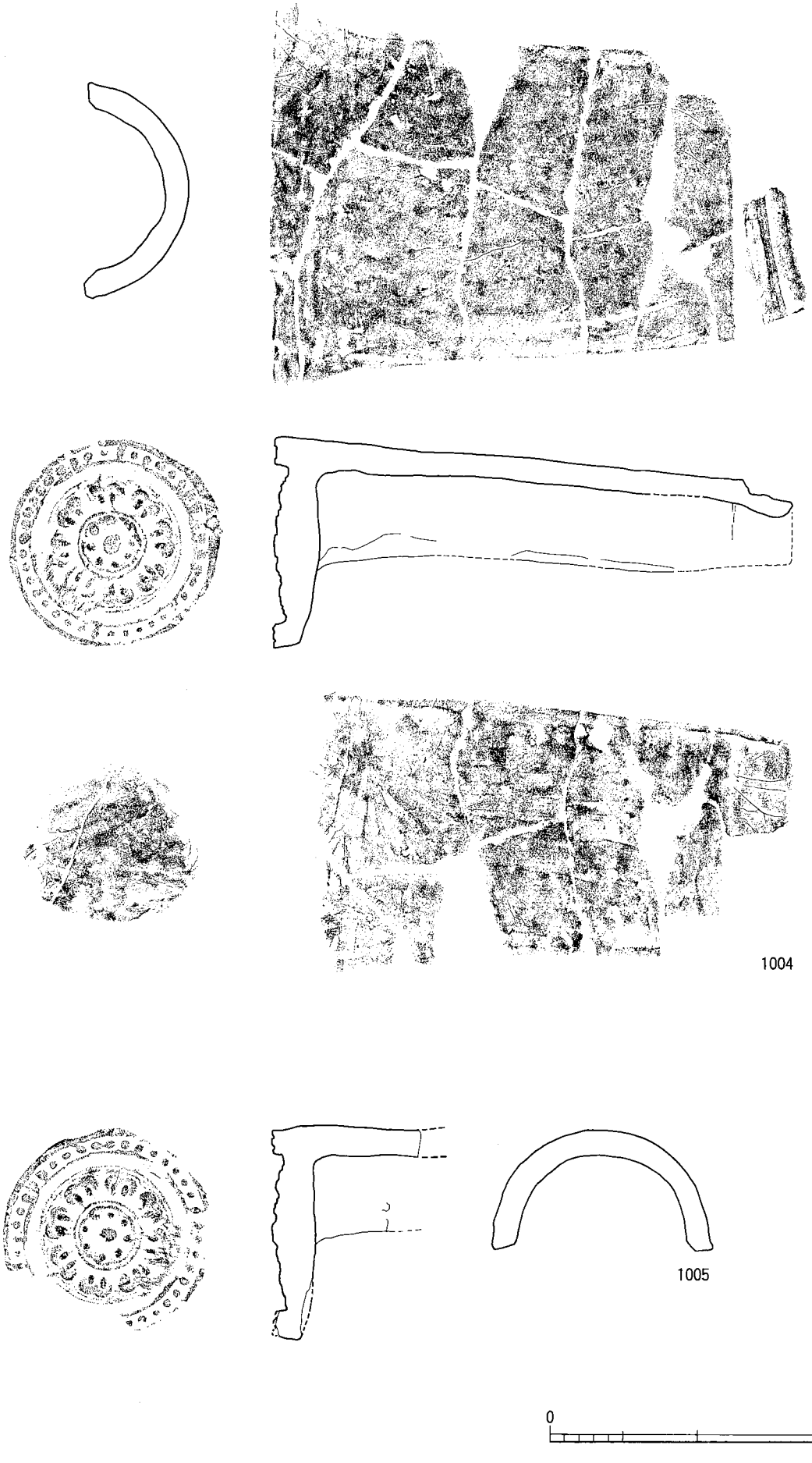


第48図

柳谷２号窯　出土瓦１

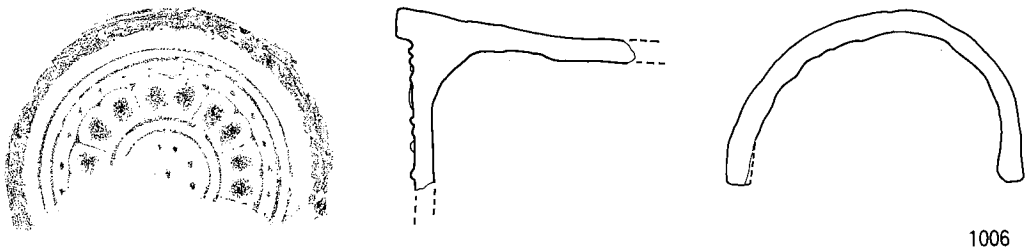




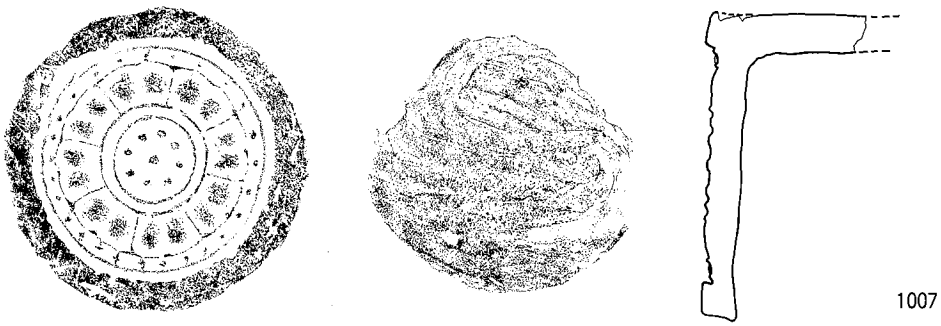

1004
1005
0
20cm
S:1/4

第50図

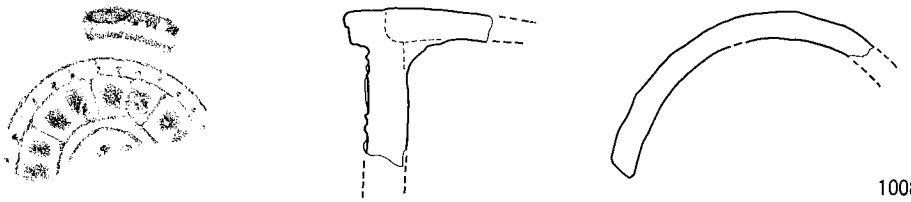
柳谷２号窯　出土瓦３



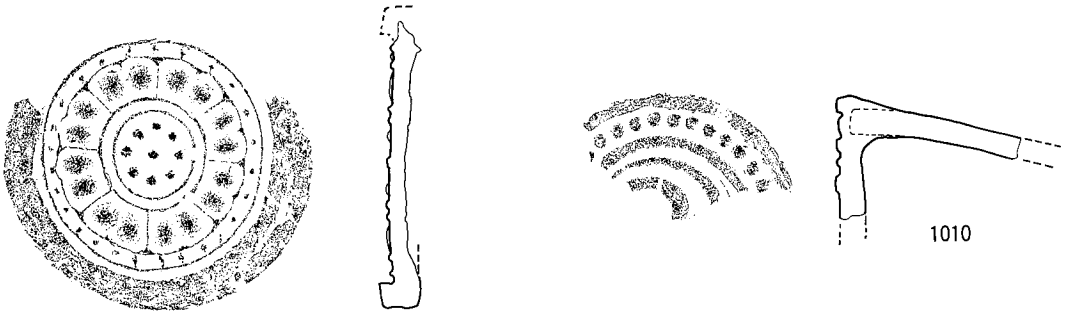
1006



1007



1008

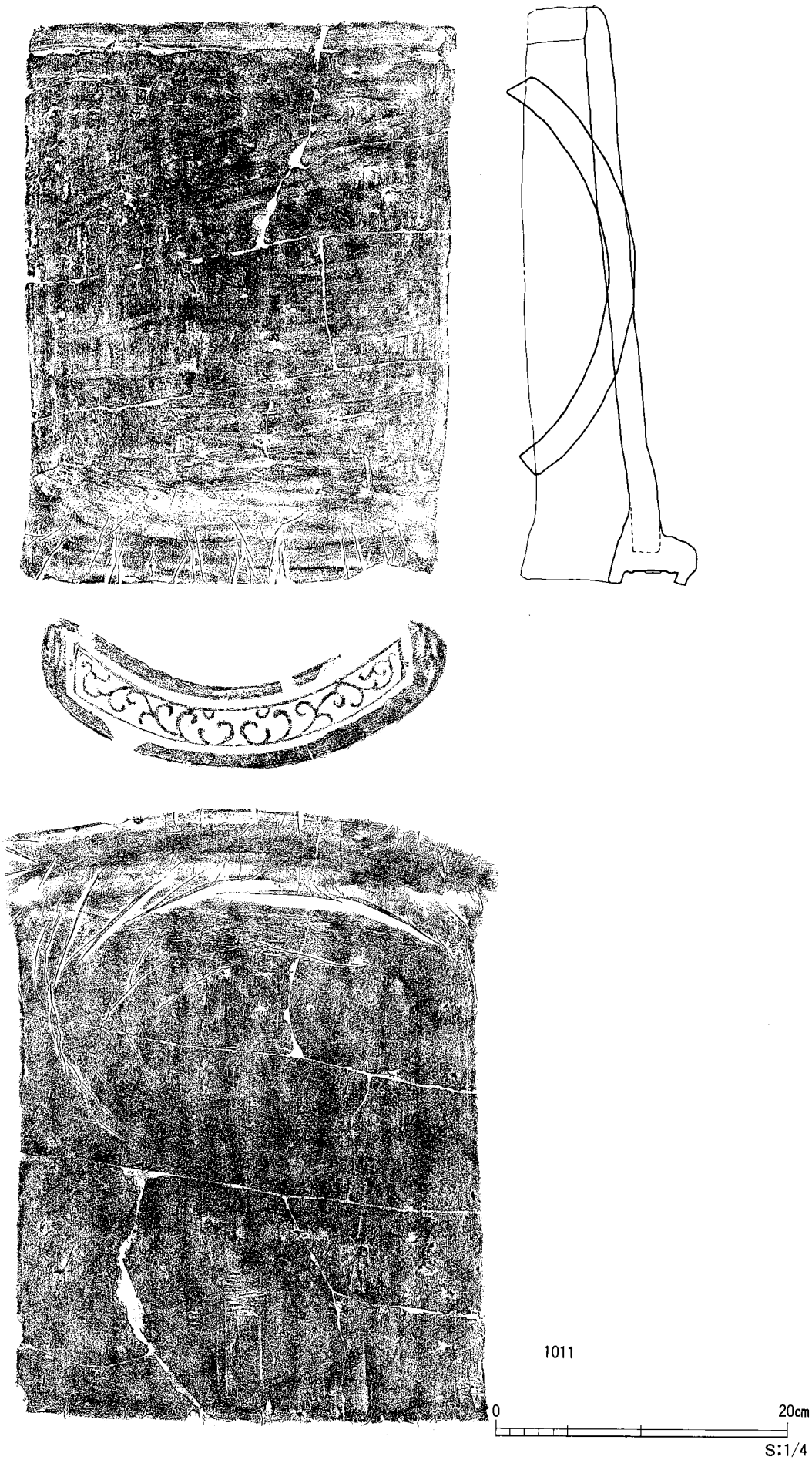


1009

1010

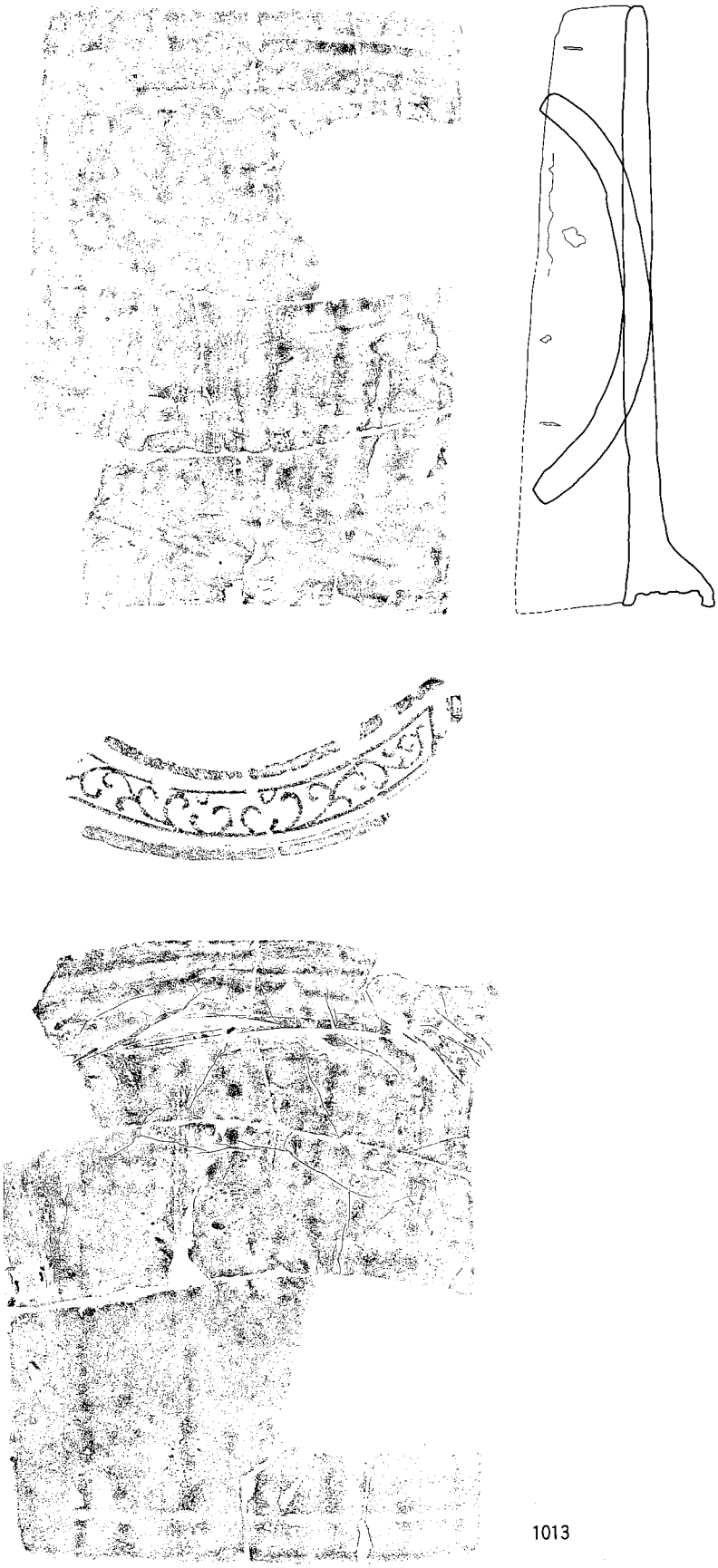
0　20cm

S:1/4


1011
0
20cm
S:1/4

第52図

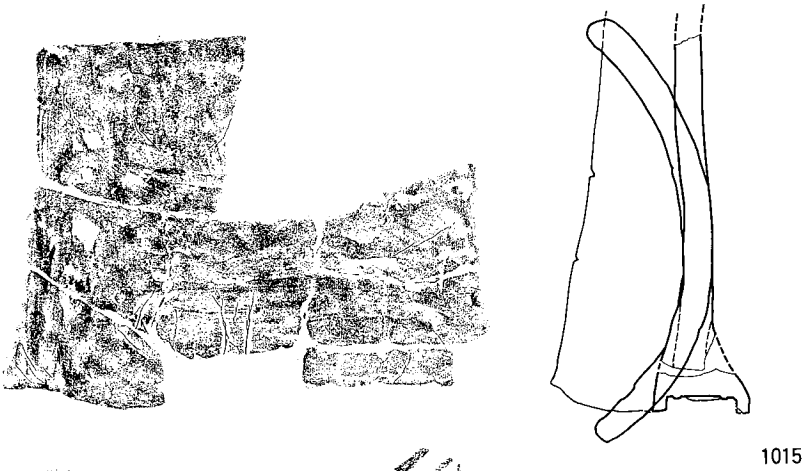
柳谷２号窯　出土瓦５


1013
0
20cm
S:1/4

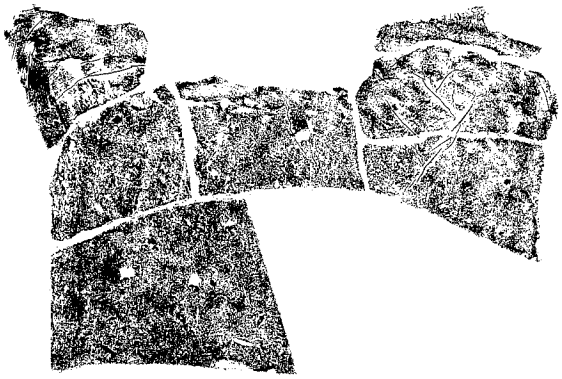
第54図

柳谷２号窯　出土瓦７

1014



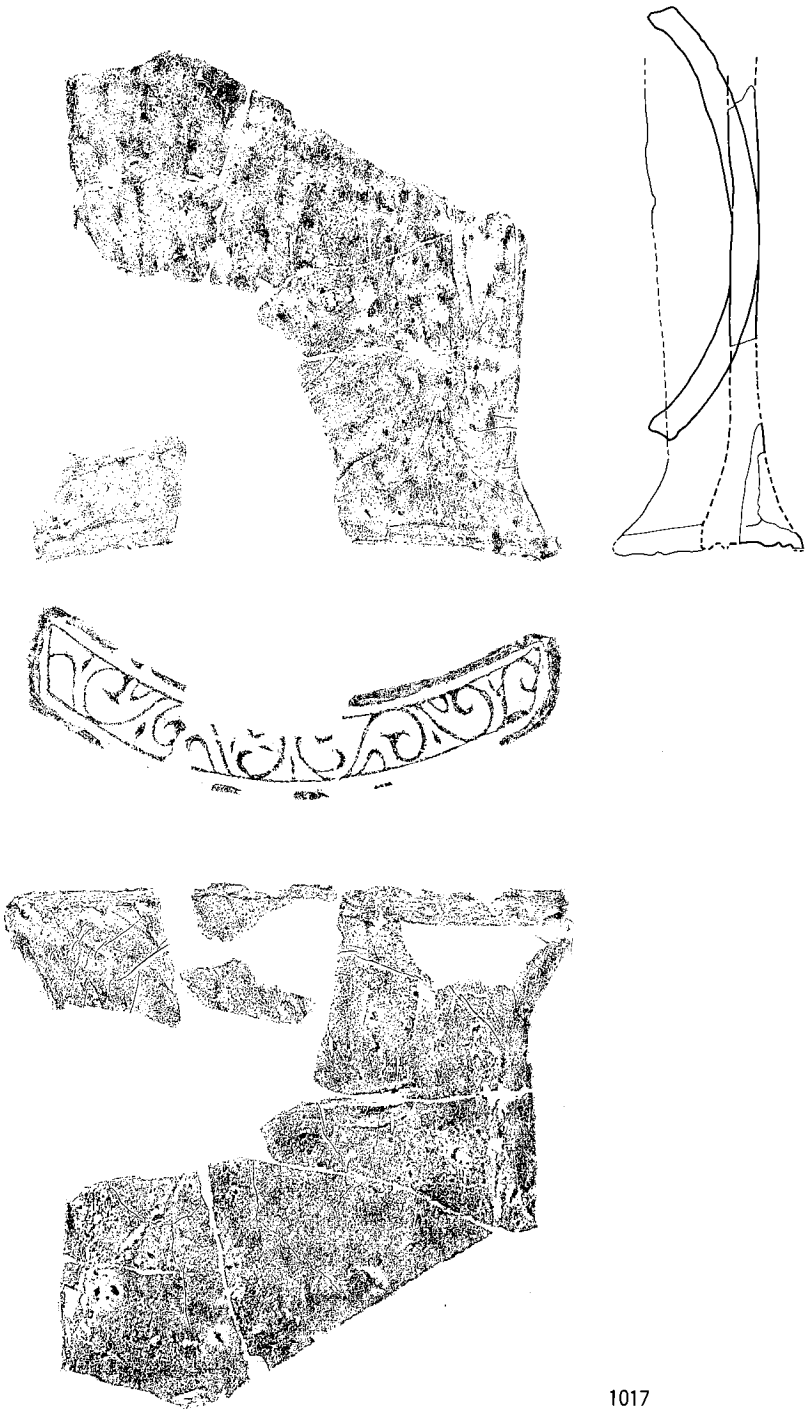
1015



1016

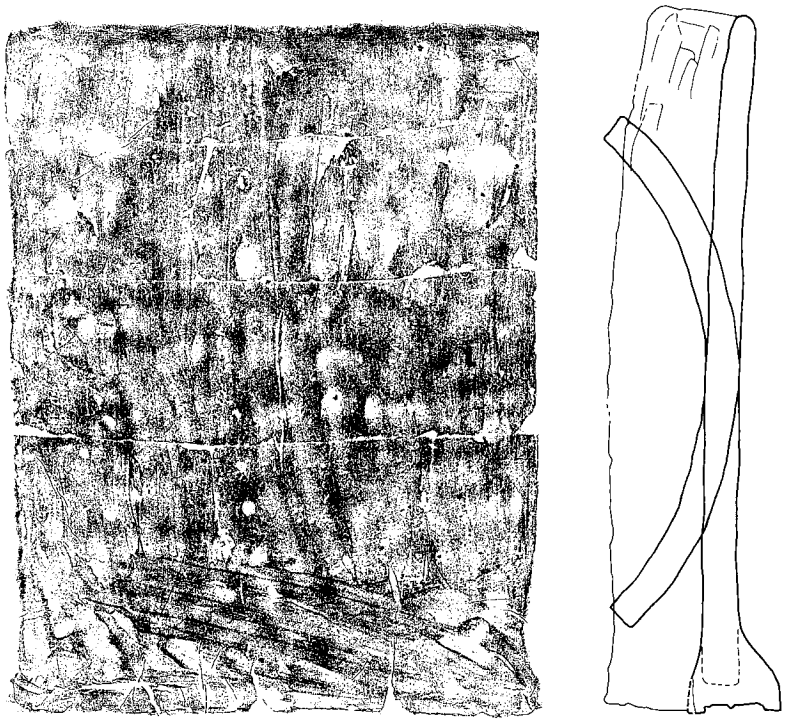
0　20cm

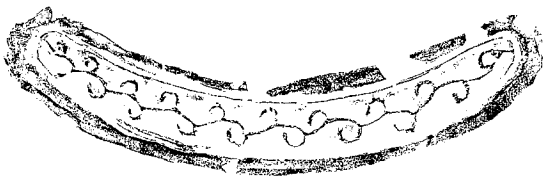
S:1/4


1017
0
20cm
S:1/4

第56図

柳谷２号窯　出土瓦９

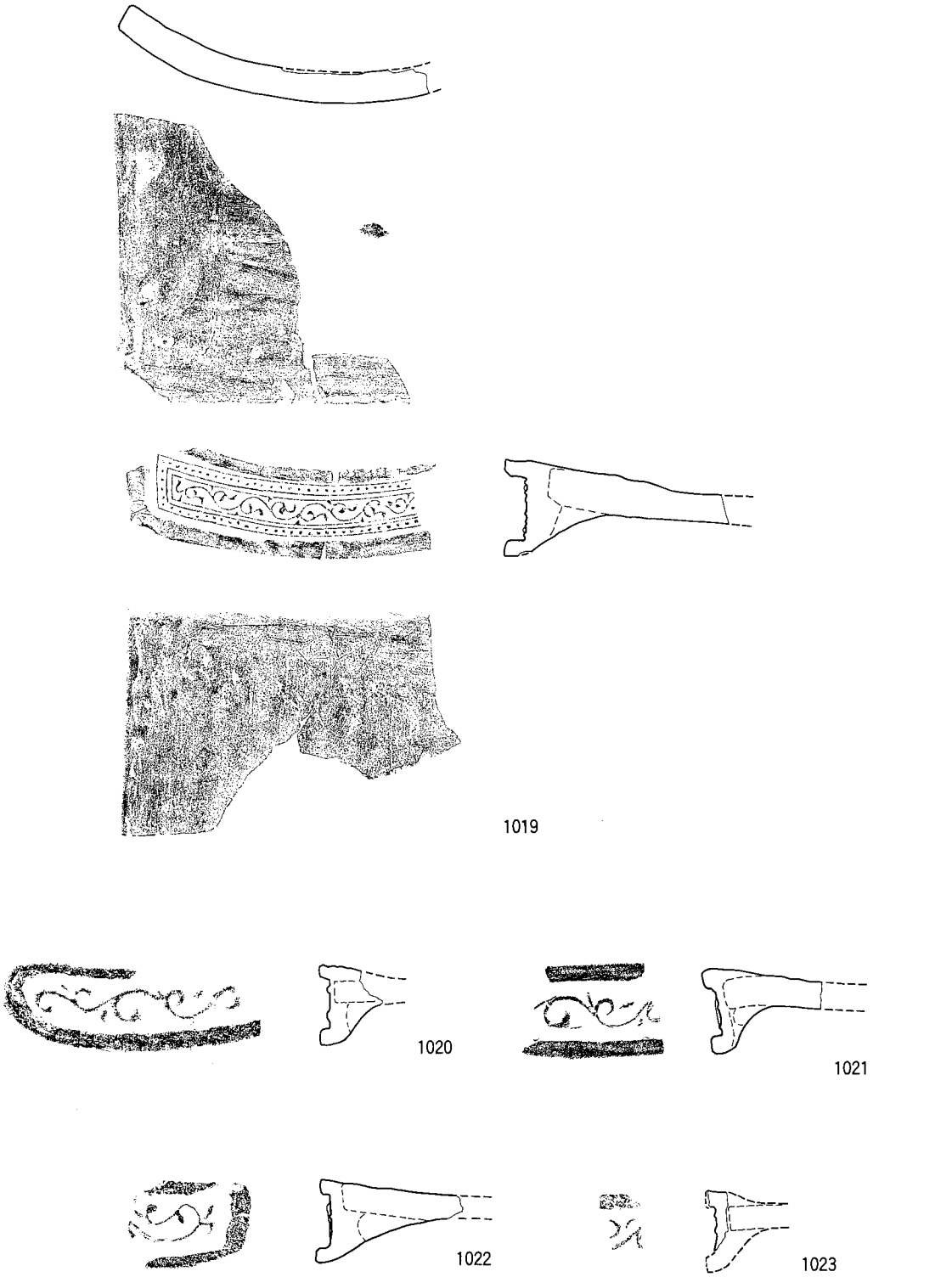




1018

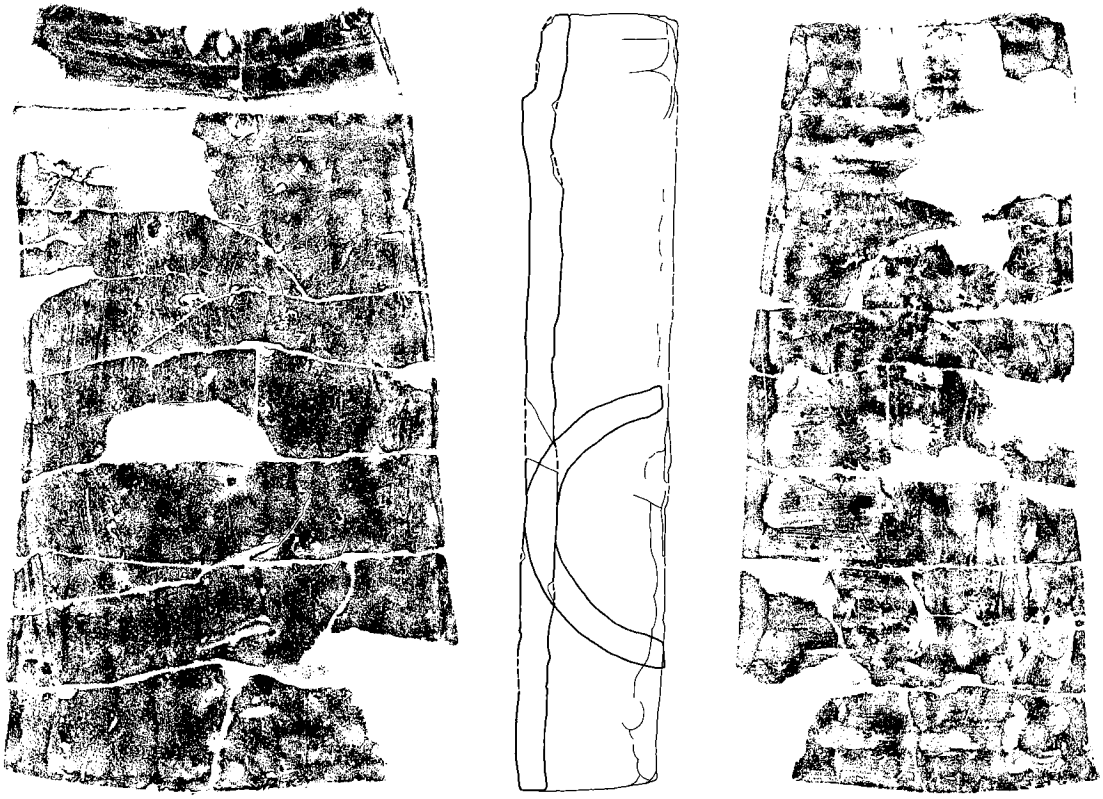
0　20cm

S:1/4

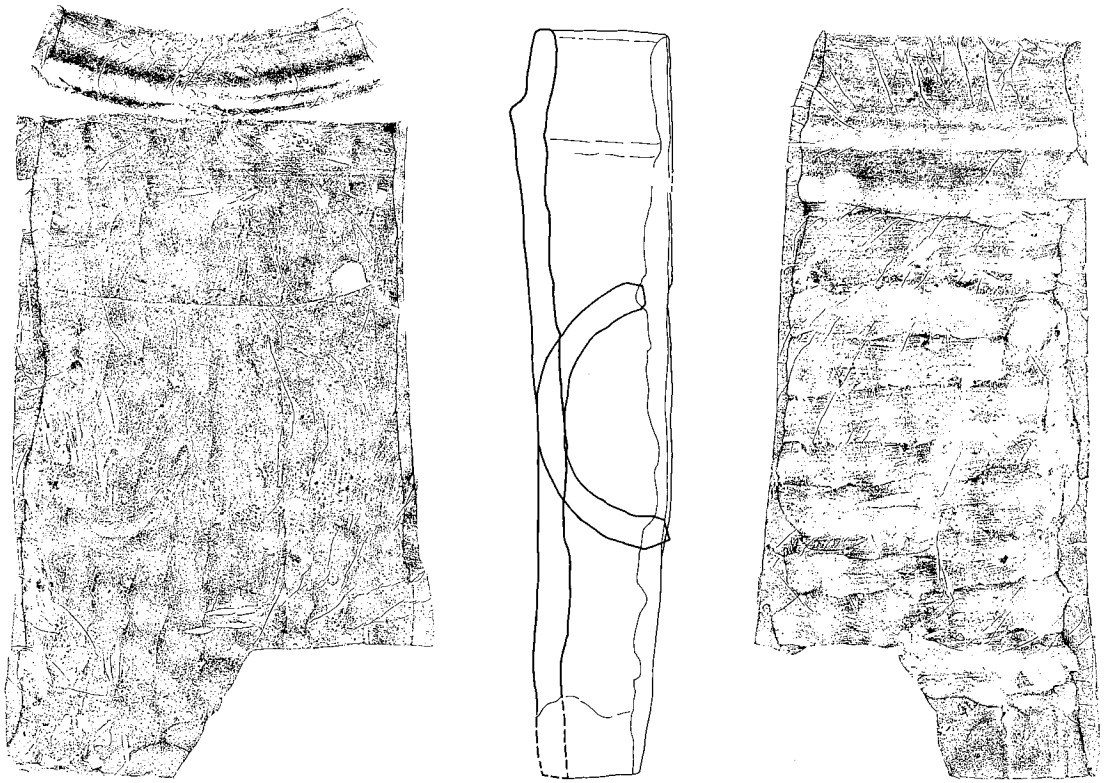

1019
1020
1021
1022
1023
0
20cm
S:1/4

第58図

柳谷２号窯　出土瓦11



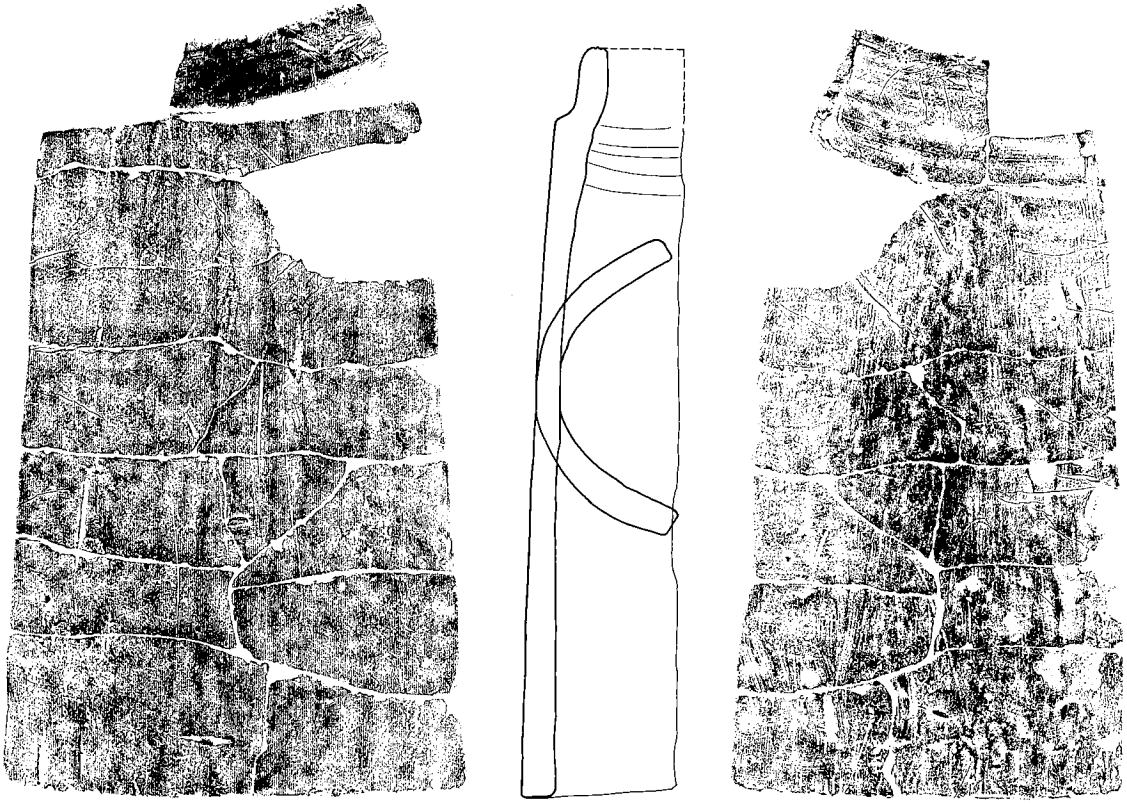
1024



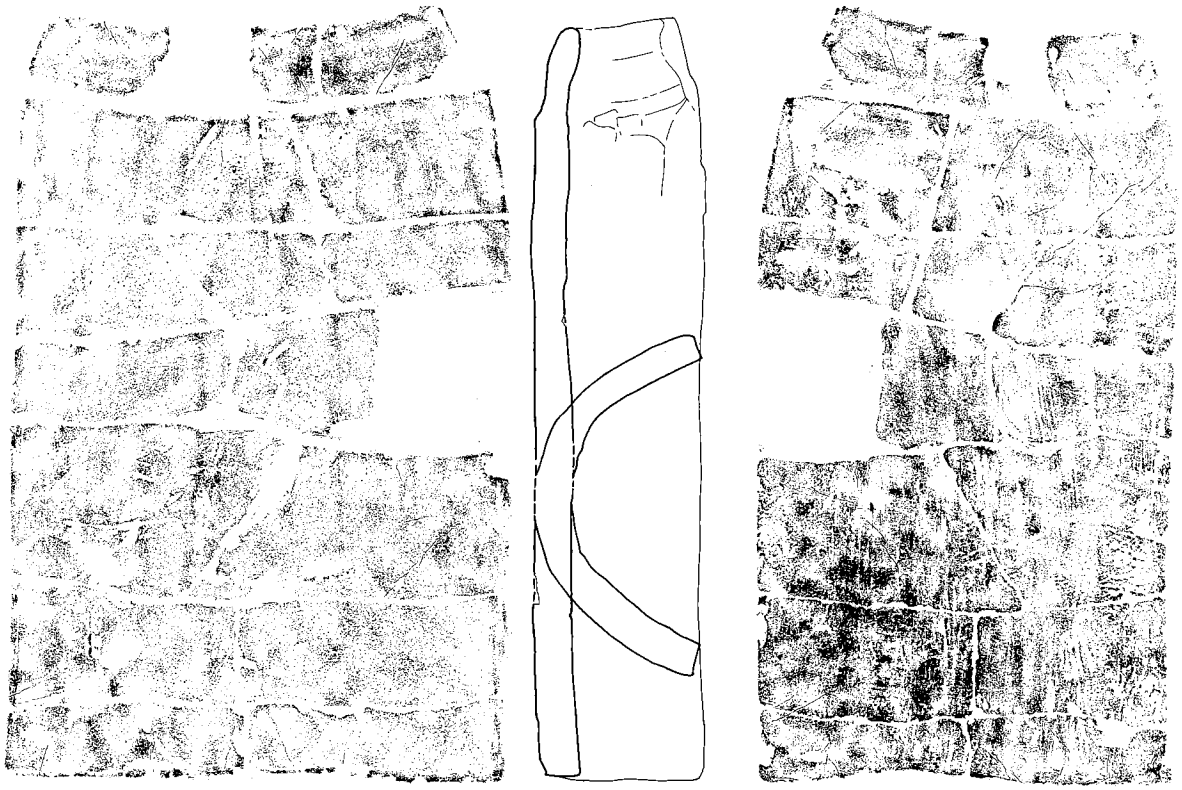
1025

0　20cm

S:1/4



1026

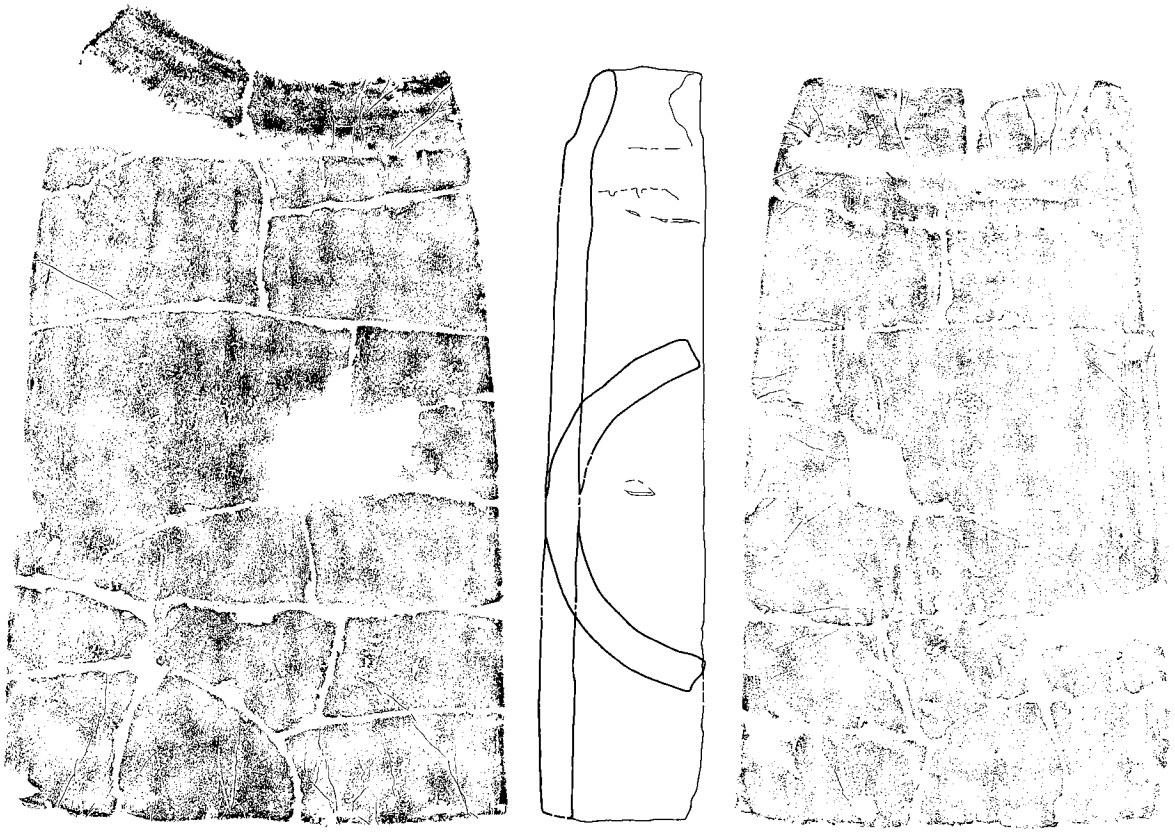


1027

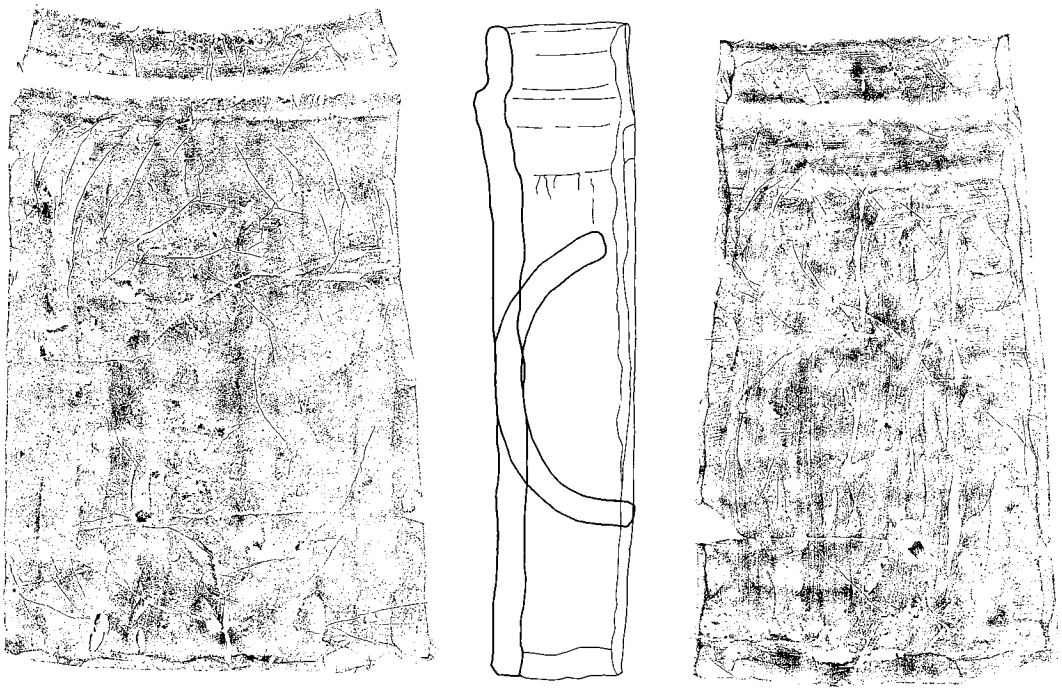
0　20cm
S:1/4

第60図

柳谷２号窯　出土瓦13



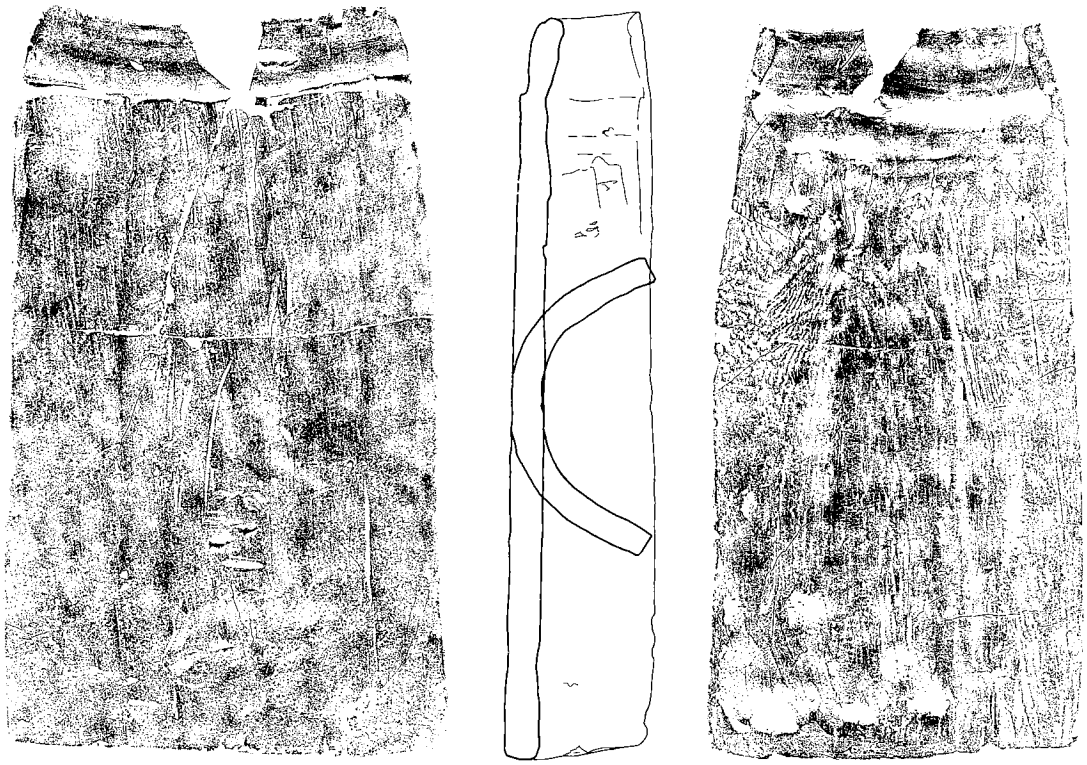
1028



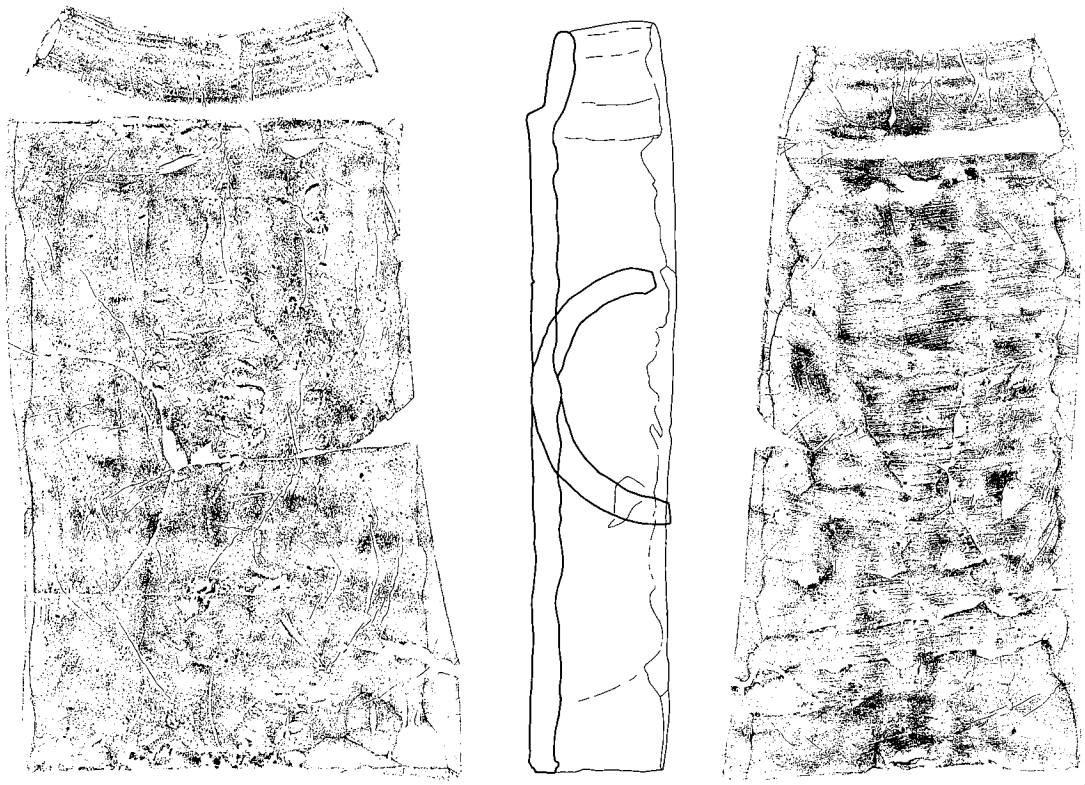
1029

0　20cm

S:1/4



1030

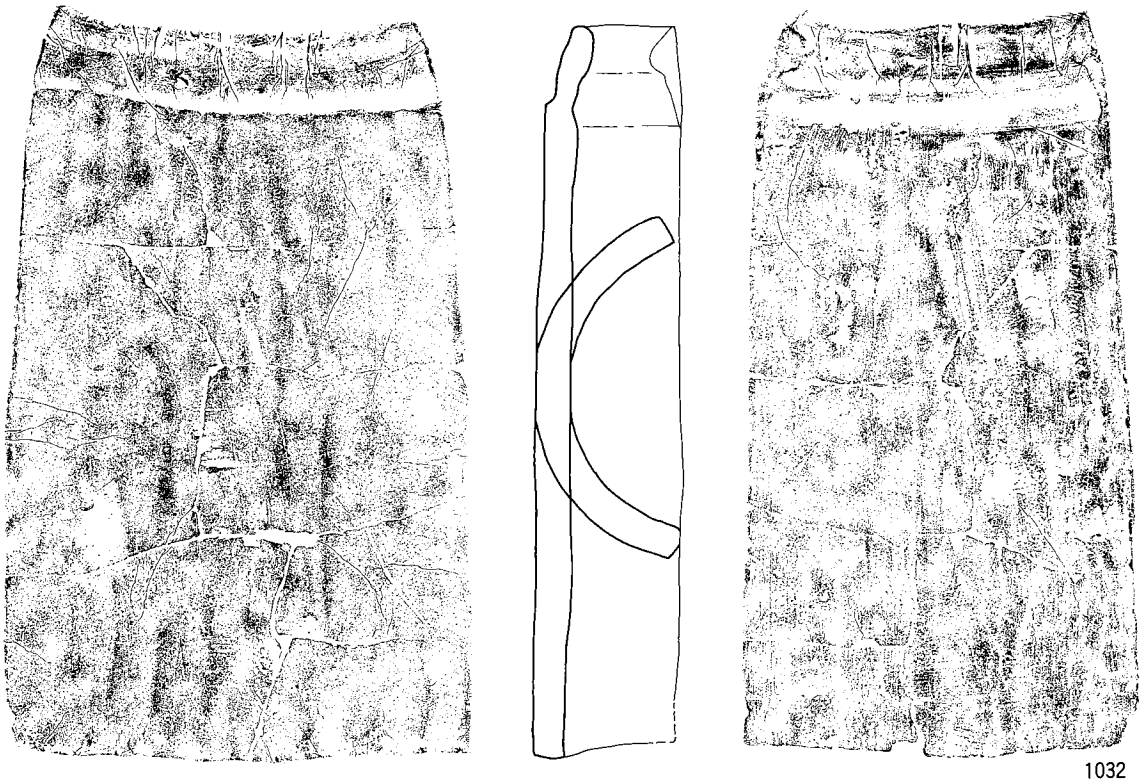


1031

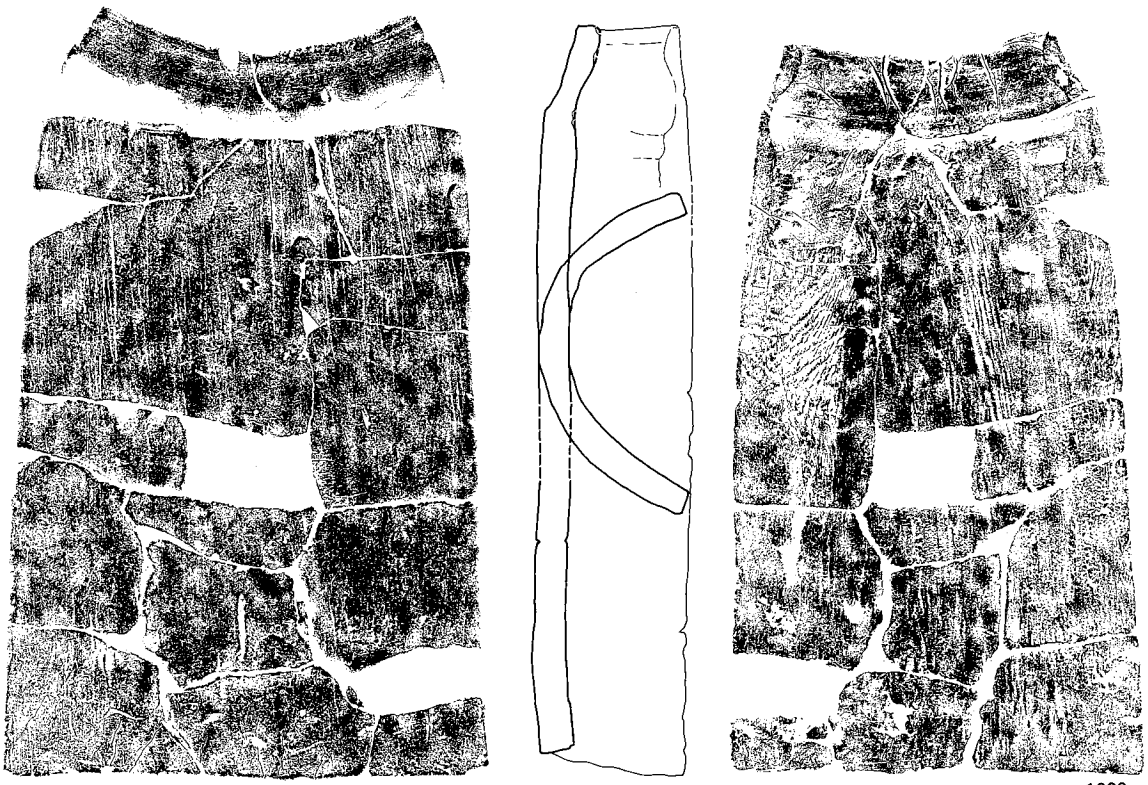
0　20cm
S:1/4

第62図

柳谷２号窯　出土瓦15



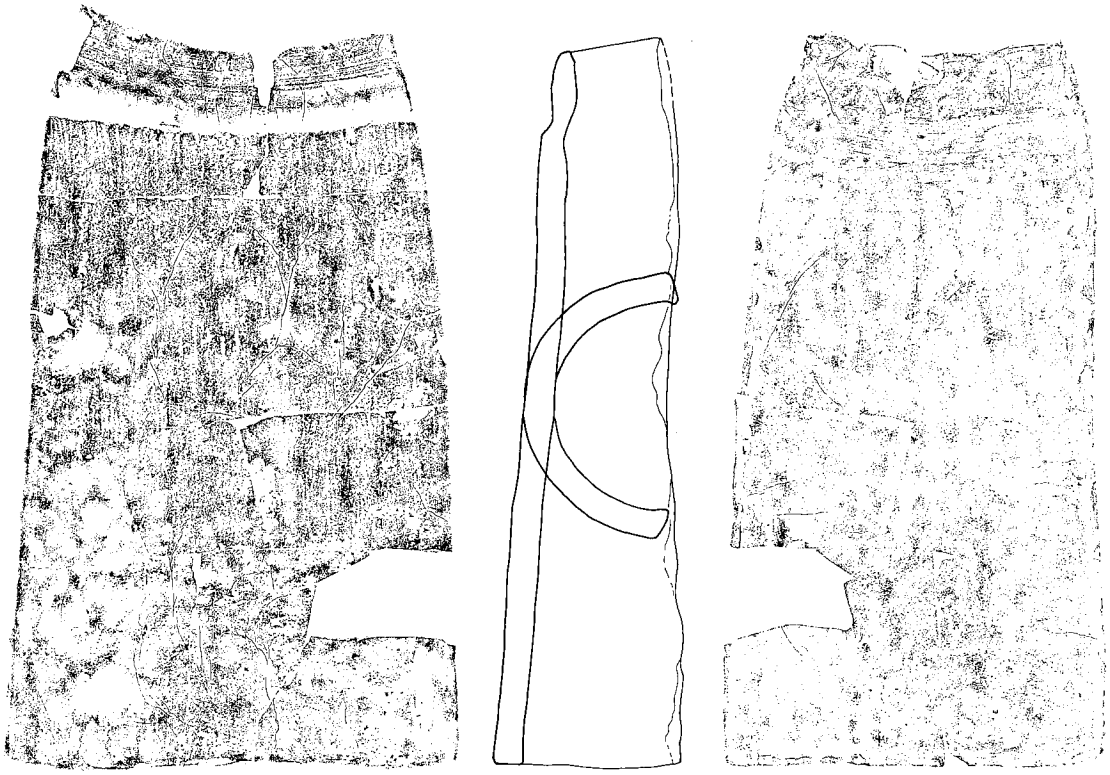
1032



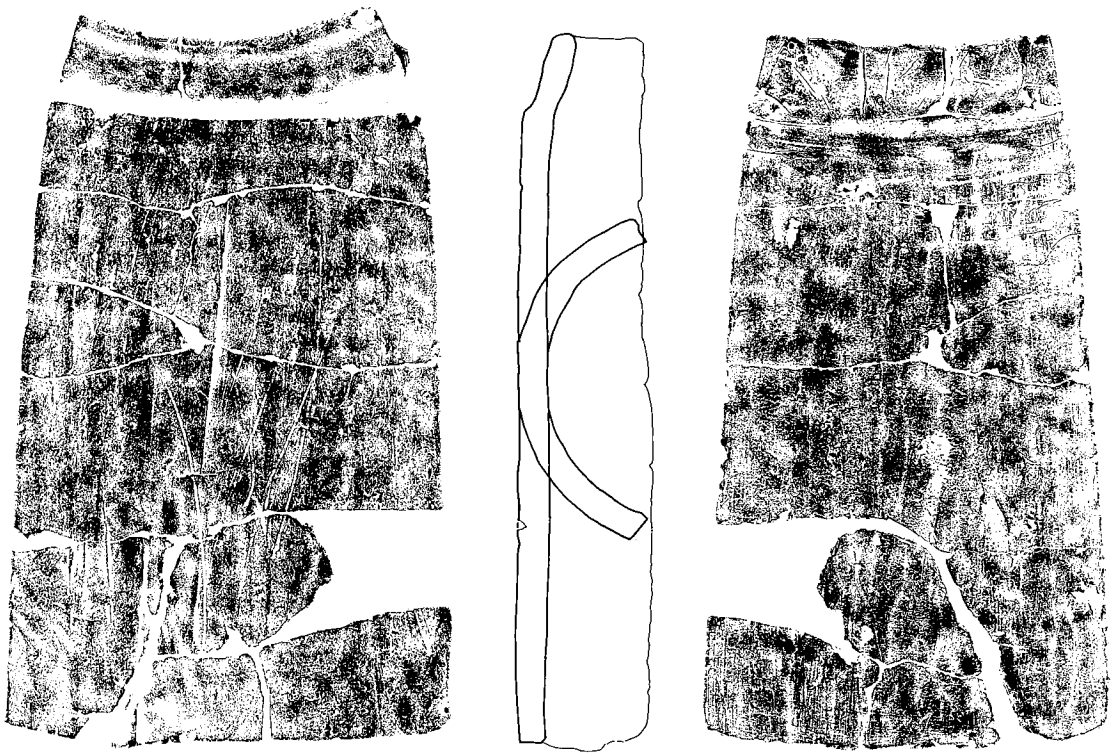
1033

0　20cm

S:1/4



1034

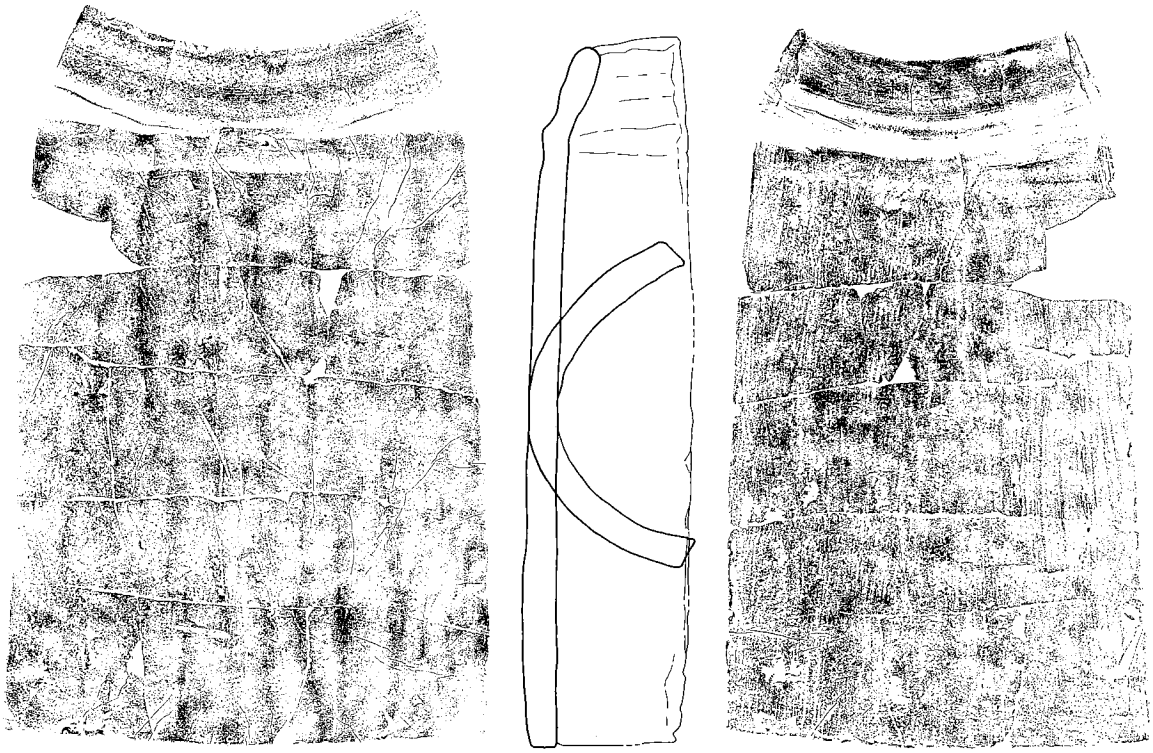


1035

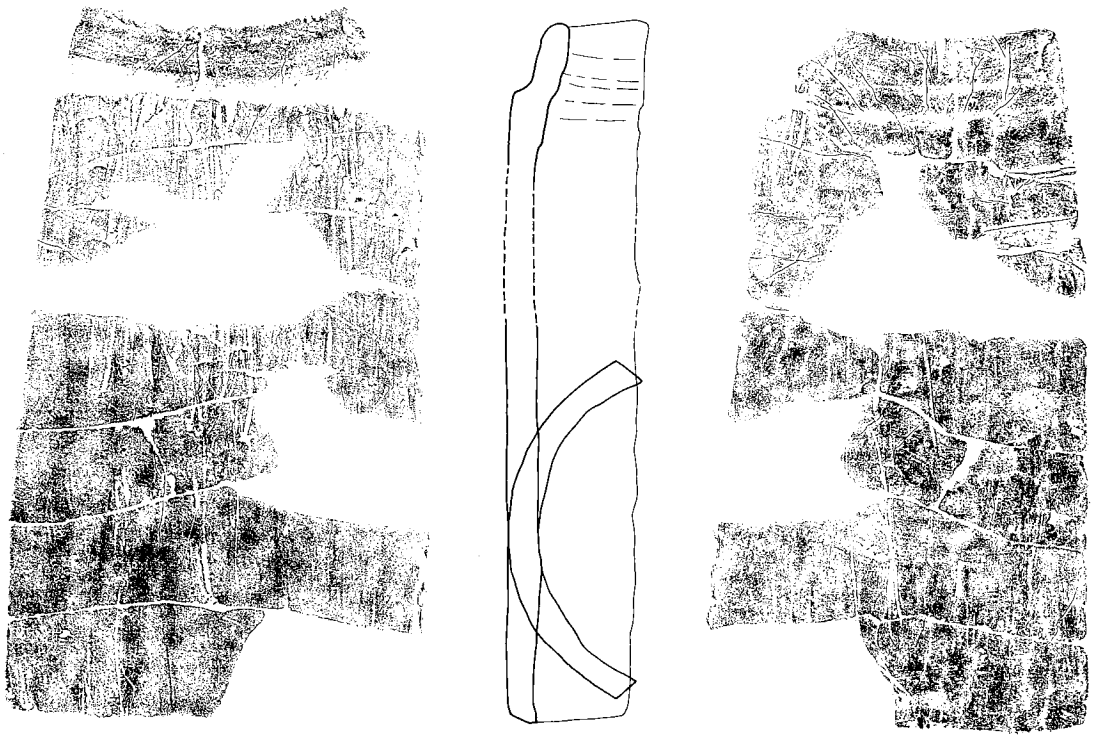
0　20cm
S:1/4

第64図

柳谷２号窯　出土瓦17



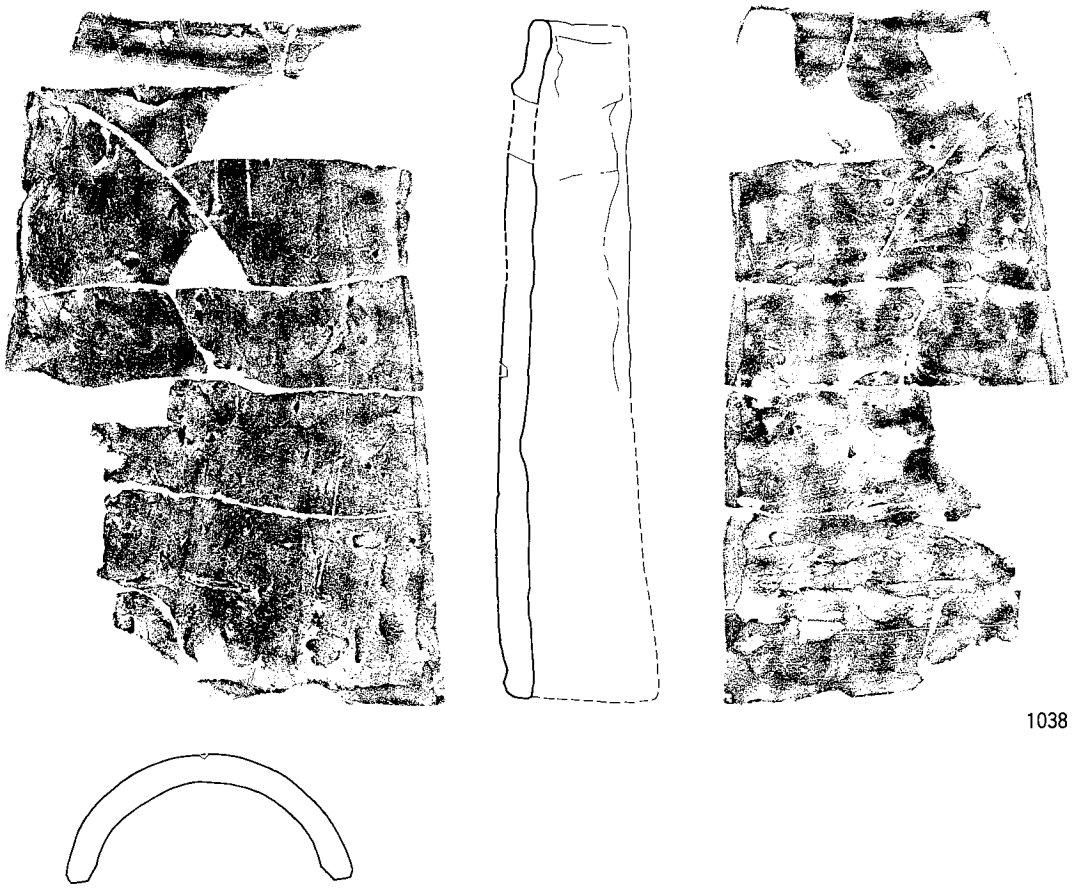
1036



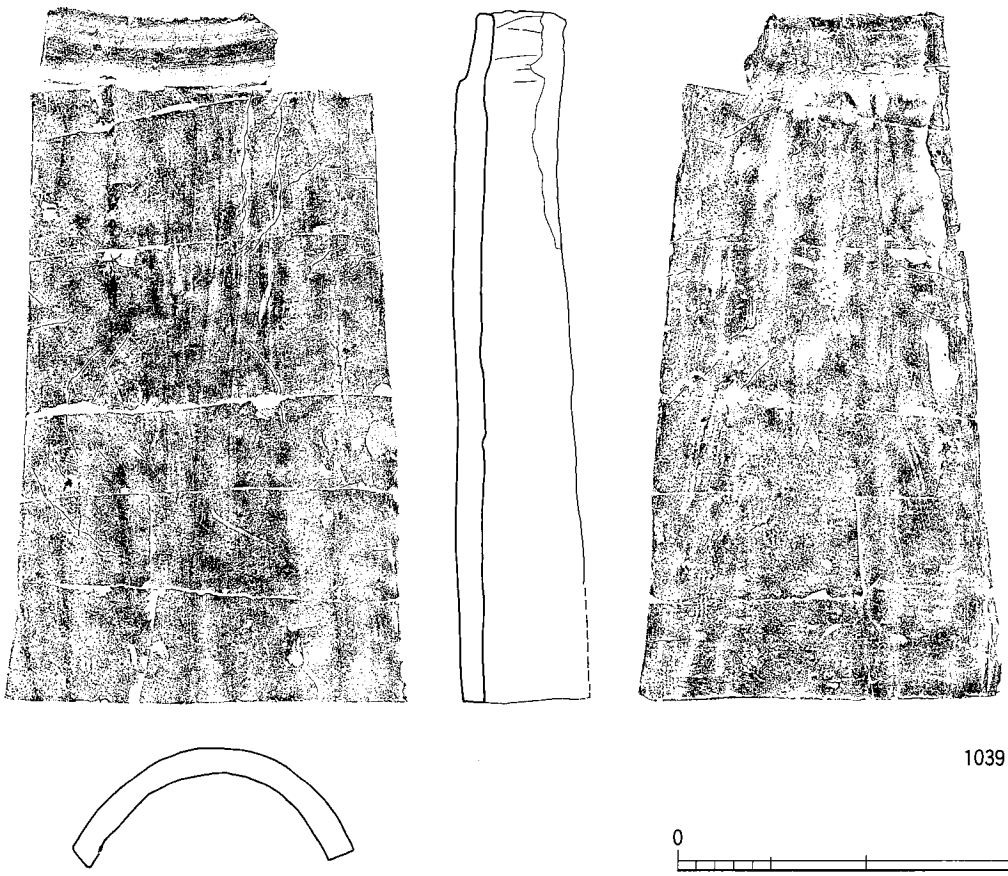
1037

0　20cm

S:1/4



1038

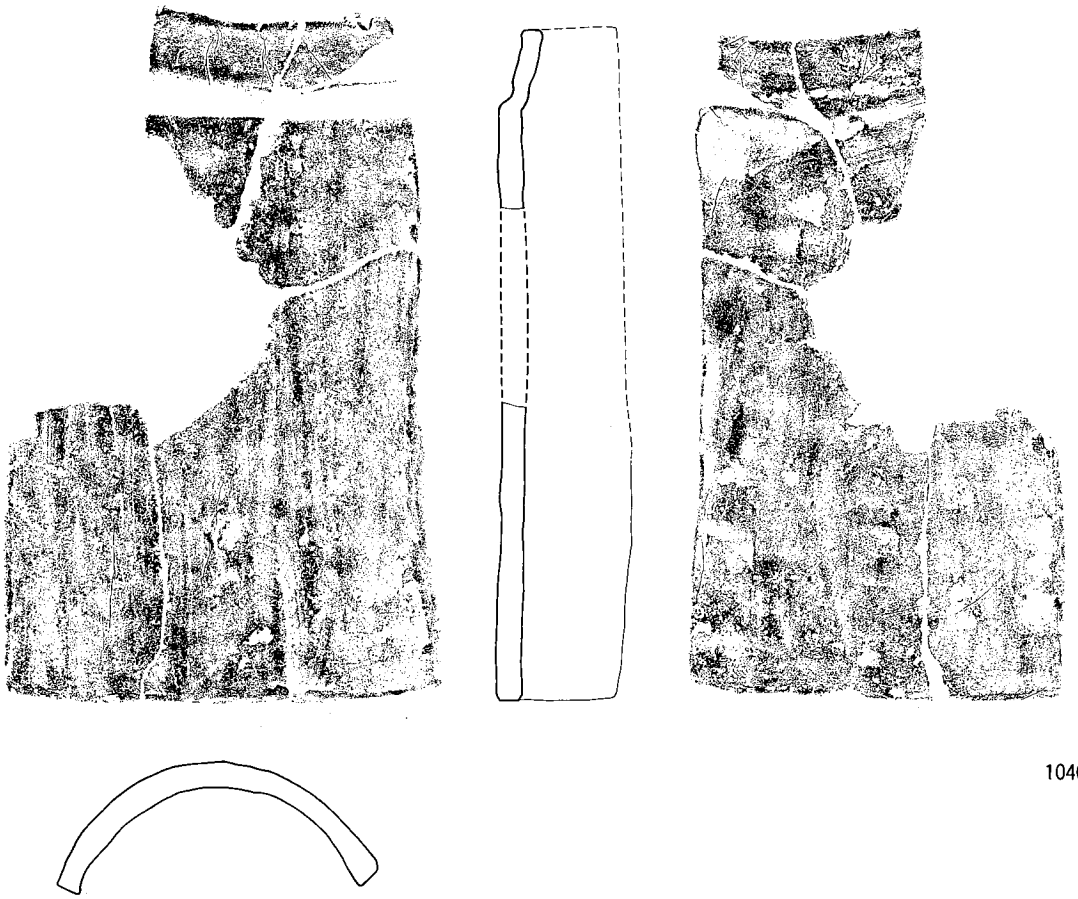


1039

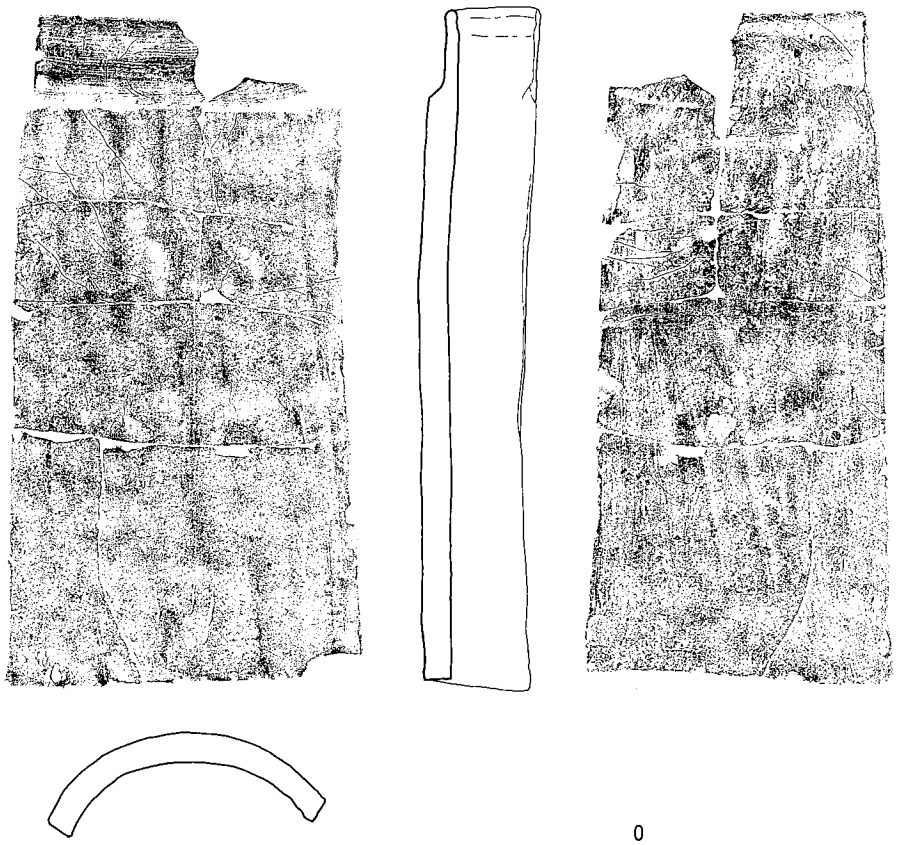
0　20cm
S:1/4

第66図

柳谷２号窯　出土瓦19



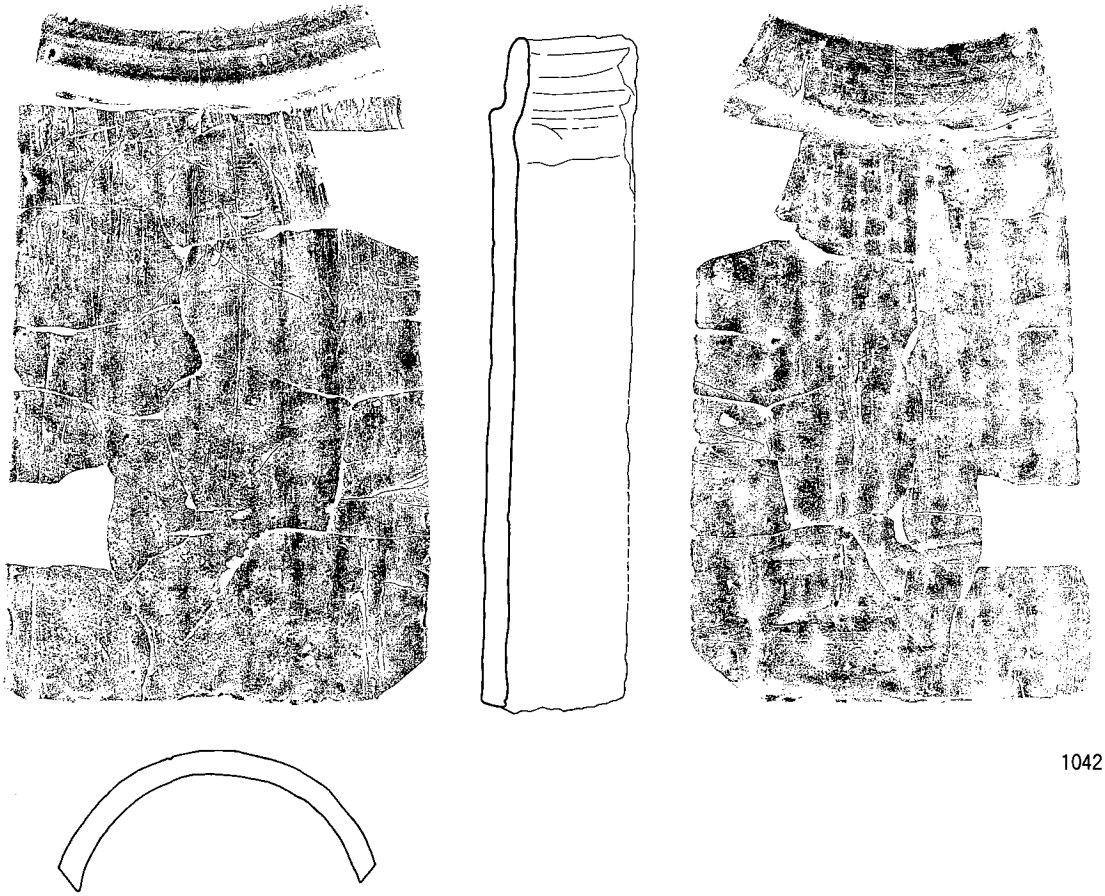
1040



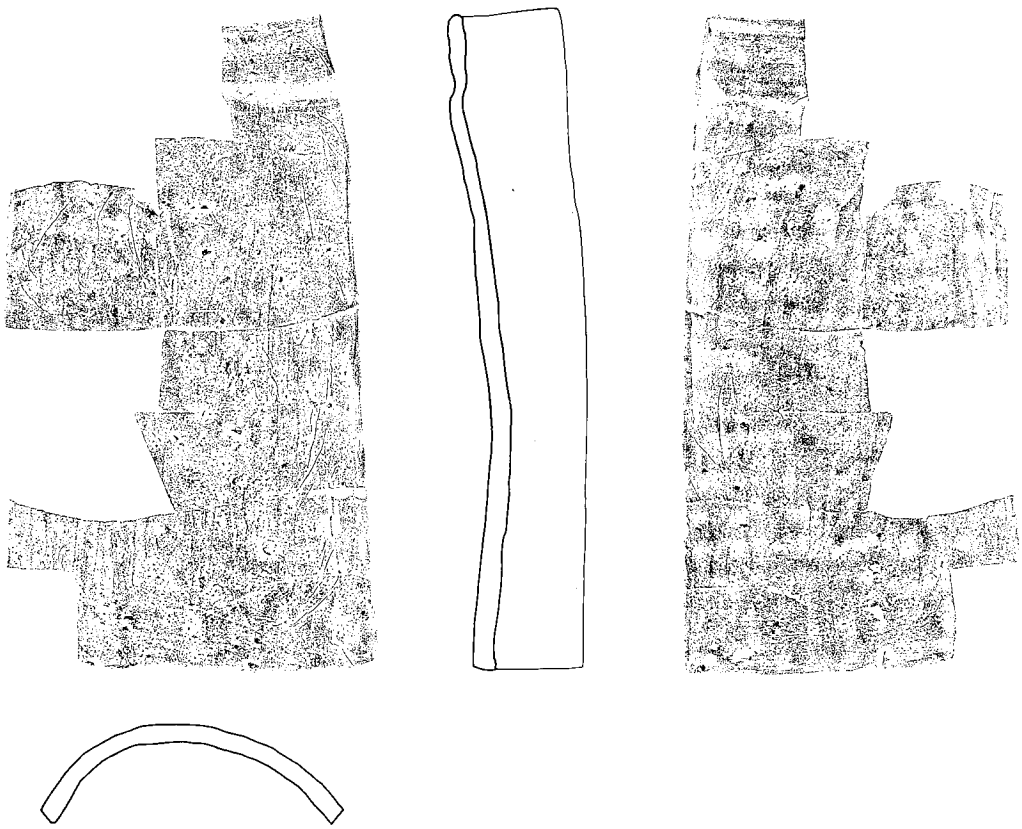
1041

0　20cm

S:1/4



1042

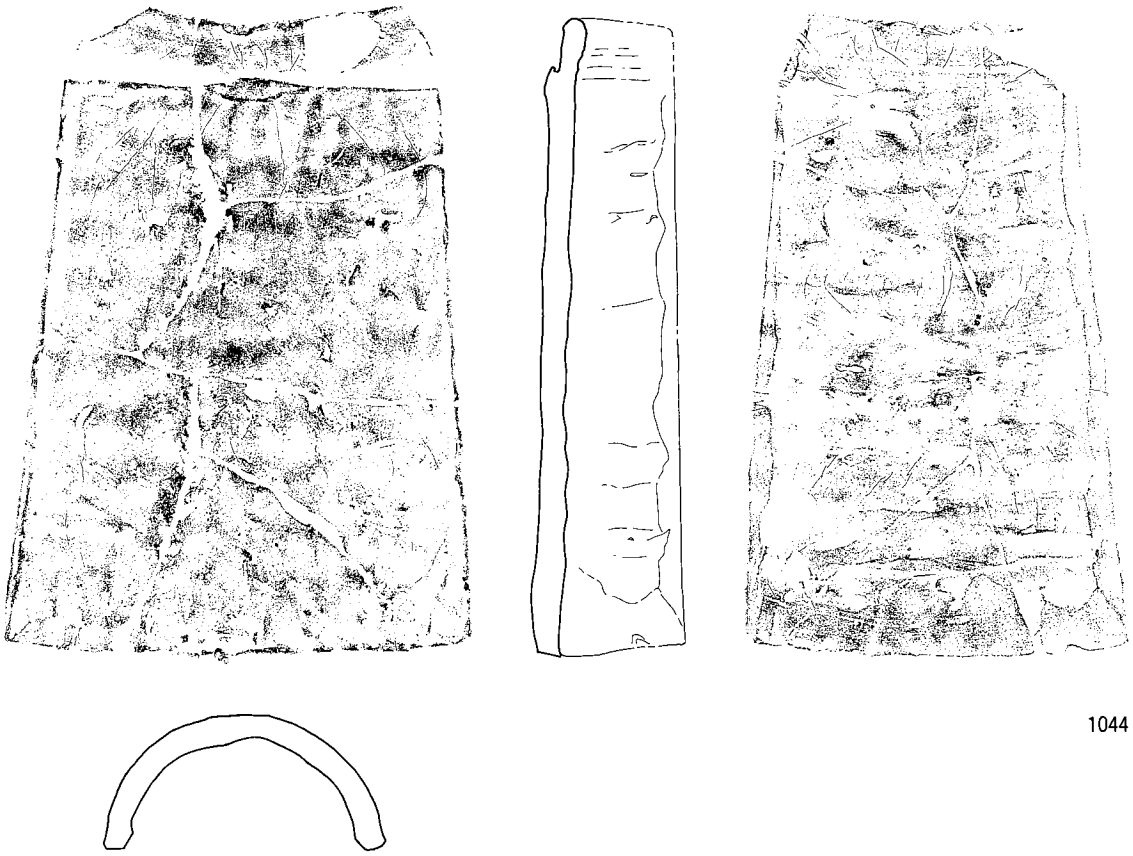


1043

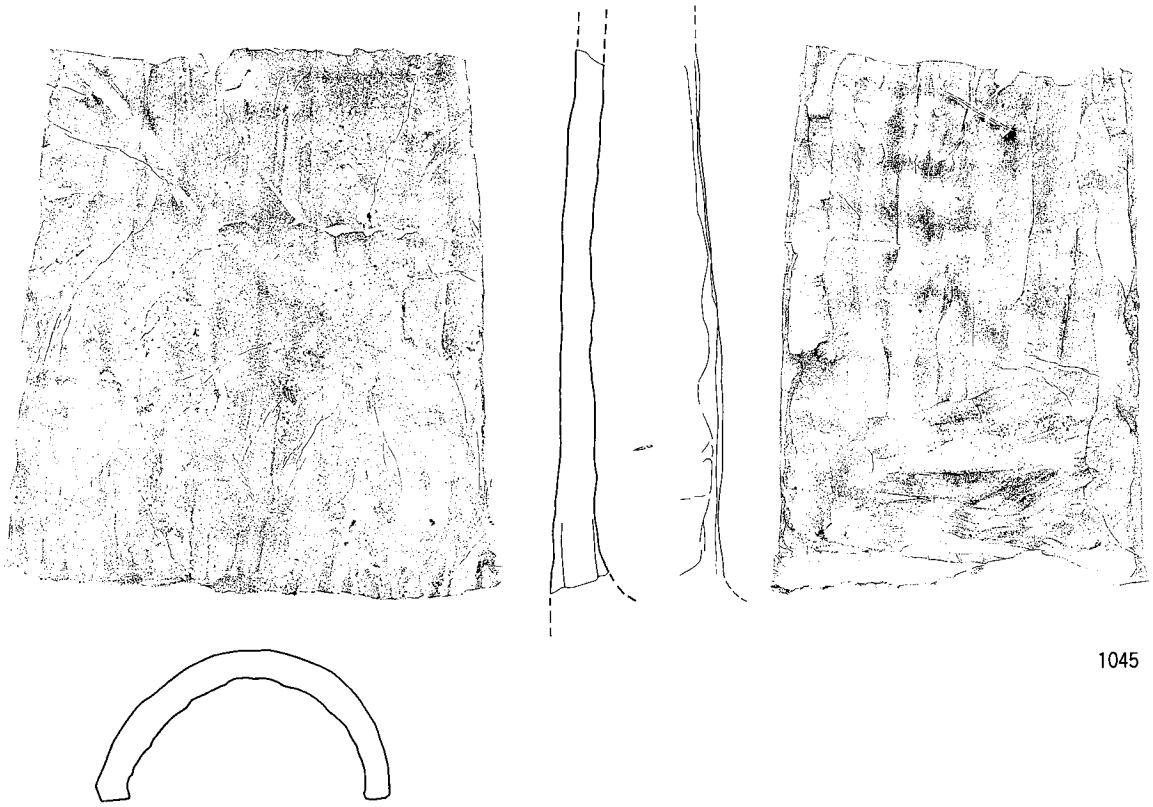
0　20cm
S:1/4

第68図

柳谷２号窯　出土瓦21



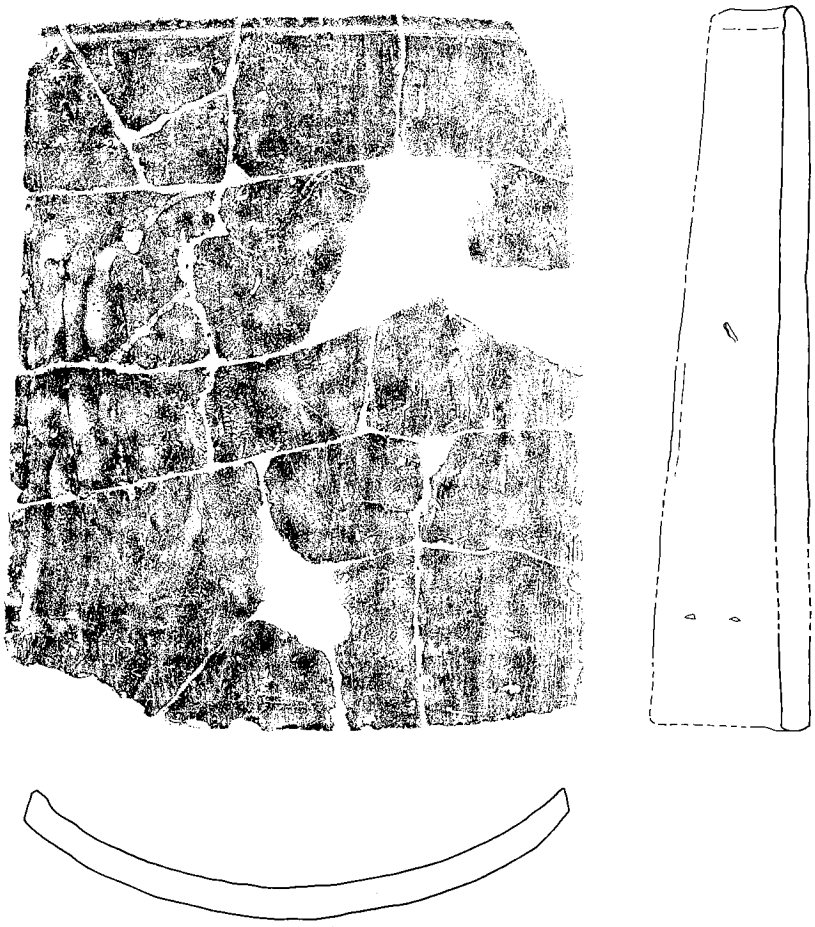
1044



1045

0　20cm

S:1/4

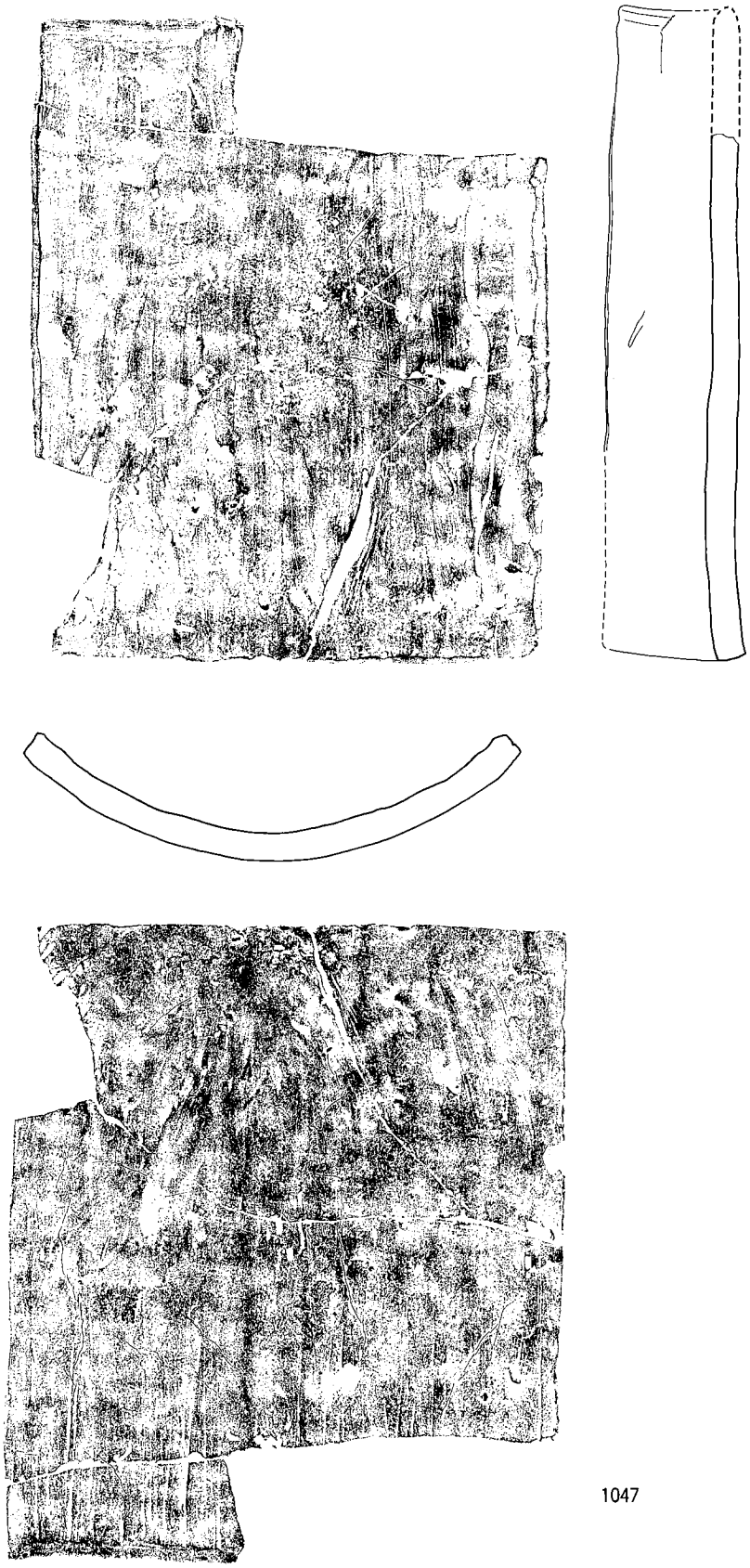


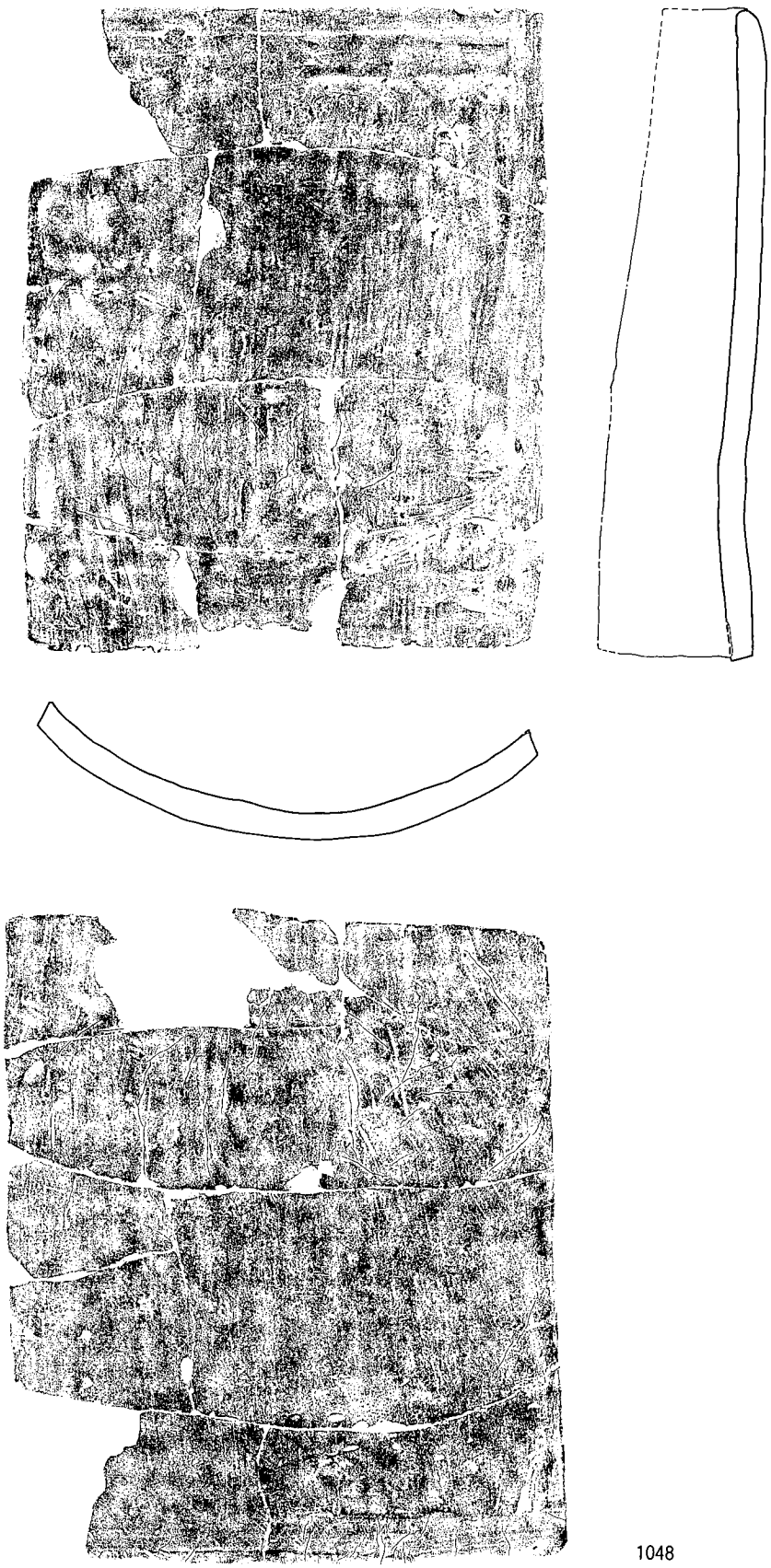
1046

0　20cm
S:1/4

第70図

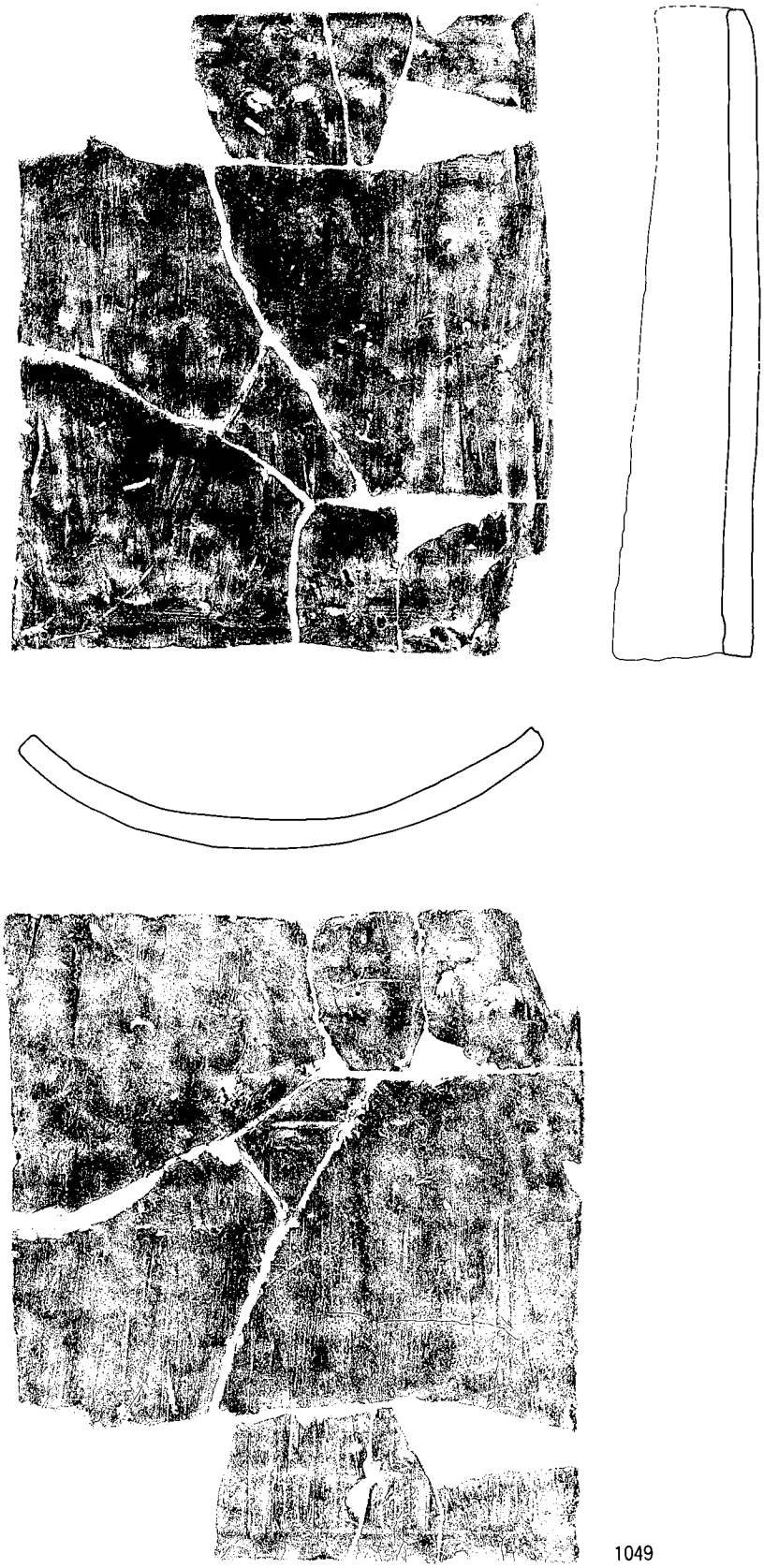
柳谷２号窯　出土瓦23

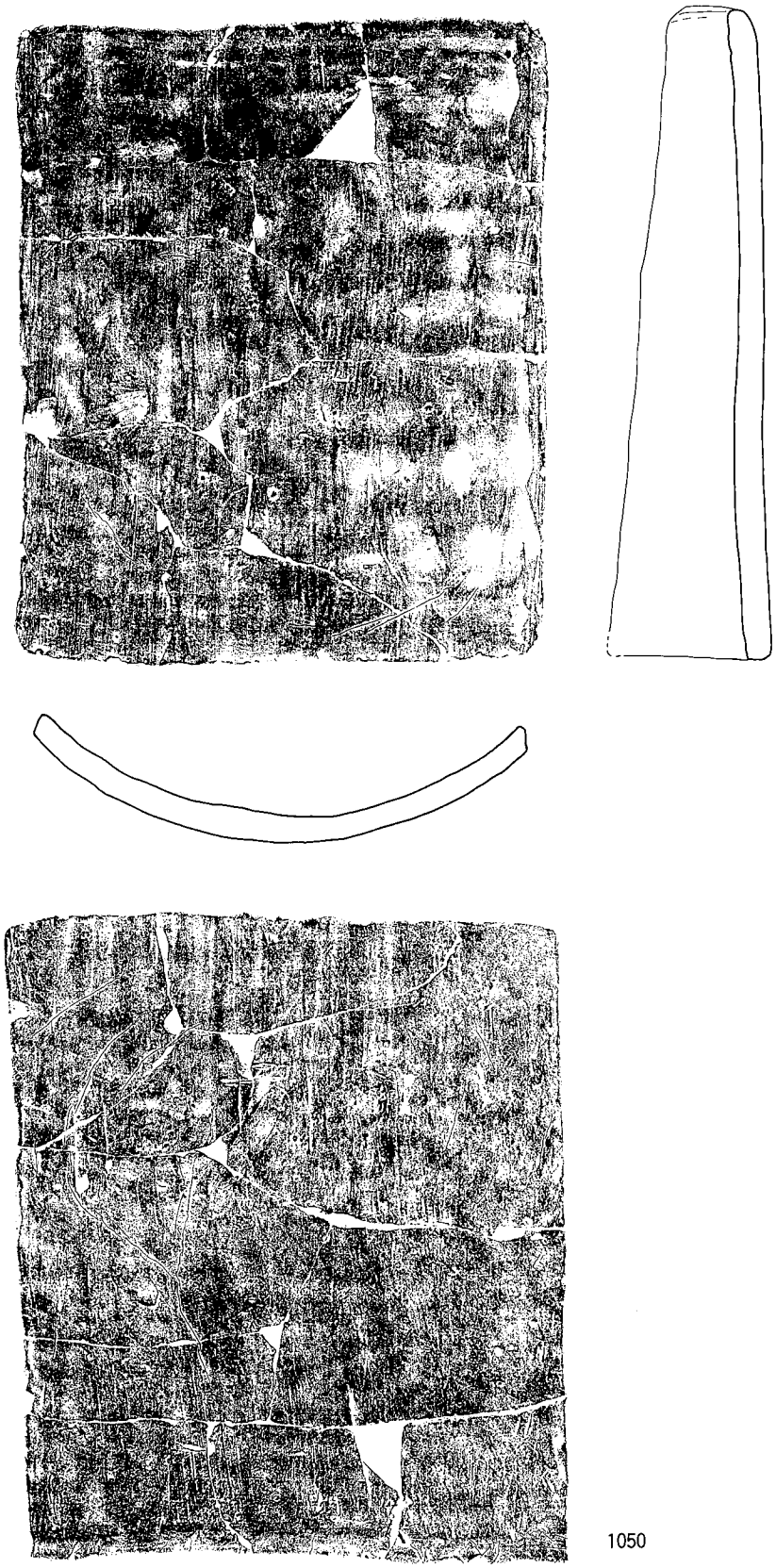



1048
0
20cm
S:1/4

第72図

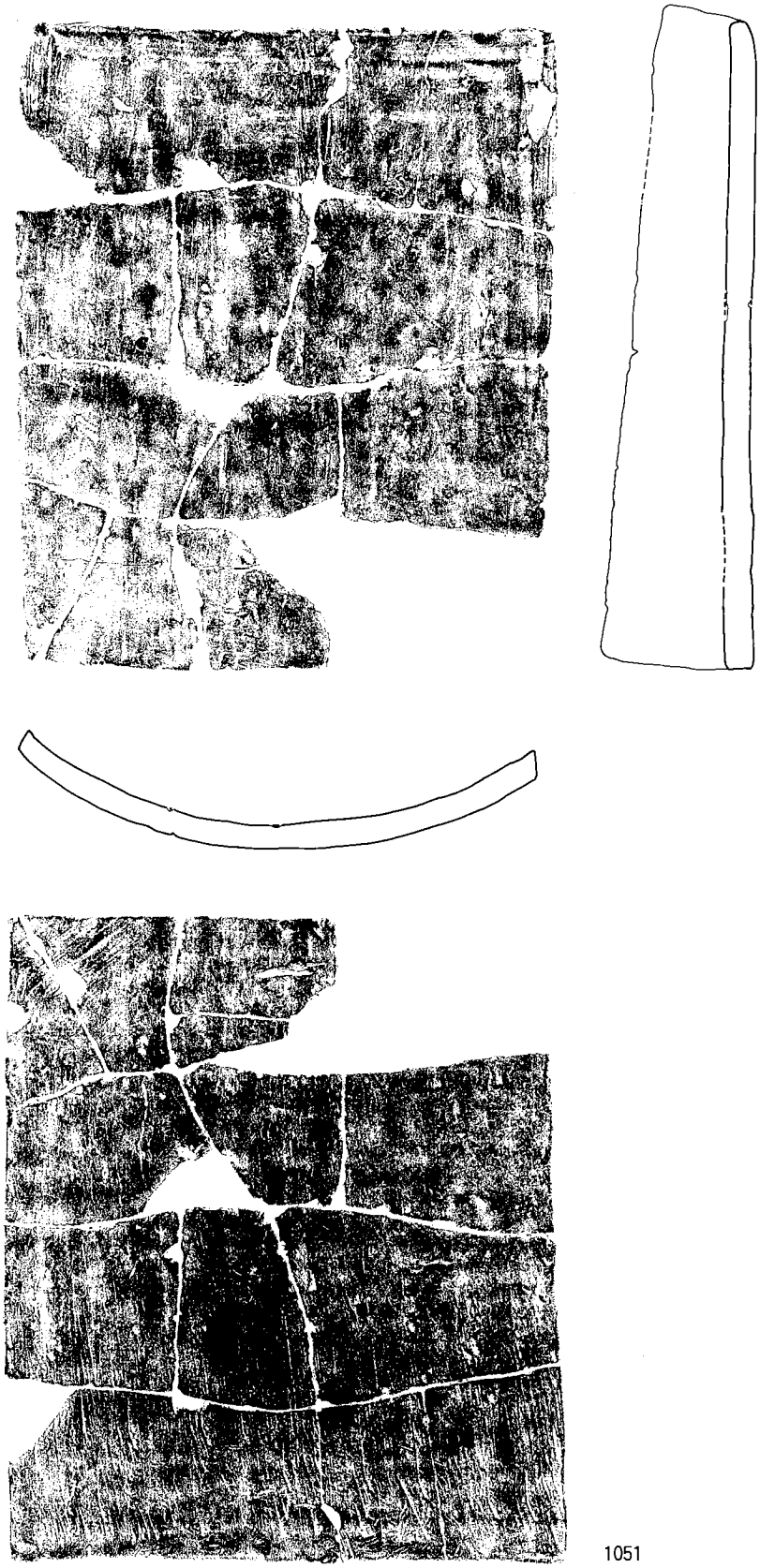
柳谷２号窯　出土瓦25



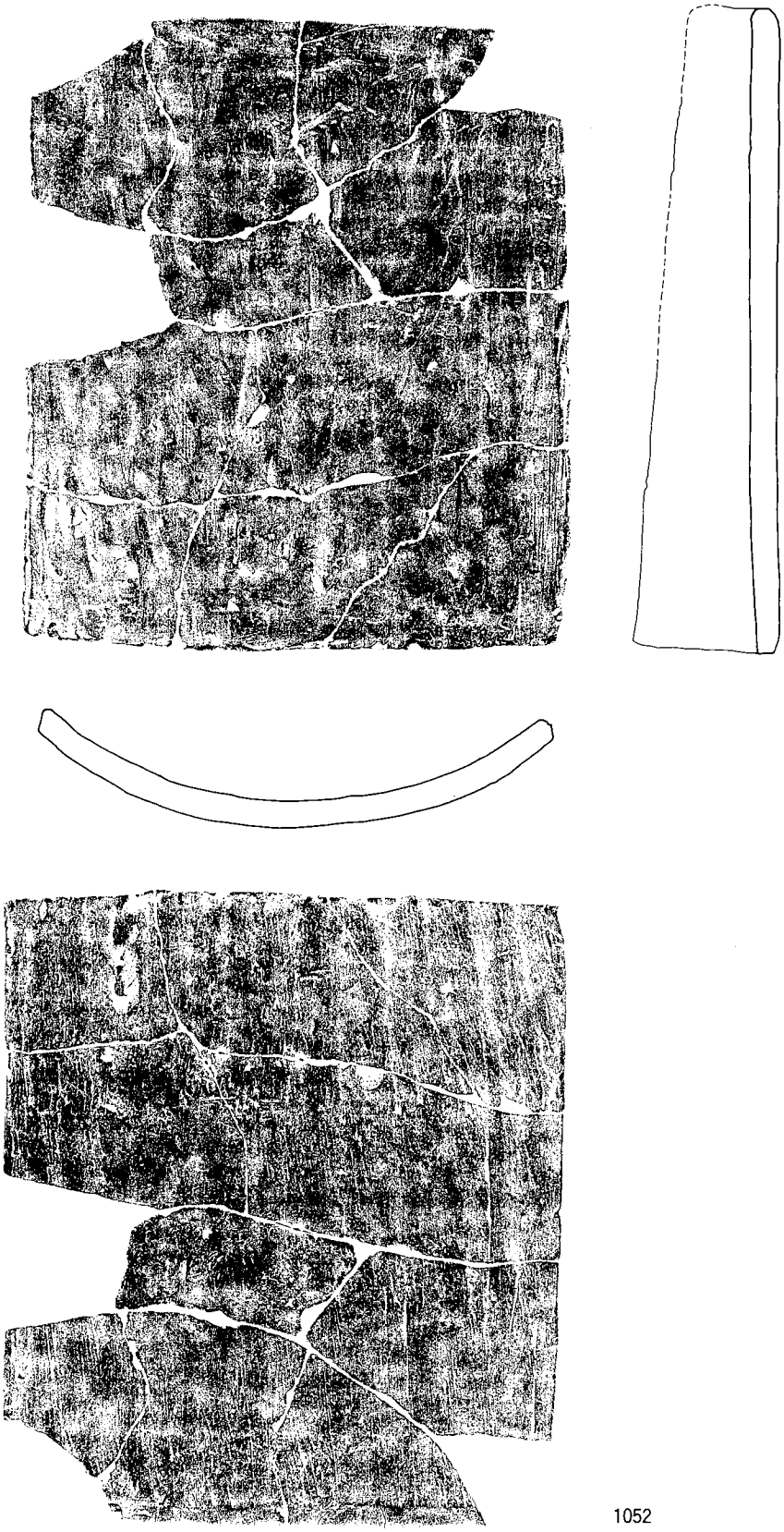

1050
0
20cm
S:1/4

第74図

柳谷２号窯　出土瓦27

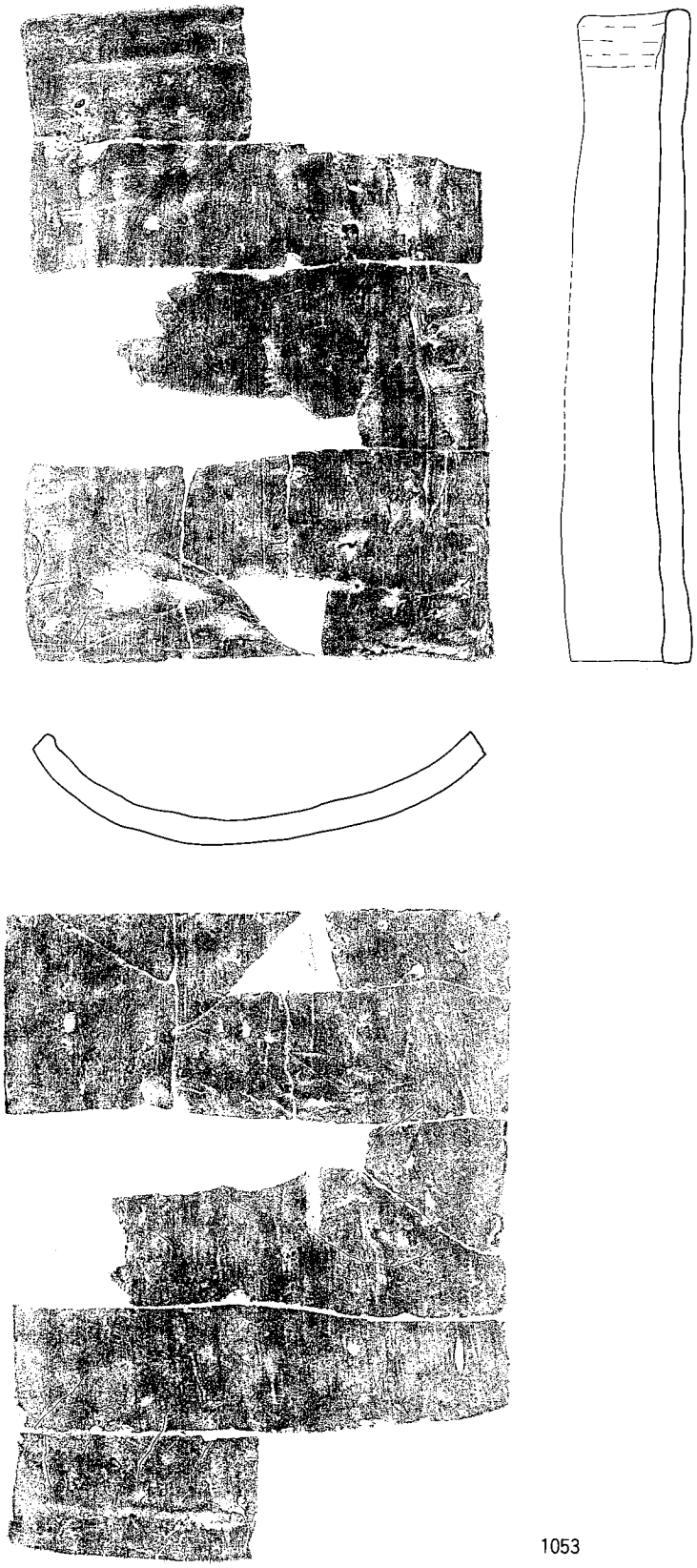


0　20cm
S:1/4


1052
0
20cm
S:1/4

第76図

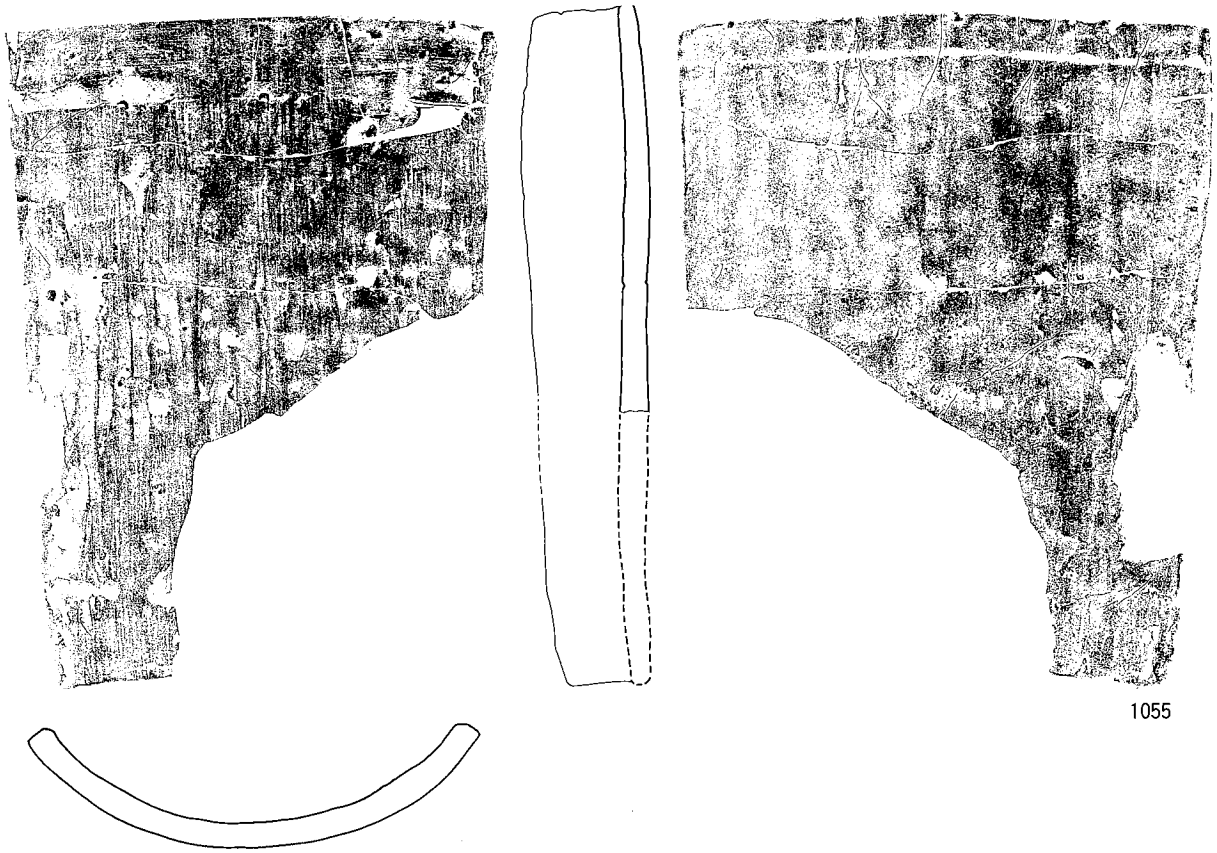
柳谷２号窯　出土瓦29



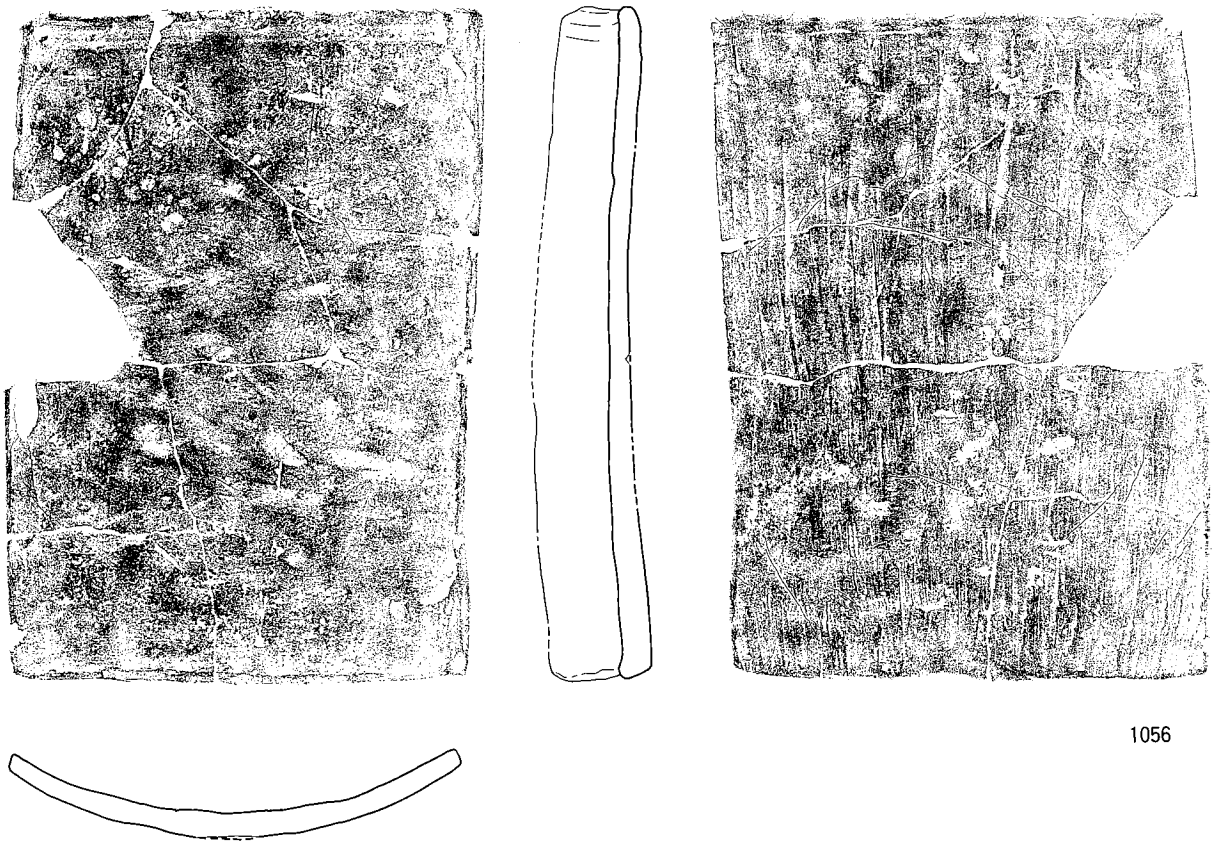
1054
0
20cm
S:1/4

第78図

柳谷２号窯　出土瓦31



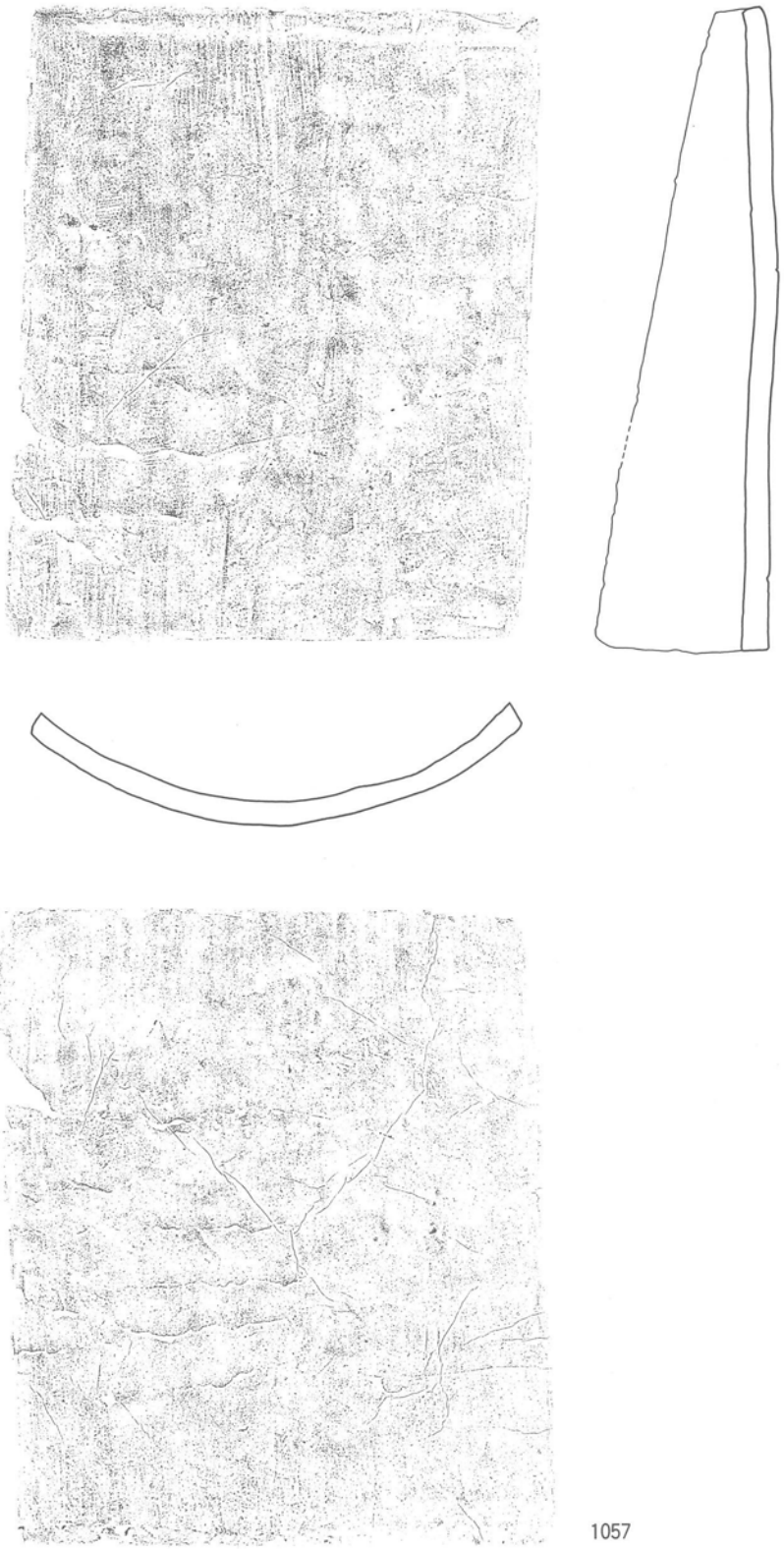
1055



1056

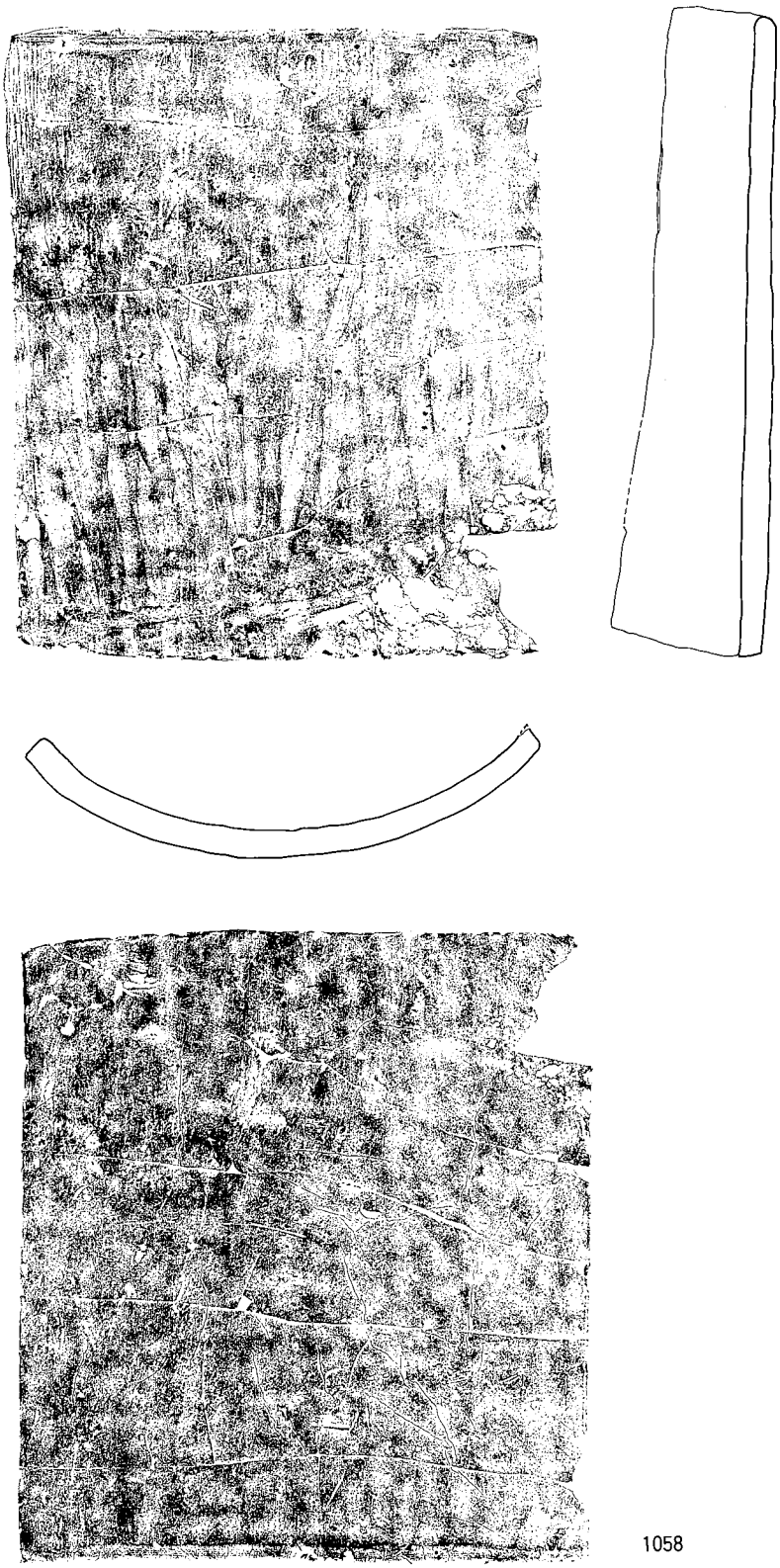
0　20cm

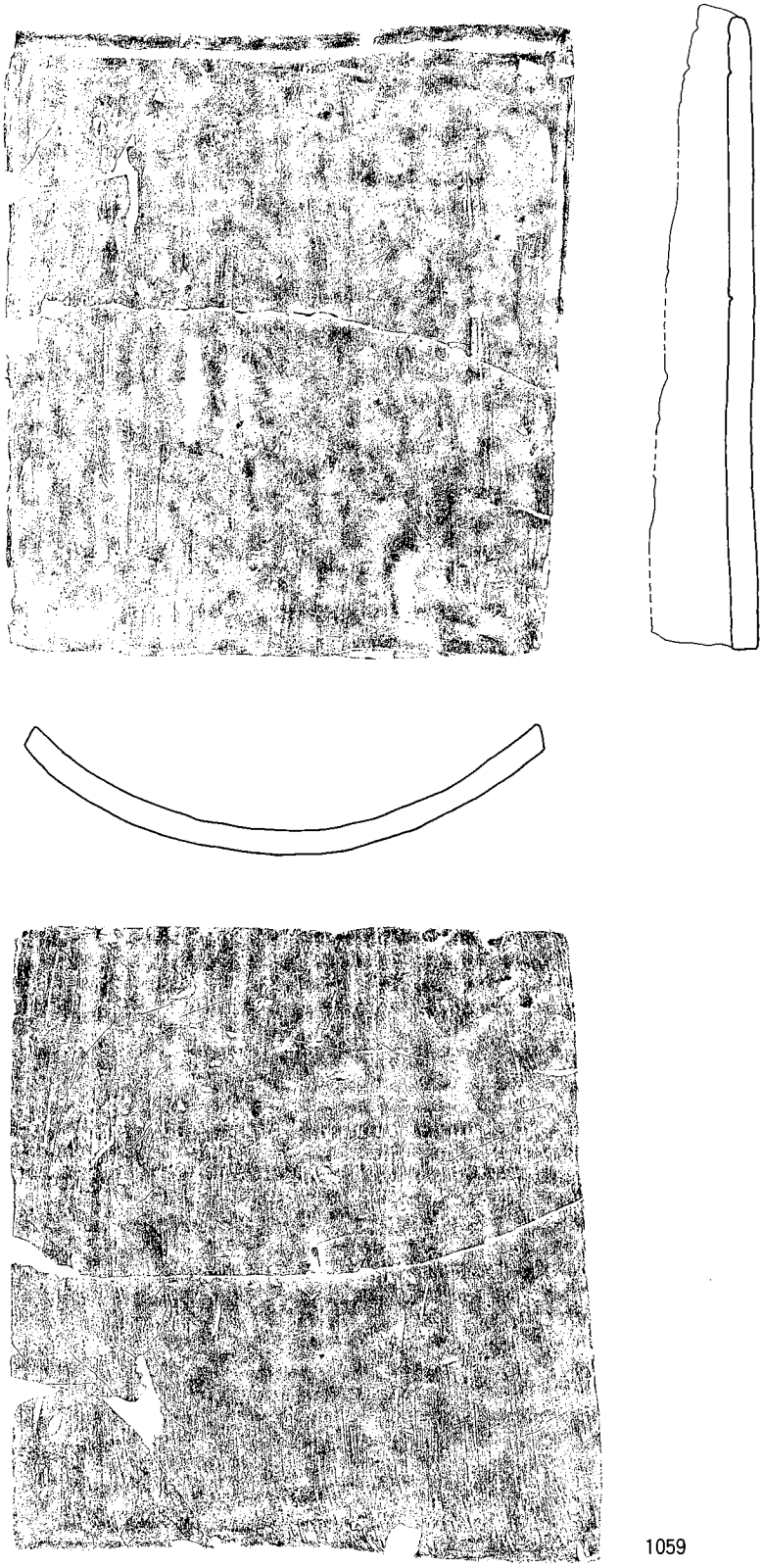
S:1/4


1057
0
20cm
S:1/4

第80図

柳谷２号窯　出土瓦33



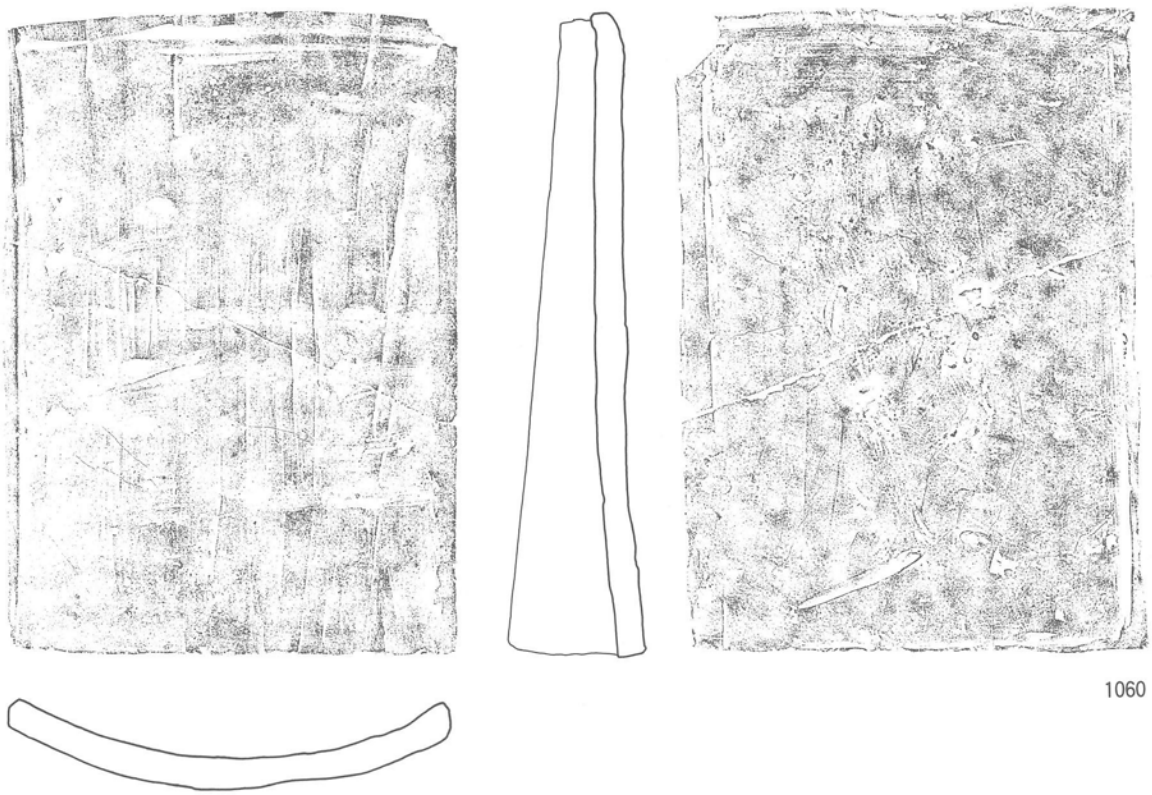


1059

0　20cm
S:1/4

第82図

柳谷２号窯　出土瓦35

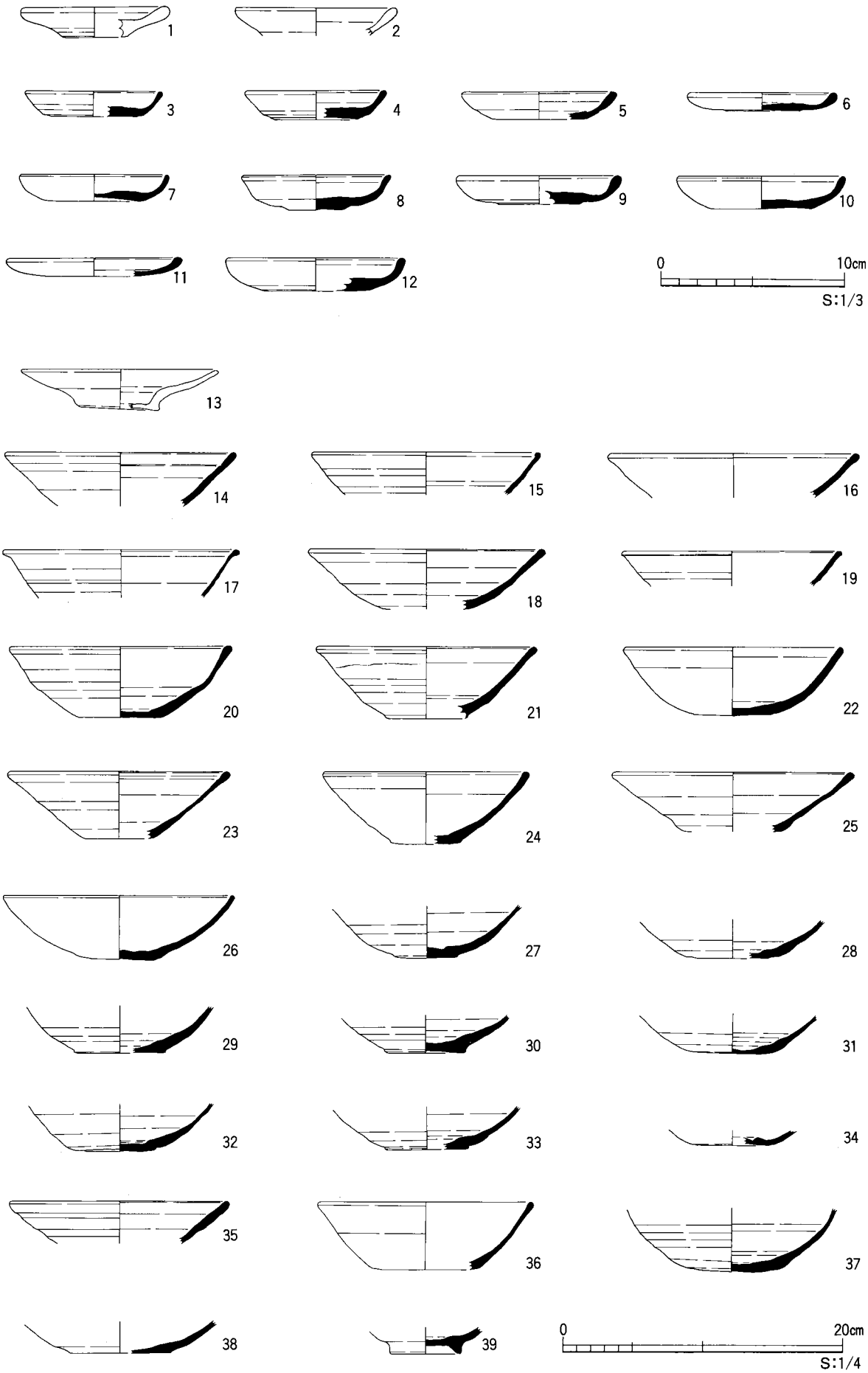


1060

1061

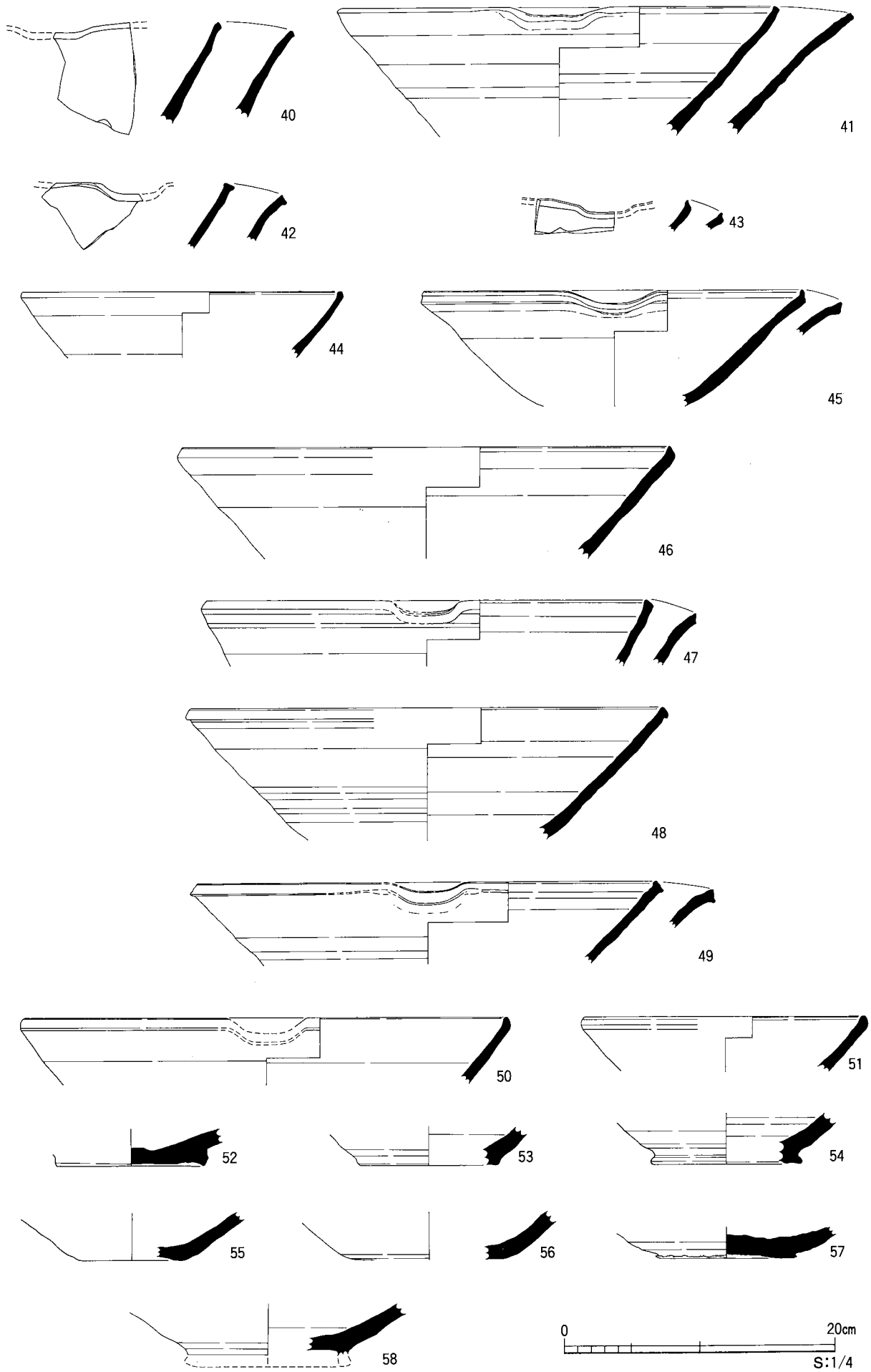
0　20cm

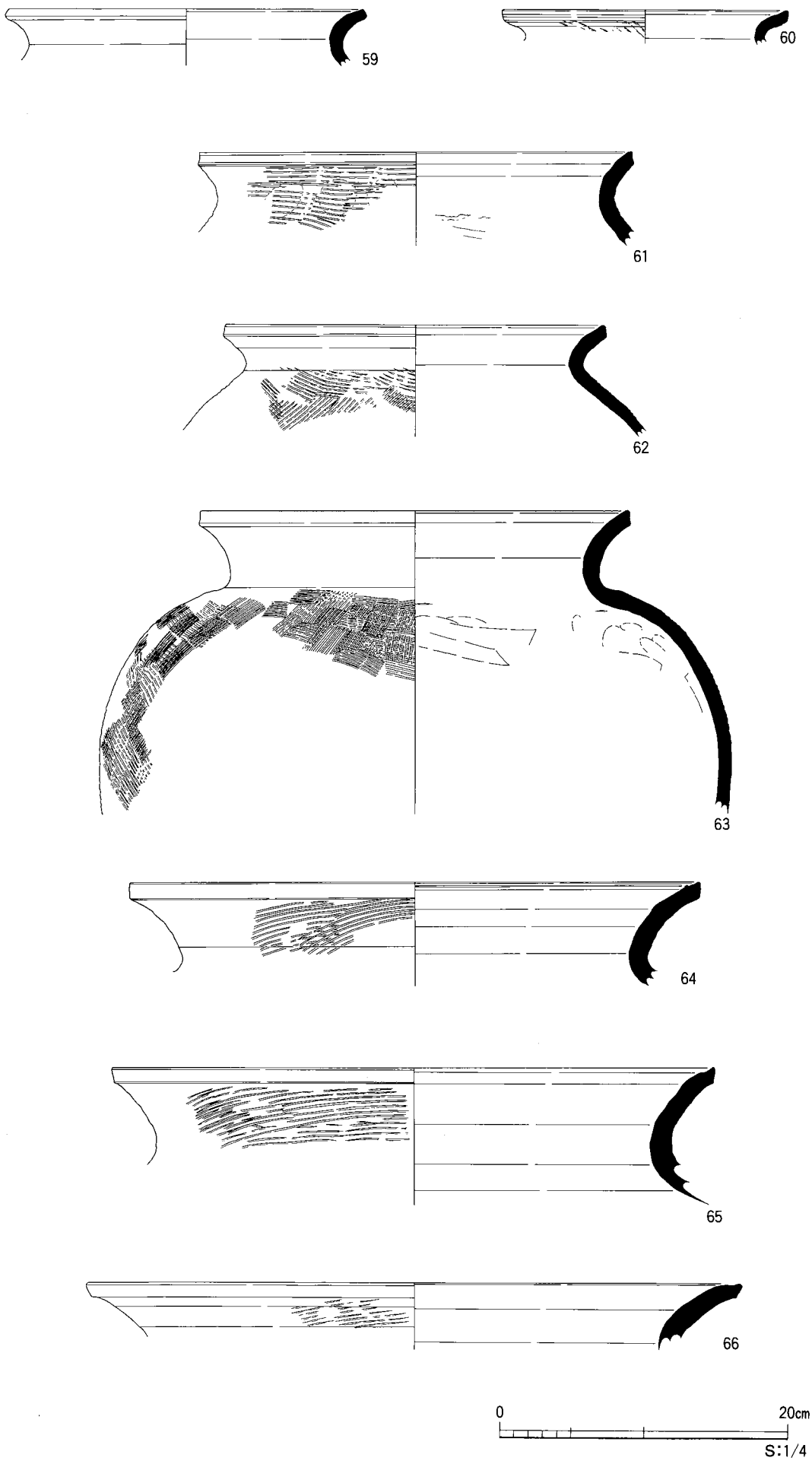
S:1/4


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
0
10cm
S:1/3
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
20cm
S:1/4

第84図

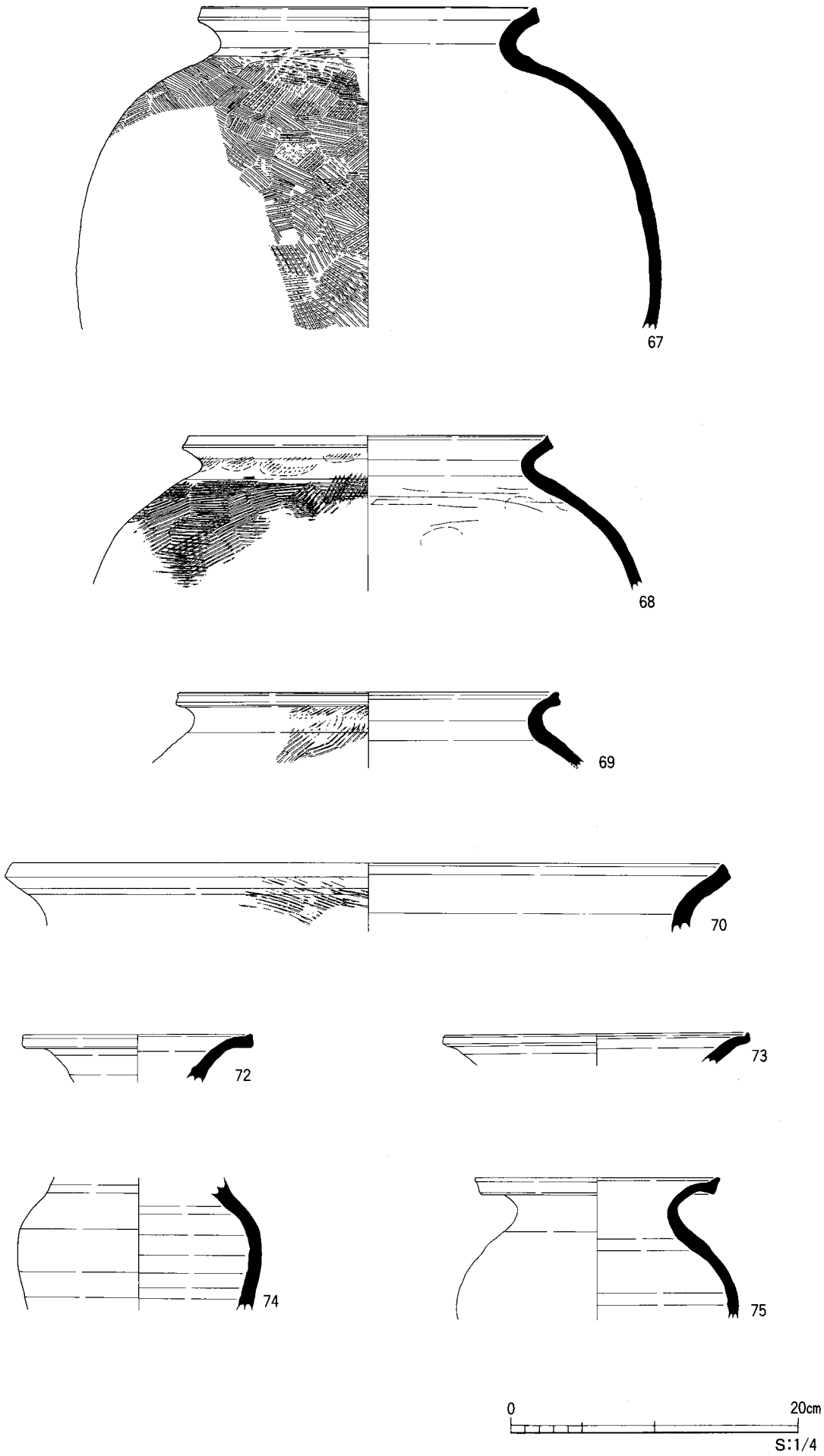
柳谷６号窯　出土土器２

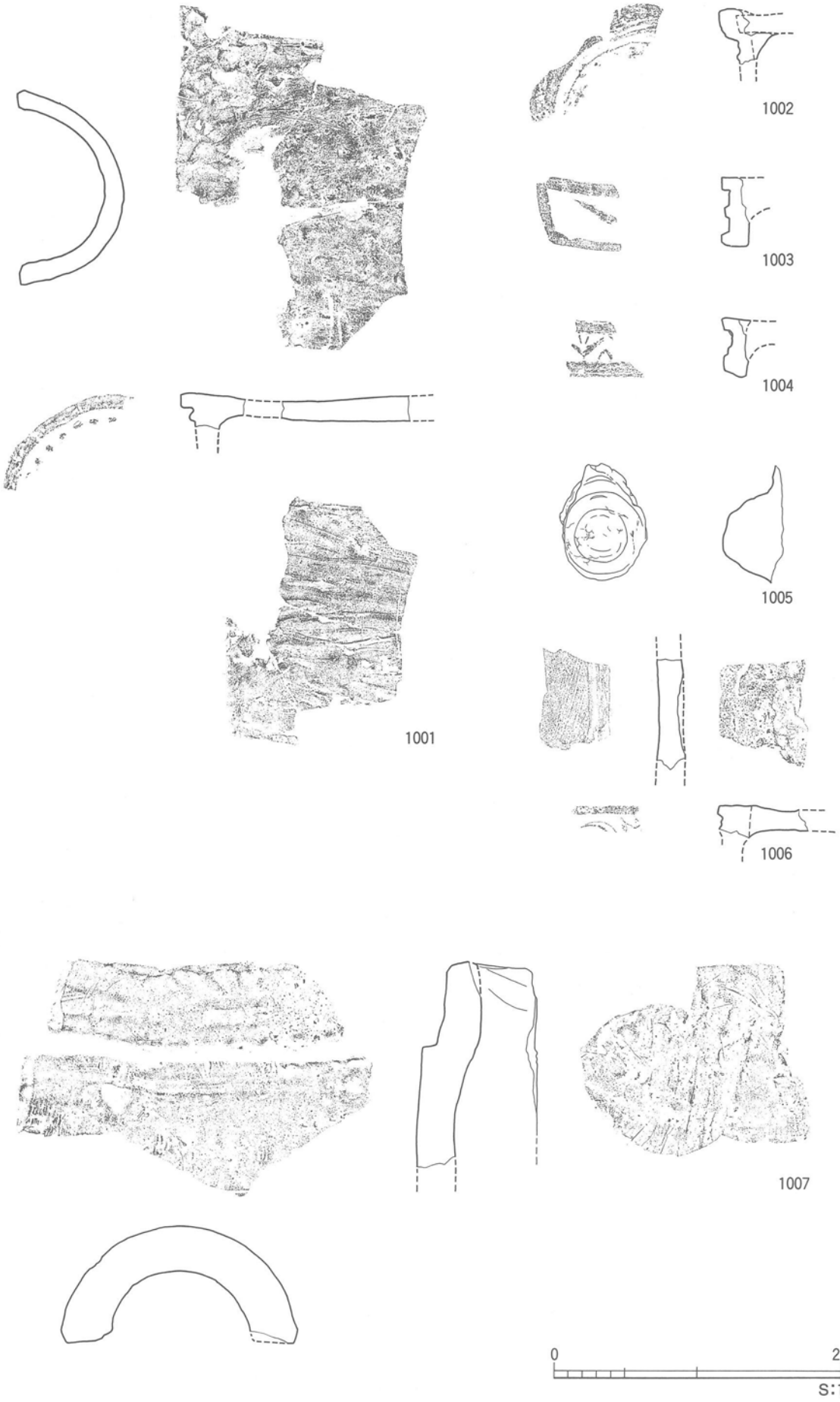



59
60
61
62
63
64
65
66
0
20cm
S:1/4

第86図

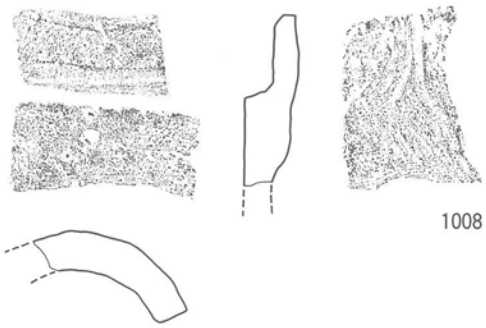
柳谷 6 号窯　出土土器 4



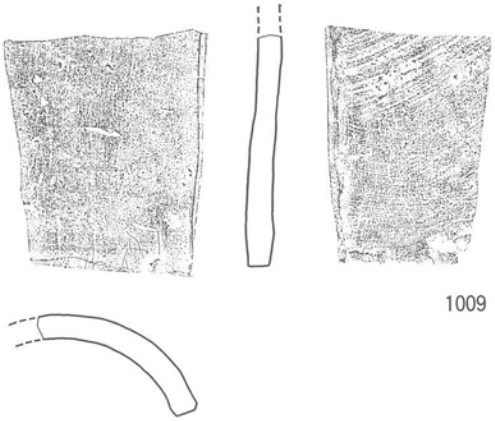

1002
1003
1004
1005
1001
1006
1007
0
20cm
S:1/4

第88図

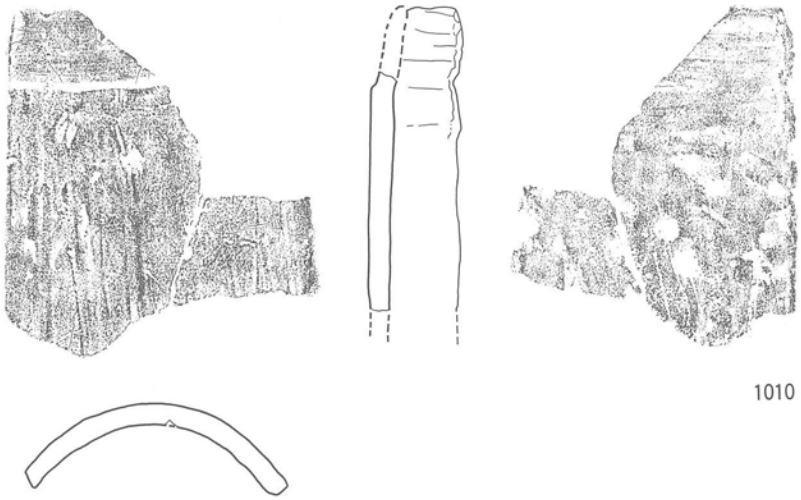
柳谷６号窯　出土瓦２



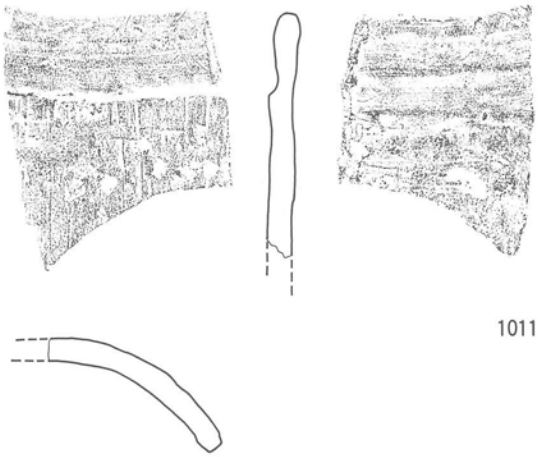
1008



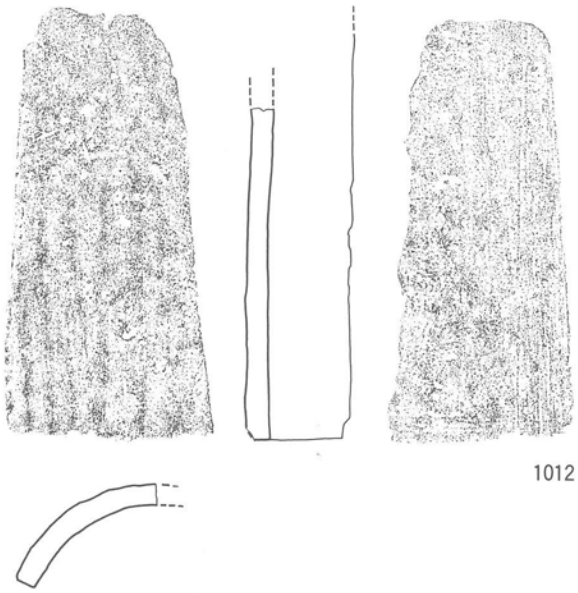
1009



1010



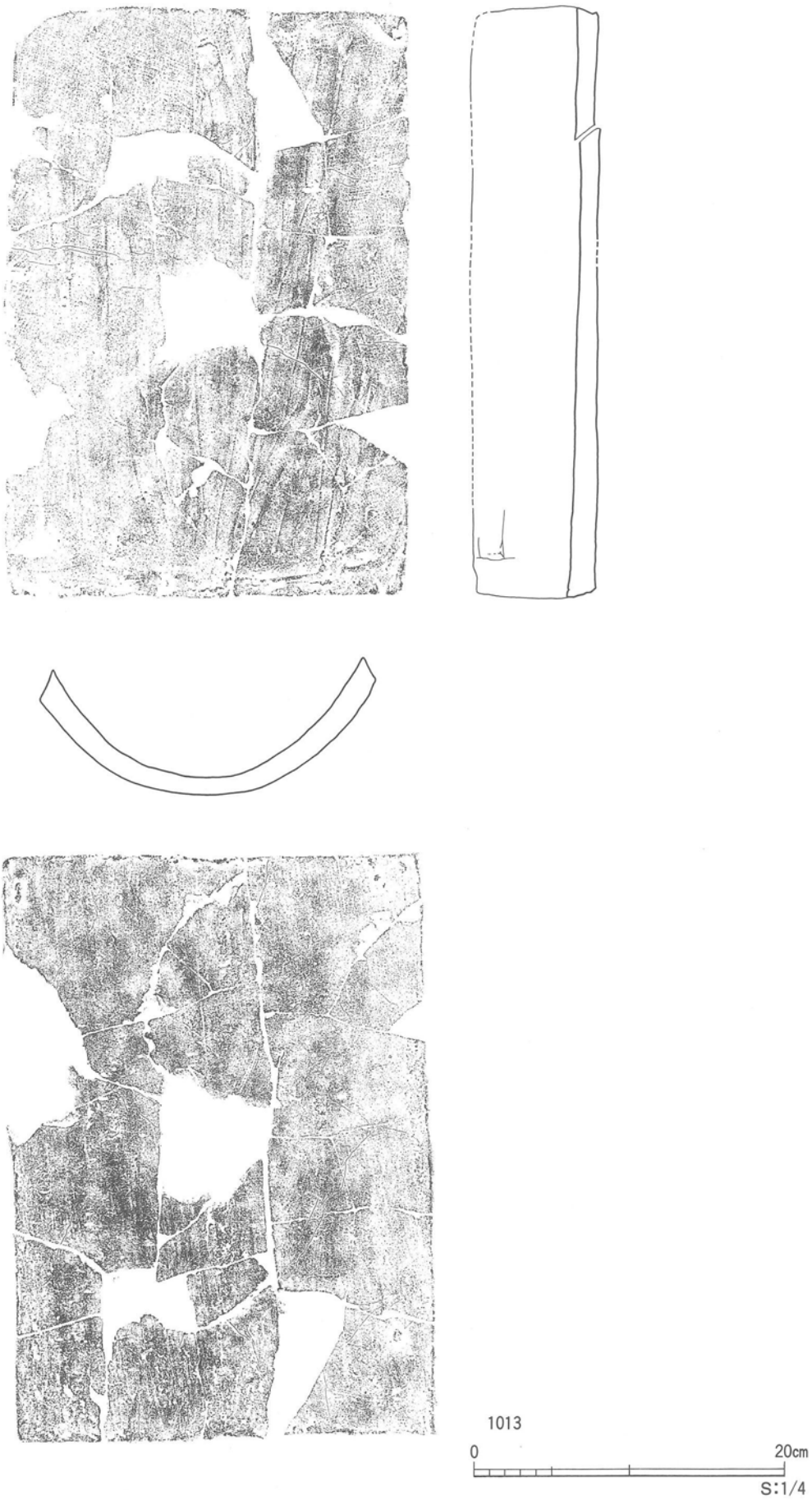
1011



1012

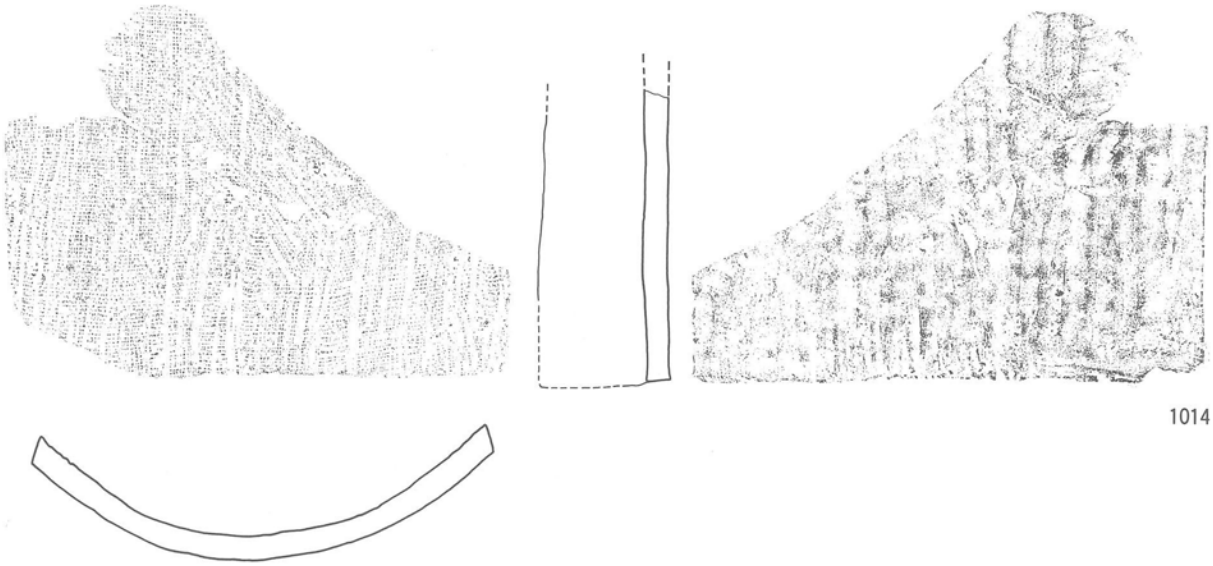
0　20cm

S:1/4

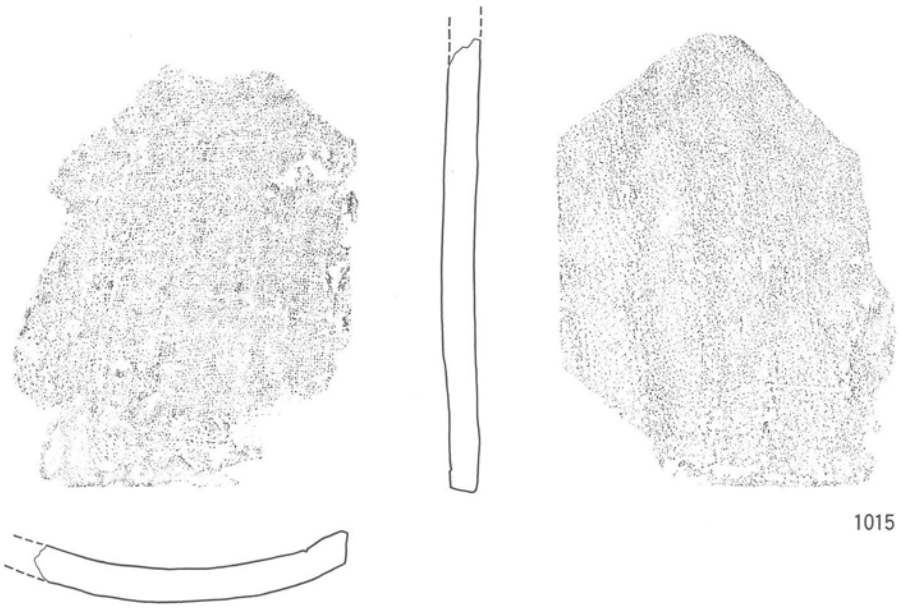

1013
0
20cm
S:1/4

第90図

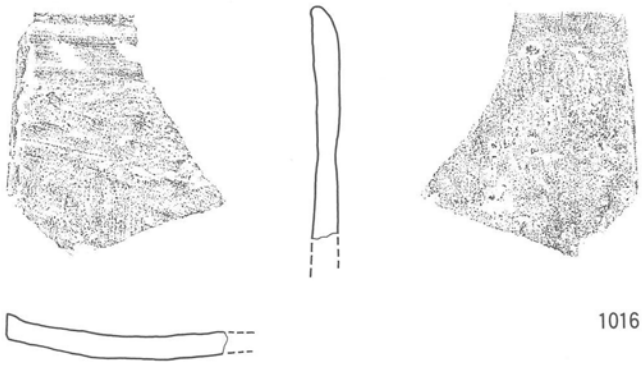
柳谷６号窯　出土瓦４



1014



1015

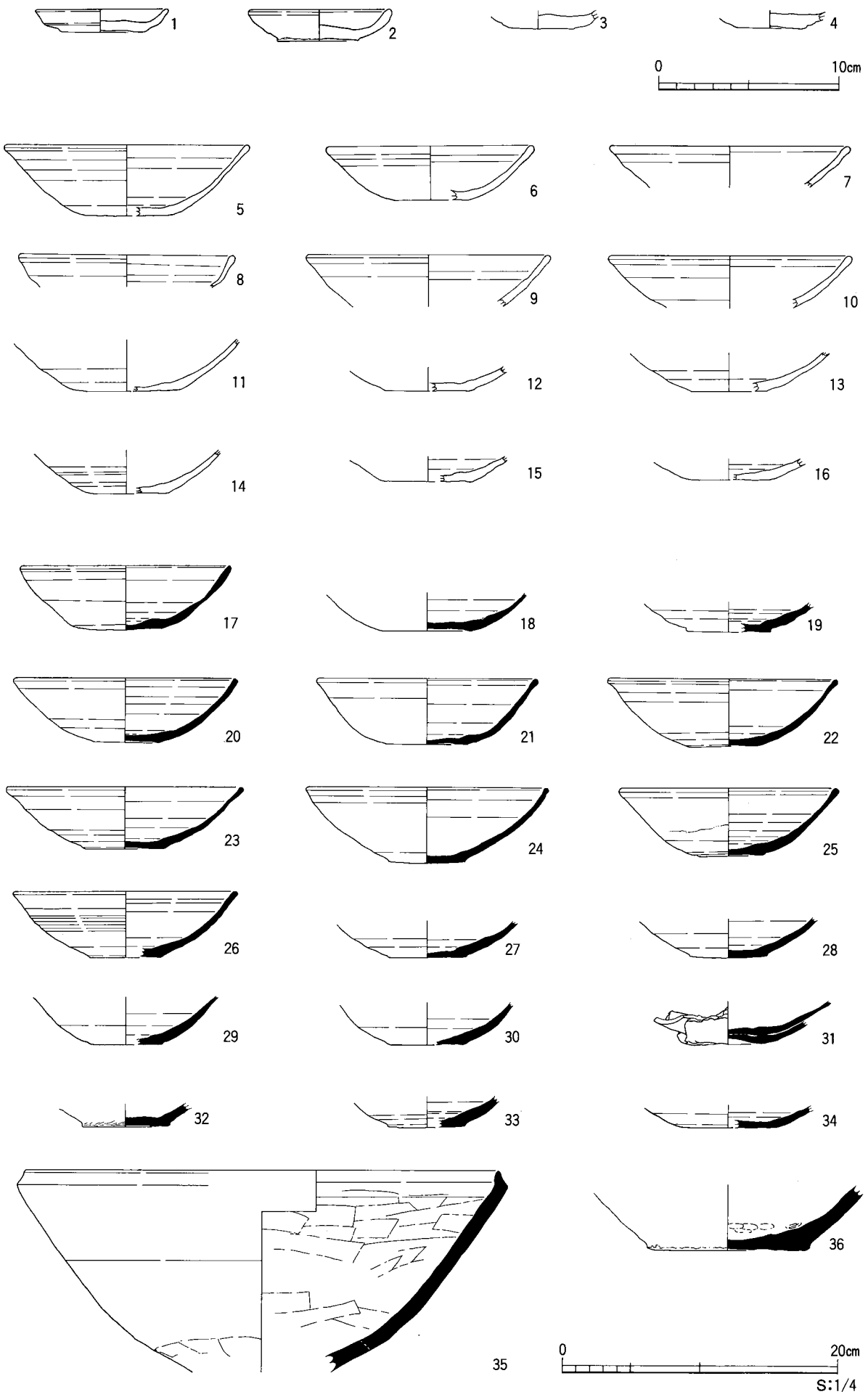


1016

0　20cm

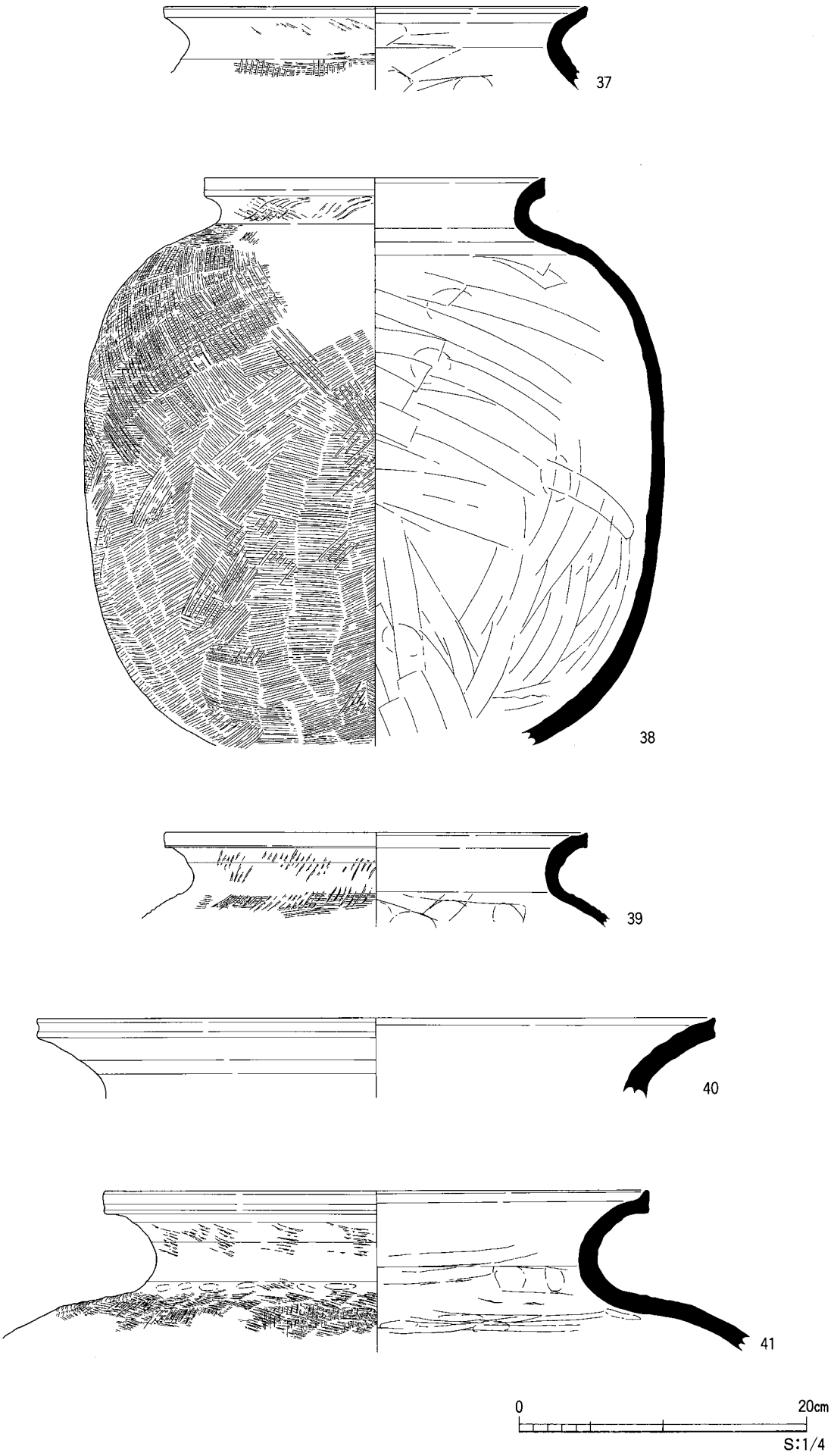
S:1/4

柳谷10号窯　出土土器１

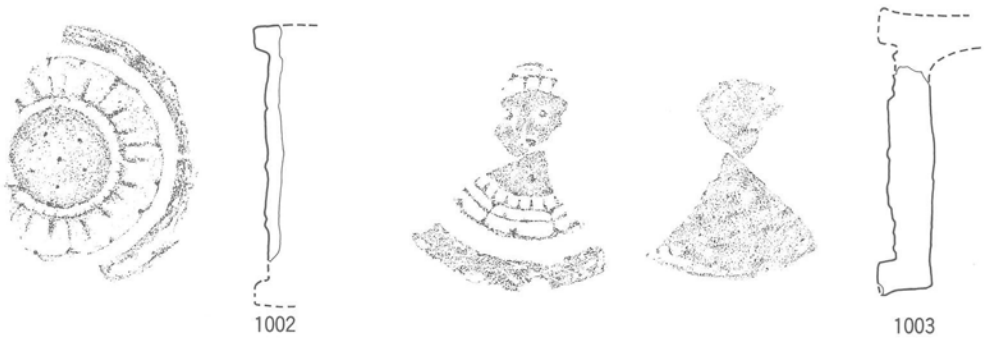


第92図

柳谷10号窯　出土土器 2

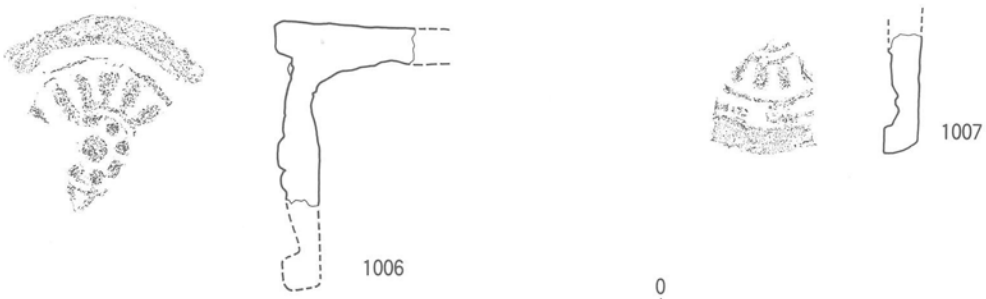


1001


1002
1003

1004

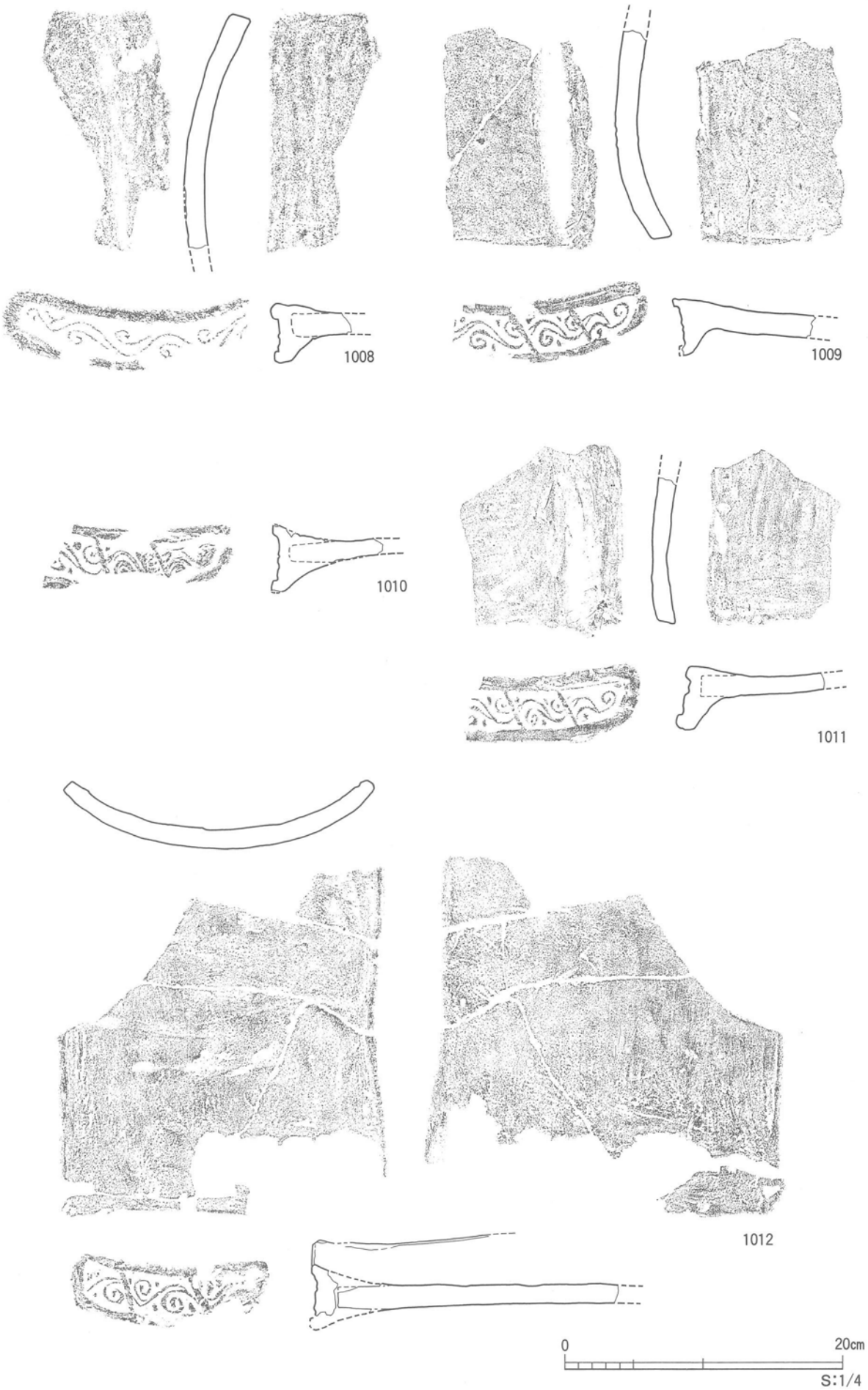
1005

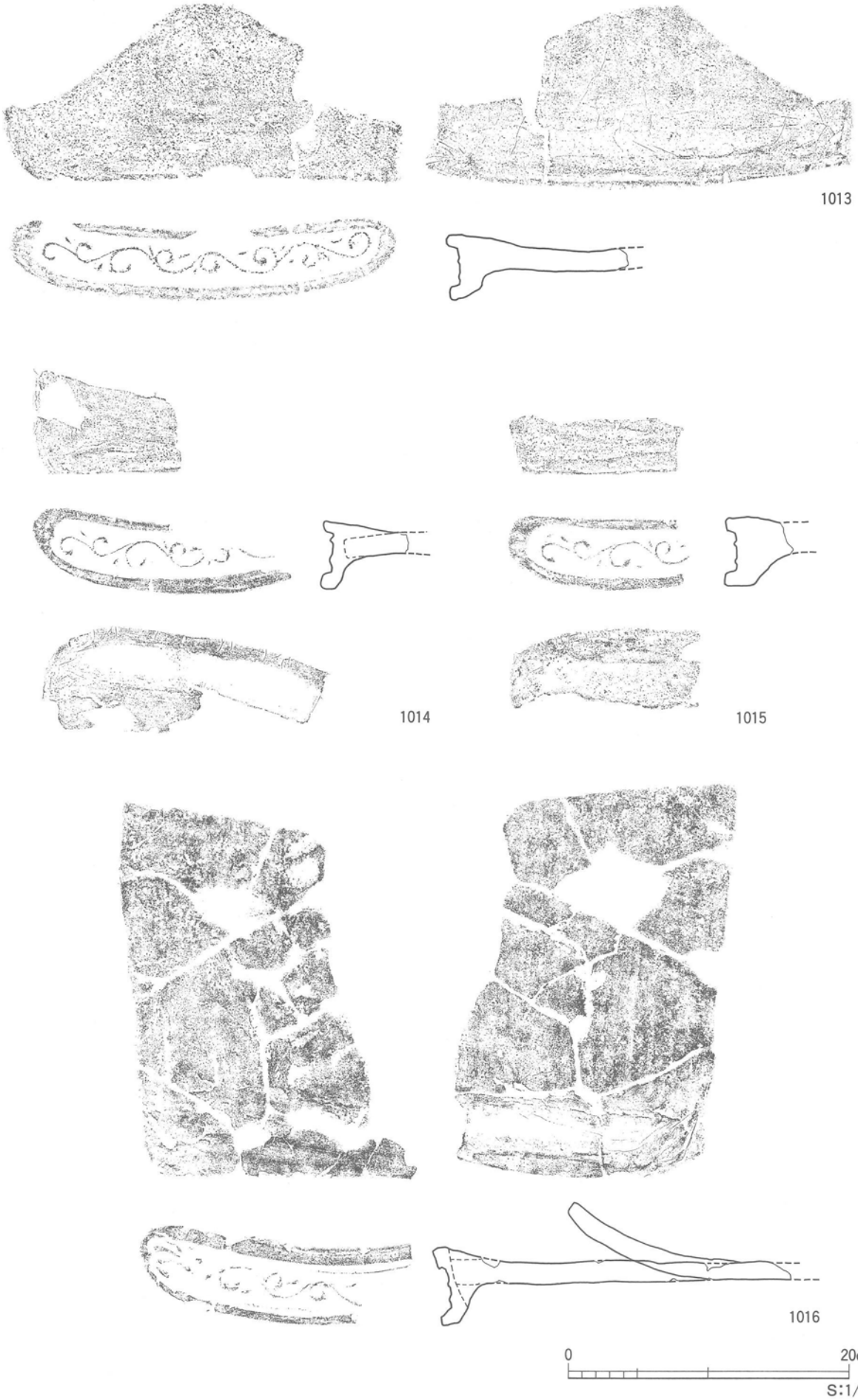

1006
1007

0
20cm
S:1/4

第94図

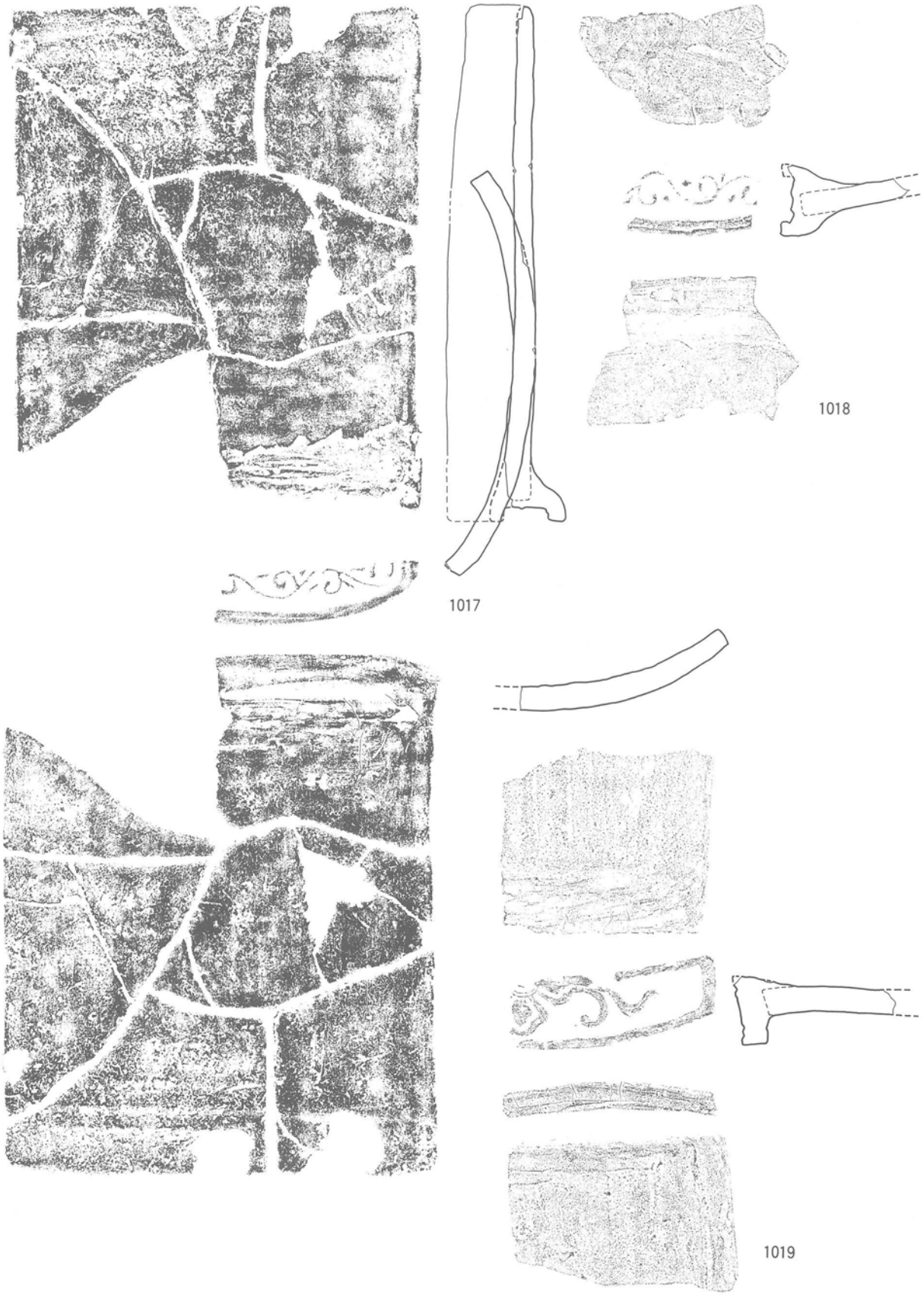
柳谷10号窯　出土瓦２

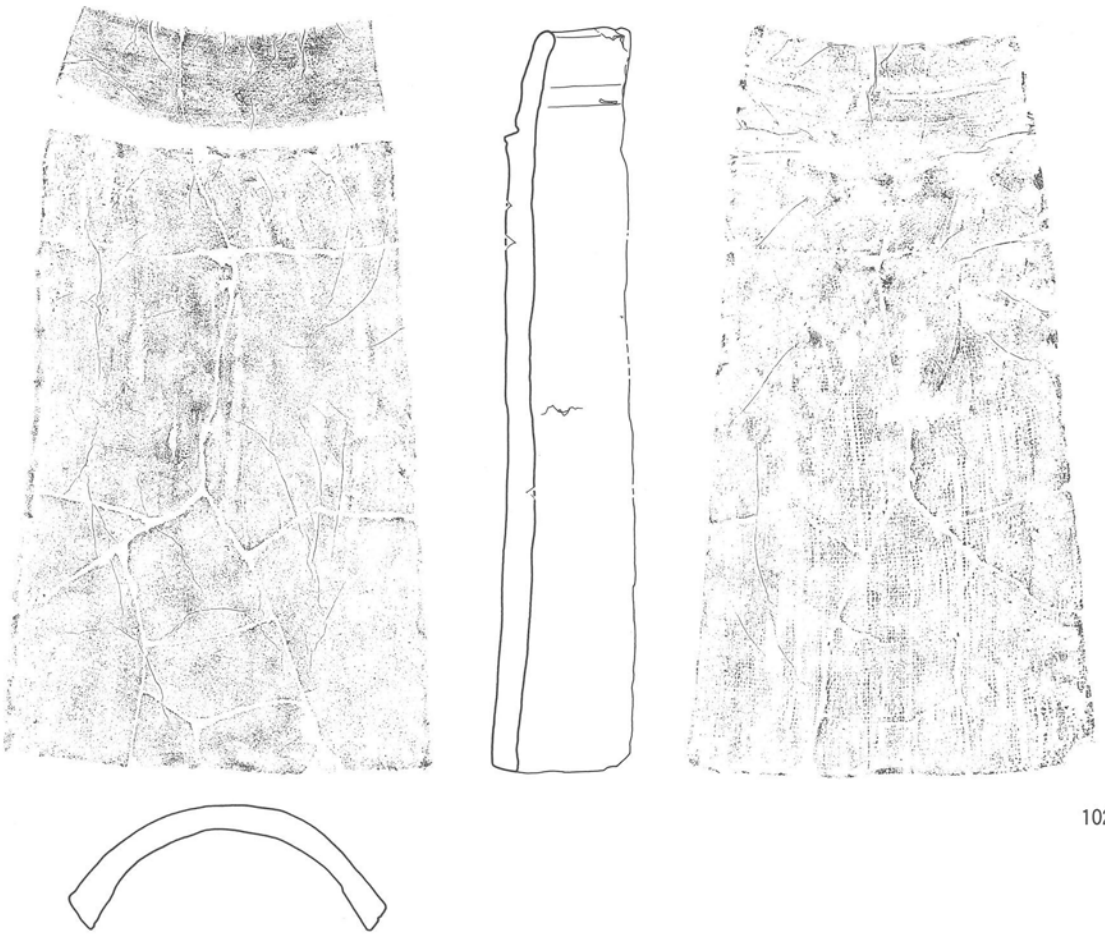



1013
1014
1015
1016
0
20cm
S:1/4

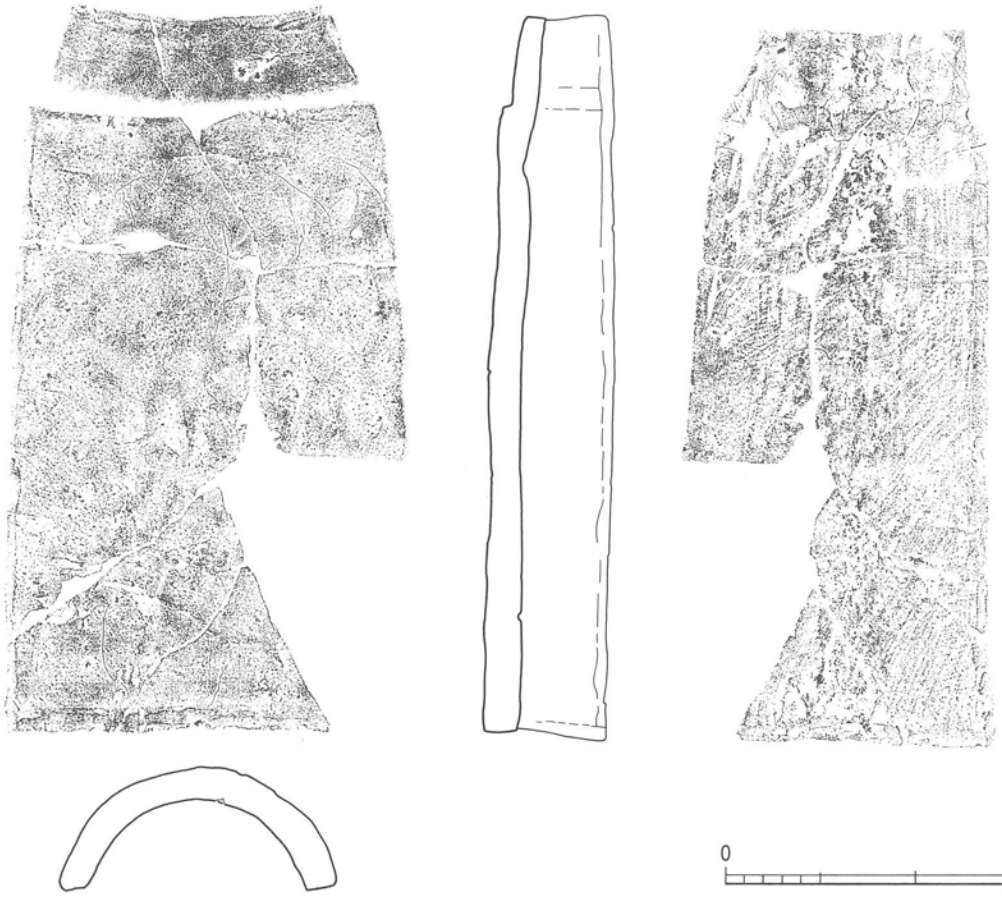
第96図

柳谷10号窯　出土瓦 4





1020

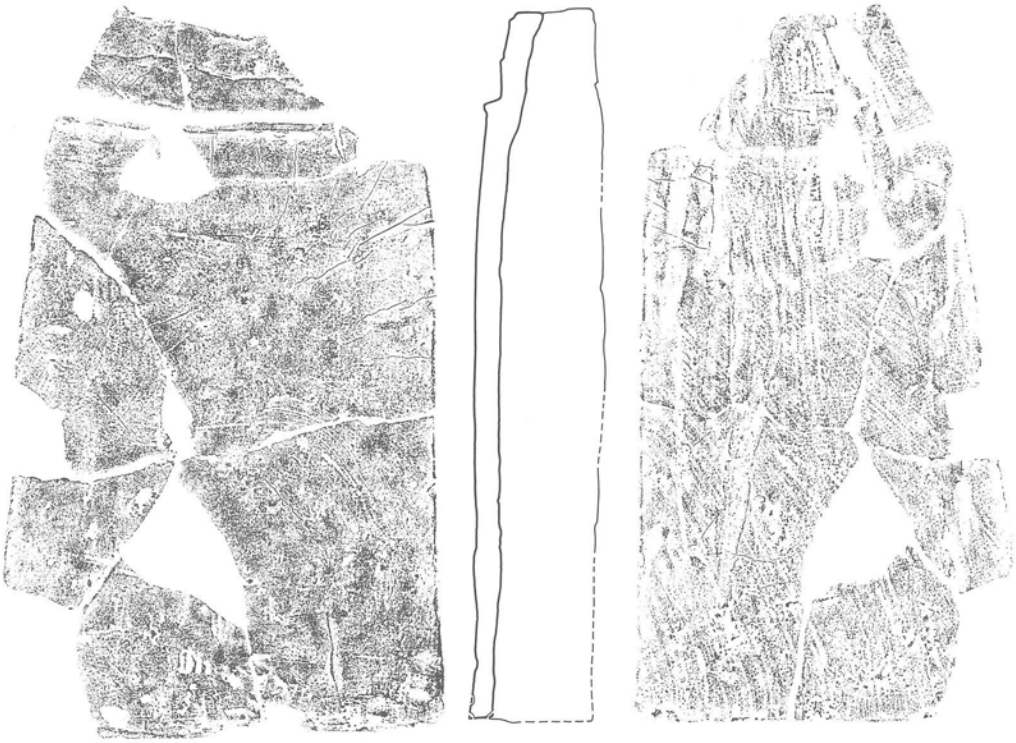


1021

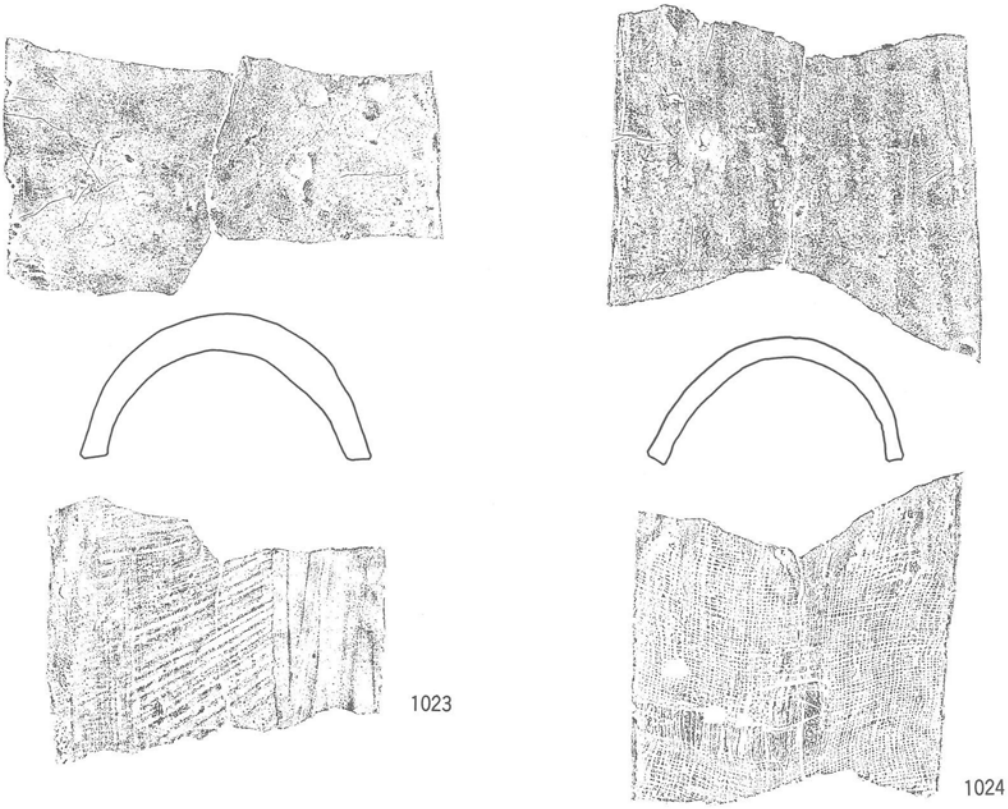
0　20cm
S:1/4

第98図

柳谷10号窯　出土瓦 6



1022

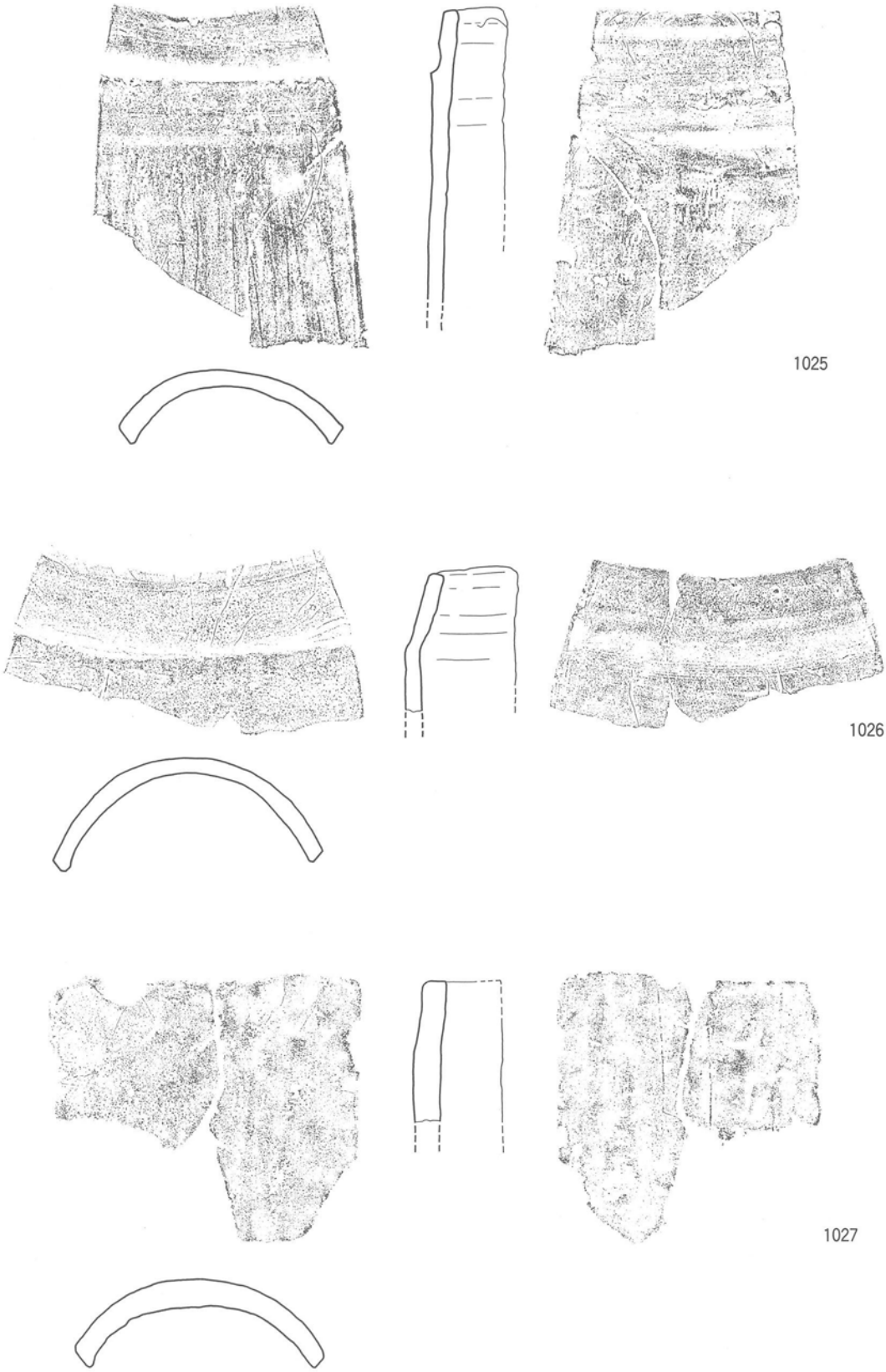


1023

1024

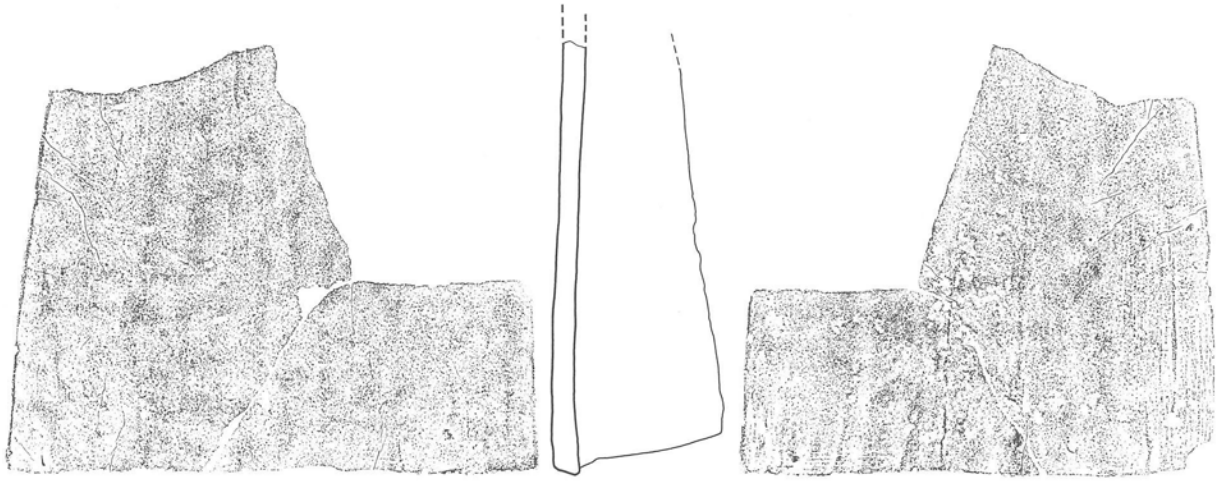
0　20cm

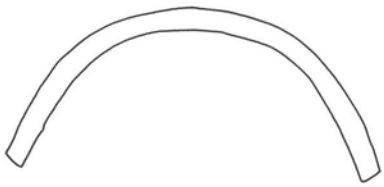
S:1/4


1025
1026
1027
0
20cm
S:1/4

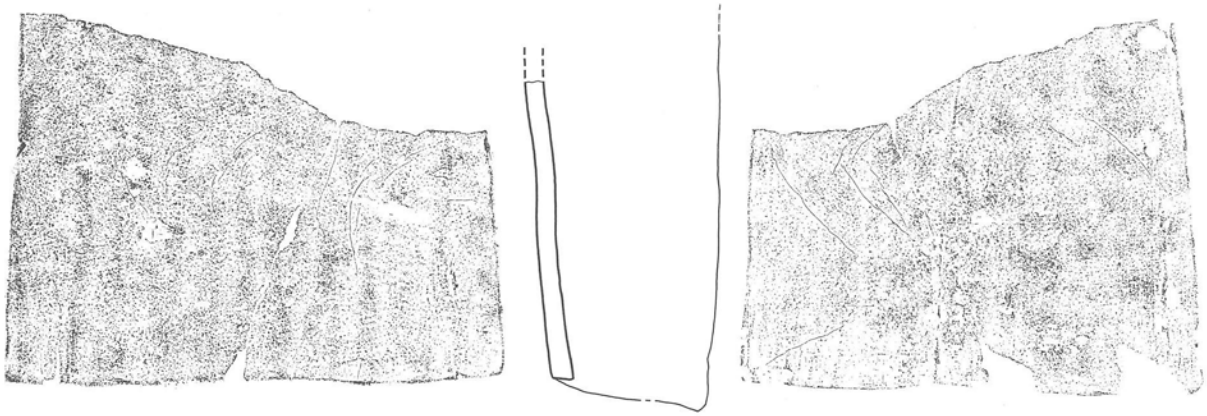
第100図

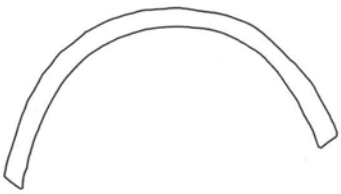
柳谷10号窯　出土瓦 8



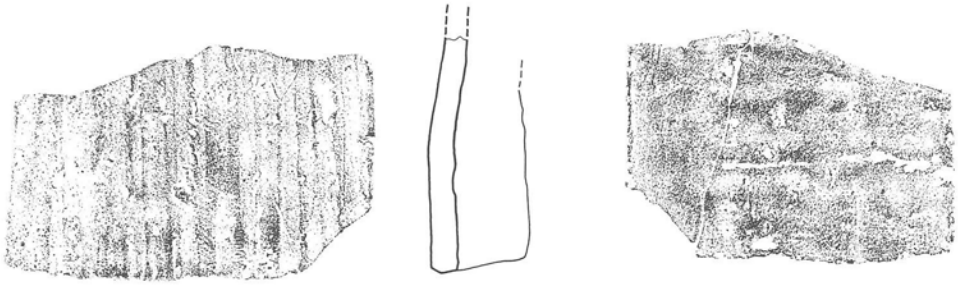


1028





1029

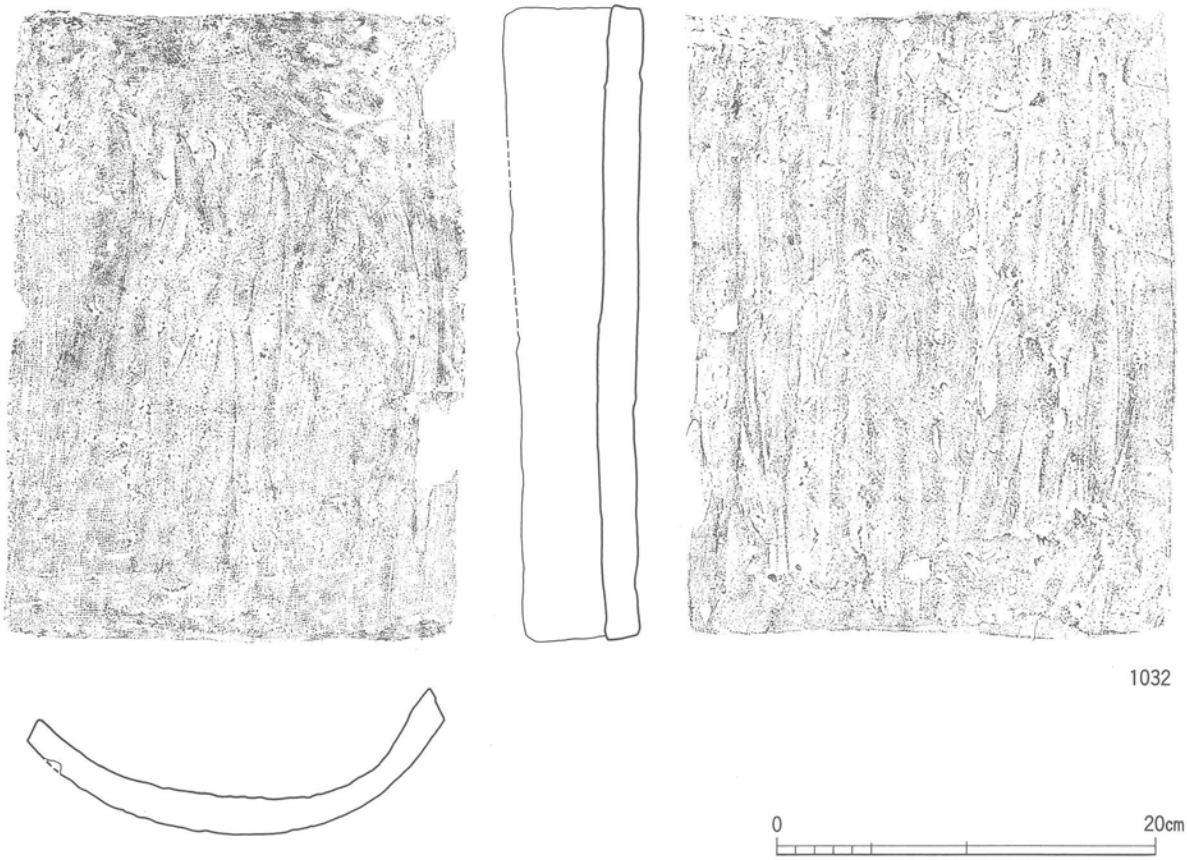


1030

0　20cm

S:1/4

1031

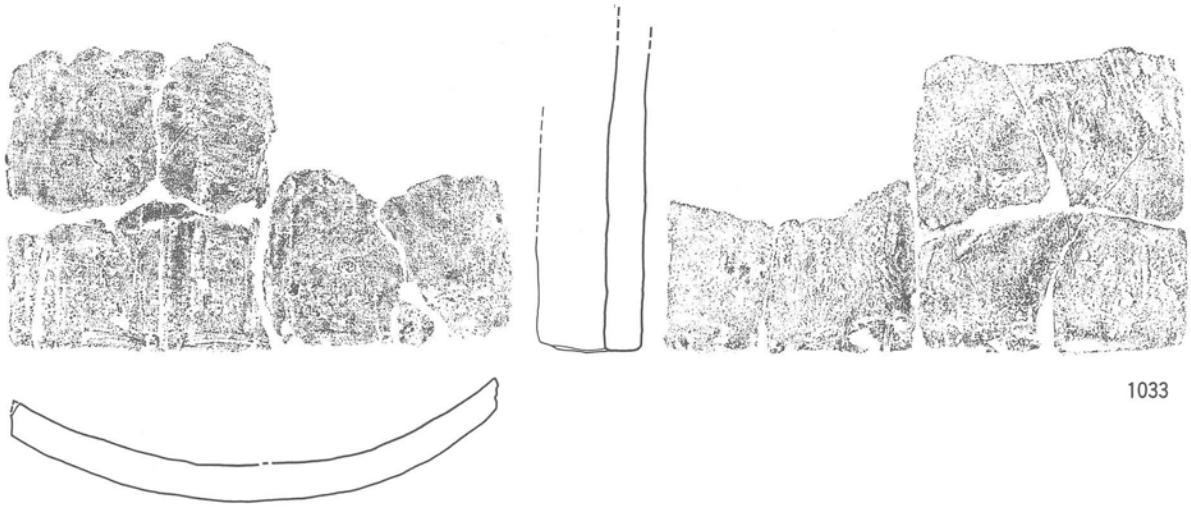


1032

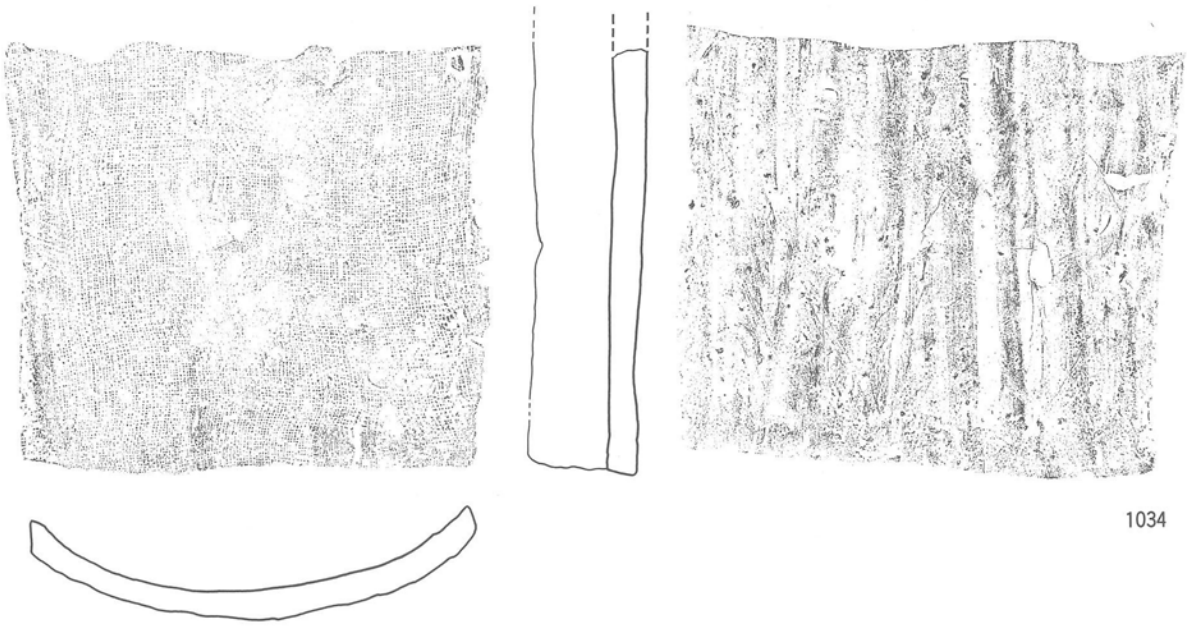
0　20cm
S:1/4

第102図

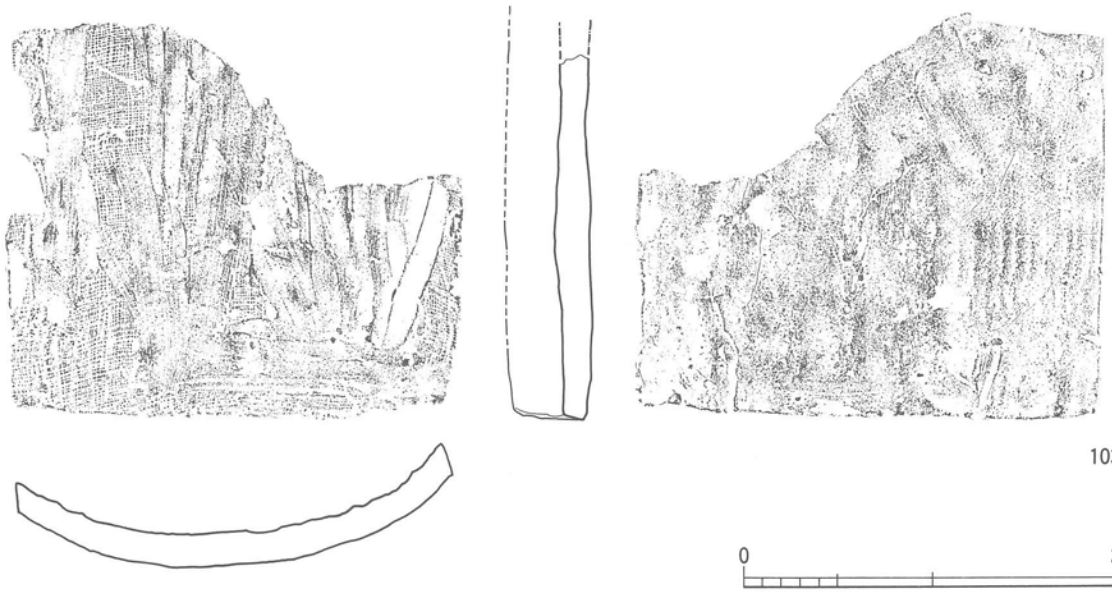
柳谷10号窯　出土瓦10



1033



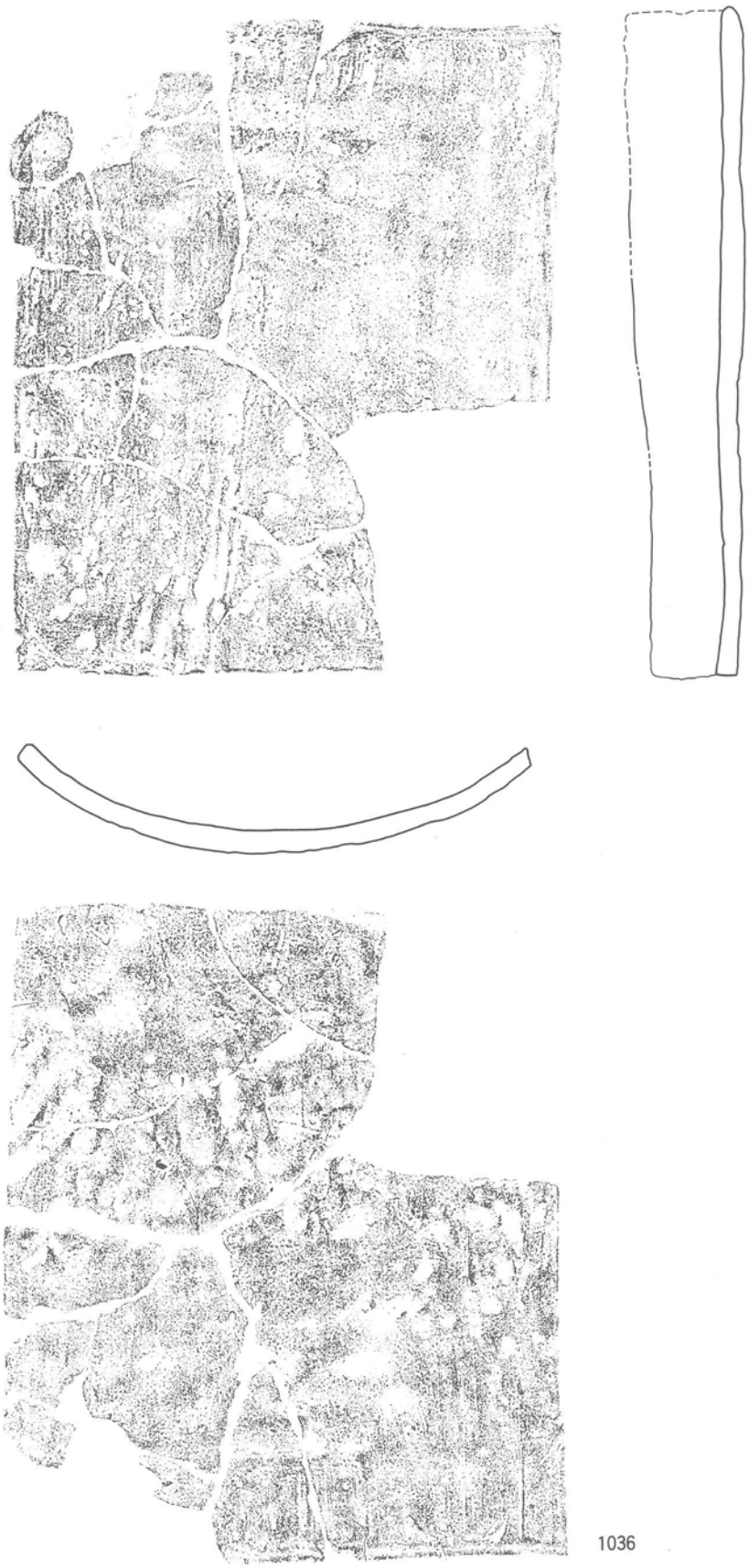
1034



1035

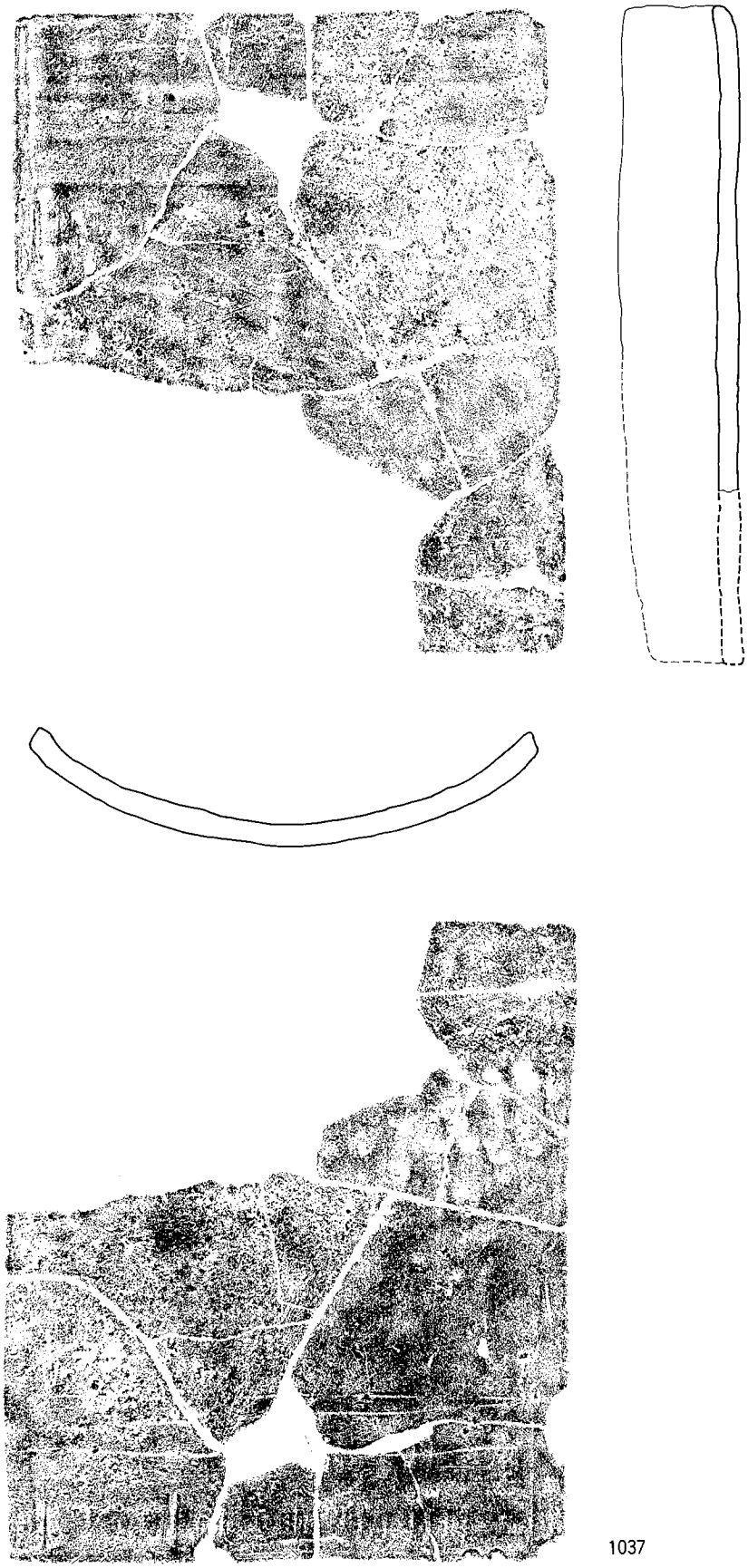
0　20cm

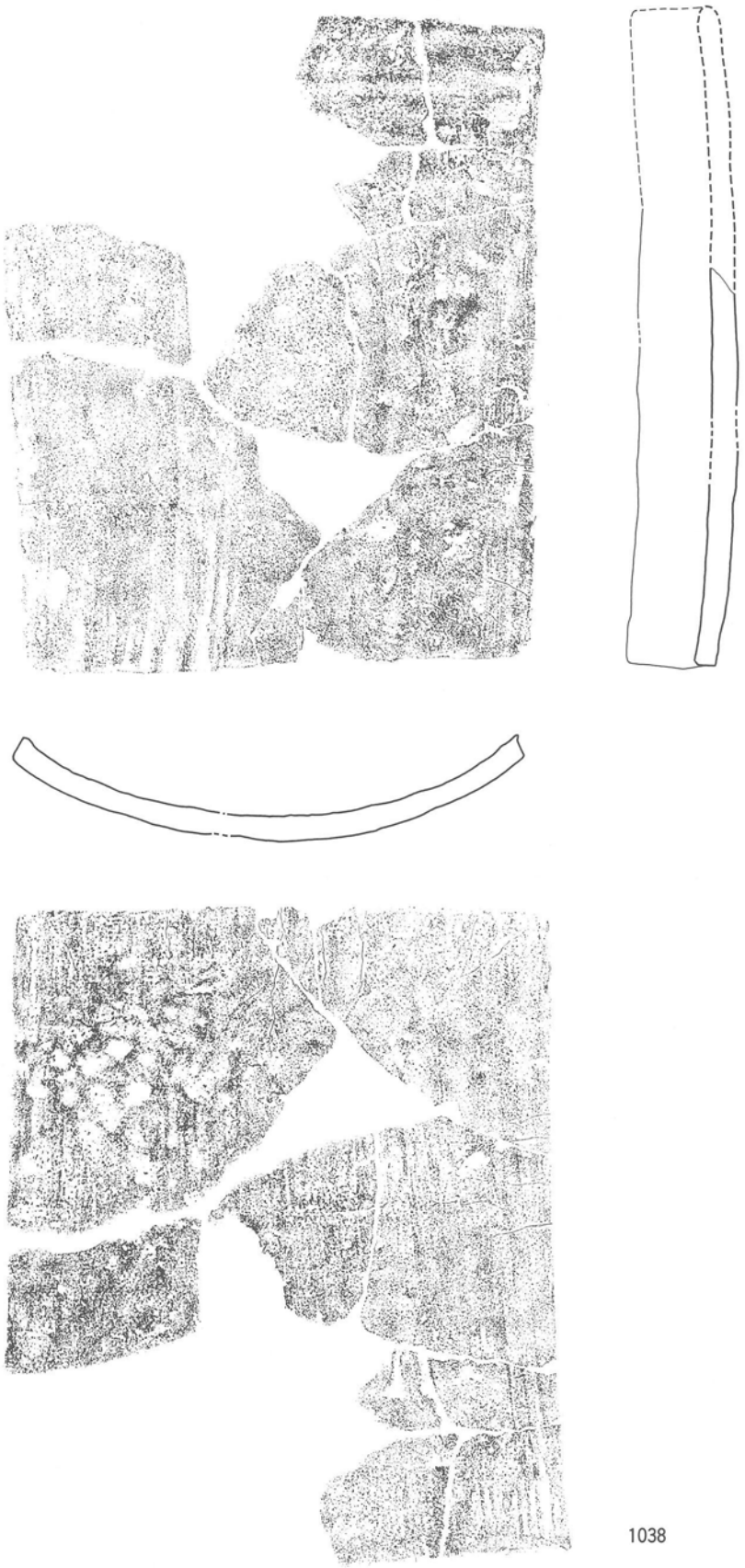
S:1/4


1036
0
20cm
S:1/4

第104図

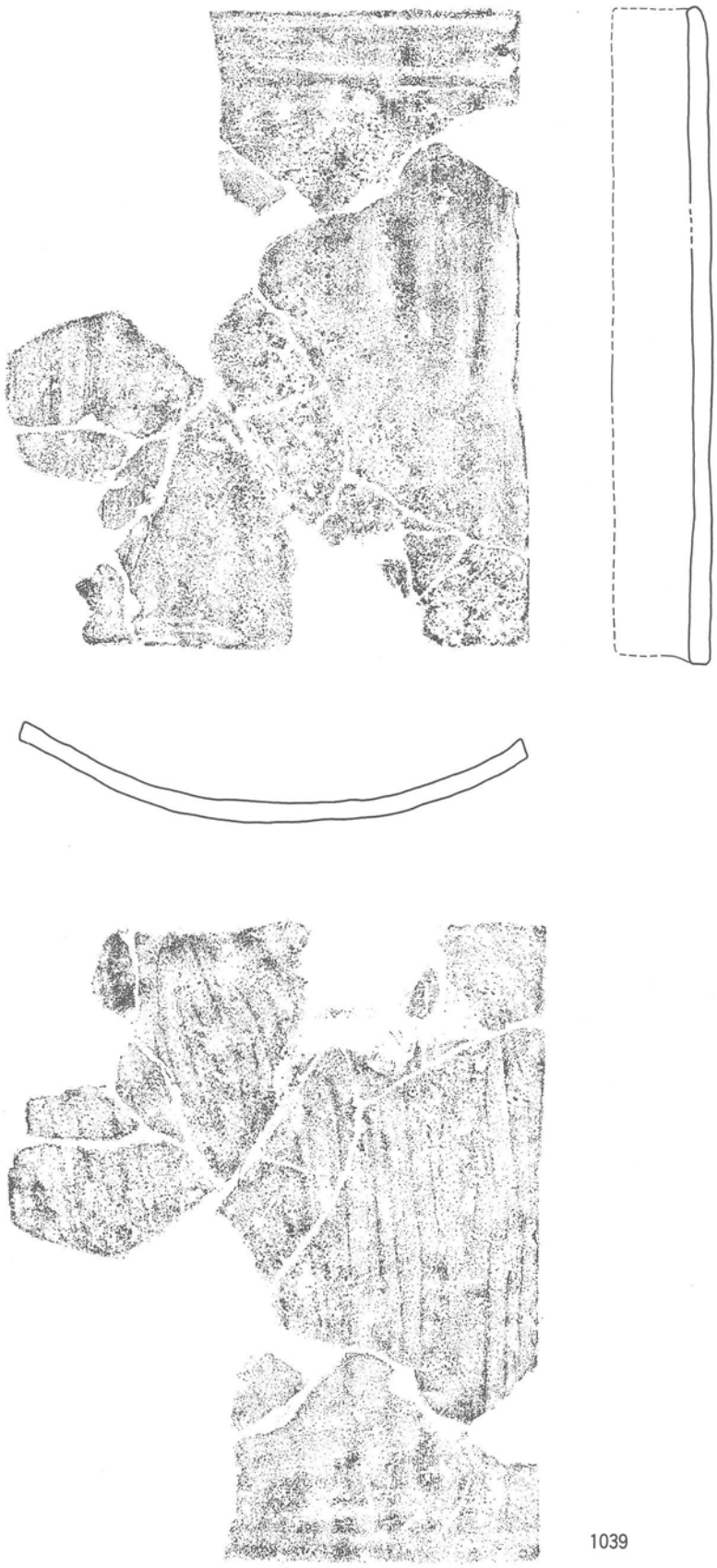
柳谷10号窯　出土瓦12




1038
0
20cm
S:1/4

第106図

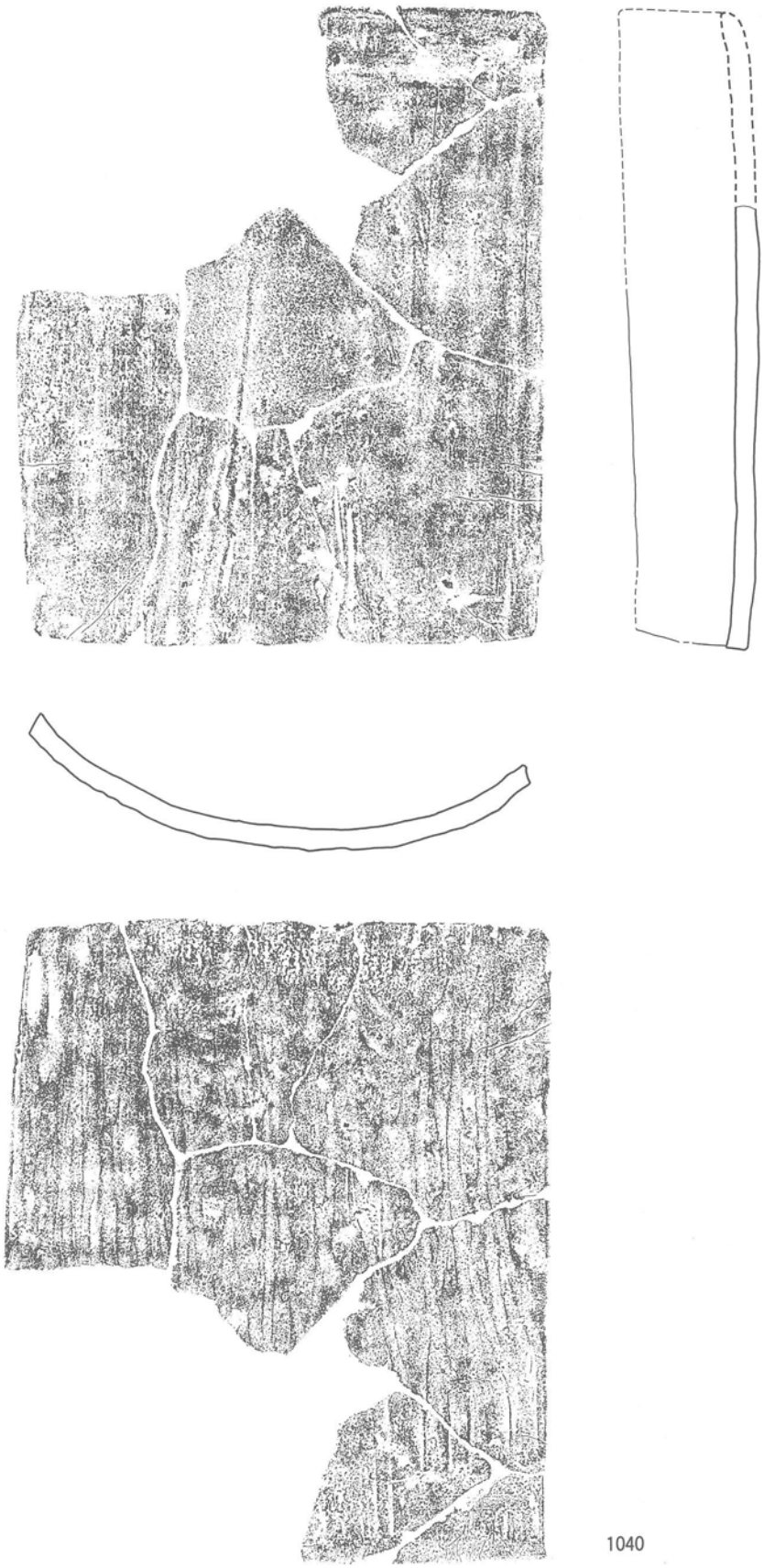
柳谷10号窯　出土瓦14



1039

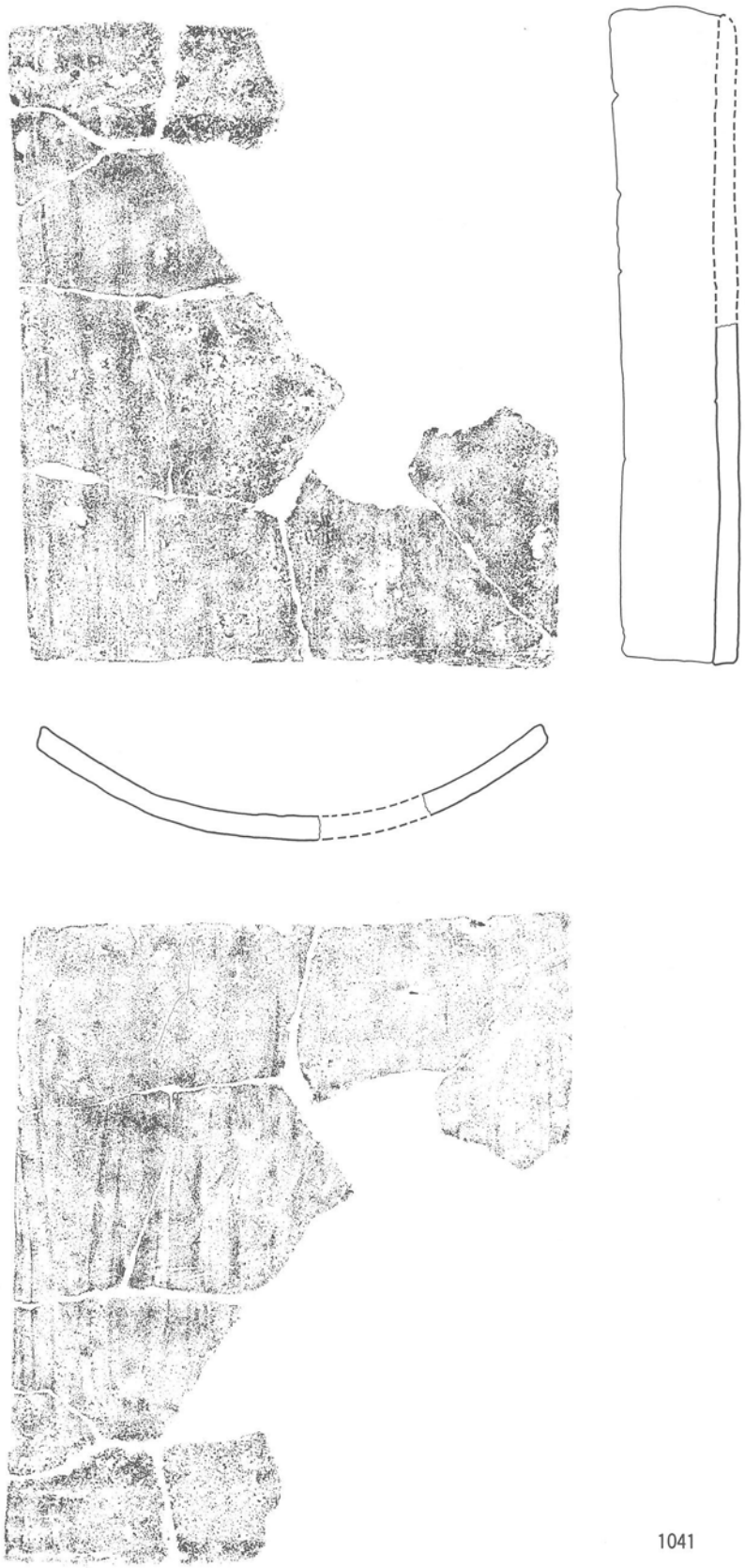
0　20cm

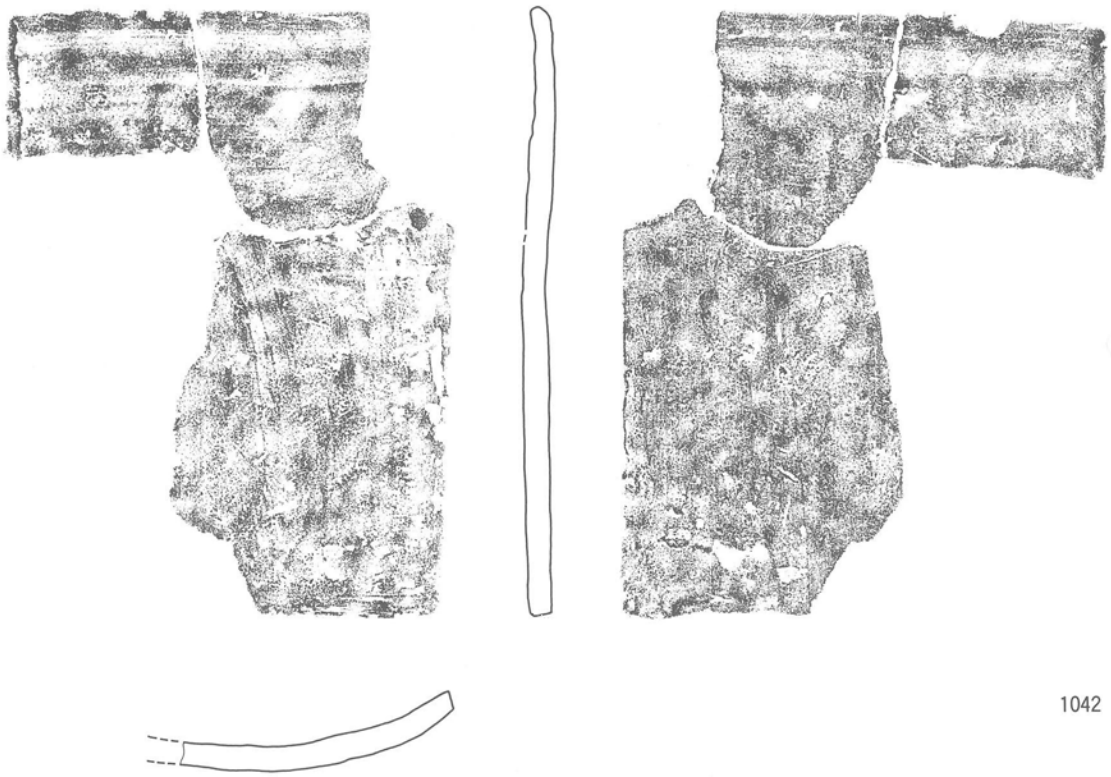
S:1/4


1040
0
20cm
S:1/4

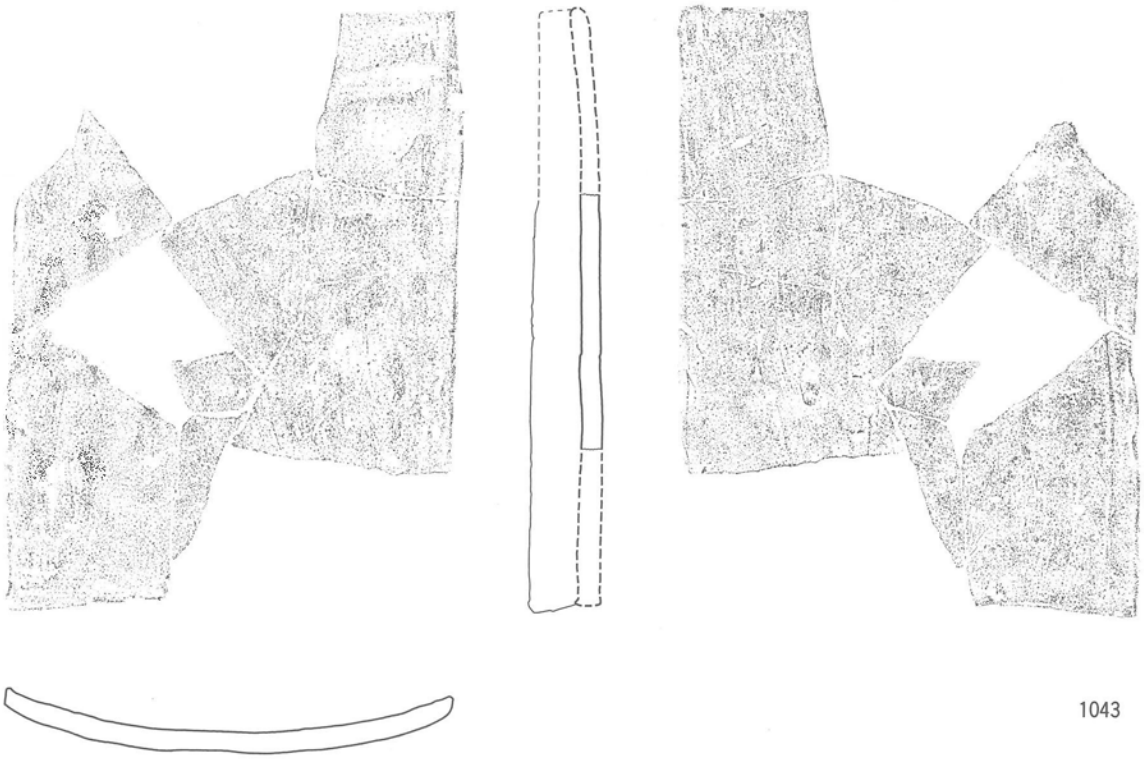
第108図

柳谷10号窯　出土瓦16





1042



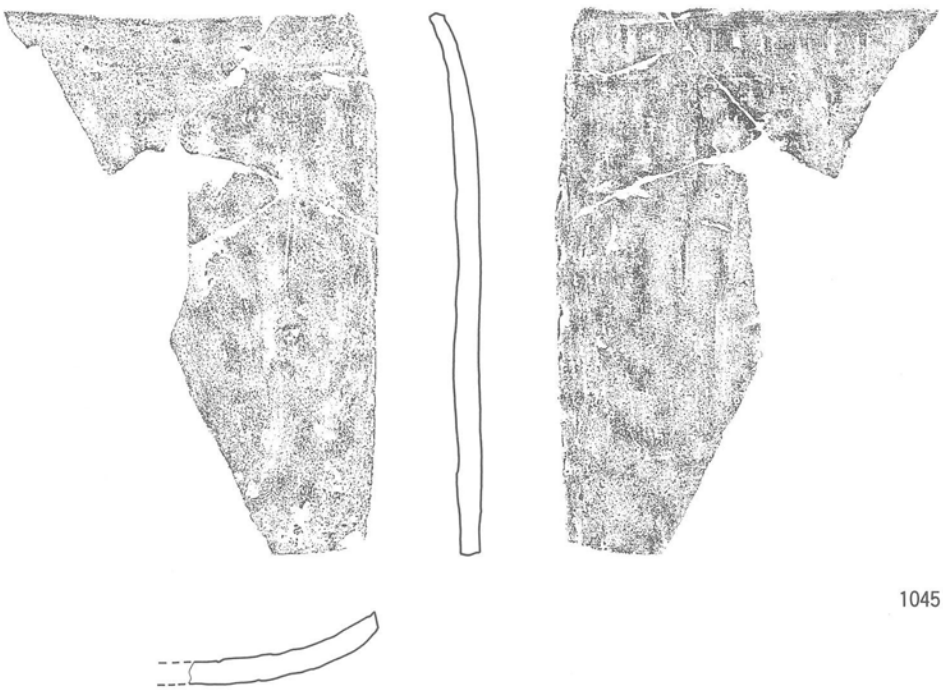
1043

0　20cm
S:1/4

第110図

柳谷10号窯　出土瓦18

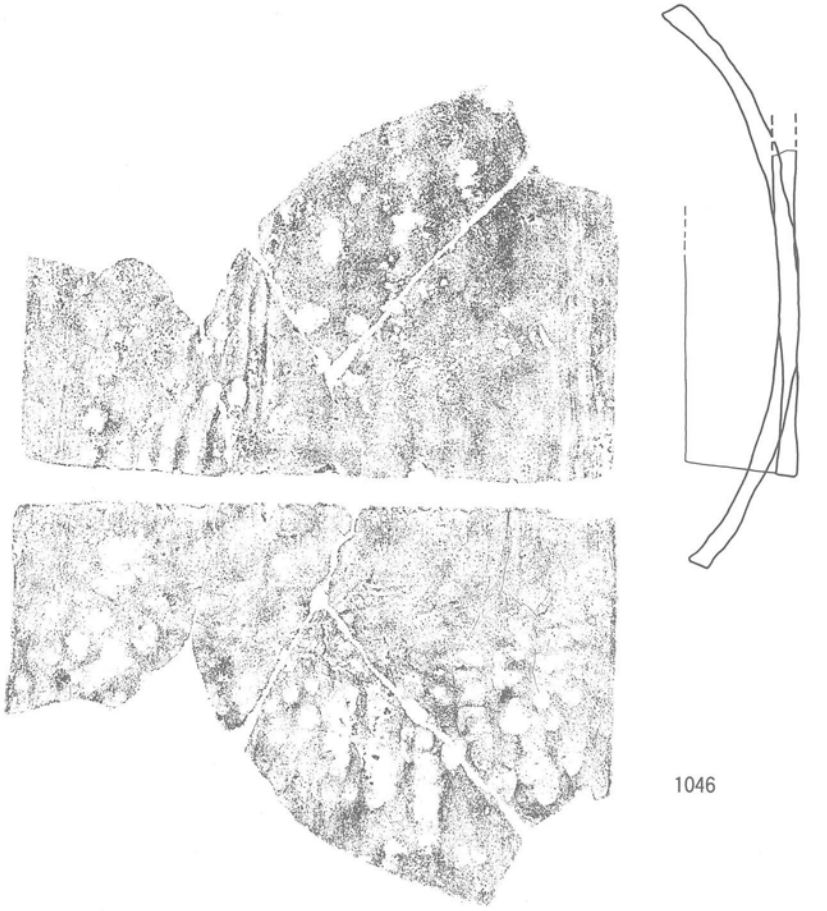
1044



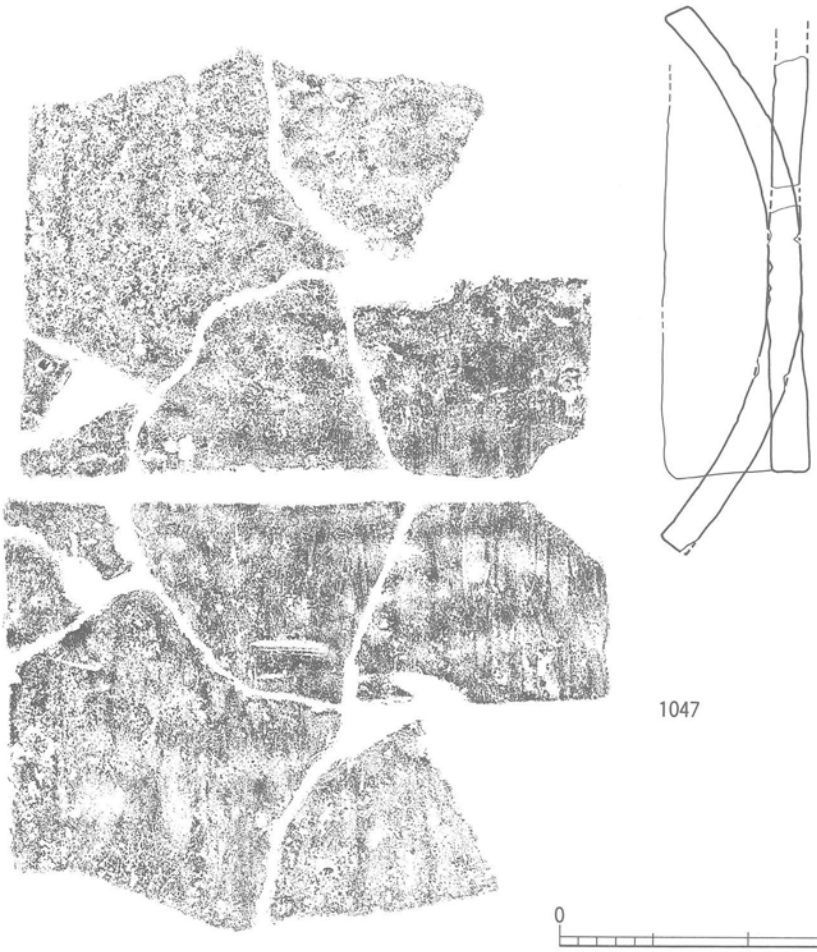
1045

0　20cm

S:1/4



1046



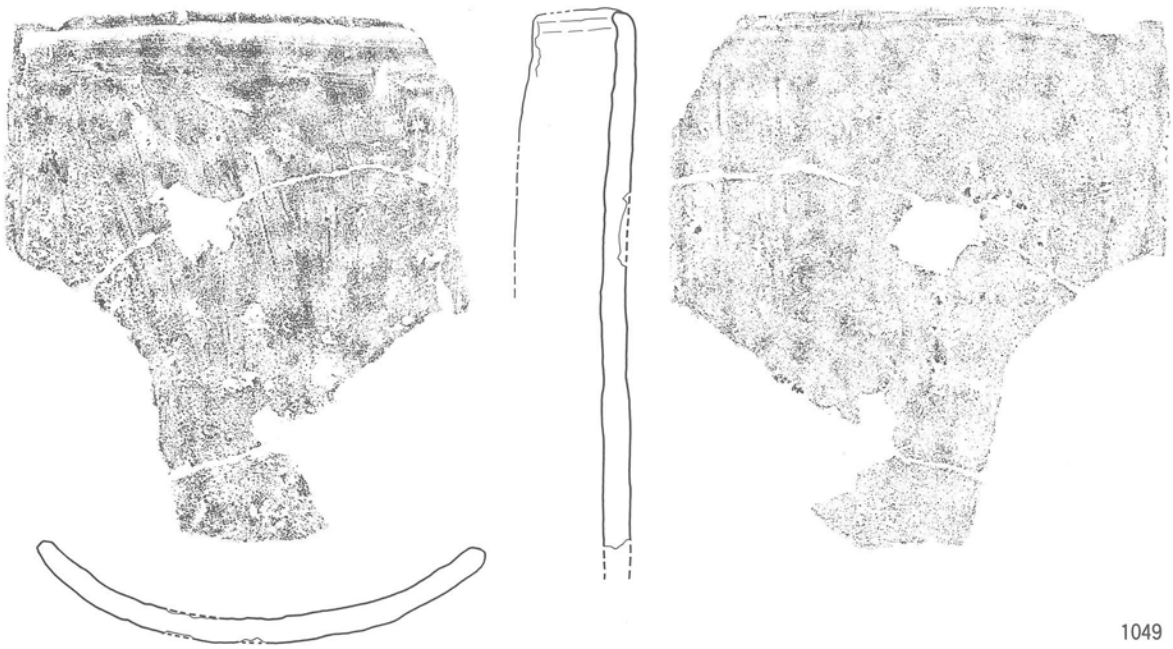
1047

0　20cm
S:1/4

第112図

柳谷10号窯　出土瓦20

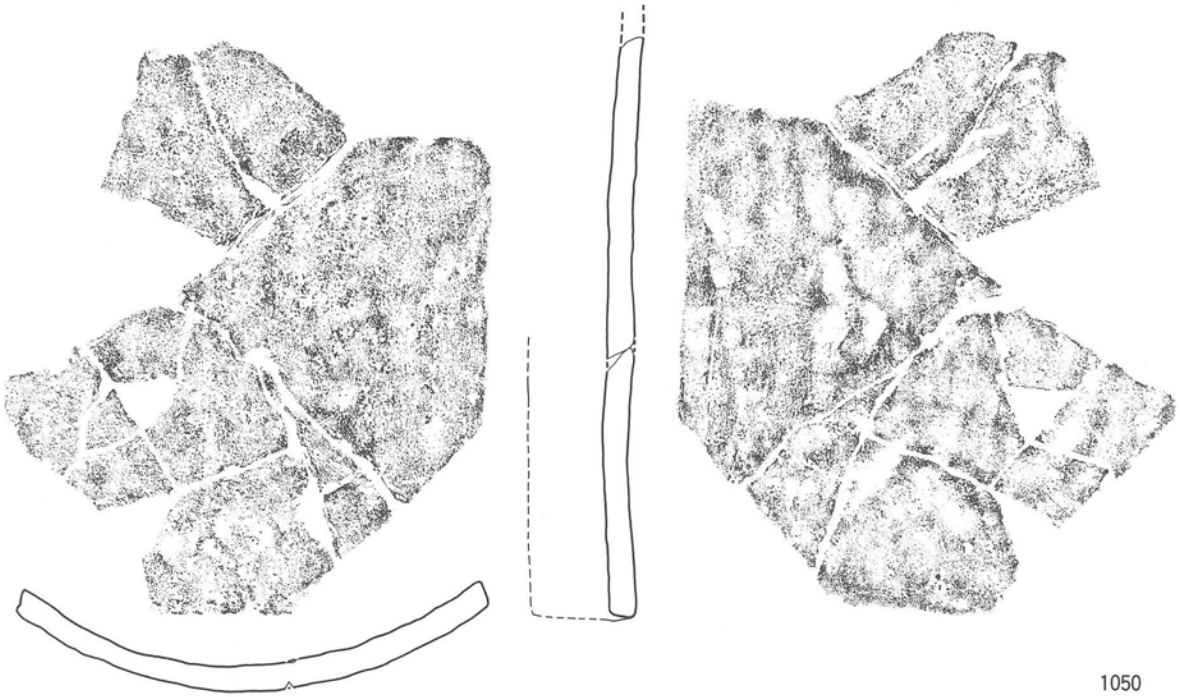
1048



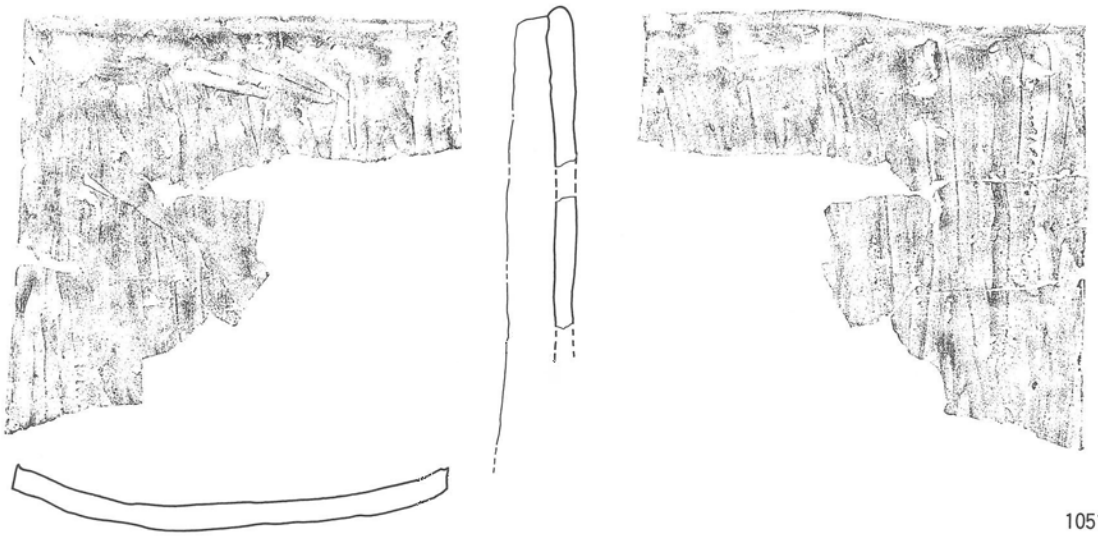
1049

0　20cm

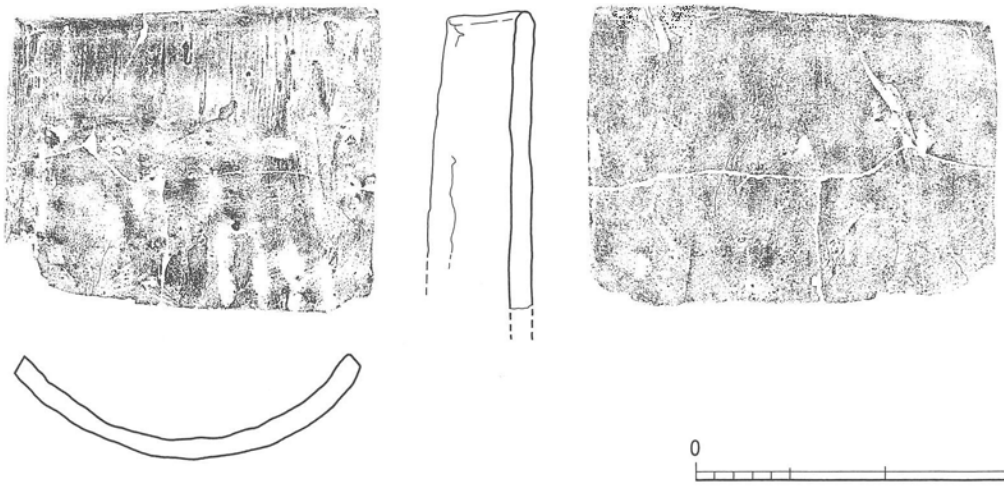
S:1/4



1050



1051

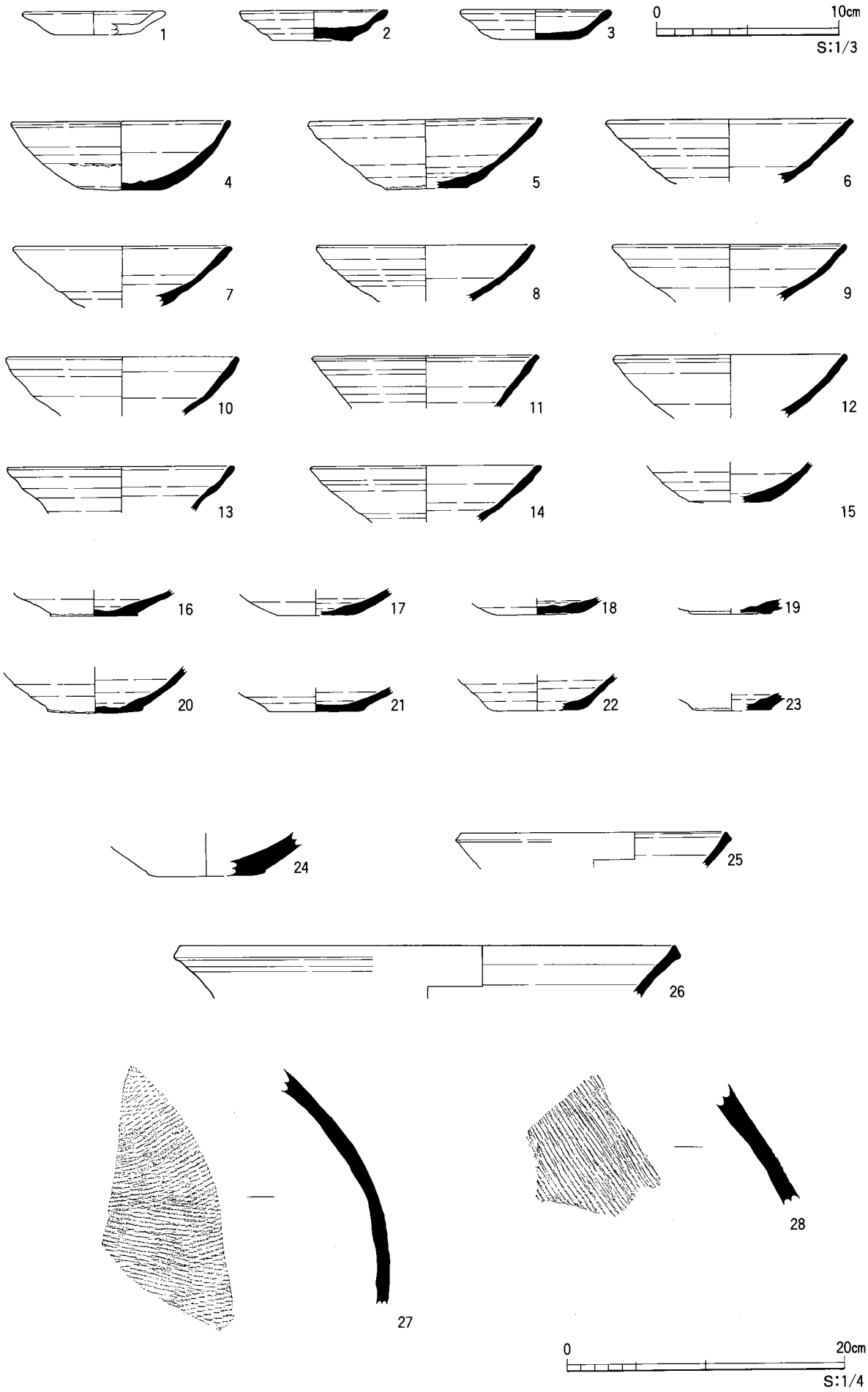


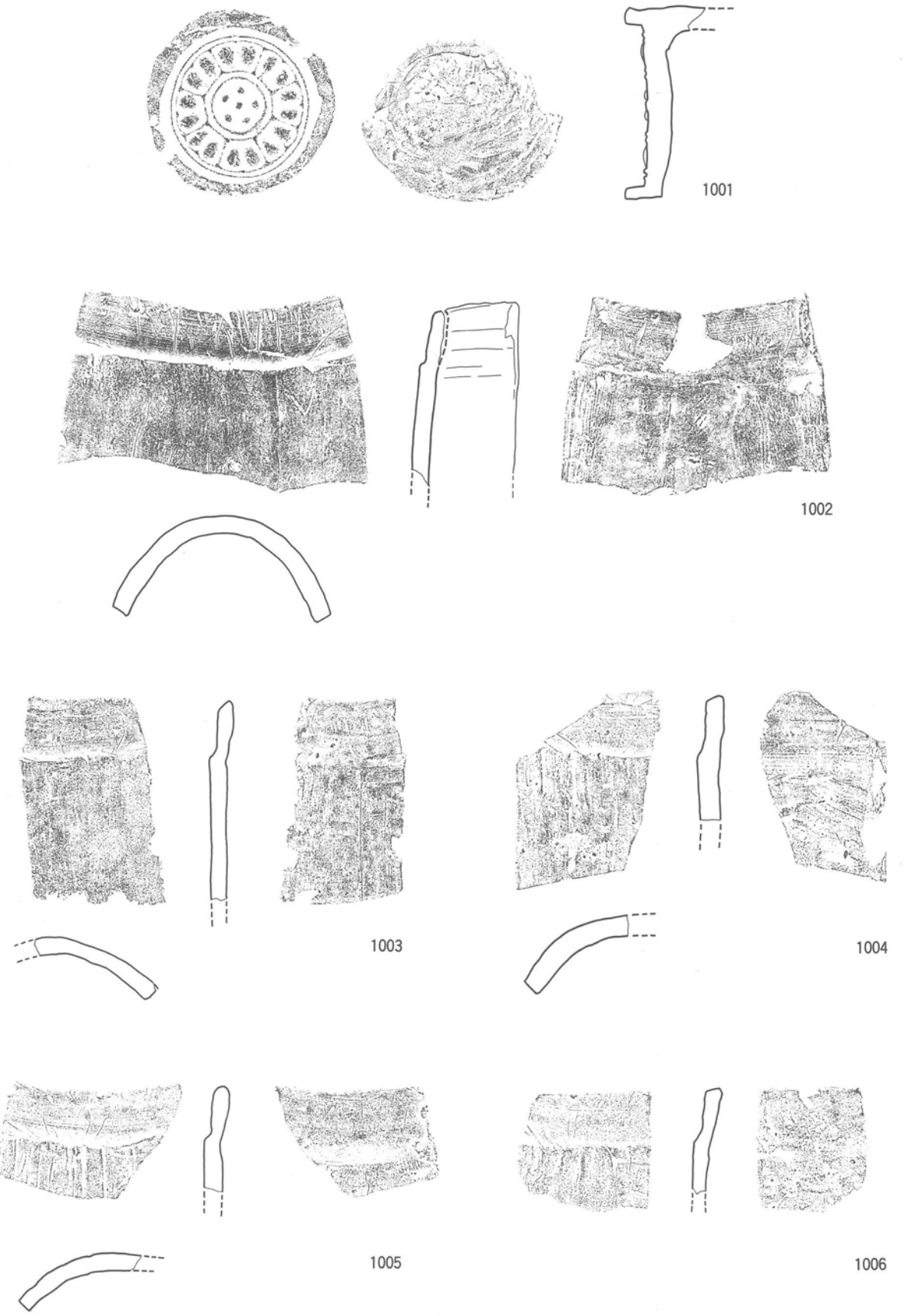
1052

0　20cm
S:1/4

第114図

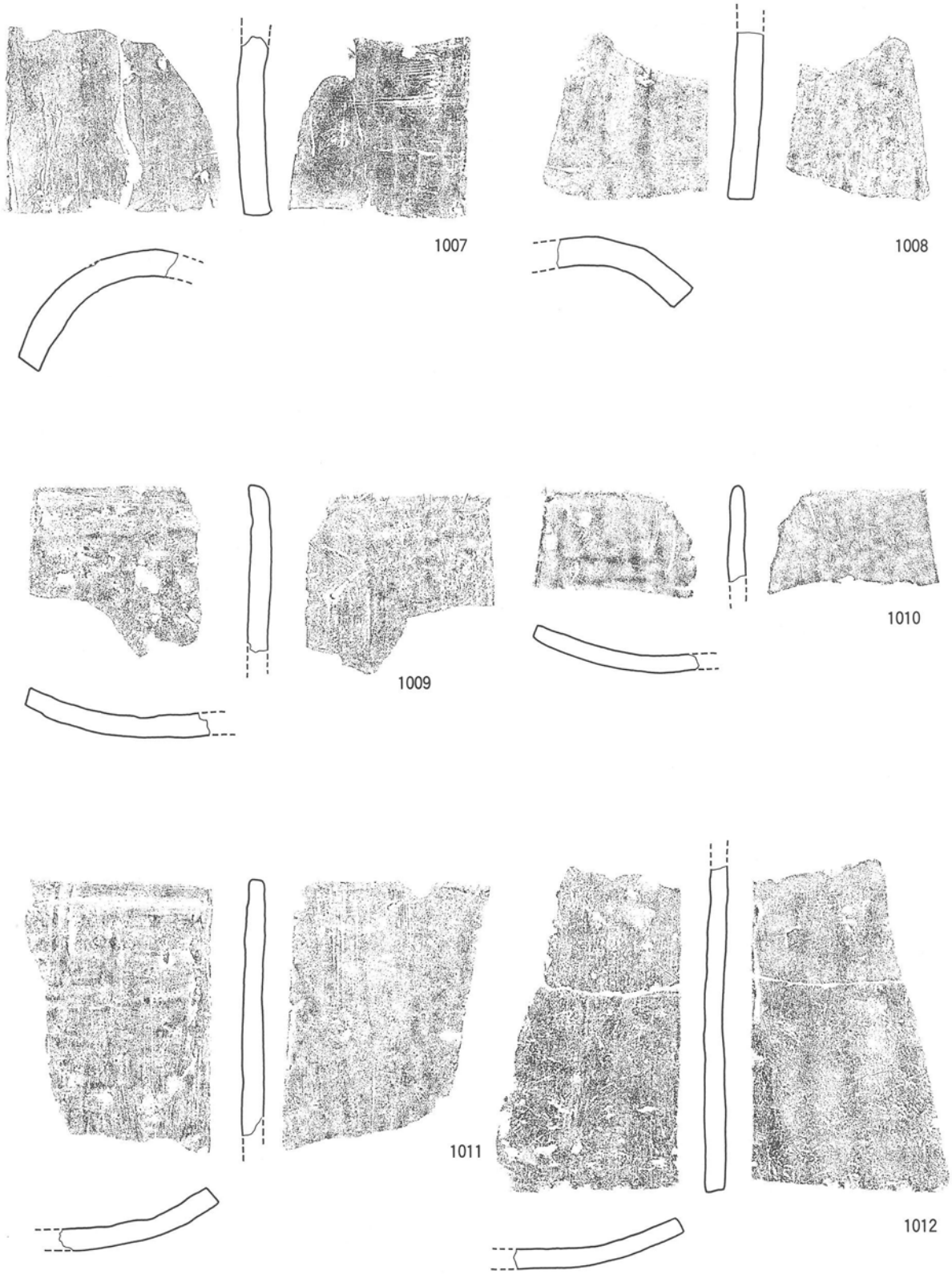
柳谷８号窯　出土土器




1001
1002
1003
1004
1005
1006
0
20cm
S:1/4

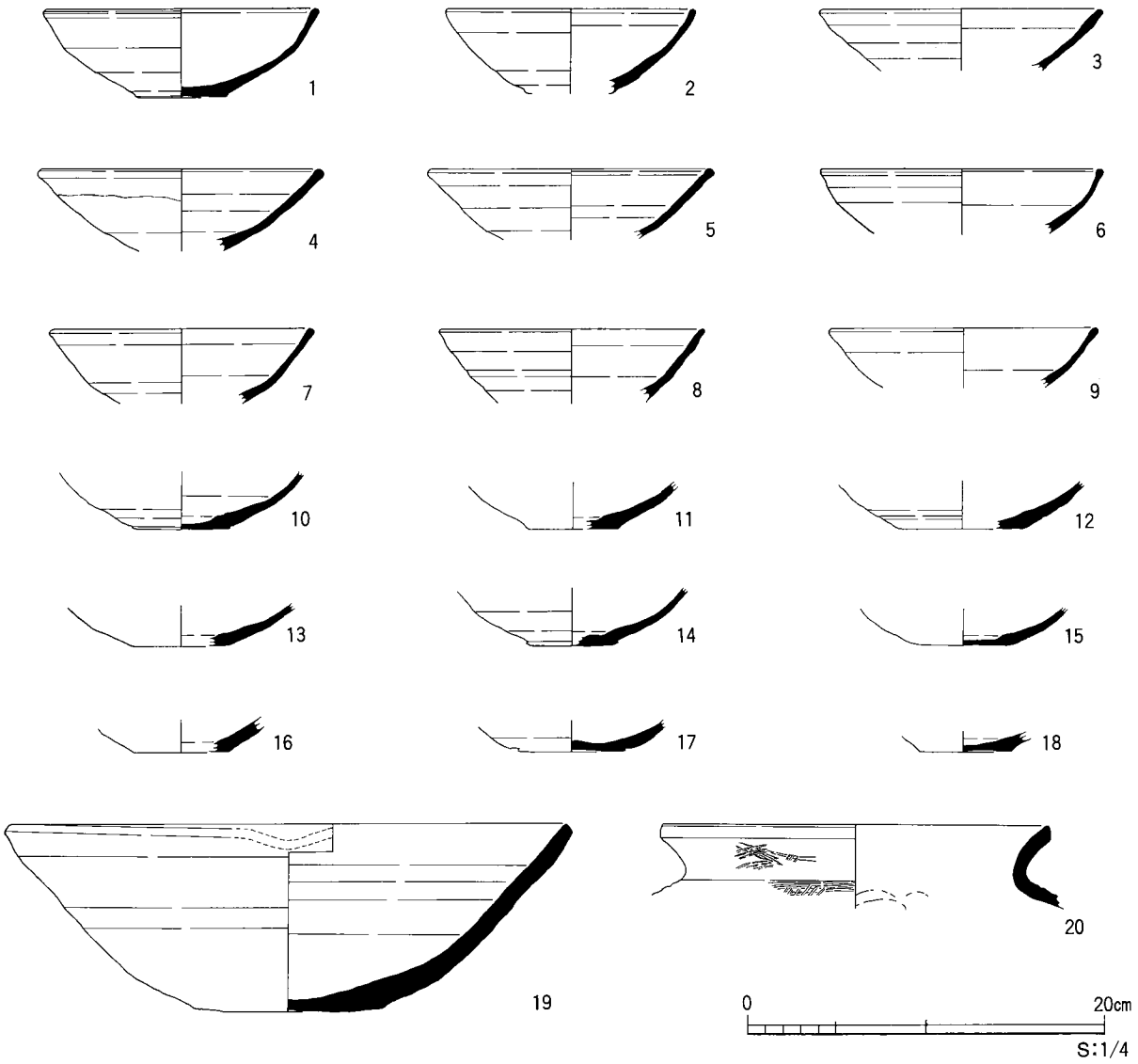
第116図

柳谷８号窯　出土瓦２



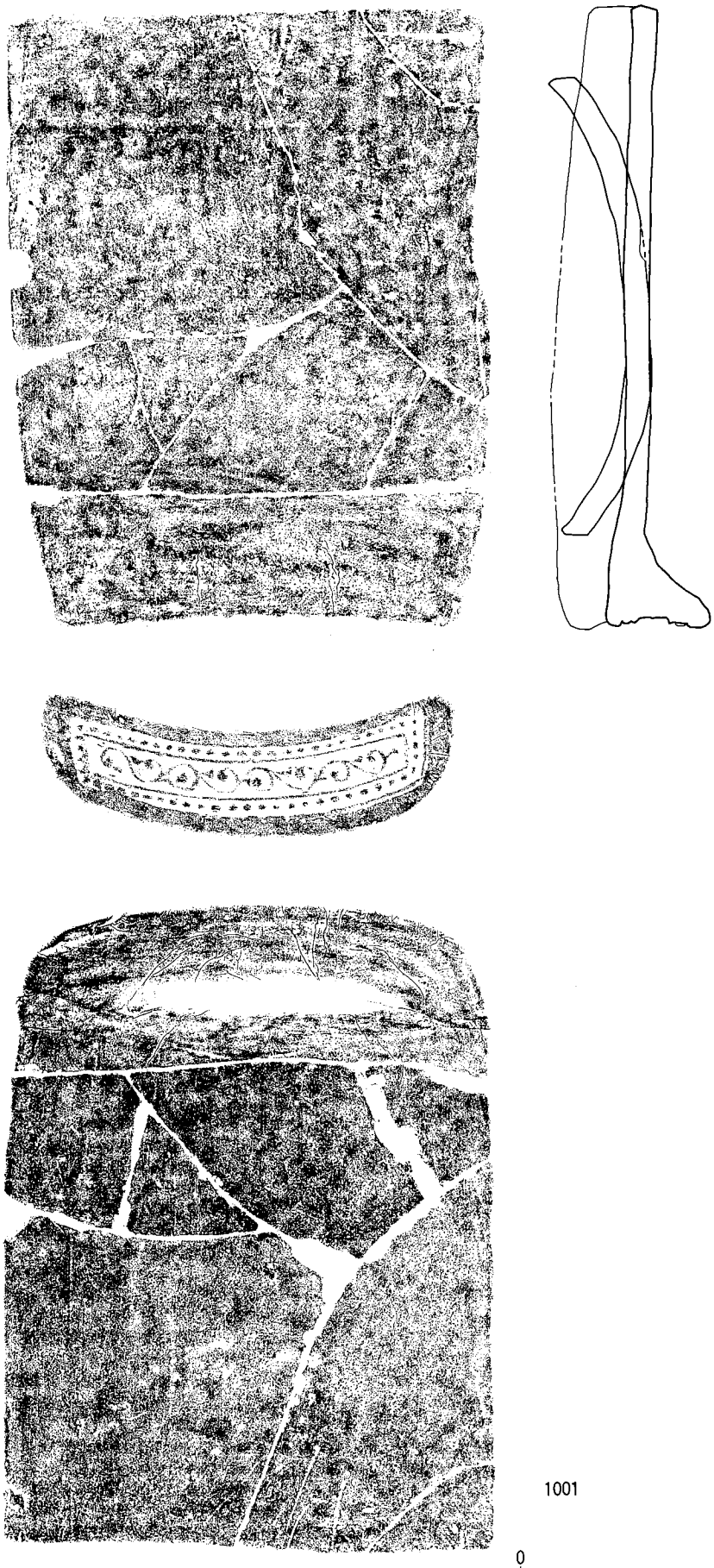
第117図

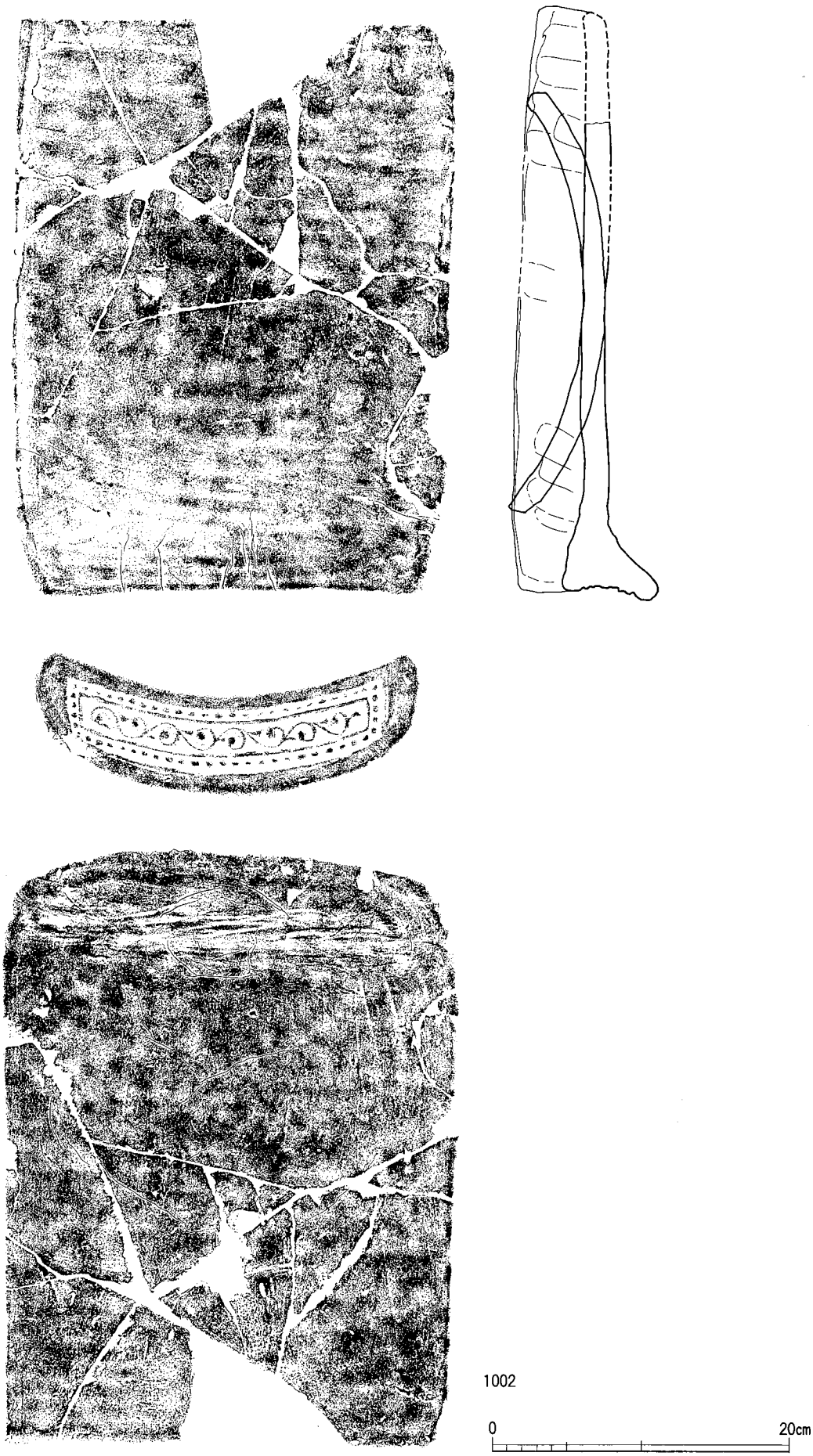
柳谷15号窯　出土土器



第118図

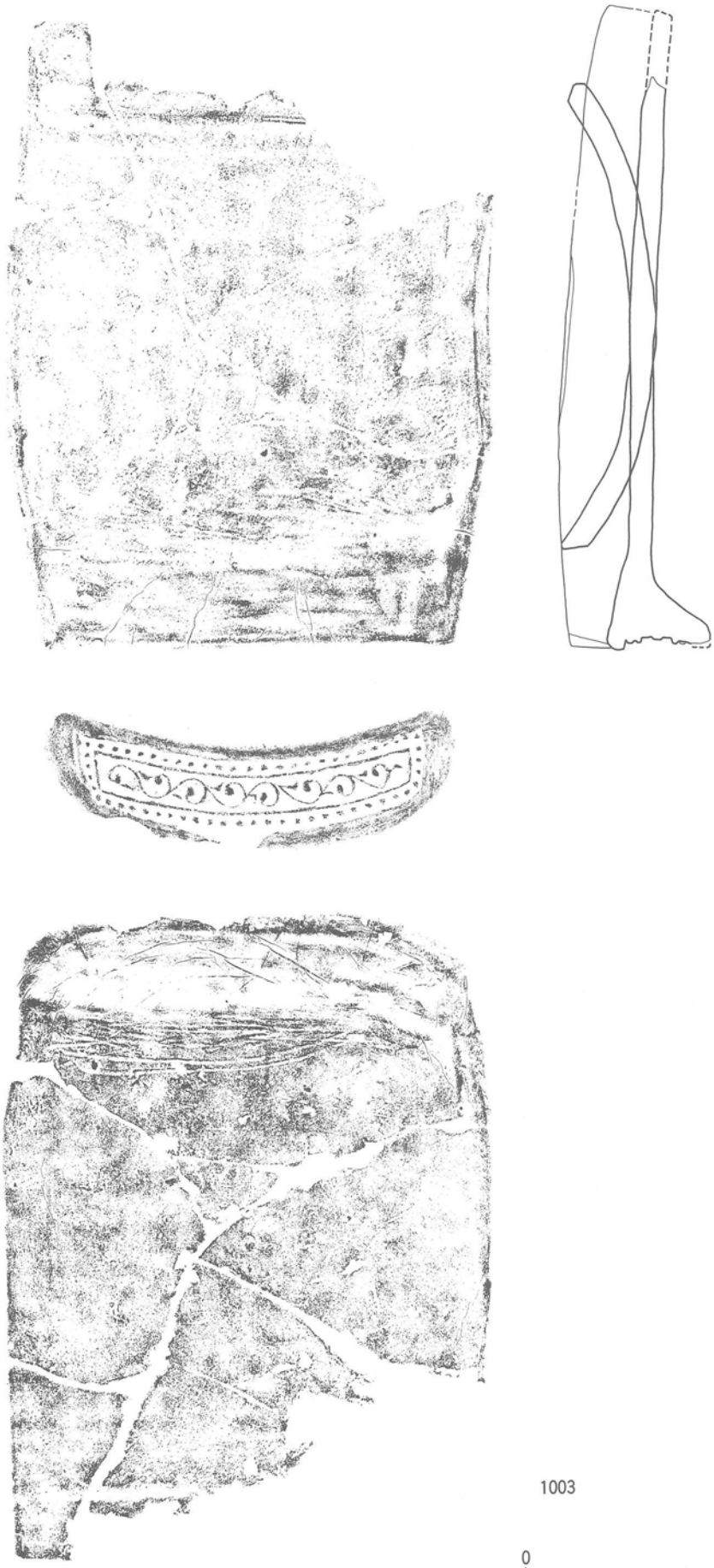
柳谷15号窯　出土瓦 1

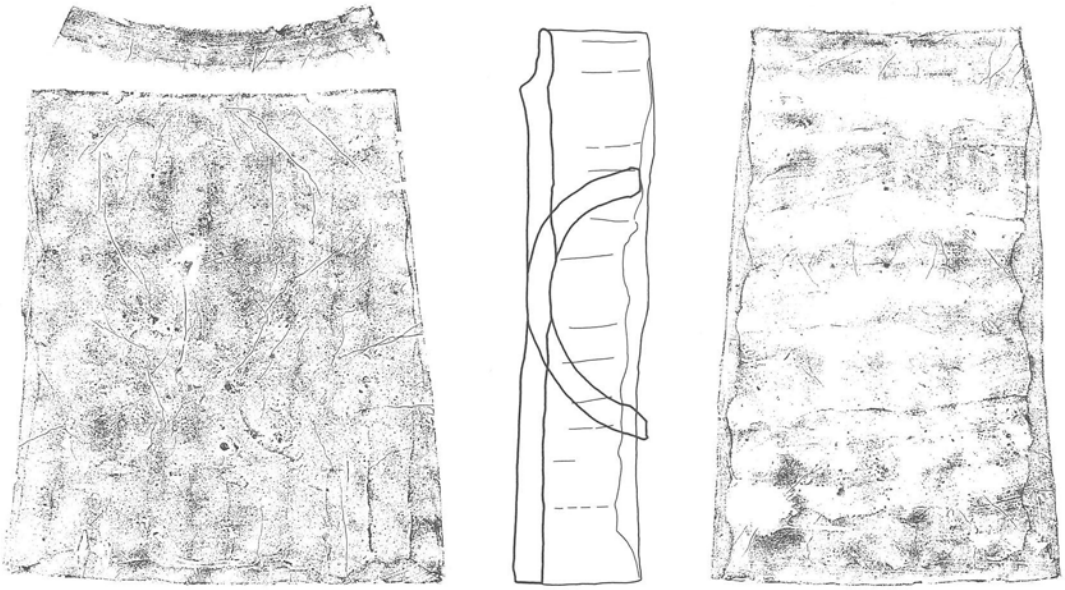


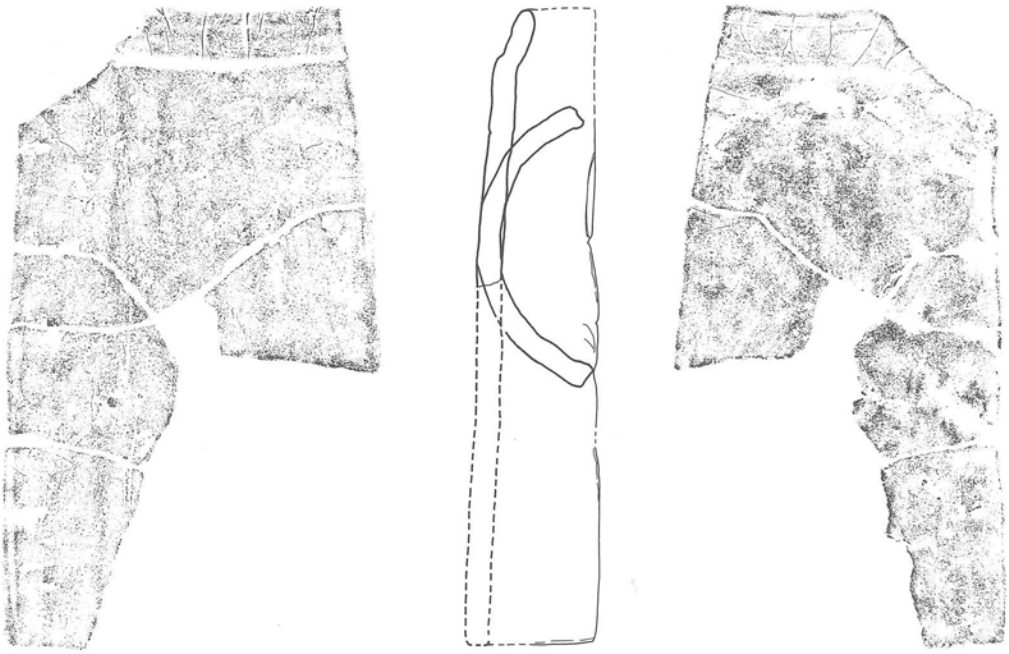

1002
0
20cm
S:1/4

第120図

柳谷15号窯　出土瓦 3





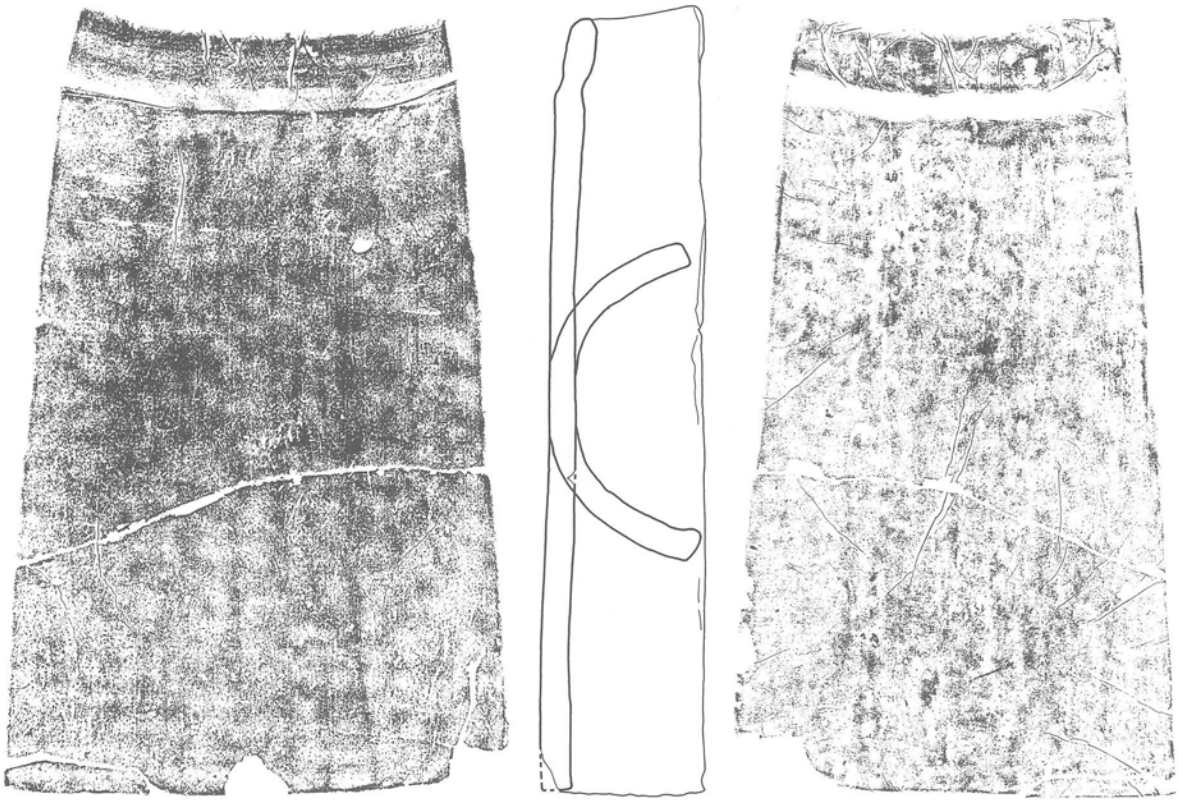


0　20cm
S:1/4

第122図

柳谷15号窯　出土瓦５

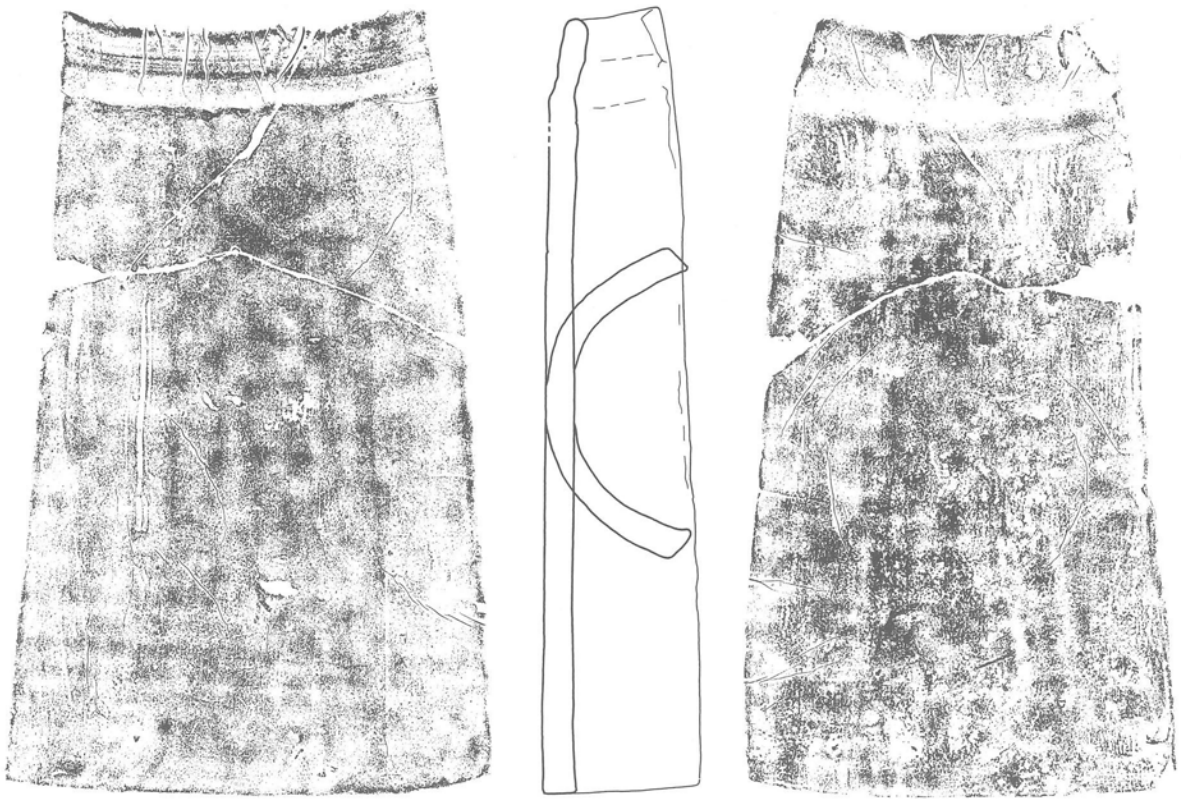
1007



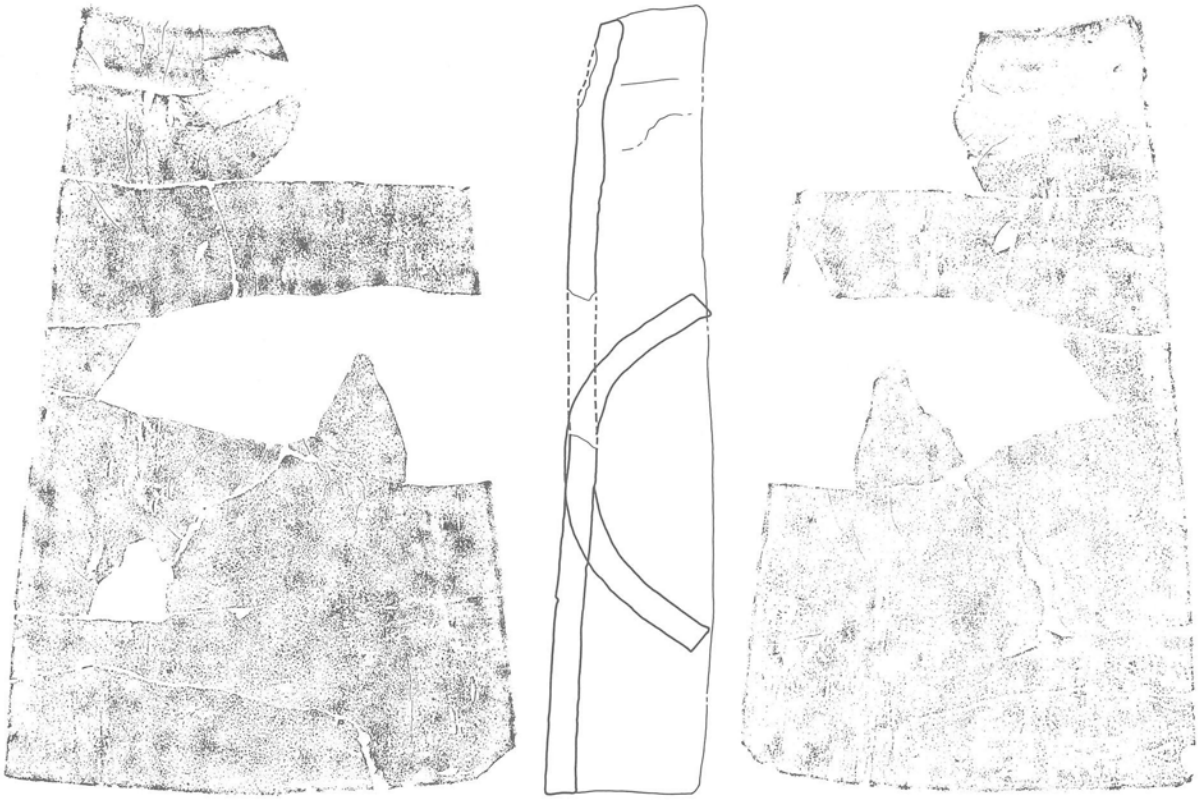
1008

0　20cm

S:1/4



1009

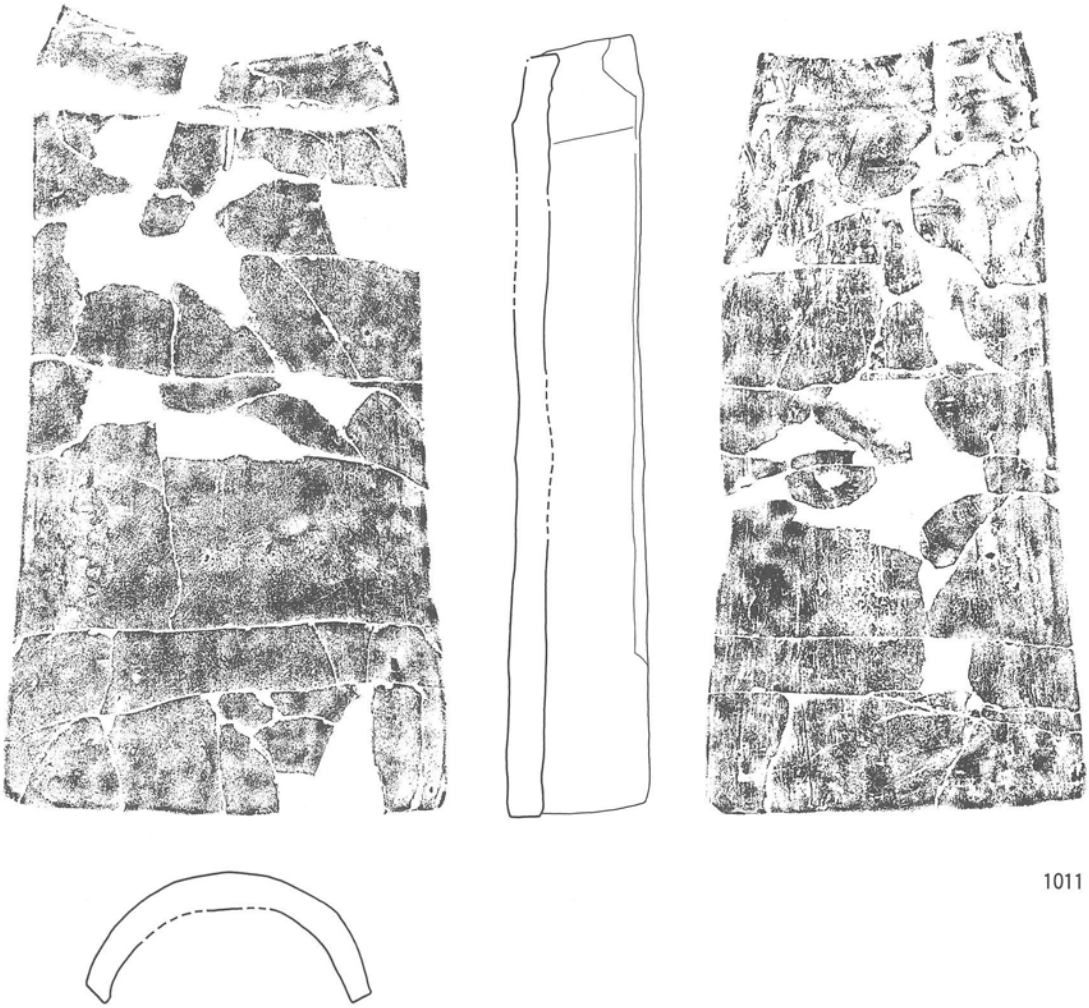


1010

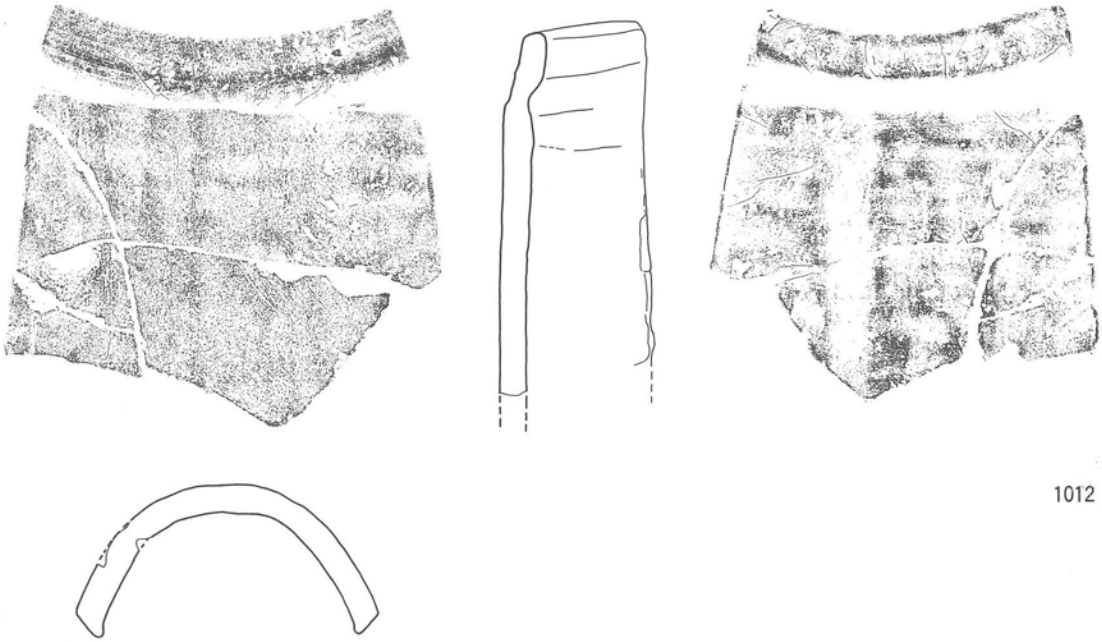
0　20cm
S:1/4

第124図

柳谷15号窯　出土瓦７



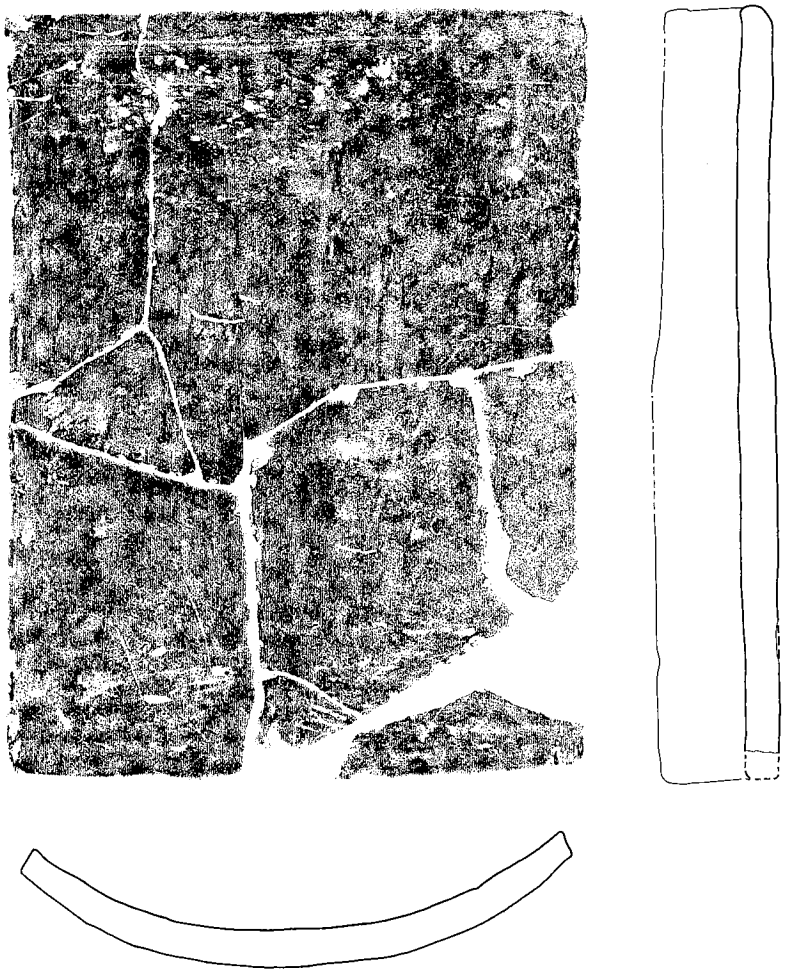
1011

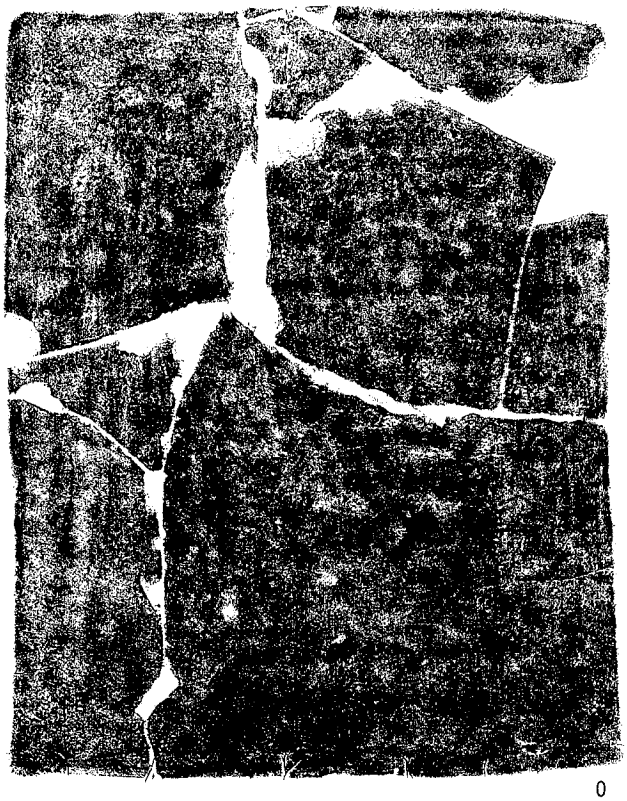


1012

0　20cm

S:1/4



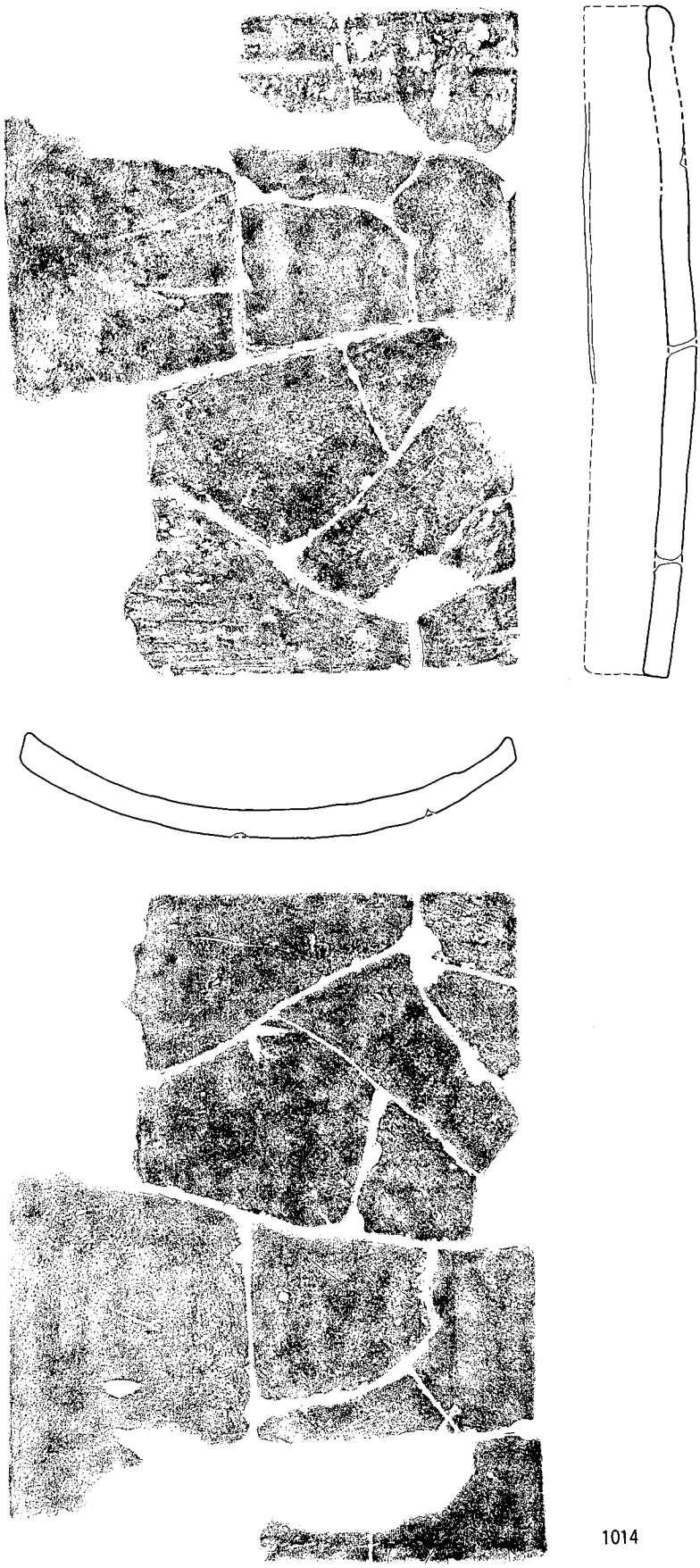


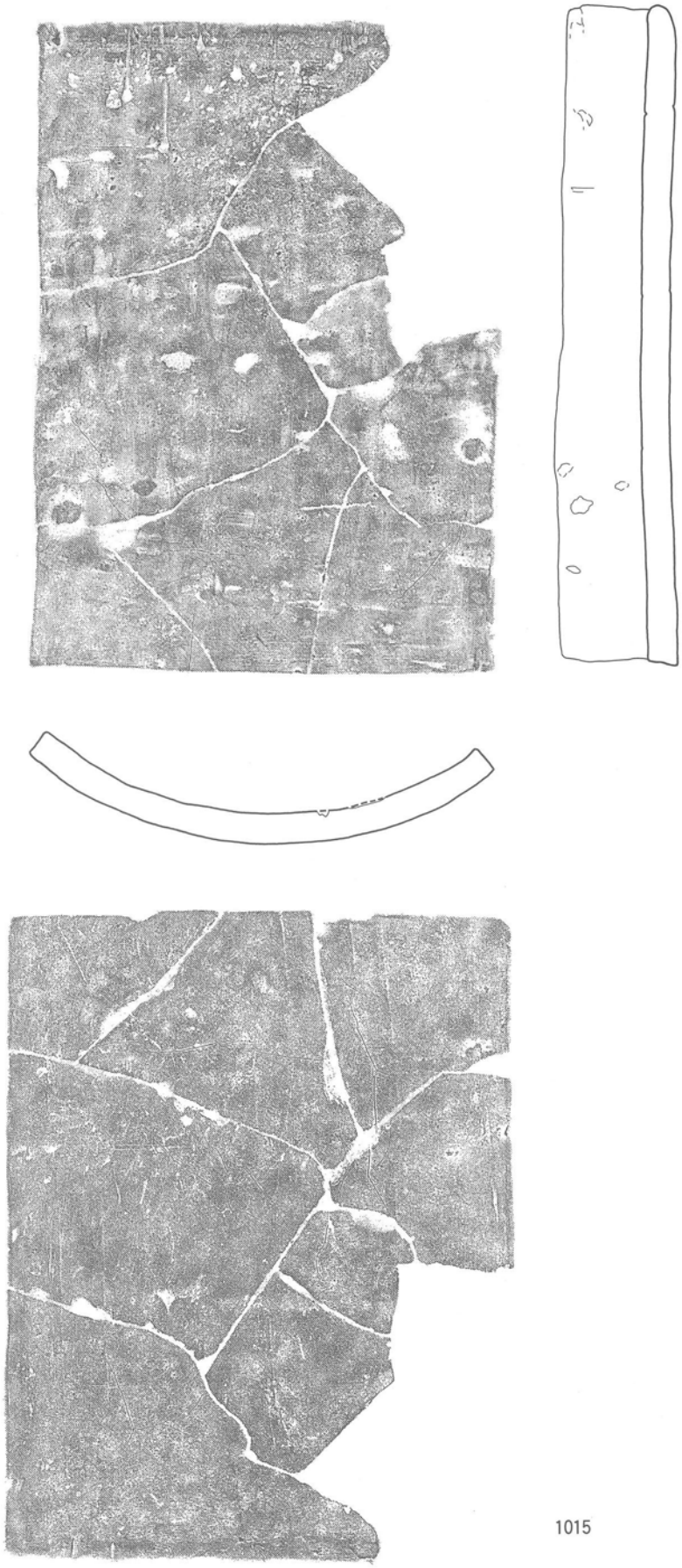
1013

0　20cm
S:1/4

第126図

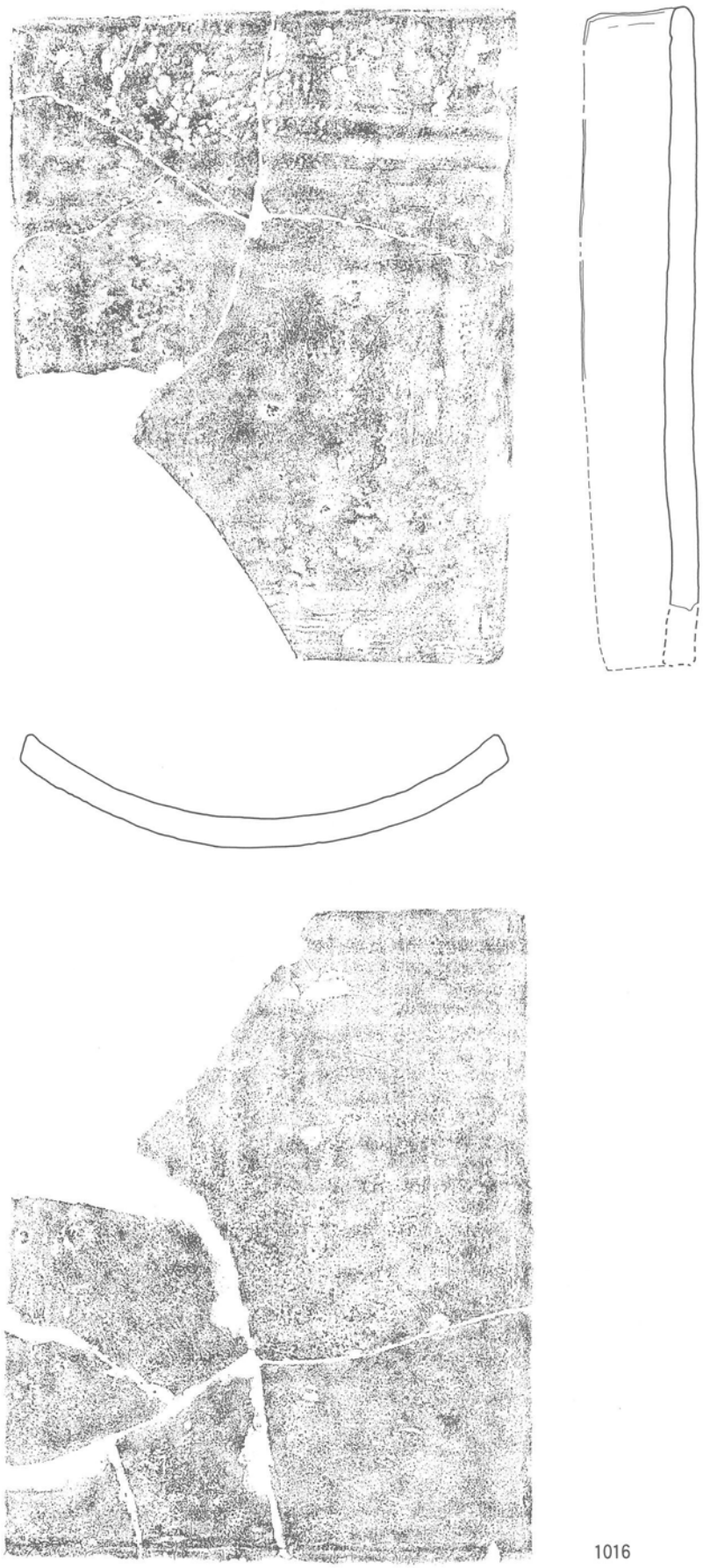
柳谷15号窯　出土瓦 9

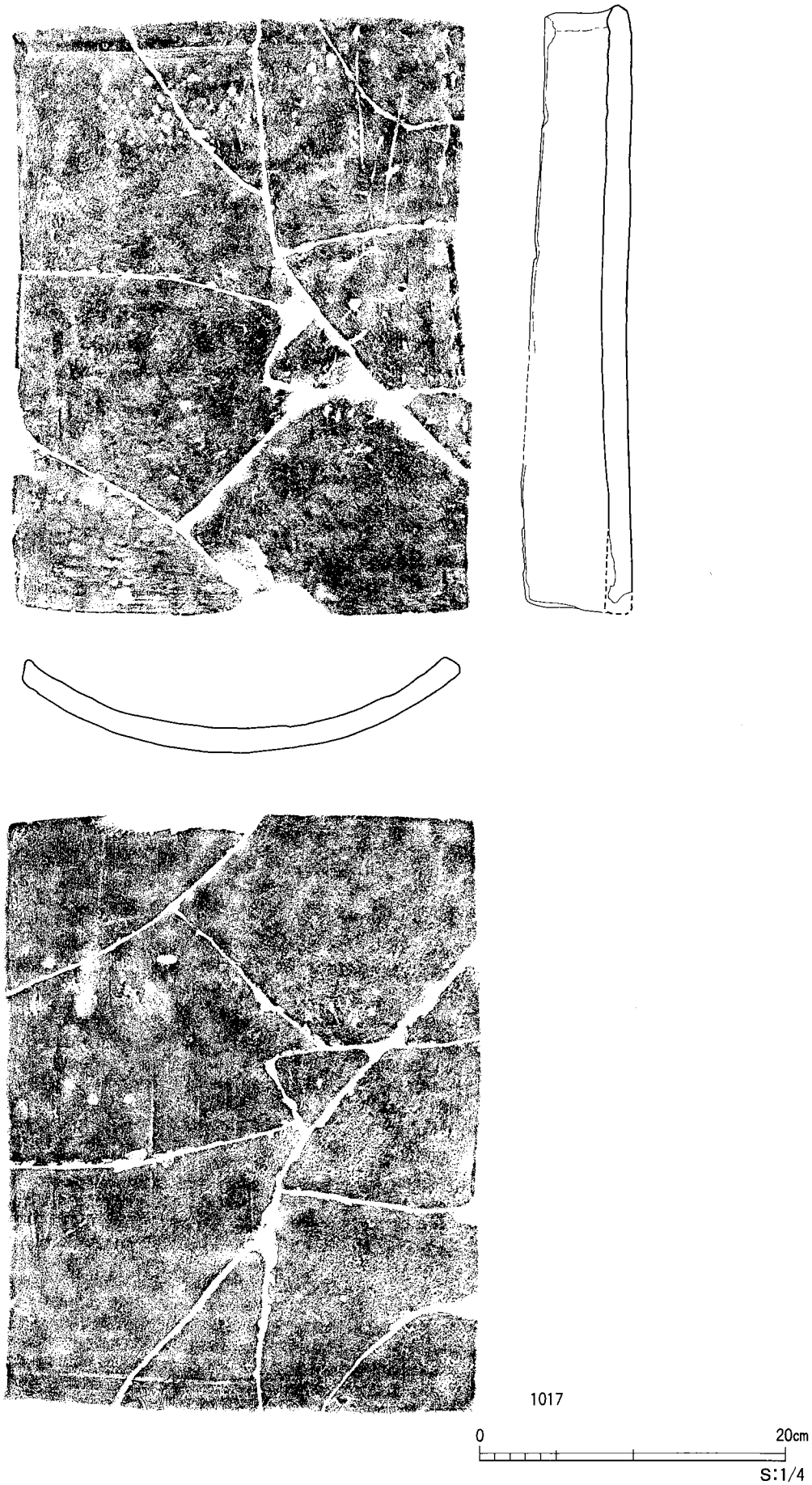



1015
0
20cm
S:1/4

第128図

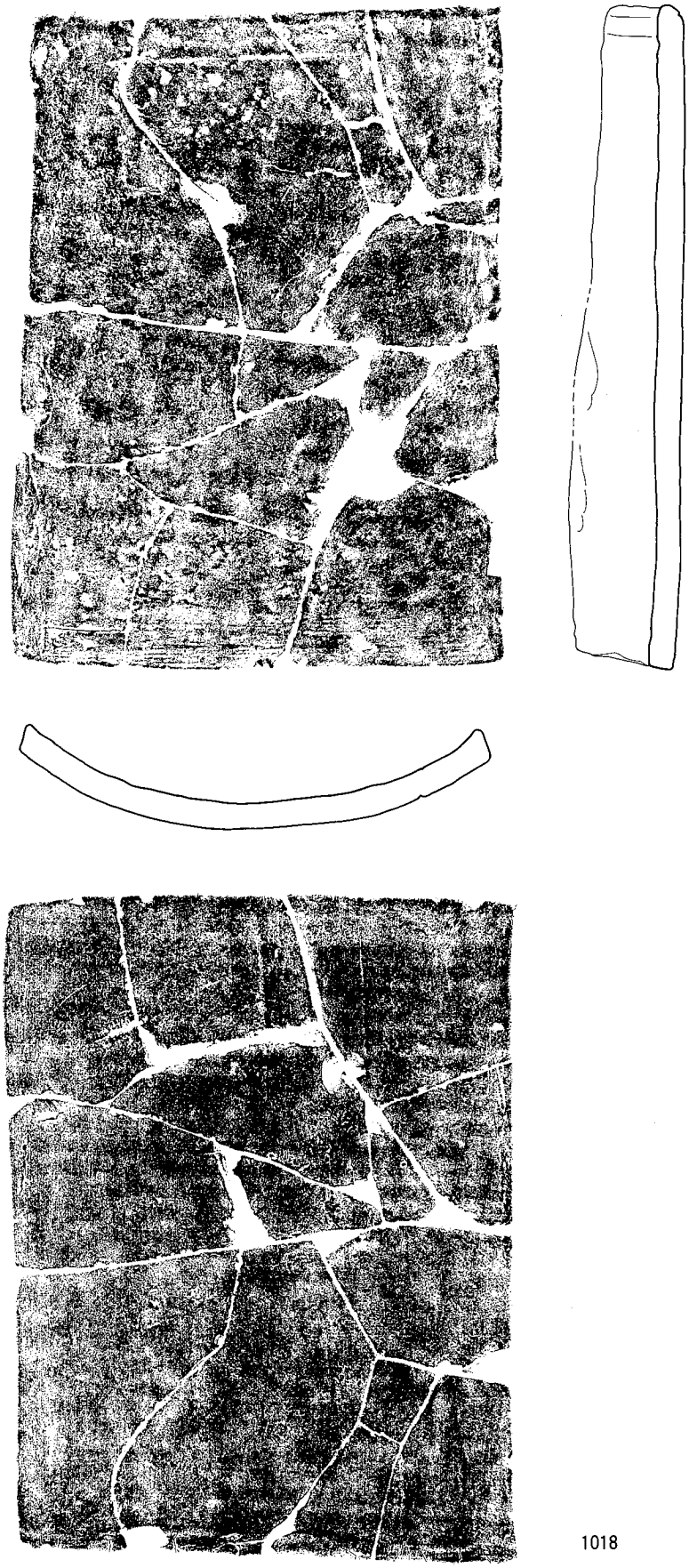
柳谷15号窯　出土瓦11




1017
0
20cm
S:1/4

第130図

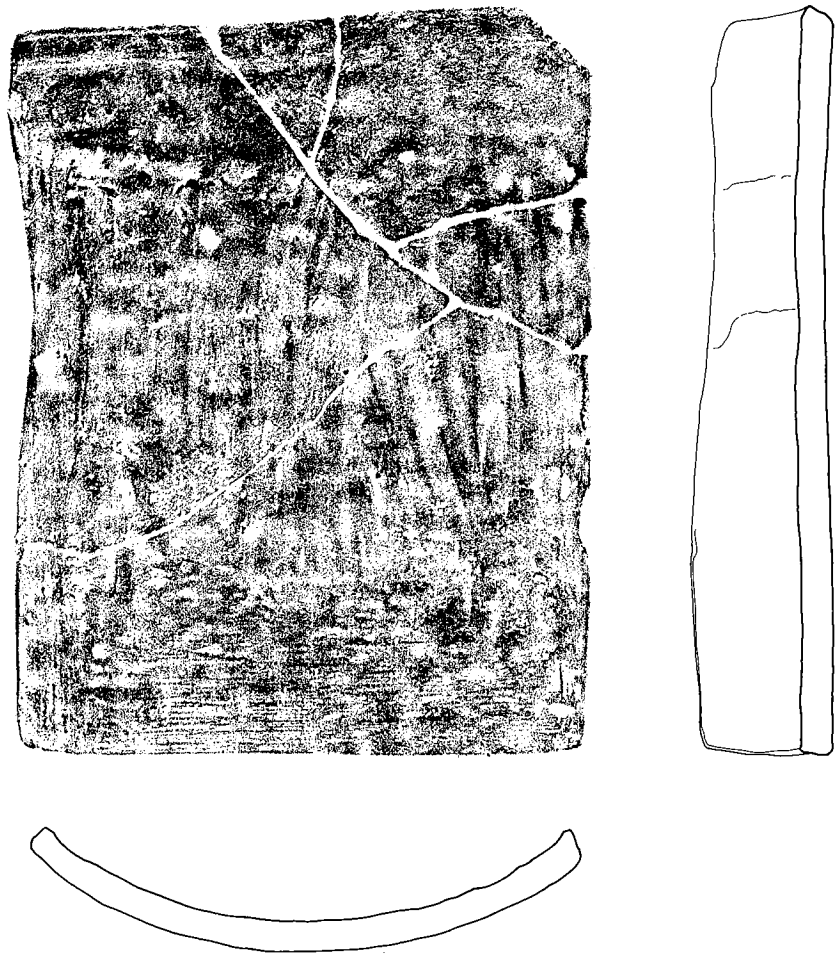
柳谷15号窯　出土瓦13

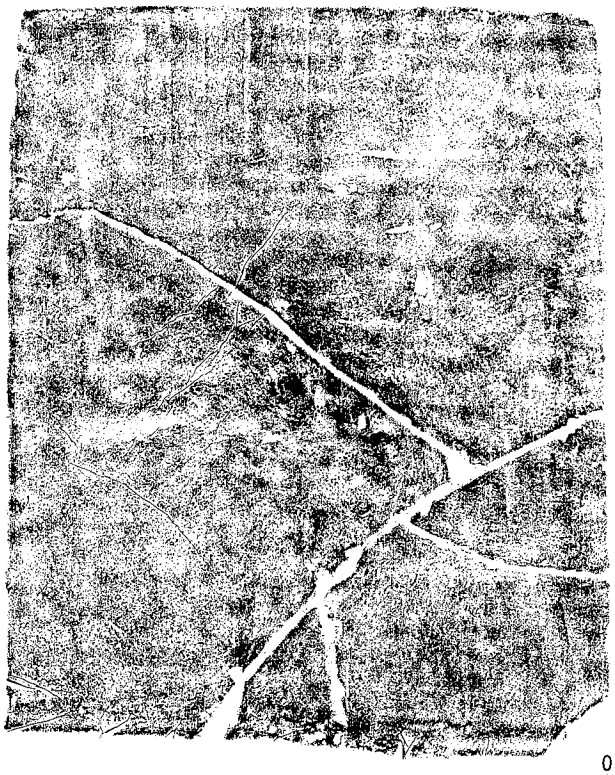


1018

0　20cm

S:1/4



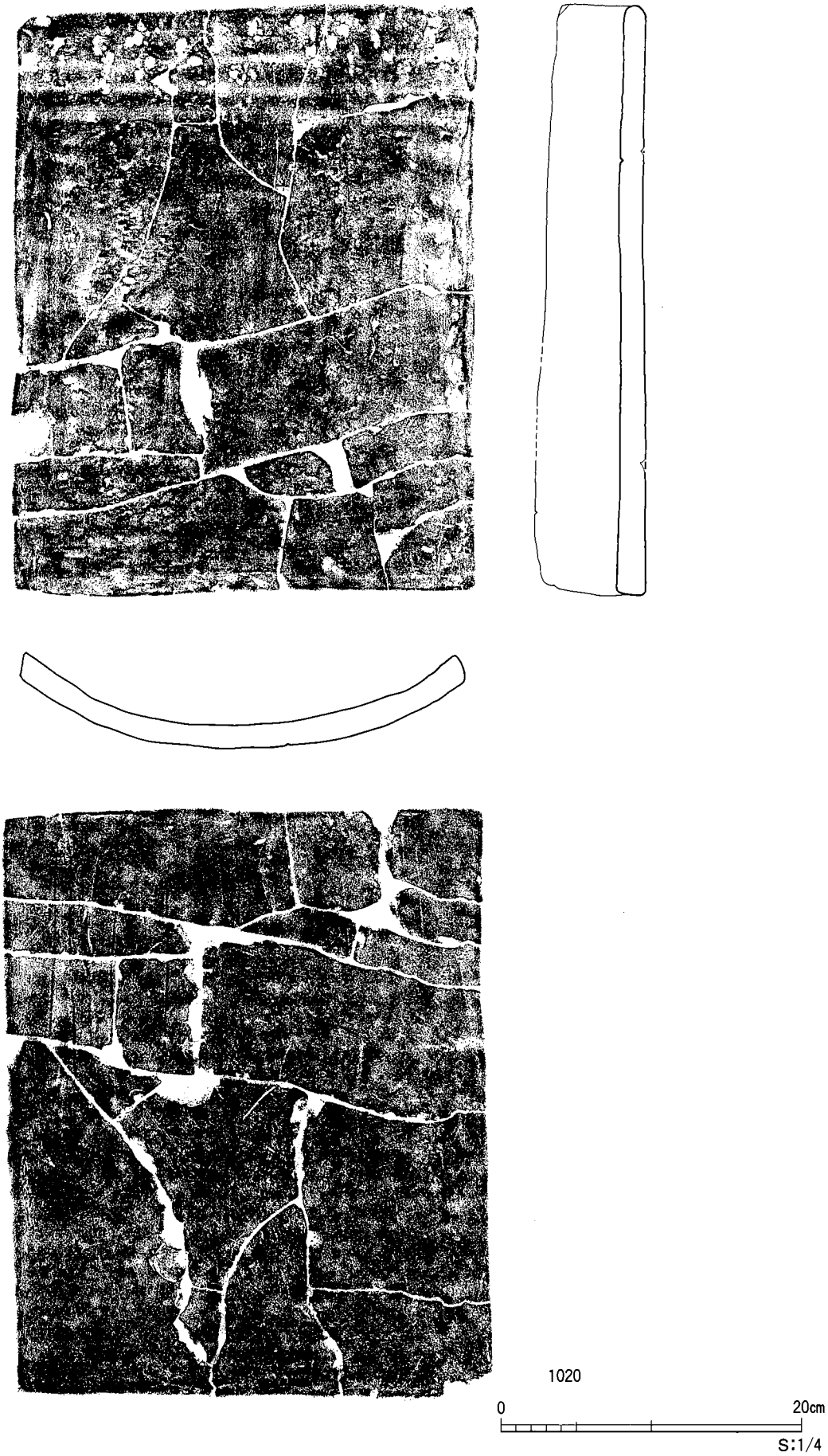


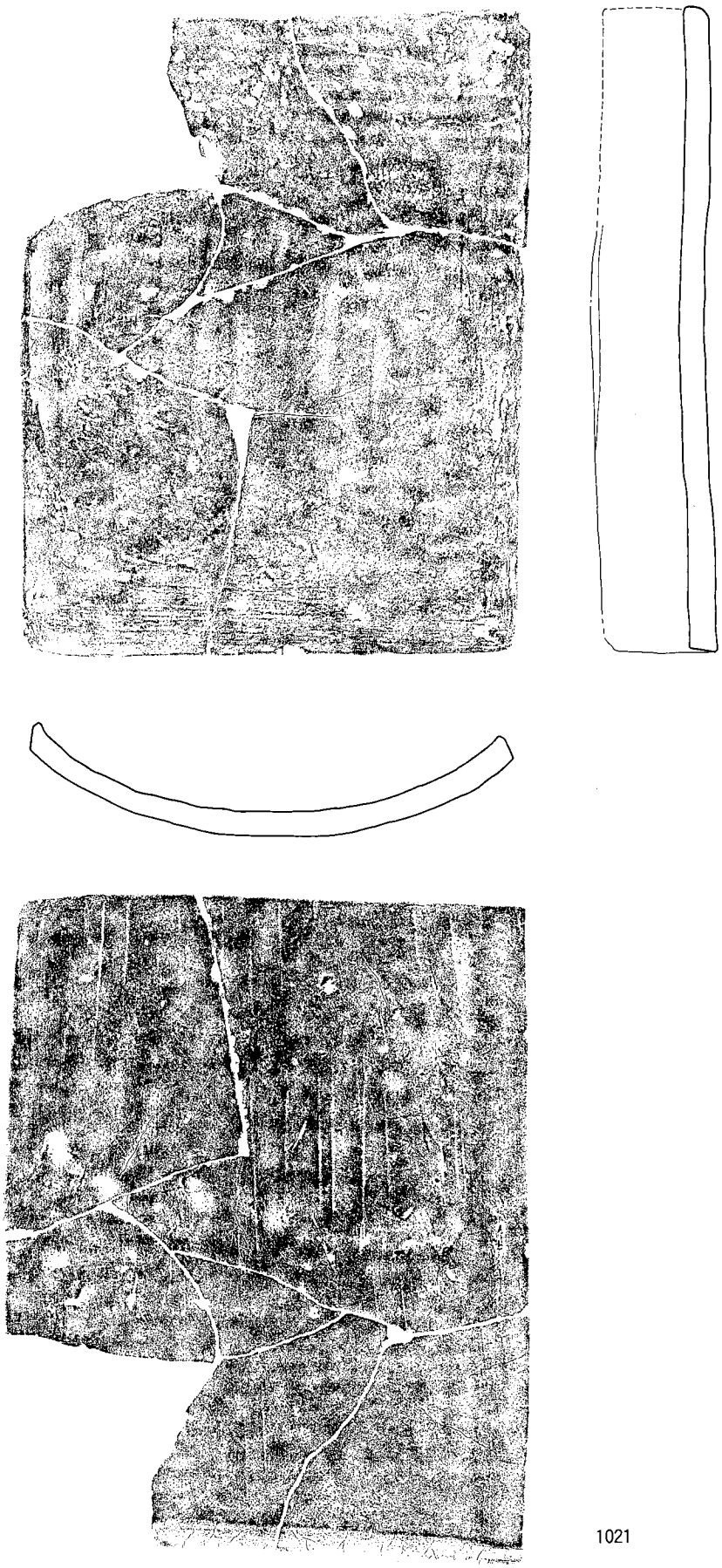
1019

0　20cm
S:1/4

第132図

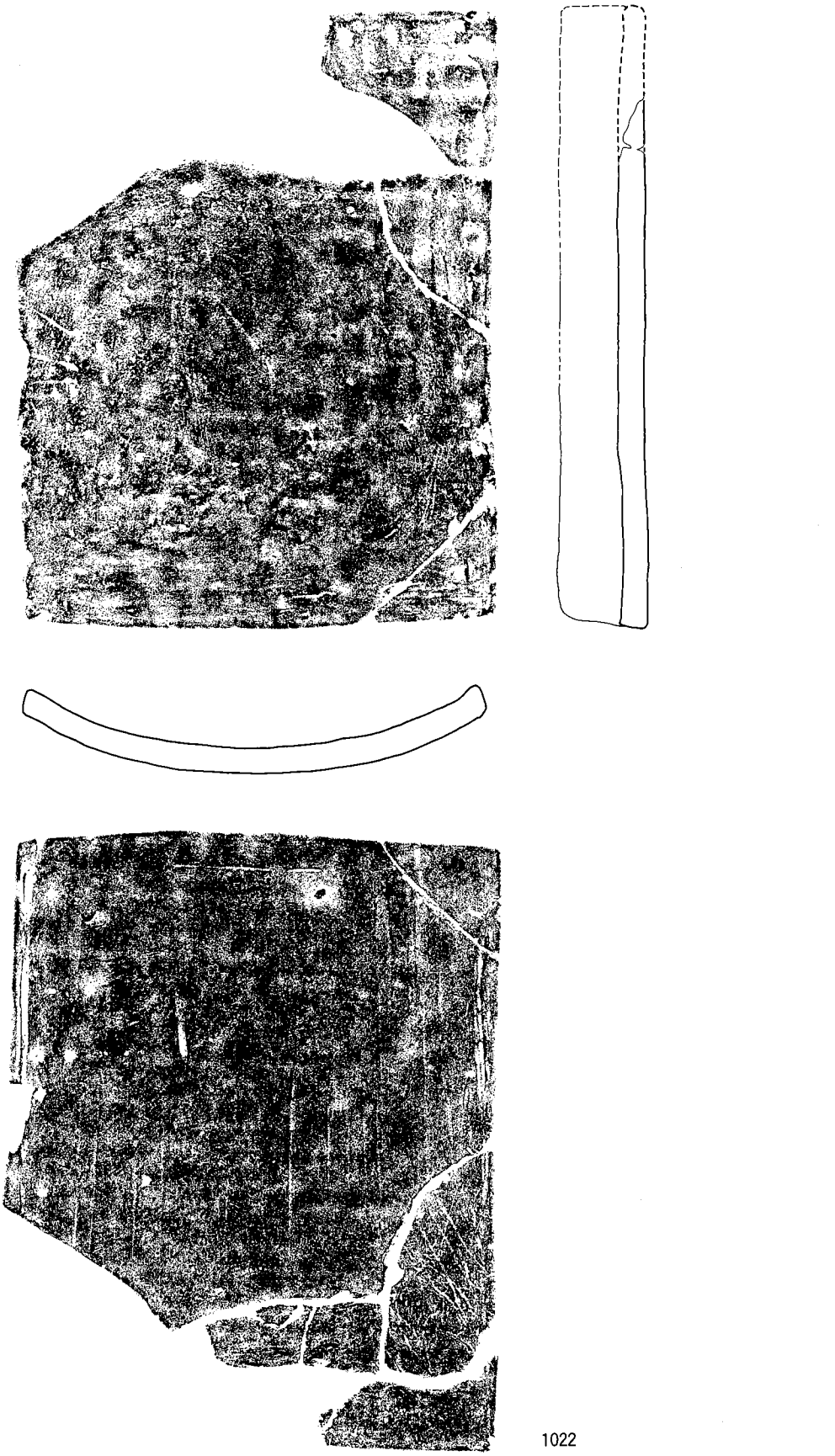
柳谷15号窯　出土瓦15

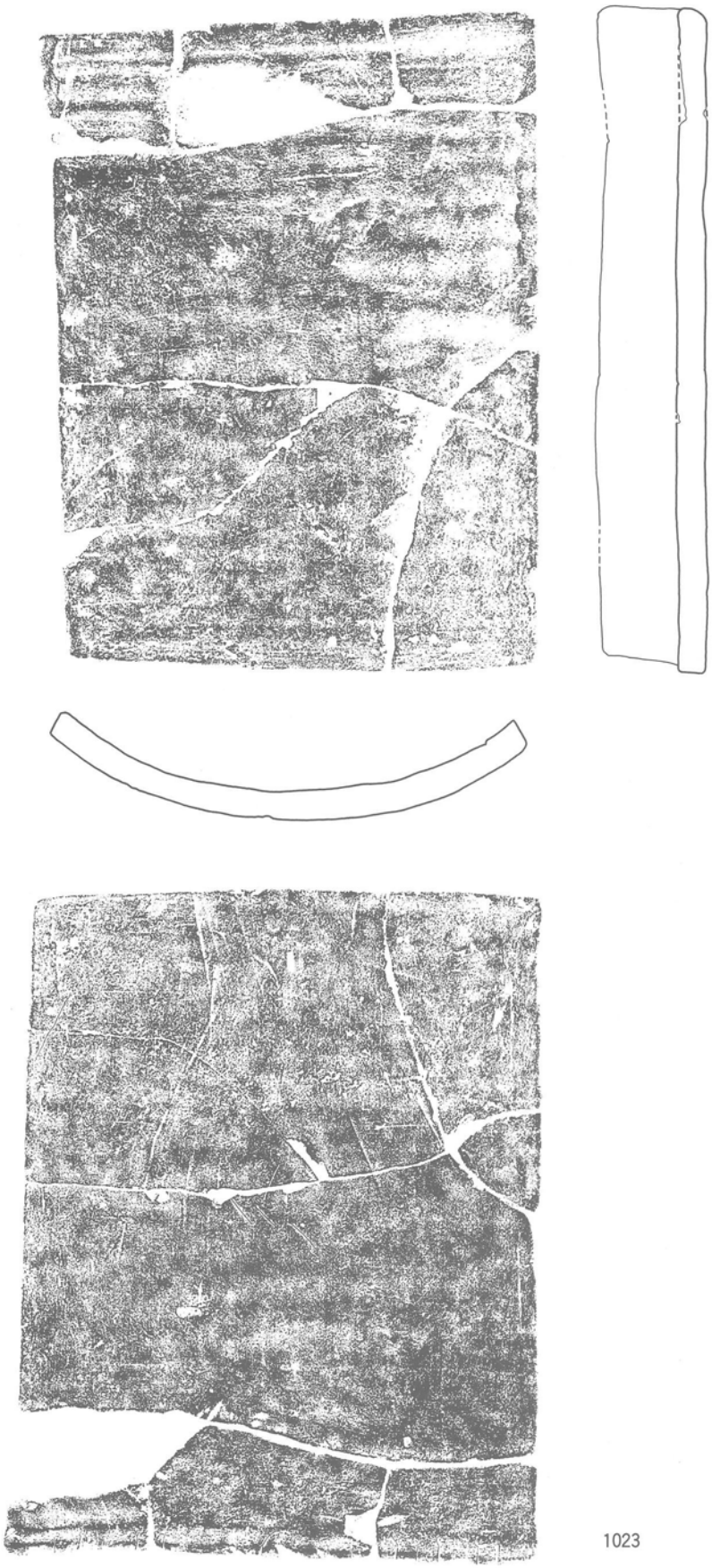



1021
0
20cm
S:1/4

第134図

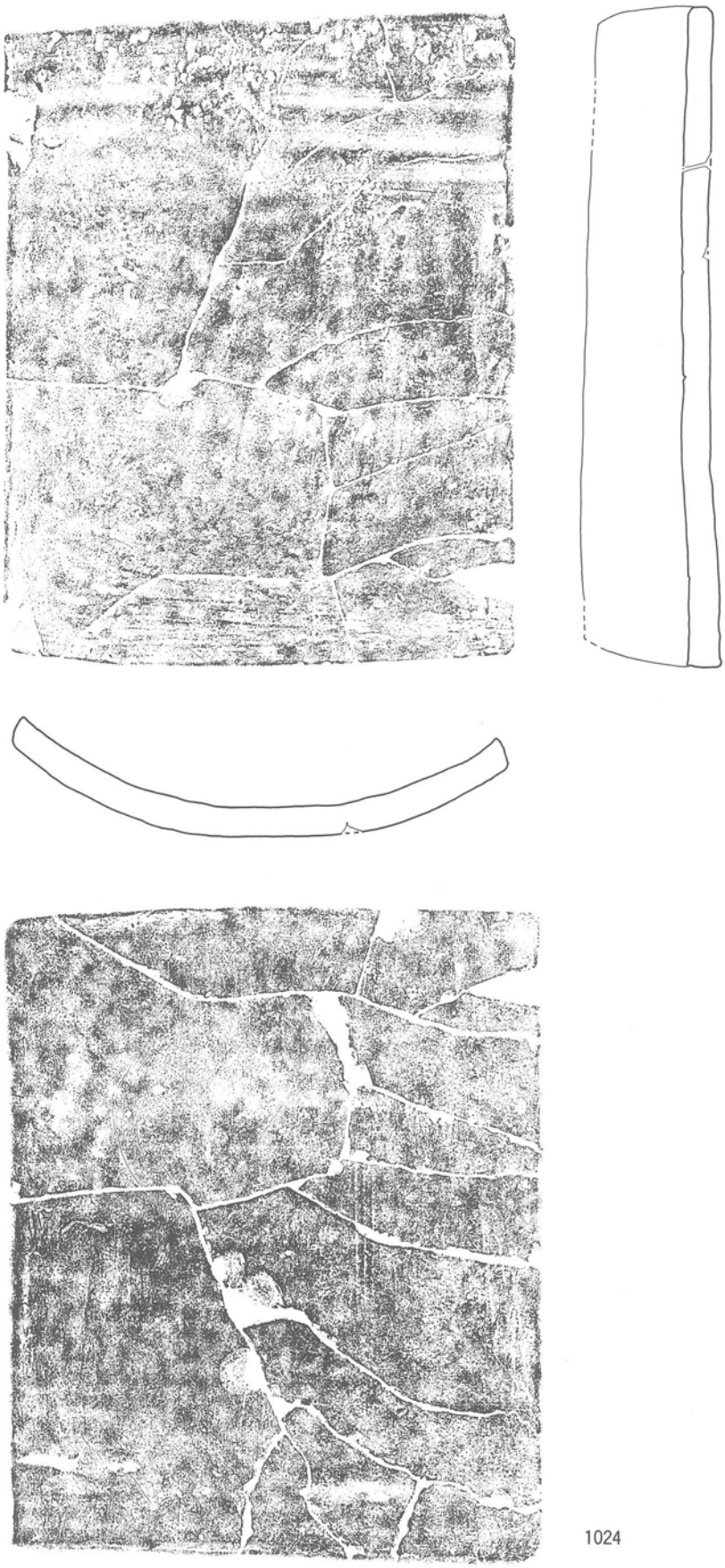
柳谷15号窯　出土瓦17

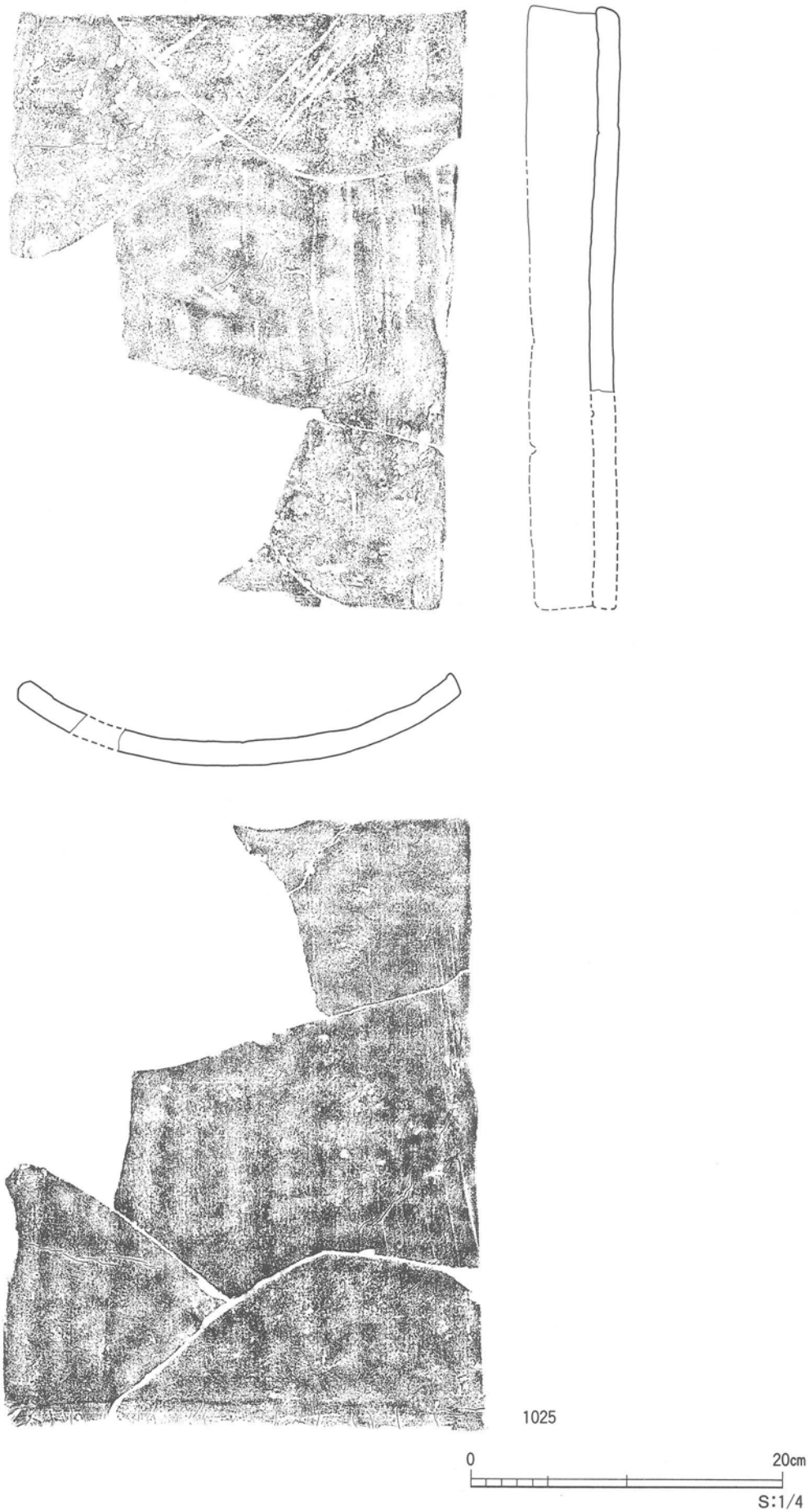



1023
0
20cm
S:1/4

第136図

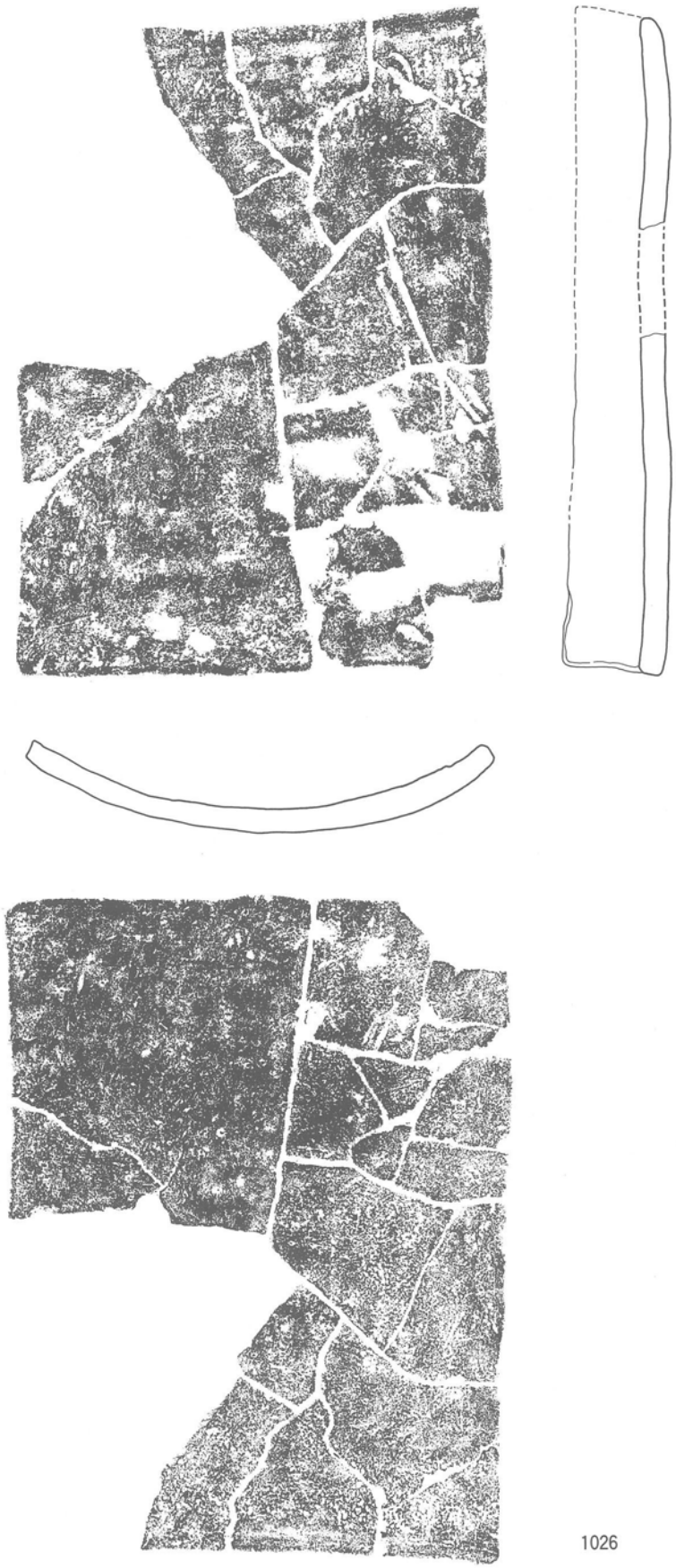
柳谷15号窯　出土瓦19

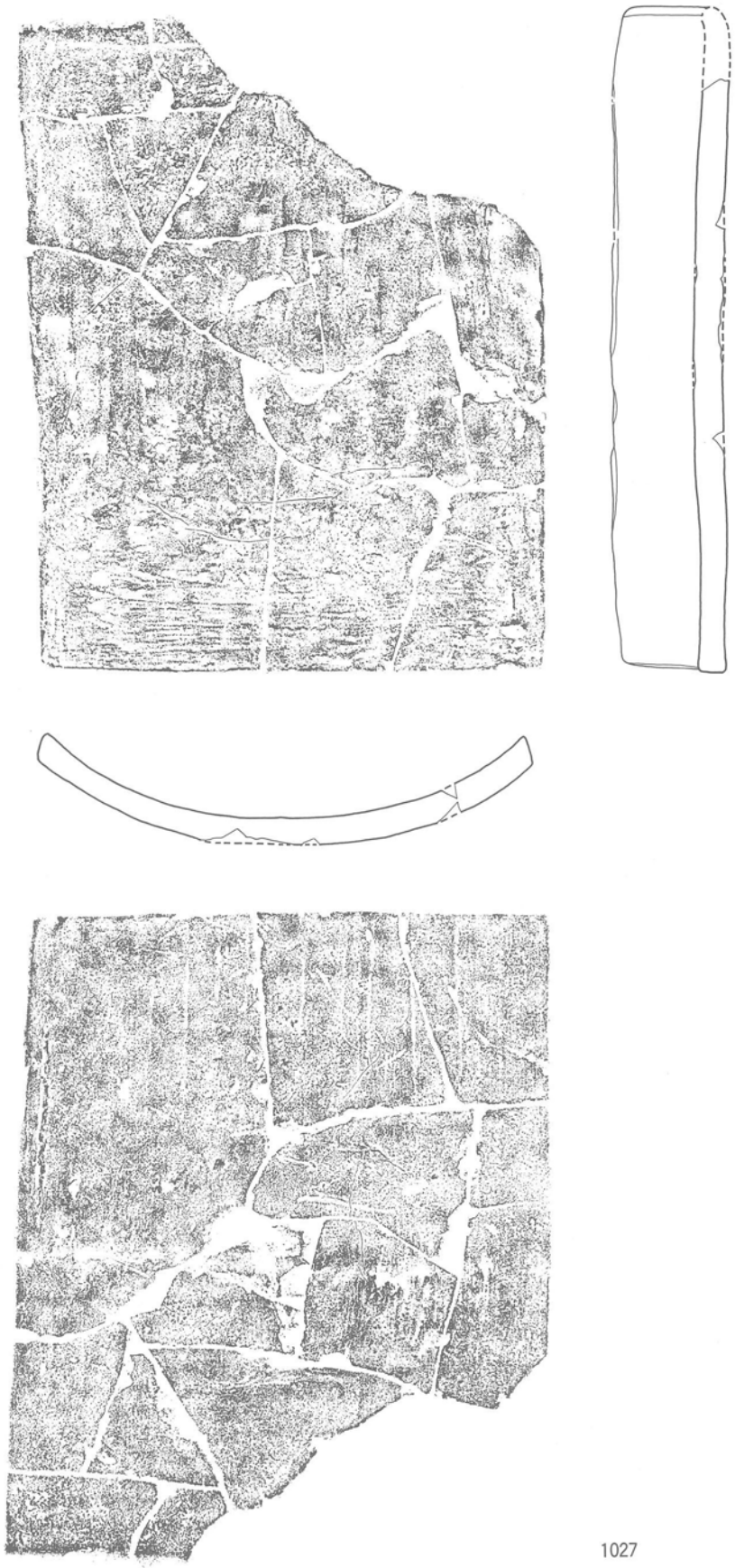



1025
0
20cm
S:1/4

第138図

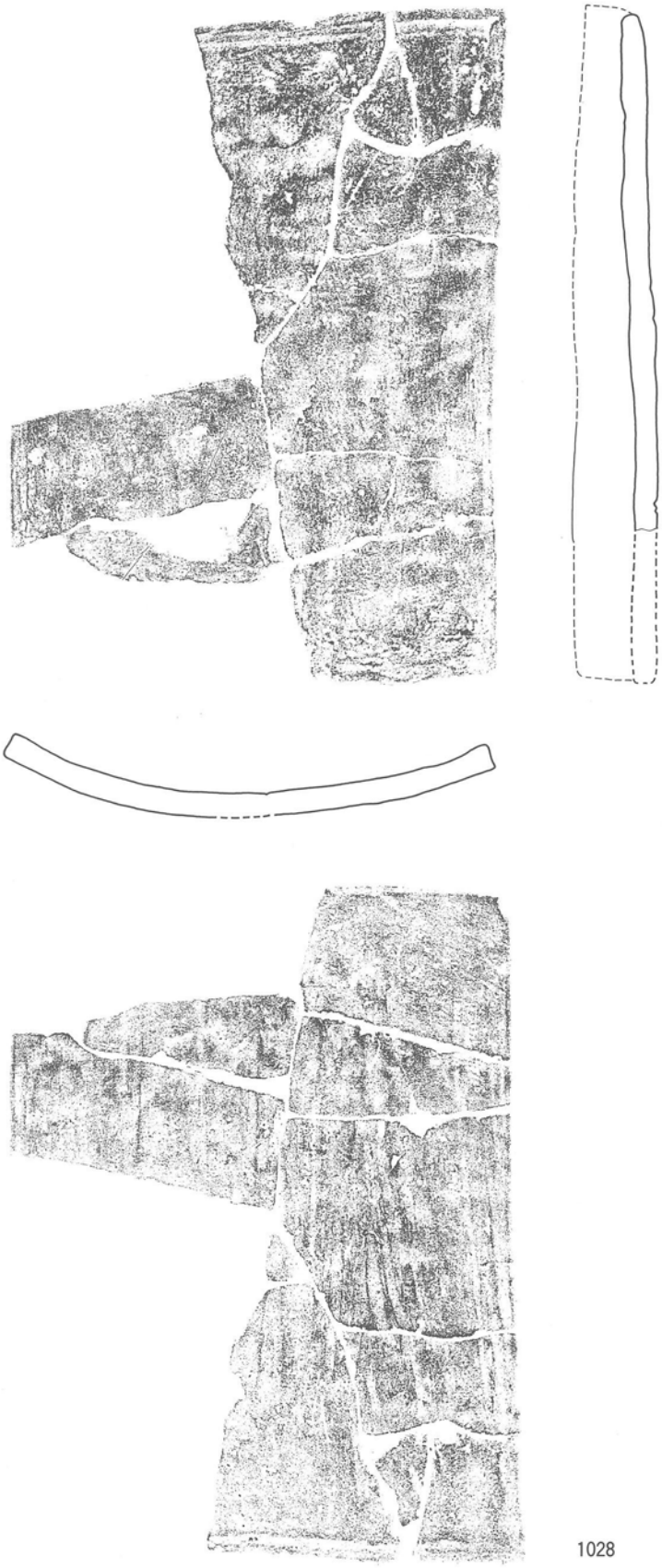
柳谷15号窯　出土瓦21




1027
0
20cm
S:1/4

第140図

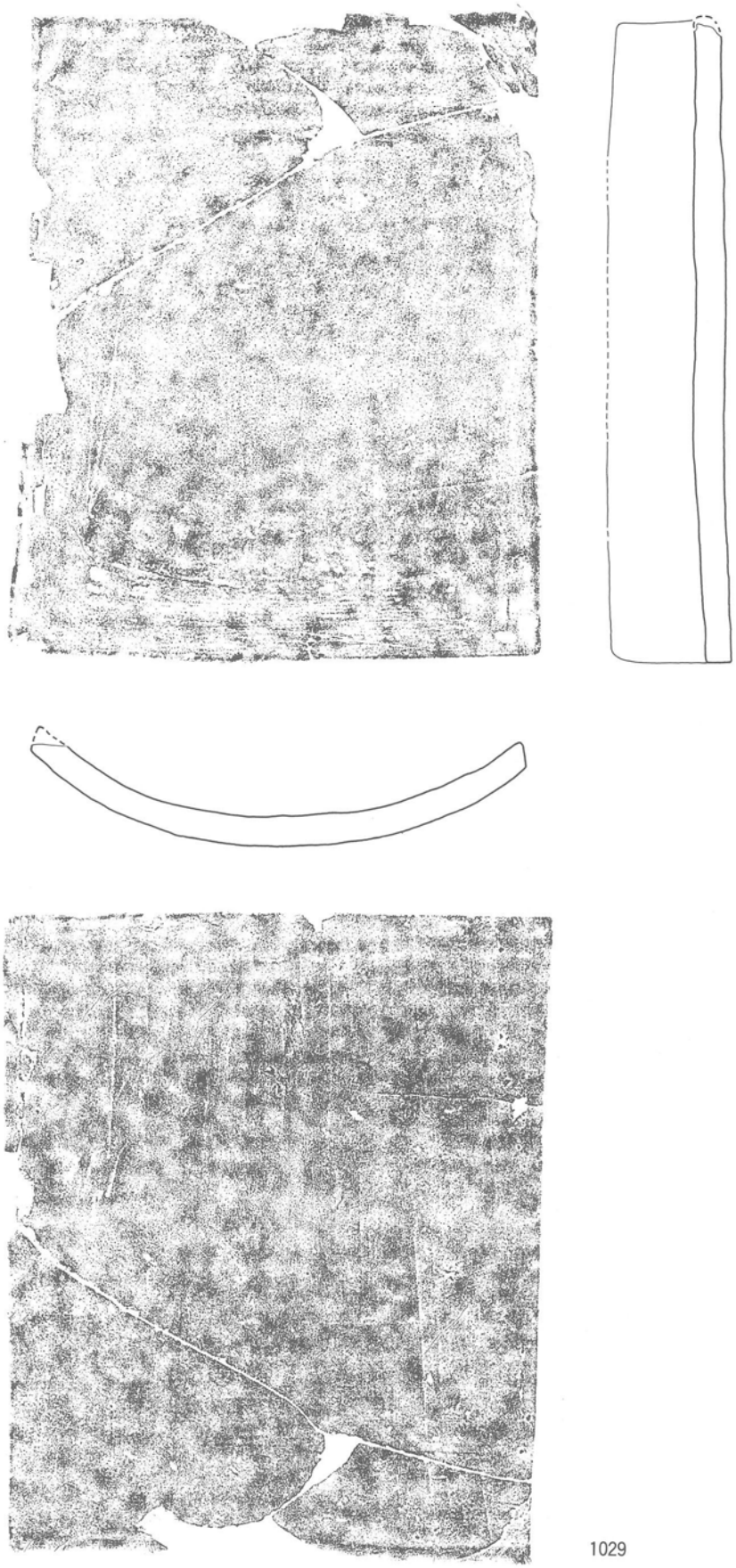
柳谷15号窯　出土瓦23



1028

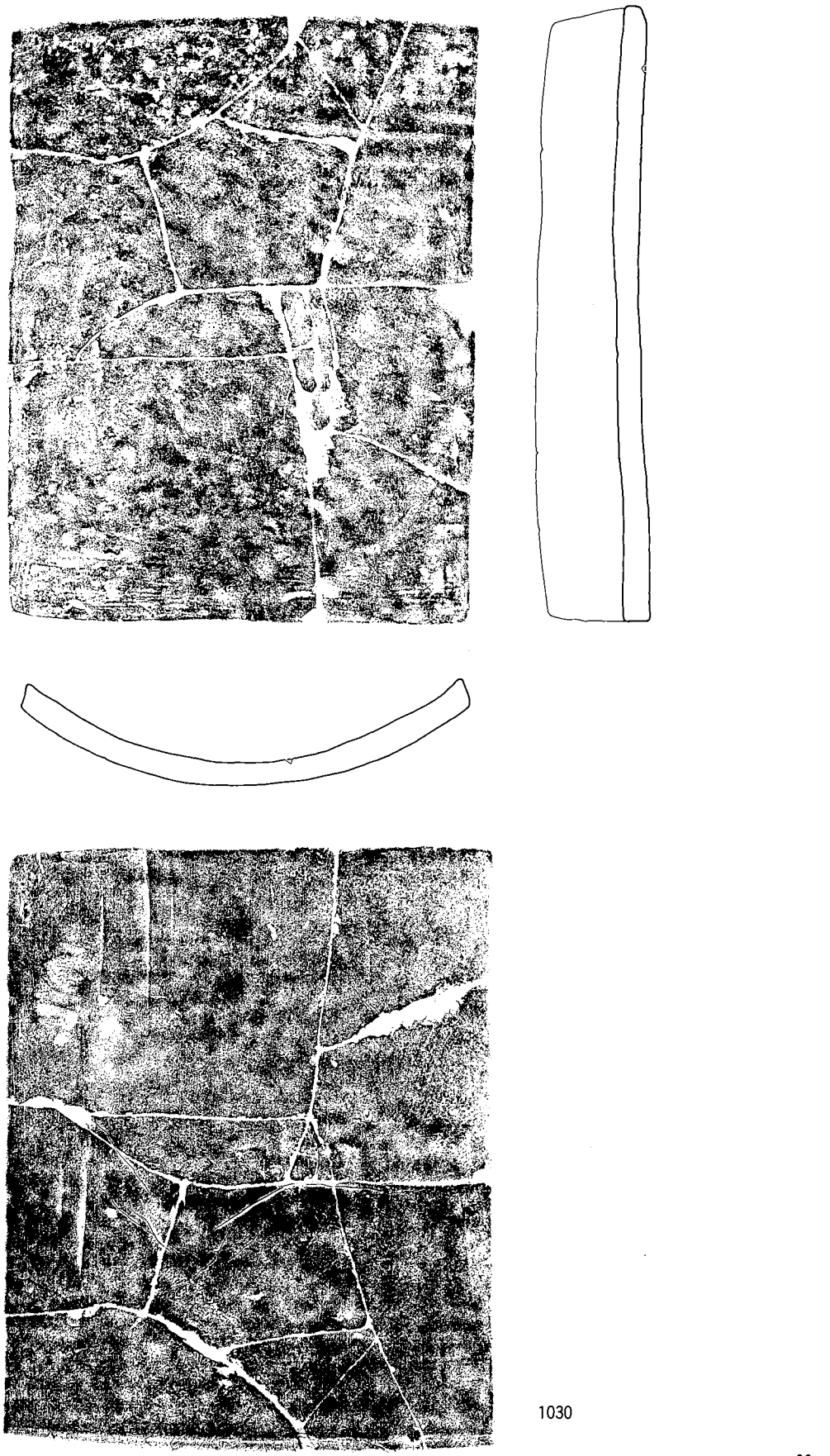
0　20cm

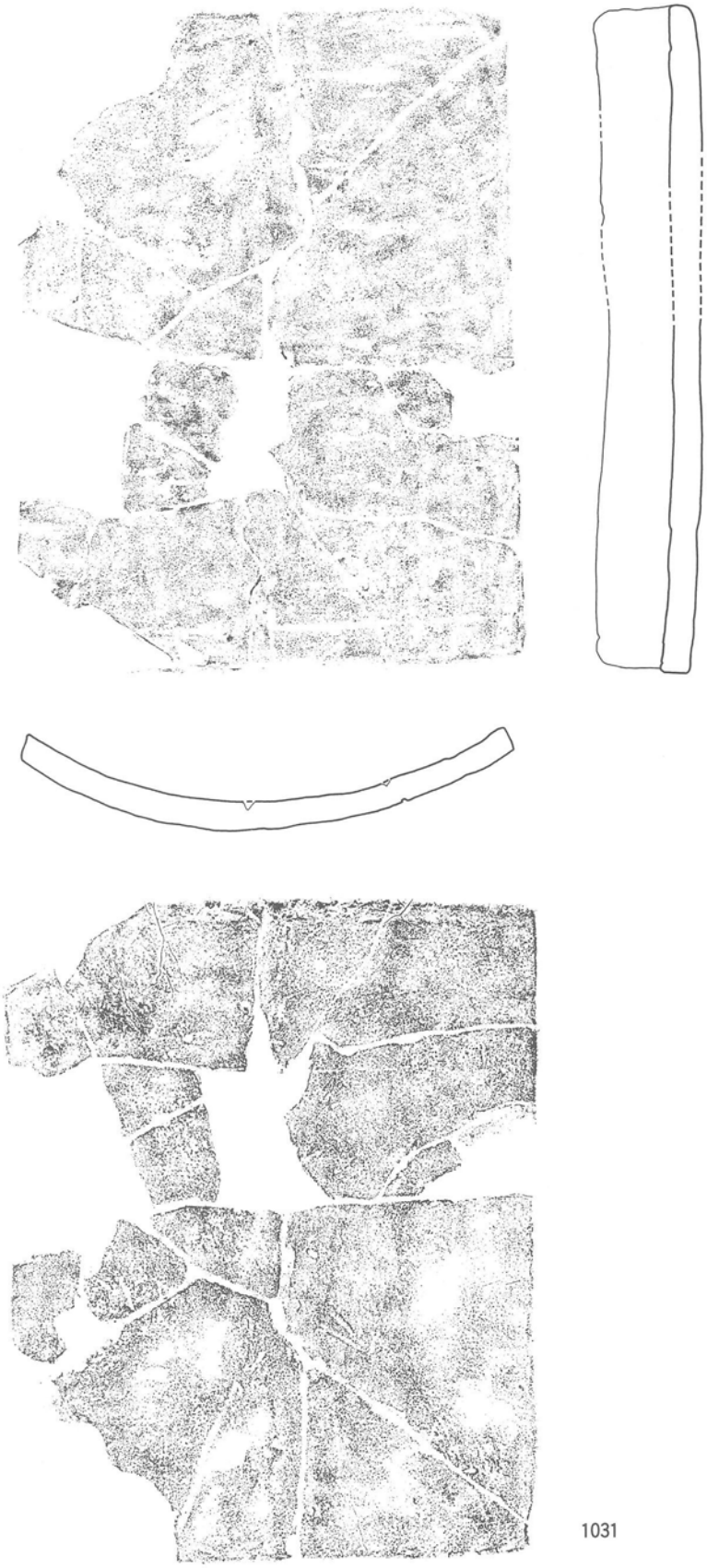
S:1/4


1029
0
20cm
S:1/4

第142図

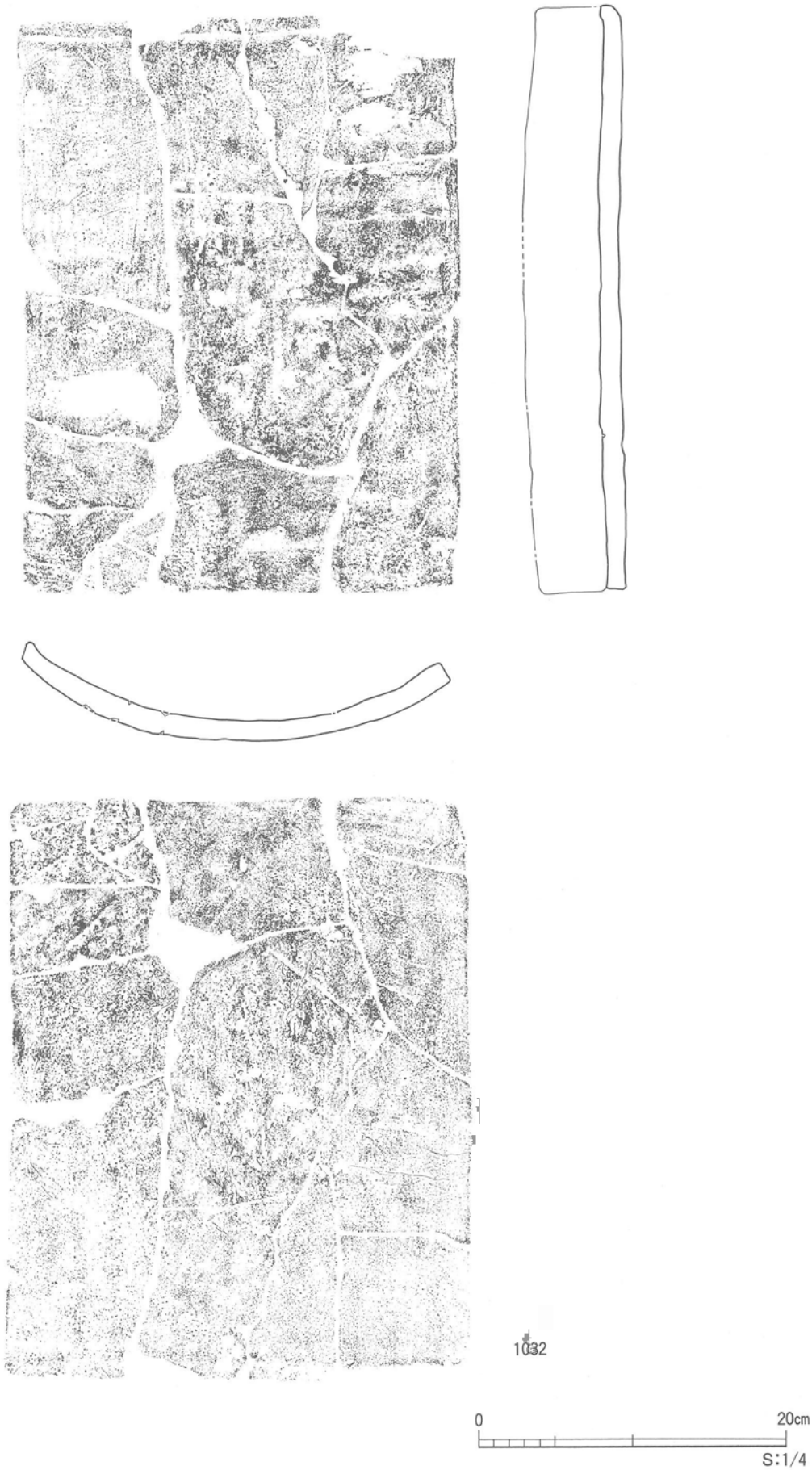
柳谷15号窯　出土瓦25

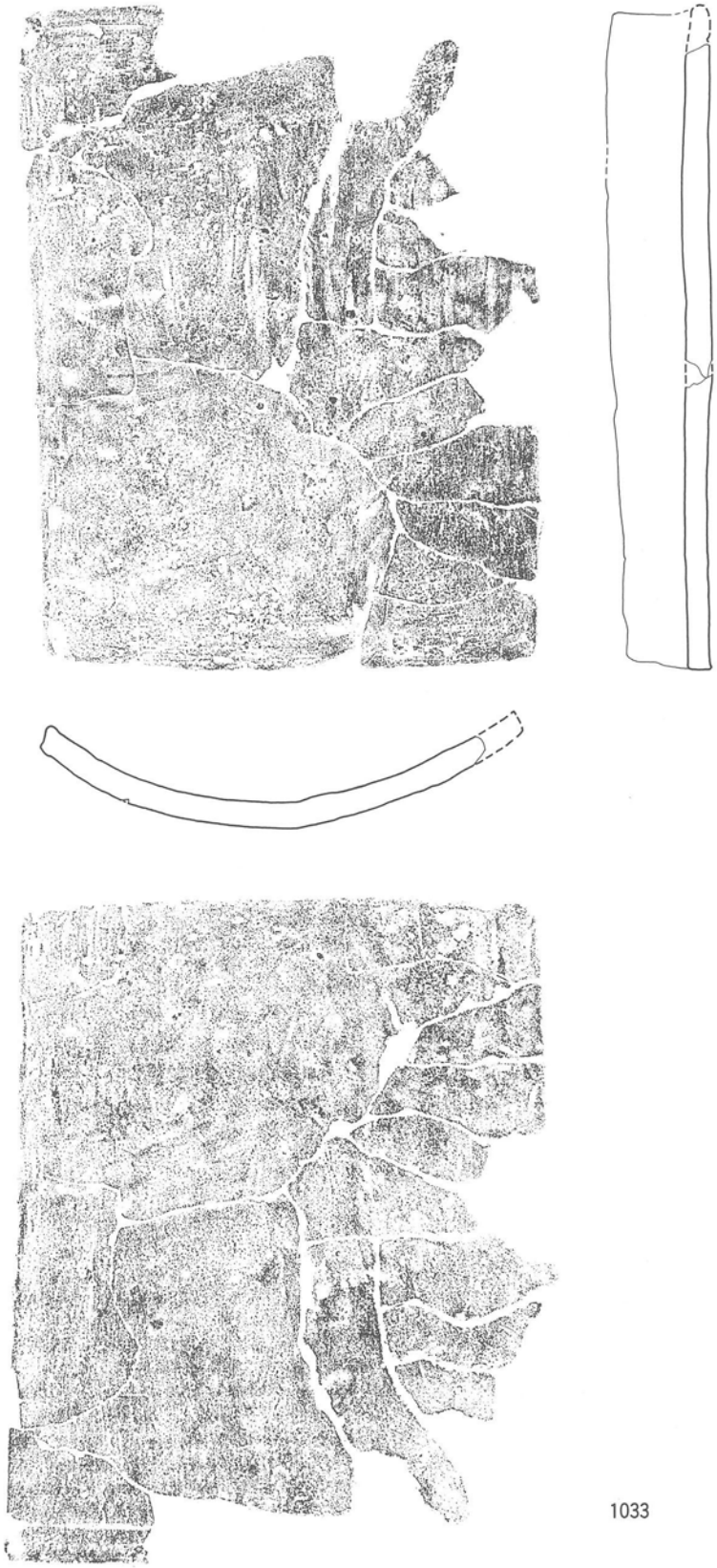



1031
0
20cm
S:1/4

第144図

柳谷15号窯　出土瓦27

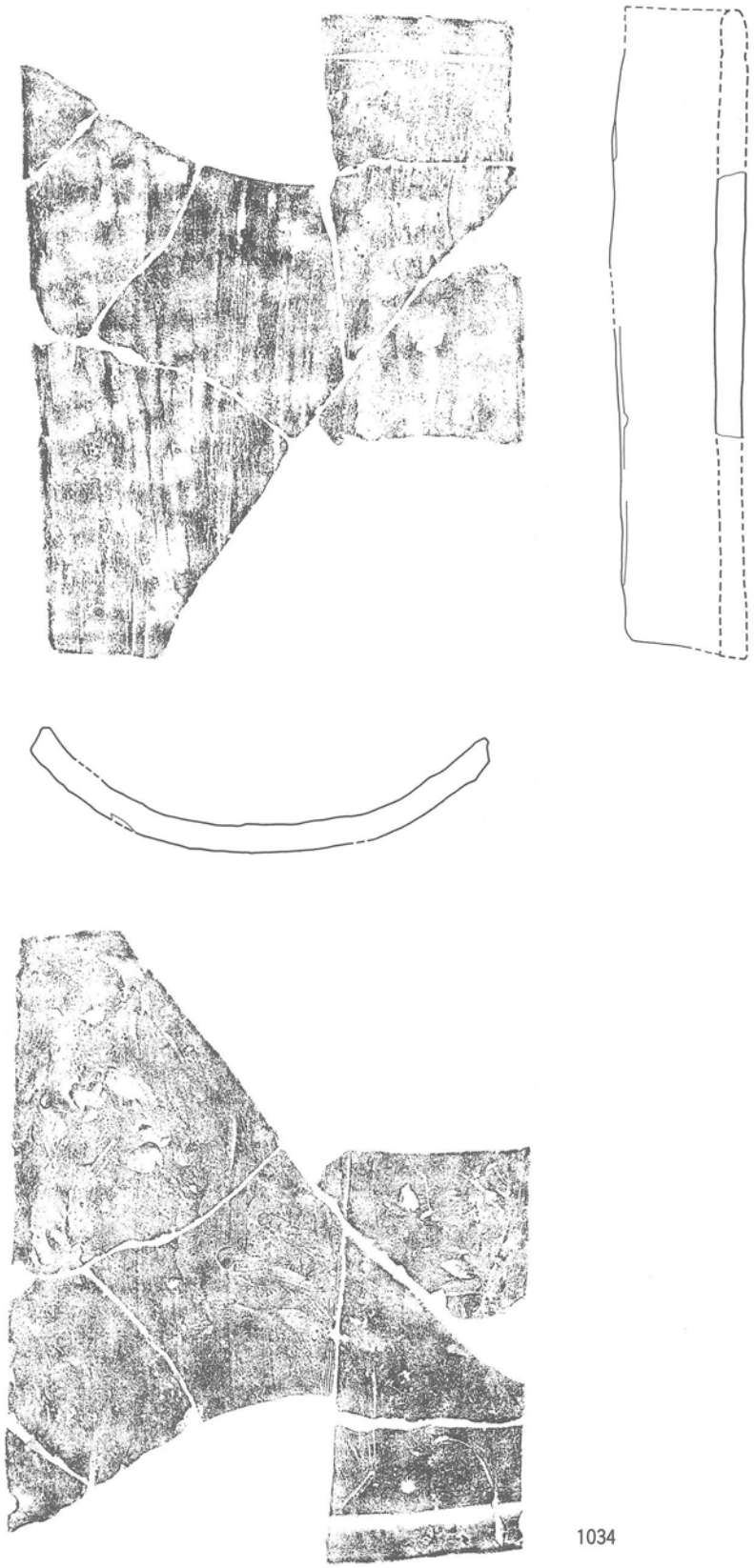


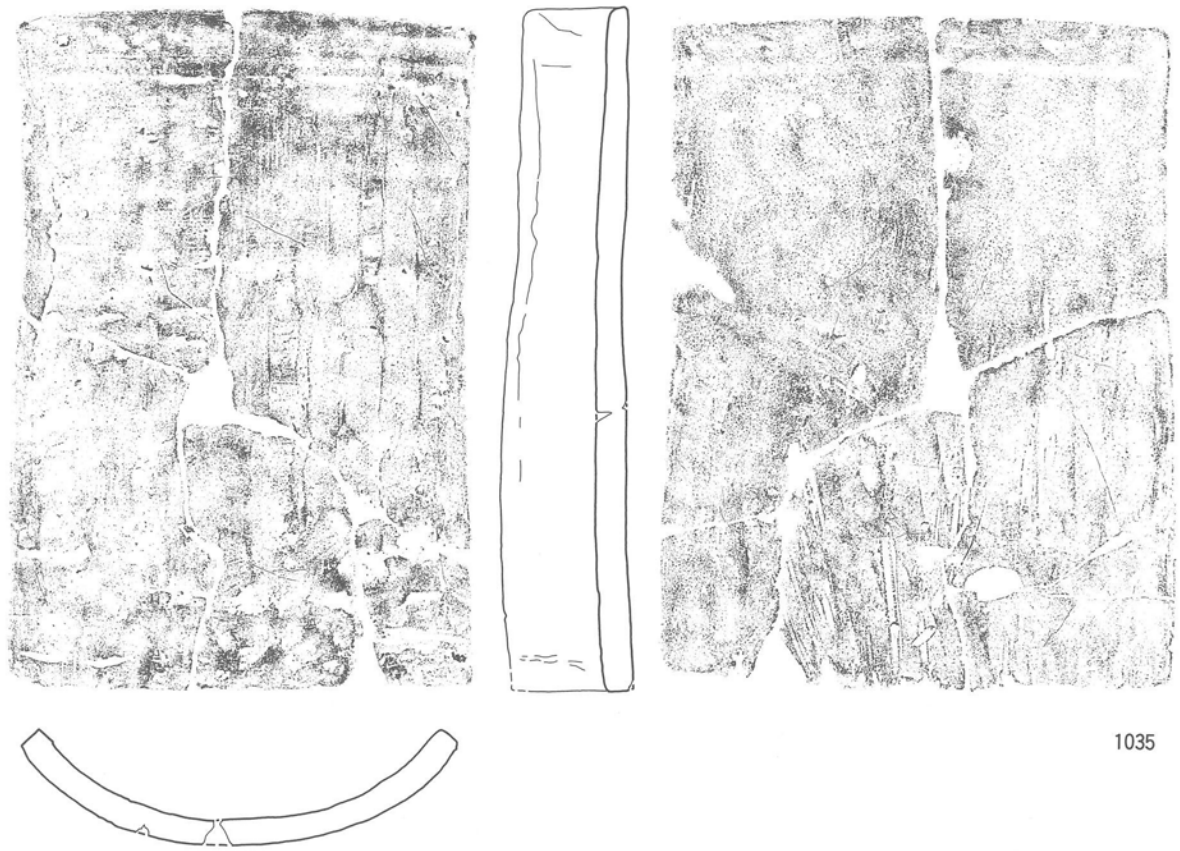


0　20cm
S:1/4

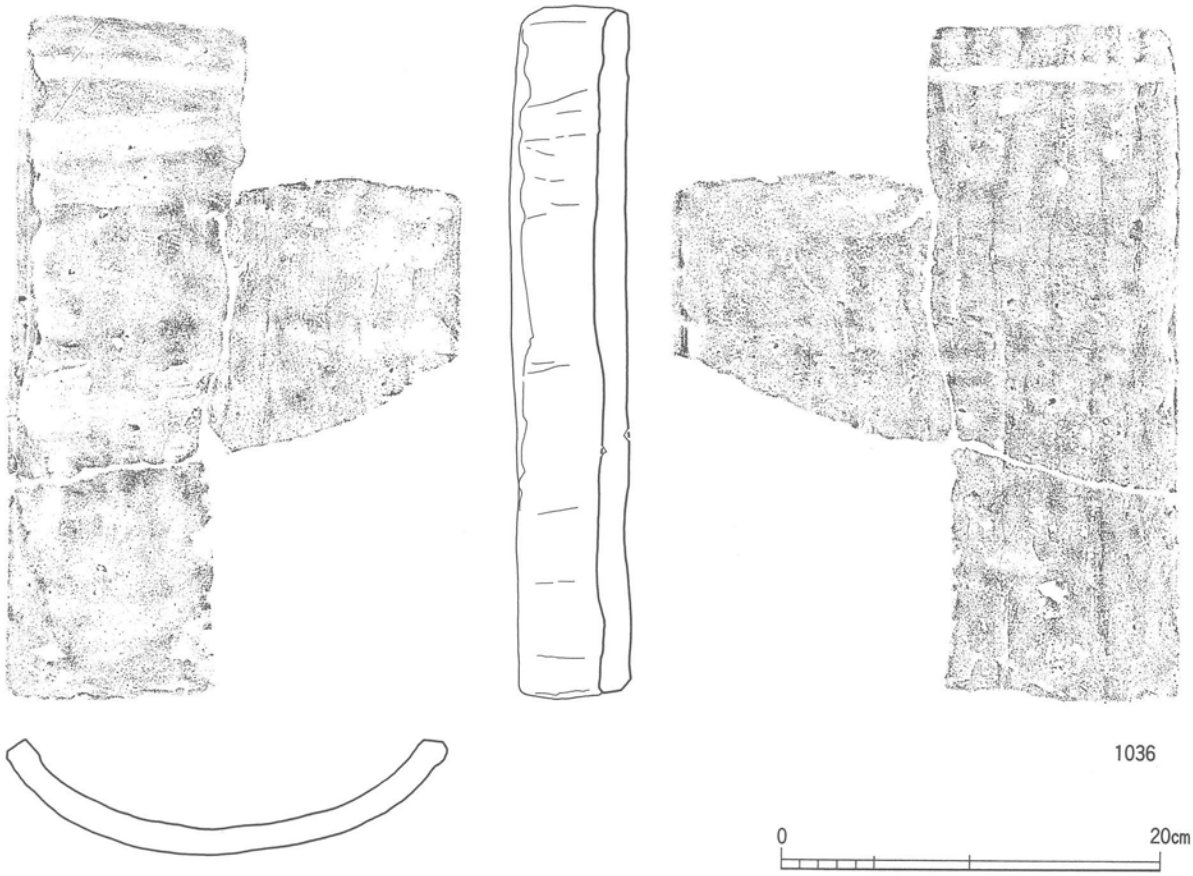
第146図

柳谷15号窯　出土瓦29





1035

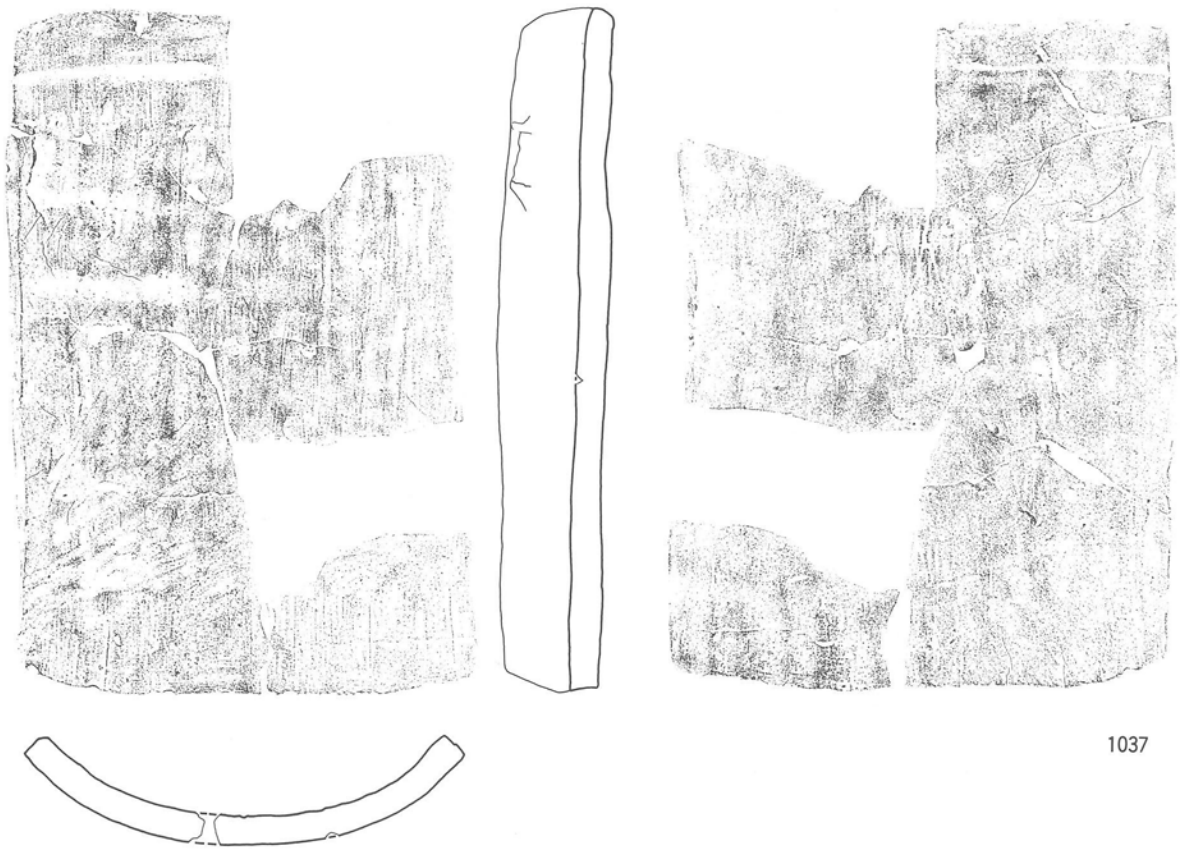


1036

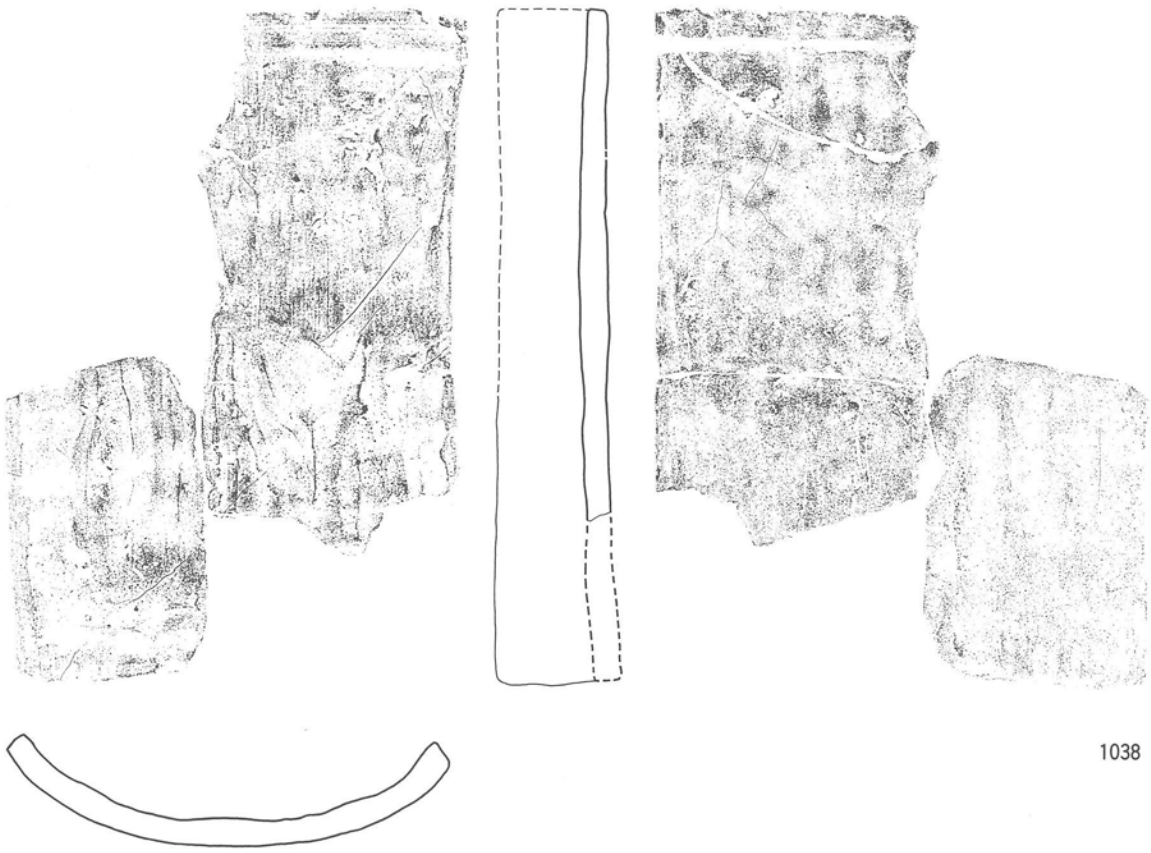
0　20cm
S:1/4

第148図

柳谷15号窯　出土瓦31



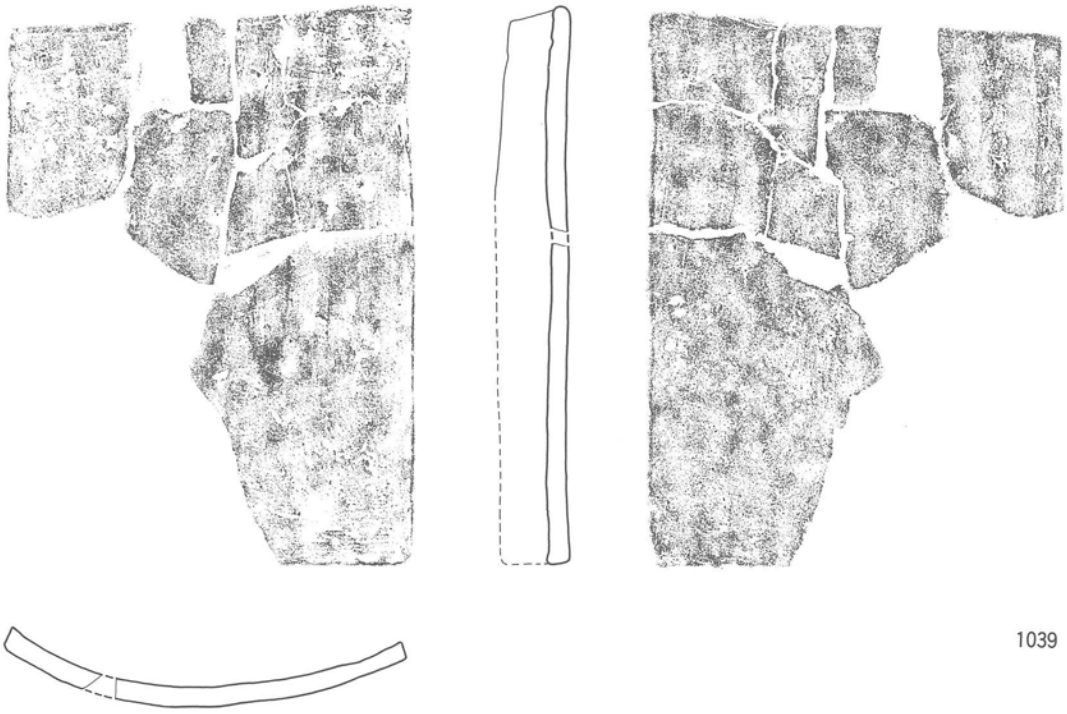
1037



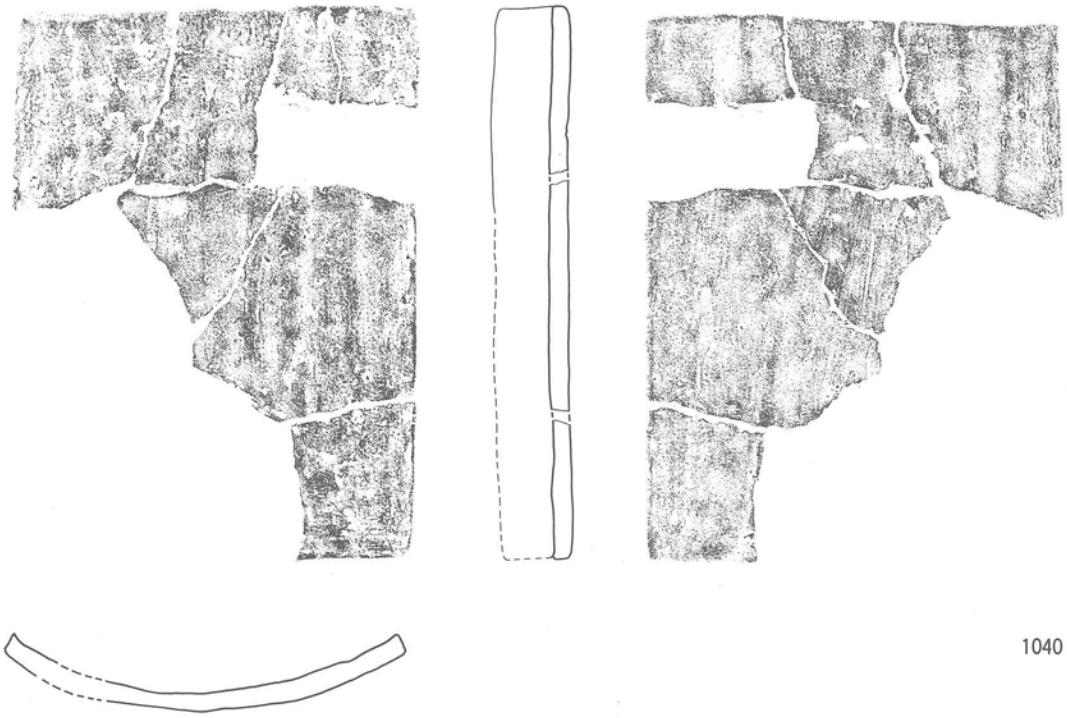
1038

0　20cm

S:1/4



1039

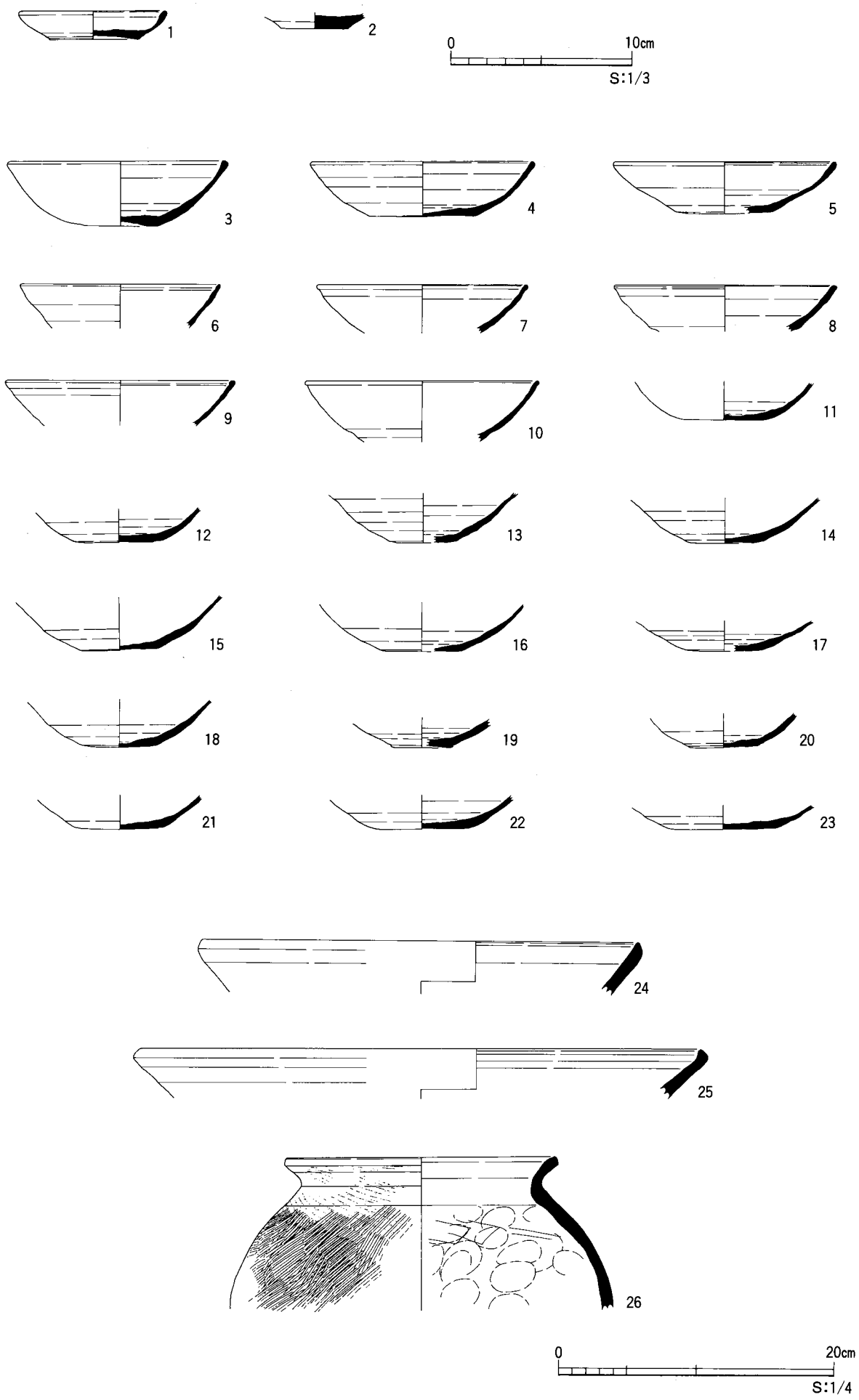


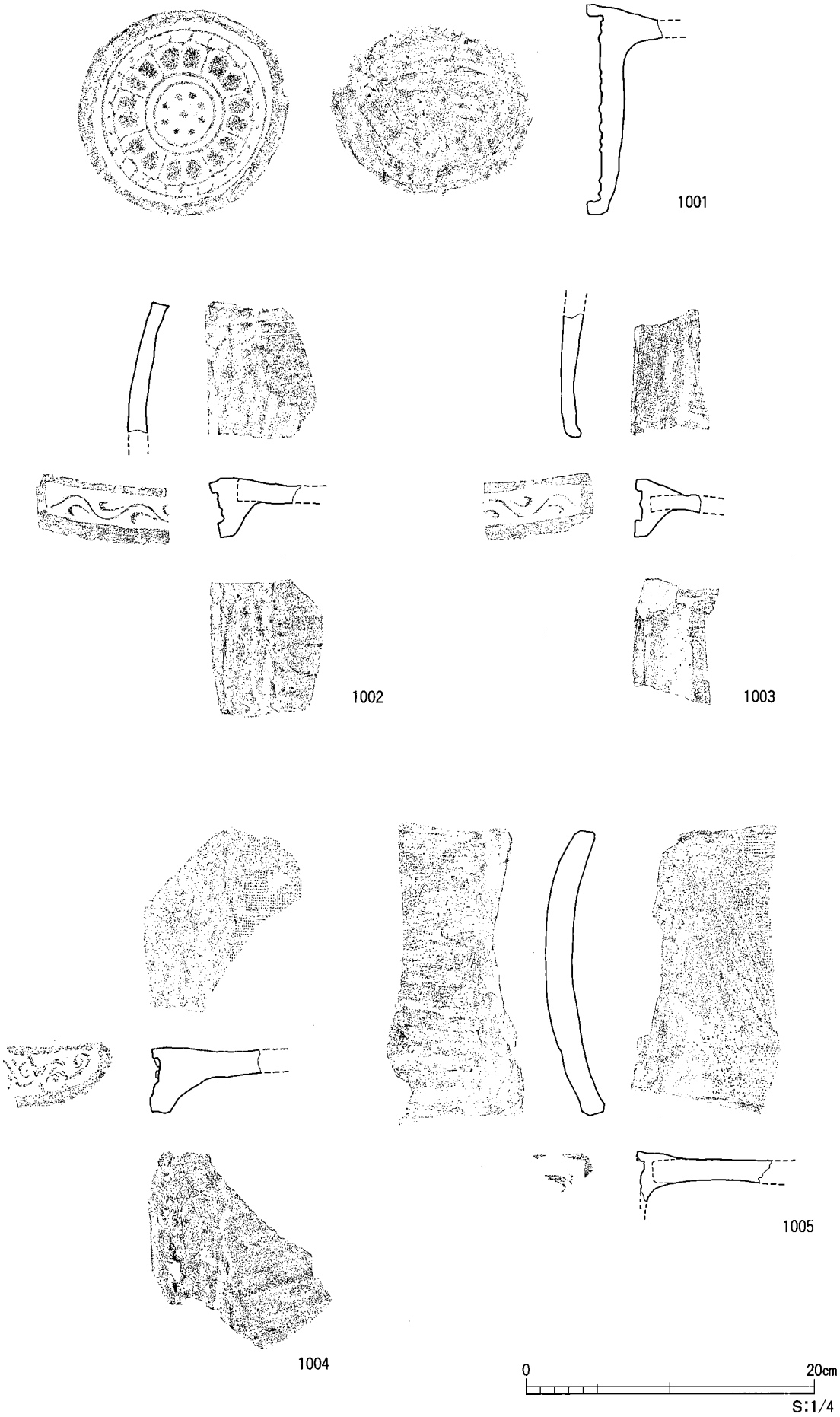
1040

0　20cm
S:1/4

第150図

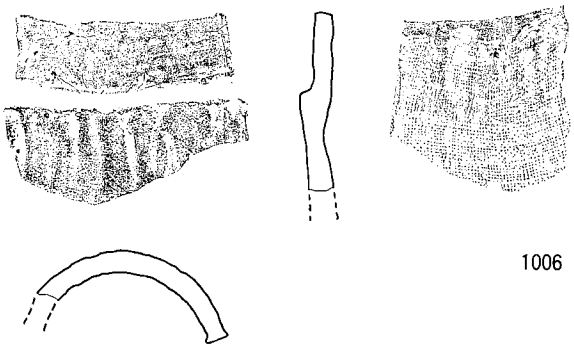
柳谷７号窯　出土土器



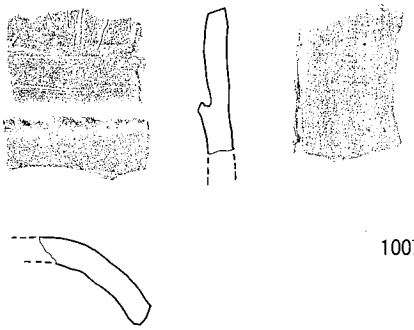

1001
1002
1003
1004
1005
0
20cm
S:1/4

第152図

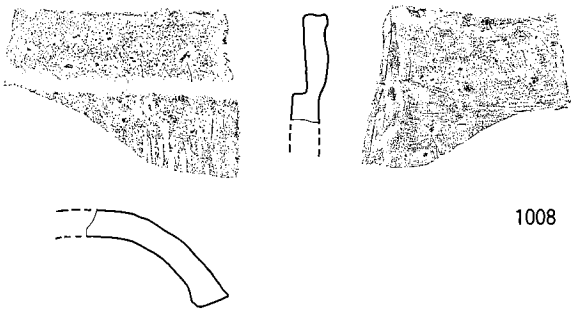
柳谷７号窯　出土瓦２



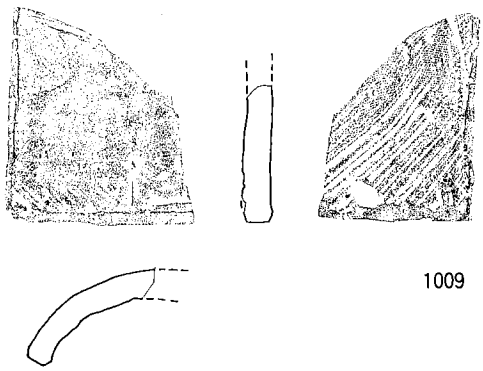
1006



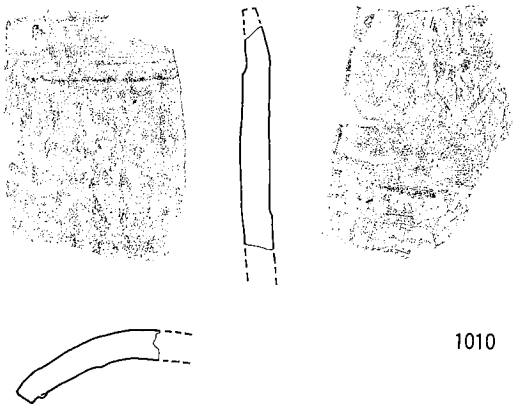
1007



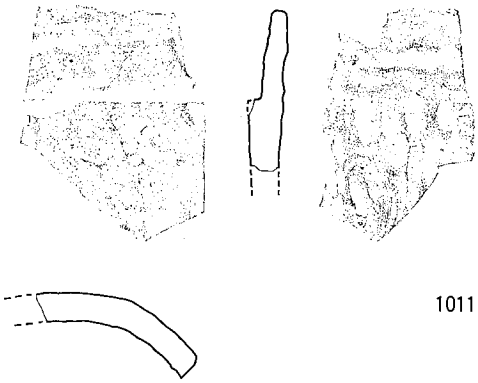
1008



1009



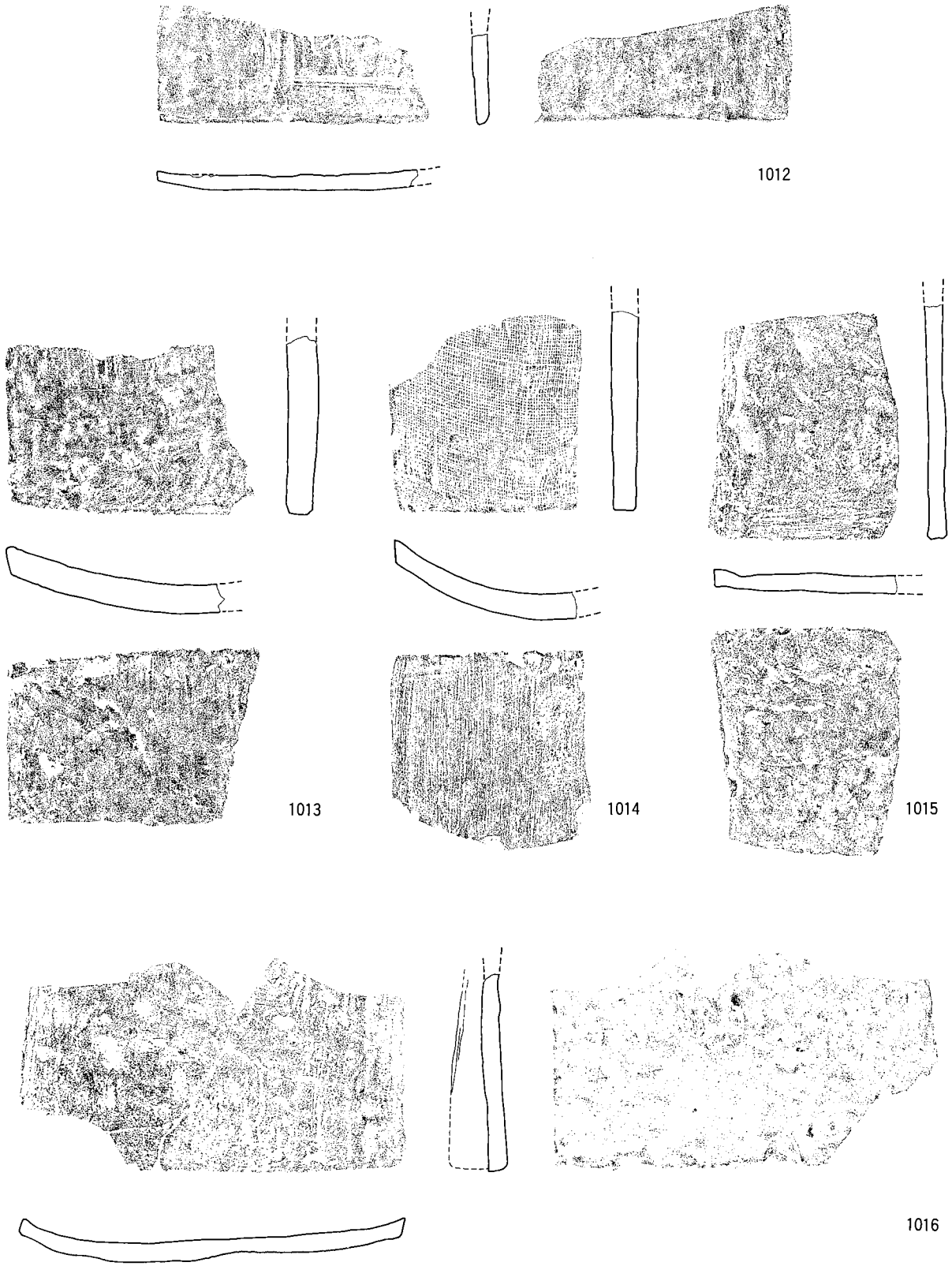
1010



1011

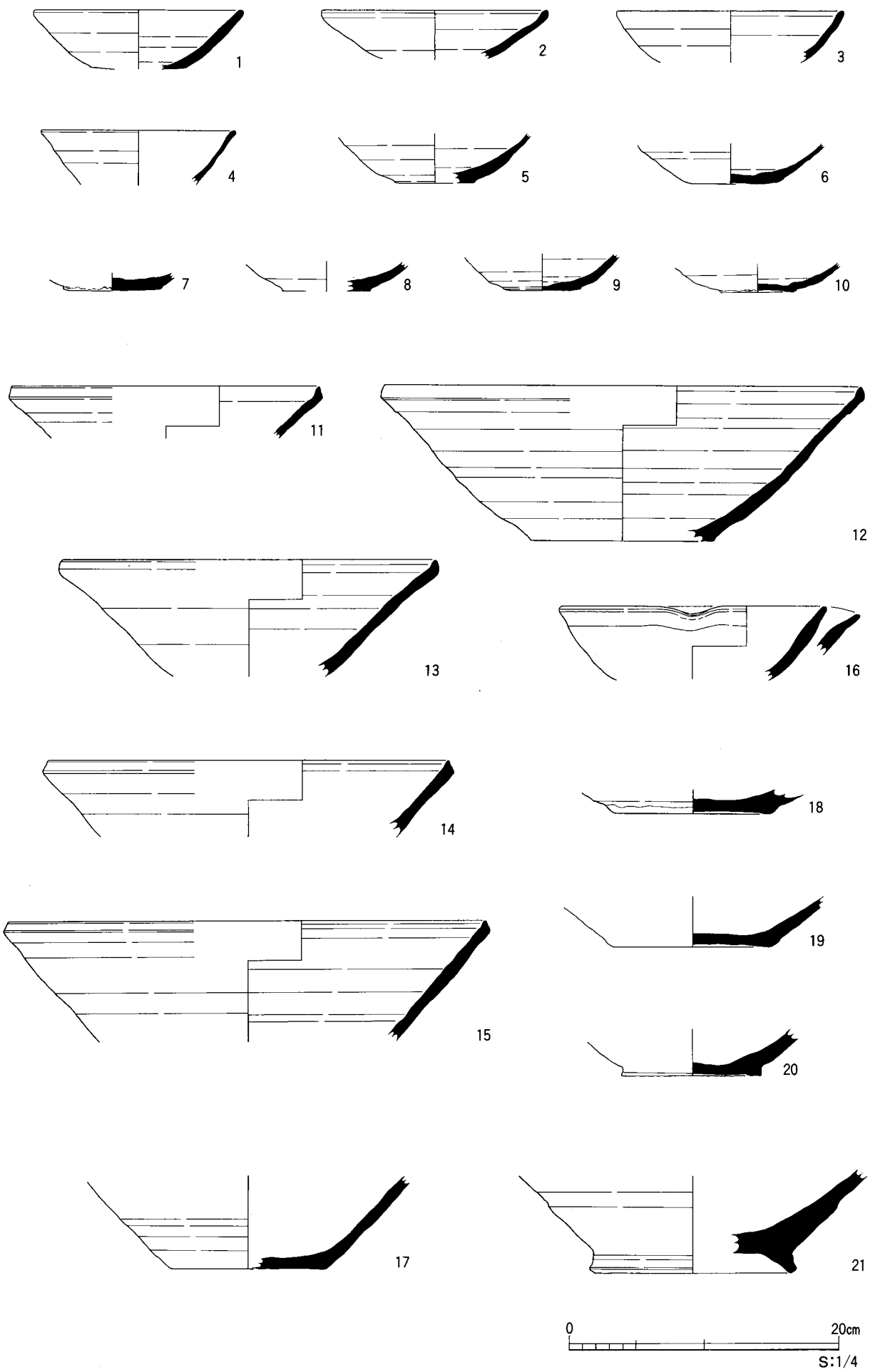
0　20cm

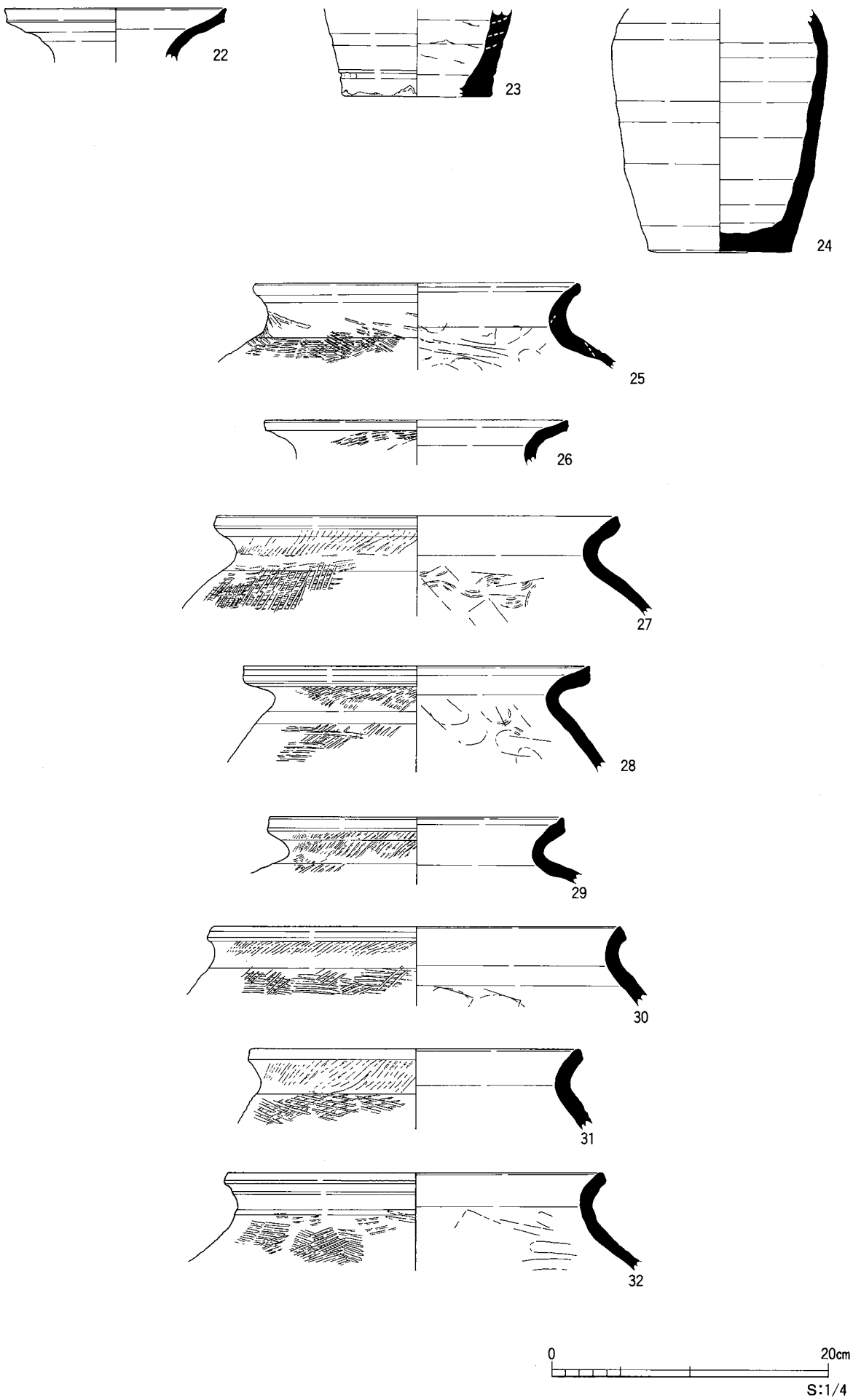
S:1/4


1012
1013
1014
1015
1016
0
20cm
S:1/4

第154図

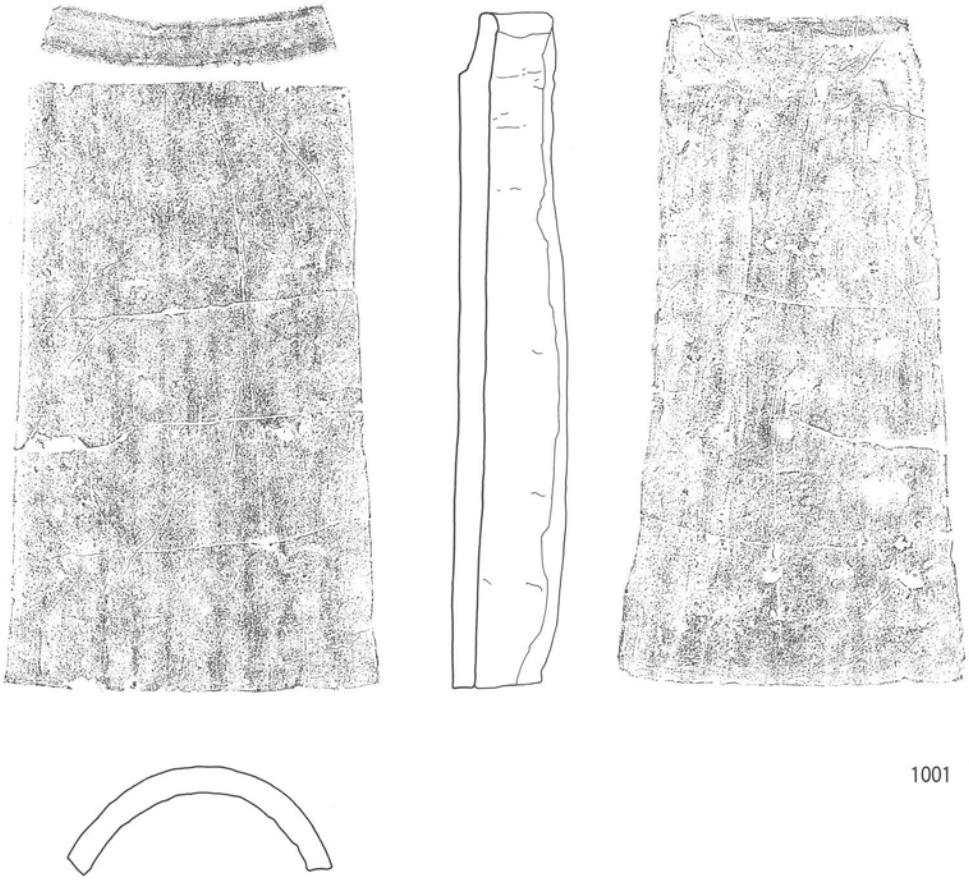
柳谷１号窯　出土土器１

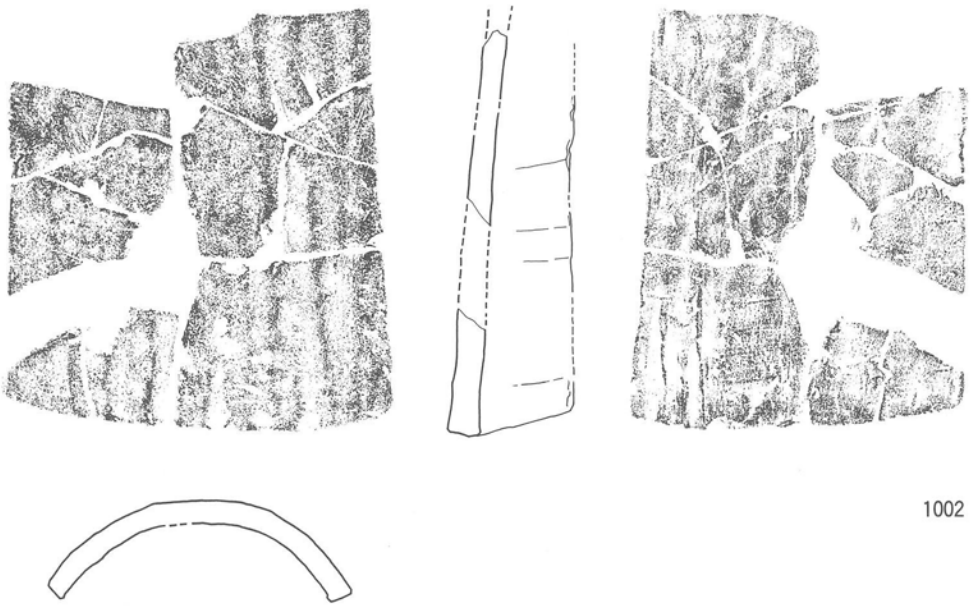



22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
20cm
S:1/4

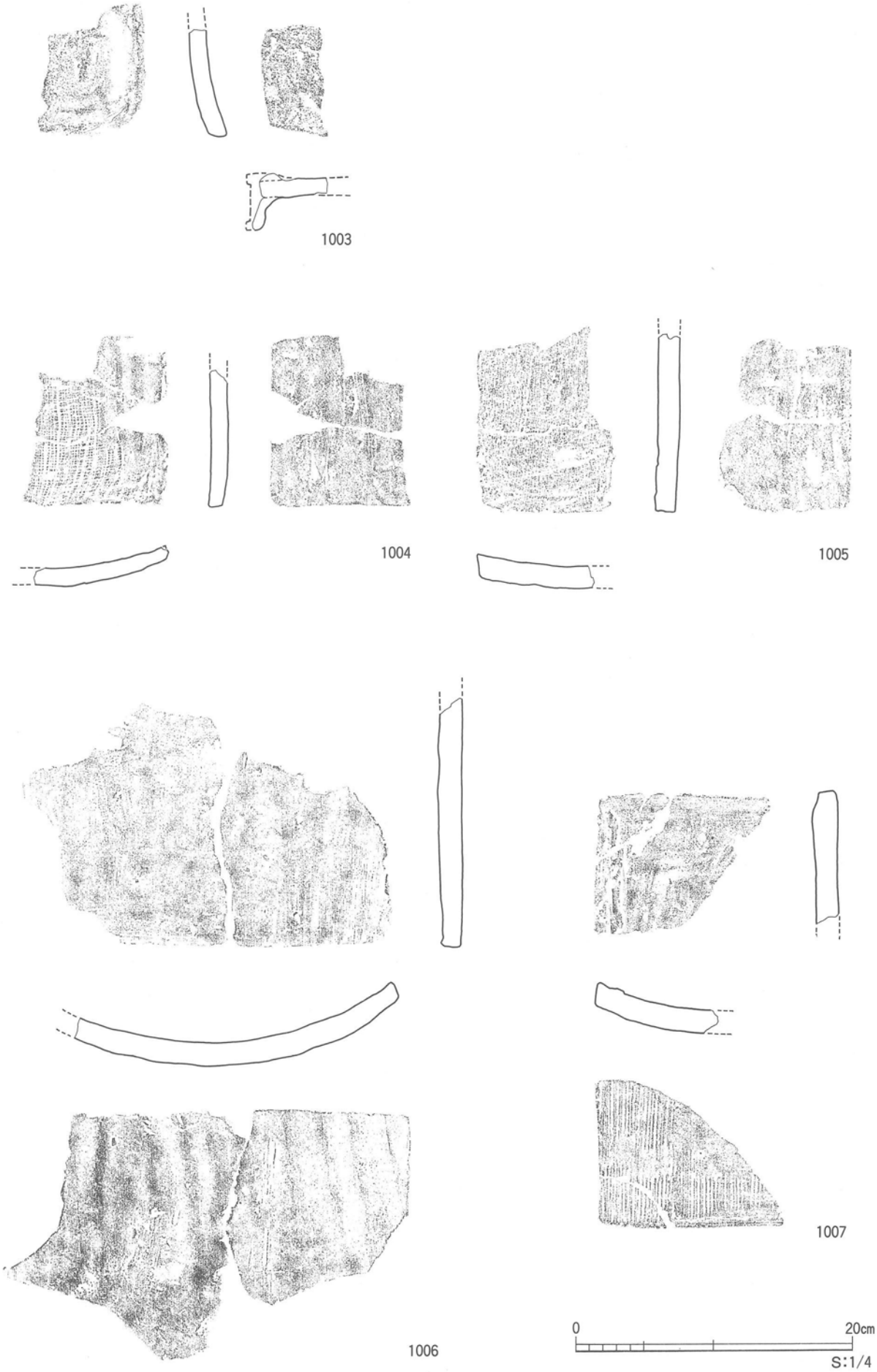
第156図

柳谷１号窯　出土瓦１



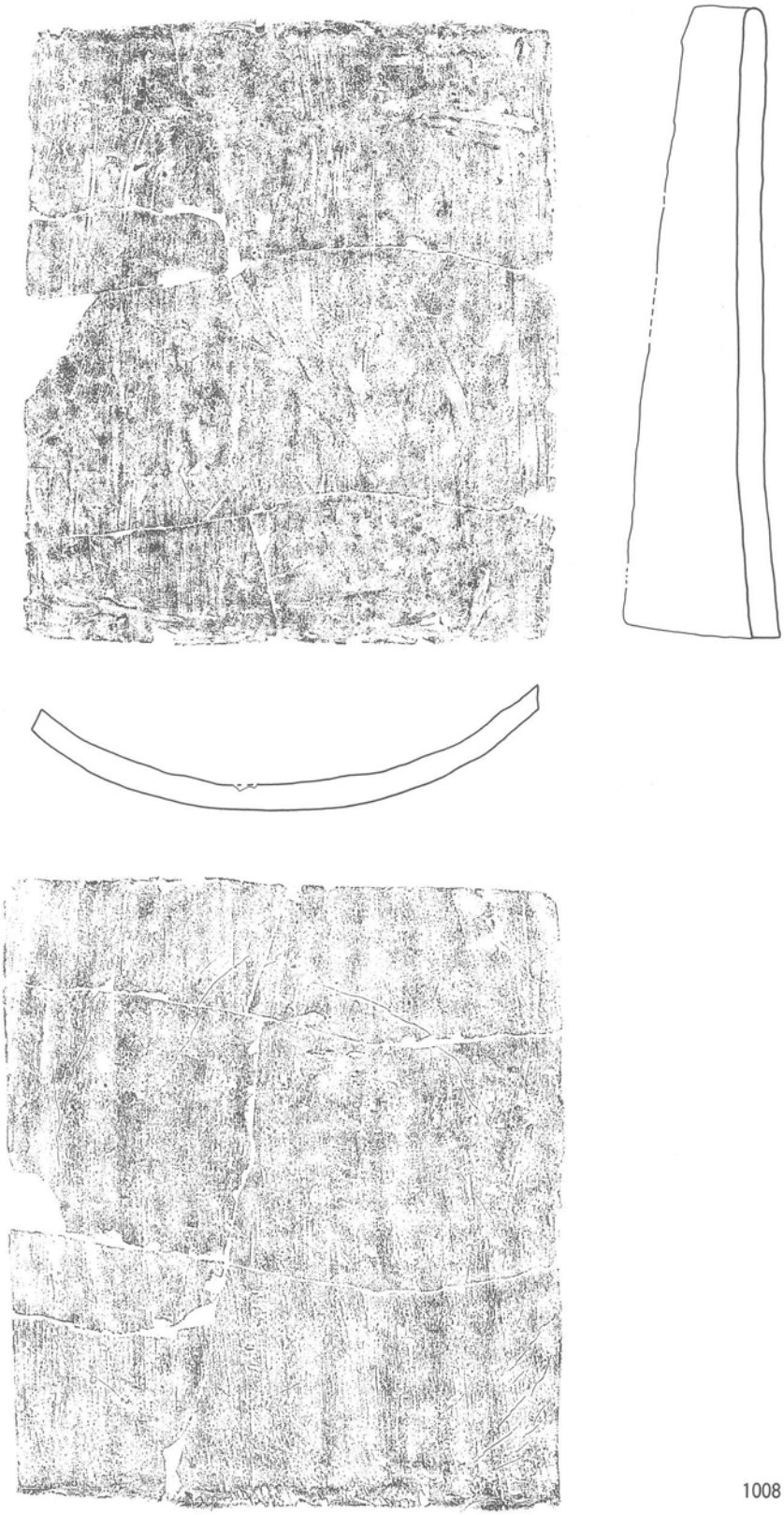


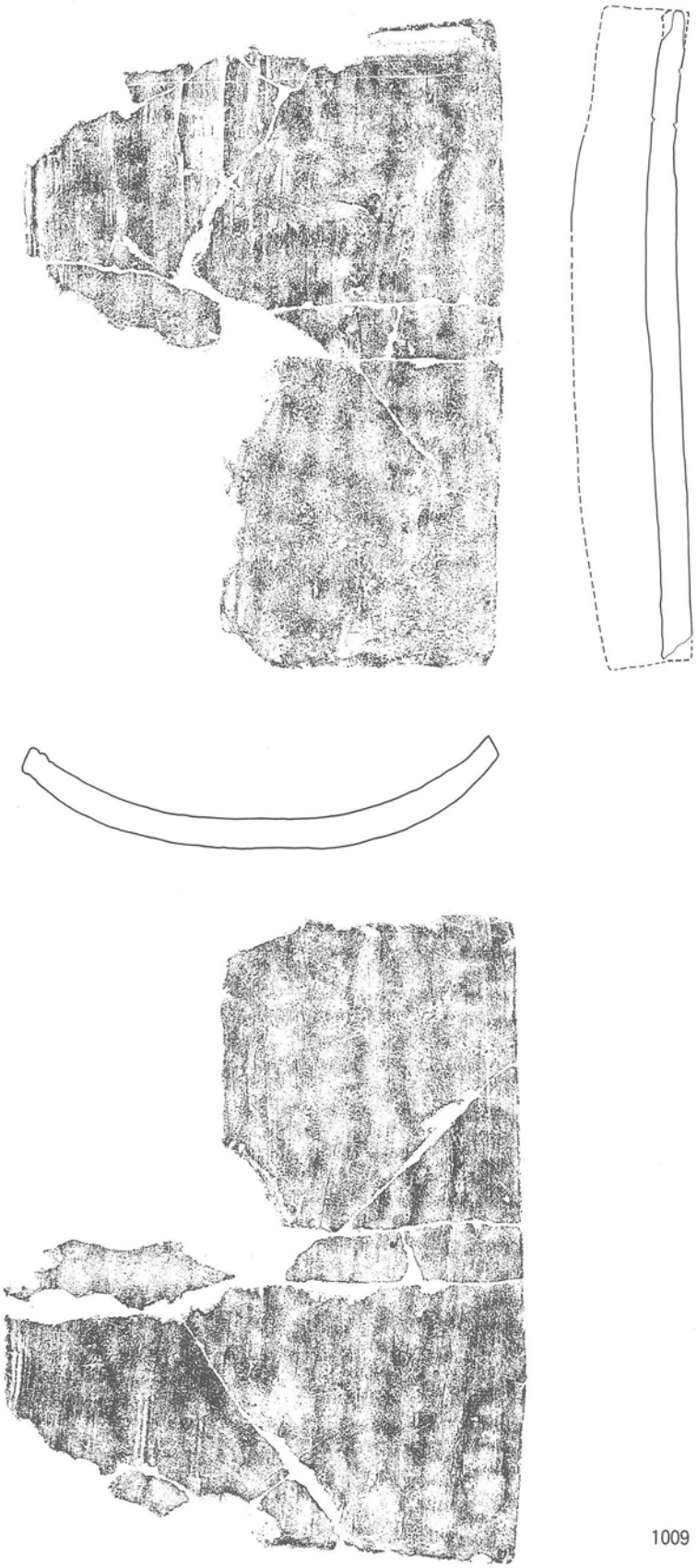
0　20cm
S:1/4


1003
1004
1005
1006
1007
0
20cm
S:1/4

第158図

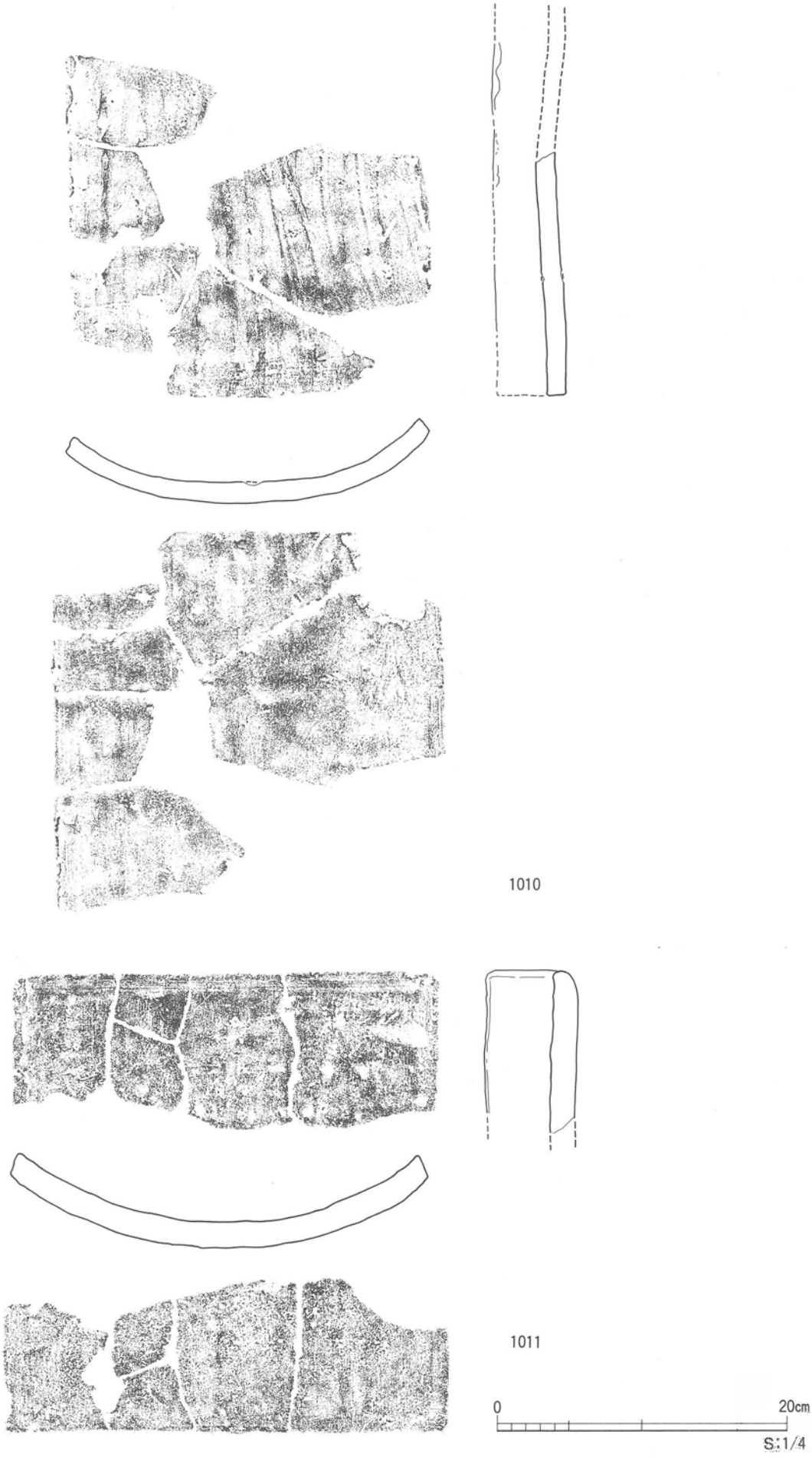
柳谷１号窯　出土瓦３




1009
0
20cm
S:1/4

第160図

柳谷１号窯　出土瓦５



写真図版

a. 美囊川・久留美方面遠景（南より）

b. 三木市平井からの久留美全景斜め

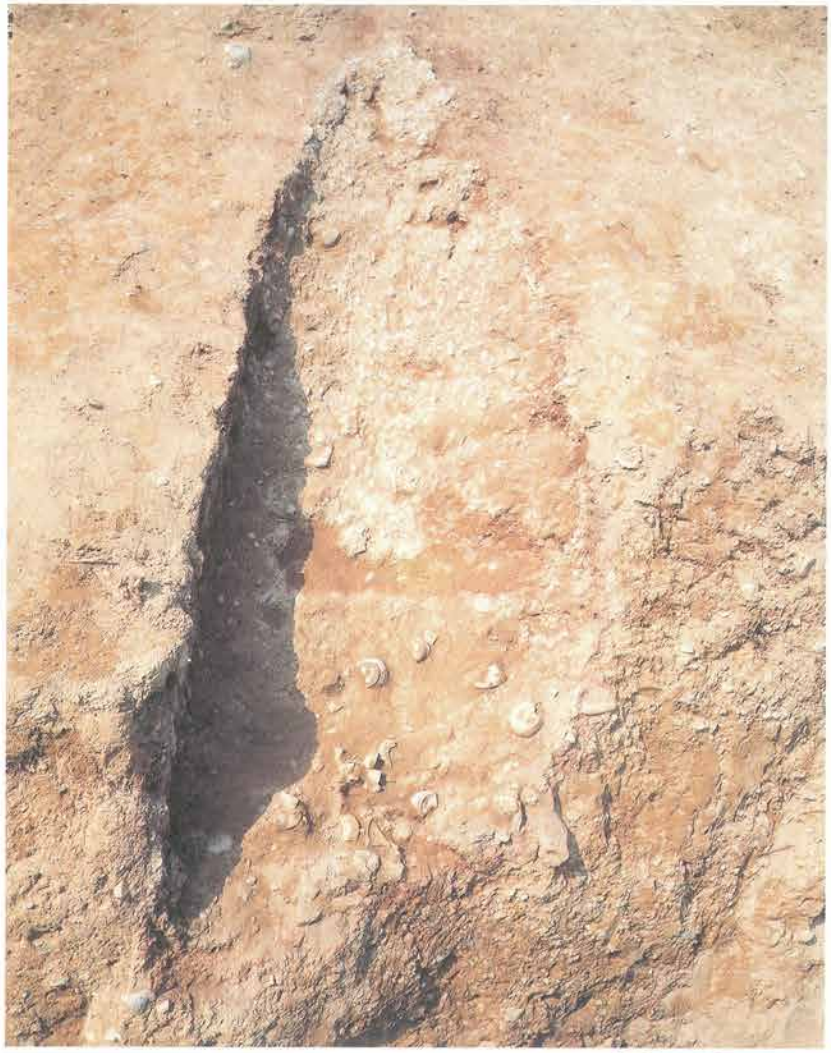
遺構図版 2

西ノ谷窯

a. 遠景（東より）

b. 窯体完掘状況

c. 窯体完掘状況



a. 窯体完掘状況

(上)b. 遠景(西より)
(下)d. 窯体断ち割り(横断面)

(上)c. 窯体断ち割り(縦断面)
(下)e. 窯体断ち割り(全景)

遺構図版 4

柳谷11号窯～13号窯

a. 発掘前全景（東南より）

b. 検出状況（南より）

c. 完掘後全景（西南より）

a. 窯体完掘状況

b. 窯体焚口

c. 灰原セクション

遺構図版 6

柳谷12号窯

a. 灰原縦横断セクション

b. 窯体完掘状況

c. 窯体完掘状況

a. 窯体内埋土堆積状況

b. 窯体焚口埋土堆積状況

c. 窯体焚口遺物出土状況

d. 舟底状ピット断ち割り断面

e. 窯体焚口断ち割り断面（左）

f. 窯体焚口断ち割り断面（右）

g. 窯体焚口側壁内木芯検出状況

h. 窯体焚口前ピット検出状況

遺構図版 8

柳谷13号窯

a. 窯体完掘状況

b. 窯体完掘状況

c. 窯体断ち割り横断面(壁面)状況

柳谷14号窯

a. 窯体検出状況

b. 窯体完掘状況

c. 窯体遺物遺物取り上げ後

遺構図版10

宮の池窯

a. 遠景（南より）

b. 発掘後全景（北より）

c. 宮の池(左)・大池(右前方)

柳谷２号窯

a．灰原全景

b．灰原土層断面

遺構図版12

柳谷６号窯

a. 灰原発見状況（西より）

b. 灰原検出状況（南より）

c. 灰原発掘状況

a. 発掘前全景（南より）

b. 窯体周囲土層断面

c. 窯体内埋土推積状況

遺構図版14

柳谷10号窯

a. 土層断面（窯体先端）

b. 土層断面（窯体西側）

c. 土層断面（窯体東側）

a. 窯体完掘状況

b. 窯体完掘状況

c. 窯体完掘状況（西南より）

遺構図版16

柳谷10号窯

a. 窯体盛土状況

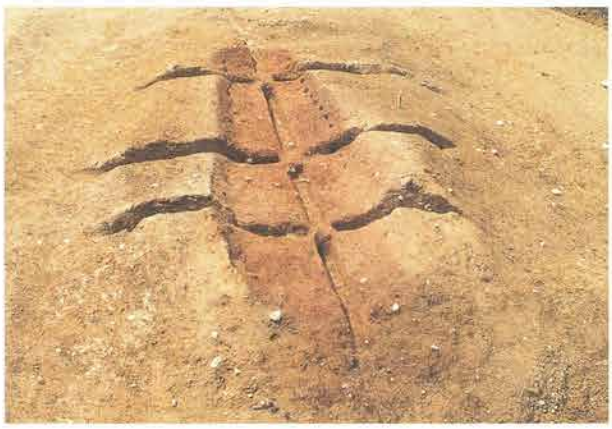
b. 窯体断ち割り全景

c. 窯体断ち割りB断面（左）

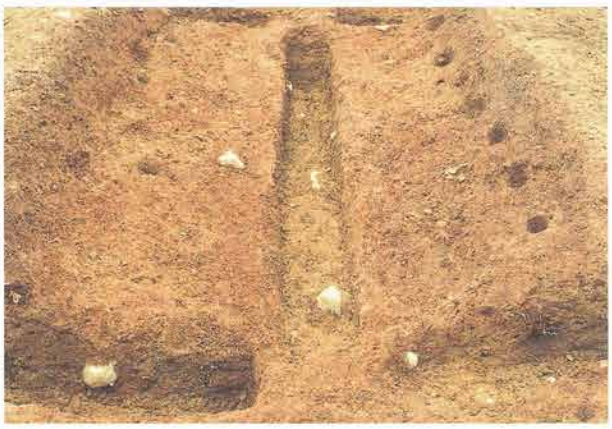
d. 窯体断ち割りB断面（右）

e. 窯体断ち割りC断面（左）

f. 窯体断ち割りC断面（右）



g. 側壁支柱跡（底面剥ぎ取り後）



h. 側壁支柱跡（底面剥ぎ取り後）

a. 発掘前全景（北より）

b. 窯体検出状況（東より）

c. 完掘後全景（北より）

遺構図版18

柳谷15号窯

a. 窯体内瓦出土状況

b. 窯体内瓦出土状況

a. 窯体内瓦列検出状況

b. 窯体内瓦列検出状況（西より）

遺構図版20

柳谷15号窯

a. 最終床面(遺物取り上げ後)
b. 第１次床面完掘後

c. 左側壁構築材検出状況
(側壁剥ぎ取り後)

d. 窯体先端部周溝内瓦出土状況

a. ７号窯検出状況

b. ７号窯全景（北より）

c. ８号窯 灰原遺物採集状況

遺構図版22

柳谷１号窯

a. 発掘前全景（南より）

b. 窯体検出状況（南より）

c. 窯体

柳谷11号窯～13号窯出土須恵器

柳谷14号窯出土須恵器

柳谷 5 号窯出土土器

柳谷 6 号窯出土土器

宮の池窯出土土器

宮の池窯出土瓦

柳谷 2 号窯出土土器

柳谷 2 号窯出土瓦

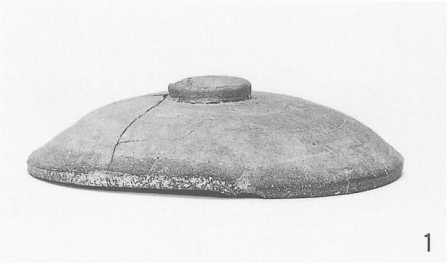
柳谷10号窯出土土器・瓦

柳谷15号窯出土土器・瓦

柳谷 8 号窯出土土器・瓦

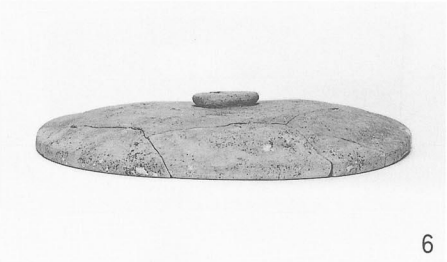
柳谷 7 号窯出土土器・瓦

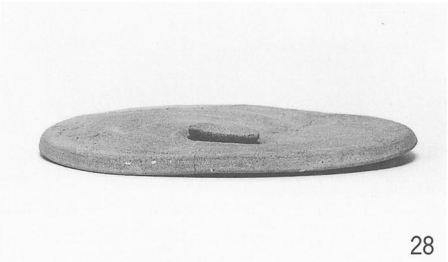
2


1

5

4


6


28

7

8

9

12

16

17

23

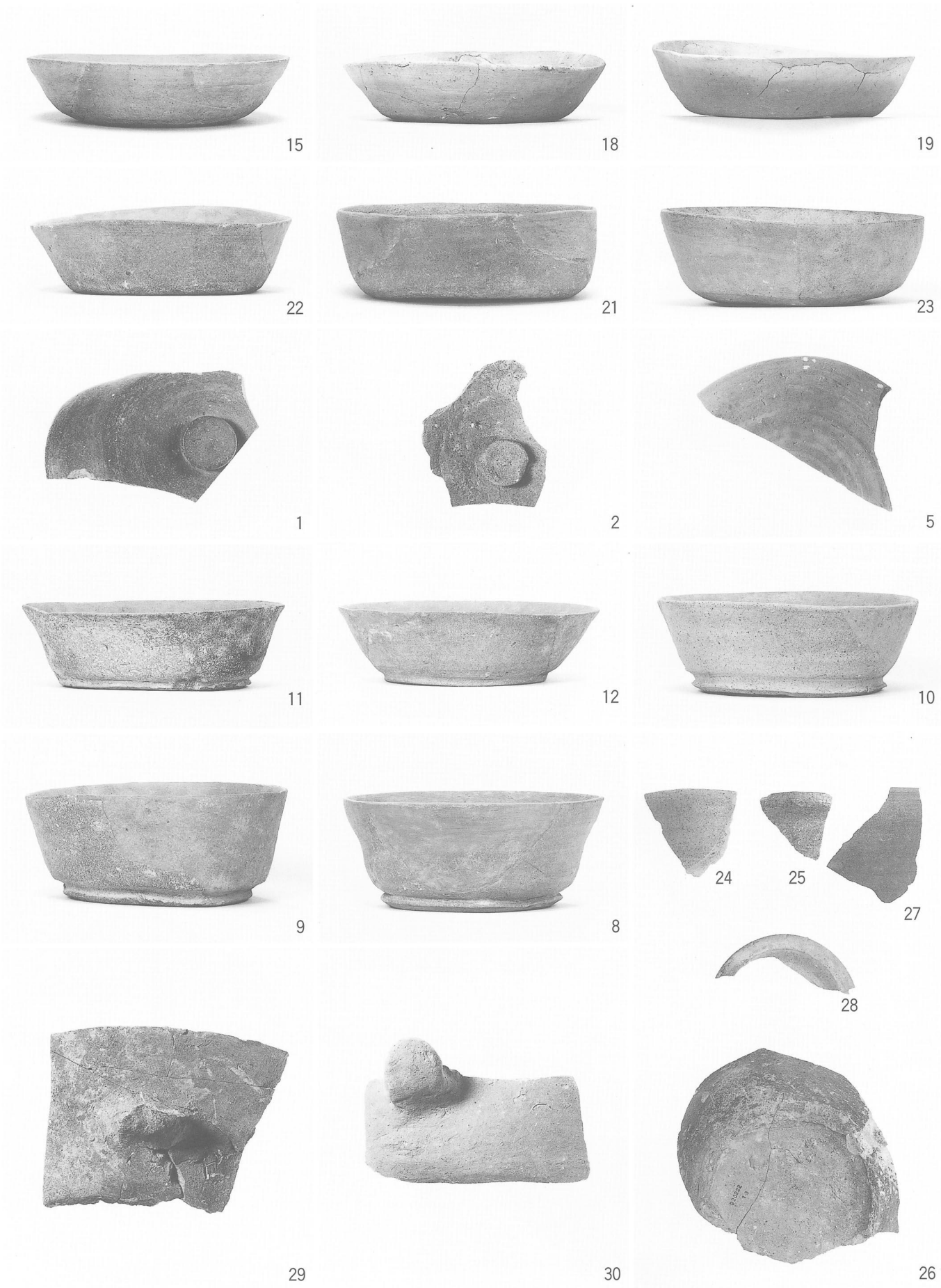
26

25

27

遺物図版 8

跡部 4 号窯出土須恵器



柳谷11号窯出土須恵器 1

2

3

1

7

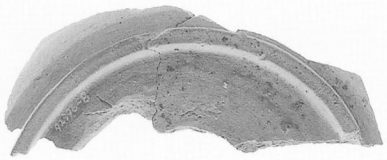
81

82

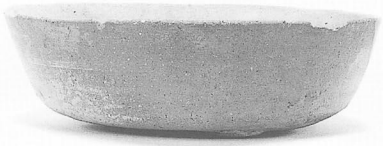
17

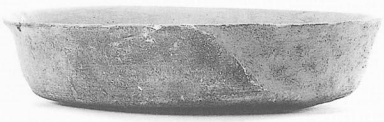
79

83


16

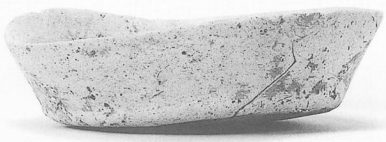
28


21


24

26

84


85

86

90

25

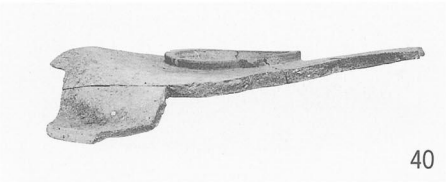
88

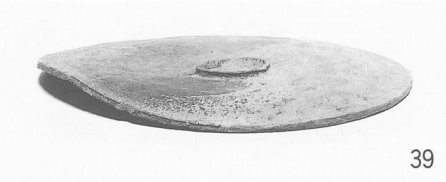
20

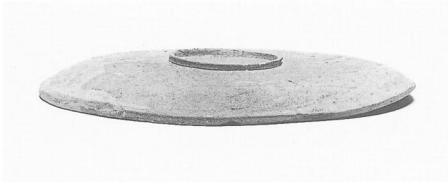
127

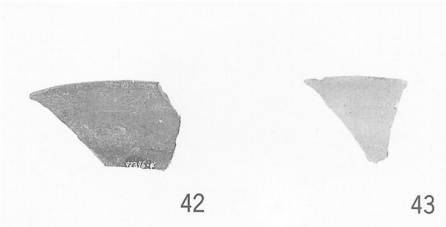
遺物図版10

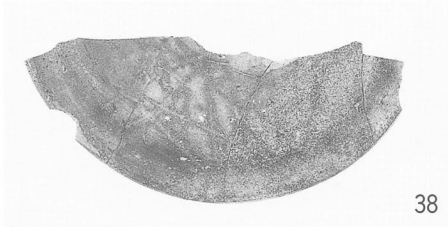
柳谷11号窯出土須恵器 2

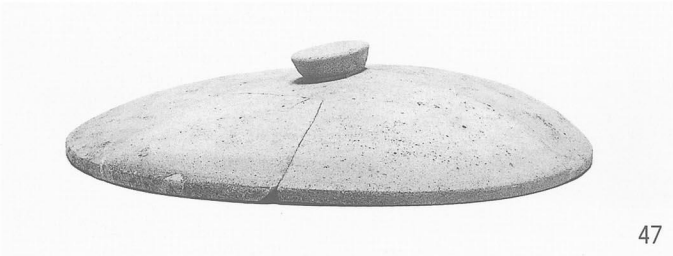


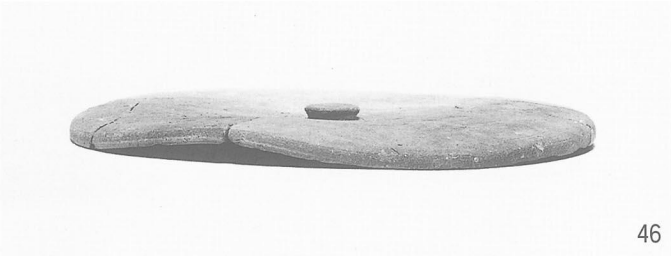


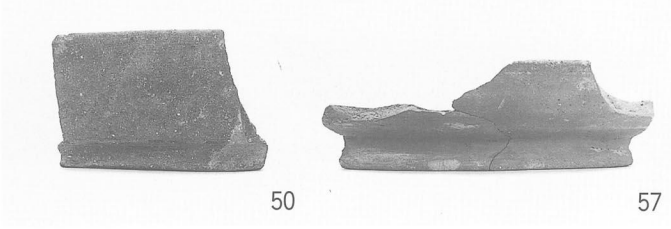












97

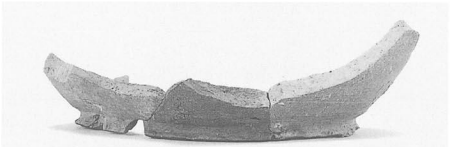
30

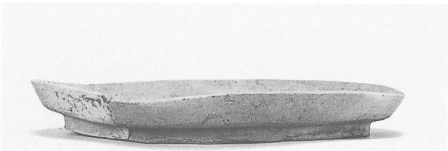
94

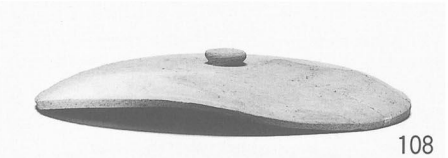
98

100

119 120


65

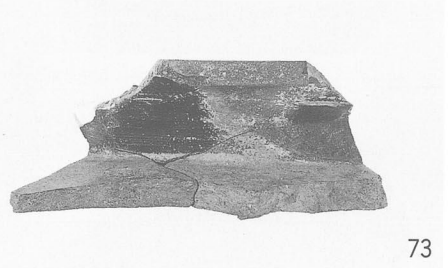

105

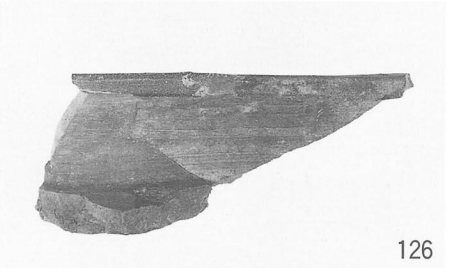

108

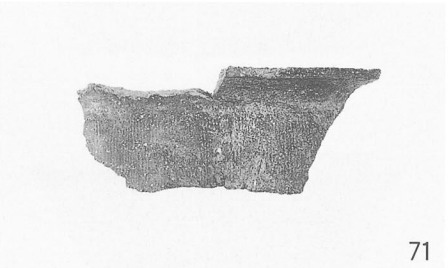
114

122

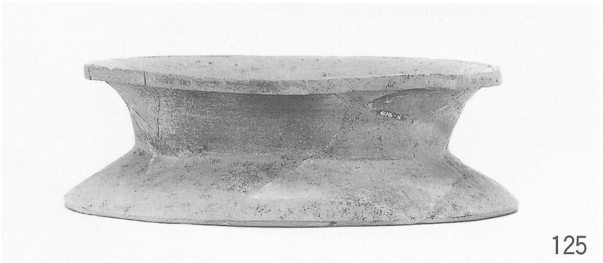
66


73


126


71

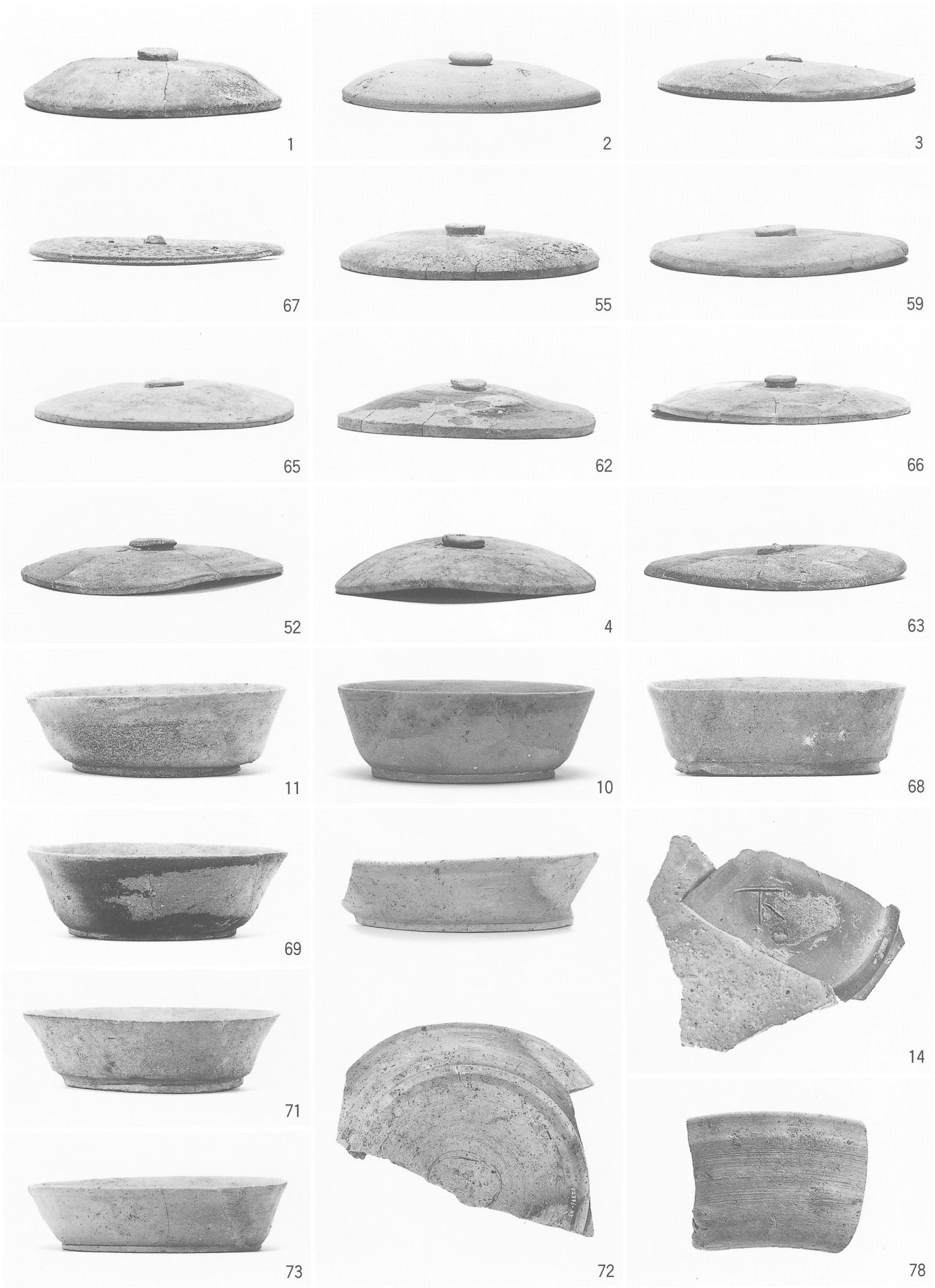
74


125

75

遺物図版12

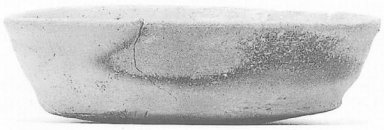
柳谷12号窯出土須恵器 1



柳谷12号窯出土須恵器 2

15

18


16

17

19

20

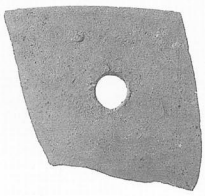
80

81

85

82

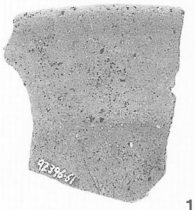
97

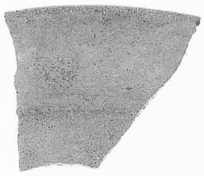

103

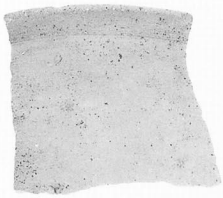
115

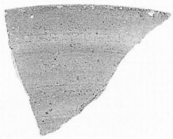
38

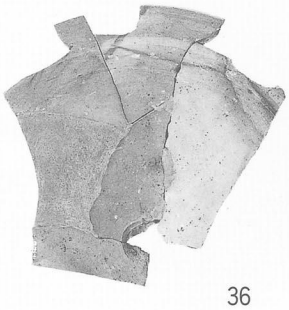
39

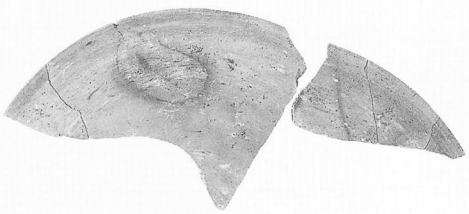

120


121


119

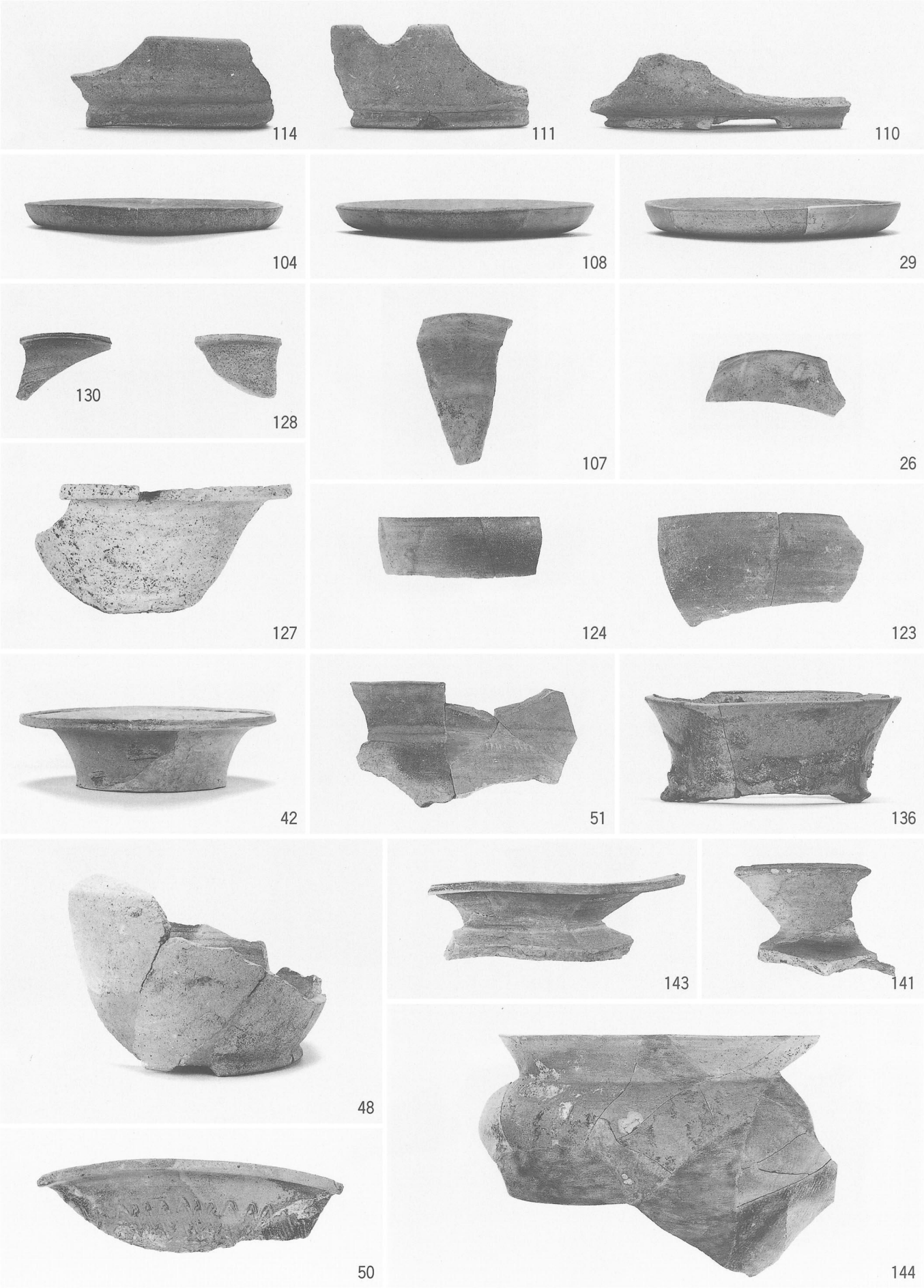

122


36


35

遺物図版14

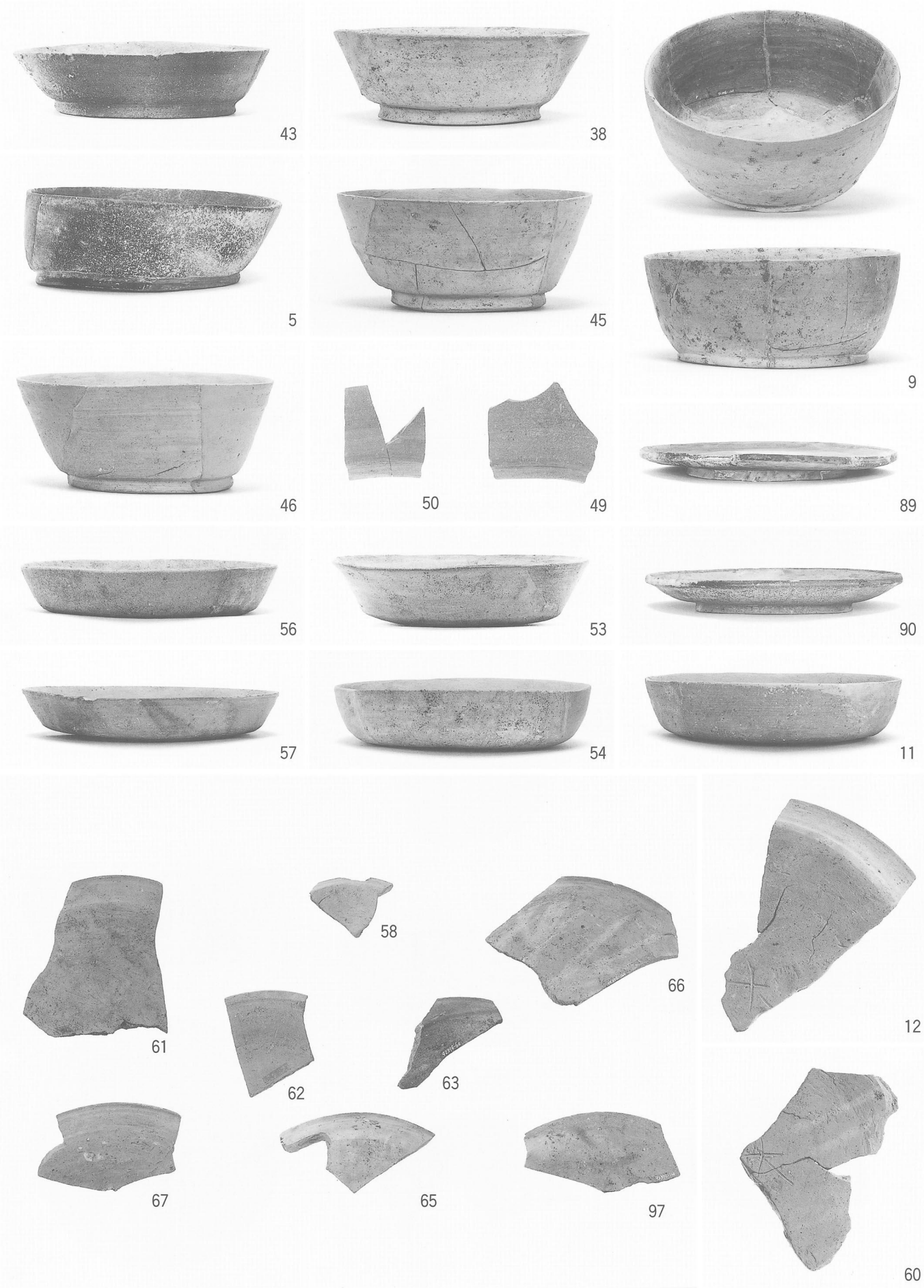
柳谷12号窯出土須恵器 3



柳谷13号窯出土須恵器 1

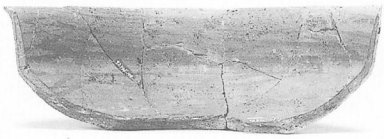
遺物図版16

柳谷13号窯出土須恵器 2



75

18



76

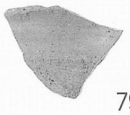
78

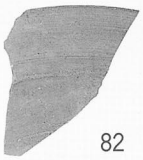
77

75

17

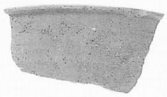
86

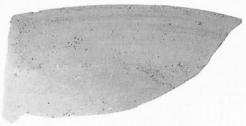

79

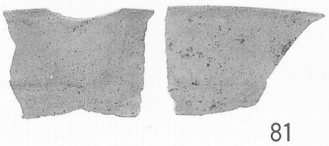

82

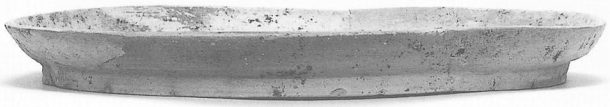
80

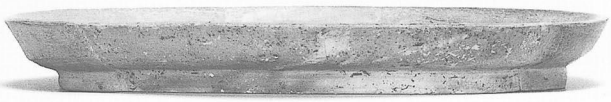
85

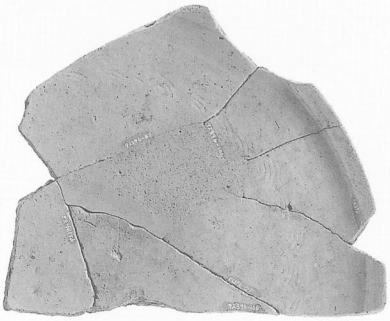

83


84

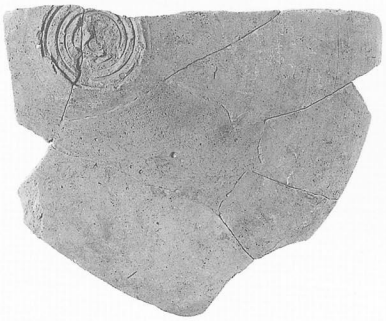

81


13


14



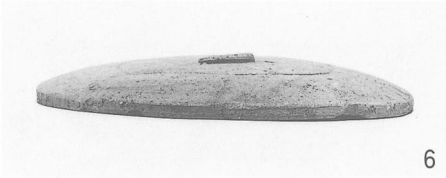
98

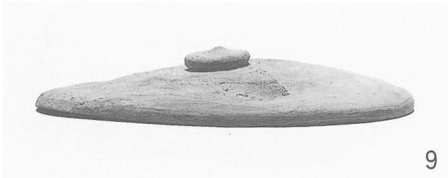

96

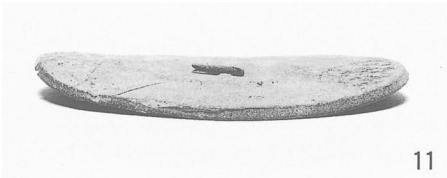
91

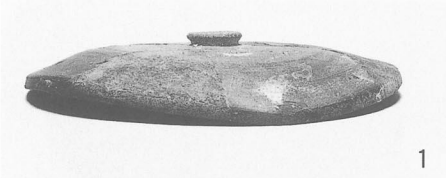
遺物図版18

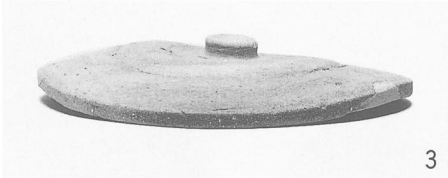
柳谷11号窯～13号窯出土須恵器

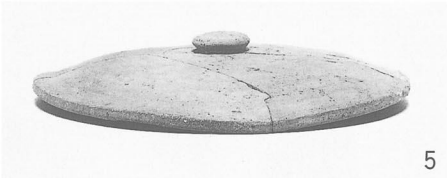

6

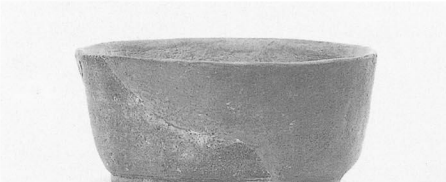

9


11

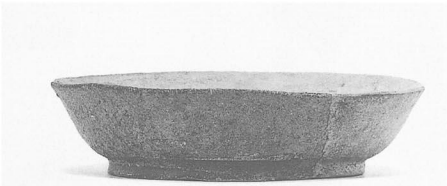

1


3


5


13

14


19

24

20

27

31

29

26

50

51

33

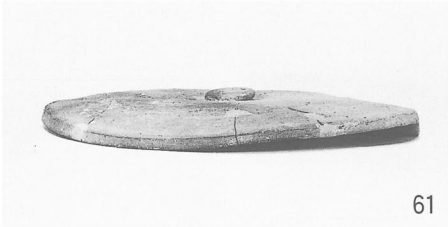
58

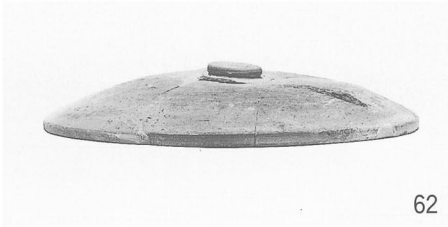
67

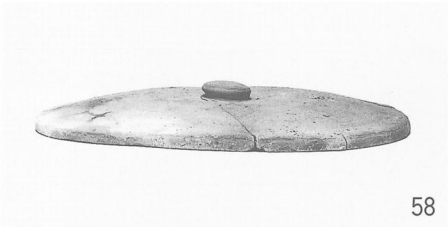
鉄斧

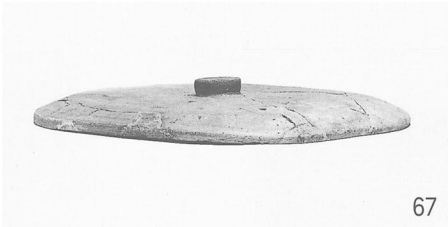
柳谷14号窯出土須恵器 1

57

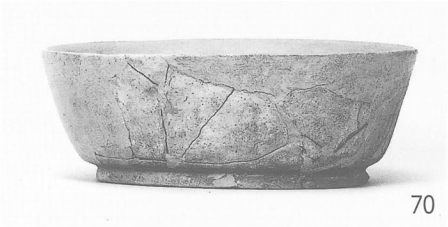

61


62


58


67

65


70

69

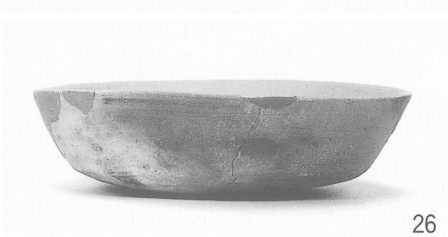
4

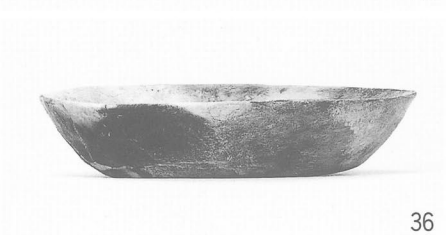
6

68 73 71

22

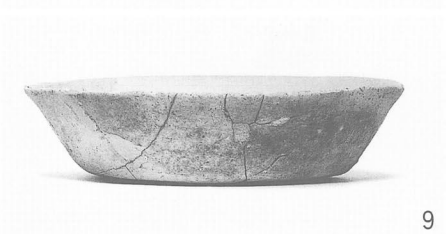
24


26


36

41

43


9

90

10

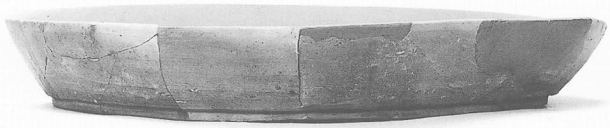
20

35

44

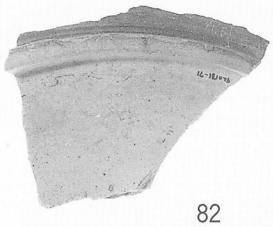
遺物図版20

柳谷14号窯出土須恵器 2



47

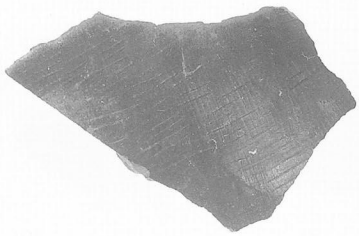
46



82

84

54



86

88

50

柳谷５号窯出土土器

13

1

3

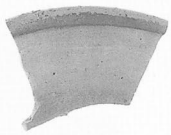
2

14

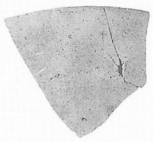
16

18

26


20

15


28

23

22

40

35

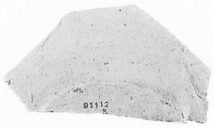
33

32

36

39

37


41

34

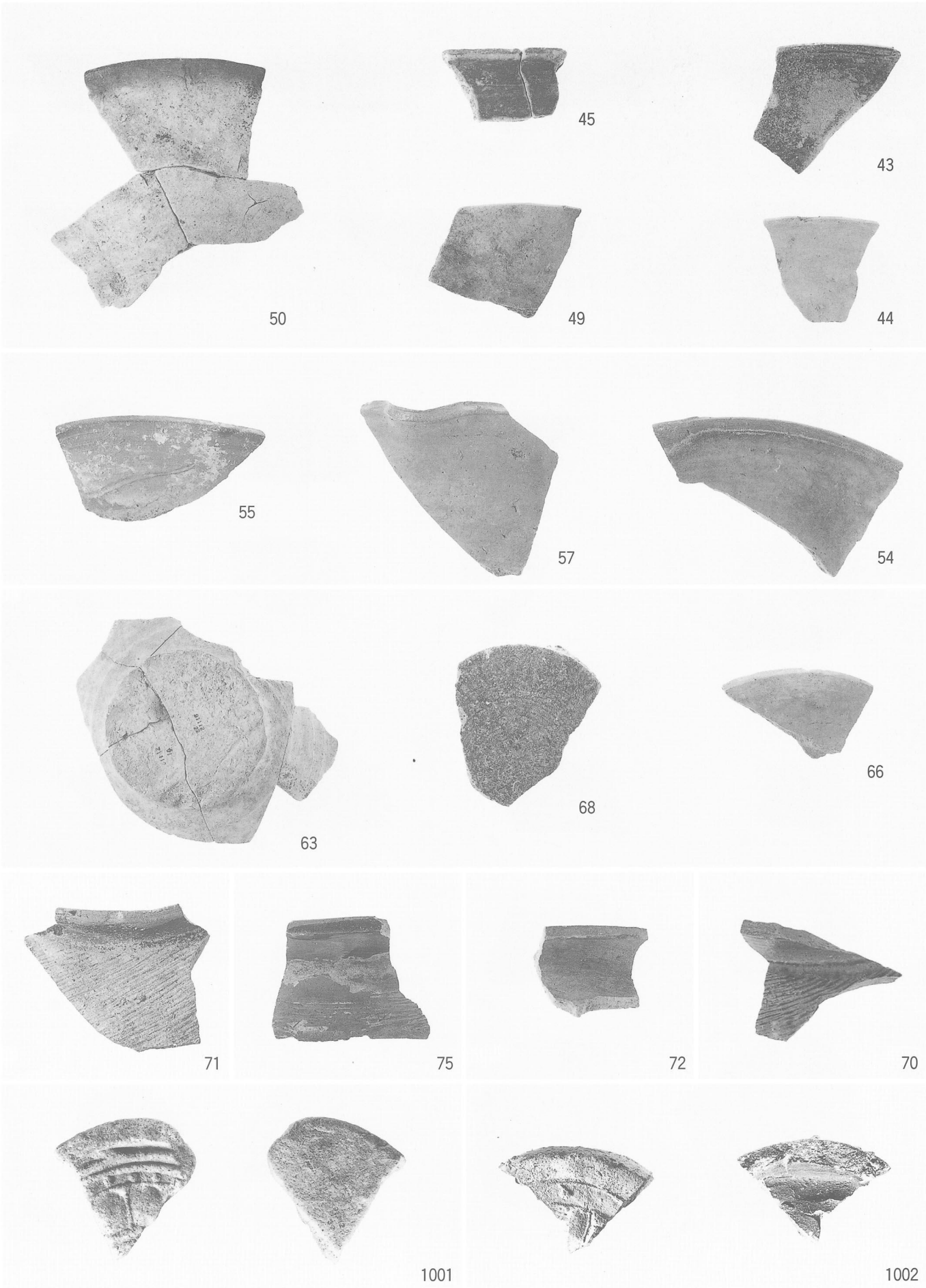
30

31

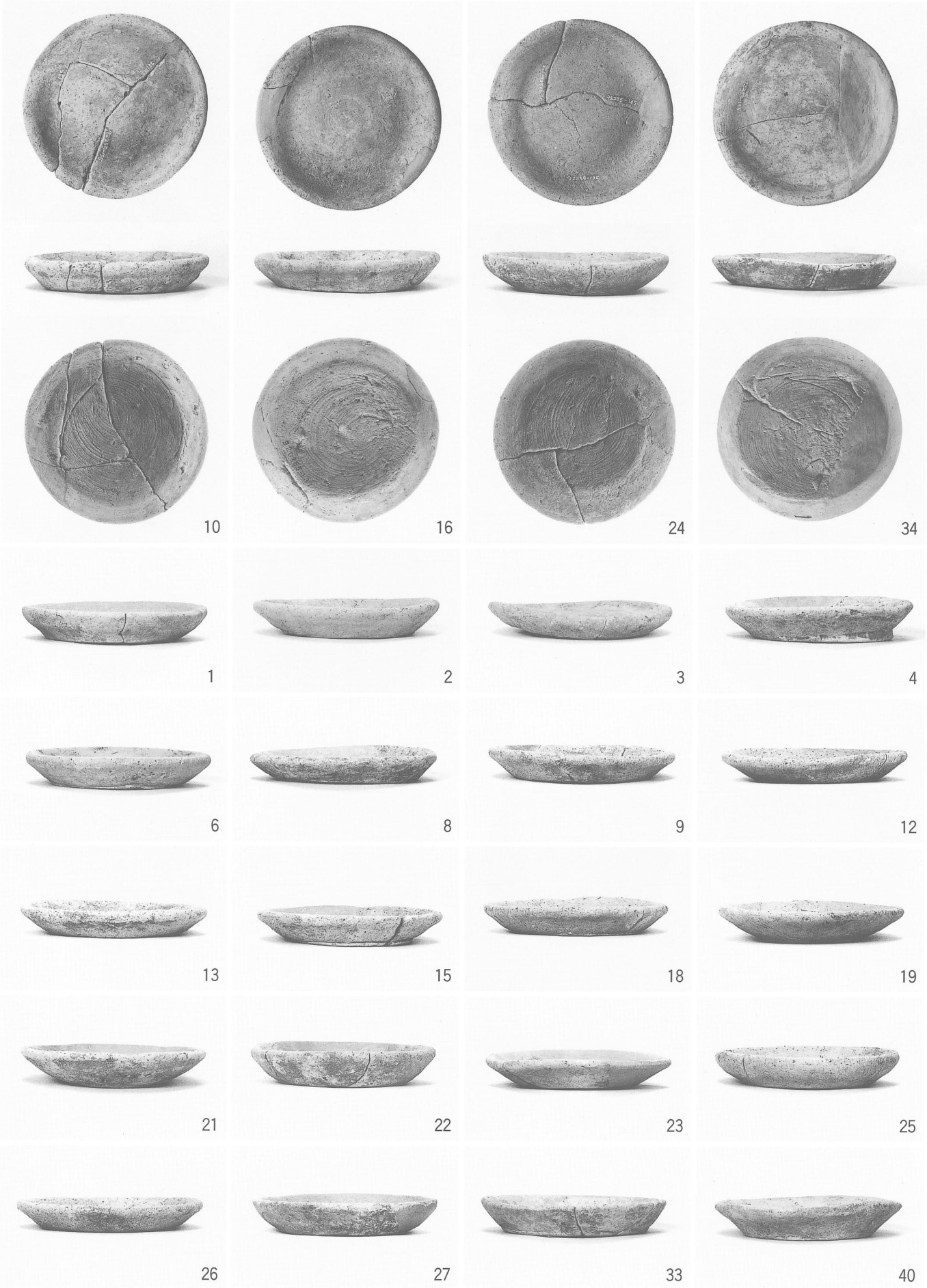
38

遺物図版22

柳谷５号窯出土器・瓦

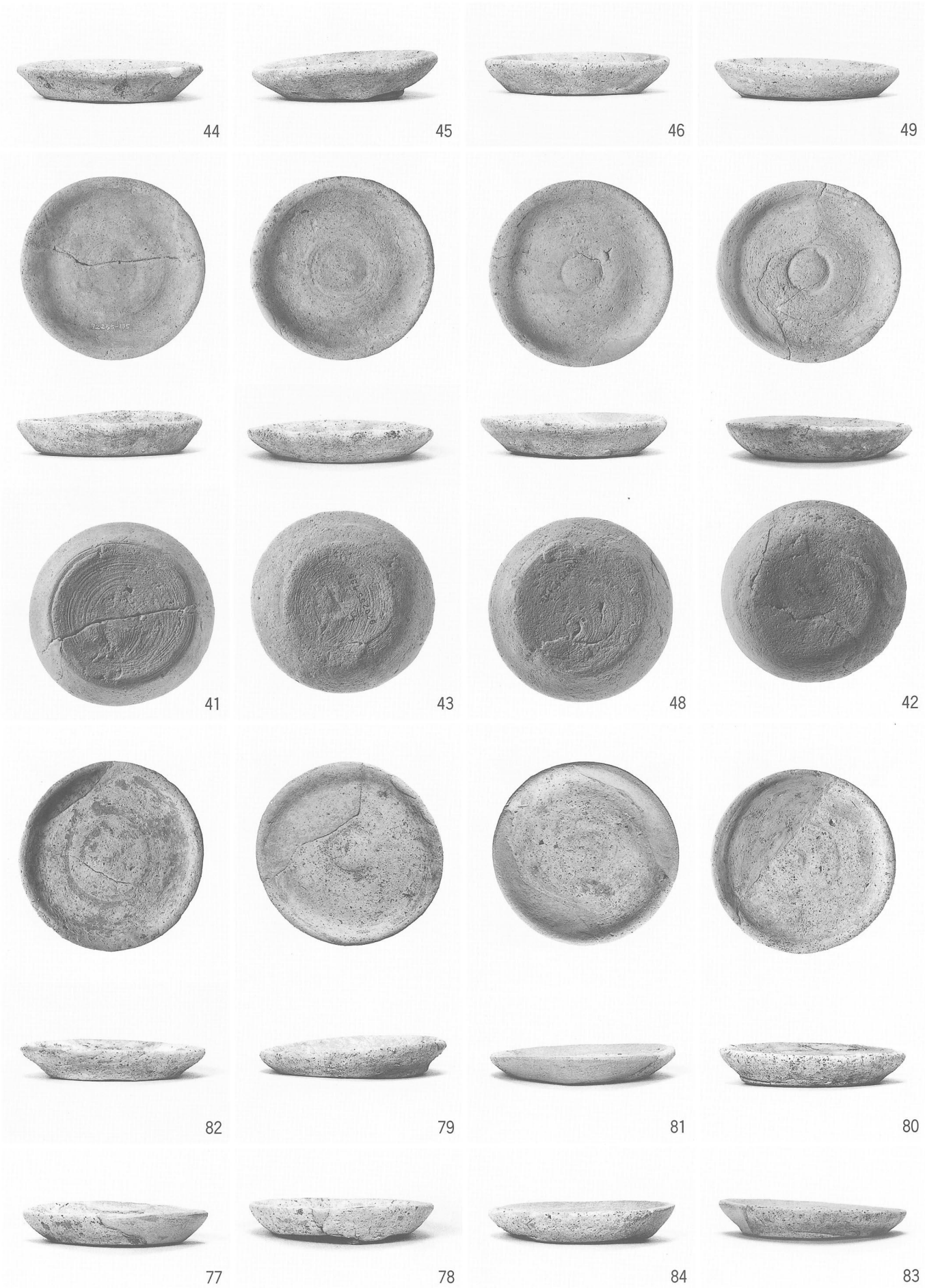


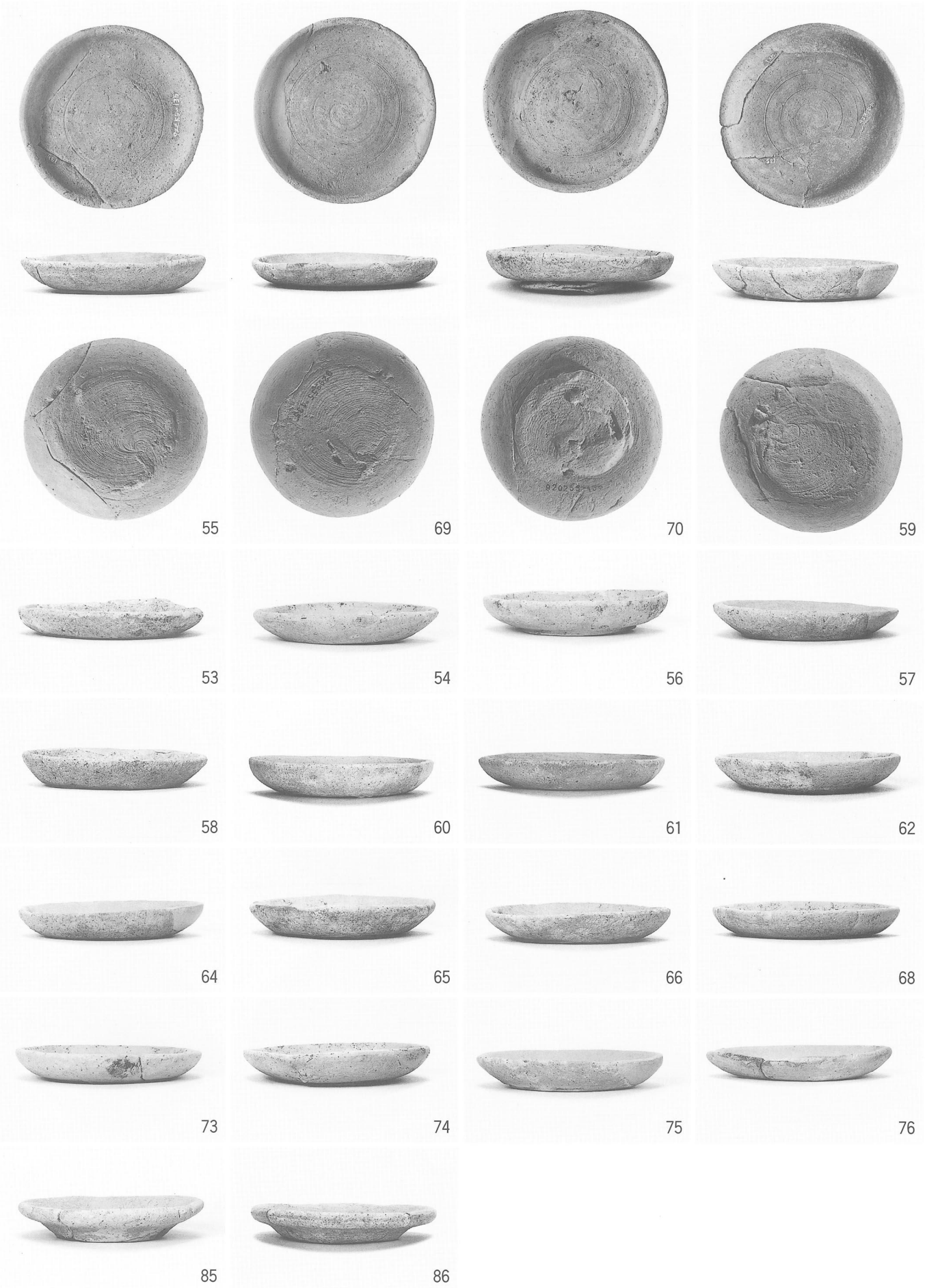
宮ノ池窯出土土器１



遺物図版24

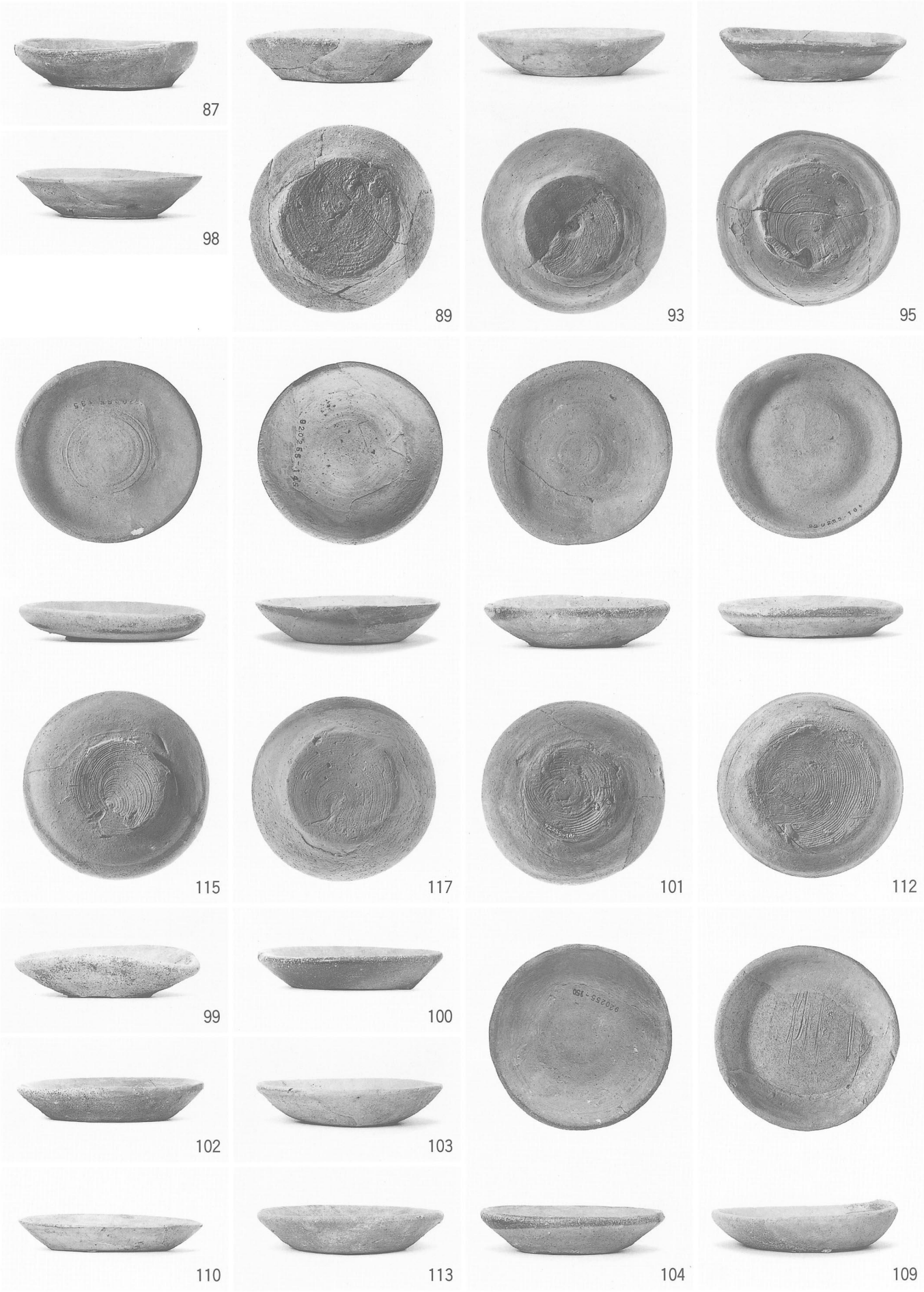
宮の池窯出土土器 2




55
69
70
59
53
54
56
57
58
60
61
62
64
65
66
68
73
74
75
76
85
86

遺物図版26

宮の池窯出土土器 4



126

120

122

147

125

129

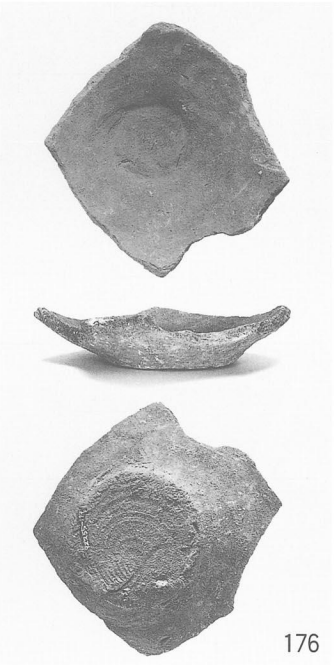
180

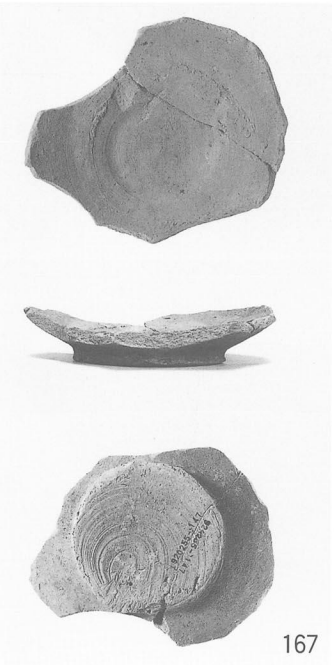
181

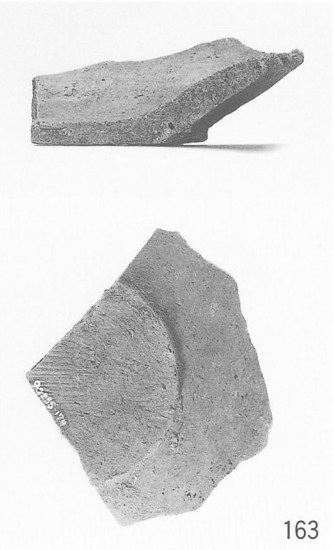
154

145

161

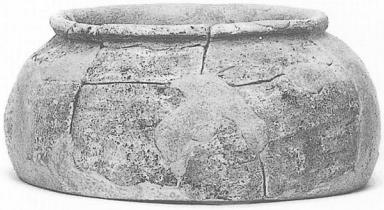

176


167

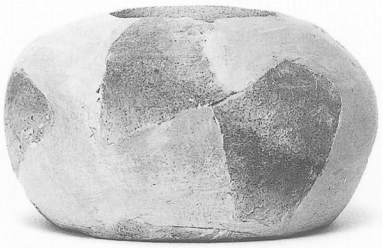

163

遺物図版28

宮の池窯出土土器 6



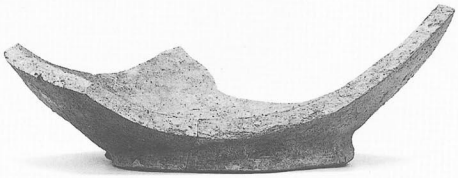
189



188

186

190



209

197

203

199

198

196